

使い魔のくせになまいきだ。 ～ マガマガしい使い魔 ～

tubuyaki

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ルイズが召喚したものは、見るもマガマガしく、それでいて情けないマモノだった。

杖とツルハシが交差するとき物語は始まる。

世界に 平和は おとずれなあい!!!

ゼロの使い魔×勇者のくせになまいきだ。 クロス

うどんこ様から挿絵を頂きました。(17.6.2)

目次

STAGE	1	魔王 が 呼ばれた 日	1
STAGE	2	地底の国からはるばると	21
STAGE	3	使い魔の朝は早い	33
STAGE	4	使い魔ほど過酷な商売はない	41
STAGE	5	M A D E F O R Y O U	50
STAGE	6	物騒な錬金	57
STAGE	7	振ってダメなら掘ってみな	65
STAGE	8	そうだ 地下、行こう。	79
STAGE	9	あの日した決闘の勝ち方を僕はまだ知らない	101
STAGE	10	百エキュールの悲劇はここから始まった	117
STAGE	11	秒殺5マートル	136
STAGE	12	おや？マモノたちのようすが・・・	168
STAGE	13	あなたは / 好きですか？	204
STAGE	14	ゴーレムでも助走つけて殴るレベル	234
STAGE	15	フーケは大変なものを盗んでいきました	256
STAGE	16	ロングビルですが、馬車内の空気が最悪です	266
STAGE	17	最後の一掘りは、せつない。	279
STAGE	18	まじんGO	302
STAGE	19	捕縛魔王伝 零	320
STAGE	20	L O V Eじやよ	369
STAGE	21	魔王と踊ろう	401
STAGE	22	気がかりな悪夢から目覚めたとき	413

STAGE	37	星を見るパイ	750
STAGE	36	アルビオン・ナイト	745
STAGE	35	戦術家になろう	719
STAGE	34	この紋章が目に入らぬか	713
STAGE	33	この地下わが旅	689
STAGE	32	その空舟（ふね）を漕いでゆけ	663
STAGE	31	パイレーツ・オブ・アルビアン	638
STAGE	30	フーケのごきげんよう	606
STAGE	29	やめてください しんでしまいます	588
STAGE	28	おい、決闘しろよ	559
STAGE	27	やがてマモノに変わるもの	531
511			
STAGE	26	悪いな君たち、この使い魔は二人乗りなんだ	479
STAGE	25	姫君のためなら死ねる	474
STAGE	24	炎のおくりもの	443
STAGE	23	雪風と共に去りぬ	

STAGE 1 魔王 が 呼ばれた 日

春の使い魔召喚の儀。

それはトリステイン魔法学院の生徒達にとって、自分が四大魔法のいずれの属性を操るメイジと

なるかを明らかにする重大な機会であり、また己の才能を周囲に示す場ともなっている。

だがこの儀式において何よりも大切なのは、生徒達が今後の苦楽を共にする掛け替えのない

パートナー、使い魔と出会うことだった。

生徒の誰もが、まだ見ぬ使い魔に期待を膨らませ、この儀式に挑む。そして今、トリステイン魔法学院の郊外には、この儀式を無事に終え、

使い魔を得たことに歓喜する生徒たちの声が響いていた。

だがその歓声は、突如として鳴り響いた轟音に掻き消される。

大砲が撃たれたかのような音に、思わず皆が振り返った。

「な、なんで成功しないのよ!」

一瞬、動きを止めた生徒達は、『またか』と思うと、何事も無かったかのように

再び己の使い魔に目をやり、しみじみと喜びに浸るのだった。

トリステイン魔法学院の生徒、公爵家ヴァリエールが三女、

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

彼女の魔法の才能は、とにかく『致命的』だった。

「こ、こんどこそ成功させるわよ!」

「どうせまた失敗だろ」

「いい加減にしろよな、ゼロのルイズ!」

「ッ!……」

ルイズの失敗は、単なる失敗ではなかった。彼女は魔法に失敗するとき、

必ず爆発を引き起こす。度重なる轟音。舞い上がる土埃。これらに飽き飽きした

生徒たちは、彼女への同情よりも苛立ちを覚えるのだった。

「早く終わらせろよ！」

「どうせ無理だろ、今まで成功した試しがないもんな！」

「こら、同じメイジとして共に学びあう仲間にそんなことを言っただけじゃない！」

エスカレートして来た野次には、教師のコルベールも諫めはするが、

それでもルイズの耳には焦れた生徒たちの罵る声が入り続けたのだ。

「(な、なによ！ 私が使い魔を呼ぼうとしているときに！ 集中できないじゃない！)」

今日この日、自らに相応しい神聖で美しく強大な使い魔を呼ぶことで、これまでの

汚名を返上し、皆からの尊敬を集めるという彼女の完全無欠な理想に満ちた計画には、

早くも狂いが生じていた。

「しかしミス・ヴァリエール、本当に上手くやれそうなのですか？」

「は、はい先生！ もちろんです。今度こそ、成功させて見せます！」
ルイズはすぐに気持ちを切り替え、神聖で厳かなものに相対するよ
うな気持ちを

持ちつつ、神妙な面持ちで長いスペルを唱えた。

そして次に起きたことは、また爆発だった。

「……またか。もう、うんざりだよ。なあヴェルダンデ？」

「もう、制服が土埃で汚れちゃうじゃない。耳も痛くなってきたわ！」
「ルイズ、何回失敗するつもりよ。いい加減、あんたの失敗も見飽きてきたわ」

クラスメイトの文句を聞いて、ルイズは呻いた。

「ううう…… ま、またダメなの？ 何で？ 何でなの？」
もう何度目になるのか。

度重なる失敗に、めげまいと強気で塗り固めていたルイズの心に

も、

焦りと不安が襲って来るのだった。

学院の教師コルベールは、ルイズの意思を尊重すべく、幾度となく続く失敗を

見守り続けてきた。しかし彼女の疲れや、周囲の生徒たちの焦れ具合を見てとった

コルベールは、いい加減、止めるべき頃合いだと感じていた。

「ミス・ヴァリエール、もうやめにしなさい」

「そ、そんな、先生！ 次、次こそは成功させて見せます！ だから！」
そう簡単に引き下がる彼女ではない。

しかし、それはコルベールにとっても承知のことであった。

「もう儀式を始めてから、大分時間が経っている。今日は、召喚の儀式だけを

やって終わりという訳ではないのだよ。だが、君の努力は知っているつもりだ。

特別に明日にも機会を設けよう。そのとき落ち着いて召喚を遂げられるように、

今日はもう休み給え」

「せ、先生！」

ルイズの顔に一瞬喜色が浮かぶ。だがルイズは止まらなかった。止められなかった。

今日この日にかける彼女の思いは、人一倍だった。

彼女は、魔法を一度たりとも成功させたことがない。

どんな魔法でも必ず失敗し、爆発させる。

付いたあだ名は『ゼロのルイズ』。

成功率ゼロパーセント、だから、『ゼロ』。

普通はメイジの誇りになるはずの二つ名だが、誰が呼び始めたか、全く不名誉なゼロの呼び名を生徒たちは面白がった。

そのことは、誇り高く立派なメイジでありたいと願うルイズの心を深く傷付けた。

彼女は、使い魔召喚の儀式こそが人生の岐路になることを十分に自

覚していた。

成功しなければ、メイジとしての人生が終わる。

そして、貴族として誇り高く生きることさえも……

だが逆に、立派な使い魔を召喚することさえ出来れば、

今までの不遇、周囲の評価を一度にひっくり返すことが出来る。

『ゼロ』の汚名を拭い去り、ヴァリエールの名を継ぐ者として、

立派なメイジ、また貴族として生きていくことが出来る。

今日、この日からもう二度とゼロとは呼ばせない。

ルイズは、そう決意してこの儀式に挑んでいた。

そう簡単に、『今日』を諦めることは出来なかった。

「先生！ それでも、あと一度、あともう一度だけ、

今この場でのチャンスをください！ お願いです！」

「……もう間もなく、次の授業も控えている。本当にあと一度だけですよ」

「!! ありがとうございます！」

ルイズはすぐさま今日一番の完璧な詠唱が出来るよう息を整え、精神を集中させようと目を瞑った。

「……………」

ルイズの心が静まっていく。

彼女の耳に、草原を駆け抜ける風の音が聞こえた。

これ以上は無い。彼女は、そんな集中力の高まりを感じた。

ルイズは、静かに呪文を唱え始めた。

「わが名は「ゼロの！」ルイズ……?!?!」

彼女が唱えるはずだった渾身の詠唱は、

「ゼーロツ！ゼーロツ！」

「ツツツ！」

焦れた一部の生徒達の罵声により、無残にも遮られた。

「あなた達、これは神聖な儀式なのですぞ!!」

否、遮られたかに見えた。

「五つの力を司るペンタゴン!」

「!!」

皆、目を見開いて驚いている。

誰もが彼女を侮っていた。

彼女は、そう簡単には挫けない。

諦めない。

「……面白いじゃない!」

キュルケは、目を輝かせてルイズを見た。

「我が運命の導きに応えし……」

誰かが茶化すこと等、障害にはならない。

「使い魔を召喚しなさい!!!」

決して諦めることなく、自らの意志を貫き通す。

そんな彼女の心は、誰よりも強かった。

彼女が杖を振りかざした先に、神々しい光が満ち溢れた。

それは、細長く丸い形を保って、中空に浮かんでいた。

使い魔召喚のゲートだ。

皆、彼女の強さに心打たれた。

あれだけの罵倒を受けて尚、動じることなく魔法を完成させたことに、

普段は彼女を馬鹿にしている生徒たちも称賛の声をかけようとし

たが、

ゲートに向け『さあ我が使い魔よ! 早く出て来て、私を馬鹿にし

てきた奴らを

蹴散らすのよ!!』と、喜色満面に叫ぶ彼女の姿を見て、やっぱり止

めようと

思い直すのだった。

「さあ、早く! その姿を見せてちょうだい!」

彼女は杖を持つ手の力を強めた。

ゲートがより一層、輝きを増す。

先ず初めに光があつた。

次に音が生まれ、

そして衝撃が駆け抜けていった。

……そんな、大爆発だった。

「痛い！ 石が思いつきり飛んできた！痛い、痛い！」

「つ、つちが口に、土の味が、ゲホツ、ゲホツ、オエツ」

今日一番の爆発により、辺りには視界を遮るほどの土埃が舞つていた。

「前が見えないぞ！ ああ愛しのヴェルダンデ、君は今どこにいるんだい？」

「なんだってこの私が土の臭いなんか嗅がなきゃいけないのよ！」

皆、それぞれ苦痛なり、不平不満なりの声を上げていた。

ルイズは杖を固く握りしめ、立ち尽くしていた。

手ごたえは、あつた。でも、本当に……？

ルイズは不安を噛み殺しつつ、土埃が晴れるのを待った。

「まさかまた失敗？ スペルの後に、あんなこと話してたら無理もないけど……」

「……何かいる」

「え？ ……まさか！」

青髪の少女が指で指し示した先には、確かに黒い影が佇んでいた。

「ミス・ヴァリエール！ ついにやりましたね！」

「え、え、ウソ、ホント?!」

ルイズは、自らの召喚成功に胸を高ぶらせずにはいられなかった。

「嘘だろ、成功するなんて！」

「これは驚いた…… 天変地異の前触れじゃあ、あるまいね？」

「大変、ラグドリアン湖が干上がる予兆だわ!!」

「火竜山脈に雪が積もるんじゃないかしら」

「アルビオンが落つこちてくるな」

「いや、これは逆にハルケギニア大陸がアルビオンまで吹っ飛ぶ予兆と見た！」

皆好き放題言っているが、今のルイズにはそんな会話など聞こえていなかった。

少しづつ形をはつきりとさせていく影を、彼女は食い入るように見つめていた。

「……なんだか、人影に見えないかしら？」

「まさか人が呼ばれるはずは…… いやでもルイズだし、まさか、ね」ルイズの魔法は、『なぜか』失敗の度に爆発していた。

誰も爆発の理由を説明できなかった。

キュルケにはそんな彼女の魔法の成功が、

皆の理屈や想像の枠内に収まるとは思えなかった。

一陣の風が吹き、土埃を一掃した。

そして皆、息を飲んだ。

今や、使い魔の姿は誰の目にもはつきりと見えている。

『人影』というのは、間違っではないなかった。

その者は、大きな杖を携え、深紫のローブを身にまとっていた。

……メイジの装いである。

だが何よりも皆の注目を集めたのは、その者の頭が見るからに『尖っている』ことだった。

何か被り物をしている訳でもなく、ただただ頭が3本の角のように尖っていた。

このような存在を、ここハルケギニアではこう呼んでいる。

「「「亜人だああああああああ!!!」」」

「ワハハッ!!」

見るからにマガマガしいその亜人は、病的なまでに青白い顔へ満面の笑みを浮かばせていた。

「あ、亜人で、しかもあの格好、まさかメイジなんじゃないか!？」

「ワハハッ!」

「キャ——!!!」

「あ、亜人がしゃべったぞおおお!!」

「皆！私の後ろに集まりなさ　嫌だ！あんな危なそうな亜人なんかの近くにいられるか！」

僕は自分の部屋に逃げるぞ！」ミスタ・グランドプレ?!」

目の前で練り広げられる大騒ぎに、ルイズは我に返った。

自分を馬鹿にしてきた奴らが吠え面かいている。いい気味だ。

でもちよつと、やりすぎたかしら？

マリコルヌは走って逃げてるし、……あ、今こけた。

あの子は、タバサだったかしら？　なんかスゴイ警戒してるわね。

杖構えてるし……　まさか魔法打ってこないわよね？

あ！　キュルケ!!　目をむいて驚いてるわ！

……

……私、本当に成功させたのね。

……

……

……やった

……やったわ！

……やったのよ、私!!

ルイズの心は喜びで一杯になった。呼び出したものが危険そうだとか、そんなことは気にもならなかった。気にならなさ過ぎて、しばらく使い魔の呼びかけに気付かなかった。

「破壊神さま……！」

「破壊神さまっ！」

「へっ!？」

「おお、やっとお気付きになりましたか！」

亜人に話しかけられるという未知の体験に動揺しつつも、ルイズは答えた。

「あ、あんたが私の使い魔ね！　よく私の導きに応えたわ、褒めてあげる！」

「っ、ツカイマ？　……まあトモカク、早速ネギライのおコトバをかけて頂けるとは、

このワタクシ、感激でございます！」

自らの使い魔と初めて言葉を交わしたルイズは、次に彼の正体が気になってしょうがなくなった。

「この亜人、一体何の種族なのかしら？」

亜人の話は、ルイズも聞いたことがある。

亜人と一言で言っても、翼人やオーク、ミノタウロス等、中には様々な種族がいる。

しかし目の前の亜人は、彼女が知るどんな亜人にも当てはまりそうになかった。

「何の亜人だか見当も付かないわ！ 私ったら、ほんとすごいものを召喚しちゃったんじゃないかしら♪」

ルイズは有頂天だった。

だがコルベールは、見るからに禍々しい雰囲気を身にまとう亜人に気が気ではなかった。

「ミス・ヴァリエール！ 例え自ら呼び出した使い魔だとしても、

コントラクト・サーヴァントを終えるまでは気を抜いてはいけない

！

それに君が呼んだものは、人に友好的かも分からぬ亜人なのだよ
!？」

必死なコルベールの思いは、浮かれ気分のルイズにはなかなか伝わらなかつた。

「酷い怖がられようね。そりや今まで散々馬鹿にしてきた奴が

こんな凄そうな使い魔を呼べば無理もないわよね。

でもこれでみんな、私の実力がわかったはずよ！

なんとたつて、『メイジの実力を見なければ、使い魔を見よ』だもの

！」

召喚成功の喜びに、ルイズの想像は膨らむばかりだった。

「(この使い魔を見れば、例え私のことを何にも知らない人だつて、

私の真の実力が分かるつてもものよ！ それだけじゃないわ！

使い魔を見れば主である私の偉大なひととなりだつて……アレ

?」

ルイズは、ふと気が付いた。

……気が付いてしまった。

「(ええと、何かの間違いじゃないかしら。きつとそうよ。

……いや、もう一度冷静に考え直してみましよう。

『メイジの実力を見たければ、使い魔を見よ』、よく言われることよね。

そして使い魔の持つ雰囲気や性格、躰の出来具合とかから、

その主たるメイジのことも判断されるというのは、やっぱりよく聞

く話だわ)」

使い魔を見れば、メイジが分かる。

そういう風潮が、ハルケギニアにはあった。

改めてルイズは、己の使い魔をマジマジと見た。

「ん？ 何かご用でしょうか？」

この亜人は、何というか『マガマガしい』という言葉がしつくりくる奴だ。

そんな使い魔を従えている私は、周りからどんな風に思われるのだろうか？

ルイズは、目の前の亜人を引き連れて街中に入る自分を想像してみた。

……いつの間にか、ルイズは刑務所の中庭に膝を付いて拘束されていた。

街中に入るなり守衛に引っ立てられ、あれよあれよという間にここまで連れてこられたのだ。

何でも、自分は街の安全を脅かす危険人物と思われたらしい。

今から即決裁判が始まる……

裁判長を兼ねるブリミル教の神官が厳かに述べる。

「この者は、その使い魔の禍々しきを見れば明らかのように、

始祖ブリミルの神聖さを汚し、貶める、邪悪なる異教の輩である。

更にこの者はあるうことか、始祖の血を引きし尊き姫君、アンリエッタ殿下のおわす都、

ここトリスタリアに足を踏み入れ、市井に恐怖と不安を撒き散らし、

国に退廃をもたらさんとした。よってこの者に下されるべき判決はただ一つ、

死刑を以って他にないのは明らかである」

「『異議なし！』」

「それではこれより判決に移る。処刑人は速やかに判決後の準備をするように……」

ルイズの目の前は真っ黒になった。

「は?!」

ややあつてから、ルイズは悪い夢から意識を取り戻した。

改めてルイズは考える。

異教徒、邪教崇拝者、背信者、ブリミルの敵……

目の前の亜人を見ると、容易にそんなイメージが浮かんでくる。

この使い魔を従える限り、自らを敬虔なブリミルの信徒だと語つても

性質の悪いジョークにしか思われまいであろうことに、ルイズは愕然とした。

「しかし、破壊神さまもホントーにセンスがおありです。数多い召喚候補の中から

ワタクシのようなサイツコーにマガマガしい者をお呼びになるとは！ イカしてます！」

ルイズは今更ながら、なぜ神聖で美しく強力な使い魔を呼ぼうしなかつたのかと、

怒りに身を任せ召喚を行った我が身を呪った。

「あ、あんたが何者なのかまだ聞いていなかったわね！ あんた、何者よ！ 種族は！」

ようやくルイズは、自らの仕出かした結果に焦りを覚え始めた。

だがそんなルイズの心を、この使い魔は更に追い込んでいくのだつた。

「ハイ！ それでは不肖この私、自己紹介させて頂きます。

ズバリ、私は魔物の王、魔王でございます!!」

普通なら一笑に付されるその発言を否定出来る者は、誰もいなかった。

それほどに、その者の姿は禍々しかった。

よく見れば、その者の携える杖の先には髑髏が象つてある。

そして何よりその者の肌は、日の下に生きる者とは明らかに異なる青白さをしていた。

その者の顔には禍々しき極まりない、怪しく光る赤い瞳が黒い眼球に浮かんでいた。

「ま、ま お う？」

「ええ、そうです! “あの” 魔王です!! この私、破壊神さまのお呼びたてに応え、

魔界からこの世界まではるばるやってきましたとも! まあ私自身は召喚ゲートに

「チョコビツと触れただけですけど」

「ハ、ハカイシン!? 破壊神に呼ばれてやって来たっていうの!?!」

目を剥きながら問いかけるルイズに、魔王は更なる追い打ちを掛けるのだった。

「ええその通りです! 他でもない破壊神さまにお応えして!

……私、今モノスゴク感動しております。

今までは私が世界征服するのに破壊神さまをお呼びしていましたが、

今回は破壊神さまの方からお呼び頂けるとは! やる気満々ですな!

この私、破壊神さまのご期待の高さにお応えし、見事この世界を征服して、

大地をマガマガしく染め上げて見せましょう!

……まあ実際頑張るのは破壊神さまの方なんですけどね」

「ツツツ！」

自分がやつとの思いで、初めて成功させた魔法が、このハルケギニアに目を付けた破壊神の手先、魔王を呼び寄せた。あまりの自体に、ルイズは目の前が真っ白になりそうだった。だがやけに口数の多いこの魔王は、ルイズの落ち込みをこの程度で済まさせはしなかった。「ここは、見たところ魔法学校ですか？

なるほど、将来我々の脅威となる魔法使いのタマゴ達を今の内から潰すですね。

例えるならレベル1の勇者を全力で屠るラスボスといったところでしょうか。

いや全く、今回の破壊神さまのガチさには感嘆しきりです。

でもあんまりハリキリ過ぎないでくださいね。CERO指定入りちゃうんで」

ルイズは顔を青くしながら、魔王の不穏な言葉を聞いていた。

何と破壊神は、一番の標的にこの学院を選んだらしい。何たる不幸！

だがルイズは誇り高き貴族の娘である。ルイズは一筋の希望に活路を求め、

魔王に話しかけた。

「あ、あんた、私の導きに応えたってことは、当然私に従う気があるんでしょうね！」

ルイズは貴族としての威厳を態度に出そうとしたものの、どうしてもその声は上ずってしまうのだった。

「ええモチロンですが……ああ！分かりました！」

なんせ今回の破壊神様はやる気満々ですもんね。そういうことでしたか。

では早速、この地を支配して参りましょう！

さあさ、これをお手に世界征服を進めちゃってください！」

自分に従うとの魔王の言葉に、ルイズは一瞬安心したが、続く不穏な言葉と

自らに差し出されたモノを前にして、彼女は固まるしかなかった。

「な、なんなのよそれは！」

「またまた御冗談を！ 世界征服のための必須アイテムじゃあないですか！」

ソレは、見るからにマガマガしい「杖」だった。

やけに太い柄の先には、鈍く光る先の尖った金属があしらわれている。

その杖は、もうそのフォームだけで破壊を思わせるものだった。

この杖ならば、魔法衛士隊が使う杖剣のように、魔法に依らずとも人を殺めることが

出来るだろう。だかこの杖は、杖剣のように長く伸びた刃を持ってはおおらず、

刃先が鋭く尖って一点に集中していた。線ではなく点に力が集中するとき、

その杖の振り下ろされた先では、剣とは比べ物にならない破壊がもたらされるだろう。

この恐るべき、破壊に特化した形状を例えるならば……

それは、鶴嘴だった。

鶴嘴

鶴嘴

ツルハシ

ピッケル……というほどには小さくない。

ルイズは思案した。

「(コレは、ツルハシに似ている。いやいやツルハシっぽいってだけで、

ツルハシだと決まった訳じゃないわよ！ 貴族たるこの私に差し出されたモノが、

そんな肉体労働的なアレな訳ないじゃない！ きつとこの形状には魔法的にか、

戦闘的にかで、私の理解を超えた合理的な意味合いがあるに違いないわ！

……でも魔法衛士隊の杖剣と一緒に、パツと見、杖だと分からない

わよね。

言うなれば杖鶴嘴…… いやいやもちろんツルハシじゃないわよ。でもこのツルハシによく「似た」この形、戦いの道具って感じがしないわよね。

ツルハシみたいなのが戦いの道具になるなんて、平民達の反乱じゃあるまいし、まさか、ね。

……まさか、「ただの」ツルハシなんじゃ…… いやいやそんなハズはないわ！

メイジたるこの私に差し出された道具が、そんな物理的なものはずがないじゃない！

きつと特殊な形状をした魔法力満ち溢れる杖なのよ！ ツルハシっぽくてツルハシじゃない、

だけどちよつとだけツルハシっぽいツルハシなんだわ！ あつ……」

どこからどう見てもツルハシだった。

貴族とは縁もゆかりもない、力仕事の道具である。

だが目の前の魔王は、例え平民でも女の子に持たせる事を憚りそうなそれを、

平然とこちらへ差し出して来たのだった。

ルイズは狼狽えた。

「(何で！ この亜人は、メイジたるこの私がハカイシンの僕として働くと思ひ込んで、

コレを差し出したんじゃあなかった訳?! こんなもの使っても、メイジらしい仕事が出来るとは思えないわ!)」

聡明なルイズは自らの先入観を捨て去り、改めて結論を導き出した。

「ま、まさかあんた、私にそのツルハシを振るって働けっというの!!」「エツ!? ええ、その通りですが……」

ルイズは思い知った。コイツが自分を慕っているだなんてとんでもない!

この亜人は「ご主人様」に対するように丁寧な言葉でコチラに話しかけながら、

主であるはずの私を下僕としか見ておらず、こき使う気満々なのだ！

自ら呼び出した使い魔の奴隷として、重たいツルハシを振るう日々を想像し、ルイズは青ざめた。

「い、イヤよー！ そんなの嘘よー！ そんなの、そんなのって無いわー！」
ルイズの足は、もはや震えを止めることが出来なかった。周りの生徒達の顔も、

蒼白になっていた。コルベールやごく一部の生徒だけが、決死の覚悟を固めた目で、

杖を片手に身構えていた。

ルイズは、自らの魔法の成功がこの世界の破滅を導かんとしていることに絶望し

「ホゲエエエエ！ 掘るのが嫌ですって!? まさか私に掘らせるつもりじゃあないでしょうね！」

破壊神さま、私、そんなに暇しているように見えるでしょうか？ これでも私、魔王軍を

運営する上で色々やっているのです。資金繰りとか、事務処理とか、後は勇者の情報収集だとか。

それに勇者のコンディションを乱したりして、センリヤクの勝利をも図っているのです。

例えば勇者がサイキョー装備でダンジョンに現れることがないよう、オリハルコーンで出来た

伝説の剣に毎日ミソ汁を垂らし続け、3年掛けて錆び付かせてから砕いたり、他にもイロイロ、

地味だろうが何だろうが、私だつてやることやってるんです！ 誰かとは違うんです、

キャツカンテキに見て！」

魔王らしからぬ情けない嘆きの声を聴いて、ルイズの頭は急速に冷えていった。

チマチマと情報収集や資金繰り等に精を出す魔王。剣を破壊するのに、毎日地道な努力を続ける魔王。

大いに気になる話ではある。

しかしルイズの耳は今、最も聞き流してはいけないところをしつかりと捉えていた。

ルイズは大いに戸惑いつつも、尋ねた。

「ね、ねえ、あんた、今わたしのことなんて呼んだ？」

「破壊神さまです！」

魔王は自信満々に答えた。

ルイズは、自らの聞き間違いを確かめるかのように、ゆっくりと問いかけた。

「……はかいしん、さま？」

「そうです！破壊と創造を司るのは、我らの神、破壊神さまだけに出来る仕事なのです。

さあ破壊神さま、このツルハシを振るってダンジョンを掘り、魔物を産み出し、

そして迫りくる勇者どもを血祭りにあげるのです！

そしてこの世界をマガマガしく染め上げましょう！ 私のために！」

使い魔の言わんとすることの半分も、ルイズには理解できなかった。理解したくもなかった。

ただ、確かに分かったことが一つ。

「……どうされました？ 破壊神さま？」

「ツツツ！」

私は皆からゼロと呼ばれている。成功率0%だから『ゼロ』。

私の唱える魔法は、どんなものでも失敗し、爆発する。その結果、物を壊すことも多い。

……でも、私のことを『ゼロ』以外のあだ名で呼んだ奴は初めてだ。「だ、誰が破壊神ですってえええええ!!」

ルイズが怒りとともに放った『ファイアボール』は、その日一番の大爆発となり、

大地を抉り空気を切り裂いて、魔王を遙か宙へと吹き飛ばした。

「……………グエエツ！」

重力に従い、勢いよく地面に叩き付けられた亜人は、それっきりピクリとも動かなくなった。

肩で息をするルイズに、キュルケは恐る恐る話しかけた。

「あ、あなたのバクハツって、ある意味凄いとっては思ってたけど、本気でやるとここまですごい威力があったのね……………」

「へ!？」

見ると、彼女が『ファイアボール』を放った先の地面は、

綺麗に地面を削り取ったかのようなクレーターが出来ていた。

ルイズの記憶でも、ここまでの威力を出したことはなかった。

怒りに身を任せて、遠慮なく魔法を解き放ったからだろうか？

「こんなものを見せられたら私、もうあなたのことをゼロだなんて呼べないわ」

皆がうんうんと頷く。

「え!? ええ!?」

まさかの展開に、ルイズは目を白黒させた。

教師が言う。

「ミス・ヴァリエール、あなたの召喚した使い魔が本当に『魔王』であつたのかはともかく、

あのような禍々しい亜人を調伏したあなたの手際は、

わたくしの目から見ても見事なものでした」

「え、 え!？」

青髪の少女が告げる。

「動きに無駄がなかった」

赤髪の少女が再び言う。

「もっと胸を張りなさいよ！ あなたは邪悪な亜人をやつつけたのよ！

そんなあなたにはゼロなんかじゃない、もっと相應しい二つ名が必

要よ！」

「え、 え、 え!？」

キュルケに熱く語りかけられても、ルイズには戸惑うことしかできなかった。

「自称とはいえ、あなたは『魔王』を打ち倒した。」

そんなあなたに付けられる二つ名は一つしかないわ」

まだこの急な展開に着いていけないながらも、ルイズは期待に胸を膨らませた。

魔王を打倒するもの。

それは、イーヴァルデイの名で語られる、強く気高きゆうしゅ

「破壊神よー！」

「……えっ」

「魔王を打ち倒せる存在なんて、より格の高い破壊神ぐらいなものよ。

だから今日からあなたは破壊神ルイズよ！

……いや、神ってのはちよっと大げさよね。

破壊のルイズ、ぐらいで丁度いいんじゃないかしら？ みんなどう

思う？」

「賛成！」

「おめでとう！ 今日から君は、はかいのルイズだ！」

「良かったわね、ルイズ。私はこっちで呼んでもいいわよ？ 破壊神

ルイズ！」

「破壊（笑）のルイズ万歳！」

コルベールも戸惑いながら告げる。

「……よく分からないが、新しい二つ名がついて良かったね？ ミス・

ヴァリエール。

その、破壊、だって？」

「……よくなあああああい!!! うるさい！ うるさい！ うるさいあ

あああい！」

ルイズの召喚成功は、皆を見返すことに少しは寄与したのだった。

これで進級の

危ぶまれていたルイズは、明るい学院生活への道を辛うじて繋ぐこ

とに成功した。

しかし光差すところにまた影はある。ルイズを照らす光が強ければ強いほど、

その影もまた濃くなるのだ！

「な、なんとという凄まじき破壊力！ 彼女には絶対に破壊神様になって貰わねば！ ……グフツ！」

STAGE 2 地底の国からはるばると

ルイズに召喚され、そして吹っ飛ばされた自称魔王の亜人は、コルベールの手によって

容赦なく簀巻きにされた。ルイズには信じ難いことに、どうやらコルベールを初め、その他

いくらかの生徒達はふざけた冗談をとばした亜人を今なお警戒しているらしかった。

「こいつが魔王なら、私は破壊神ってことになっちやうじゃない!!」

「新しい二つ名的には丁度いいんじゃないの？破壊のルイズ」

「その呼び方、私は認めてないわよ!!」

「ミス・ヴァリエール！ 二つ名のこととはともかく、今はもっと優先すべきことがある！」

「は、はい先生！」

コルベールの呼びかけを受け、ルイズは忌々しい二つ名問題から離れたが、

しかし続く彼の言葉は、彼女により辛い現実を突き付けるものだった。

「さあ、気を取り直して早く儀式を完了させたまえ」

「……はい？」

「なんだ？ 寝ぼけている訳じゃあるまいね？ 確かに君は、使い魔を呼び出すことには成功した。

しかし使い魔召喚の儀とは、使い魔を召喚すると同時に、コントラクト・サーヴァントによる

主従の契約を以って完成するものだ。これを終えない限り、君は使い魔を得たことにはならない」

サモン・サーヴァントとは、使い魔となる生物を呼び出す // だけの呪文である。

その後のコントラクト・サーヴァントの魔法を成立させることで、メイジと使い魔の間に

ラインが結ばれ、感覚の共有等の効果と共に、メイジ―使い魔間の

主従関係が成り立つのだ。

だが、そんなことはルイズも重々承知している話だった。

「で、でも相手は亜人です！　こんなに騒ぎになったじゃないですか！」

「今さら怖気づく必要もないだろう。確かに亜人は危険な存在ではあるが、

つい今しがた、君はあの亜人を従えるだけの力量を見せたのではないかね。

「さあ自信を持って契約を済ませなさい」

コルベールは妙に勘違いした気遣いを見せたが、ルイズにとってこれは到底認められない話で

あつた。

「危険だとか安全だとかの話じゃありません！　嫌です！

こんなものを、私の使い魔にたくありません！」

「何を言ってるんだ君は！　君が呼び出した使い魔だろう？

君の使い魔なのだから、君には契約する責任があるはずだ！」

「先生、それは矛盾しています！　先程先生のおっしゃった通り、サモン・サーヴァントで

呼び出しただけの今なら、”まだ”　私の使い魔じゃないはずですよ！」

「な！　そ、それは厳密に言えばそうかもしれないが……」

「まだ私のものじゃないんだから、あの亜人をどうこうする責任なんて無いはずですよ！」

普通は、召喚と契約の二つの魔法が一連の流れとして使われるため、コントラクト・

サーヴァントによる召喚物と使い魔とは、同じものとして扱われる。しかしルイズが

指摘した通り、厳密には両者は異なるものである。その微妙な差異から生まれる

グレーゾーンを、秀才ルイズは見逃さなかった。

「私の使い魔じゃないんだから、コントラクト・サーヴァントだってし

ません！

もつとマシなものを召喚して使い魔にします！」

「いやいやいや、それは何かおかしくないかね、ミス・ヴァリエール！それにサモン・サーヴァントは、呼び出した使い魔が死ぬまで使えないものだ。」

「……いや、まさか、コントラクト・サーヴァントの前ならまだ使えるのだろうか？」

「とにかく先生！ 私は自分のものでもないものに、責任を負うことはできません！」

「う、うーむ……」

コルベールは考え込んでしまった。一学生に過ぎないルイズの快挙である。

何セルイズは必死だった。これからの人生が掛かっているのである。

「（見るからに禍々しい使い魔を従えてお先真っ暗だなんて、冗談じゃないわよ！）」

だが人の世は非情である。強弁するルイズに味方しようとする者は、誰一人としていなかった。

それどころか、早速クラスメイトによる糾弾が始まった。

「……流石に無理があるんじゃないかしら？」

「屁理屈」

「何よあんたたち！ 筋が通ってる理屈を屁理屈呼ばわりとは心外だわ！

それとも何？ 私の言ってることに矛盾でもあるのかしら？」

「そ、それは……」

強気の反論に、思わずキュルケは黙り込んだ。

「……でも、あなたの誇りにする貴族の在り方って、それで良い訳？」
「うぐっ…… な、なにも問題はないわ！ だって、私の理性が導き出した完璧な理屈が、

私自身の正しさを証明してくれているんだもの！」

「危険なやつを呼び出した責任はどうなるのよ？」

ルイズにとって旗色の悪いことに、モンモランシーまで話に加わってきた。

「そ、それはそれ、これはこれだわ！ 危険な生物ってことなら、ドラゴンとか、

他の大型の魔法生物だって十分危険よ！ 特別なことじゃないわ！」

「でも亜人じゃない！ 他の生物とは訳が違うわ！」

「何よ！今はあいつも簀巻きにされてるんだから、安全でしょ！」

あれを私の使い魔にすることとは、関係がないわ！」

ルイズは本人的には華麗な切り返りで相手を跳ね除けている。しかし悲しいかな、

その反論こそが不満を抱えた他のクラスメイトによる糾弾の口火を切っていることには

気付いていなかった。今度は金髪巻き毛のキザ男、ギーシュが黙ってはいられなくなった。

「ルイズ！ 召喚だけでも、散々失敗しただろう？」

これだけ儀式を長引かせて、まだ続けるつもりなのかい？」

「ぐぐぐ、それもやっぱり関係ないわ！」

先生から、明日のやり直しの許可は貰ってるもの！」

「それは亜人を呼び出す前の話だろう！」

彼の友人、ギムリも叫んだ。

「呼び出した後だって変わらないわ！ 契約しなければ、結局あいつは私の使い魔と

何の関係もないもの！ 全く問題はないわ！」

「ずうずうしいぞ、ルイズ！」

しゃがれた低い声で、マリコルヌも反論する。

「既に明日の時間を認めてもらった後だもの、ずうずうしくなんかないわ！」

コルベールは目の前の泥沼化するやり取りに、自分がすっかりせねばと気を取り直して

事態の収拾に動いた。

「ミス・ヴァリエール…… 君も分かつてはいるだろうが、使い魔召喚の儀は

始祖ブリミルの御業を起源とする、神聖不可侵な儀式だ。サモン・サーヴァントは

メイジに相応しい生き物を呼び出す魔法であり、例えどのようなものが召喚されようと、

それは始祖の御導きに他ならない」

「そ、それは……」

ブリミルの名を通して語られる言葉は、ルイズに安易な反論を許さないものだった。

「召喚だけではまだ主従の関係が成立していないとはいえ、コントラクト・サーヴァントによる

契約を拒否することは、始祖の御導きを否定することと取れるのではないかね？」

私も迷いはしたが、ここはやはり素直に契約を結ぶべきだろう」

「で、でも、コレなんですよ!!」

ルイズは泣きそうになりながら簀巻きを指差した。コルベールがその先を

目で追うと、グルグル巻きにされてなお逃げ出そうとしているのか、魔王がビツタン

ビツタンと、陸地に打ち上げられた魚のように跳ね回っていた。

「……」

「それに、こいつはマガマガしくて、使い魔にするには相応しくないものなんじゃないですか！

さつき先生だって、迷ったって！」

「滅多なことはいうものではない！ 先程は見たこともない亜人の召喚ということだ、

私も気が動転しておったのです。始祖ブリミルの御導きに間違いが起こるはずがない」

「で、でも」

「始祖のお導きに、でもも、しかも、ありません！」

「うう……」

コルベールの強い口調に、ルイズはしゅんと項垂れてしまった。「それに、考えてもみなさい。始祖の偉大さを考えればあり得ないことだが、

もし仮に、何らかの手違い・間違いで、いやきつとそのように思えるだけで

常人の理解・想像を超えた的確・適切な始祖のお導きによって！

あまりブリミル教的に相応しくないような気がする、あくまで気がするだけで、

相応しくないとはいってませんよ！ そう、限りなく相応しくないのでに思える

得体の知れないマガマガしい、いやマガマガしそうな何かを召喚したのだとしても！

そうであればこそ貴族たる者はそれに応え、何事も起こらぬように使い魔を御する義務が

あるはずだ！ 違うかね!？」

「……先生、過去に教会との揉め事でもあつたんですか？」

コルベールの熱意とは別のところが気になるルイズだった。

「……そんなことより！ 今はこの亜人も捕縛されていて大丈夫だが……」

大丈夫そう…… いやきつと大丈夫、多分……」

簀巻きにされてなお、ある種元氣そうにもごもご動き回る魔王に、コルベールは思わず

言い淀んだ。

「しかし、何時までもコントラクト・サーヴァントを済ませずには何が起こるか分からない。何せ相手は亜人なのだ。いくら簀巻きにしても、

人目が途絶えた隙に先住魔法を使われる可能性だってある。

そうであればこそ、あの亜人がマゴについてる今のうちに契約を済ませ、

主従関係を確立してしまうべきだ。安心しなさい、コントラクト・

サーヴァントには

主への忠誠を使い魔に刷り込む機能もあると言われていた。今しかない、さあ早く!」

ルイズはコルベールの意思が完全に固まっていることを悟った。それでもなお一縷の可能性に掛けることをルイズは諦めたくなかったが、

しかし大人とは、教師とは、敵に回すに強大である。

「それにミス・ヴァリエール。あまり言いたくないが、もう一度サモン・サーヴァントを

行ったからと言って、本当に失敗せずに何か呼び出せるのかね?

呼び出せなければ今度こそ留年、いや退学すらあり得ると考えて頂きたい!」

「うぐぐぐぐぐつ!」

進級を盾に取られ、ルイズは本当に仕方なく、嫌々ながら、コントラクト・サーヴァントを

行う羽目になった。

「……聖なる五つのペンタゴン、この者に祝福を与え、我の使い魔と成せ」

思わず考え込んでしまう。

「(は、はじめてのキスがコレ!?)」

「ミス・ヴァリエール! 続けなさい!」

「は、はい!」

「……」

ルイズは、そつと亜人に口づけした。

「……」

「……」

「……熱ッ、アツツツイイイイ!!! 手が熱イイイイ!!!」

コントラクト・サーヴァントにより、その身にルーンを刻み込まれる痛みで悶え回る簀巻きの

自称魔王は、ウネウネとのたうち回るイモムシの様であり、ルイズ

の心を一層げんなりさせた。

「サモン・サーヴァントは何度も失敗したが、コントラクト・サーヴァントは」

「一回で成功したようだね。もし失敗したら1チャンスあつたかもしれないが……」

「え、それどういう意味ですか？」

「そりゃ勿論、使い魔君がバクは…… いやはや！ これは珍しいルーンだな！」

「ちよつと先生！ 今、何を言いかけたんですか！」

「……ああ！ もうこんな時間に時間が！ 皆、次の授業の時間だ。早く教室まで移動しなさい！」

促された生徒たちは、一斉にフライの魔法を使い、学院に向け飛び立つ。

「さ、君も早く使い魔を連れて移動したまえ」

ただ一人、フライの使えないルイズは、先行く生徒たちの後姿を眺めるしかない。

思わず彼女は叫んだ。

「こ、こんなはずじゃあ無かつたのにー!!」

.....

「全く、本当に何なのよあんたは！」

ルイズは自室にて、自らの使い魔に不満をぶつけていた。

自称“魔王”の拘束は、コントラクト・サーヴァントの後に解かれた。コルベールは

巫人を警戒し、縄を解きたがらなかつたが、ルイズにしてみれば冗談ではなかつた。

例え不本意な使い魔を従えたにしても、グルグル巻きにしておいて何の役に立つというのか。

『契約を済ました使い魔は、主人に友好的になるはずじゃなかつたんですか！』

『い、いや念のため……』

『ブリミルの御業を疑うんですか!』

『うぐっ!』

こんなやり取りの後、コルベールは渋々亜人の縄を解いたのだった。

「まさか魔王だと信じて頂けないとは……」

これがカルチャーギャップというやつなのでしょうか?……」

ルイズは始め、彼の戯言に怒っていたが、すぐにそれが空しいことだと悟った。

なんせ彼は、大まじめに魔王を自称していたのだ。聞けば、彼は過去にもよく簀巻きにされて

いたらしい。そんなに弱い癖に、一体どこから魔王と名乗る自信が出て来るのだろうか?

「あんたみたいな弱つちい魔王がいる訳ないでしょ!あんたが魔王なら、

私なんか一人でだってエルフを蹴散らして、聖地を取り戻せるわよ!」

魔王もこれには意見し難いのか、項垂れつつ応えた。

「……この際、私を魔王と信じて頂けなくてもかまいません。魔王としてのイゲンに欠けるのは、

ウスウス気付いてましたし。……自分で言っていて、悲しくなってきました……」

ですが、それはそれ。ルイズさまには、ご自身のタグイマレなる才能を、自覚して頂かねば

なりません。土中を掘り進め、数多のマモノを生みだし、強力な魔王軍を作り出す。

ルイズさまには、それを成し遂げる力がありなのです!」

「……ツルハシで?」

「そう、ツルハシで!」

「……………」

「ハア……」

「あ、信じておられませんね！ 破壊神さま！」

「破壊神って呼ぶんじゃないわよ！」

「いーえ、破壊神さまは破壊神さまです！ 騙されたと思って、このツルハシを振るって

みてください。さすれば、必ずや世界征服への道が開けるでしょう」

「だれがツルハシなんか振るうっていうのよ！ そんなもの平民にでもやらせないよ！」

それに騙されたとしても世界征服なんてやらないわ！」

それを聞いた途端、魔王は目に見えて狼狽えた。

「え、まさか、え、嘘ですよ。世界征服といえどオトコのロマン。興味がないわけじゃないですよ。あ、もしかして、冗談、だったり？」

「そもそも男じゃないわよ！ そして冗談でもないわ！」

世界征服なんて始祖と王家に唾吐く行い、断じてやらないわ！

そもそも出来るはず無いけど！」

「そんなことありません！ 今は信じられないかもしれませんが、ツルハシと破壊神様のお力が

重なることで、無限のプアワーが生まれるのです！ あ、一応念のため言っておきますが、

これは演出上の表現であって、実際には堀パワーに制限が……」

「とにかく！」

ルイズは魔王の言葉を遮り、ハッキリと宣言した。

「もし世界征服が出来る力があつたとしても、

そもそも、そんなマガマガしいこと絶対にやらないわ！」

「ええー！ そ、そんなミもフタもない……」

どうやら世界征服は、彼にとっての存在意義であつたらしい。

魔王は酷く落ち込んだ様子だった。ルイズはそれを見ていい機会だと、

彼に使い魔としての自覚を持たせるべく話しかけた。

「とにかく、あんたがどこの誰で何を望んでいようと、

私の使い魔になったからには、私の言う通りに動いてもらおうよ」

「私が使い魔…… 魔王なのに使い魔…… or2」

「何よ、私の使い魔になったことがそんなに不満!？」

「……私、知り合いの魔王に聞いたことがあります。使い魔は主の所持金を賭けた

バトルのため、力尽きるまで戦いを強いられるんだとか。そしてステータス強化だとか、

凶鑑コンプだとか、そんなミガツテな理由のために新たな使い魔を呼ぶダシに使われ、

人知れず消え去っていくんですよね……」

「あんたは使い魔を何だと思ってるのよ!!」

ルイズは頭を抱えつつ答えた。

「分かってないみたいだから、一から教えてあげるわ。使い魔の仕事は大きく分けて三つよ。

まず一つ目は、感覚を共有して主の目となり耳となること。でも駄目ね、目をつむっても

あんたが何を見ているか分からないし、他の感覚も駄目そうね。二

つ目は、主の求めるものを

取ってくること。薬草とか、鉱石とか、秘薬の材料になる様なものを見付けて取ってくるのよ」

「……そういうことなら、私にも出来るかと思えます。普段は地下に住んでいましたから、

魔分を多く含んだ土地だとか、珍しいキノコとか、あとコケとか見つけるの結構得意です。

何を隠そう、わたくしニジリゴケ検定協会の理事をやっていますから!

「ニジリゴケ? ……まあ出来るのならいいわ」

やっぱり魔王らしくないと思いつつ、ルイズは続けた。

「それから三つ目、主の身を守ること。でも無理ね、アンタすぐに簧巻きにされちゃうんだもの」

魔王はしばらく何か言いたそうにモゴモゴしていたが、結局何も思
い付けなかったのか、

悲しそうにうつむくのであった。

「あなたは使い魔として出来ることが少ないんだから、普段はあんな
にでも出来そうな雑用を

任せることにするわ。掃除とか洗濯とか」

「魔王が雑用…… or2」

「それから、自分のことを魔王って名乗るのもやめなさい！

あんたのせいで私の名前が傷つくなんて、許さないんだから！」

ルイズはうなだれる魔王を他所に明日の洗濯を命じ、また朝になっ
たら起こすように言おうと、

さつさとベッドに潜り込んでしまった。

「出だしからこんな目に合うとは…… これがアウエーの洗礼とい
うやつなのでしょうか？」

魔王は、赤と青に毒々しく光る二つの月を眺めながら、傷心に浸る
のであった。

STAGE 3 使い魔の朝は早い

トリステイン魔法学院

中央に聳える本塔と、それを囲うように並び立つ5つの塔
その一角に、学院の女子生徒達は住んでいる。
通称「火の塔」

魔王の仕事場である。

彼の一日は、主を起こすところから始まる。

まだ空も赤らみかけぬ内に、彼は動き出した。

Q. 朝、早いですね？

「ええ、まあ。主より早く起きて、一日のジュンビを整える。

使い魔としてトーゼンのことです。早起きは、決してトシのせいではないです、ハイ」

一人ムスメを持つ魔王に隙はない。

彼にとつて、同じ年頃の主を起こすのは簡単な仕事だという。
手慣れた様子で彼は、ぐっすり眠っている主に声を掛けた。

「ルイズ様！」

「……」

「ルイズ様!!」

「……」

へんじがない。まるでしかばねのようだ。

「ヤカマアしいツ！……って、ハア…… ジブン、何やってるんでしよう。」

とりあえず、ムナシイ一人ナレーションは止めときますか……」

慣れない部屋でベッドもなく放っておかれた魔王は、よく眠ることも出来ずに

朝、目が覚めたのだった。

「……困りました。こういう時、どうしたらいいんでしょう？」

魔王は昨夜の言いつけ通り、ルイズを起こそうとしていた。

しかしルイズの眠りは深く、何度話しかけても返事は帰ってこなかった。

「あんまり大声を出すのも気が引けますし……」

「グー…… ZZZ……」

「……それに古くからの言い伝えもあります。

深い眠りを妨げられた破壊神さまは、

己の善悪も判らぬままにモーレッツな二回攻撃をしかけてくると」

「グゴゴゴゴ……」

「勇者ならこういうとき、ジョータイイジョーカイフクとかいって、

呪文でちよちよいと起こしてしまうんでしょうね。

ふむ、勇者……ユウシャ…… ……！」

魔王は、ぱつと明るい顔をした。

「フッフ、私、いいことを思い付きました。

普段はニツクキ勇者どもですが、ここは彼らのチエを借りるので
す。

その昔、吸血鬼退治で名を馳せた勇者の父親は言いました。

『逆に考えるんだ』と。つまり、起こさなくつてもいいやと考えるの
です！」

ルイズが起きていたら、青筋を立てること必須の発言だった。

「こちらは用事があるというのに、何度話しかけても相手と同じ反応
しか返さない。

勇者にとつて、そういうことは日常茶飯事だと聞いております。そ
んなとき勇者は

自分の用事を一旦置いておき、周囲の人達に片っ端から話し掛け
たり、どこかで

お使いをこなしたりすることで相手の反応の変化を誘うのだと言
います」

魔王の脳裏には、家という家、部屋という部屋にズカズカと入り込
んでまで人々に話し掛け、

ついでにダンスもあさっていく勇者たちの姿が浮かんでいた。

「そして私は今、ルイズさまを目覚めさせること以外にもう一つ、洗濯
というイベントを

抱えているのです！ ですから私がこの学院内をうろつきつつ、

その場にいる人々に

話し掛け、何やかんやで洗濯をこなす。そうした後なら、ルイズさまもスンナリお目覚めに

なられることでしょう！ ……時間も経ってることでしょうし」

そう言つて魔王は、意気揚々とルイズの部屋を後にしたのだった。

……………

「ハア…… ここからドコに向かえばいいのでしょうか？」

トリステイン魔法学院という施設は、城そのものであった。その敷地は広大であり、

また区画が塔と塔を結ぶ廊下に遮られ、見通しの利かない造りになつていた。

適当に歩けば目的地に辿り着くといった甘い考えは、もはや捨てざるを得なかつた。

「初めて訪れた城では、とりあえずテキトーに隅から隅まで歩き回つて城の構造を知り、

宝箱やタンスをあさる。多くの勇者がやっていることなので簡単なことだと思つていましたが、

こんなに大変だったとは…… よくよく考えたらお城じゆうを歩き回るつて、丸一日掛かつても

おかしくないんじゃないでしょうか？」

魔王は現実逃避気味に勇者のことへ思いを馳せた。

「高レベルの勇者たちがダンジョン内を素早く動き回るのは知っていましたが、案外あんな調子で

お城の中もゴキブリのごとく駆けずり回っているのでしょうか？」魔王は独り言で気を紛らわしつつ、取り敢えず人を見つけて道を聞

こうと歩き続けた。

そうして空がもう少し明るくなった頃、一人のメイドが荷物を抱えて必死に歩いているのを見付けた。

見付けた。

「えいしよ、えいしよつと」

洗濯に向かうところなのか、タオルや下着の束を抱えた彼女は、

あっちへフラフラ、

こつちへフラフラと、見るからに不安定そうに歩いていった。

「やっとNPCに出会えましたか。もしもし、そこのお嬢さん」

「へ？ は、はいっ、少々お待ちください！」

人がいるとは思っていなかったのか、少女は少々驚いた様子で、しかし元気良く返事をした。

実際、彼女は喜んでいた。普段、自分と大して年も変わらぬ貴族の子弟たちから、『そこのお前』

だとか、『平民』だとか、乱暴に呼ばれることが多い彼女は、例えそれが妙なだみ声であったと

しても、『お嬢さん』と呼ばれたことが嬉しかったのだ。そんなことだから、彼女は思わず顔を

ほころばせた。そして勢いよく振り向いたところで、彼女はそのまま笑顔を凍りつかせた。

彼女の目前には、爽やかな風が吹き抜ける気持ちの良い朝には似つかわしくもない、

マガマガしき満点の亜人が立っていた。彼女は思わず洗い物を手からこぼし、ガクガクと

震えだした。

「ま、まままさかあなた様は、ミス・ヴァリエールが召喚なされたという……」

「イエス、アイアム！ 如何にも私が魔王です。」

学院に使える使用人の間では、召喚の儀の翌日にして、もう既に「恐るべき使い魔」のことが噂になっていた。ただでさえ亜人は畏怖の対象であるというのに、かの使い魔は杖を振るうメイジ

ですらあるかもしれないというのだ。平民たちにとって、亜人×メイジ というの脅威のハイブリッドは、魔王以外の何物でもなかった。

「や、やっぱり本当に、本当の意味で魔王なんですか!？」

「イエス！ イエス！ イエス！ オーマイゴッド！」

フム、世界征服を始める前から、私のことを分かる者がいるとは

……!

フハハッ！ 私の魔王としてのフーカク、やっぱり見る人が見れば分かるものなんですね！」

あつさりと魔王であることを信じてもらえてご機嫌な魔王は、散らばった洗濯物を一目見て

自らの用事を思い出した。

「そうだ、コレ、ついでに洗濯しておいてください。破壊神さまの下着です。」

あ、マチガえた。〃ルイズさまの〃と言うべきなものでした」

「は、はかいしんさま?!」

急に出てきた不穩でマガマガしい単語に、使用人の少女シエスタは目を白黒させた。

「おや、私のことは知っていても破壊神さまのことは知らないのですか?」

フハッ！ 私の方が有名ですか！ フハハッ！ やっぱり、世界をセーフクする

親玉としては、ツルハシ振るうだけのジミな破壊神さまよりも、私みたいに

カリスマある者がフサワシイですよね！ フハハッ！」

ひとしきり笑い終わると、魔王は続けた。

「ですが洗濯と言えど、破壊神さまのためにお仕事をするというのであれば、シツレイ無き様、

破壊神さまのことを知っておくというのも悪くはないでしょう。

ヨロシイ！ 私は今、大変

機嫌が良い！ たまにはニンゲン相手に、私自らレクチャーしてあげるのもいいでしょう！」

「ハ、ハイいいい!!!」

涙目のシエスタは今にも逃げ出したかった。しかし魔王にとって、弱った心を読むのはお手の物

なのか、『知らなかったのですか…? 魔王からは逃げられません!』と言われ、余計に縮こまる

しかなかった。そんな彼女に魔王は意気揚々と、ルイズが如何に破壊神としての才能を秘めている

かを、あることないこと語り尽くしたのだった。

.....

もうすでに日は上り、空は青さを取り戻していた。建物の方からは、朝の喧騒がしつかりと

聞こえてくる。

「いいですか、最後のオサライです。よく覚えていって下さいね？

ルイズ様は、普段は

礼儀正しくマジメな生徒を装っていますが、その実、カノジヨは邪悪なココロに満ち溢れて

いるのです。ルイズ様の魔法が成功せず、全てバクハツに終わるのは、決して才能の無さを

イミするものではありません。そのバクハツは、破壊神さまとしての抑えきれないハカイ

シヨードーの発露なのです！　ゼロと呼ばれてガマンしているのだった、ちょうどハルケギニア

全土をハカイするチカラを蓄える最中のため、実力行使を抑えているに過ぎないのです。

終末の日には、カノジヨはこの世の生きとし生けるもの全て、あらゆる秩序をハカイし尽くし、

新たなセカイを創造するのです！

……というわけで、如何に破壊神さまが偉大かつマガマガしいかが分かったでしょう！

あ、また間違えた。破壊神さまのことは、ルイズさまとお呼びしないと叱られるのです。

まあトモカク、あなたは今説明したことを今後のシゴトによく活かし、ルイズさまのために

身を粉にして働くが良いでしょう！」

ルイズ Ⅱ 破壊神 という構図を、しつかりと一人の使用人に叩き込んだ魔王は、

良い仕事をしたと言わんばかりの満足げな表情で、元来た道をいそいそと戻っていった。

「ほ、本当に恐るべきは使い魔ではなく、ミス・ヴァリエールの方だったなんて!!」

早くみんなに知らせないと！ ああでも洗濯物がこんなにあるわ！」

彼女にとって、散らばった洗い物を拾い集めるのも、それらを一つ一つ洗濯するのも、

あまりにも長い時間に感じられることだろう。だが、いずれにせよルイズが使用人達から

畏怖されるのに、半日も掛かりはしないのだった。

行きは迷った道を、魔王はどンドン戻っていった。誰かと廊下ですれ違う度に、ギョツとした

視線が向けられるも、魔王に気にした様子はない。

「ああ、良い仕事をしました。ルイズ様はどうも、貴族らしくありたいとお思いのご様子。」

平民から畏怖されるなんて貴族らしいですから、きつとルイズ様もお喜びになることでしょう。

モチロン、私がそう仕向けたことはダメッておく。不言実行、縁の下のチカラモチだなんて、

私ってばなんてケナゲなんでしょう！」

そう自画自賛を繰り返す内に、彼は目的の部屋まで辿り着いた。部屋をノックするが、

返事はない。魔王はそのまま戸を開けて中に入り、ルイズを起こしにかかった。

「起きてください、ルイズさまー！」

「ムニヤムニヤ」

「起きてください!! ルイズさま!!」

「うーん…… z z z」

先ほどよりは反応があるものの、相変わらずルイズの寝起きは悪かった。

「おかしいですね。洗濯イベントはこなしたハズなのですが……
もしかしてルイズさまを起こすのは単独イベントだったのでしょうか？」

外の喧騒はより一層勢いを増すばかり、多く生徒たちのが起きているのは明らかだった。

「ふむ、これは困りました。一体どうすれば破壊神さまを「誰が破壊神よ！」

ルイズはベッドの上で、ガバツと上体を起こした。まだ息が荒い。「ふう、ふう…… なんだか変な夢を見たような……つてあんた誰よ！」

ルイズは、いつもの清々しい朝に紛れ込んだ異物に大きな反応を示した。

「おはようございます、ルイズさま。

ですが、まだ寝起きでアタマが働いていない様子。

では改めてジコシヨーカイさせて頂きます！

私は闇に覆われしセカイから来たオトコ、その名も……」

「いや、もういいわ。嫌でも思い出したから」

「え、いや、ですが、あともうチョットだけ……」

「黙りなさい！ 大体アンタはいちいち大げさなのよ！

何よ、闇に覆われし世界つて！ただの地下のことなんでしょ！

あんたのヘンテコな話のせいで、変な夢見ちゃったじゃない!!」

ルイズはぶんぶん怒りつつ、服を持ってこいだの、手鏡を持って来いだのと、魔王に手身近な

指示を与え、身支度を整えていった。

「色々言いたいことはあるけど、キリがないからここらで止めとくわ。

さあ、さっさと食堂に行くわよ。私に付いてきなさい！」

ルイズは勢いよく扉を開ける。使い魔を従えた一日がどんなものになるのか、

彼女には知る由もなかった。

STAGE 4 使い魔ほど過酷な商売はない

二人が食堂へ向かうべく廊下への扉を開けると、丁度隣の部屋からも赤髪をした少女が

出てきたところだった。

「はい。おはよう、ルイズ」

「げっ…… おはよう、キュルケ」

「何よ、随分なご挨拶ねえ」

そう言いつつ、彼女は大して気にした様子もない。二人の関係において、もっぱらムキに

なるのはルイズの方であった。

「ところで…… あなたの使い魔って、そいつよね？」

彼女は興味深げに、ルイズの後ろに佇む魔王へ目をやった。

「……そうよ」

「あはは。そんなに嫌がることないじゃない。亜人を召喚するなんて、あんたにしちゃ上出来よ」

「うぐぐ」

確かに上出来は上出来だったかもしれない。しかし使い魔にするにはあんまりなヤツを

呼んでしまったとの思いから、ルイズは余計に悔しがった。

そんなルイズの反応も織り込み済みだったのか、ちよつぴり満足げな顔をしたキュルケは、

今度は魔王に話し掛けた。

「召喚の儀式以来ね、亜人さん。わたしはルイズのクラスメイトのキュルケ。

人呼んで微熱のキュルケですわ」

「これはご挨拶をどうも、セニョリータ。ワタクシも名乗らせて頂きますしよう。

何を隠そう、このワタクシは光閉ざされた世界を統べる、まお「ああ、急いで

食堂に向かわないと、食べる暇もなく授業が始まっちゃうわあ！」

わざとらしく大声を上げたルイズに対し、キュルケは不快そうに口元を曲げた。

「……ちよつとルイズ、今は私が彼と話しているんだけど。」

そんな風に話を遮るなんて、失礼ではなくって?」

ルイズは気まずそうに答えた。

「うう、悪かったわよ。その、こいつがかなりお調子者で、大げさで、その上冗談ばっかり

言ってる様な奴だから、喋らせた方がむしろ失礼かと思ったのよ」
私にとつても恥だし、と小声で付け加えるルイズだった。

「あら、冗談好きだなんて、面白そうで良いじゃない。冗談通じないア
ンタよりマシよ。」

ま、よろしくね、亜人の使い魔さん。」

「な、なんですつてえ「ええ、こちらこそ。改めまして我が名は……」

「でもやっぱり使い魔にするとしたら、こーんな使い魔が良いわよね。」

さあ、こつちへ来なさい。フレイムー!」

「……」

どうやら彼女にとつて、名前の方はどうでもよかつたらしい。無然
とする魔王を他所に、

キュルケの部屋からはのしのしと、真つ赤な大トカゲが歩いて出て
きた。

「ぎゆるぎゆる」

「良い子ね、フレイム」

彼女は慈しむように、そのトカゲの頭を撫でた。

「それってサラマンダー?」

「そうよ! しかも見て、この尻尾の鮮やかで美しいこと! 間違い
なく火竜山脈の

ブランドものよ。貴重過ぎて、好事家相手に値段が付かないって話
よ。

微熱の私にぴったりでしょ?」

「へええええ、あ、あんたの使い魔もまあまあね!」

口では強がってみたものの、片や希少かつ皆の賞賛を集める幻獣、

片や背教的な容姿をした

得体の知れない亜人である。しかもひよろひよろして弱そう。サラマンダーを食い入るように

見つめるルイズの眼差しには、羨望の念がありありとしていた。

「まあ、あんたの使い魔も珍しきつてところでは相当よね。ある意味値段が付かないでしょうね。」

何だかんだで、あんたにはぴったりじゃない?」

「それどーいう意味よ!」

ギャーギャーと騒ぐ二人を他所に、魔王は興味深げにフレイムを見つめた。そして彼に

近付くと、

何やらぶつぶつと話しかけ始めた。

「ボグジバゾグオバ…… リグリバングセギ」

「きゆるきゆる…… きゆきゆきゆ」

「バビゴキスフレギ。ジャムエバギボオモ」

「きゆる〜」

……

「ツエルプストーのバカ! 淫乱! おっぱいおぼけええ〜!」

「ルイズったら、ほんつと単純なんだから。そんなんじやせつかく呼び出した使い魔にも

愛想尽かされて逃げられるわよ?」

「ムツキーーー! 元はといえばあんたが……!」

「亜人さんも、ルイズに愛想尽かしたら私のところに……つて」

「ワバレデモタツギヤ…… ラゴググンバラアスジアンギン。ギラバ

ラギモフリビグズキ!」

「……キュル!」

「フフフ、いい子です。それにしても、グロソギ語が通じてよかったで

す。

これがオソドウル語だったアカツキには、聞き取ることすら出来なかったでしょう……」

「ちよつとあんた、何やってるのよー!」

「あ、ルイズ様。いやなに、使い魔同士、ちよつとした挨拶を交わしていたのですよ」

「あらーあなた、この子の言葉が分かるの?」

自らの使い魔のこととなると、興味津々なキュルケであった。

「そりゃあ何と言つても私はまお…ゲフンゲフン。失礼、ワタクシ召喚される前は、

マモノ社会を盛り上げるべくフントウしておりましたので、一通りのマモノとは

コミュニケーションを取れる様、ベンキョーしておるのです。」

「へえ、すごいのね! 使い魔の言葉が分かるなんて、ちよつとしたものよー!」

キュルケは素直に感心しているようだった。ルイズも悪い気はせず、ちよつぱり自分の使い魔を

見直した。朝食にはパンとスープだけでなく、肉もつけてやろう。

「それでどんなこと話してたの? 良かったら教えてくれないかしら」

「ああ、内容ですか? 人生相談ですよ」

「じ、じんせいそうだん?」

思わずハモって、二人は気まずい思いをした。

「ええ、そうです。ムリョー相談なんで5セントは頂きません!」

「そ、その、私のフレイムは何か悩みでもあるのかしら?」

戸惑いつつ、キュルケは尋ねた。

「いえいえ、ご安心を。別に家族にも言えずに長年隠し続けてきた趣味をカミングアウトだとか、

そういううんじゃありません。彼も火竜山脈からイキナリ呼び出されたワケですし、新しい

カンキョーへの戸惑い、これからの生活への不安もあることでしょ

う。そこで私がイロイロと、

今後の人生設計についてアドバイスしていたのです！」

「使い魔人生の何を設計するっていうのよ……」

呆れた風にルイズはため息をついた。

「アマイ！アマすぎる！　使い魔になったからといって人生チヨロイと思つたら

オオマチガイです！　今まで幾多のマモノの失業問題と向かい合ってきた者として

ハツキリ申し上げねばなりません！　彼の今後の人生を考えた場合、使い魔ばかりで

喰っていくというのはヨロシクないのです！」

思わずルイズとキュルケは、顔を見合わせた。

「どういふことよ？」

「ルイズさま、マモノがニンゲンにヤトワレの身ともなれば、天敵のない場所で

衣食住の心配無くラクに暮らして行けるハズ。そんな風に軽く考えていませんか？

確かにニンゲンに飼われたマモノは、戦闘時も安全面がある程度ホシヨウされ、

その他サポートも付いたまま闘争本能を満たすことが出来るかも知れません。

しかし！　使い魔という仕事は、いつまでも長く続けられるようなモノではないのです！」

「そ、そうかしら？」

「そうなのです！」

キュルケは疑問の声を上げたが、魔王はすぐさまそれを否定した。しかし納得出来ないという

顔をした彼女を見て、魔王は詳しい説明を始めたのだった。

「私、上に立つもののタシナミとして雇用情勢にも気を配っておりませんが、世の大きな流れ

として、従来のなシューシンコヨウセイドは姿を消していつており

ます。ニンゲンどもの

尊敬をイッシンに集めるハズのユウシャ一味ですら、転職を繰り返しているのですから

マチガイありません」

「しゅ、しゅうしんこよー?」

「この流れは、使い魔業界とて例外ではありません。近年では、霜降りお肉やハイパーで

マスターなボールを使ったマモノの懐柔・捕獲技術が発達し、ニンゲンがマモノを仲間に

することも難しいことではなくなってきました。つまり今までとは、雇用の需給バランスが

異なってきたのです」

「じゅきゆうばらんす?」

「マモノが仲間になり難く、また主のマモノに対する思い入れも強かった……

そんな古き良き昔ならいざ知らず、旅の途中でジャンジャン仲間が増える今の時代、

一匹のマモノが主の下で働き続けることは、容易ではありません。新しい仲間の加入と同時に、パーティーの黎明期を支えたマモノが

それまでの貢献

むなしくセンリョクガイツウコクを受けてオサラバ…… 現代では、そんな悲劇が

日常化してきているのです」

話を聞く二人は、もはや分からないことだらけで呆然とし始めていたが、魔王は止まらない。

「苦しいこと、楽しいこと、そんな大切な思い出を共有した仲間であっても、パーティー候補

である大量のマモノの中の一人としてカンタンにすげ替えられる。そしてポジション争いに

敗れた魔物の多くは、窓際族よろしく馬車の入り口から仲間の活躍を延々と眺めたり、

データ化されパソコン内のボックスに閉じ込められたまま、忘れ去られていくカナシイ余生を

送るのです……」

「ぱ、ぱそこん?？」

「他にも、出会いの機会が限られることで生じる結婚問題や、怪しい木の実や不可思議なアメでの

ドーピングを強いられる等のブラックな労働環境が問題となることもあります。使い魔という

シゴトは華があるようで、その実、闇が深いのです。つまり、フツーに何も考えず使い魔を

やっていたら、そのマモノのQOLはガタガタになってしまうという訳です！

アリエン！ ヒドすぎるー！」

「きゅ、きゅーおーえる?？」

二人の混乱を他所に、魔王は一息つくどまとめに入った。

「そういう世知辛い世の中だからこそ、我々マモノはかしこく、たくましく生きていかねば

なりません。どうもそこらへん、トカゲの彼は危機意識に欠けているようなので、ガツンと

言つてやりましたよ。例え現在は大丈夫でも、後々ステータスの優れたモンスターが仲間

加わればどうなるか分からないんだと。ご主人様が他のマモノに目移りして、

『サラマンダーよりはやーい』なんて言い出してからでは遅いんです！」

キュルケが必死の反論を試みるも虚しく……

「とういかブツチャケそんなの関係なく、私がこの世界を征服する暁にはニンゲンどもも

息絶えてしまい、そこの彼も雇い主を失って路頭に迷うんですよ」

魔王にバツサリと切り捨てられた。

「」

「ここでおススメしていたのが魔王軍です！ 来るもの拒まず、何歳でもOK、しかも住み込みで

一生働けます。どーせ失業するんだから、今の内に転職して魔王軍に参加して貰い、将来の

不安を取り除いてあげる。その一方で、ワレワレはワレワレで世界征服を楽に進めちゃおう！

という訳なのです。失業率増加も抑えられてまさに一石二鳥！
しかもその彼、ドラゴン

じゃないのに火が吹けるらしいですよ。トカゲおとこなんて目じゃありません！ 是非我が配下に

収めたい逸材です！」

「」

魔王は二人を前に、ふんぞり返った。

「あ、あんたって奴は！ 他人の使い魔に何吹き込んでるのよーー
!!!!」

ルイズは顔を真っ赤にしながら魔王を引っぱり、廊下を走り去っていった。

「イタタタタタ！ 破壊神さま、引つ張らないで下さい！ ヤメテ！」

「破壊神じゃないっ！」

二人の騒がしい声は瞬く間に小さくなっていき、やがて静粛が廊下を包み込んだ。

「」

「」

「ハッ、いけない！ まさかルイズの使い魔ごときに、良いように

からかわれるなんて、屈辱だわ！」

気を取り直したキュルケは、闘志をメラメラ燃やしながら亜人への復讐を誓った。

「さあフレイム！ 一緒にいらっしやい！ ……フレイム？」

返事がないのを不審に思った彼女が振り返ると、そこにはこちらをじっと見つめる己の使い魔の

姿があった。つぶらな瞳と目が合う。

「……」

「……」

「ど、どうしたのかしら、わたしの可愛いフレイム♪」

「……」

「ま、まさかあの亜人に何か吹き込まれたのかしら？ 心配しないでいいのよ、

あんな戯言なんて……」

「……」

「……」

「……キュル」

プイツと、フレイムは顔を背けた。

「フレイム……?!?!」

誰もいなくなった廊下に、彼女の叫びがこだました。

STAGE 5 MADE FOR YOU

「おお、これは中々のものですね！」

「どう、驚いた？　これがトリステイン魔法学院の誇るアルヴィーズの食堂よ！」

魔王の目前には、天井高くから吊り下げられたシャンデリアと、豪華な料理が所狭しと載った

立派な大机が整然と遠くまで並んでいた。また壁の至る所に煌びやかな装飾がなされ、所々に

妖精をかたどったものか、見事な像が立ち並んでいた。トリステイン魔法学院は単に魔法を教える

だけでなく、貴族としての立ち居振る舞いをも教育する場でもある。それに相応しい場所を

用意すべく、ここアルヴィーズの食堂も豪華絢爛に作られていた。「これはマイキャツスルをリフォームするときの参考になりそうです。今度帰ったときに、

匠の技的な力で住処をヘンボウさせるといふ大魔法『ビホーアフトー』を試してみるのもいいかもしれません」

算段を立てる魔王を他所に、ルイズは自分の席のそばにある『ブツ』を確認していた。

「(ええと、この席の下にあるはずよね。よし、用意してあるわ!)」
机の上には生徒達のために用意された豪華な朝食が並ぶ一方、床下にはルイズ自らが

手配した、魔王専用の朝食が用意されていた。もともとソレは、彼女の思惑が大いに

込められたものではあったが……

「ほらあんた、ポケットとしてないでイスを引きなさい！」

「ああ、これはシツレイ致しました。さあ、どうぞお座りください。」

ルイズは少しそわそわしながら朝食の開始を待った。しばらくすると朝食の祈りが捧げられ、

生徒・教員たちの食事が始まった。

「(さあ始まったわ！ フフフフフ……！ 亜人だろーが何だろーが、ゴハンは絶対必要なもの。」

コイツだって、私たちの食事風景に空腹感を覚え、食事を求めてくるはずよ。

そしたら机の下のブツを突き付けて、使い魔としての立場を教育してやるのよ！」

ルイズは今か今かと、魔王が朝食を求めて来るのを待った。

「……」

だがしかし、ルイズの思惑とは裏腹に魔王は一向に話しかけるそぶを見せず、興味深げに

食堂中を見回すのみであった。

「(何よ、みつともなくお腹を空かせて、ご主人様くと泣きついてくるのはまだなの?)」

ルイズは食事を進めたが、魔王は相変わらず呑気に生徒・教員たちを眺めているようだった。

結局、しびれを切らしたルイズは自ら魔王に話しかけた。

「あんだ、少しは食べたいとか思わない訳？」

「フフフ、馬鹿にしないでください、ルイズ様。ワタクシがこんな食事を取るだなんて御冗談を！」

「(!! まさか私の企みがバレてた!?)」

ルイズは内心ギクツとしつつ、平静を装って尋ねた。

「どういうことかしら？」

「人々の絶望をすすり、憎しみを食らい、悲しみの涙で喉を潤す。それが魔王というものです。」

フツの食事なんて取らずともやっていけるのです！」

ルイズは目を丸くして驚いた。このへんてこりんな使い魔から、こんな魔王らしい言葉が

飛び出してくるなんて……

「か、感情を糧にする妖魔なんて、聞いたこともないわ！」

「フフフ、スゴイでしょう！ マガマガしいでしょう！ ルイズ様には

中々想像付きませんか？

そうですね、例えるならばラーメンといったところでしょうか。絶望というメンをすすり、

憎しみというチャーシューを食らい、悲しみの涙で出来たスープで喉を潤すのです。

夜更かした時とか特に美味しく感じるんですよ。ちなみに、麺は固めよりもむしろ

少し伸びてるほうが好みです」

「ラーメン？ まあアンタの例え話はともかく、本当に料理いらなの？

その、強がってるんじゃないでしょうね？」

「ロンオブモチです。皆のゼツボーをズルズルすすってやりますとも！」

自らの使い魔の意外な一面を知り、実はコイツ凄いやつなんじゃないかと、ルイズは少し

「魔王」のを見直した。

「(やつぱりちゃんとした食事を用意して、……あ、でもいらないんだっけ?)」

「アッ……」

突如、魔王は声を上げたかと思うと、そのまま黙りこくった。

「……どうしたのよ」

ルイズは、嫌な予感がしつつも魔王に声を掛けた。

「……私としたことがウカツでした。そうですね、ところ違えば味も変わる。

失念しておりました」

「だから何なのよ」

「ついウツカリ忘れていたのですが、私、召喚される直前に受けた不健康診断で、

MDL値が引っ掛かったのです」

「……は？」

「私も若い頃ならトモカク、この年になってくると魔タボリック・シン

「ル、ルイズ様？」

「残念ね、ほんつとーに残念」

ルイズは大きいため息をつくと言を続けた。

「この食事はね、貴族専用のもなの。だから使い魔のあなたがこれを取るわけには

いかないの。ごめんなさいね、でも規則だからしょうがないわ」

「はあ、規則、ですか」

「でも私だって鬼じゃあないわ。ちゃんとあなた専用の料理を用意しておいてあげてるもの。」

あなた専用の、とびっきりのをね」

「おお、そんな用意をして頂いているとは、私も感激でゴザイマスー！」「私の使い魔になってくれたお礼よ。遠慮せずに受け取って欲しいわ」

「ええ、遠慮なく頂ますとも！ 何ならオカワリまでいっちゃんいますよ。」

それでその食事は何処にあるんですか？」

「……そこよっ！」

そう言うと、ルイズは机の下を指さした。

そこには、机の上下を隔てて貧富の差の縮図があった。机の上には贅の限りを尽くした

料理の数々が並んでいるというのに、少し視線を下げて見える床の下には、カビに覆われて

真っ黒になったパンと、極端に水で薄めて量増したスープがぽつんと置かれていた。

「闇に覆われた世界の魔王様」に失礼はできないもの。特別に、漆黒のパン」と

「限りなく澄み切ったスープ」を用意したわ。おいしそうでしょう？

まさかとは思うけど、今さら主の好意が受け取れないとは言わないわよねえ」

ルイズは決まった！ とばかりにふんぞり返った。

「なんだ、ホツとしました。机の上の料理と方向性は違えど、超フケン
コウそうなパンでは

ないですか。ニンゲンが用意したにしては中々イイ線ってます」
「えっ!？」

魔王はルイズの驚愕を他所に、ヒョイツとカビだらけのパンを口へ
放り込んだ。

隣席ではマリコルヌが思わず魔王を二度見し、スプーンを手から落
とした。

「スープの方は…… ウーーン、見た目通りビミョーですな」

初めはショックを受け、改めて自分の使い魔の特殊性を認識したル
イズも、

しばらくすると自分の目論見が失敗したことへの悔しさが込み上
げてくるのだった。

「さ、食べ終わりました。次をお願いします!」

「へ?」

自分の心を鎮めようと格闘していたルイズは、いきなりのことに何
を言われたのか

分からなかった。

「次は確か魚料理ですよね。それとも一番初めに出し忘れたオードブ
ルが届くんでしょうか?」

大丈夫、魔王は心が広いので順番なんて気にしません!」

「なにを言ってるのよ?」

「何って、これってフルコースですよね?」

ルイズはしばらく黙りこくって、何を言われたのか考えた。

「ルイズ様?」

そして魔王が再び声をかけた時、ルイズは満面の笑みを浮かべてい
た。

「……だけよ」

「え? 何て言いましたか?」

「……それだけよ」

「ええ、確かに前菜は全部頂きましたが……」

「だからそれでお終い、全部なのよ。アンタの食事は終了したってわけ」

「……ナツ！」

魔王がそのまま固まったのを見届けると、ルイズは優雅な気持ちで朝食を再開した。魔王は

しばらくの間、シヨックを受けた顔で微動だにしなかったが、ルイズがクツクベリーパイに

噛り付く頃になると、ようやく動揺が収まったのか、乾いた笑い声でルイズに語り掛けた。

「わたくし、ルイズ様のことを誤解しておりました。上げてから落とす、というのは

人を絶望に突き落とすキホンですが、実際にやるのは中々ムズカシイもの。

高い落差を用意した計画力に、身内相手にそれをやる鬼畜さ。ルイズ様はもう既に

チもナミダもない立派な破壊神さま道を駆け上がっておられたのですね。ヨヨヨ」

「だから破壊神って呼ぶんじゃないわよ！」

ルイズは、今日一日が波乱に満ちたものになるであろうことを、予感せずにはいらなかった。

STAGE 6 物騒な錬金

ルイズは教室の扉に手をかけるも、はたと後ろを振り向いて言った。

「……無理に付いて来なくていいのよ」

「何をおっしゃいます！ 生徒たちはみな呼び出した使い魔を連れていくのでしよう？」

チュージツなるルイズ様のシモベとしては、参加しない訳には参りません！」

「ハア……」

ルイズは憂鬱になりつつも、教室の扉を開いた。

部屋の内には、生徒達とともに彼らの召喚した使い魔がひしめいており、

カエルやヘビ、フクロウといった小動物から、バクベアーやサラマNDERといった

幻獣に至るまで、まさにより取り見取りといった様子であった。

「いやはや色んなマモノがそろっておりますな。」

魔王軍の幹部候補生をここで募るのもいいかもしれません」

「あんだ、他人の使い魔にちよつかい出すんじゃないわよ！

あんだの行動は全部私の名誉に関わってくるんだからね！」

「いやいやルイズ様。一度、使い魔をコチラ側に引き込んでしまえば、その主のことなど煮るなり焼くなり埋めるなり沈めるなりどうとでも……」

「ならないわよ！ 貴族の子弟の身に何かあつて、ただで済むわけないでしょ！

第一、何よそのブツソウな考えは！ とにかく下手なことしたら許さないわ！」

ルイズが席に着いた後も、教室内はしばらくざわついていたが、廊下から響く教師の足音が近づくにつれ、それも収まっていった。

「皆さんこんにちは。二年の土魔法の授業を担当するシユヴルーズです」

そう言うのと彼女は満足げに教室を見渡して言った。

「わたくしはこの時期に皆さんが召喚した使い魔を、こうして眺めるのが好きなのです。」

使い魔はメイジと共にあるもの。皆様の生き生きとした使い魔を見てみると、あなた方が

将来どんなメイジになるのか、期待が膨らんで止まないのです」

朗らかな顔をして周囲を見やっていたシユヴルーズだったが、ルイズの方を向くと一瞬にして

その顔を強張らせた。

「ミ、ミス・ヴァリエール、あなたのお隣に控えている方はもしかして？」

「……お察しの通り、コレが私の使い魔です」

シユヴルーズは困惑した顔で答えた。

「わ、私も噂には聞いていましたが、ほほほ、本当に珍しい使い魔を召喚しましたね。」

このような使い魔を召喚できるというのは、ある種一つの才能です。

あなたのメイジとしての将来が、た、楽しみ、うう……」

そこまで言うのと彼女は感極まった様に後ろを向いて顔を隠した。直前に、彼女の眼がキラツと

光ったのは、きつと目にゴミでも入ったからに違いない。ルイズはそう思うことにした。

だから今、シユヴルーズがどれだけ沈痛な面持ちをしてこちらをチラ見してこようと関係ない。

関係ないったら関係ない。

……くそう。

「失礼、少々感極まってしまいましたわ。」

ミス・ヴァリエールは大変な努力家と聞いていましたから、召喚に成功して本当に良かったと思います。ええ」

「あ、ありがとうございます」

ルイズは頬をひくつかせながら答えた。だが止せばいいのに口を

挟む者もいる。

風上のマリコルヌ、使い魔にフクロウという無難な生き物を召喚した生徒だった。

「おいルイズ、お前のせいで先生が困ってるぞ！」

「何よ！なんか文句でもあるっていうの？」

「お前がゼロなのに無茶に召喚なんてするから、そんな妙な使い魔を、ウツ!!!」

ルイズが頭にきて言い返そうとしたところで、マリコルヌは口を詰まらせ、目を白黒させた。

「お友達をそんな風に言っではいけません！それに私語は厳禁です！」

見ると、シユヴルーズは杖を構えていた。彼の口に魔法で粘土を詰め込み、黙らせたようだ。

ルイズはマリコルヌの見つとも無い姿に溜飲を下げ、ほんの少しばかりシユヴルーズへの印象を

良くしたのだった。シユヴルーズは続けて彼に言った。

「例え、ミス・ヴァリエールの使い魔が、教会がなんと言うか分からない様な

酷くいわくありげでとびきり怪しく禍々しく邪悪でサバティックな雰囲気な

醸し出していたとしても、決して悪く言っではいけません！」

勇気を振り絞る様な、少し震えた声だった。

「……先生。僕、そこまで言っではいけません」

……

授業は淡々と進んでいった。新学期の最初ということもあり、内容は前学年の

簡単なおさらいからだった。自分の使い魔がアレなことを新任の教師からも公認されて

しまったルイズは、大変落ち込んでいた。相手が教師だけに言い返すことも出来ないし、

第一、自分に嘘はつきたくない。
でも現実逃避ぐらいはしたい。

ルイズは、傷心を癒すべく外を眺めることにした。
だがルイズが窓に目を向けると、逆にこちらを覗き込む大きな影が見えた。

今年召喚された使い魔で一番の大物、風竜だ。教室に入りきららないため、

外窓から教室に顔を出して参加しているらしい。

召喚したのは確かタバサとか言ったっけ。

彼女も自分と同様、座学でかなり良い成績を取っていたはずだ。

座学も実技も出来るだなんて。

……くそう。

メイジの使い魔格差を思い知らされ、ルイズはより一層気を落としました。

隣では己の使い魔が、熱心に教師の言葉へと耳を傾けている。

「ふむふむ、魔法は火・風・土・水の四大属性から成る。

アリガちな設定ですね。光とか闇はないのでしょうか？」

相変わらず、訳の分からないことをつぶやく魔王を見て、

ルイズは今日何度目か分からないため息をついた。

……………

傷心のあまり授業を上の方で聞いていたルイズは、なぜ注意を怠ってしまったのかと、

いつの間にか出来上がった目の前の空気に頭を抱えた。

「土は万物の組成を司っています。つまりそれを操ることのできる土属性の魔法には、

万物を支配する無限の可能性が秘められているのです！」

シユヴルーズの言葉に、言い過ぎなんじゃないかと多くの生徒たちが思ったが、

ギーシュを始め、土属性の魔法に秀でた者は彼女の言葉に強い共感を覚え、熱狂している

ようだった。そこへ火に油を注ぐかのように己の使い魔が加わる

のを見て、ルイズは

開いた口がふさがらなかった。

「まったくもってそのとおりです！」

土はあらゆる生命のミナモトにして、このセカイの全てです！

イノチは土から生まれ、土に育まれ、そして最後は土へと還っていく……

しかしそれでいて終わることはなく、その土はまた新たな生命の源となる。

そうして土は、あらゆるイノチの営みの循環をカタチ作っていくのです。

そのような土のチカラを活かすということは、これ即ち神の御技と言えるでしょう!!」

頭を抱えたくなることに、ギーシュまでもがそれに乗っかり始めた。

「それだけじゃないぞ！ 土は文明の発展にも多大なる貢献をしてきたのだよ。

歴史的に見て金属を制したものの、つまりは青銅、そして鉄の錬金技術を

編み出した国々によって、その時代時代の勢力図は塗り替えられてきたんだ。

金属を制したものに繁栄は約束される。そしてそれを成すのは土魔法の力だ！

土には文明の現在・過去・未来が秘められていると言っても過言ではないだろう！」

「ミスタはよく勉強なさっていますね。他にも土は建築や農業等、人類の活動の

あらゆるものに関わっています。言うなれば土は、この世の全てです！

土を表すのには余計な言葉はいりません！ 一言で十分です！

「「土サイコーー！！！！」」

「」

シユヴルーズも幾多のメイジの例に漏れず、己の得意とする属性について語るときには

熱がこもるのだったが、呆れたことにルイズの使い魔はその熱狂の中へ自然に入り込んでいた。

「いやはや、土好きに悪い人はいないというのは本当ですね。

ミス・ヴァリエール、あなたは勤勉な生徒だと伺っていますが、真に見識ある、相応しい使い魔を得られたものですね！」

「」

始め、この亜人を見て恐れ慄いていたのは何だったのか。ルイズはそう思わずにいられなかった。

「そうだわー折角ですし、こんな素晴らしい使い魔を呼び出した

ミス・ヴァリエールに錬金の実技をお願いしましょう！」

今まで怠そうな視線で土メイジの盛り上がりを眺めていたキュルケは、それを聞くなり

慌てて声を上げた。

「ま、待ってください！危険です！」

危機感を覚えたのは彼女だけではない。皆が恐れおのく中、カエルを使い魔として

召喚したモンモランシーも不満の声を上げた。

「そうよ、冗談じゃないわ！昨日も散々、「まあまあ、ここは一つ、彼女の使い魔の

見識の高さに免じて大目に見ようじゃないか」ギーシュ！何言ってるの!?!」

騒然としてきた教室を見て、シユヴルーズは生徒たちに語り掛けた。

「皆さん、私も彼女のことは聞いていますよ。実技があまり得意ではないと。

しかし同時に、座学では一番を取る程の努力家だとも聞いています。

さあ、失敗を恐れているは何も始まりません。ミス・ヴァリエール、躊躇せずに

やってみてください。大丈夫、貴方なら出来ますよ」

そう言つて、彼女はルイズに微笑みかけた。

そうは言うものの、ルイズは失敗した時の惨状を思い戸惑った。

「お願い、止めて」

「そうよそうよ！あ、そうだギーシュ、あんたこそやってみなさいよ！

二つ名に恥じない力を私に見せて頂戴！」

「む？うむ、それもそうだな！ どうせやるならこの世で一番美しい
使い魔を呼び出した、

この青銅のギーシュこそがその技を披露しようじゃないか！

モンモランシー、この僕の雄姿をしっかりと目に焼き付けておいて
くれよ！」

「ああ、それがいいよ。使い魔を使って人語を解すキメラを錬成して
みせてくれ。」

二つ名を名乗るにも国家資格が必要だろうか？」

「マリコルヌ、君は何を言っているんだい!？」

昨日の爆発の記憶冷めやらぬ生徒たちの必死の引き留めは、ルイズ
の意地な心を奮い立たせた。

「やります。」

一瞬の静粛の後、教室は前にも増して慌ただしくなった。皆が机の
下に一斉に身を隠す。

「ルイズ様、あんまりスゴイものを錬金しようとするあまり、

腕とか持ってかれないように気を付けてくださいね。」

「何のアドバイスよ！」

「何を隠そう、ルイズ様は失敗魔法の達人ですから」

「つつつ!! 見てなさい！ 絶対成功させてやるわ！」

そんな中、先ほどルイズが羨ましがっていたタバサはこの先を見越
して、いつものように

教室を脱出することに決めた。皆の行動に何事かと戸惑っている
シュヴルーズは、

どうせ彼女の杖先一振りでダウンだ。

いつものように、皆が自分の身を守ることに必死な隙に移動し、い

つものように、スツと

誰にも気付かれず教室を抜け出し、本を読む素敵な時間を送るのだ。

そしていつものように、

「どこへ行かれるのですか？」

「……何？」

彼女の前にマガマガしい亜人が立ちはだかっていた。

「これからルイズ様がその御業を披露なさるというのに、

どこへ行かれようというのですか？」

「私の勝手。通して」

「いーえ、それは出来ません！」

教室の前では周囲に意を介さず、実技の準備が進められていた。

「杖の向きはこうです。さあ、錬金する金属をイメージしてみてください

い」

「はい！」

もう、何時錬金が始まってもおかしくなかった。

「どいて。……早く！」

彼女にしては珍しく慌てた声を上げたが、魔王の態度は余裕そのものだった。

「知らなかったのですか？」

タバサは遮る魔王の横を必死に通り抜けようとしたが、教卓から届いた閃光を目の当たりにして

青ざめた。

「破壊神さまからも逃げられません!!」

教室を爆風が駆け抜けた。

STAGE 7 振ってダメなら掘ってみな

授業のその後について、特に語るべきことはない。

何せ、あつたことといえばルイズがちよつと失敗したぐらいなものなのだ。

だから教壇が真つ二つになり、窓ガラスが全て割れ落ち、爆風を遮るものなく受けた

シユヴルーズと生徒一名が医務室へ運ばれたことなど些細なことだと言える。

今、教室ではルイズとその使い魔だけが残り、後片づけをしていた。もつとも手を動かしているのは魔王だけで、ルイズはうつむきながら

何かをずっと考え込んでいる様だった。

しばらくの間、魔王はこなれた様子でイソイソと窓ガラスの破片や木片を

集めるのに精を出していたが、ルイズのぽつりと零した小さな声に顔を上げた。

「何で……」

「……」

「何で何も言わないのよっ!」

「……」

従順な彼女の使い魔は、返事をするではなく言葉の続きを待った。

「どうせ、私のこと馬鹿にしてるんでしょ!」

「……」

「昨日から、あんなに偉そうにしておきながら、ろくに魔法が使えないんですもの」

「……」

「どうせ、心の底で私のことを嘲ってるんでしょっ?」

「……」

「何とか言いなさいよ!」

「プハアーーーーー！！！！ 息止まるかと思いました！」

ルイズ様、ありがとうございます。さつきからなんか黙ってなきやダメな雰囲気だったんで、

結構苦しかったんですよね」

「」

「いや、それにしてもこの使い魔どもは緊急対応がなってませんな。爆発が起きた程度であそこまでアワてフタめくとは、あんなんじや勇者のシューライに

対応できません！ 使い魔になって早々にヤセイのカンを失ってしまったのでしょうか？

ナゲかわしい限りです……

それはそうとルイズ様、見ましたか？ あの太つちよの生徒、マルコリヌ……あれ？

マリコルヌ…… どつちでしたっけ？ どつちでもいいですね、とにかく彼のあのブザマな

転びっぷりを！ 「いい加減にしてっ！」

ルイズの大声を聞いて、魔王は再び黙り込んだ。

「どうでもいいことをペラペラと、誤魔化すつもり!？」

あんたも見たでしょあの散々な失敗を！

私は、どうせ落ちこぼれのルイズよ！ ゼロのルイズなのよ！」

ルイズはそう捲し立てるなり、再び黙りこくってしまった。

「……」

魔王はルイズが自分からはもう喋りそうもないのを見て、とつとつと語り始めた。

「……辛かったでしょう。悔しかったでしょう」

「……」

「ルイズ様のことです。これまでどれだけ苦しくともキボウを捨て

ず、

地道な努力を積み重ねてこられたことでしょう。

それなのに、その成果がこんな爆発にしかならないとは！」

「ッ……………」

「本当はルイズ様は、もつと素晴らしい魔法を解き放ちたいんですよね」

「……………」

「持てる全ての魔力を解き放ち、学院まるごとエクスプロージョンさせたいんですよね！」

「ぶち殺すぞ」

「……………」

ルイズは呆れたようなため息をつくともう一度、今度は沈み込むような深い深いため息をついた。

「……………あんたは私のこと、破壊神だって信じて慕ってくれてるみたいだけど……………」

本当はそんなんじゃない。さっきあんたが見たように、普通の魔法を失敗して

物を壊してるだけの…………… ただの落ちこぼれなのよ」

そう言うなり、ルイズはまた黙りこくってしまった。小さく肩を震わせ、何かを堪えるように

唇を噛みしめている彼女を見て、魔王は再び語り掛けた。

「ルイズ様は誤解されております」

「……………」

「私がルイズさまを破壊神さまとお呼びするのは、何も魔法で爆発を振りまいているからではないのです」

「……………」

彼女は俯いたまま何も答えなかったが、それでも耳を傾けてくれて、いることを信じて、

魔王は話しを続けた。

「確かに今のルイズ様は、杖を振り回し呪文を唱えてやるよーな魔法

が

カケラも使えないのかもしれない」

「ッ！」

「ですが、その一方でルイズさまにはご自身で気付いておられない、ルイズさまだけの

特別な才能がおりなのです。私はそれを見込んだ上で破壊神様とお呼びしておるのです」

「慰めのつもり？ 例えそんな才能があったとして、破壊を振りまくんじゃない？」

「しょうがないじゃない」

そういつてルイズはそっぽを向いたが、それに魔王はヤレヤレと首を振って応えた。

「まったくニンゲンどもは、破壊と聞くととかく悪いイメージを持ちがちです。」

ですが破壊は創造と共に、この世界を形作るダイジなプロセスなのです。

例えばこの机、元は立派な木であったものを切り倒して、切り刻んで、削って、

そんでもってナンヤカンヤ組み上げることでのカタチが出来上がっています。

またこの学院を建てる時だって、まず初めに巨大な石を叩き壊す工程があつてこそ、

割った石を四角くきれいに削り、積み上げることが出来るのです。ワレワレが何かを作るとき、その材料は何かを壊すことで得られた

ものなのです。

ワレワレ自身の体ですら、元を辿ればイノチあるものを食べる、つまり他のイキモノをコワすことで成り立っているのです。

この世はそうした諸々の破壊と創造が組み合わさって成り立っているのです。

「どうですか？ 何となく壮大なカンジがするでしょう！」

「私の魔法で何かが壊れても、何の役にも立たないわ」

「だから違うのです！ ルイズ様には単に壊すだけに留まらない、トクベツなチカラがおありなのです！」

「そんなの信じられないわよっ！ 今まで一度も魔法に成功してないのよっ！」

「どれだけ杖を上手く振ろうとしても、スペルを完璧に唱えようとしても、

なんの効果も現れない。挙句、大きな爆発までして終わってきたのよ！

他の人が失敗してもこんな迷惑な爆発なんて起きないのに！」

気色ばむルイズに対し、魔王はそんなことかとでもいうように自信満々にほくそ笑んだ。

「ルイズ様、ソコですよソコ。そういう細かなトコロこそがジューヨーなのです。」

東の方に住むという高名な魔女も言っていました。すべての物事に意味があるのだと！

「そんなもの、自分の境遇に疲れた人を元気づけるためだけの、ただのまやかしょ。」

一体私の爆発のどこに意味があるっていうのよ！」

「ありますとも！ ルイズ様が魔法を使おうとするとき、ただのしよぼっちいミニマムな

魔法が起きるのではなく、豪快な爆発が毎度引き起こされる。

まさにそういうトコロにこそ、フカイ意味が隠されているのだと魔王は思うのです」

「……どういふこと？」

ルイズは魔王の自信ありげな態度が気になり、少しだけ顔を上げた。

「ルイズ様の魔法は必ずバクハツに終わりますよね。つまりルイズ様は少なくとも、

その爆発を引き起こすだけの力は持っているということですよ。

しかもそのチカラは、この教室の惨状を作り出した様にケツコウな規模のものです。」

このことから、ルイズ様に溢れんばかりの膨大なチカラが
ネムッていることは明らかです。

これはゼロの一言で済ませていい問題じゃありません！」

「……わたしに凄い力が？」

「ジブンの力が信じられませんか？ それは今のルイズ様が大きな失
敗をして

弱気になっっているからです。さあいつものジブンを取り戻すので
す！

……ブツチャケ、ルイズ様、普段は自分に偉大な才能があるとか
思ってませんか？

確かに失敗ばかりでみんなからゼロと呼ばれてはいるけれど、実は
自分の才能は

深く眠ってるだけなんじゃね？ だとか、いざ自分のチカラが覚醒
したら、誰よりも

優れたメイジになっちゃうんじゃね？ とか……」

「そそそんな妄想じみた子供みたいな妄想なんて、ししてないわよ
子供じゃあるまいし！」

魔王はその様子を生温かい目で見守りつつ言った。

「いいんですよ、ルイズ様。そういうモーソーは誰もが通る道です。
きつと。

魔王的には、ルイズ様の魔法の失敗原因が誰にも分からない辺
り、

そういう妄想じみた考えも捨てたもんじゃないと思っています。

もしそういうことなら、ルイズ様は覚醒した途端に伝説のスーパー
メイジとして

宇宙に名を馳せても不思議ではないでしょう。

実はルイズ様にはトンデモなくスゴイ潜在能力が眠っているけれ
ど、

身の危険がさし迫るまでは覚醒出来ないだとか、

穏やかな心を持ちながら激しい怒りによって目覚めなければいけ
ないだとか、

実は火、水、風、土のどれにも当てはまらない隠された第五の系統の使い手だったとか。

あ、いや最後のはノートにテキストに書いた設定が黒歴史化するパターンなんで、

あんまりマジにならない方がいいでしょう」

「虚無なんてあり得ないわよ」

「へ？虚無って何ですか？」

魔王は四大系統に当て嵌まらない、聞きなれない言葉にぽかんとした表情を浮かべた。

「あれ？ 授業で言っただけじゃなかったかしら？ まあ無理もないわね。

虚無ってというのは始祖が使ったとされる伝説の系統のことよ。

でも伝説だけあって、誰も使い手はいないし、呪文も残っていない、まさに話の中だけの存在なのよ」

「……なんだか熱く語ってきたジブンがバカらしくなってきました。

もうルイズ様の系統、それってことにしたらいいんじゃないでしょうか」

「人の失敗を軽々しく伝説と結びつけるんじゃないわよ！」

「まあ、しかしどうあれルイズ様にチカラが眠っていることは確かなのです。

問題はそれでいてなぜ、上手く魔法が使えないのかということですよ」

「結局のところそこなんじゃない。皆、それで匙を投げてきたのよ。

力がいくらあったんだとしても、それをコントロールできないんじゃないわ意味ないわ」

そう言っただけルイズはまた下を向いた。

「落ち込むことはありません！ ルイズ様、正直に答えてください。

今までこう思ったことはありませんか？ 自分が魔法に失敗するのは

自分が悪いからじゃない。例えば杖が悪い、だとか、カンペキな詠唱を

唱えてなお失敗する呪文の方が悪い、だとか」

「まさか！ そんな責任転嫁みたいなみつともないことしないわ！」

「ルイズ様、モノゴトを見通すには、時にマガマガしく考えてみるのも一つの手段ですぞ。」

トモカク私言いたいのはですね、つまりルイズ様の普段練習なさっている呪文や

使ってらっしゃる杖、それらがルイズ様の溢れんばかりの魔法力を受け止めるには

脆すぎるだとか、あるいはルイズ様の持つ魔法力に対し相性が悪いだとか、

そんな可能性があつて、だから爆発するんじゃないかということなのです。

モットモ、私には思いもつかないような別の可能性だつてあるのかもしれませんが」

「馬鹿なこと言わないで！ 今までに何人もの家庭教師が色んな呪文を試させようとしたわ。」

でも全てダメだった。そもそもライトの呪文にすら失敗する時点でおかしいのよ！

それに、杖のせいでもないわ。私だつてお父様やお母様に言われて、杖を変えて

試したことがあるもの。でも、どんなに良い杖を使つても駄目だったのよ。

なら、やっぱり私がダメつてことじゃない!!」

「惜しいです。その考え方は実にオシイです。ルイズ様はそこからさらに

もう一步踏み込んで考えてみるべきなのです。

どんな呪文を唱えてもダメだった。どんなに良い杖を振つてもダメだった。

ならば、どんな呪文、どんな杖でさえそのチカラを受け止め切れな
いほど、

ルイズ様のおチカラが絶大だったと考えてみるのです」

「まさか！ そんなの妄想でしかないわ！」

「確かに根拠はありません。別の可能性だっていくらでもあるでしょう。」

ですがそのまさか、エーそんなのアリ?!ということが現実では往々にして

起こるのです。 ラノベならナオサラです！

そもそもルイズ様はヴァリエール家というかなりの血筋のお方とのこと。

魔法の才能は血筋が大変重要と聞きました。ですから、それだけで
もう

ルイズ様は十分莫大なポテンシャルを持っていてトーゼンなので
す！

それはもう空気を吸って吐くことのように！ 鉛筆をペキツとへし折ることと同じように……

まあ体重を乗せればできるんじゃないでしょうか。ササクレが怖いですけど。

とにかくあつてトーゼンと思うべきなのです！ そして考えてみてください。

ドラゴンの吹く炎でヤカンの水を沸かせますか？ 巨人が小人と握手出来ますか？

そういうものなのです！ 大いなるチカラを發揮するには、それなりのチカラの使い道が

必要になるのです！ ルイズ様が魔法を使うのに、呪文を唱えながら杖を振るといふのは、

ラクダを針の穴に通す様なものなのです。たぶん。

当然、ラクダは針の穴に通すものではありません！ 乗って使うもの
のです！

ものの使い道が全然異なるのです！

そもそもラクダを針穴に通そうとするなん「それ以上はやめなさい」

ルイズは困惑した表情で話した。

「本気……なの？」

「モチロンです！ それを見込んで私はここにいるのです！」

「でも、もしそれが本当だとして、結局私に使える杖や呪文がないんじゃないあ、

しょうがないじゃない」

「フフフフ…… ワタシにだってちゃんと考えがあるのです！」

「……まさか」

「ハイ！」

「あんたが私の力に期待するってことは！」

「ハイ!!」

「あるというの！ 私が力を振るうための方法が！」

「その通りです！」

「私の力を受け止めることが出来る最高の杖が！」

「違います」

「」

「全然、違います」

「2度も言わなくていいわよ！」

ルイズはいつの間にか立ち上がって叫んでいたことに気づき、一瞬顔を赤らめると、

もう一度座りなおして心を落ち着かせようとした。

「一体どういうこと？ 杖が無くてどうやって魔法を使うって言うのよ！」

あ、もしかして杖の代わりになるようなマジックアイテムもあるって言うの？」

「さすがルイズ様、ご明察です。それもただのマジックアイテムじゃありません。

常人には決して扱うことのできぬ、トクベツな力を持った伝説のアイテムなのです！」

「そ、そんなにすごいシロモノなの!？」

「ええ、それはもう、このアイテムを手にしたものは、歴代の名立たる戦士や魔法使いにすら

成しえぬ奇跡の御業を起こすことが出来るようになるのです。」

「そんな大層な道具を、本当に私が扱えるっていうの!?!」

「私はそう確信しております。ソレを使うことで、ルイズ様は偉大な一歩を踏み出すことになるのです!」

「わたしが、ついに魔法を!?!」

「覚悟はいいですか、ルイズ様。」

「覚悟はいいですか、ルイズ様。」

「大いなる力には、大いなる責任が伴います。え!?! これを言った怪人クモ男って悪の組織の幹部じゃないんですか!?!」

「良いことばかりでは無く、大きな災いとその身に降りかかることもあるのです。」

「これを手にしたが最後、もう後戻りは出来ません!」

魔王の真剣な言葉に、ルイズも誠意をもって答えた。

「覚悟ですって? そんなのとづくに出来てるわ。」

「私は今までずっと立派な貴族であろうとしてきた。」

立派なメイジになれるよう、努力してきた。

けれど、魔法だけがどうしようもなく足りなかった。

私が、私の望む姿になることを阻んできた。

だけど今、その欠けていたピースが埋まろうとしている。

迷うことなんて何も無いわ。」

「私は今日、この日を以って、真のメイジ、真の貴族としての道を歩み始めるのよ!」

「……ルイズ様のご覚悟、よく分かりました。」

「それでこそ、私も安心してコレをお渡し出来るというものです。」

「さあルイズ様、我がマモノたちの秘宝を手にお取り下さい!」

魔王は懐からそれを取り出すと、恭しくルイズへと差し出した。

ルイズは決意に満ちた面持ちで、その道具を受け取った。

ルイズの手にずしりと重みが伝わってきた。

ルイズは「それ」を手にしただけで、自分がそれをどう使えばいい

のかが理解できた。

そしてそれが、どれだけ大きな力を発揮するのかを容易に想像する

ことができた。

それを手に、今から何をすればいいのか、彼女にとっては自明のことだった。

「つまり、今からこれをアンタの頭に振り下ろせばいいって訳ね」

「お、お待ち下さいルイズ様！ これは紛れもなくマジックアイテム、そうマジックアイテムなのです!!」

地下帝国最大の秘宝、それこそがソレなのです！」

「なんだってそれがツルハシなのよおお!!」

召喚の儀式以来、再びの登場であった。ツルハシのくせに柄の部分がきれいな紫色をしており、

ちよっぴり上品な感じを醸し出していることが、ルイズの神経を余計に逆撫でした。

「その発言はツルハシ差別です！ ツルハシ、いいじゃあないですか！

労働の尊さを伝えるシンボリックな感じで、国旗に使ってもソンショクない代物だと

自負しております！」

「その労働って、肉体労働限定じゃない！ それにツルハシがシンボルって、

階級社会への挑戦みたいな不穏なイメージを感じるわ！

私はメイジとして活躍したいのに、魔法使えない私への当てつけのつもり!？」

「いえいえ決してそのような、イテツ、ルイズ様そのツルハシで小突くのはやめてください。

装備のおかげで大きなダメージこそ無いとはいえ、連続で突かれると地味に痛いです。イタタタター！」

「だったら！ これ以外の！ メイジに相応しい道具をだしなさいっ！」

「分かりました！ 分かりましたから小突くのをやめてください！

じゃあこんなのはどうですか？

水のチカラを味方に出来るというマジックアイテムです！」

「良さそうじゃないの。さあ早く私に見せなさい！」

「とくとご覧あれ！ 地下帝国の秘宝第二弾！ ミズノ・ツルハシ！」

「またツルハシじゃない！ ちよつと、持つてるもん全部見せなさいよ！」

「あ、ルイズ様、そういうのはちゃんと段階を踏んでからにしてください！」

「うるさい！ 杖！ 杖はどこ?!」

ルイズはくねくねと抵抗する魔王のローブを引つpegし、必死になつて所持品を漁つた。

だがその行動は、彼女から一縷の希望さえも奪い去るものだった。

「な、何よこれ！ 全部ツルハシじゃない!!」

嘘よ、ウソだわ、これは何かの悪い夢なのよ……」

「ところがドツコイ、夢じゃありません！」

さあ覚悟を決めてツルハシを振るうのです。

主にワタシの野望のために！

いまこそハカイシンとして目覚めるのです！」

ルイズは放心した。

「」

「」

「」

「……」

「……」

「……めしぬき」

「え?」

「めしぬき」

「メシヌキ? なんの呪文ですか?」

「相手を空腹にさせる呪文よ。」

つまりあんた、ひるの、ごほん、ぬき」

不満の声を上げる魔王を他所に、ルイズはよれよれと、今にも倒れ
そんな足取りで廊下に

向かった。ついに光り輝く立派なメイジとしての道を進み始めるんだと思っていたら、

なぜかブルーカラーへの道が開けていた。何が何だか分からなかった。催眠術や超能力なんて

チャチなものじゃない、もつと恐ろしいものの片鱗を味わったような気がした。

グウつとおなが鳴った。

空腹がルイズの頭を支配していき、その内ルイズは考えるのをやめ、

食堂へふらふらと向かっていった。

STAGE 8 そうだ 地下、行こう。

ルイズが遅まきながら昼食を求めに食堂へ辿り着いてみると、もうすでにメインディッシュは片付けられ、デザートが並び始める頃合いであった。

だが悪くない。主に精神的な疲労の強かったルイズは、自分の好物である

クックベリーパイでお腹を一杯に満たすことを夢見て、自分の席に着いた。

残念ながら、テーブルの上に自らのお目当てがないことに気付いたルイズは、

ちようど近くを通りがかった黒髪のメイドに声を掛けた。

「ちよつと、そのメイド」

「ハハハハイ、何デゴザイマスカ？」

「クックベリーパイはまだなのかしら」

「も、申し訳ありません！あともう少しで焼き上がる頃だと思えます。

出来立てをお持ちしますのでどうか、どうかご容赦くださいませ
!!」

ルイズはデザート一つに青い顔をしながら対応するメイドを怪訝に思ったが、

まあいいかと考えるのをやめ、今か今かと好物の到着を待ち侘びた。

隣席ではマリコルヌが大口を挙げてアップルパイに齧り付いていた。

パイはみるみるうちにその面積を減らしていった。

そしてパイが無くなるや否や、彼は近くの大皿からケーキをぐっせりと自分の皿によそい、

またたくまにその体積を減らしにかかった。

うぐぐぐぐ。腹を空かしたルイズはその様子に歯噛みした。

だが今はダメなのだ。クックベリーパイの気分なのだ。

この荒んだ、憔悴しきった気分を癒す一口目は、

どうしてもクックベリーパイでなければならぬ。

ルイズの幸福は、そんな強いこだわりをもって成り立つものであった。

.....

ルイズは待った。ただひたすらに待った。

それこそ周囲のことが気にならないくらい一心に、クックベリーパイを思い描いて待った。

だがこない。

クックベリーパイは、未だその甘い香りをこちらに漂わせてはくれない。

待てども待てども届かない。

しびれを切らして広い食堂を見回したルイズは、

ようやく食堂の一角で騒ぎが起きていることに気が付いた。

何やらギーシュが女生徒と揉めているようである。

マルコリヌも今、気がついたようで、これは見物だとばかりにそこからへと駆け寄っていった。

グルメな彼は、デザートを全制覇するだけでなく、他人の不幸という蜜を

味わうことも忘れはしない。これぞ食通の鏡である。

「信じてたのに！」

「最っ低！」

騒ぎというのは、何のことはない、キザ男ギーシュの浮気が恋人らにばれたということであった。

一人はルイズと同学年のモンモランシーで、もう一人は一年の生徒であるようだった。

一年の生徒が悲しみに暮れた様子でトトトと走り去っていったのとは対照的に、

モンモランシーの方は怒りに身を震わせながら、ズカズカと食堂を立ち去っていった。

後には、張り手を受けて頬を真っ赤にし、ワインを頭から浴びてずぶ濡れになった

惨めな男が取り残されているばかりであった。

壮絶な仕置きに、始めは騒いでいた周囲のクラスメイドも、彼へと言葉を掛けかねているようであった。

「か、彼女らは薔薇の愛で方を理解してないらしい・・・」

「そうだよな。薔薇はしゃぶつても、くちケガするだけだし。」

ツツジなら平気だったのに・・・」

「マリコルヌ、君は黙っていてくれないかね？」

普段の彼の態度を知っているルイズにとって、こんなものは

ああやつぱりねとしか言いようのない、いつか起きるだろうと思っていた出来事だった。

彼女は興味を無くし、再び目の前に置かれた皿の上の空白を凝視する作業に戻ろうとした。

しかし今やモグラのように惨めな男の近くに、

先ほどのメイドがオロオロと立ち止まっているのを認め、眉をひそめた。

どうもこの騒動に彼女が何か関わりを持っているらしく、それであたふたとしている様であった。

ルイズは目ざとく、彼女の脇に置かれたワゴンにクックベリーパイの姿を認めた。

早く来い、早く来いとルイズは強く念じたが、その甲斐空しくメイドは来なかった。

彼女はクックベリーパイどころでは無くなったのだ。

「どうしてくれるんだね！ 君がもう少し気を利かせてくれさえしたら！」

「は、はいいいい！ ごめんなさい！」

メイドは大いに萎縮しているようであったが、もつともギーシュの口調は、

叱責というより泣き言に近いものがあつた。二人同時にこつぴどく振られるという体験が

なかなか堪えているらしい彼の背中中、妙に煤けて見えた。

そんなことだから、周りのクラスメイドたちは気まずい沈黙でもつ

て

紅茶の残りを啜る作業に戻り、メイドへの八つ当たりへは見て見ぬ振りをするのだった。

「君のおかげで二人の女性の名誉が！　そして僕の名誉も傷ついたんだ！」

僕は薔薇、その優雅さでレディ達を癒すことが役目だというのに、逆にトゲで彼女らを悲しませることになってしまったじゃあないか！」

「申し訳ありません！　どうか許してください、貴族様！」
だがルイズは違う。

彼の説教とも愚痴ともつかない話が長々と続くのを見て、彼女はその苛立ちを抑えることができなかった。

心底くだらない浮気者の責任転嫁のせいで、至高のクックベリーパイが冷めていくのだ。

溜まったフラストレーションが、彼女の気を大きくした。
ルイズはすつくと立ちあがり、足を前に向けた。

「ちよつとギーシュ！　何馬鹿なこと言ってるのよ！」

一番悪いのはどう考えても浮気したあなたじゃないの！」
「ぐっ！」

「そうだそうだ！」「イケメン死ぬえ！」「ナルシストきもい！」

皆思うところもあったのか、ルイズの発言を切っ掛けに、方々からギーシュを非難する声が上がった。ただし誰が言ったか分からない程度には小声で。

メイドはより一層オロオロしながら、ギーシュとルイズを交互に見つめて震えていた。

ギャラリーの支持を受け、より気を大きくしたルイズは言い放った。

「それに第一、あんた何かの名誉より、そのメイドが温かいクックベリーパイを

運んできてくれるほうがよっぽど大事だわ！」

「「・・・」」

途端にギャラリーは静まり返った。

キユルケがあちやーという感じで頭を抱えている。

ルイズは、何だかわからないが気まずい空気に我慢できなくなつた。

「な、何よ！ 私が何か変なこと言った？」

「あー、君は、君は君はまさか、

トリステインが誇る名門、土魔法と軍事の権威であるグラモン家が一人、

このギーシュ・ド・グラモンの名誉よりも、

たかが、たかがお菓子の方が大事だと、本気でそう言っているのかね？」

そう言った顔は、ひどく引き攣っていた。

彼がいたく怒っていることを察せられないルイズではない。

だが彼女は人に謝ることを知らなかった。

「な、何よ！ クックベリーパイおいしいじゃない！ 至高のおいしいじゃない！」

他の何かがかすむほどよ！」

「貴族の名誉がかすんでたまるものか！ なんたる侮辱、なんたる傲慢！」

ろくに魔法も使えないくせに！ ルイズ、君を許しはしないぞ！

僕が君に貴族の格というものを思い知らせてやる！」

そうやってギーシュはおもむろに杖を取り出した。

ルイズは慌てて答えた。

「き、貴族同士の決闘は、この学院では禁止されてるわ！」

だがギーシュは嘲笑でもって、それに応えた。

「決闘？ 笑わせないでくれたまえ。

これから行うのは決闘ではない。

一人の出来損ないメイジに対するオシオキなのだよ！」

これから始まる見世物に周囲から歓声上がる中、

ルイズは自分の顔から血の気が引いていくのを感じた。

.....

ルイズは撤退した。

そう「撤退」だ。

逃走ではない。

例え逃走だとしても、それは戦略的撤退という名の闘争なのだ。

そもそも魔法の使えないルイズにギーシユの作り出したゴーレムを倒せるはずもない。

だから撤退するというロジック。まさに戦略的だ。

貴族は敵に背中を見せない？

あらいやだ、クラスメイトを敵だなんて、お友達じゃないのオホホホホ

「待てエエエ、逃げるなんて卑怯だぞ!!」

「冗談じゃないわよお!!」

ルイズは全力で走っていた。

「ルイズ様、どうやらお困りのようですね。」

いつの間にかシレッと横について走っていた魔王が呑気に声をかけた。

「追われてるのよ! あんた使い魔でしょ! 何とかしなさいよ!」

「ウーン、土メイジの彼とは仲良くできそうだったのですが、仕方がありません。

何をするにも先ずは時間を稼ぐ必要があるでしょう。

あそこの角を曲がったら死ぬ気で走って一端姿をくりますのです
!」

「その後どうすんのよ!」

「フッフ、我二秘策アリです。

・・・今です!」

二人は角を曲がりきると同時に全力で走り、次の角へと身を隠した。

「無駄だ! ちょっと早く走ったからと言って

このワルキューレたちから逃れられると思うなよ!」

例え彼女らが少しぐらい早く走ろうと、彼女らがどこに向かったか

分からなくなるほど

距離をあけられるわけではない。

そうやってギーシュとそのゴーレムたちが自信をもって次の角を曲がった途端、

彼は足への衝撃と同時に上体の加速を感じた。そして妙な浮遊感が彼を襲った直後、

「ゲフツッ！」

激しく地面に身体を擦り付けることとなった。

盛大にズッコケて、それ以上言葉も出ないギーシュだった。

彼の周りでゴーレムたちが棒立ちになるのを見て、ルイズはようやく息を付いた。

「ハア、ハア、．．．み、見事に引つかかったわね。

こんなところでツルハシが役に立つなんて」

「どうです！ 地面にちよつと溝を掘るだけでこのアリサマ！

自分のチカラを過信する者は足元がお留守になると相場が決まっていますのです！」

「でもこの後どうすんのよ」

「今のはまだ時間稼ぎのための時間稼ぎに過ぎません。

さ、今のうちにもつと距離を稼いで対策のための時間を作るのです！」

ルイズと魔王は、呻くギーシュを置いて、彼の目の届かない遠くへと必死に走り去っていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ルイズ達は、ギーシュと野次馬たちをまいて、今はヴェストリの広場までやってきていた。

「さあここまで来たらもういいでしょ。これからどうするの？」

「このままヤミクモに逃げ続けてもどうせジリ貧です。

ならば問題の根本的解決をハカらねばなりません。つまり脅威のハイジヨです！」

「まさか、ギーシュを倒そうって言うの?!

無理よ！ いくらギーシュがドットメイジだからって、

さつきみたいなのゴーレムを使うのよ。あんたなんかには敵いっこないわー！」

魔王はヤレヤレといった様子で首を振った。

「ルイズ様はまだわたくしがナニモノであるか、よく分かっていないようです。」

「どういうこと?」

「魔王たるもの! レベル1の勇者を! わざわざ屠りに行ったりシナー……イ!」

最低ランクのメイジ相手であろうが、それは一緒です。

魔王たるもの、ザコを蹴散らすなぞ配下に任せればよいのです。

それが魔王の品格というものです。」

「あんたの場合、自ら赴いても簀巻きにされるのがオチでしょうが!

第一、その肝心の配下はどこにいるっていうのよ!」

「フッフ、ルイズ様。それを今からつくるのです」

「つくる? 何を言ってるのよ!」

「……まさか、ギーシュのゴーレムみたいに手下を作れるっていう

の!」

「イグザクExac_{トリー}tly! その通りでございます。」

ワタクシ言いましたよね、ルイズ様にはトクベツな才能があると!

今こそそれを発揮するときなのです!

ルイズ様は錬金の魔法なんか使えずとも、

土くれからマモノを生み出す力をもっているのです! まあ錬金

で作るとイロイロと持つてかれますけど」

「……待ちなさい」

「アレ? ……なんかテンション低いですね、ルイズ様」

「アレ、使うとか言うんじゃないでしょうね?」

「……」

「あの道具、使うんじゃないでしょうね!

平民が汗まみれになりながら使って、土まみれになるアレを!

わたしにこの手を汚せというの!」

「……ルイズ様。世の中、見た目に惑わされてはいけません。」

なぜなら真実を見失うからです。」

「やっぱり、あんた「話をお聞きください！」」

魔王は強引にルイズの言葉を遮ると、力強く自分の意見を展開した。

「改めてこの『杖』を見てください！」

確かに見た目は独特です。類を見ないカタチである以上、

これを杖と認識するのは難しいかもしれません。

しかしこれは破壊神様が振るうことで、不思議なことが引き起こされるのです。

コレは棒状です。特別なチカラを引き出すための道具です。

そのような道具を杖と呼ばずして何と呼ぶのです！

そうこれは定義的に杖なのです！ ツル〇シなんかじゃありません。

仮にツルハ〇だとしても、それはツ〇ハシという名の杖なのです

！」

「」

どこかで聞いたようなロジックだった。

「さあ、時間がありません！ ゴーレムに血祭りにされる前に、

早急にダンジョンを掘り、ゲイゲキ態勢を整えるのです！」

どれだけ頭を抱え込んだところで、ルイズに選択の余地はなかった。

彼女はやけっぱちになって言った。

「くそう・・・墓穴を掘ったわ・・・」

分かったわよ！ その妙なツルハシ使えばいいんでしょ！

この際、穴でもなんでも掘ってやるわよ！」

「お分かり頂けてナニヨリです。必ずやギーシユを撃退してご覧に入れましょう。

まあ、ルイズ様がこの後しくじれば、ホンモノの墓穴を掘ることに
なりますが」

「うるさいっ！」

.....

「それで？ 何から始めればいいのかよ？」

ルイズはもう完全に開き直って言った。

「まずはツルハシをお持ちください」

「・・・」

やっぱりそうでもなかった。

「・・・ツルハシという名杖をお持ちください 「わざわざ言い直さなくていいわよ！」

さっさとよこしなさい！」

魔王へ理不尽な怒りをぶつけつつ、ルイズはツルハシを手を取った。

そのツルハシは、手にする時に思わず身構えるほどの大きさをしていたが、

見た目とは裏腹に、ルイズはまったく重さを感じることがなかった。

「・・・軽いわね」

「それもルイズ様の適性があればこそです。

普通の人を持ったんじやそうはいきません。

何でもイニシエの時代には、岩に刺さったツルハシを引き抜けるかどうかで

本当の破壊神様かを見極めたんだそうです。

では試しにそのツルハシで地面を掘ってみて下さい。」

結局そう使うのかと、ルイズはがっかりしながらツルハシを地面に振り下ろした。

そして、世界が一変した。

「な、なによこれー！」

眼下に、見渡す限りの地下空間が広がっていた。

先ほどまでルイズの視界の全てであったはずのヴェストリの広場

は、

もはや視界の中のちっぽけな一部に過ぎない。

今、彼女の目にはトリステイン魔法学院の誇る5つの塔が、それを取り巻く広大な平原が見える。

そして何より、土で埋まりどこまでも下に続く広大な地下の様子を、

彼女は、鳥が地上を見渡すかのごとく、見通すことが出来た。

「何よこれ、どうなってるっていうの!?!」

ルイズは、このような広い空間の中に自分がいることをつい先ほどまで

意識すらしていなかった。どうして地表に覆われ、普通は見透かす事も、

立ち入ることもないその場所へ、空を見上げた時と同じような広がりがあると思えることか。

なにをどうすればこんな視界が得られるというのか、彼女には説明のしようも無かった。

まさしく、神の視点がそこにはあった。

「驚かれましたか?」

そう!このツルハシはなんと、軽く一振り大地に突き立てただけで、

1メートル四方の穴をポツカリと空けることが出来るのです!」

「そっちじゃないわよー!」

「ああ失礼しました。私としたことがハイリヨが足りませんでしたな。

こちらの単位では0.99998メートル四方ですから、体積にして0.999940001」そんなことより

今私に見えているこの視界は何なのよ!?!」

魔王は、ははあと合点したように頷いた。

「ああ、そっちのことでしたか。それもやはりルイズ様の持つ才能あつてのことです。

地下を縦横無尽に掘り抜けることがツルハシを持つ者の使命です

から、

当然その資質があるルイズ様には、地下の様子も丸わかりになるのです。

だからその2D視点は、技術的に3Dとか無理じゃね？だとか、そもそも

2Dじゃなきや表現出来なくね？だとか、そういう訳ではないのです。

その証拠に、魔王軍は世界征服の第3弾を…3Dとして既に世の一部に知らしめているのです。

VRも出ない内からスゴイ！凄すぎる！ ステマではありません。

ちなみに我らが魔王軍は更なる3D対応の深化を視野に入れ、

近い将来3D視点での展開も考えております。順調に行けば年内には

動きがあるでしょう。二次元で満足している我々ではないのです！

いやでも、2D視点には2D視点の良さというものがあるのです。そういうとこ、ルイズ様には忘れないでいて貰いたいものです、等と訳の分からないことを言い続ける魔王をルイズは白い目で見つめていた。

「そうそう、ルイズ様。大事なことですが、ツルハシはすでに掘ってある場所のとなりなら、

どんなところでも掘ることが出来ます。」

試しに掘ってみるといいでしょう！という魔王の言葉に、何を当り前のことをと思いつつ、

再びルイズがその視界に集中したとき、彼女はまたも驚くべきことに気がついた。

彼女は、視界に収めた広大な地下の、そのどこにでも手を伸ばせるのではないかという

予感がした。手に握りしめたツルハシを、自身から何マイルも離れた場所に

振り下ろせるような気がした。頭では馬鹿馬鹿しい、あり得ないと否定するその考えを、

彼女自身の感覚が否定していた。ルイズが恐る恐るツルハシを振り下ろしてみると、

小気味よいガタツという音と共に、彼女から5メートル程離れた場所が、掘り下げられていた。こんなところにまで手が届く自分は、一体何処にいるのだろうか。彼女は恐る恐る視線をツルハシの先から自分の腕へと移していき、最後に勇気を振り絞って自分の背後を振り返った。

「何してるんですか？ さっきと掘って操作に慣れてください。」

彼女の目には、彼女自身が立っている狭い穴蔵の、土で出来た壁が大きく映るだけだった。

「ルイズ様、細かいことを気にしては、この雄大な大地を見渡すことなどできませんぞ。」

ダンジョン全体を見渡したければ、余計なことは考えずにツルハシへ神経を集中するのです！」

「・・・」

ルイズは、自分が凄い体験をしているんだということは頭で分かっても、

それと同時にこの使い魔らしいテキトーさを抱き合わせで押し付けられた気がして、

何ともビミョーな気分になった。

「まあこれも2D画面ならではのこと、そんなに驚くようなことでは、ゲフンゲフン。」

トモカク、そのツルハシとルイズ様のチカラが合わされば、広大な地中の様子をうかがいながら

モノスゴイ速さでズガガガッと地面を掘り進めることができるのです！

スゴイ！あり得ない！」

「そ、そうよね！ 今、私凄いことしてるのよね！」

「その通りです！ 思い通り、自由自在です！」

「こんなことが、本当に私の力で!？」

彼女は改めて今の出来事を振り返り、ようやく自らの振った力への感動を覚えることが出来た。

そして一度そのことを意識し始めると、彼女の中に止めどない喜びが沸き上がってくるのだった。

初めて

初めて、自分の手で自由に力を振ることが出来た。

「私の手で、こんなことが出来たなんて・・・」

・・・私、今までずっと自分が欠陥品だと思って生きてきた。

ヴァリエール家に生まれておきながら、誰にも顔向けできない落ちこぼれで、

母様や姉さまにいくら叱られても、それどころか心配すらされるようになっても

何も出来なくて、悲しくて、悔しくて「時間がないんで後にしてくれませんか?」

「

穴掘るだけならモグラにだって出来ます。

そんなんじゃないあのゴーレムにギツタンギツタンにされてお終いです。

そうになったら泣くのは私なんですよ!ルイズ様だって道連れで「分かっちゃわよ!」

いいから早く続きを教えなさいよ!」

魔王は満足げな表情を浮かべつつ、彼なりのレクチャーを再開した。

「ルイズ様、地中を掘り進めると養分を含んで緑色になった土があるはずです。

そこを掘ってみてください」

無然とした顔で土を掘っていったルイズだったが、
彼女はまたしても驚きにその表情を崩すこととなった。

「な、なによコレ！」

彼女が掘った場所には、まるで今しがた砕いた岩盤から生れ出たように、

緑色のテカテカした大きな塊がちよこんと現れたのだった。

「無事、魔王軍の配下を生み出せたようですね。

これで魔王軍は一人じゃない！ でも二人と一匹しかいませんけど。

ともかくルイズ様、今ご覧になられたように、養分の溜まった土を掘ると、

こうしてマモノを生み出すことが出来るのです。

それこそが破壊と創造をつかさどるルイズ様のチカラなのです。」

「これが、私の力……！ 土人形を操るのでもなく、どこかから生き物を

呼び出すのでもなく、新たな生命をこうして生み出してしまうのね

！ すごいじゃない！」

彼女の心に再び喜びが戻り始めていた。

「それにこのマモノもこころじゃ珍しそうね！ 私、スライムって始めて見たわ！」

「ニジリゴケです。」

「え？」

「ニジリゴケです。」

「え？ でもこういうゼリー状のモンスターって言ったら「ニジリゴケです」

「……ニジリゴケという名のスラ 「ニジリゴケです」

魔王の頑なな態度にルイズはちよつと引いた。

「……なんか釈然としないわ」

「勇なま世界の一員としてアイデンティティーを手放すわけにはいかんのです！」

それはそうと、このスライム、ゲフン、ゲフン。

ニジリゴケは土の中の養分を吸い取っては吐いてを繰り返すことで、

ダンジョン内での養分の循環を担う重要なマモノです。

まずはニジリゴケを増やしていくところから始めてみると良いでしょう。」

ルイズは、魔王に対して二言三言言いたいのをグツとこらえて、穴掘りに精を出した。

なるほど魔王の言う通り、ニジリゴケは養分の溜まった土に近づくと、その土の養分を吸い取り、こんどは別の土へとそれを吐き出すことが、彼女の地下を見通す目には分かった。

「ルイズ様、こちらを見てください。」

「・・・花?」

魔王のいる方へ目を向けると、奇妙なことに地下であるはずのそこへ、黄色い花が咲き誇っていた。それは何なのかとルイズが問いかけようとしたところで、花は緑色の塊たちへと姿を変えた。そして後には、方々にニジリよつていくニジリゴケたちの姿だけが残された。

「ニジリゴケは養分を蓄えた状態で体力が減るとつぼみになり、いつもより

広い範囲から養分を吸収しようとしています。そこで上手く養分が溜まると、

ああして花を咲かせた後、いくつものコケに分裂し、増殖していくのです。」

コケって花を咲かせるものだったかしらと思いつつ、ルイズは独りでに増えていく

生命の神秘に驚嘆を覚えた。しかし彼女はまた冷静でもあった。

「・・・でも改めてみると、こいつらそんなに強そうに見えないわ」
その緑色のぶよぶよは、ちよつと強く突けばすぐにでも壊れてしま
いそうに見えた。

ギーシュの自慢のゴーレム相手には、ひとたまりもないだろう。

「ええ、まあそうですね。彼らの戦闘力は1。」

おっさんの1／5程度の強さしかありません」

「何よその気色悪い例えは」

「一応、彼らには彼らなりに戦闘で役に立つ場面もあるのですが：説明は後です！今は時間がありませんのでジャンジャン戦力強化を図りましょう！

ダンジョン内のマモノが弱い？ なら強いマモノを生み出せばいいのです！」

「良かったわ。他にもマモノを作り出せるのね！」

「そうです！ そこでこのニジリゴケ諸君の働きが意味を成すので

す。

ダンジョン全体の様子を見てください。

なんだかさつきと様子が違って見えませんか？」

「ニジリゴケが増えたみたいだけど・・・さつきより白っぽい土が増えた？」

「そうです！ニジリゴケがせっせと養分を運んだ結果、栄養価の高い土が出来上がったのです。

この養分がある程度溜まった土をツルハシでちよいと突けば」
「強いマモノが出てくるって訳ね！えいっ！」

ルイズは迷いなくその土を掘った。

その瞬間、奇妙な歯ぎしりのような音が聞こえ、

ルイズの体にゾワゾワツツとした嫌な感触が駆け巡った。

「こ、これは相当ね、気配だけでこんなになるんですもの。

さあ！どんな強そうなマモノが出てきたっていうの？」

ルイズが思い切って目を向けると、そこには頭程の大きさもある、
でっかい「ムシ」がいた。

「イヤーーー!!」

「出ました！それがガジガジムシです。駆け出しユウシヤ相手に隙を突けば、

一匹だけでも倒せてしまう存在です！」

「む、ムシねえ。こんなに大きいし、確かにさつきのよりは強そうだから」

一瞬のことだった。

ちょうど目の前をニジリゴケが横切った途端、ガジガジムシはその大きな顎を

ブヨブヨした膜に突き立て食い破り、ズルズルとその中身を啜った。

ブシユツと飛び散った体液が地面に染み込んでいく。

そうしてガジガジムシは、ニジリゴケをあつという間に平らげると、

何事も無かったようにまたカサカサと歩き回り始めた。

「な！　ちよ、ちよつと！　今アイツ、ニジリゴケを食ったわよ！」

「そりやそうです。マモノだって生き物なんですから食事ぐらいします。」

そういう当たり前のこと、魔王的には忘れちゃあイカンと思うのです。

ニジリゴケと違ってガジガジムシは土中の養分を直接吸い取るこ

とが出来ません。

そこでニジリゴケを捕食することで養分を蓄え、成長するのです。」

「成長って、まさかもつと大きくなるんじゃないでしょうね!？」

ルイズは悲鳴にも似た声を上げた。

「ガジガジムシは変身をあと2回残している・・・その意味が分かりま

すか?」

「変身ですって?」

「そうです。ガジガジムシの成長は、そのサイズが大きくなるという

ものではありません。

貯めた養分で幼虫からサナギを経て成虫になるのです。

でも安心して下さい。ガジガジムシのサナギは時間経過だけで羽

化するのです、

手も足も出ないサナギをバトルに参加させるといふ理不尽な経験

値は必要ありません。

ほら、さつきコケを食べたガジガジムシを見てください。」

見るとそこには白っぽく太いサナギが、ひっそりとダンジョンの片隅にあった。

「い、いつの間に・・・ず、随分成長が早いのね」

「この状態では戦えません、脱皮して成虫になれば・・・」

しばらく見つめるうちにサナギを割いて飛び出してきたガジガジムシには、

先ほどには無かった羽がついていた。

「ごらんの通り、空飛ぶガジガジ、ガジフライに成長するんです！空を飛べるのですばやさがアップ！ 攻撃力・HPもアップし、繁殖までもが可能になるのです。」

さつそくルイズの目の前でガジフライはニジリゴケに貪りつき、一瞬で平らげたかと思うと直後に子ガジガジを生み落とした。

そうしてガジフライはまた別のニジリゴケを求めて飛び去って行った。

「この成長スピードに繁殖力、あり得ない・・・」

「遅いでしょう、ガジガジムシは！」

このままほっとけばニジリゴケを喰らい尽くして

ガジガジだらけのカサカサしたダンジョンが生まれることでしょう。」

「は!? 冗談じゃないわよ！ 何とかならないの!?!」

「簡単なことです。ニジリゴケを補充しつつムシの天敵を作り出せばよいのです。」

ガジガジムシを生み出すよりももっと高い養分を含んで

真っ白になった土はありませんか？ そこを掘ってやるのです。」

「また変なの出てこないでしょうね!?!」

「いやいやガジフライよりも頼みになる良い奴らですよ。」

ヨユーでフツーだと思います、魔界的には」

「・・・不安しかないわ」

しかし掘る以外に選択肢はない。

えい、とルイズはツルハシを振り降ろした。

次の瞬間、甲高いような、しゃがれた様な、そんな鳴き声がダンジョンに響き渡った。

果たしてそこには、青いうろこ状の肌、つぶらな瞳をし、

そして剣と盾を身にまとったトカゲ型の亜人の姿があった。

「・・・良いじゃない。強そうじゃない！」

ぷよぷよしたのとか、虫けらをおつきくしたようなのじゃなくて、
こういう感じのモンスターが欲しかったのよ！

これならギーシユのゴーレムにも対抗できそうね！」

ルイズはトカゲおとことでもいうべきそのモンスターを大層気に入った。

早速生まれたトカゲおとこがガジガジムシをバリツと食い散らかしているのを他所に、

ルイズはブツブツとこれならキュルケのサラマンダー相手にも・・・
等と呟いていた。

「お気に召したようで何よりです。

とはいえ相手のゴーレムは複数。数は力というのが戦いにおける鉄則です。

このマモノにも増えていって貰わねばなりません。」

「こいつも短時間で増えるのかしら？」

「ムシほど簡単には増えませんが。高等魔生物なんで、コケやムシなんかよりも

多少手間はかかります。彼の周りをもうちよつと広く掘ってみてください」

言われたとおりにルイズが穴を掘り、狭かった土の通路に小さな部屋が出来上がった。

するとトカゲおとこは必死になって地面を掘り返し始めた。

そして掘った穴倉にその身を沈めると、ヒーン、ヒーンと苦しそうな声で鳴き始めた。

「ちよ、ちよつと、どうしたっていうの？ 苦しそうだわ！」

「トカゲおとこは卵を産んで増えるので、こうやって巣を作り産卵を行うのです。」

「へえ、増え方もやっぱりトカゲって訳ね。・・・そういえば思ったんだけど」

「何ですか？ルイズ様」

「こいつらの本当の名前はなんていうの？」

確かに見た目はトカゲおとことしか言いようがないけど、

それだとメスはトカゲおんなになっちゃうじゃない。

こいつらにもニジリゴケとか、ガジガジムシミたいな本当の名前があるんでしょ？」

「トカゲおとこです」

「え？」

「だからトカゲおとこなんです」

「・・・なんで折角の強そうなマモノの名前がそんな不憫な感じなのよ。オスもメスもトカゲおとこだなんて、名前の付け方がいい加減過ぎよ」

ルイズはかつこいい名前なら皆に自慢出来たのにとガツカリしてため息をついた。

だが魔王はそんな彼女の様子にはお構いなく、不満そうに呟いた。

「メスなんていません。」

「えっ？」

「だからトカゲおとこなんだからみんなオトコです。」

女手が無いので、彼らは出産すら男手一つでやり遂げるといいう、

まさにシングルフアーザーの鏡なのです。泣ける話ですよね」

「えっ？ 何それ怖い」

「トカゲおとこは勇者が近づけば自ら率先して立ち向かう、

まさにオトコの中のオトコなのです。女なんているはずがありません。」

「どんな理屈よ！ ほら、そのソイツだって卵産んでるじゃない！ ならメスでしょ!?!」

「ルイズ様・・・。魔王は悲しいです。シングルフアーザーの大変さを知っていたら、

そんな心無い言葉を言えるハズがありません。ルイズ様だって、もし運悪くお母さまが

亡くなっていたら、父親が苦勞して、必死にルイズ様に楽しい思いをして貰おうと、

身を粉にして働いて「なんで私が悪いことになってるのよ！」

「コマケエことはイイんですよ！ 男だつていいじゃない、マモノだものー！」

「ええ〜！」

「まあとにかく、細かいトコロには目をつむって戦力増強に励んでください。

もうそろそろ土メイジの彼がやって来ることでしようし。」

「納得出来ないわよ！」

そう言いつつもルイズは残された時間の限り、地中をズカズカと掘り進め、

マモノを生み出しつつダンジョンを広げていくのだった。

STAGE 9 あの日した決闘の勝ち方を僕はまだ知らない

「げっ、ついにやってきたようね！」

ルイズは掘ってきた穴の入り口に立つ、怒りに満ちた顔つきのギーシュを見つけた。

どうやら時間稼ぎに彼を転ばしたことは、怒りのボルテージを高めることにも一役買ったらしい。今や彼自慢のフリルの付いたシャツには、ワインの赤に加えて、土の茶色までもが染みついていた。そんな姿で険しい顔を浮かべるギーシュに、ルイズは不安を煽られるのだった。

「さあルイズ様、せつかくダンジョンを掘つても

我々がその入り口に突っ立っている話になりません。

どこに隠れ……いえフンゾリ返って魔王軍の活躍を眺めるかお決めください。

まあダンジョンの奥が無難ですが。」

「なら特に考えることでもないじゃない」

「いえいえ、これが大事なのです。分かれ道を何本か掘ってどこにいるか決めたり、

わざと最奥部を避けて戦力温存を図ったり……

まあ中にはダンジョンの入り口真ん前に私を置くようなハカイシン様もいましたが。」

「それって何の意味があるの?」

「……まあ、ワザと負ける訳です。」

「負けてどうなるのよ」

「……私が簀巻きにされます。そして私が悲哀のコメントを述べながら

連れていかれるのをニヤニヤしながら楽しむのです……

まさかルイズ様はそんなことしませんよね?」

はい／いいえ

↓はい

「フーン。まあそんなの当たり前なんですけどね。いいからさつさと決めてください。」

「アンタねえ!」

↓いいえ

「え! するんですか!? そんなに負けたいなんて、もしかしてルイズ様って、マゾ?」

「誰がマゾよ! あんただけが入り口に立ってスケープゴートになれば、」

その隙に私が逃げられるんじゃないかと思っただけよ!」

「・・・サドでしたか」

「どっちでも無いわよ!」

「まあいいわ! 無難にダンジョンの一番奥よ!」

「良いと思います。では後はマモノたちが彼を血祭りにあげるのを

ドーンと待つて構えてさえいれば・・・」

「・・・何よ」

「いや、負けそうになったらチマチマとマモノを補充してやる必要があるんで

気を付けてください。まあそんな状況って、焼け石にミズなことが多いですが」

「・・・不安になってきたわ」

「まあしばらくはマモノ達の活躍を眺めましょう!」

STAGE 9-1 抗争の死角こうそう しかく

「どこへ逃げた!」

ギーシュがダンジョンへと勇ましくその身を投じると、中には緑色のツヤツヤした物体が蠢いており、彼を戦慄させた。

「な、なんだこれは!! く、来るんじゃない! あっちへ行け!」

一匹が真つすぐ彼へ向けてにじり寄っていく！

「行け、ワルキューレ！」

彼自慢のゴーレムが槍を突き立てると、ブシユウと音を立ててコケはちぎれとんだ。

「あれ？　なんか弱いぞ」

どこか遠くで少女の悲鳴が聞こえた気がした。

いやしかし、本当に拍子抜けするぐらいに弱かった。

「なんだったんだこの生物は・・・」

今度は彼を無視する様に、目の前を緑色のソレらがのしのと横切つて行つた。

どうやらそれらは何かにぶつかるとまで真つすぐ進むことしか頭がない、

単純な生き物であるらしいことをギーシュは悟つた。

「ああ、何てことだ！」

早くも彼は嘆きの声を上げた。

「土メイジともあろう僕が、地中にこんなたくさんヒシめいてる生物のことを知らなかったなんて！」

.....

「・・・いやいやいや！　普通いる訳ないでしょ、こんな生物！

こんなのがハルケギニア中の地下にいたらたままないわよ！」

「本当ですか？」

「へ？」

「ルイズ様はジツサイに地下を掘つて確かめてみたことがあるんですか？」

「え、・・・ま、まさか、え、私が知らないだけで普通にいるの!？」

「・・・」

「なんとか言いなさいよ！」

.....

「う！　な、なんだこの巨大なムシたちは！」

彼が緑色のうごめく物体をつぶしながらダンジョンを進むと、今度は巨大な白いムシがブンブン飛び回ったり、カサカサ歩き回っている

開けた場所に出た。またも地中にこんな特徴的な虫たちを見つけたことに、ギーシュは土メイジとしてショックを受けるのだった。あえてこちらに向ってくる様子はないが、きつと近づけば攻撃してくるんだろうなあと、ギーシュは不安な気持ちでそれらの大きすぎるムシたちを見つめた。そしてそんな心に呼び寄せられたかのように、ムシの一匹が地を這ってギーシュに近付いた。

「い、行け、ワルキューレ！」

だがガジガジムシのかみ砕く攻撃の方が早かった。

本来ならそんなもの、気にするまでもないことであつた。

しかしギーシュは見てしまった。

ムシが取りついて離れた箇所に、何かを挟り込んだような二つの陥没・・・歯形が付いていた。

「何——！　僕のワルキューレは青銅なんだぞ！」

先手を取られたワルキューレだったが、今度はこちらから槍で薙ぎ払うと、

ムシはバラバラに砕け散った。

またどこかで少女の嘆き叫ぶ声が響いた気がした。

なぜかギーシュの脳裏に、それをなだめるマガマガしいあの使い魔の姿が思い浮かんだ。

また一撃じゃない！

！
落ちて着いて下さい。戦いは数だということをご覧に入れましたよう

ギーシュはブンブンと頭を振って、余計な考えを振り払った。

いや、こんな臆病ではいけない。

確かに前に進めばムシだらけだが、僕のワルキューレは今度も簡単に相手を倒したはずだ。

「ムシにやられるワルキューレではないぞ！」

ギーシュは意を決してワルキューレを突撃させた。

3匹のガジガジムシがワルキューレを取り囲み攻撃を始める。

ワルキューレは一匹ずつムシを仕留めていったが、

その都度、ふらふらと近付いてきた別のムシが攻撃に加わった。

ムシにまとわりつかれたままの自慢のゴーレムの姿を見ていられなくなった彼は、

もう一体ワルキューレを召還し、虫たちを着実にバラバラにしていった。

その場所のムシを倒しきった頃には、ワルキューレの美しい鎧は幾度となくその巨大なアゴで噛みつかれ、傷だらけになっていた。探せばなんと、穴が空いている箇所すらあった。

「ほ、僕のワルキューレがこんなざまになるなんて！」

ワルキューレはしばらくニジリゴケをつぶしてつき進んだが、
またもガジガジムシの群れと遭遇すると、その幾多の噛み付きを受け、崩れ去った。

「こんな攻撃、生身の僕が食らったら……」

いや、そうならないための魔法であり、ワルキューレであるはずだ。何より、あのゼロのルイズに辿りつくまでもなく、恐れをなして引き返すなど、皆に笑われてしまうのではないか。彼は、ともするとこみ上げてくる不安を必死に抑え込みながら、足を前へ前へと進めた。「まだまだ、まだ魔法力に余裕はある。今以上に強い奴が出て来さえしなければ、

こんなムシはオソルルに足らず！ ……ん？ ……なんだこれは？」

ギーシュは丁度彼の傍らの、目立たぬ穴の隅っこに、細長くてブヨツとした、

白く大きな塊を見つけた。

「この色どこかで見たとような……」

遠くからムシが近づいて来るのが見えた

「ああ、あのムシの色とそっくりじゃ ない か」

塊がバリバリと音を立てて裂けた。

「うわああああああ！」

中から這いずり出てきたのは、羽こそ付いてはいるが、見間違いよ
うの無いあのムシだった。

ギーシュの気が動転している間にもガジフライはワルキューレへ
猛烈に噛みついた。それは地を這う何匹ものガジガジムシとて一緒

のことだった。

「こうなったら2体追加だ！ 行けワルキューレ！ そしてその力を
見せつけるんだ！」

3体がかりになったワルキューレは流石に強く、ムシたちを次々と
蹴散らしていった。

しかし先に出していたワルキューレの傷は深く、その戦いの最中、
土にその身を横たえることとなった。その後、ギーシュが再びワル
キューレを追加し、傷の浅い3体を使って用心深く進むようになる
と、落ち着きを取り戻した彼の的確なコントロールもあり、ガジガジ
ムシ・ガジフライは見る見る内に蹴散らされていった。

「僕のワルキューレに不可能はない！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ど、どうするのよ?！」

「所詮はムシけらか……。いくら集まっても烏合の衆では意味がない
ということですね。」

「数の力はどうなったのよ！」

「まあまあルイズ様。良いカードはここぞという時に切るものです。

いでよ！ トカゲ軍団！」

「クワワアーー!!」

「魔王軍の誇る精鋭！ ダンジョン戦闘の華であるトカゲおとこたち
よ！」

その力を木っ端メイジに思い知らせてやるのです！」

「クワワアーー!!」

トカゲおとこは、見ているルイズが惚れ惚れとするような勇ましい
鳴き声を上げた。

「ついに見れるのね、その雄姿を！ さあ行くのよ！」

「クア？」

「あ、ちよつとどこ行くのよ！ ギーシュはそっちじゃないわよ?！」

「クアワアーー!!」

「言うこと聞きなさいよ！」

「クアワアーアー!!」

「ルイズ様、知っていますか？」

「何よ！ 今私はこいつらの指揮で忙しいの！」

「キホン、爬虫類というものは、飼い主に懐かないものだそうです」

「そんなどうでもいいこと・・・え？」

「つまり何が言いたいかというのですね、例えルイズ様の手によって生まれた

可愛いトカゲおとこ達であろうと、一度生まれたら彼らは彼らなりの本能に従って

生きていく、そういうものなのです。あれやこれとルイズ様が命令しようとしても、

言うことを聞いてくれはしないでしよう。」

「何ですって！ それじゃあどうやって戦えっていうのよ！」

「そこはルイズ様の裁量次第というものです。」

少なくともトカゲおとこは縄張りに侵入した者に目がけて突っ込んでいきますから、

上手く彼らの住む場所に勇者を誘導し、戦いの場を用意してやるのです。

ルイズ様はただ地中を掘って魔物を出しまくるだけでなく、そういうマネジメントを

意識して襲撃者を迎撃できるダンジョンを構築せねばならないということですね」

「そんな・・・いや、ちょっと待ちなさい。」

さつきアンタ、トカゲおとこに向けて掛け声かけてたじゃない！

何でアンタはそんなこと出来るのよ？」

魔王はふっと、得意げに息を吐いて答えた。

「天才ですか？」 「ぶっ飛ばされたいようね！」 「いやヤメテ！」

私だって伊達にマモノしてないのです。魔王なのです。

演説でバーンと聴衆を沸かせて地上侵攻するぐらい訳はないのです。

諸君！ 私はダンジョンが好きだ！ とか言って鼓舞すると大変効き目があります。

でもルイズ様。今はその時ではないですし、彼らには彼らの生活があるのです。

何から何まで従わせることはどちらにせよ不可能なのです」

「そうは言っても、苦勞して生み出した人間の私より、

眺めてただけのアンタの話を聞いてくれるって訳ね。はあ・・・」

「まあそう落ち込まないでください。彼らとて必死に戦い、それが結果的に

ルイズ様のためとなることに変わりはないのです。ルイズ様はルイズ様で

彼らを戦力として利用し、彼らは彼らで一族の繁栄のために破壊神様を利用する。

こうしてマモノとルイズ様との間にマガマガしきWIN—WIN関係が築かれるのです」

「使い魔主従の信頼関係とは程遠いってことがよく分かったわ。」

「えっ？しんらい、かんけいですか？」

魔王は自分とルイズを交互に指さしながら頭を傾げた。

「・・・」

ルイズは養豚場の豚を見るような冷たい目で魔王を見つめた。

たじろいだ魔王は、慌てて弁解を始めた。

「ちよつとルイズ様にはきつ過ぎるジョークだったようです。ルイズ様の私を見る目は

ともかく、こう見えても私、ルイズ様のことは立派な主様だと思っているのです。」

「なによ急に！ そんないきなりおだてるような真似しても無駄なんだからね！」

そう言いつつもルイズの顔は少し満足げだった。

「いえいえ、ルイズ様は本当に立派だと思えます。

将来素晴らしいお方になられるに違いありません。

主に破壊神的な意味で。」

「どーいうイミよそれ!!」

.....

ギーシュが開けた場所に出ると、その方々で野太い咆哮が一斉に上がった。

「クワァー!!!」

「な、な、トカゲ亜人の群れだとおおお!!!」

トカゲおとこ達はその目をキラリと輝かせると、一斉にギーシュに向かって突進していった。

鈍く光る剣と丸い盾を手にした、一目でわかる武装スタイルがギーシュを恐怖のどん底に陥れた。

「こつちへ来るなあああ!! ワルキューレ! 全機突撃いいいい!!!」

ギーシュは咄嗟の判断で、残された魔法力の限りを尽くしてワルキューレを追加し、戦列に加えさせた。そうして隊列を組んだワルキューレに、トカゲおとこの群れは勢いよくぶつかっていった。

「クワァー!!! クワァー!!!」

「.....」

亜人の鳴き声に交じって、剣同士のぶつかり合うガチャガチャとした音が響き渡る。

ゴーレムは喋ることを知らないため、しきりに鳴くトカゲおとこの声ばかりがダンジョンに響き渡った。

「うわああああ!!! 踏ん張れ! 負けるんじゃない!!!」

ギーシュはワルキューレの隊列がトカゲおとこたちに押されるたびに、小さな悲鳴を上げた。

ワルキューレは全身青銅で出来たゴーレムであり、複数を操れば一個小隊すら相手取れる高い戦闘能力を誇る。そのワルキューレが隊列を組んだ今、*「彼女ら」*の力は最大限に振るわれようとしていた。これこそが軍人家系の出ならではのギーシュの自慢である。しかし今回は相手が悪かった。相手は野生の力を剣の技に注ぎ込んで生きる種族。型にはまらず、それでいて鮮やかな彼らの剣技が、教練のお手本のようにきれいに武器を振るおうとするワルキューレ達の動きを翻弄した。そうして両者が切り結ぶ内に、ワルキューレはいたるところへ剣を受け、凹んでいった。戦乙女の身体には少しずつびびが入

り、手の先から砕け散り、崩れ落ちていった。だがワルキューレも全力を尽くした。トカゲおとこの方も、一匹、また一匹と数を減らしていったのだ。ギーシュが恐怖に打ち震えつつ見守る中、最後に立っていたのは……

「クワアアアアアアア!!!」

「いやだあああ!! 死にたくない! 死にたくないいいいい!!」

満身創痍のトカゲおとこがよろよろとギーシュに近づく。

それを目にして、彼は自らの死を悟った。

彼は自分の今までの愚かな行いを激しく悔いた。

ああ、何で僕はモンモランシーの愛情を裏切り、

そしてケティの純情を踏みこじる不誠実な真似をしてしまったのだろうか。

そしてああ、君もだ。君には何にも主らしいことをしてやれなかったね。

こんな不甲斐ない主で本当に済まない。

僕はもうダメだが、君は元気でやっておくれよ。

「ああ、愛しのヴェルダンデー!」

「モグ?」

「ああ、こんなときに幻聴まで聞こえてくるだなんて。

だが幸せだよ。君の声を聴きながら眠りにつけるというのは……」

「クワアアアアアア!」

ヴェルダンデーはトカゲおとこの野太い鳴き声にビクツとしつつも、主の危機を悟ると瞬時に穴を掘り、その爪に主の身を引っ掛けて逃げ出した。

彼はギーシュの使い魔。

彼はジャイアントモール。

巨大土竜の手にかかれば、道無き土中に穴を空け、

縦横無尽に地中を駆け抜けることなどたわいもないことだった。

つまりそれは、破壊神の絶対的優位、破壊神の、破壊神による、破

壊神だけの穴掘り、

もといダンジョン作成という常識が崩れた瞬間だった。

古来、騎兵が銃兵に敗れ、塹壕が戦車に突破され、軍艦が航空機に沈められていった様に、

最強の神話が終わろうとしていた。

ユーターも、カズヲも、ああああや****すら倒してきたダンジョン戦略の根底が今、覆る。

新たな時代の幕開けだ。

「な、な、なんたるチート!!　これがゲームと現実との違いという訳ですか!?!」

「ちよ、ちよつと、もしかしてこっちに近づいてきてない!?!」

ヴェルダンデは鼻が利く。やぼったいマモノひしめく通路を上手く避け、

新たにトンネルを掘り進めて悪の親玉に近づいたのであった。

「どうすればいいの!?!　ねえ!　どうすればいいの!?!」

「ははは・・・掘っていいのは、掘られる覚悟のある奴だけだったというわけですか・・・」

勇なまの時代も、これでおしまいです・・・」

「しっかりとしなさいよー!!!」

ボコつというような音とともに、突如として通路に穴が開いた。

鼻をひくひくさせながら、巨大モグラ悠々の登場である。

「あばばばば」

「モグモグ?」

ギーシュは、しばし何が起こったのか分からないような呆けた顔をしていた。

しかし慌てふためくルイズたちを目にし、やっと事態を把握した彼の顔には

不敵な笑みが浮かんでいた。

「ゼロのルイズ!　君たちの負けだ!」

ギーシュはぎよつとした。

ドヤ顔で勝利宣言した途端、ルイズの使い魔がアツという顔をする
と、何事かルイズに囁いた。

そしてルイズの雰囲気はガラリと変わったのだ。

主に、マガマガしい意味で。

「・・・ギーシュ」

「な、なんだね！ 君たちのダンジョンは突破されたんだぞ！ 潔く
負けを認めたまえ！」

「まああんたも落ち着きなさいよ」

その顔は魔王含めニヤニヤと笑っていた。

「な、何を余裕ぶっているんだ。」

「なにか忘れてないかしら？」

「何だと？」

ギーシュは不安になり、今までのことを思い起こしたが、心当たり
はなかった。

「負けを誤魔化そうとしても無駄だぞ！」

「貴族の決闘は！」

ルイズが声を張り上げた。

「杖を落とした方が負け、よね？」

「これを決闘と見なして良いならな！ それに僕の杖はこの通りだ
！」

「でもね。私思うのよ。たとえば杖を落としてなくて、あんたがピンピ
ンしていたとしてもね」

するとルイズを遮って魔王が声を張り上げた。

「今、本当のゼロになっている相手に負けるはずがないのです！」

「ゼ、ゼロだと？ ふん、僕は君の主と違ってドットだ！」

そりゃあラインやトライアングルには見劣りするだろうが、ゼロの

敵ではない！」

「それでもよ。だって、今言ったのはそっちの方のゼロじゃないもの。」

「何だと？」

怪訝な顔をするギーシュにルイズは冷酷な事実を突きつけた。

「あんた今、魔法力は残ってるのかしら？」

「うっ！」

そうだった。魔力は全てワルキューレに使い果たしたのだった。

「ふふふ、普段はアンタが私のこときんぎんバカにしてるけど、

今やアンタの方がゼロって訳」

ギーシュはルイズから立ち込めるマガマガしい気配にたじろいだ。

「だ、だが僕だって男だ！ 魔法がなくても君に負けたりなんかしない！

それに使い魔がついている！」

「そのジャイアントモール？ あまり戦いに向いてるようには見えないわよ？」

さつきだって満身創痕のトカゲおとこからすら逃げ出してたじゃない」

「それは君のヒョロツとした使い魔君にだって言えることだ！」

「まあ使い魔は戦力外としてもね？」

あんたが魔力切れな以上、その手にしている杖は今やただの棒切れなわけ。」

「な！ メイジの誇りたる杖になんということを！」

それに君の手にしている杖だって、魔法を使えないならただの棒切れ、……」

ギーシュは気付いた。彼女が持っているのは杖ではない。

確かに棒状で持ち手があるが、その先には鈍く光る尖った金属がついていた。

「メイジの誇り、ね。これを持ったことで何か自分の大事にしてきたものが

台無しにされたような気がしてたんだけど、そういうことだったの

ね・・・

でもこれにも良いところはあるのよ?」

ルイズは穏やかに語り続けた。

「実際、魔力なんか使わなくてもね」

そう言うのと彼女は重そうなツルハシを軽々と上段に構え・・・

「あんたの頭をカチ割ることぐらい訳はないってわけ」

にっこりと笑った。

「覚悟はいいかしら?」

「ヴェルダンデーーーー!!!」

「待ちなさい! このナルシスト勘違いバカ!! よくも追い掛け回してくれたわね!!!」

ヴェルダンデは主の求めに応じ、物凄い勢いで逃げ道を掘り進めた。

だがギーシュには信じがたいことに、ルイズのツルハシは彼女の手を離れ、彼らをつつき殺すように高速で震えながら彼らに追従していくのだった。

「うおおおおお、そんなバカなああああ!!」

「まちなさい!!!」

ギーシュが命からがら地上に辿りついたとき、すでに彼は息も絶え絶えになり、そのまま白目をむいてぶっ倒れた。普段の優雅な印象はなく、身に着けたシャツはワインの赤いシミが付いていることなど分からないほど、土まみれのボロボロになっていた。一方ルイズとその使い魔は、やはり土まみれではあったが、堂々とした態度で踏ん返り返りながら広場に姿を現した。野次馬の学生達はみな騒然とした。もはや誰の目にも、勝利者が誰であるかは明らかだった。

「まさか、ギーシュが敗れるなんて!」

「あの噂、もしかして本当だったのか?!」

「なんだあの噂って?」

「ああ、実はこの学院の使用人が話しているのを小耳に挟んだんだ。

あのゼロのルイズは・・・実はホンモノの破壊神だったんだよ!」

「「な、なんだってえええ!!」」

「普段、魔法を爆発させているのはワザとなんだ。

あいつの抑えきれない破壊衝動をあの爆発で紛らわしているらしい!」

「う、嘘だろ! おいそこの平民!」

「は、はい、何でしょう!」

乱暴に呼びつけられ、黒髪の少女は急いで彼らのもとに駆け付けた。

「お前たちの間で、あのゼロのルイズが破壊神だといううわさが広まっているのは本当か!」

シエスタはガタガタと震えて答えた。

「あの恐ろしくマガマガしい使い魔が自慢げに語っていました!

自分はその方と一緒に世界征服をするために呼ばれた魔王なんだと!!」

「何だと! まさか本当だったのか!」

平民たちの噂は、ゼロのルイズが勝利したという意外なニュースとともに、

あつという間に学院の生徒たちへも広まっていくのだった。

「ふう、なんとか負けずに済んだようです。」

「もう、本当にギリギリだったじゃない!」

口では文句を言うルイズだったが、彼女は皆の驚くような視線を身に受けて、

大変満足そうであった。

「・・・ですが、ルイズ様。本当はギリギリ以下だったのですよ?」

「へ? どういうことよ?」

ルイズはこの使い魔ならもつと浮かれるものだと思っていただけに、

意外に思いながら言葉を返した。

「今回は相手が勝手にビビッて逃げてくれましたが、ここだけの話、ツルハシで仲間のマモノをつつくことは出来ませんが、敵だどつつき殺す

ことは出来ないのです。それは召喚されたゴーレムや使い魔でも同じことです」

何でもオトナのジジョウとかいうやつがそれをジャマしているらしいです、

と魔王は悲しそうに告げた。

ところがルイズはそれを聞いてもああそんなこと、とでもいうような顔をした。

「ならやっぱり、勝ってたんじゃない」

訝しむ魔王に彼女は天使のような微笑みを浮かべて、こう言った。

「だってギーシュはクラスメイト。お友だちでしょ？」

魔王はルイズの心の広さにいたく感じ入り、より一層 彼女に尽くしていくことを

心に誓ったのだった。

STAGE 10 百エキュートの悲劇はここから始まった

「あんたもようやく私の役に立ったわね」

「そんなに照れずとも、もつとこの私をスナオに褒め称えてくれていいですよ？」

「調子乗ってんじゃないわよ！」

ルイズはギーシユとの一戦を終え、周囲の自分を見る目が少しずつ変わってきているのを感じていた。今まで何かにつけルイズを嘲笑してきた者たちの多くが、彼女を見かけると不安げな表情でひそひそ話をするようになった。さんざんバカにしてきた分、きつと彼らは仕返しされる恐怖に打ち震えているのだろう。まあ、私はあんたたちと違って器が大きいし？ ひざまずいて頭を地面に擦り付けるだけで、許してあげなくもないわ！ そうルイズは思っていた。しかし学院の用人たちからも妙に怯えられたり、過度に丁寧な応対を受けるようになったのは頂けない。自信を付けた私から、他の生徒にはない大貴族のオーラが出てしまうのは仕方がないことかもしれないが、自分は特別扱いされるためにこの学院へ来た訳ではないのだ。ルイズは改めて自分の生活に転機をもたらした己の使い魔を見つめた。

「むうう……」

「な、なんででしょうか？」

このヒョロヒョロ亜人は、嘘か真か分からない大言・狂言を吐くのが忌々しいところである。だが、こいつは確かに主の身を守る役に立った……予想外にも、使い魔としての主たる務めを果たした。ならば、自分も主人らしく何か報いてやる必要があるのではないだろうか？

ルイズはそう考えた。

「明日は虚無の曜日だし、街にでも出かけようかしら……」

「！…この学院の外にお出かけですか？」

魔王はルイズの言葉を聞いて、その赤い瞳をらんらんと輝かせた。

それを見たルイズは、改めて自分のこれから下す判断が間違っていないことを確信した。

「いいえ、あなたは留守番よ！」

「ガーン!! 何ですか！ ギーシュはちゃんと倒したじゃないですか！」

話が違います！

プ

ロツト的な意味で！」

「誰がいつあなたに街まで連れてくなんて約束したのよ！」

少しは自分の容姿も考えなさい！

アンタなんか、街中に連れていったら一発で監獄行きよ！」

だが魔王は大して気にするでもなく、別のことが気に掛かったようだった。

「監獄ですか……マガマガしい響きがたまりません！」

知ってますかルイズ様、今、魔界では監獄見学がブームなのです」「監獄見学？」

「そうです。有名な犯罪や事件に関わった人物にゆかりがある監獄は特に人気が高く、

多数のツアーが組まれているほどなのです。他にも若い頃に監獄に慣れ親しんだ世代が、

大人になってから童心に帰って楽しむ需要もあり、

魔界全土の幅広い世代でブームとなっているのです。

根強いリピーターも多く、ツアー期間も普通の観光より長めなのが特徴です。

三食が付くことからお年寄りにも大人気なのですよ？」

「トリスタリアにはチェルノボーグがあるけど……」

あんな物々しい建物を見て楽しむなんて、物好きもいたものねえ……」

ルイズは呆れたような声を上げた。

「いいえ、監獄の外観なんて飾りです。偉い貴族にはそれが分かるのですよ。」

やはり通としては檻の内側から眺めないと……」

「う、内側？ そんなところまで入れさせて貰える訳？」

「はい。ただこれ、ツアー経験が豊富で計画性がないと、数か月のつものプランが

一生プランになったり、選択不可のオプションまで付いてきて大変なのです」

「オプション？ 何があるっていうのよ？」

「やっぱりメジャーなのは首ブランコとか、足元キャンプファイアールとかですかね。」

沸騰した湯に浸かって茹で上がった身体を、古代の哲学者があおつたという

毒ニンジンドリンクで、心臓ごと冷ますのはたまりません！」

「な！ な、何がオプションよ！ 何がツアーよ！」

それってただ収監された挙句、処刑されてるだけじゃない！

あんた、絶対に留守番よ！ 道連れで捕まったりしたらたまつたもんじゃないわ！」

「はあ、セツカク休日にも骨を休めることが出来るかと思つたのですが……」

「土の下に骨を休めてどうすんのよ！」

果たしてこんな使い魔のために、本当に何か買ってやる必要はあるんだろうか？

ルイズは本気で悩み始めた。

.....

「はあ、従者ではなくて、使い魔に剣でございますか」

「そうよ。出来れば持つて強そうに見えるのがいいわ！」

「するってえと、何ですかい？ その使い魔様とやらは、よほど剣の栄える立派な身体を

お持ちなんでしょうなあ。この店でも、とつておきのお見繕い致しますませ？」

「いいえ、ヒョロッヒョロの貧弱野郎だから、せめて装備で誤魔化せるよう、

強そうなのが欲しいのよ。だからあんまり大きくて太いのとかは

無しね」

「……ちよつと見繕いますんで、しばらくお待ち下せえ」

武器屋の主人は、少女に背を向けた途端に、はあとため息をついた。初めは、小娘とは言え貴族が、それも買物に來たと知って喜んでいたので。最近では、貴族相手にも劍が売れるという。何でも世間を賑わせている盗賊フーケへのせめてもの対策に、下仕えの平民にも武器を、ということらしい。またただの平民でも帶劍して侍らせておくと見栄えがいいことから、今、宮仕えの貴族の間では空前の劍ブームが起きていた。だが彼の店は城下にあるとはいえ、薄汚く悪臭漂う路地裏を通らねば入れない。そんな店にわざわざ足を運ぶ貴族は皆無であり、またもし仮に下仕えの平民が代わりに買いに來ても、今度は貴族らしい羽振りの良さを期待できなくなるのだった。そんなことから、彼はルイズが客だと分かった途端、慣れない敬語を必死に使って、彼なりに丁寧な接客を開始したのだった。だが主人は間もなく、相手が貴族だということを加味せずとも、彼女が十分にめんどくさい客であるということに気が付いた。

「何が強そうな劍だ！ しかも持ち主がヒョロヒョロって、どうすればいいんだ！」

せめて使う本人も連れて來ていたら少しは見繕えるものを！」
「気に入らないものを渡せば文句を言われるだろうが、とはいえこんな要求に頭を悩まし続けていてもしょうがない。主人は取りあえず強そうかどうかは度外視し、武器屋としてセオリー通りのおすすめてを紹介することにした。」

「このレイピアなんかよく売れてますぜ？」

貴族の方が下僕にと買われるやつでさあ」

「私が劍を買ってあげるのには、下僕じゃあなくて使い魔なのよ」
「おっと、これは失礼致しやした。じゃあこれなんかどうです？」

「この持ち手のところの、金のメッキがポイントでさあ。」

「少しのことですが、印象がかわるでしょう？」

「確かにさっきのより見栄えがいいけど……」

「この程度の違い、あつて無いようなものだわ。」

もつと違うのを見せてちょうだい」

「へえ、そういうことなら……これなんか良いですね？」

見て下せえ、ここの細工を。なかなか凝ってるでしょう。

先ほどのより高くはなりますが、これを身に着けさせれば、

その使い魔様とやらも凛々しく見えること間違いなしでさあ」

さあ、これで決まれ！ 主人はそう祈った。

「うーん……あんまり立派すぎてもダメよ。

これはあくまで、使い魔がやって当たり前前の義務を果たしたことに
対して、

私が相応に報いてあげるだけなの。

見た目だけでもあんまり良さそうなのを買ったら、

まるで私がいっくに結構感謝してるみたいに思われちゃうじゃない
」

「……ええと、つまり必要最低限の、普通の剣を買い与えようって訳
じゃあない。

だからちよつとは気の利いたものを買いたいけれど、別にプレゼン
トって程ではない、と

そういうことですかい？」

「その通りよ。さあ、私の都合にあった丁度いいものを持ってきて
ちょうだい！」

「(煮え切らねえ要望が一番困るんだよ！)」

店主は心の中で愚痴を吐いた。

どうしたものか。

このまま漫然と店の剣を見せていっても、この手の客は何かにつけ
文句を言ってくる。

そして散々悩んだ挙句、よく考えてから決めると言っただけ店を出るの
だ。

そうしたが最後、まず戻ってくることはない。

本人は真面目に選んでいるつもりだから、下手な冷やかashiより性質
が悪い。

そして何か売れたとしても、どうせ剣一本分の利益しか出ないの

だ。

とは言え、彼も商売人である。客を前にして、金貨を諦める真似はしない。

「(中途半端なものを望むってことは、きつと本人ですら、どんな剣が欲しいのか分かってないに違いねえ。さっきの強そうなのがいいって要望も怪しいもんだ。)」

主人は剣を掻き分けながら、必死に頭を回転させた。

「相手はずぶの素人だ。しかも本人が使うって訳でもねえし、大して興味も持ってねえ。

普通の客が気にする切れ味とか、見栄えとか、値段とか、そういうことをアピールしても

この娘にはあんまり意味がねえ。

大事なものは、ちよつとは気を利かしたものが欲しいってところだ。なにも考えずに買ったわけじゃねえっていう、それが分かる品って

ことが重要なんだ……)」

「ねえ、まだなの？」

「へえ！ 必ずお求めのものを見つけ出して見せますんで、もうちよつとばかりご勘弁を！」

主人は店中を見渡した。この際、剣以外も視野に入れるべきだろうか？

少し珍しい武器なんか、案外行けるかも知れない。

ふと彼の目に、乱雑に積み上げた剣の山が目に入った。

「ダメだ！ あれらは格安なだけが売りだ！

いくら実用に耐えるからって、そんなものこの娘は求めちゃいねえ！……！)」

剣が、一瞬だけ動いたような気がした。

主人の頭に、たちまち閃くものがあつた。

「(あいつだ！ あいつがいた！ 取りあえず普通の剣と比べりや珍しい。)

だがそこまで珍しいかと言われるとそうでもねえっていう、そんな微妙過ぎるレアさ！

そしてそこまで立派な品でもねえ。何せ見た目も中身もアレだからな。

「だが実用にはしつかり耐えられるはずだ。」

正直リスクは高い。あの剣が今まで売れ残ってきたのには、それなりの訳がある。だが今はそれが武器になり得ると主人には思えた。そしてあの娘が少しでもあの剣に良いところを見つけてくれれば、後にはあの破格の安さが購入を後押ししてくれるはずだ。行くしかない。主人は賭けに出た。

「少し、貴族様のお求めのものと違うかもしれないませんが、

こんなのも考えてみてはいかがですかい？」

「今度は長剣？ でもこれも普通な感じね。」

私、みんなが買つていくようなのは嫌よ」

「まあ、見ていて下せえ。やい、デル公！」

「……」

店を沈黙が包み込んだ。

ルイズは主人を不審な目で見つめた。

「やい、デル公！ さっさと返事しろ！」

再びの沈黙が、店を包み込んだ。

ルイズの主人を見る目が更に変化しそうになったところで、
ようやく一つの声が主人に言葉を返した。

「……俺は嫌だぜ」

「ふん、とつとと返事しろってんだ」

主人は悪態をついた。

「これって……もしかしてインテリジェンスソード？」

ルイズがその剣をまじまじと見つめ出したことに、主人は手応えを感じた。

「はい、そうでございませう。少しは珍しいでござんしよ？」

ただの剣よりちょっと価値がありそうな感じで、

かつ人への贈り物として見ると大分残念な感じの剣でさあ」

「でも、やっぱインテリジェンスソードなんて、特別すぎないかしら？」

「いえいえ、そうでもないですぜ。」

喋れるからって有り難がられるより、迷惑がられることの方が多いもんでさあ。

それに見て下せえ、こいつ刃にこんな錆が浮いてるでしょう？

こんな剣、特別でも何でもありませんぜ。

いや、何、切れ味は砥ぎ次第でどうにでもなるってもんです」

「おい！ 俺は嫌だって言っただろうが！

剣のイロハも知らねえ貴族の娘っ子なんかを買われたくねえ！

何が強そうな剣だ！ 本物の剣つてのは見世物なんかじゃねえんだぜ！」

「失礼な剣ね」

「へえ、確かに。ですが大貴族様ともなると、何でもあえて自分を馬鹿にしたり、

茶化したりする道化師を雇うものだそうじゃあないですか。

人じゃありませんが、そういうのを雇うことを思えば悪くない買い物だと思いますぜ？」

「おい！ このデルフリンガー様を道化扱いとは何事だ！ 剣の錆にしてやるぜ！」

「うーん。 ……確かにあいつの話し相手にもなって良いかも知れないわね。」

案外、立派な剣を買って帰るより喜ぶかも……」
「聞けよ！」

「そうでしょう、そうでしょう！ まあ、どうしてもうるさいと思ったら、

こうやって鞘に入れば大人しくなれますあ」

「いいか、俺はヒョロヒョロの男に振られるなんてのは絶対にごめ……」

主人が剣を鞘にぴったりと仕舞うと、途端に騒がしかった店内が元の静けさを取り戻した。

「……確かに見どころはあるわね。でも錆が浮いてるのはやっぱり……」

「まあまあ、お待ち下せえ。そこは当然私も勉強させてもらいまさあ。
100エキューでいかがです？」

ナイフなんかよりはずっと高いですが、剣としては破格の安さでさあ」

「なんでそんなに安いなのよ？」

「この口の悪さですからねえ。客にケンカ売ることもあって、
店に置いとくだけでも苦勞してたんでさあ。」

ですが、そこを差っ引けば悪くない買い物ですぜ」

ルイズはしばらく額に手を当てて考え込んだ。

そして納得したように頷くと、短く口を開いた。

「買ったわ」

「毎度」

主人は重い剣を必死に抱えながら店を出ていく少女の後姿を見て、
額は少ないが久しぶりに良い売り物ができたと、小さな満足感に浸る
のであった。

「あんな剣を有り難がる奴の気が知れねえぜ」

.....

「これは！」

「あんだ、人から見たら使い魔っていうより従者って感じだし、

これでも持てば少しは恰好つくでしょ？」

魔王はルイズが買ってきた一振りの剣をまじまじと眺めた。

「いやはや、私のこと評価して頂いて有り難うございます。」

まさか私に魔剣士デビューの日が訪れようとは……！

ショージキ、剣士系魔王というコイビトが殺されたり、浮気され
た挙句自殺されたりと、

悲惨な目に遭うイメージしかないんですが、すでにムスメまでいる
私に死角はありません！

これで、私のカリスマが溢れんばかりに満たされ、零れ落ちていく
ことでしょう。

まあ、本当は剣のココロエなんかないんですが」

「分かってるわよ。だから見た目はそこそこに、ちよつとは珍しいものを買ってきたわ」

「珍しいもの？　もしかしてこの剣、いわくつきか何かなんですか？」
「いわくつきって、アンタ……まあ、いいからこの剣を見てみなさいよ」

そう言つてルイズは重たそうにしながら剣を引き抜き、その刀身を露わにした。

「……あの」

「何よ」

「これサビてませんか？」

「いいのよ。この剣は、あんたへの褒美つてだけで買ってきた訳じゃないもの。」

“身から出たサビ”、これはホラ吹きなあんたへの教訓よ！

「はいっ」

「いいこと？　あんたはこの先、この剣を見る度に、今から言う話を思い出しなさい。」

このハルケギニアの遙か東、聖地すらも越えた先にあるという口バ・アル・カリイエの聖者は、

こんなことを語つたそうよ。刃のサビは、刃より出でて刃を腐らす。

それと同じように、人のついた嘘というものは結局、更なる嘘を自分に強いて、

自らを蝕んでいき……」

「あ、そういうホーリー系の話は結構です」

「何よ、ホーリー系つて！　少しは聞きなさいよ！」

「ケツ、どいつこいつも俺を飾りや何かだと思いやがって！」

「うん？」

魔王は、突然聞こえた声に驚き、きよろきよるとあたりを見回した。

「ルイズ様。今何か聞こえませんでしたか？」

「さあ？　気のせいじゃないかしら？」

しかしそういう彼女の顔からは、明らかにニヤニヤとした笑みが零

れていた。

「やつとケチい武器屋から出られたと思つたら、

こんなヒヨロヒヨロの奴が次の持ち主だと？ やつてらんねえぜ
！」

「……」

魔王は思わず押し黙った。

「ルイズ様……」

「なーに？」

「お友達がいないからつて、腹話術でサビシさを誤魔化そうとしても
ムナシイだけですよ？」

「二違（えーよ）うわよ!!」

部屋に二人分の声が響き渡った。

.....

「はあ、インテリジエンスソードですか」

「そうよ。魔法の力で意思を宿した魔剣。あんたの夢みがちな話の相
手にもピッタリでしょ？」

「勘弁してくれよ！」

しかし剣の声に向き合う者はいない。

「いやしかし、喋る剣とはマガマガ指数53……いや54といったと
ころですな。」

バトルでのファイトに使つてアンデッドを倒したり、切り札的な感
じで使つたり出来るかは

ビミョーなところですが、中々良いチョイスじゃあないですか」

「何よマガマガ指数つて」

「マガマガしきの指標です。最高で108までありますぞ」

「随分、中途半端ね。まあ喜んで貰えたならそれでいいわ」

「おい！ ちよつと待て！ この歴史ある伝説的な俺様を呪いの武器
扱いしてんじゃねえよ！」

「ですつてよ？」

魔王はやれやれといった素振りですを振った。

「ルイズ様。意志を持った剣なんて、もうそれだけでアレですよ。」

どうせ魂を吸い取って、生き血をすすめる様なアレなんです」

「俺はそんな事出来るような物騒なアイテムじゃねえ！」

「しかも片刃ですよ。どうせ持ち主の身体を乗っ取って、

絶対に負けない！だとか叫んじゃうヤツです」

「だからそんなんじゃないやねえって言ってるんだろ！」

「……アンタ、考えが毒され過ぎてるんじゃない？」

だが魔王は、ルイズが意外に思うほど強い反応を見せた。

「アマイ！ アマイです、ルイズ様！ この手のアイテムに対する危機意識が足りません！」

喋る刃物というものは、それが例えチンケなナイフですら持ち主の意識を奪い、

人を操るデンジャーナ存在なのです！ ましてや剣なんて尚更です！」

「だからそんな事出来ねえって……いや待てよ？」

そういえば昔、持ち主の身体を操ったこともあったような……」

「うわあ……」

「おいおい！ 娘っ子もそんな目で俺を見るんじゃないやねえっ!!」

「危ないから仕舞つときましようか？」

「おいおい、待ってくれ！ 俺の話聞いてくれ!!」

「まあ冗談は置いといて」

「冗談かよ！」

「セツカク、ルイズ様を買ってきて下さったのです。ちよつと試し振りしてみましようか。」

剣術のココロエはありませんが、私もオトコ。ツルギというものはロマンを隠せません！」

ポーズだけでもカツコつけてみましょう」

「ちよつと、ホントに手にして大丈夫なんでしょうね？」

「なんでまだ疑ってたんだよ！ 冗談じゃなかったのかよ！」

「大丈夫、ダイジョーブです。魔王である私が持つ分には全然ヘーキでしょう」

「完全に本気じゃねーか！」

やはり剣の声を真面目に聞いてくれる者はいなかった。

魔王は鼻歌交じりに剣を背に担ぐと、シユパツと小気味良い音を立てて、

刀身を鞘から抜き放った。

その瞬間、ルイズの部屋を閃光が照らした。

「ゲフツッ！」

魔王は紫色の血を吐いて、床に這いつくばった。

そんな彼の左手では、今なお刻まれたルーンがらんと光り輝いていた。

「きやあつ!! 大丈夫!? 一体どうしたっていうのよ!

まさか本当に力を吸い取る魔剣だったっていうの?!

「チガーーーーウ! 俺じゃねえ!!」

「でもあんたを抜いてから倒れたんじゃない!」

「知らねえよ! コイツが勝手に倒れたんだ!」

「信じられないわよ!」

そう言ったきり、一人と一振りはしばらく睨み合った。

しかしその沈黙は、ほどなくして剣の方から破られた。

「む? もしかしておめえ……」

剣はおそるおそる、確かめるように声を上げた。

「使い手……なのか?」

「使い手? 使い手って何よ!」

「そのルーンだよ! その刻まれた文字にこの感覚、やっぱり間違いないねえ! おめえ使い手だな?」

……だけど何だって這いつくばったりしてんだ?

「このルーンは本来、おめえに力を与えるもののハズだぜ?」

「ねえ、だから使い手って何なのよ!」

「おおすまねえ。久しぶりに使い手に出会えてつい興奮しちゃった。

使い手っていうのはだなあ。……ええと、その」

ルイズは聞き入るように次の言葉を待った。

「わりい、忘れちゃった」

ルイズはズッコケた。

「ちよつと！ 思わせぶりなこと言っておいてソレ?!」

「いや、ほんと詳しく覚えてねえんだよ。何せすげえ昔のことだったからな。」

ま、取りあえずおれを手放したらどうなんだ?」

「そ、そうよ魔王！ 早くそんな剣手放しなさいよ!」

そんなって、とボヤク声が聞こえたが、やはりそんな剣の言葉を気にする者はいなかった。

少しして、カランという音が部屋に響いた。

魔王はゼエゼエと息を吐き、酷く疲れた様子であった。

「大丈夫!? 待ってて、こんな剣早く捨ててくるわ!」

「お、お待ちください……!」

ひでえ!と誰かが叫んだ声は当然のごとく無視されていた。

「ゼエ、ゼエ、……け、剣も確かに問題だったのかもしれないが……

ルーンが激しく機能していたように思います」

「え?……確かに、ルーンが光ってたわね」

「ジブンの中のチカラが消えていくような感覚。」

そして花粉症を激しく拗らせた時の様なケンタイ感。まさかとは思いますがルイズ様……」

「何よ」

「このルーン、かなりホーリーなものとかじゃあないですよね?」

「へ? 掘ーりー?」

「何フザけてるんですか!! HOLYですよ! 聖なるって意味です!」

「何よ! 引っつも掘れ掘れ言ってるアンタが悪いんじゃない!」

「……それでルイズ様、実際のところどうなのでしょう?」

文句を言われつつも、真剣な思いで疑問を投げかけられたルイズは、それに答えてやることにした。

「そんなの知らないわよ。普通の使い魔だっというなら、ルーンが刻まれること自体、当たり前よ。」

みんな使い魔を召喚するんだから、そこかしこに有り触れてるもの

だわ。

まあ、あえて言うなら使い魔召喚自体が始祖ブリミルを起源とするから、神聖っちゃ神聖ね」

だがそんなルイズの言葉に強く反発するものがいた。

「はっ！ そのルーンが有り触れたものだど？ 馬鹿言っちゃいけない！

そのルーンはこの世に二つと無い、伝説のシロモノなんだぜ？」

その言葉に、ルイズも魔王もかの剣へと視線を集中させた。

「使い手として絶大な力を授ける伝説のルーン！ その名も！ その名も！！

……………何だ、その……………忘れちゃったよ」

途端にはあーというため息がルイズから漏れた。

「何なのよこのボロ剣！」

息まくルイズを他所に、魔王は冷静に剣へ問いかけた。

「その、何というか、名前以外のところは覚えているのでしょいか？」
ややあつてデルフリンガーは答えた。

「……………すまねえ。俺、あまりに退屈な年月を過ごしたもんで全部忘れちゃった。

頭のココ、あともうちよつとのところまで出かかってはいるんだけどよお」

「……………ボロ剣に期待した私がバカでした」

「そりゃないぜ相棒！」

魔王はもはや剣に目もくれず、ルイズに話し掛けた。

「ともかくこのルーン、事によってはモノスゴク信仰を集めちゃう感じの、

聖なるものなんじゃないでしょうか。

正直ココロアタリがあるのです。召喚された時に気疲れしたのはトモカク、

あの日、コントラクト・サーヴァントとやらを受けてからミョーに疲れが取れんです。

何というか身体の重さを感じたり、ココロの方も気分のオチコミが

なかなか晴れんです」

「はあ？　今まで気分が落ち込んでたですって？」

普段のアンタはどれだけハイテンションなのよ！」

「ルイズ様、話のシユシがズレております。ともかくこれで理由がハッキリしたようです。」

このルーンが問題であると」

「ちよつと、そのルーンが聖なるものだとかいうマユツバな話は置いとくとして、

なんでそれがあなたの疲れに繋がるっていうのよ？」

そういうと魔王はあからさまにヤレヤレといった表情を見せた。

「フツ！　ルイズ様もまだまだベンキョーが足りませんな。」

マモノに聖水がかかれば弱体化し、

アンデッドや魔王にかけられた回復魔法はダメージを与える。これ常識です。

まあ、そんなニュアンス的な感じのアレで……コレという訳です「あなたも説明できてないじゃないの！　いや待ちなさい！

……つまりあなたは単に見た目がマガマガしいだけじゃなくて、存在自体がマガマガしいから聖なるものでダメージを受けるってこと？」

ルイズは自分の考えを確かめるように問いかけた。

「ハイ、その通りでございます」

それを聞いたルイズは、ふるふると肩を震わせ、絞り出すかのよう
に声を上げた。

「……つ、つまり、私が施したコントラクト・サーヴァントのせいで、
アンタは弱くなってるってこと?!」

「ヤっちまいましたね！」

「ジョーダンじゃないわよ!!　ファーストキスを捧げた結果がソレえ
?!」

いや、私に言われましてもジョージキ困りますと、魔王は不平を
言ったが、

ルイズにとってはそれどころではなかった。

「しかもあんたのマガマガしきはホンモノってことね！」

退治された方がいいんじゃないかしら!？」

「退治されない方がいい魔王なんて……イヤイヤイヤ、そう怖い顔をせず冷静になつて下さい！」

確かに私のような者は、ルイズ様の当初のゴキボウには沿わないかもしれません。

しかし私だつてソレなりにルイズ様のお役に立つハズなのです。

ホラ、聞こえてきませんか？ 扉の外から私を必要とするような困りゴトの足音が！」

「そんなもの！……って本当に足音だわ」

今まで必死になって話していたから気付かなかつたが、ルイズが耳を澄ますと、夜中の静けさに紛れて、乾いた靴の音が響いていた。この塔を誰かが出歩いているらしい。

「まあでも私の部屋に用事とは限らないわ」

どーせ、どこぞの女と逢引する男子でしょ？ ふしだらねえと、ルイズは考えた。

だが彼女の考えとは裏腹に、足音は彼女の部屋の前で止み、扉が力強くノックされた。

……こんな時間に私に用？

疑問に思いつつ、彼女は返事を返した。

「今たて込み中よ！」

大きな声で言ったが、扉は再び力強くダンダンと叩かれた。

「一体なんなのよこんな時間に！」

ルイズが腹を立てながらも扉を開けると、目の前には美丈夫の生徒たちがたむろしていた。

一瞬たじろいだルイズだったが、すぐに思い当たることがあり、気を取り直して声を張り上げた。

「ちよつとあんた達！ キュルケの部屋なら隣よ！」

「いいや、間違つてなんかいないさ」

「だが少しは惜しいかな。我が麗しのキュルケのためを思い私はここに来たのだ」

「いいいや、キュルケは僕のものだ!!」

ルイズは何かモノスゴク面倒なことに巻き込まれそうであることを悟った。

「な、何事よ！ あんたたちがキュルケとどうなろうが私には関係ないし、興味もないわよ！」

私を変なことに巻き込まないで！ どっか行ってちょうだい！」
そのままルイズはしっしつと、手を振った。

だが彼らは退かなかった。

美丈夫の中から見覚えあるクラスメイトがズイと前へ出て、ルイズの前に立った。

「そういう訳にはいかないな」

「……ギムリ？ 一体何の用よ、普段あんたと大して関わりなんか無いでしょ？」

その通り、彼にしたって別にルイズと親しいわけではない。ルイズの困惑は解けなかった。

「たとえば君が僕たちのことに関心が無かろうと、僕たちには君に思うところがあるのだよ」

彼は偉そうにそう告げた。

「君のせいで彼女は苦しんでいる」

「……はあ？」

ルイズは意味が分からなくて、思わずそんな言葉が口から出た
流石に説明が足りなかったかと、彼は説明を付け加えた。

「より詳しく言えば、君の使い魔が彼女の使い魔を誑かしたせいで、
彼女は今尚苦しんでいるんだ！」

「……」

心当たりが大いにあった。ルイズは魔王に目を向けたが、彼は何のことですか？ というような

素知らぬふりを通しており、彼女のいら立ちを募らせるだけであつた。

「彼女に悲しみは似合わない。彼女に愛を捧げた騎士である僕たちが、

そんな彼女の姿を見過ぐす訳にはいかないのだよ」

「ええと、それをやったのは使い魔の方で私は……」

「使い魔の責任は主の責任でもあるだろう！」

ビシツと指をさして言われてしまった。

「ええと、その、キュルケとの悪口だとか、いろいろやりあうのは、普段のコミュニケーションみたいなもので、お互いさまっていうか、

今それをことさら取り立てるようなものじゃあ……」

本来、それもまづいのだがね、と彼は言った。

「とは言え我々として紳士だ。」

魔法もろくに使えない女性に強く当たるつもりはないさ」

それを聞いてルイズは一瞬ほっとした顔をしかけた。

だがその顔は、話を引き継いだ別の美丈夫によって引き攣らされることとなった。

「だが聞いたぞ？ 君は軍事の名門、グラモン家の三男であるギーシュ・ド・グラモンを相手に

随分元気に暴れまわったそうじゃあないか。君はもはや、今までのようにゼロと呼ばれるだけの

か弱いレディではないという訳だ」

「ええと、その、それはつまり……」

いやだ、聞きたくない。ルイズは叶わぬと知りつつもそう思った。

「二」ルイズ！ 君たちに決闘を申し込む！

ギーシュのように、生温く勝てるとは思わないで頂こう
！」

「ほらルイズ様！ 一度にたくさんメイジを血祭りにアゲて名を売るチャンスです！

さあ張り切って掘って行きましょう！」

「トラブルを持ち込んでんじゃないわよ！」

頭を抱え込むルイズだったが、目の前の殺気立ったキュルケの恋人達は、

きつと一步も引いてはくれないのだった。

STAGE 11 秒殺5メートル

「まあ、破壊神様のイケニエが多い分には構わないのですが……」

魔王は、キュルケの恋人たちを胡散臭そうに眺めながら言った。

「あなた達、ホンキでルイズ様と闘うつもりですか？」

「何が言いたい？」

眉をひそめる彼らの剣呑な空気に、ルイズは身の縮む思いがした。

しかし魔王はそんなルイズにお構いなく、彼女の心臓に悪い言葉を返していくのだった。

「あなた方程式でルイズ様の相手が務まるのか、と言っているのです。」

「……言ってくれるじゃないか」

ルイズの思った通り、彼らは魔王の言葉に激しく反応した。

「ゼロだったくせに！」

「たかがドット一人を下した分際で、随分と思い上がれるものだな！」

「僕はギーシユのように油断などしないぞ！」

ルイズはもう、これ以上余計なことを言ってくれるなど、自分の使い魔に祈った。

しかし彼らの殺気を物ともしない魔王は、尚も挑発的な言葉を吐き続けた。

「言ったはずです。あなた方がルイズ様と闘う、まして決闘などと、

身の程知らずではないですか？」

「まだ言うか！」

「僕たちを愚弄するつもりだな！」

彼らは今にも魔王に飛び掛からんばかりにいきり立った。

「いえいえ、そんなつもりでは……言葉通りの意味しかありません。

だって、決闘というフェアな闘いでしょ？」

そんな風にプライドにこだわるのは止めて、

野盗のごとく全員で一度にかかってこないと勝ち目なんてないのではないですか？」

「貴様！……とことん僕たちをコケにしたいみたいだな！」

「ふん、他の奴らはともかく、僕はそんな卑怯なことをせずとも平気で勝てるね！」

「僕だってそうだ！」

魔王はそれを聞いてふうむと唸り、思案気に顎へ手をやった。

その時、ルイズは見た。

「(え!?)」

彼らから隠された魔王の口元が、確かににやりと歪んでいた。

魔王はさつと口元を正し、彼らに告げた。

「正直、あなた達にそこまでの力があるとは信じられないのですが……まあ、いいでしょう。

そこまで言うのなら、本当にあなたたちがルイズ様と闘うに値するか、

見極めさせて貰おうではないですか！」

彼らの中の一人が、目を細めて言った。

「見極める？ 何かするつもりか？」

魔王は頷いた。

「私達の用意した試練に打ち勝った者のみ、ルイズ様との決闘を認めようではありませんか。

というか、そもそもの話、あなたたち決闘をするとっておきながら、

明らかに人数が多いではないですか。 代表を立てて戦うにしても、

一体、誰が戦うというんです？」

「う、それは……」

一人が言いよどんだ。

「もちろん、それは彼女に最も愛され、才能に秀でたこの僕の出番だとも」

金髪の少年が胸を張って言った。

「馬鹿を言うな！お前なんて彼女の気まぐれで目をかけて貰っているだけだろう！」

「何だと！ 2年生のくせに生意気だぞ！」

「学年を笠に着るな！ 僕は忘れていないぞ！」

君がパーティーの時、彼女の色気に当てられみつともなく鼻血を流していたことを！」

「そうだ！彼女のエスコートもロクに出来ない奴の居場所はない！」

「ふん！あれは彼女を前にした時に起こる当然の生理現象だ！恥ずべきことじゃあない！」

「開き直るな！」

「馬鹿馬鹿しい。 前々から思っていたが、君らは彼女の恋人として相応しくない。」

品性に欠けている。彼女の隣を独占すべきはこの僕だ！」

「許さんぞー！ 貴様！」

ルイズは、今まで自分たちに向けられていた射殺するような視線が、急に彼ら同士の間に向けられ出したのを呆然と見つめていた。

やっぱりキュルケの恋人たちって、ドロドロな感じになっているんだなあと、

ルイズが妙に感心していると、魔王はワザとらしくゴホンと咳払いをして話を続けた。

「ホラ、そういう風にモメるでしょう！」

ともかく、ルイズ様への挑戦者をあなたたちに決めさせても埒があきそうにないですし、

トクベツに我々のほうからキミたちの力を試す試練を用意してあげよう、というワケです。

なあに、そんなに時間は掛かりません。

もし試練に打ち勝てば、そのまま私たちに決闘なり何なり仕掛けてくるがいいでしょう。

まあそれも、生き残りが一人でもいればの話ですが・・・」

「随分な自信だな！」

魔王の言葉に再び彼らは一団となって、ルイズたちに殺気を飛ばし始めた。

「一体何をやらせるつもりだ！」

もし君らが決闘から逃げだすつもりで策を弄しているなら、許さん

ぞ！」

魔王はフハハツと笑うと、見下すような視線で彼らに告げた。

「我らの作るダンジョンにおける最弱のマモノを倒せたら、

存分に立ち向かってくるがいいでしょう！」

怒りのあまり、言葉にならないうめきを上げ始めた彼らに、ルイズは心底震え上がった。

「さー、ルイズ様。さっそく準備を進めましょう！」

魔王は立ち竦むルイズの手を引いて彼らから距離を取り、
気の乗らない彼女に無理矢理にも穴を掘るよう促した。

.....

「千の魔窟も一掘りから！ さあ張り切って掘って参りましょう！」

「いい気なもんねあんたは！ 言うだけ言つて、後はやること無いつてわけ!？」

キュルケの恋人らの姿が見えなくなり、少しだけ落ち着いたルイズは

ようやく魔王に怒りをぶちまけた。

「何を言いますか！ あの数の挑戦者を一人ずつ挑んで来るように

差し向けたのはこの私じゃあないですか！」

「一緒に挑発までしてるじゃない！ 第一、傍から聞いてりやペテンもいとこだわ！」

こっちは私とあんた・・・は戦力外だとしても、マモノたちがいくらでも出せるんじゃない！」

「ノンノン、ペテンではありません。知略とお呼び下さい。

それに考えてもみてください。

例え平民が無謀にもメイジに決闘を挑んだら、複数のゴーレムに囲まれて

フルボッコにされても仕方がないでしょう？

それと同じことで、ルイズ様は破壊神です。だからマモノで戦う。

よもや文句はあるまいでしょう！」

「破壊神じゃないわよ！」

魔王はルイズの言葉を聞き流しているのか、相変わらずご機嫌な様

子で話を続けた。

「そんなことよりルイズ様。確かに私はルイズ様に代わってダンジョンをどうこうは出来ません。」

ですが今回、私はフィクサー的な黒幕みたいな感じのコンサルタン卜兼アドバイザーとして、

しっかりとダンジョン作りのキホンを伝授していけたらと考えております。」

それを聞いて、ルイズは首を傾げた。

「ダンジョンの基本？ 穴を掘って強い魔物を出すだけじゃないの」
魔王は嘆くように頭を抱えた。

「アマイーその認識はアマイです。ダンジョンとはそんな単純なものではありません！」

前は慌ただしい中、ロクに説明する暇もなくギーシユを迎え撃ちましたが、

ダンジョンとは本来、マモノの神秘と戦略とが組み合わさって出来る叡智の結晶、

至高の芸術品なのです！」

「・・・こんな薄暗いジメジメしたところが？」

「だまらっしやい！ そもそもこの前の戦いだって、戦いのキホンを押さえておけば、

あんなモヤシつこごとき、もつとラクくに勝てたはずなのです！それがあのザマ！」

あの時は私、ずっと不安な気持ちで一杯でした。

いつ簀巻きにされるか分からない私のモヤモヤ感が、ルイズ様には分かりますか!？」

「分かりたくないわよ！」

ルイズは肩で息をしながらも、この先のことを考えた。

確かにこのお調子の良い亜人のことは非常に気に食わないが、

何にせよ、この局面を切り抜けるには彼のもたらした力と知恵に頼るしかない。

仕方なく、本当に仕方なくルイズは、かの亜人に歩み寄りを見せる

ことにした。

「まあ良いわ。役に立つっていうなら、話ぐらい聞いて上げるわよ。」
「ええそうです！ワタシの有り難いコトバを耳をかつぽじってよく聞いておいて下さいー！」

魔王は、ルイズの眉間のしわがぴくぴくし始めたのを気にもせず、説明を始めた。

「まずルイズ様を知るべきは、戦いのキホンです！」

「戦いのキホン？ ダンジョンの基本じゃあないのかしら？」

「そうです。確かにダンジョンのことを知るの大切ですが、それも戦いに勝ってこそ。

先ずは戦いのキホンを押さえ、それをダンジョン作りにどう活かすのか、

そこをルイズ様には考えて頂きたいと思います。

ルイズ様、戦いに勝つためには何が必要か分かりますか？」

「そりゃあ、強さでしょ？」

即答したルイズに、魔王はこくりと頷いた。

「強さ。確かにそれは重要で、決定的な要素と言えます。

ワレワレがこの戦いを制するには、強力な魔法をバンバン放とうとしている

彼らよりも強くあればいい訳です。でも考えてみてください。

ブツチャケ、ルイズ様には彼らと同じような強さがありますか？」

「悪かったわね、魔法が下手で!!」

ルイズは憤慨しながら答えた。

「・・・まあ、あえて否定はしませんが」

「使い魔なら少しは気を使いなさいよ！」

「まあまあ、落ち着いてください。思い通りの魔法が出せないどころか、

放った魔法が明後日の方向で爆発するノーコンなルイズ様です
が・・・」

「あああんだ、ご、ご主人様に向かってそんなこと言って、
ただで済むと思っっているんじゃないでしょうねえ！」

「いい加減にしてくださいルイズ様・・・時間というものは無限には無いんですよ。」

「怒りたいのはこっちよ!」

「ええい、話が進みません!」

トニカク、魔法がビミョーかつ残念で不自由な感じのルイズ様が、なぜ前回はギーシュに勝てたか分かりますか?」

「あんたねえ!・・・そりゃあ、あいつの魔法が打ち切りになったからよ。」

「そうです。ではなぜ彼の魔法を封じることが出来たのでしょうか?」

「それは、何匹ものマモノを差し向けて、あいつのワルキューレを倒していったからよ。」

「そう、そこです! マモノ1匹1匹の強さは確かに重要ですが、以前の戦いで、ギーシュ自慢のゴーレムであるワルキューレに単独で勝ち得るマモノはいませんでした。

しかし、数が多いことでその弱点をカバーすることが出来たのです。」

数は力! それが戦いにおけるジャスティスなのです!」

「要は、弱くてもマモノを一杯作り出せば良いってことですよ?」

「確かにそうですが・・・ルイズ様。ダンジョン内にいるマモノの数がただ多ければ良い。」

そんな風に単純に考えていませんか?」

「え? どういうことよ。」

「考えてみて下さい。マモノをたくさん生み出すために、掘って掘って掘りまくって、

それでだだっ広いダンジョンが出来上がったとします。

そんなダンジョンでムシなりトカゲなりがまばらにうろつく中、

ギーシュ率いるゴーレム達に遭遇したら、

マモノはギーシュどもにダメージを与えられると思いますか?」

「前は、一匹で挑んでいたマモノはすぐ返り討ちに合ってたわよね」ルイズは、初めての戦いを思い出しながらそう答えた。

「そうです。つまり、数は力」というのは、

単純にダンジョン内のマモノの数の話だけではないのです。

敵と直接対峙した時に、何対何の戦いを作れるかということが、重要なポイントとなるのです。

一匹だけでは相手に触れる前にやられてしまうガジガジムシも、

2匹3匹と同時に襲いかかれば、隙について相手に噛みつくことが出来るのです。」

「まあ、確かに前はそうやって戦ってたわね」

「ですから、今回ルイズ様にはマモノを多く発生させるだけでなく、効率の良い掘り方をする事でマモノ密度を高める、

そういうことを意識して掘って頂きたいと思います。」

「分かったわ。でも効率的な掘り方って言っても、

養分の高いところを掘るぐらいしか思いつかないわよ?」

すると魔王は、待ってましたと言わんばかりの不敵な笑みを浮かべた。

「フッフ、ご安心くださいルイズ様。

そういうところでマモノの神秘のチカラが生きてくるのです。

こういう場面で活躍するのは何ととっても養分運搬のスペシャリスト、

ニジリゴケです!」

「あのすぐやられる奴?」

魔王はチツチツと舌を鳴らして指を振った。

「確かにニジリゴケの戦闘力は貧弱です。花を咲かせた状態ならば、

もよもよした綿毛を飛ばすなんて攻撃も出来ませんが・・・

しかしコケの真価は、その養分吸収能力と繁殖能力の高さにあるのです。

コケは養分を抱えた状態で体力を減らすとツボミとなり、周囲の養分を吸って花となります。

そうして更に養分を吸い取ったコケは、子を産み落とす。

この性質を利用することで、敢えて養分の溜まった土を全部掘らずとも、

掘った穴の近くの養分をマモノの生態系へと取り込むことが出来るのです。

つまりコケを上手く利用して養分を集め、無駄に地下を掘り広げることを防げば、

自然と養分を糧にするマモノの密度を高めることが出来るのです。」

「コケの重要性は分かったわ。でもそれって普通に土を掘ってコケを出して、

それ以外に私達が出来ることなんてあるの？」

「そこでツルハシです。」

「へ？」

「労働者のオトモ、ツルハシの力をはたまた発揮するのです！」

具体的には、マモノ社会の底辺たるコケどもを精一杯働かせるために、

ツルハシでガシガシ小突いてやるのです。」

「なにイジメみたいなこと言ってるのよ!!」

「いいから騙されたと思ってやってみて下さい!さあ早く!」

「え、ええ? 本当に?・・・分かったわよ。エイっ!」

ルイズがツルハシを振るうと、ツヤツヤしたニジリゴケが一匹生まれ、のそのそと動き出した。

「これをツルハシで小突けばいいのね。やあっ!」

ツルハシが当たると、ニジリゴケのテカリ具合が少しだけ減ったよ
うな気がした。

だがニジリゴケは、それでものそのそとした動きをやめなかった。

「もう一度です!」

魔王の言葉に従い、ルイズは再びツルハシを振り下ろした。

しかしニジリゴケのゆつくりとした移動は、

突くタイミングを計ることが逆に難しく、何度もツルハシの先は空
を切った。

「動きが遅いわりに突くのが難しいわね。・・・ここよっ!」

今度はしっかりとタイミングを見計らって、ルイズはツルハシを振

り下ろした。

その途端にコケは茶褐色に変色し、萎びて土へと帰った。

「ちよつと！ どういうことよ!!」

「ハア・・・ルイズ様、突くのが遅すぎです・・・」

「文句を言いたいののはこつちよ!」

魔王はやれやれと首を振った。

「いいですか、ルイズ様。コケを生み出してすぐ、間髪入れずに突くのです。」

コケを上手く捌くのも鮮度が命というワケですな。

コケが生み出されたのを見てから動くのではなく、

土を二度掘り、三度掘りするつもりでツルハシを続けざまに振り下ろしてください。

そうすればいい感じにコケを突くことが出来るでしょう。」

「そういうことは早く言いなさいよね!」

不満を漏らしつつもルイズは魔王の言う通りに従い、

養分のある土を掘ってすぐさま、2回3回とツルハシを振り下ろした。

「今度は上手く出来たようですね。」

ですがルイズ様には、もつとツルハシを使いこなして貰わねば困ります。

ゆくゆくは一のツルハシを振り下ろすのと全く同時に、二のツルハシ、三のツルハシを

振り下ろして不可避の斬撃を与えるぐらいにはなつて頂きたいものです。」

「どうしろっていうのよ・・・」

そうこう言う間に、突かれたコケはノツシと少しばかり動いた後、見る見るうちにツボミと化した。そして周りの養分を吸って花となり、黄色い花卉を咲きほこらせたかと思うと、今度は新たなコケを産み落とした。ルイズは、コケたちがワラワラと掘った穴に沿って散っていくのを見守った後、魔王に疑問を投げかけた。

「コケがずいぶん早く花を咲かせたわね。一体、どういうこと?」

ツルハシで突くとコケの成長が早まるのかしら?」

「それはチョット違いますね。」

先ほど話した通り、コケは養分を抱えたまま体力が減るとツボミになります。

ですから生まれたてホヤホヤのコケがちよっぴりでも多めに養分を抱えていれば、

その体力を削ってやることで、あつと言う間にツボミになり、そのまま周囲の養分を吸い取って花となるというワケです。」

「なるほどね。それじゃあ養分の多い土が固まつてる場所でコケを突けば、

土をあまり掘らなくても養分をかき集められるって訳ね。」

「ルイズ様もコケの扱い、分かつてきたようですね。」

「それじゃあニジリゴケも増えたことだし、ここらでガジガジムシも作らないと・・・。」

「お待ちください!」

魔王はそう叫んで、手近にある養分豊富な土を掘ろうとしたルイズの動きを制止した。

「気が早いです、ルイズ様! こんなに早くにガジガジムシを生み出しては、

速攻でニジリゴケを食い荒らし、餌を無くしたムシが全滅してしまいます。」

それに、何よりルイズ様はコケの本当の恐ろしさをご存じでない!」

「はあ?コケの恐ろしきですって?あんな弱いのに?」

ルイズは目をぱちくりさせて言った。

「そうです!ルイズ様には是非ともコケがダンジョンの生態系の基礎にして、

勇者攻略の基本だということを覚えて頂きたいのです!

それこそ、レベル1の勇者が戦いの基本を覚える相手がスライ・・・コケであるがごとく!」

「今スライムって言ったわよね!」

魔王はメンドクサイこと言う人だなあという表情を隠しもせず、説明を続けた。

「とにかく、ルイズ様がダンジョンを知っていく上で、コケによる戦いは欠かせません。

先ほどキュルケ嬢の恋人らにも言いましたが、ルイズ様にはこれから来るあやつらを

コケだけで倒して貰おうと思います。」

ルイズはそれを聞いて目眩がした。

「そうだったわ！ あんた、何てこと約束しちゃったのよ！

こんな貧弱なマモノでなんて、絶対勝てる訳ないじゃない！

強いマモノを出しとけばまだ勝てたかもしれないのに、台無しよ！」

だが魔王は、悲観的になって怒鳴るルイズに対しても落ち着き払って言葉を返した。

「ルイズ様は『数は力』というコトバの意味を、頭で分かったふりせず、

その目で見て確かめるべきなのです。それに断言します。

下手にガジガジムシがうろつくダンジョンよりも、

コケだらけのダンジョンの方がよっぽど凶悪だということ!!」

「そんなの信じられないわよー！」

魔王は首を横に振って、ルイズに言い返した。

「ルイズ様はマモノのことを知らないからそう思って自ら限界を作り出すのです。

重要なことなのでよく聞いて下さい。

コケはムシと違って、あちこちにフラフラ動き回ったりはしません。

壁にぶつかるまで愚直なまでにまっすぐ進み、そしてぶつかったら元来た道を戻るか、

壁に沿って向きを変える、そんな単調な動きしか出来ません。

もし仮に、コケのすぐ真横に勇者が立っていても、自分の歩みを妨げない

相手には気づくことすらありません。

そうやって敵の目の前を無防備に通り過ぎる間に、一方的に攻撃を受け潰されていく。

それがコケなのです。」

「そこまで分かっているなら、どうして!」

「だが、それがいいんです!」

「はあ!」

「ルイズ様、私が語ったコケの生態、その持つ重要な意味が分かりますか?」

「え!? なんのことよ!」

「さあ、お優しい魔王様の時間はここまでです!」

私の言ったことをしっかりと飲み込めてさえいれば、ルイズ様の勝利は確実に言えましょう。

一方で、下手な掘り進め方をしてしまえば、一人目を相手に敗北なんてことも・・・」

「え!? いきなり何言ってるのよ!・・・え? 本気!」

「時間も差し迫ってきました。いい加減掘り進めておかないと、

上の彼らがしびれを切らして一気に押し寄せないとも限りません!
!

ちよつぴり考えて、後は掘って掘って掘りまくるので!」

さあ、私にルイズ様のちよつとイトコ見せてみてください!」

「うそ、そんな! ちゃんと最後まで教えなさいよ!!」

「必要な分は教えたということです。もう教えません!」

魔王は、もう何も言うことはないとはかりに、ピューピューと口笛を吹き始めた。

ルイズは慌てて、頭を必死に回転させ始めた。

.....

「ペリッソ、いざ参る!」

揉めに揉めた挙句、公平なくじ引きにより一人目の挑戦者となった彼は、高らかに名乗りを上げてダンジョンの入り口に足を運んだ。悔しそうな顔をしたライバルたちが見つめる中、彼はふふんと鼻を鳴ら

した。無理もない。彼らに先んじてルイズらの用意した障壁を突破してしまえば、続くライバルらを待つことなく、そのままルイズたちに追撃を加えればいい。そうして全てを掻っ攫ってしまえば、キュルケを慰めるための供物を、彼だけの手によって彼女に捧げることが出来る。そうなればしばらくの間は、彼女の視線を自分だけに向けることが出来るだろう。その隙に上手く立ち回ってライバルを遠ざけ、彼女から完全に引き離す。そして邪魔する者のいない僕たち二人は、学院を卒業すると同時に・・・そんな青写真を描いて、彼は浮かれていた。もつとも、同じようなことを皆考えていたからこそ、彼に向ける顔が苦渋に満ちたものとなっていたのだ。残された恋人たちには今出来ることとはいえ、くたばれと念ずることしかない。彼らがこの状況を好意的に捉えるならば、一番手の彼を試金石に、ルイズらの出方を探り易いぐらいのものである。そしてもし一番手の彼が、万が一にも失敗すれば、それはキュルケとの恋のレースから一人、コーアウトする者が出るということでもある。だからこそペリツソンを見送るものは、ゼロだったあのちんちくりんが彼に打ち勝つという奇跡、より具体的にはペリツソンが大ポカをやらかすという分の悪い賭けに思いを託すしかなかった。

残された者たちが見守る中、ペリツソンは何の気負いも感じさせない姿で

ルイズらの掘った穴に入っていた。
するとどういふ訳か？

彼と入れ替わるように、ゼロの使い魔である不健康そうな亜人が、ボロ切れのようなものを手に穴から出てきた。

何事かとざわめいた彼らは、亜人の発した言葉を聞いて驚愕した。

「次の挑戦者の方、どうぞー！」

始祖は、自分たちを見捨ててはいなかった。

それが、彼らが一番に思ったことだった。

「それで、次はどなたが来るんですか？」

「僕だ！」

「そうですね。では私は定位置に戻りますので、あと一分ぐらいして

から入って下さい。」

「ふん、ギタギタにしてやろう!」

そう言って、次の挑戦者であるスティックスは腕を組んだ。残された3人は思った。

しまった、まだあいつが残っているじゃあないか。

これではやはり自分の出番は絶望的だ。

また今度も奇跡を祈るしかないのか?

「キュルケの未来の夫はこのスティックスだ!

さあ君たち、祝福の言葉でも考えていてくれたまえ!」

テンションの上がった様子で、嫌味つたらしい言葉を残し穴に潜っていく彼を見て、

残された三人は歯噛みした。

いや、結果が出ない内から後悔するのはよくない。

司祭様だって言っているではないか。

信じる者は救われる、と。

マニカン、エイジャックス、ギムリの三人は目を瞑って膝をつき、命を捧げる覚悟で始祖への祈りの言葉を呟き始めた。

「ええと・・・何をやってるんですか? あなたたち」

彼らが驚いて顔を上げると、何とまた魔王がボロ雑巾にしては大きな塊を手に立っていた。

なんだかちよつと引き気味な目でこちらを見ているのが心外だ。

「もしかして・・・いやまさかと思うが、スティックスは敗れたのかい?」

「はあ、名前なんて知りませんが、まあそんなところですよ。

次の挑戦者の方は準備しといて下さい。ああ、ちよつと今回はグラウンドの

コンディションが荒れてしまったので、少しだけ長めに待っていて下さい。」

巫人はそう言うと、新たなゴミを先ほど捨てたボロキレの上に放り投げ、いそいそと穴の中へ戻っていった。

彼らは、感動のあまりため息が零れた。

まさかこんな奇跡が二度も起こるとは！

彼らは今や、始祖の存在を切実に感じていた。

始祖のご加護は、確かに我々の身近に宿っている。

始祖は、我々一人ひとりをあまねく見守っていて下さる！

3人は、次に司祭様の話を聞くときは、決して居眠りしまいと誓った。

「次は僕だな」

マニカンが立ち上がった。

エイジャックス、ギムリの二人は、心配になった。

ここまでに二人が敗れ去ったのは、確かに喜ばしい。

特にペリツソンのやつは、ライバル連中のなかでも特に嫌味なやつだった。

だからいい気味だと思う。

しかしマニカンは、キュルケの隣を競って互いに睨み合う仲でも、

比較的穏やかな性格で紳士的な振る舞いを忘れない、そんな稀有な存在であった。

果たして我々の祈りは、今度も叶えられるのだろうか？

始祖の見えざる手は、彼の行く道を握り潰してくれるだろうか？

もし彼のために今までの奇跡が起きていたのだとしたら、

それに喜んでいた自分たちはとんだ道化であったということになる。

「先に行かせて頂くが、これも勝負だ。悪く思わないでくれたまえ。」

精神を集中させたいからと言って彼は二人のそばから離れた。

どうやら、時間になるまで目を閉じ、思索に耽って過ごすようだ。

「流石に3回目は……」

「諦めるな！」

弱気な事を言うエイジャックスに、ギムリは声を張り上げた。

「しかし、やつは、その……始祖に認められても、おかしくはない」

「言うな！ 確かにやつは紳士的だ。しかも親族に司祭がいるとかで、教会の教えにも詳しい」

「何だって！ それじゃあお手上げじゃあないか！」

「違う！たしかにやつは一見、始祖の祝福を受けてもおかしくないように見える。」

だが僕は、逆にそういう者こそ信仰の罫に嵌まるのではないかと思う！」

「どういことだ、ギムリ？」

エイジャックスは、興味深々と言った様子で聞き返した。

「教えに詳しいいからと言って、それは信仰心が強かったり、

始祖の救いの手に近いということを意味しないということさ」

ギムリは真剣な表情で話を続けた。

「ホーネンという名の司教のことを知っているかい？」

エイジャックスは首を振った。

「知らない。・・・その名前、ゲルマニア系か？」

ギムリは肯いた。

「そうだ。おっと、勘違いしてくれるなよ。」

我らが女神を別として、確かにゲルマニアは成り上がりどもで出来た国だ。

だが僕は、そんな利那的な享楽に耽る墮落し切った者共の国にいなから、

あえて俗世を離れ始祖に身を捧げることを決めた聖職者というのは、

逆に本物の信仰心を持っていると思う」

「分かった。僕も色眼鏡を外して話を聞こう」

助かるよと言って、ギムリは話を続けた。

「彼はこういう風なことを言っている。」

例え始祖の御教えを数多く学んだとしても、

それを以って自分が智慧ある者と思うのは間違っている。

それは始祖の御心から外れていると。」

「何だって？そんな訳ないじゃないか。」

より多くを知っている者の方が始祖の御心に近付けるはずだろ？」

エイジャックスの反論にギムリは首を振った。

「そういう意味じゃないんだ。ホーネン司教も、知識を求めること自

体を否定してはいない。

だが、考えても見て欲しい。他人より多くを知っているからと言って、

偉大なる始祖と僕たちとの距離がどれだけ縮まるといえるのか。

始祖の偉大さの前ではそんな小手先の知識など、

五十歩百歩、ドングリの背競べでしかないんだ。

僕たちは皆、始祖の目から見れば、その足元で這いつくばるアリの
ような存在に過ぎない。

だというのに私は砂一粒を積み上げた、いや僕は二つだなんていつ
て競い合っても、

それに何の意味があるっていうんだい？」

エイジャックスは目を見開いた。

「そんなこと考えたこともなかったよ。確かに始祖の偉大さの前には、

我々がどんなことをしても矮小でしかない！」

ギムリはそれに頷いて続けた。

「つまりホーネンの教えはこうさ。信仰において大切なのは積み上げた知識なんかじゃない。

始祖の御心に沿おうという一心不乱さ、始祖に何もかもを委ねようとする姿勢こそが

本当に求められているものであり、そういう心の在り方を持ったものこそが、

死後、始祖の御許へと辿り着けるのさ。」

エイジャックスはそれを聞いて感極まったように震えた。

「つまり！ マニカンみたいに知識がない僕らも、

始祖の恩寵を諦める必要はないということだな！」

「そういうことさ」

二人は安心した顔でぼーっと月を見上げた。

「冷静に考えてみると、二人が瞬く間にやられるなんておかしい。

……これは偶然なんかじゃない！ 何かカラクリが、想像もつかないような何かがあるんだ。」

油断したら一瞬でやられる！」

マニカンが必死で頭を働かせていること等、彼らは知る由もなかった。

.....

その後、しばらくしてエイジャックスは、また不安げな表情を浮かべ始めた。

「なあ、ギムリ」

「何だい、エイジャックス？」

「やつぱり・・・僕は駄目だ。マニカンには勝てない」

そう言って彼は俯いた。

「何を言ってるんだ。さつきホーネンの話をしたじゃあないか」

ギムリはそう言って呆れたが、エイジャックスは力なく首を振ると、

弱りはてたような声でぼつぼつと語り始めた。

「確かに、始祖を前にすれば僕らの差なんてちっぽけなものかもしれない。

でも僕が悪人だったらどうだい？ 知識も無ければ、信仰心も薄い。

そんな僕は、始祖の手が一番届き難いところにいるに違いない」

「エイジャックス？」

ギムリの視線から顔を逸らして、エイジャックスは言葉を続けた。

「正直、僕は今の今まで始祖のご加護なんて信じていなかった。

毎日食事のときに捧げる祈りに心はこもってなかったし、

そのくせ嫌なことがあるとすぐ始祖の名前を出して、口汚く罵っていたんだ。

本当に恥ずかしいことだ。始祖のお力はこんな身近にまで及んでいたというのに・・・」

エイジャックスはもう泣きそうになっていた。

ギムリは静かに彼の告白を聞き終えると、彼の肩に手をやった。

驚いて顔を上げたエイジャックスにギムリは優しく声を上げた。

「しっかりしろエイジャックス。」

そんなんじや僕も恋のライバルとして張り合いがないじゃあないか」

「しかし、僕は・・・！」

そう言うエイジャックスに、ギムリは首を振って答えた。

「心配しなくていいんだ。もう一人、高名な司教の話しよう。」

先程話したホーネン司教の弟子で、彼とは別の教区に任ぜられたシンラーンという人の話だ」

「シンラーン？ 珍しい名前だ。」

「うん。なんでも彼の先祖は、ロバ・アル・カリイエから流れ着いたらしい」

まあ、そういう者まで教会に受け入れるなんて、

ゲルマニアらしいといえばらしいのかなと、ギムリは笑った。

「その彼が語った教えは、今の君にぴったりだと言える」

「どんな教えなんだい？」

「それを言う前に、一つ君に質問したい。もし仮に、君がたくさんの病人を目の前にしたとする。

そして君は、その場にいる唯一の医者だ。患者たちの症状は様々で、

軽い風邪を引いた者から、大病を患って今にも命を落としそうな者までいる。

さあ君は、どんな患者から手を付け始めるかい？」

エイジャックスは少し怒ったような声でその質問に答えた。

「当然、一番重たい症状の患者に決まってる。だって、ほっとけば死んじゃうんだろ？」

ギムリは穏やかに微笑みを返した。

「同じことなんだよ、エイジャックス」

「何だつて？」

「シンラーンの教えはこうさ。始祖は慈悲深い。

そして皆が死後に自分の元までたどり着ける様、心を配っていて下さる。

それはもう、人類全てを患者として目に掛けてくれている医者によ

うなものさ。

だからこそ、始祖は最もその救いを必要としている重たい病を患った者、

つまりは始祖の御心から大きく外れようとしている悪人にこそ、一番にその手を差し伸べてくれるのさ」

エイジャックスはそれを聞いて、雷に打たれたような顔をした。「君の話は聞いていて驚くようなことばかりだ！

ということは、つまりだよ。いつも始祖への祈りを口にするときに、

周りに合わせて口パクしている僕でもいいって言うのかい！」
ギムリは頷いた。

「君だつて今までの人生、一度ぐらいは真面目に祈ったことがあるだろうか？

ならそれだけで十分さ」

「なら、たまたま訪れた街の教会でこっそりブリミル像を叩き割り、それを見つけた司祭が怒り狂う様を遠目に楽しんでいたことも許されるって言うのかい？」

「そんなの僕だつてやったことがある！」

ギムリは力強くそう返した。

「なら、さつきマニカンがブリミル教に詳しいと知ったとき、心の中で始祖のケツでもしやぶつていろと思つたことだつて問題ないというのかい!？」

「エイジャックス、完璧だよ！ 君こそ真の邪悪だ！

僕より先に君へ救いの手が伸びないか心配なぐらいだよ！」

そう言つて二人は高らかに笑いあつた。

「いやまさか、ライバルのはずの君とこんな風に笑いあうことになるとは思わなかつた」

「僕もだよ。ほんと、なんでこんな励ますようなこと言つたんだろう？

「これも始祖のお導きつてやつなのかな？」

「違くないね！」

再び二人は笑いあうと、エイジャックスは急に真面目な顔をして言った。

「それにしてもギムリ、君もマニカンのことを言えないじゃあないか。随分ブリミル教に詳しい！」

ギムリは、それはないと言うように手を振った。

「僕はただ、始祖への祈りの長々とした言葉を覚えなくていいという、その教えに惹かれて名前を覚えただけさ。その先の知識は雑学のようなものだよ。」

だって、彼らの名前さえ出せば、ブリミルに帰依しますと唱えるだけで

敬虔な信者扱いして貰えるんだ。すごい楽じゃあないか！」

「僕もその二人の名前、覚えさせて頂くよ！」

初めは憎しみ合っていた二人。

それが、始祖の奇跡の一端に触れることで、心通わせる友にまで至ったのであった。

本職の司祭でも、宗教体験を経ることで真の信仰を獲得し、

世の中の道理を理解出来るようになることは珍しくないという。

争いの絶えないこの世界。

だけど人は分かり合える。

そのことを彼らは、確かに悟ったのだった。

「あの、ちよつと聞こえていますか？」

「！ 何だい、君！ いつの間に!？」

見れば彼らの目の前まで、顔色の悪い亜人が近づいてきていた。

「さっきからずっと呼んでいました。」

全く、話に夢中で気が付かなかったのですか？

とつくに3人目の挑戦は終わりましたよ。」

二人とも棄権する気かと思いましたが。そう言っただけの使い魔はため息をついた。

彼らは思わず顔を見合わせた。

「ギムリ、君の言うとおりになったようだよ」

「うん、信じられないが、本当のようだね。」

「どうやら彼は信心が足りなかったらしい」

「それから二人は黙って見つめあった。」

「おもむろにエイジャックスが立ち上がった。」

「じゃあ、行くよ」

「・・・気を付けろよ」

「ああ」

エイジャックスは、精悍な顔つきで穴に足を運んでいった。

穴の近くにはまたゴミが捨てられたのか、ボロクズの山が高くなっていた。

最後の挑戦者から一つ手前というこの順番、今までのパターンからいえば

ギムリにお鉢が回るに決まっている。

つまり自分が何か、失敗をして敗れ去るという訳だ。

だが彼はもはや、そんなことには惑わされなかった。

彼は思った。

「試されているな、と。」

この状況、経験的にも、感覚的にも無理だと分かる、だから諦めろと彼の内なる声が囁く。

だがそんな絶望的な状況だからこそ、自分は始祖に試されているのだ。

「そう、自分の信仰心というものを。」

ギムリは先ほどああは言ってくれたが、やはりエイジャックスには善人が始祖に祝福されるというのも、間違いない真理であると思えた。

それだけに今、始祖の奇跡を目の当たりにして回心した自分の信仰心が、

「こういう厳しい状況で試されているのだと、彼は研ぎ澄ました心で察していた。」

「エイジャックス、始祖に運命を委ねます。」

敬虔なる言葉と共に、彼は穴へと足を踏み入れた。
もし自分がギムリに騙されていて、地獄に落ちることになったとしても、後悔はない。
そんな心境だった。

次にギムリが呼ばれるまで、数秒も掛からなかった。
いよいよ自分の番が来た。

ギムリは気を引き締めた。

この奇跡の連続、これはもはや運命と言っていいだろう。
ブリミルが、僕にもっと輝けと囁いているのだ。

ついでに、友人のギーシュの仇も討てる
だが油断してはいけない。

どんなに祝福された状態であれ、始祖への信仰に淀みがあってはいけないのだ。

だから余計なことを考えてはいけない。
やっぱりギーシュの仇討ちのことは忘れておこう。

彼はバシンと頬を叩いた。

彼なりの、気合の入れ方だった。

「ギムリ、行きますす！」

彼がいぎ足を穴に踏み入れようとしたところで、彼ははたと立ち止まった。

何か音が聞こえた気がしたのだ。

何だか、押し潰されたカエルが絞り出すような、
そんな弱弱しくも気味の悪い異音だった気がする。

「うづう……」

今度は確かに聞こえた。気のせいではない。
ギムリは訝しんで、音のした方に向かった。

「確か、あの亜人が捨てたゴミの方から聞こえてきたな」
彼はボロクズの山に近づき、耳をそばだてた。

「ギム……り……」

「エイジャックス！」

ギムリは跳ね上がった。何とボロクズのように見えていたのはエイジャックスだった！

その下に積まれたボロクズのようなものも、よく見れば今までの挑戦者たちだった。

「マモノだ・・・全てを飲み込む、マモノがいる・・・！ グフツ！」
「エイジャックス!!」

エイジャックスは全てを言い切ると、首をがっくりと落として動かなくなった。

どうやら気絶したらしい。

彼の必死のメッセージを受け取ったギムリだったが、もう彼に穴へと飛び込む勇気はなかった。

どのような目に会えば、このような酷い姿になるというのか！
ギムリは心の底から震え上がった。

「ぼぼぼ、僕の戦場は、ここではない！」

彼は震えた声で回れ右した。

あんな物騒な穴の中に潜っていけるものか！

これはそう、壮大な威力偵察だったのだ！

確かに犠牲は大きい。予想外の被害だと言える。

しかし、代償は大きかったが、得られた情報はそれだけ貴重だった。

結論として、自分は戦うべきではない。

確かに、ルイズらをオシオキして、キュルケを慰めようという当初の計画は崩れ去った。

しかし悪戯に示威行動に走るばかりでなく、

負け戦を回避することも政治の世界では大切なことである。

トリステイン魔法学院の生徒である自分は、将来、生き馬の目を抜くような貴族社会で

生き抜くためにも、そういった処世術を学んでいかなければいけないのだ。

というよりそもそも、キュルケ相手の恋のライバルども全員が死に体になった今、

彼女の隣は既に自分だけのものである。

ギムリは意気揚々と彼女の部屋に向かおうと思った。

しかし彼は塔の入り口近くで、意外な人影を見つけたことになった。

「キュルケ！ 一体どうしたんだい、こんなところで！」

キュルケは妖艶な微笑みを浮かべて、まあちよつとね、と答えた。

「こんなところにいるても退屈じゃあないかい？」

「そうだ！ 君さえ良ければ、今夜二人で一緒に・・・」

そう言い掛けたギムリの唇を人差し指で塞いだキュルケは、熱っぽく顔を近づけた。

ギムリの顔が真っ赤になっていく。

周りからは豪快な性格だとか思われている彼も、彼女の前では哀れな子羊に過ぎない。

「ねえ、私ね？」

ギムリはドキドキしながらキュルケの言葉の続きを待った。

「臆病なのって、キライ」

.....

「うおおおおおおお!!」

ギムリは叫びながら穴に飛び込んだ。

やってやる！ やってやる!! やってやる!!!

どんなマモノが相手であろうと、何するものぞ。

今の自分は、7万の兵士にだって立ち向かって見せる！

そう意気込んで彼が足を2歩、3歩と、荒々しく踏み出したところで、彼の眼は驚愕に彩られた。

なんと、ルイズもその使い魔も、足をもう少し伸ばしたところに突っ立っているではないか！

「馬鹿め！ 僕が来ないと思って油断したな！」

彼はルイズに向かって杖を突き付け、そのまま一歩、足を踏み出した。

その瞬間だった。

彼の足は、彼の意図しない方向へ曲がっていった。

彼は、一秒が何秒間にも引き伸ばされたような研ぎ澄まされた感覚の中、

ゆっくりと首を動かし、足元に目を向けた。

踏み出した右足が、緑色をした無数の大きな塊に沈み込んでいた。

彼は、今度は時が加速していくような感覚を覚えた。

いや、正確には違うな、と彼は考えた。

本来の時の流れに、感覚が戻ろうとしているだけだ。

足を取られた彼は、瞬く間に全身ごと緑の激流に飲み込まれた。

コケッ！

コケコケコケッ！

コケコケコケコケ！コケコケコケコケ！

コケコケコケコケコケコケコケコケコケコケコケコケ！

コケエツーーーーー!!!

「ヤッダーバアアアアアアアアアアア」

彼が再起不能のぼろ屑になるまで、1秒も掛からなかった。

「こんなに呆気なく倒せるなんて!!」

ルイズは驚きと共に喜色を表した。

「理屈で知っているのと、実際にやってみるのでは大違いでしょう？」

コケを一か所に集めに集めることで、彼らはロクに呪文を唱えるヒマもなく

無数のコケの突撃を受け、体力をゴツソリ削られ息絶えるのです!!

終わりのないコケ攻撃で終わり！これがコケ地獄・エクスペリエンスによるレクイエムです！」

魔王は誇らしげにそう言った。

「・・・いや、それにしてもルイズ様がダンジョン中のコケを一か所に集められることに

気付いて下さってよかったです。コケは一度壁に当たり曲がった

が最後、

元来た道に戻れない。ですからT字路に掘った穴を幾つも繋げれば、

それだけで遠くからコケをニジリ寄せることができるというワケですな。

私、突き放すようなことを言いはしましたけど、

単にコケの動きを知っただけで、ちゃんと応用が出来るとは大したものですよ。」

「ふん、ご主人様を試すような真似するだなんて、百年早いだよ」

文句を言いつつも、ルイズの表情は少し誇らしげであった。

「私が驚いたのはそれだけではありません。

あやつらに私やルイズ様ご自身の姿をさらすことで油断や動揺を招き、

そのまま速やかに彼らを葬り去ったその手腕！・・・本当にお見事でした。」

それを聞き、ルイズは胸を張って魔王に言った。

「いいこと、よく覚えておきなさい！」

私は誇り高きヴァリエールの三女、この程度の困難で躓いたりはないんだから！」

「その意気で世界征服です、ルイズ様！」

「ああもう、こんなに簡単に倒せると分かっていたいけば、

私の悪口言うやつらも全員呼び寄せてやったのに。

私のかわいいコケたちが、みんな全部はっ倒してやるんだから！」
「フフフ、ちよつとはダンジョンのこと、気に入って頂けたようで何よりです。」

魔王はそう言うと、改めてルイズのことを褒め称え始めた。

「いやはや、それにしてもルイズ様。さすが私が見込んだだけのことはありません。」

コケ地獄という戦法をご自分でお気づきになられたことも確かにスバラしいですが、

私としては何といっても、入口スグのところコケを集めたことを

ホメたいです。」

「そう？あれって、正直失敗したかと思っただけけど・・・
だって、一人目も二人目も速攻で倒しちゃうから、

残ったやつらが警戒し始めないか、気が気じゃなかったわ！」

魔王はそんなルイズの言葉を聞いても、嬉しさが止まらない様子だった。

「そんなぐ謙遜なさらずともいいですよに！　頭の良いルイズ様のことです。」

ドーせ深い意図があつたんでしよう？　さすがのマガマガしさです！」

「・・・へ？」

身に覚えのないことを言われ、ルイズは困惑した。

「確かにキュルケ嬢の恋人らはウザい奴らでした。

恋人が落ち込んでる。そうだ、慰めよう。折角だから、ジブンの良いトコ見せてみたい。

ハイハイハイってな軽いカンジでやってきたあいつらを、

数マートルも歩かぬ内に秒殺！しかも相手は最弱モンスター！

彼らのプライドはズタボロでしょう。きつと心に癒えないキズを負つたに違いありません。

たとえ今はヘーキでも事あるごとに周りから、え？あいつコケに負けたの!？」

ダサっ！とか言われて、死にたくなるコトでしょう。」

「ふん。そんなの自業自得よ！」

「・・・それにあのキュルケ嬢のことです。こうもナサケナイやられ方をした彼らは、

きつと彼女に振られ、踏んだり蹴ったりになることでしょう。

ルイズ様は知っていますか？

多感な時期に彼女とまともな別れ方が出来なかった者の末路を！」

「な、何よ。ただ単に振られただけでしょ？」

魔王の大げさな口ぶりに、ルイズは一抹の不安を覚えながらそう答えた。

「そりゃあ、キュルケ嬢にしてみればただ振っただけでしょう。ですが振られた方にしてみれば、そう単純には割り切れないものなのです。」

ましてや彼らは彼女にゾッコン、そんな時にこっ酷い別れ方をする訳ですからね。

このことを一生引きずるに違いありません！

大人になってからも彼女を忘れることができず、擦れ違う女性に彼女の面影を探しては、

今日という日を思い出して悶え苦しむのです。

あの時あんなことが無ければ、彼女があんなハゲ散らかした中年と結ばれたりはしなかったのにと！」

「アンタのキュルケへのイメージはどうなってるのよ！

いや、それよりも・・・ねえ、大げさに言ってるのよね？」

「何がですか？ それにしても、いやはやまったく、

ツルハシで彼らの人生まで破壊するなんて、私ルイズ様を見誤っております！」

「じよ、冗談で言ってるのよね！だって、そんな私なんか

他人の人生を狂わせたりなんか、出来るわけがないもの！ ね？」

縫う様に話し掛けたルイズを、魔王は生温かいものを見るような優しい目で見つめ返した。

「う・・・そ・・・」

ルイズは、自分のしたことが他人に与える影響の大きさを、

彼らに癒えることのない大きな爪痕を残したという事実を信じる事が出来なかった。

「この一件が噂として広まれば、学院の他の生徒たちの心にも

大きな不安のタネをまくことが出来るはずです。

人をコケにして踏みニジリ、その影響でもって更なる多くの人々の不安を招き、

世をゼツボーで覆い尽くしていく。

今回はそんなルイズ様の才能のヘンリンを垣間見た気が致しました。」

ルイズは慌てて否定の声を上げた。

「違う！違うわよ！ 聞きなさい！ 私、初めはダンジョンの奥の方に立ってたでしょ？」

コケを入口のすぐ近くに集めたのは、もしコケが全部やられちゃった時に、

後からマモノを足すための距離を稼いだからなのよ！

あんまり呆気無く倒せるから、最後は入り口近くまで見物に来たけど・・・

だから、そんなあいつらの人生をどうしようだなんてつもりは！」

「何とーあ奴らをコケにするだけでは飽き足らず、

更に強いマモノどもを差し向けてゼツボーに追い落とそうとしていたのですね！

さすがルイズ様です！」

「いや、違うわ！ そうじゃない、そういう意味じゃないわよ!!」

「照れなくてもいいのです。人の身も心も、その後の人生ですら破壊するだなんて、

なかなかできることじゃありません。もっと自信を持ってください。

そもそも学院の連中はルイズ様を軽んじすぎなのです。こんなにもマガマガしいのに！

ルイズ様は魔法の座学で一位が取れても、実技がダメなせいで蔑まれていたのでしょうか？

しかし生徒の才能というものは、実技テストの点数で計られるものが全てではない。

そんな雑草魂を示してくれたルイズ様には、特別にウィードの称号を授けましょう！」

「いらないわよ、そんなもの！ いや、そもそもそんなつもりじゃなかったのよ！」

「何とーさすがルイズ様です！

意識なんかせずとも、息を吸うかのようにそんなマガマガしい行動

を取れるとは！

なかなか出来ることじゃありませんよ！」

「そんな、そんなつもりじゃ無かったのよーっつ！！！！」

夜の学院に、彼女の悲鳴が響き渡った。

才能を持つ者に苦悩は付き物です。

きつとルイズ様は多く悩み、時には挫け、それでも持前の強気でもって立ち直り、

愚直に前へと進んでいくに違いありません。そう、このニジリゴケの軌跡のように！

STAGE 12 おや？マモノたちのようすが…

やり過ぎた。

学院の生徒を散々痛めつけたと聞いて、教師やクラスメイトたちはどんな目で私を見るのだろうか？ 今度こそ、本当に二つ名が『破壊神』になるかもしれない。そんな来たるべき未来にルイズが頭を抱える中、魔王はワハハという甲高くもしわがれた声で笑い続け、彼女の頭を余計に悩ませた。しかし彼はふと声を潜めると、急にじつと地上の方を見つめ始めた。

「違う、私は破壊神なんかじゃないわ。これはきっと何かの間違いな
のよ…。」

「ルイズ様」

「何よ！ もう二度とあんたの話なんて聞かないわ！

やりたくもない勝負を受けた挙句、勝ったら勝ったで悪名が広まる
ですって!？」

冗談じゃないわよ！元はといえばあんたのせいでこんな戦いを強
いられてるんじゃない!？」

ルイズは非常におかんむりであったが、魔王はどこ吹く風と言葉を
続けた。

「どうやらそんなことを言っている場合でもないようです。

誰か、こちらに向かってくる予感がします。

このダンジョンに挑もうという新たな勇者かもしれません。」

「ええ!? キュルケの恋人たちならやつつけたでしょ?」

まさか他にも恋人がいたっていうの?!」

「そこまでは分かりませんが、準備をするに越したことはないでしょ。
う。」

魔王と勇者は引かれ合うというのが定めですしね。

それに私のシックス・センスはよく当たるのです!」

「シックス・センス? ちょっと、待ちなさい。

見聞きしたんじゃないくて、第六感が頼りってわけ?」

それって、ただの勘ってことじゃない!」

慌てて損したと憤慨するルイズに対し、魔王は考え込むような様子を見せた。

「ふむ、ルイズ様はもうちよつと、自分の知らない世界への想像力を働かせた方がいいようです。」

私にはハッキリと見えるのです。コケに敗れし無念を抱えたタマシイが、

怨嗟の声と共に強大な敵を呼び寄せるのを！」

「ちよつと！ 殺してまではいないわよね！」

何のためにあいつらを穴の外に捨てさせたと思ってるのよ！」

魔王は聞えよがしにちつと舌打ちすると、これだからルイズ様は甘いのですとぶつぶつ呟いた。

ルイズのこめかみがぴくぴくと動いた。

「ねえ、聞こえてるんだけど」

「聞かせているのです！ そのまま放っておけば、

イロイロと分解されておいしく魔分を頂けたものを！」

「それこそ冗談じゃないわ！ そんなの破壊神どころか死神よ！」

掴み掛からんばかりの表情で睨み合う二人だったが、魔王は先に視線を逸らすと、はあとため息を付いた。

「ともかくルイズ様、これからまた敵が来るかもしれない時に

言い争っていても仕方ありません。

ルイズ様はイロイロお悩みの様子ですが、どうしてこうなつたと落ち込んだり、

どうしてこうなつた！と踊り出したり出来るのも、勝っていればこそなのです。

ここは急いでダンジョンの再構築を急ぐべきでしょう。」

だが魔王の勧めに対し、ルイズの反応は薄かった。

「もうコケがいるじゃない」

「ニジリゴケだけで勝てるなら私だって苦労しないのです！

ダンジョンに訪れる勇者というものは、段々と強力になっていくのが世の定め。

ライバルに負けないうよう、新たなマモノをゲットして戦力強化を図

り、

ついでに凶鑑コンプも目指すというのが一流のツルハシマスターというものなのです!」

「何がツルハシマスターよ! そんなもの目指してないわよ!」

大体、さつきはこのコケ地獄で瞬殺出来たんだし、ちよつとやそつとじゃ負けないでしょ?」

声を荒らげたルイズに対し、魔王は静かに首を振った。

「・・・ルイズ様、百聞は一見に如かずとは言いますが、

さすがに負けると分かっているものを座死してはおけません。」

「何よ、私には分かっているのよ! 今以上に強くなったら、

それだけであんた、私のことをよりマガマガしくなったとか言うんでしょ!」

「そんなに気にすることですか? もうすでにマガマガしいなら、更にマガマガしくなったところで

「よく聞こえなかったわ。私が何ですって?」・・・いえ、何でもありません・・・」

ルイズにギロリと睨まれた魔王は、すごすごと言葉を引つ込めた。しかしすぐにそわそわし始め、ルイズにおそるおそる声をかけた。

「ルイズ様、確かにコケ地獄は完成された戦術です。

簡単かつ少ない労力で多大な効果が得られる。まさに理想的と言っているでしょう。」

実際、さつきは呆気ないほどカンタンに勝てたわけですしね。

でも冷静になったルイズ様なら、この戦法がとんでもない脆さを抱えていることにも気づけるはず。そう私は信じています。」

魔王の意味深な言葉にルイズは考え込むと、はつとして顔を上げた。

「お気づきになりましたか?」

「分かったわ、あんたの言いたいことが。」

いくらコケを一か所にかき集めようと、一匹一匹は弱いままってことよね」

「そうです。ニジリゴケなんて大概の相手には一撃で倒されます。」

コケ地獄戦法においては、そんなニジリゴケの全てが狭い場所に押し込められているのです。

考えてもみてください。勇者が剣を1回振り下ろします。するとそれだけで何十匹もの

コケが千切れ飛び、我々の戦力は激減するのです。

想像してみてください。もしメイジが一発でも魔法を放つたとしたら。

風の魔法が狭い通路の端から端まで吹き抜けていきます。

次の瞬間、我々魔王軍に戦えるものは誰一人残されていません。

文字通り全滅するのです！」

「あなたの言いたいことはよく分かったわ。

ところで何シレッツと私の作り出したマモノたちを、魔王軍とやらに組み込んでるのよ。

あんたに貸した覚えはないわよ！」

「大丈夫です。ルイズ様も魔王軍に含まれておりますので」

「なお悪いわよ！」

ルイズは瞠目したが、彼女の懸念は魔王に正確には伝わらなかった。

「地位のことならばシンパイしないでください。もちろんルイズ様の序列は第0位です！」

国家転覆を目論むマモノたちの首領としてMiss. 0を気取るのも悪くないでしょう。

ニジリゴケの給水力を利用して国土を砂漠化させ、政府に圧力を掛けていく。

そして現政権に不満を募らせた民衆が内乱を起こした暁には、

国の実権を奪取して鬱^{うづ}苦しい国を作るのです！」

支配形態は合衆国がいいか連邦がいいかに悩み始めた魔王の話を、ルイズはもう既に聞いてはいなかった。とつくの昔に嫌気がさしていたルイズは、これ以上与太話ばかり聞かされては堪らないと思いきつさとダンジョンに手を加えることを決めた。

「馬鹿なこと言っていないで、とつとと何かアドバイスしなさい。

まあどうせコケの次は、アレの出番なんでしょうけど」
そう言って、ルイズは嫌そうな顔をした。

「よく分かっているではないですか。コケはムシの格好のエサとなります。」

ですからコケむしたダンジョンは、ムシを主戦力としたダンジョンを作る上でも

絶好の環境となるのです！」

やっぱりかと、ルイズは更に嫌そうな表情をしたが、落ち込んでばかりもいられないと顔を上げた。

「今度もマモノの数を増やしていけばいいのよね？」

でも、ガジガジムシって戦闘ではどれだけ使えるのかしら？

前はギーシユにすぐやられてたと思うんだけど・・・」

「いえいえ、コケの捕食者たるムシのポテンシャルを舐めてはいけません。」

ムシはコケと違ってふらふらとダンジョンを隈なく動き回ります。

ですから一か所に集めて相手を瞬殺というのはなかなかムズかしい。

ですがガジガジムシはそれ一匹だけで、ニジリゴケの何倍もの強さを誇ります。

ですからたくさんコケを生み出した分、それをエサにムシを育てていけば、

イイ感じに勇者を迎え撃つムシの巣が出来上がるハズです。

あわてふためく勇者どもは『ムシだー！』とか叫びながらパニックに陥ることでしょう！」

そう言って、魔王は暗い笑みを浮かべた。

「わたしムシって嫌いなよね。あんなでっかいムシがうごめくダンジョンなんてぞつとするわ。」

ムシをそんなに増やさなくても、トカゲおとこを使えばいいじゃない。」

それを聞いて魔王はふむと考え込んだ。

「確かにムシは生理的にイヤだというのも、分からないではないです。」

が・・・

しかしここでもやはりツルハシとマモノは使いよう。そもそも十分な数のムシがいなければ、トカゲおとこどもも生きていけませんし、

それにトカゲおとこをあえて出さないほうが、ダンジョンのいい場合もあるのです。」

「それもやっぱり、コケ地獄の時と同じ発想かしら？」

ムシをトカゲおとこに捕食させずに数を増やそうってことよね？」
「その通り、ルイズ様もちゃんとワカツておるようですね」

魔王は満足げに頷いたが、ルイズはある疑念を捨て去ることができなかった。

「・・・やっぱり納得できないわ。ガジガジムシがニジリゴケより強いと言っても、

前のギーシュの時を考えるとたかが知れてるじゃない。

コケとは違って一か所に集められない分、

コケ地獄より弱くなることだつてあるんじゃないかしら？」

疑問をぶつけたルイズは、魔王がニンマリと笑い出したのを見てぎよつとした。

「フ・・・フフフフフ・・・！」

「な、何よー！」

「いやはや流石はルイズ様です。マモノのことをよく洞察しておいでですな。

ですがシンパイはご無用です。確かにガジガジムシは少々もろいですからな。

不安になるのも仕方がないでしょう。

しかしそうであればこそ、もっと強いマモノを呼び出してしまえば良いのです！」

ルイズは目を丸くした。

「何よ、前に聞いたもの以外にもマモノがいるっていうわけ？」

あ、もしかしてドラゴンとか！」

しかし目を輝かせ始めたルイズに返ってきた答えは、何だかよく分

からない精彩を欠くものだった。

「いえいえ、確かに他にもマモノはたくさんありますが、そういうイミではないのです。」

確かに別の魔物ではありますが、ある意味今まで見てきたマモノと共通している部分が多いと言いますか・・・」

「一体、どういう意味よ?」

「聞きたいですか!? ルイズ様!」

「いや別にいいでしょう!! 今回も特別に説明しようではないですか!」

魔王直々のマモノ解説が聞けるなんて、こんな機会そうそうありませんよ!」

魔王は上機嫌になりながら、レクチャーを開始した。

「説明をするためにも、ここでは是非ルイズ様に知っておいて頂きたいコトバがあります。」

何でも全身鎧な感じのピカピカな勇者が語った言葉らしいんですが、

曰く、『雑種という種はない』と!」

ルイズは、はあと気の抜けた返事をした。

「私今まで、コケとかムシとか一口に言ってきましたが、

それらの内にも多彩な種類があるので!」

色合いだって大きく変化しますから、色取り豊かな極彩色のダンジョンを

作るのだって夢じゃありません!」

「・・・」

「アレ? 反応がよくありませんね?」

「だって・・・結局ムシなんですよ?」

大きくて、ぶんぶん飛び回ったり、カサカサしたりするんですよ? そんなものに色のバリエーションが増えても嬉しくなんかないわよ」

「いえ、われらがムシはカサカサというよりガジガジしているというのが特徴で「一緒よ!」

大体色が変わったところで何よ。そんなもの、戦いには関係ないじゃない」

だが魔王はルイズの反論に、とんでもないとしても言うような表情をした。

「ルイズ様は、イキモノの色というものを軽く見ていませんか？

キビシイ自然の中を生き抜いているマモノにとっては、

色一つとってもなぜそのようなようになったのかということに深い理由があるのです。

そして彼らの持てるポテンシャルが違うからこそ、違う色をして実力を誇示しているのです。

ルイズ様だって、白いキノコに交じって真っ赤なキノコが生えてれば、

これはウマそうだと思うでしょう？」

「食べないわよそんなもの！ とにかく、それじゃあマモノの色違いだと

強くなったりもするってことかしら？」

「トーゼン大きく変わります！ 別種ですから名前だってトーゼン違います。」

「じゃあ、ガジガジムシ以外のムシも生み出せるのね？」

「そうです。名は呈を表すモノ。ルイズ様、聞いて驚かないでください。

今回生み出して頂くのは、なんとデス様なのです！」

「デス様？」

「そうなんデス！ 体色、色鮮やかなクリムゾンのデス様こと、

デスガジガジを呼べるのDEATH！」

そう言って魔王は息巻いた。

「名前だけだと強そうね。デスなだけに」

「もちろんデス！ 一口に強いと言っても色々ありますが、デスガジガジは体力、攻撃力ともに

ガジガジムシを大きく上回ります。当然、すばやさもアップ！…赤いだけに。

繁殖能力もアゲアゲな感じで、大変増え易くなっておるのです。」
「強くて数も増やし易いつて、すごいじゃない。それで、どうやって呼び出せばいいのよ?」

「ルイズ様、ツルハシを手にしたまま目を瞑ってください。そして思い浮かべるのです。」

強化したいマモノが、より強くなったその姿を! デス様の雄姿を強く念じて掘るのです!」

「でも私、デスガジガジなんて見たことないわよ?」

「ノープロブレムです。デスガジガジは見た目、赤いガジガジムシと違ったところです。」

ですから先ずはフツのガジガジムシをイメージし、

次にそれが赤くなった姿を想像する。

後は、そのまま養分がすっかり溜まった土を掘ればよいのです。」

「誰が好きであんなでつかいムシの姿なんかを・・・」

ルイズは文句を言いながらも目を瞑り、まだ見ぬムシの姿を思い浮かべようとした。

「やっぱりデス様デスからね、血の赤を思い浮かべるといいでしょう!」

「ツ・・・」

「そうそう、言い忘れてましたが成虫の翅は黄色いのです!」

名前もデスフライに代わって、赤と黄のコントラストが映えるのです。

きっとダンジョン内をエキゾチックな雰囲気で満たしてくれることでしょう。

彼らの紅い体躯にチラツと黄色が覗く様は、まるで二つに割った焼き芋のようで

「イメージが沸かなくなるから黙ってなさいよ!」

ルイズはムカムカしながらデスガジガジを思い浮かべようとした。しかし心の乱れが大きくて、中々上手くいかない。

『白から赤・・・白から赤・・・』

ふとルイズの頭に閃くものがあった。

食堂でいつか見た風景・・・

白いフリルのついたシャツで着飾ったギーシュ

そこへ近づくとモンモランシーの影

頭からワインをご馳走になって、赤く染まったギーシュ

これだ。

ルイズはギーシュの変化する様子をガジガジムシのイメージに重ね、
デスガジガジを思い描いた。

ルイズが自信を持ってツルハシを振り下ろすと、特に問題もなく赤
いムシが生まれ、

ガジガジと顎を鳴らしながらコケを求めに歩き始めた。

「無事生み出せたようですね。これでダンジョンの戦力を

大きくアップすることが出来るでしょう・・・ルイズ様？」

魔王がふと気が付くと、ルイズは俯き、肩を揺らしていた。

「・・・でよ」

「?? 何か言いましたか、ルイズ様？」

「・・・何でよ、何で最初から教えないのよ！このバカあ！

初めからこうやって強いを出しておけば良かったじゃないの！

あんた、私を無駄に危険な目に合わせたわね!!」

息巻いたルイズは魔王に詰め寄り、首をがくがく揺さぶった。

「お、落ち着いてください！これには深い、深いイ事情があるのです
！」

「どういうことよ！ 下らない理由だったら分かってるでしょうね
！」

「これをやるにはルイズ様のお力をたくさん消費しなければならぬ
のです！

その証拠に、今同じことをやろうとしてもルイズ様には出来ないは
ずです。

掘り初めから発揮出来るようなワザではないのです！」

「適当言うんじゃないわよ！ 穴掘る前より後の方が、力が減るに決
まってるじゃない！」

「し、しかしそういうモノなのです！ルイズ様、冷静にご自身の力をお確かめください。」

フィーリングで構いません。ダンジョンを掘る前より、今の方がチカラが漲ってるカンジしませんか？」

ルイズは胡乱な目で魔王を見つつも、自らの体調を省みた。．．．確かに、今の自分は力が有り余っているような気がする、ルイズはそう感じた。魔王を締め上げている手に入った力も、普段ならここまですり込まないような気がした。

「言われて見れば、確かにそんな気も、まあ、しなくはないけど．．．でも力が増すなんて理屈に合わないわ。どうして穴を掘った後で力が増えるのよ？」

不思議がるルイズに、魔王はふふんと笑みを返した。

「そこはダンジョンの頂点たる破壊し「ルイズよ!」．．．ルイズ様であればこそです。」

ダンジョンとは複数のマモノからなる生態系にして、それ全体が一個の生命体のようなモノ。

攻めてくるニンゲンどもが地上の口から入り、ダンジョンという腹の中で倒れたとき、

そこから吸い取られた力がルイズ様の元へと行き渡るので!．．．多分。

いやテキトーな思い付きを言っただけなんですけどね。深く追及するだけヤボつてもんです。」

ルイズの一瞬青くなった顔は、すぐさま怪訝なものへと変わっていった。

「とにかく侵入者をカレイに撃退する度に、ガンバったワタシへのご褒美的な感じで

ルイズ様の力は増していき、その力で更なるマモノの強化やダンジョンの拡張が

可能になるのです!」

「よくそんなあやふやな話を力説できるわね」

ルイズは理屈のはつきりしないダンジョンの勝手にため息をつい

た。魔法の座学では一番を取るほどの彼女にとって、魔王のフィードバックに満ちたデタラメな説明は我慢ならないものであった。しかし彼に詰め寄ったところで空しいばかりであることを察した彼女は、考えることをやめてムシ作りに精を出すことにした。養分が溜まった土を見つけてはツルハシを振り下ろす。ただそれだけの作業を、ルイズは黙々とこなしていった。ツルハシを振り下ろした瞬間にバラバラに砕け散る岩盤。その中からひよっこりと姿を現すマモノ。いつの間にかルイズは、その単純な作業に妙な快感を覚え、穴掘りにのめり込んでいった。

「む？ルイズ様、デスガジガジはある程度出し終わりましたか・・・な・・・？」

「何よ」

自分の仕事に水を差されたルイズは、ぎろつと魔王を睨んだ。

魔王は一瞬たじろいだだが、おずおずと言葉を続けた。

「ああ、まさかこうなるとは・・・まさかこの時点でこうまでなるとは・・・

いやしかし、これもある面では好都合かも・・・ いやでもヤツパリ・・・」

「何なのよ、ハッキリ言いなさい！言われた通りにムシを増やしたじゃない。

何か文句があるっていう訳？」

「いえいえ、ルイズ様はよくやっておられます。

心なしかツルハシさばきも段々と速くなってきたようで大変ヨロコバシイ。

しかしやはりルイズ様にはマモノの、ひいてはダンジョンの知識や経験が不足しているご様子。

ここらで一っ勉強しておくのも悪くないでしょう。

ルイズ様はムシがどのようなようにして増えるかは覚えておいでですか？」

ルイズは何か言いたそうにしながらも、素直に魔王の質問に答え

た。

「成虫が養分を溜めて幼虫を生むのよね」

「そうです。今このダンジョンでは、コケを食べたデスガジガジがサナギとなり、

そこから脱皮して成虫となったデスフライがまたコケを食べてデスガジガジを産み落とす。

そういうサイクルが生まれているわけです。

ちなみにムシ類の成虫は3匹まで幼虫を産み落とすことが出来ません。

その後は体力が減ってもコケを食べずに動き回り、最後には静かに崩れ去って土に戻ります。」

全部土に還るので環境負荷はゼロです！と魔王は誇らしげに語った。

「ちよつと待って、確かデスガジガジの方がガジガジムシより増え易いって話だったわよね？

両方とも生める数が変わってないじゃない！」

「ええそうです。確かにどちらの成虫も産み落とせるのは3匹までです。

しかしデス様ともなると、成虫になるまでの時間がガジガジムシよりずっと短く、

子を生み出すまでに時間が掛からないのです。

親から子の世代に至るまでのサイクルが短いことで、高い繁殖能力を手に入れる。

こればかりはガジガジしている虫もカサカサしている虫も変わりません！」

「カサカサしている虫って、アレよね」

ルイズはそれを聞いてうえつと、嫌そうな顔をした。

「残念ながら1匹いれば30匹は生んでくれるという訳にはいきません。」

「残念どころか悪夢よ！」

「しかしルイズ様、ムシを扱うときは、本当に繁殖力に気を使わねばな

りません。」

「どういうことよ？ 増えすぎてエサが枯渇するとか？」

「その通りです。たくさんいるから大丈夫だろうという、一瞬の油断が悲劇を生むのです。」

ホラ、話している間にも・・・！」

「ちよつと怖いこと言わないでよね！コケならさつきたくさん用意したんだから、

すぐには無くならないは・・・ず・・・？・・・あれ？」

驚くべきことに、ルイズが少し目を離していた隙にコケの数は激減していた。先ほどは激流のごとくひしめいていたニジリゴケは今やまばらになり、近くを無数のデスガジガジやデスフライが動き回っていた。

「な、なによこれ！ いくら何でも早すぎよ！」

「デス様の恐ろしき、少しはお分かり頂けたでしょうか？」

デスガジガジはこのようにガジガジムシよりずっと早く増える、つまりは

それだけ早くにコケを食い散らかしてしまう存在なのです。

そのデス様を、ルイズ様はチョッピリ多く出し過ぎたみたいだな。

だからこうも早くにコケが激減しているのです。

加えて言うなら、エサをコケ地獄に頼っていることも大きな問題です。」

「どういうことかしら？」

「いいですか、コケ地獄を作った場所へはコケの運んできた養分が多く溜まります。」

するとコケたちは、狭く閉じた場所の中で養分を吸っては吐いてを繰り返します。

つまりニンゲンで言えば、狭い部屋に閉じこもってダラダラともの食いながら

過ごしてるようなものなのです。大して動かないので、体力が一向に減りません！

そうなるとコケは命の危機を感じないため、一向に花を咲かせず、自然には数が増え難くなるのです。」

「……このままじゃコケの全滅は必至ってことね。じゃあ急いでコケを増やすわ！」

ルイズは早々に、ダンジョンのあちらこちらにコケを追加するための短い通路を掘り始めた。

数を増やすために、生まれたコケを2回突いてつぼみにするのも忘れない。

「これでコケの数も少しは回復するはずよね」

そう言ったルイズのすぐ近くに、高速で飛来してくるデスフライの姿が見えた。

ルイズは嫌な予感がしつつもそれらの動きを見守ると、ぐんぐん近づいてきたデスフライは、

栄養をたっぷり吸いこんで今にも花を咲かせそうなたつぼみに嚙り付いた。

デスフライはその場ですぐに3匹のデスガジガジを産み落としたり。そして生まれた彼らもまたすぐに、近場のコケやつぼみを食い荒らした。あつという間に3体のサナギが鎮座する、コケ一匹残らない空間が出来上がっていた。

「なんでコケが増える前に食べちゃうのよ！」

「彼らは本能に従って生きていますから、持続可能なダンジョンなんて考えてはくれません。」

ですからダンジョンを掘る者は、ムシがやってきにくい場所でコケを増やしたりだとか、

一度にたくさんのコケを出して全滅を防ぐとか、イロイロ工夫する必要があります。

「地中環境保護を推進できるのはルイズ様だけなのです！」

「とはいえ、と魔王は言いすらそうに続けた。」

「正直、今のダンジョンは生態系バランスが崩れすぎていて、

コケを安定確保するのは中々キビシイかもしれません。」

本来なら、ムシがいい塩梅に増えたところで勇者どもを倒し、

その後にはトカゲおとこ投入と行きたかったところなのですが……うーん、どうやら今すぐは来ないみたいですね。気配が遠ざかっています」

「……今更だけど、それって本当に来るんでしょうねえ」

「間違いアリマセン!!」

魔王は強く言い切るも、ルイズは不審な思いを隠せずにいた。

「とにかく、今の状態ではコケを足せば足すほどムシの数は増えていき、

必要なコケの数がもつと増えていくという悪循環が生まれていきます。

こうなったら必ず限界が訪れます。もしコケが枯渇してしまえば、折角数が多いムシたちも飢えて弱り、そのポテンシャルを活かせません。

下手したら戦う前に餓死なんてこともあるでしょう。」

「じゃあどうすればいいのよ?」

「……致し方ありません。現時点をもってトカゲおとこを解禁しましょう!」

ムシどもに餓死寸前の状態でフラフラされるより、トカゲおとこのエサとなってくれた方が

戦力も安定するということです。

それにコケを最低限確保するためにも、ムシの数を減らすしかないでしょう。」

「最初からそうしとけば良かったのよ!」

ルイズはダンジョン中を血眼で探したが、トカゲおとこを生み出せるほどの養分の高い土は

数えるほどしか見つからなかった。

「これじゃ全然トカゲおとこを出せそうにないわ!」

「落ち着いてください。新たにコケを作り出して、上手く養分を運ばせれば

案外カンタンにトカゲおとこを作れるものです。」

「でもコケって、思い通りの場所に養分を運んでくれるものばかり

じゃないじゃない」

それを聞いた魔王は、嘆かわしいと言わんばかりに首を振った。

「どうやらルイズ様はまだまだ破壊神様としての自覚が足りないようですな。」

「また言ったわね！あんた、ご主人様に向かってそんなこと言い続けて、

ただで済むと思っただけじゃないでしょうね！」

「そんな事とは何ですか！これは重要なことなのです！」

ルイズ様、その手に握ったツルハシは飾りですか!?

創造の前には常に破壊があるからこそその破壊神様なのです！」

魔王の剣幕にルイズは目を白黒させた。

「どういうことよ？」

「マモノたちの命運はルイズ様の手の内にあるということですよ。」

マモノたちを生かすも殺すもルイズ様次第、

その裁量の上にダンジョンの未来はかかっているというわけです。

ルイズ様、コケを初めてツルハシで突いた時の事、覚えていますか？」

ルイズはしばらく考え込んだ後、はっとなって息を飲んだ。

「まさか、ツルハシで思い通りに動かないコケを間引けっというの！」

「その通りです。確かに我々マモノは懸命に生きております。」

しかしいのちをだいにし続けた挙句、

みんなそろって勇者に全滅させられたのでは目も当てられません。

時にツルハシを彼らの頭上に振り上げてガンガン行かなければ切り開けぬ明日もあるのです。」

まあその明日って今なんですけどねという魔王の言葉を聞く前に、ルイズは深く考え込んでいた。自分が生み出した生命を、自分の手で土に還す。そのことに抵抗感を感じたルイズはしばし逡巡したが、デスガジガジがわらわらと群がるダンジョンの惨状が彼女を決心へと導いた。

「必要なことなら仕方ないわね。」

いいわ、間引きでも何でもして、どんどんトカゲおとこを足してい

くわよ」

そう言つてルイズは養分豊富な土を生み出すべく、幾つものコケ溜まりを作り始めた。間も無く生み出されたトカゲおとこたちは、そこから中をわらわらと動き回るデスガジガジに向かつてパカツと顎を開き、次々にバリバリと噛み砕いていった。

「こいつらがムシを食つて増えてくれれば、

もつとムシの数が減るようになってコケも回復するはずよね」

しかし魔王はそれには領かず、渋い顔をした。

「ルイズ様、ここはもう少し積極策を取るべきかもしれません。」

「積極策つて、どういうことよ?」

「ツルハシで潰せるのはコケばかりではないということです。」

それを聞いてルイズは思いきり嫌な顔をした。

「まさかムシも潰せつていうんじゃないでしょうね!」

「トカゲおとこの捕食にも時間が掛かりますし、

手っ取り早く生態系のバランスを変えるにはそれが一番でしょう。」

「イヤよ!植物っぽいコケならともかく、あんなでっかいムシを潰したら、

血とか他のイヤなものまで飛び散りそうじゃない!」

「はあ・・・これだからイマドキの若者は・・・!」

最近はニンゲンどもによる開発も進み、子供が生の自然に触れる機会も少ないのでしょうか?」

昔の子供は普通に虫と触れ合っていたものです。

カッコいい甲虫や美しい蝶を求め野原を駆け回ったり、

採取した幼虫を成虫になるまで飼育してみたり・・・

それが今やムシを見てギャーギャーと、キモチワルいと叫ぶ始末!

この魔王、嘆かわしいです。」

「少なくとも普通の子どもはツルハシ持つてムシを追い掛け回さないわよ!」

すると突然、ガジフライの一匹がぶんぶんと二人の近くを飛び回り、魔王のローブにピタツと止まった。

「うぎあああ!!ムシ、ムシーーー!! ルイズ様、早く取ってください!!」

「あんたこそ全然ムシに慣れてないじゃない!」

そうやって二人が騒いでいると、今度はバリツという音が近くで鳴り響いた。

トカゲおとこがムシを食べたのかしらと、期待と共にルイズは音のした方に首を向けた。

しかし意外なことに、そこにはただデスフライ一匹が元気に飛び回っているだけであった。

「・・・? 何だったのかしら、今の音?」

不思議に思いつつも顔を戻したルイズは、あからさまな落ち込み様で頭を抱える魔王の姿を目にした。

「ちよつと、いきなりどうしたのよ!」

「ルイズ様は今の、見てなかったのですね」

「何よ、一体何が起こったっていうの?」

「いよいよ悠長なことを言っていられなくなってきたのです。」

いいですか、ムシが増えに増えると、コケを足しても足してもあやつらのハラを

満たしきれなくなり、こういう悲劇が起こるのです。

今にも同じことがどんどん起きるでしょう。・・・見てください!」

そう言うとも魔王は少し離れたところに蠢いているムシの集団を指差した。しやかしやかと素早く地面を這い回るデスガジガジたちは、心なしかやせ細って見えた。するとそこに一匹のデスフライがよろよろと飛んできた。今にも落下しそうなその弱い羽ばたきに、ルイズが幾ばくかの哀れみを抱いたところでそれは起きた。かのデスフライは羽ばたきをパタリと止め、地面に落ちていった。成虫となり宙を飛ぶことを覚えたデスフライが、再び地に落ちる。痩せ細ったそのムシの死を予感したルイズは、思わず目を背けそうになった。だがデスフライは死ななかつた。そいつは器用に態勢を整え、地を這うデスガジガジの上に着地したかと思うと、そのままデスガジガジの頭に噛り付いた。先ほど聞こえた、バリツという音がダンジョンに鳴り響

いた。

「ほらアレです！さつきも同じことが起きていたのです！」

「」

デスフライにより、頭部に続けて胸部、腹部と、余すところなくガジガジかみ砕かれていく哀れなデスガジガジを、周りのデスガジガジは気にも留めずに通り過ぎていった。全てが終わると、腹を満たして元気になったデスフライは再び、力強く宙を羽ばたき始めた。

「　　な　　な　　なによそれえええ!!」

動揺を隠せないルイズに対し、魔王は昔を懐かしむように語りかけた。

「ルイズ様はムシを飼った経験はありませんか？」

何匹か捕まえていたはずなのに、いつの間にか数が減っている。

逃げ出したかと慌てるも、飼育ケースのフタはバッチリ閉じていて、

その不思議に頭を悩ませる。

微笑ましい少年の日の思い出というやつですな」

「全然、微笑ましくないわよ！」

「まあ、ルイズ様もご覧になった通り、共食いが起こるというわけです。す。

我らがガジガジするムシの成虫は、飢え過ぎると自分たちの幼虫でも構わず食べてしまいます。

そして先ほどのような光景は、ムシたちが飢えている限り際限なく続きます。

ちなみに100匹以上のムシたちを放置し続けても、生き残った一匹が強くなったりはしません。

ですからさつきとムシをある程度潰して、ばらけた養分でコケの量産でもしといてください。」

ルイズはムシの生態の悍ましさに身震いした。

「と、とんでもないわ！　守るべき子供を食らうなんて邪悪よ！」

このムシのこともっと嫌いになったわ！」

それを聞いて、魔王は困ったような顔をしている。

「こんなサイテーなムシなんか残しておけないわ！」

全部トカゲおとこのエサにしてやるんだから！」

「全部は困りますが、まあ意気込みはいいんじゃないでしょうか？」

ではさっそく、養分を土に散らすためにもムシの間引きを……」

「それはいやって言うてるでしょ！ 別に間引きに拘らなくてもいいじゃない。」

トカゲおとこだって繁殖して増えるんだから、少し待てばムシを一気に減らせるはずよ。

見てなさい、今ごろ卵から孵ったトカゲおとこたちが生まれる頃よ！」

しかしルイズの期待とは裏腹に、彼女が幾つかのトカゲおとこの巣を覗き込んでも、そこには卵一つ置かれておらず、またトカゲおとこの数が増えているようにも見えなかった。

「ねえ魔王、トカゲおとこが卵を産まないことってあるのかしら？」

「栄養の少ないムシを食べた場合は、まあそういうこともあるかもしれません。」

「ならたくさん食べさせれば済む話よね」

ルイズは一言、ゴメンねとつぶやくと、トカゲおとこにつるはしを振り下ろした。トカゲおとこは痛そうに顔を歪め、グアと鳴いた。だが彼は、ツルハシを持つ連中は理不尽なものだと心得ているのか、被害したルイズを追い掛け回したりはせずに、近くをさ迷い歩き始めた。彼はただただ体力の回復を求め、飛んできたデスフライに近づくと、バリツとその身体にかぶり付き、むしゃむしゃと咀嚼した。デスフライを一匹丸ごとペろりと平らげたトカゲおとこは、げつふうとおっさん臭い息を吐くと、満足げに腹をさすりながら巣へと帰って行った。

間もなく巣の奥から、ヒーンヒーンという苦しそうな声が響きだした。

「これで卵を産んでくれるわよね」

ルイズは他の場所でもトカゲおとこにツルハシを突き立て、その食欲を刺激していった。バリバリとトカゲおとこがムシを食らっても、

ムシの多さにはあまり影響が見られなかったが、このまま卵を産んでくれればそれも変わると、そう信じてルイズは必死に動き回った。同時にコケを足すことも行つたが、その度にデスガジガジがあつたという間に群がつてコケを食い尽くし、またコケにあり付けなかったデスフライは腹いせとばかりにデスガジガジへ噛り付いた。こんな悪夢もトカゲおとこが増えるまでだと、ルイズは強く念じ、目の前の惨状をひたすらに耐え続けた。やがて、トカゲおとこの苦しい鳴き声が止んだのを聞きつけたルイズは、急いで巢のあつた方に駆け寄つていった。

「やつと生まれたわね！」

トカゲおとこのろのろと這い出てきた巢の奥には、淡い青色をした大きな卵が残されていた。

ほつとした表情を浮かべるルイズに向かつて、魔王はボソツと呟いた。

「ルイズ様。卵は生まれてもトカゲおとこは生まれておりませんぞ。」
「何よそれ？ 卵か先かトカゲおとこが先かとも言うんじゃないでしょうね」

「何度も言いますがルイズ様、ムシを間引くことをおススメ致します。せめて、この場所だけでも……」

「しつこいわよ。大体、今さらなんでそんなことしないといけないのよ。」

新しく生まれてくるトカゲおとこのエサになるんだから、ムシの数は多いほうがいいわ！」

突如、バリツと何かが破ける音がした。

ムシの碎け散る音とは違う音だった。早くも卵が孵つたのだろうか？

ルイズは音の正体を探るため、期待と共にトカゲおとこの巢をのぞき込んだ。

そして彼女の全身に怖気が走った。

深く掘られた巢の内側、そこにはズルズル、ガジガジと卵を殻ごと食む

デスガジガジの姿があつた。養分をたっぷりと蓄えたらしきデスガジガジが

さなぎになるのを、ルイズは茫然と眺め続けた。

「食らつてやがる。早すぎたんです、ムシの襲来が!!」

ムシの数が多すぎると、このように卵が孵化する前にムシがやってきて、

トカゲおとこに食われるどころか逆に彼らの卵を食べてしまうこともあるのです。

だから間引こうと言つたのです。ルイズ様、ジブンの幼虫ですら食らう彼らが、

ほかのマモノに遠慮なんかすると思ひましたか?」

ルイズには、魔王の忠告が全く頭に入らなかつた。彼女の耳には今なお、グチャグチャと卵を食むデスガジガジの咀嚼音がこびり付いて離れなかつた。

「……もうイヤ」

「え?」

「ダンジョンなんて、もうこりこりよ! ……帰るわ」

ルイズは呆気にとられた魔王を残し、ダンジョンの出口を求めてふらふらと歩き始めた。

魔王は悲鳴を上げて、ルイズを追いかけた。

「そんなルイズ様、まだ負けてもいないのにココロのツルハシ、ポツキリ折れてしまったというのですか!?

そんなことではいつまでたつてもここを支配できないではないですか!」

「そんなもの望んでないわ」

「そんな! 私、ルイズ様の敵を取り除くために粉骨砕身するつもりですのに!」

「その敵をあんたが作り出したんじゃ、わけないわよ!

それにキュルケの恋人たちはもうやつつけたんだし、

後に誰が来ようと、もう私の知つたことじゃないわ!」

「そんな! マモノたちを見捨てるというのですか!?

ルイズ様にはマモノたちへの愛情というものが無いのですか!!」
「人聞きの悪いことを言わないでちょうだい！」

見捨てるも何も、あのムシたちが私の何を気にしているっていうのよ。

ただ近くにあるものを食い散らかしているだけじゃない！」

「破壊神としての良心はないのですか！」

「破壊神じゃないって言ってるでしょ!!」

ルイズは魔王といがみ合いながら、その足をどんどん速めていった。

「ルイズ様、考え直して頂く訳には参りませんか？」

そりゃあお優しいルイズ様には少々シヨツキングだったのかもしれないませんが、

彼らとて自然のセツリに則って、必死に生きているに過ぎないのです。

普段トカゲおとこに食われてばかりのムシが、そう、ほんのチョツピリ茶目つ気を起こして

反撃してみただけではないですか！」

「茶目つ気ってレベルじゃないわよ！あんなマモノ、この世にはいけないわ！」

「飢え死ぬっていうのなら、そのまま全滅すればいいのよ！」

「そこまで言うことないじゃあないですか！ マモノはトモダチ、怖くありません！」

さあ、トモダチと一緒に世界征服しましょう？ 世紀末には温暖化に乗じて増えた

ムシたちにウイルスを媒介させ、世界の破滅を目論むのです！

そうしてある程度人口が減ったところで、トカゲおとこの卵から作り出したワクチンを

使い救世主となる。そうすればルイズ様は、教皇なんか目じゃない人物として

世界中から称えられ……って、ああ、待ってください！

ルイズ様に絶交されたら死んでしまいます！」

「知らないわよ！」

「いや冗談、冗談ですって！ ルイズ様はちよつと真面目に考えすぎです。」

もつとニジリゴケみたいに頭を柔らかくするべきです！」

「誰が単細胞生物ですって！」

「そんなこと言ってますん！」

ルイズはもう完全に嫌気が差していた。

彼女は、その後も投げかけられる魔王の言葉に返事も返さず歩き続けた。

そしてそのまま、一度も後ろを振り返ることなくダンジョンの出口に足を掛けた。

穴から抜けると、途端にルイズの顔を夜風が撫でていった。彼女はようやく息の詰まる地下から

離れられたことに安堵し、外の澄んだ空気を胸いっぱい吸い込もうとした。

「はい、ルイズ」

「げえっ、キュルケ!!」

ルイズは思わず悪態を付いた。彼女の失礼極まりない返事と、スーブに落ちた虫を見るような表情は、誇り高いこの学院の生徒であれば10人中10人が怒り出すようなものであった。しかしルイズと仲は悪くても付き合いはそれなりのキュルケは、特に怒り出すような真似はしなかった。それどころかルイズのことを、滑稽なものを見るような目で眺め、ふんと鼻で笑った。我慢ならなくなったルイズは、すぐさま噛みつくように問いかけた。

「何であんたがここにいるのよ！」

「あら、おともだちの頑張ってる姿を見に来るのは何も可笑しなことじゃないわ。」

まあ、ボーイフレンドの一人も出来ないルイズには分からない話でしょうけど」

「余計なお世話よ！」

「いや、ガールフレンドもいなかったんだっけ？」

「何ですって!!」

鬼のような形相で荒い息を吐き始めたルイズを他所に、キュルケは『でもちよつと来るのが遅かったみたいね』とうそぶいた。

「驚いたわ。私が見に来たら、おともだちがみんなボロクズのように積み重なってるんだもの。」

ダメダメルイズも、ちよつとはやるようになったみたいね」

「ダメダメは余計よ!」

一方、それまで黙っていた魔王は地上の様子に困惑を覚え、おそるおそるキュルケに声を掛けた。

「あの、キュルケお嬢さま?」

「何かしら?」

「例のオトモダチの姿が見当たらないようなのですが?」

確かここら辺に積み上げておいたような・・・」

「ああ、そのこと? 私、弱い男は眼中にないの。」

全員振ってやったら、泣きながらゾンビみたいにとぼとぼと帰っていったわ」

「か、勝手な女ね」

ルイズは呆れた声を上げたが、それに対しキュルケは堂々と、釣り合いを求めただけよと言いつつ放った。ルイズはキュルケの自信に満ちた態度に気後れしまいと、無い胸を張って彼女に張り合おうとした。

「ま、あなたの恋人のことなんてどうでもいいわ。とんだ雑魚だったもの!」

そんな男を今まで有り難がってたあなたの目も節穴ってことね!

あいつらどうせ全員あなたの差し金か何かだったんでしょう!

形はどうあれそれを退けたんだから、私の勝ちね」

ルイズは得意げな顔でふんぞり返った。

だがキュルケはそれを受けて尚、余裕の微笑みを崩すことはなかった。

「私はただお友達にちよつと相談しただけ、後は彼らが勝手にやってくれたのよ。」

とは言っても、お友達のいないルイズには分からない話よね？
ま、あんたが私のせいだと言って言いたいなら、そうなんですよ？
あんたの中ではね」

「ふん！ 負け惜しみなんて無様なものね！

ねえ知ってる？ そういうのを負け犬の遠吠えっていうのよ！」

ルイズは腹の底からザマミロ&スカツとしたような、サワヤカさとは程遠い暗い笑みを浮かべた。

その表情にキュルケは一瞬黙り込むも、すぐに言い返した。

「でもルイズ、あんたが私に勝った気になるのはちよつと早いんじゃないかしら？」

「ふん、結果が出た後で何と言おうと」だってまだ挑戦者が残ってるもの・・・へ？」

不穏な言葉に凍り付いたルイズを他所に、キュルケは少し頭を傾けて言い直した。

「いや違うわね。挑戦者はどちらかというとあなたの方だもの。今まですつとゼロだったんだし」

「な、何を言ってるのかしら？」

「あら、胸だけじゃなく頭にも栄養が行かなくなったの？

これは思った以上に楽勝かもしれないわね」

ルイズはどうあつても嫌な予感、彼女自身にとって外れてほしい予想を確かめなくてはならなくなった。

「まさか、あんた……」

「ええそうよ。いなくなったボーイフレンドに代わって、私が相手してあげるわ。」

よくよく考えたら使い魔の恨みは自分で晴らした方が気分いいもの。

せいぜい覚悟することね」

ルイズは一瞬動きを止めるも、嘲笑うかのような調子で言い返した。

「お生憎様ね。私、今は誰とも決闘してみた野蛮なことをする気はないの。」

今日はもう、ここにあるダンジョンも営業終了よ。

そんなに興味があるなら一人で潜ってなさい」

キュルケは一瞬だけ顔をしかめたが、すぐに表情を変えると、落ち込んだ様子でしおらしくルイズに言った。

「あら、そうよね。私が悪かったわ。

あなたの都合のこと何にも考えてなかったわ。ごめんなさいね？」

「……今日はやけに物分かりがいいじゃない？ いつもそうしなさいよね！」

ルイズはそう言い残して、この場から足早に立ち去ろうとした。

「本当にごめんなさい。だってちびっ子ルイズはもうおねむの時間ですものね」

ルイズは、キュルケに背を向けたまま、はたと立ち止まった。

「どうしたのよ？ おねんねの時間なんですよ？ しっかり眠らないと成長しないわよ？」

身長とか、あと胸とか。あんたってば両方ともちびっ子よね」

ルイズは肩を震わせながら振り向いた。

「だだだ、だれがちびっ子ですってえ!!!」

「だってそうじゃないの」

キュルケはきよとんとした顔で言い返した。

「あ、あんたねえ！ 前からいけ好かない奴だとは思ってたけど、

今日という今日こそは許さないわよ！

あんたなんか、マモノたちのイケニエに捧げてあげるわ！」

「なら私は、あんたを簀巻きにして学院の入り口に飾ってあげるわよ」
「つつっ！ いい度胸じゃない！ 今日こそどっちが上なのか、白黒

つけてやるわ！」

そう言ったきり、二人は激しく睨み合った。

「待って」

突如、ぼそりと呟かれた言葉に二人はびくつとした。

「タバサ！」

いつの間に近づいたのか、彼女らの傍らには青髪の綺麗な小柄な少

女、タバサが立っていた。

「急に声を掛けないでよ、びつくりしたじゃない！」

それよりタバサ、まさか私にやめろなんて言うんじゃないでしょうね？」

非難がましくキュルケがいうと、タバサはふるふると小さく首を振ってそれに応えた。

「そうじゃない。心配、だから私も行く」

まあ！とキュルケが喜びの歓声を上げる一方で、ルイズの目の輝きは急速に失われていった。

「でもタバサ、これは私とルイズの問題なのよ。無理に付き合う必要はないわ」

「そんなことはない。それに個人的な恨みもある」

タバサはそう言って、ルイズと魔王の両者をジトツと睨みつけた。「授業でのこと、忘れたとは言わせない」

ルイズは自分の魔法によって保健室送りにした少女を前に、冷や汗をかきながら返事を返した。

「い、嫌な事故だったわね！」

「絶対に許さない。絶対に……」

どうやらルイズの一言は、他人事を語っているかのような印象を与えたらしく、

タバサの怒りはより一層高まったようだった。

「とにかくタバサも来てくれるなんて頼もしいわ。あなたはやっぱり私の親友よ！」

キュルケは元気良さそうにタバサに抱き着いた。

一方のルイズは微動だにせず、その目は早くも死んだ魚のようになっっていた。

魔王は魔王で、遠い目をしながら夜空を見上げていた。

今日も赤い月と青い月が煌々と輝いている。

「このまま二つの月に代わってオシオキされてしまうんでしょうか？」

魔王の呟きを聞いて、ふとあることに思い至ったルイズは、すぐに

キュルケに食ってかかった。

「ちよつと！ 二人掛かりでやって来るなんて卑怯よ！」

だがそれに対しキュルケは、はあ？という顔をした。

「何言ってるのよ。あんただって使い魔との二人掛かり、

おまけに自分が用意した穴に相手を引きずり込んでるんじゃない」

それに、とキュルケは付け加えた。

「ギーシュから聞いたわよ。使い魔の他にもマモノを集めてるんですって？

全然1対1じゃないじゃない」

「う、そ、それはそうだけど……」

痛いところを突かれたルイズは二の句が継げない。

どうやら、キュルケには既にルイズ達の手の内がバレバレであるようだった。

「と言うわけで、私も呼ばせて貰おうかしら。フレイムく！」

「キュル！」

「はっ！」

夜の暗がりには尻尾の炎を煌めかせながら、のそのそと真つ赤なサラマンダーがキュルケのもとに駆け寄った。

「ちよ、ちよつと！ 使い魔との仲が拗れたんじゃないの!? 何でいるのよ！」

慌てるルイズに対し、キュルケは何でもないことのように、仲直りしたのよと伝えた。

「雨降って地固まるとはよく言ったものね。

今や私とフレイムの信頼関係は揺るぎないものになったわ」

彼女の言葉は強がりでも何でもない、全くの事実であったらしい。

魔王が恐る恐る近づき交渉を持ち掛けるも、フレイムはそれを一蹴、火を吹いて彼を退散させた。

キュルケ、タバサの二人はルイズに杖を突き付けて言い放った。

「こんなに月も紅いから」

「こんなに月も蒼いから」

「熱い夜になりそうね」

「涼しい夜になりそう」

「じゃ、宣戦布告も済んだことだし、もうしばらくしたら突入させてもらうわ。」

あなたの全力とやらを真正面から叩き潰してあげるから、

せいぜい最後の悪あがきでもしてなさい」

「な、何でこうなるのよー!!!」

ルイズは魔王を引っ張りながら、逃げ帰るようにダンジョンへ戻っていった。

.....

「あなたはお留守番」

「きゅいきゅいーっ！っ！」

「あなたではこの穴に入れない」

「きゅいー.....」

.....

トリステイン魔法学院の地下深く、今そこに一人の少女が膝をついて項垂れていた。

「なんで私、ここに帰ってきちゃってるのよ。」

もう二度と戻らないって決めたのに.....私って、ほんとバカ」

「ルイズ様、諦めたらそこで試合終了ですよ？」

「試合にもならないわ.....」

ここに居るのは飢え死にしそうな大量の虫達と、まるで数の増えないトカゲおとこだけ。

トライアングルのキュルケを相手にしたら、あっという間に燃やし尽くされるわ。

あるいはタバサに風で切り刻まれた拳句、氷漬けにされるのかも.....」

「ふむ。逆に、氷漬けにされてから風で輪切りにされるといいう可能性もありますね。」

魔王がそう返すと、ルイズの目からはより一層、輝きが失われた。

「それって冗談にならないわよ。知ってる？ あの子、黒いうわさ

があるのよ。

よく学院から抜け出してるとみただし、帰ってきたときには荒事の
後みたいに

傷を付けてるって噂よ。しかもあのあからさまな偽名、きつと普通
じゃないわ。

多分、学費を裏の稼業か何かで稼いでるのよ」

負けたらラグドリアン湖に沈められるのかしら、それとも浮かべら
れるのかしらと、ルイズはどんよりしながら返事した。

「フッフ、そんなor2な気分のルイズ様に朗報です。

岩盤の一点を突いて内部から崩壊させるツルハ神拳の伝承者であ
るルイズ様が

そういう風に哀しみを背負うことで、ルイズ様に新たなる能力が目
覚めました！

なんと！マモノたちが無双な感じで転生出来るようになったので
す！」

決して言い忘れていた訳ではありませんと、魔王は言い加えた。

「……」

しかし、あまりに唐突な話にルイズは付いて行けず黙っていた。そ
れどころか、絶望に包まれた彼女は、何を言われたかも理解できてお
らず、言い返す気力もない様子であった。

「ルイズ様、そんなぼさつとしてる暇はありませんよ。チャンスです、
大チャンスです！」

今のルイズ様になら、このムシだらけで飢えまくりなダンジョンを
再生させることが出来るのです。きつとあの二人にだつて渡り合
えるに違いありません！」

深い哀しみを背負っていたルイズは、それを聞いてもしばらくは
ぼーっとしていたが、

頭が少しずつ働いてその意味を理解し始めると、途端に起き上がっ
て魔王に詰め寄った。

「どういうことが、詳しく説明してもらおうよ！」

「やる気が出てきたみたいでナニヨリです。」

説明するのもいいですが、実際に見てみるのが一番でしょう。

ルイズ様、ムシどもに食われるのを気にせず、コケをジャンジャン作り出してみてください。

いや、むしろムシにどんどん食べさせちゃってください。

そうすると、きつと先ほどは見られなかった何かが起こるはず？」

「何も起きなかったら恨むわよ！」

そう言つてルイズは物凄い勢いでツルハシを振るい始めた。

「うーん、ルイズ様のツルハシ捌き、つい先程とは見違えるようになりましたな。

これなら1秒間に16掘りも夢じゃないかもしれません。」

必死なルイズは魔王の戯言を全て聞き流しつつ、ニジリコケを何匹も何匹も生み出しては、

デスガジガジたちの巢食う場所へと導いていった。そして間もなく、ルイズにはある予感がした。言葉では説明出来ないが、ニジリコケの様子がおかしい・・・きつと何かが起こる。

彼女がそう信じて新たに生み出したニジリゴケが花を咲かせた時、その『何か』が起こった。ルイズはニジリゴケの成長の証、ニジリバナの中に光を幻視した。この壊滅的な状況のダンジョンを救う、煌めきを見た。そして花から産み落とされたコケたちは、もはや緑色をしてはいなかった。それどころか、ぴちよんと伸びた触覚のようなものと短い触手のような足まで付いていた。そこには、今まで見てきたものとは明らかに異なる、オレンジ色をしたコケが群がっていた。

「上手くいったようですね。ニジリゴケ上位種にして異常種でもあるパララメリカの誕生です！」

さ、詳しい説明は後です。ルイズ様、このままダンジョン中に

このコケを生み出してってください。それによってこのコケの真価が分かるでしょう。」

「勿体ぶるわね！適当な説明だったら承知しないわよ！」

ルイズが新たにツルハシを振り下ろした先で、次々とオレンジ色のコケが増え始めた。

だが彼女は疑問に思う。確かにこのコケには何かがありそうな気

がする。

だが所詮はコケ。ムシに食い付かれてやられるしかないのではないのか？

ルイズの予想通り、パララメリカは早速デスガジガジの一団に食い付かれた。

そして噛み付かれたコケたちは、そのまま呆気なくガジガジずるとムシたちの腹に収まった。

だがルイズを驚かせたことに、パララメリカを食したムシ達はその後、その場に縫い付けられたかのように動けなくなった。デスガジガジもデスフライも皆、その場でパタパタと羽や触覚を動かしながらもがいている。

「パララメリカの粘液にはマヒ成分が含まれているのです。

その効果は触れたニンゲンの動きすら止めるほどのモノ。

コケを丸ごとカジリとったムシたちも、こうしてしばらくは動けないことでしょう。

そのスキに他のコケが繁殖し、数を増やしていくというわけですね」

魔王が説明している内に、トカゲおとこがのそのそと近づいてきた。

そしてマヒして動けないムシを見つけると、容赦なく口を広げてバリバリごつくんと飲み込んだ。

「間接的ではありませんが、こうしてムシの数を減らすことにも貢献するわけです。

ダンジョン中のマモノの腹は満ち、ムシは数を減らし、トカゲおとこの増える環境が

整えられる。新しく生まれるコケがニジリゴケからパララメリカに取って代わったことにより、

ダンジョンに新たな秩序が築かれました。パクス・パララメリカーナの到来です！」

魔王が話す内にも、パララメリカは増えていき、ムシ達の少ない場所ではわらわらと大量発生する有り様であった。

「素晴らしいじゃない！　それで、どうしてこのコケが生まれたのよ？」

「デスガジガジを作り出したときみたいなのに、特別なことはしなかったと思うけど」

「そうです。今回のコケの変化にルイズ様が費やした力は穴を掘ることだけ。」

「後は全てマモノたちに秘められた潜在能力が発現して起きたことなのです」

「潜在能力？」

「そうです。今起きたようなマモノの変化を、『突然変異』と呼びます。」

「コケはつい先ほどまで、ムシに食い尽くされて全滅しそうな状態でした。」

「そういう極限状態において、マモノたちは仲間たちが死ぬたびに少しずつストレスを」

「溜め込んでいきます。そうしてストレスが限界に達すると、コレじゃイカン！という」

「意識がマモノたちに目覚め、厳しい環境に適応すべく新しいマモノのカタチへと」

「変貌を遂げるのです！」

「ちよつと待って、ムシに食いつかれたコケがストレスを感じるのとはともかく、」

「他のコケはびんびん生きてるわけよね？　ならどうしてかじり付かれてもいない」

「他のコケにストレスが溜まるのよ？」

「ふむ、ルイズ様は細かいところに気が付きますな。」

「何でも最近の魔生物学では、コケにも魔ホルモンがあることが分かっているそうです。」

「そして空気中に放出される魔ホルモンを、他のコケは感知することが出来るそうです。」

「ですから一見コミュニケーションなんか取れそうもないコケたちも、きつと死の間際に」

感じたストレスを魔ホルモンとして放出し、それが他のコケに伝わっていくんでしょな」

ルイズは魔王の説明する内容よりも、むしろ魔王が真面目な回答をしていることに目を丸くした。

「とにかく、ある程度ストレスを溜め込んだマモノは、ルイズ様のお力に頼らずとも

立派に自律進化して閉塞状態を打ち破ることが出来るのです！」

「じゃあ、それを上手く利用出来れば私の力を温存しつつ、マモノを強化出来るってこと？」

「そういうことになります。あえて欠点を言えば、思い通りにマモノたちを変異させるには

それなりにダンジョンの生態系をコントロールする腕前が必要なこと、

そしてマモノたちが変異を起こすにはそれなりに時間が掛かることでしょうか。

手っ取り早くダンジョンの強化を図りたい時は、

ルイズ様ご自身の力を費やした方が確実でしょう。」

ルイズは魔王の話聞きながらも、その手を休めずにパラメラカを量産し続けた。死を冠したムシの支配していたダンジョンは、パラメラカによる物量作戦によって、ようやく理想的な生態ピラミッドを取り戻しつつあった。

「キュルケたちに勝てるかは分からないけど……」

少なくとも今いるマモノたちを食べさせて、程良く戦えるようには出来そうね」

誰も見ていない地下深くで、マモノたちの軍勢は徐々に形勢を立て直していく。

ルイズは改めて心に闘志を灯し、不倶戴天の敵キュルケの打倒を誓った。

STAGE 13 あなたは / 好きですか？

「うーむ、マモノたちは出そろってきましたが、

あの二人を相手にするにはまだちよつとモノ足りないですね。」

ルイズと魔王の二人は、地下の奥底で必死に頭を悩ませていた。

「そうは言っても、もうマモノを強化する余力なんてないわよ？それにどうせ、

あの二人に同時に攻撃されたら、どんなマモノもすぐにやられちゃうじゃない」

ルイズはやつぱり勝てないのかしらとため息を吐いた。

「おや？ルイズ様がお悩みになってること、別にどうにか出来ないこともありませんよ？」

「え?! 一体、どうするっていうのよ!」

彼女達に残された時間は少ない。ルイズは魔王に話を急いだ。

「先ずは戦略的な話からしましょうか。確かにルイズ様のケネン通り、あの二人にマモノを

同時攻撃されたら、今いるムシやトカゲ男たちではひとたまりもないでしょう。

しかし、そういう二人同時攻撃という事態は、結構カンタンに防げるものなのです。」

それを聞いてルイズは首を横に振った。

「信じられないわ。あいつ等を離れ離れにさせられるほど強いマモノがいたら、

今頃苦労してないわよ。それともあいつらに一人ずつ戦って下さいなんてお願いするわけ?」

「いえいえルイズ様、チョット視野が狭くなっていますか?」

見て下さい、この広々としたこの地下を!

いくらでも穴を掘り広げられる、この空間を利用するのです!」

ルイズは改めて辺りを見渡した。今まで掘ってきた穴が脈々と続いていて、

まだ掘っていない場所もたくさん残されている。

「何か考えがあるって訳ね？言ってみなさいよ。」

「・・・お願いしますは？」

「いいから早く言いなさい!!」

「ああスミマセン！だからツルハシで突かないで！」

ちよつとした場を和らげるジョークなんで「早く言うー！」

息も絶え絶えな魔王は、胸を押さえながら話を続けた。

「確かに我々のマモノは彼女らに比べて遥かに弱いです。マモノの力だけであの二人を

引き離すのはムズカシイ。でもダンジョンとはマモノだけで成り立つものではありません。

今までに掘ってきた穴の形、すなわち地形も重要な要素なのです。

地形を上手く活かせば、マモノたちが有利に戦いを進めることも出来るようになるのです。

とはいえ、今回必要なのはそんな大層な仕掛けじゃありません。

ダンジョンの入り口近くから、こうビビビッと分かれ道を掘る。

そうすれば我らをシラミツブシに探してでも追い詰めようとする

彼女らは、

作業を分担すべく勝手に二手に分かれてくれるハズ。

そうして一人になったところをワレワレは各個撃破していけばよいのです！」

敵のむれを引き剥がすのに大仰な戦力など必要ないのです！と、自信満々に魔王は語った。しかし、尚もルイズ顔は晴れない。

「分かれ道を掘るって言っても、相手は一人でさえ強いトライアングルのよ？」

今さらそんなにマモノを増やしてられないわ」

「まだまだ頭がカタイです、ルイズ様。例え掘る土がシカクくとも、使うアタマは

マルくしておかなければいけません。別に、新しく掘った別れ道はダミーでも

構わないのです！最悪マモノが居なくても、ナガナガと道を掘っておけば相手の往復で

時間が稼げます。一方でワレワレが控えている本命の道に十分な戦力を置いておけば、

一人ずつやってくる相手を順次、フクロのネズミにしてしまえるというわけです。」

いや何ともマガマガしい作戦ですな、と自慢げに語る魔王に、ルイズは疑問を投げかけた。

「あんたの言いたいことは分かったわ。でも本当にそんな都合良くいくかしら？」

もしあいつらが用心深くて、全員まとまってやってきたらどうすんのよ?」

「そうですね…運が良ければ無駄なルートをタンサクしてくれる分、時間稼ぎが出来ます。」

それにブツチャケ、魔法に失敗しまくりでイロイロと軽んじられ気味なルイズ様相手に、

自信マンマンな彼女らがそんな手間ヒマ掛けるとは思えませ「よ、よくも言ってくれたわね!!」

そうしてルイズが魔王に掴みかかろうとした時、遠く上の方から、彼女の最も聞きたくない声が響いてきた。

「ねえ、まだなのー? 私たち、もうそろそろ入ってもいいかしら? いくら待ったところで私の勝ち揺るぎないし、意味ないわよね? おっほっほ!」

ルイズの顔はそれを聞いて真っ青になった。

「…大丈夫です。まだあともうちよつとは時間を稼げるはずです。」ルイズは肩を震わせつつ魔王に返事した。

「て、敵の敵は味方、って言うしね。今回はトクベツよ! 今だけは特別に許してあげるわ。」

分かれ道を掘っておくのね、これで負けたら承知しないわよ!」

「何言ってるんですか、ルイズ様。これだけで勝てる訳がないじゃないですか」

「あんたねえ!!!」

怒りで頭がフットーしそうになるルイズをなだめつつ、魔王は言葉

を続けた。

「ルイズ様の方が良くご存じな様に、彼女らはトライアングル。並ではない実力者です。」

デスガジガジやトカゲ男の相手が二人から一人になろうと、すぐやられてしまうことに

変わりはありません。パラメリカのマヒ攻撃でも当たれば少しは相手に隙が出来る

でしょうが、それも当たらなければどうということはないのです。やっぱりコケはコケですし、

そうそう上手く行くとは限りません。そうになると、精々マモノ一匹が一撃を加えられれば

イトコで、攻撃がかすりもせず倒れるマモノが大勢出ることでしよう。

我々は、そんな状況を少しでも改善すべく、マモノを強くしなければならぬのです。」

「でもこれ以上どうすればいいのよ？」

もう今以上に強いマモノを出す力は残ってないし、突然変異も時間が掛かるんでしょ？

もうどうにも出来ないじゃない！」

すると魔王は、途端にニヤケ顔で笑い始めた。

「フハッ！フハハハハッ！」

「……言いたいことがあるなら早く言いなさい」

ルイズは殴りたい気持ちを我慢しつつ、魔王の言葉を待った。

「ルイズ様、ちよつと勘違いしてませんか？マモノの強化というものは、

何も必死になってワンランク上のマモノを作るばかりではないのです！」

「へ？ それって、どういうことよ？」

「いいですか、魔王軍の編成には3つの要素が大事なのです。」

より強いマモノを、より多くというところまではルイズ様も分かっています。

ですがこの先、幾多の戦いを勝ち抜いていくためにはもう一つ、しっかりと覚えておいて

頂きたいことがあります。それが、マモノの特性を活かすというです。」

「マモノの特性？ それって、コケが相手をマヒさせるとか、そういうことかしら？」

「もちろんそれもですが、マモノの移動の仕方や繁殖の仕方などなど、多岐に渡るのが

特性という_GAINENです。マモノたちの特性をしっていればこそ、ワレワレの

戦い方の幅は広がり、魔王軍はより強くなっていくのです。さあそれではルイズ様も

マモノの特性を学んでいきましょう！先ずはコケとスライムがどう違うのかという

専門家でも頭を悩ませる難問について……」

「ちよつと、今急いでるのよ！そんな話、悠長に聞いていられないわ」「む、そうでした。残念です。セツカク、マイ雑学を披露出来るかと思っただのに……」

ルイズは魔王に、豚を見るような冷たい視線を向けた。

「いやルイズ様、そんな目で見ないで下さい。まじめな話、本来こういうお勉強には

しつかり時間を割くべきなのです。世の中、すぐに役に立つ知識というものは

すぐに役に立たなくなるというのがマモノ教育の考え方でして……」

「時間が無いって！言ってるでしょ！」

「……ハイ。仕方ありません。今回は特別に、聞いてスグに役立つ、この状況にピッタリな知識をデンジユしましょう。」

ルイズは、ようやく魔王が本題に入ることにふんと鼻を鳴らした。

「テーマはズバリ、マモノを強化するマモノです。」

「マモノを強化するですって？ それって、ムシやトカゲ男じゃあな

いわよね。

もしかして、私の知らないマモノかしら?」

「イエス、その通りです。今回紹介するのは、なんと!

ただそこにいるだけで、ダンジョン内のマモノ全ての防御力を高めるという

フシギなチカラを持ったマモノなのです!!」

「防御力ですって? つまりマモノが倒れ難くなるってこと?」

「イエース!!」

「そんなことが出来るの! しかも全てのマモノに!?

近くにいるマモノだけとかじゃなくて?」

「オウ、イエース!!」

「何よ、その夢のようなマモノは!

・・・あ、分かったわ。どうせアンタのことよ、何か裏があるんでしよう!

どうせダンジョン中のマモノを食べ尽したり、とんでもなく悍ましいマモノなのね!」

ルイズは未だにデスガジ大繁殖のショックを忘れてはおらず、慎重になつていた。

だが魔王は、そんな彼女の不安を吹き飛ばすように明るく話を続けた。

「いえいえとんでもない! 確かに普通、上手い話には裏があるものです。

褐色美女の誘いに乗ってみたら、お預けの上に鞭打ちが待っていたり、

カッコいい3千エキュの剣を貰ったら、ポツキリ折れて命の危機に晒されたり、

お宝を夢見て冒険に出かけたら、オーク相手に怖い思いをするだけだったり・・・」

「まさか、あなたの体験談じゃあないでしょうね?」

「でもこのマモノは違う、本当にスゴイんです!

元々体力があるマモノなので、ちよつとエサを食べないぐらいは大

丈夫！

じゃあ体力が減ったらどうかですって？それも大丈夫なんです！

このマモノは、好物のエレメントというマモノ以外を減多に食べたりはしません。

トカゲ男の群れに放り込んでも、本当にお腹が減った時にちよつとだけ

食べるだけなのです。繁殖したりもしないので、ムシのようにいつの間にか

増え過ぎてた、なんてこともありません。大変環境に優しいマモノなのです！」

「・・・本当、よね？」

「そうなんです！すごいでしょう？ それに見た目だって、とくつても可愛らしいんです！」

このマモノ、のっそり動き回る姿がラブリーチャーミーだということとで、

魔界全土に根強いニンキを誇っています。女性受けの良い赤いカラーリングに、

男性受けも悪くないジト目、そうジト目なんですKAWAII！疲れた時には

このマモノを眺めて癒されるといいでしょう！」

「・・・良いじゃない。使える上にかわいいなんて！」

いや、でもそんなマモノ、どうせ養分たくさん集めなきゃ作れないんですよ？」

「いえいえ、こちら大変オモトメやすい養分值になっております。

全てのマモノの防御力上昇と、多彩な癒し効果！いざとなったら勇者との戦いにも

赴いてくれる、これら全てがセットになってお値打ちなんとトカゲ男と同じ、

トカゲ男と同じだけの養分で作ることが出来るんです！」

「ええ、ウソでしょ！ こんな凄そうなマモノを、そんなお手軽に作れるっていうの!?!」

「ハイ、そうなんです！こんなスバラしい話、滅多にありません！

さあ、このお得なマモノを作るのは、今がチャンス、今がチャンスです！

さあ今すぐツルハシを！掘り方はこちら、養分の溜まった土の周りをぐるつと8マス、

いいですか、養分の溜まった土の周りをぐるつと8マス掘ってください！

最後に、残った土を一掘りすれば準備は完了です。簡単でしょう？

養分の溜まった土には限りがありますので、ご要望の方は今すぐお求めください！

ツルハシお待ちしております！」

「今すぐ掘らないと!!」

ルイズはワクワクしてくる便利道具を目の前にしたような高揚感と共に、養分が溜まって真っ白になった土の周りを掘り始めた。

「ぐるつと8マス、これでいいのよね。じゃあ最後の1掘りいくわよ！」

ルイズは期待に胸を膨らませて、ポツンと残された最後の1ブロックを掘った。

すると突然、ドーン!!という奈落の底に突き落とされるかのような響きと共に、

地面へと大きな魔法陣が刻まれた。その中心には、目玉のような文様が刻まれており、きらりきらりと怪しい光を放っている。事ここに至ってルイズは、猛烈に嫌な予感がし始めた。

「ねえ、これから呼び出すマモノって・・・」

「ああ、そういえば言い忘れておりました。

一つの土の周りをぐるつと掘ってから出すタイプのマモノは少々特殊で、

皆このような魔法陣から呼び出されるのです。魔法陣からマモノを呼び出したい時には、

この上をツルハシで軽くノックしてやって下さい。

まあ、彼らを呼び出す上でのレーギというやつですな。」

「高い知性を持ったマモノなのね」

ルイズの不安そうな眩きに、魔王はこくりと頷いた。

「彼らにもフツのマモノとはチガウんだというプライドがあるのでしよう。」

ですが勇者に困っているマモノ全てに守りの力を授ける奇妙奇天烈摩訶不思議なマモノ、

味方にすれば心強いなんてもんじゃありません。

勇者にいじめられたときはいつでも泣き付くと良いでしょう！」

「それで、そのマモノの名前はなんて言うのよ？」

聞きたいような、聞きたくないような思いがしつつも、ルイズは答えを促した。

「地下帝国で知らないものはいない国民的人気マモノ！

That's all I want! その名はDeeEee
Moooooonです!!!」

Ya Ya Ya Ya Ya Ya!とテンションを上げる魔王とは裏腹に、ルイズの顔は蒼白になっていった。

「で、デーモンですって!!!」

ルイズは思わず立ち眩みしそうになりながら、何とか足に力を込めて踏ん張った。

「デーモンって言ったたら、つまり悪魔のことじゃない!!」

悪魔を召喚だなんて、巫人を使い魔にしたどころの話じゃないわ
!」

「いや私、魔王なのでイマサラなのですが「ジョーダンじゃないわよ!!」・・・そうですか」

残念ながら、魔王の儂い主張が興奮したルイズに届くことはなかった。

「あんだ、また私を騙したわね!何が素晴らしいマモノよ!!」

教会に見つかったら一発で破門じゃないの!」

「落ち着いてください、ルイズ様。デーモンではありません。デーモンです。」

「何が違うっていうのよー！」

「そりゃあ、こうチョット、なんかニュアンス的なモノが心なしか違います。」

それがどうしたとか思われるかもしれませんが、案外そういう小さな違いが

世の中大きく響いてくるものではないでしょうか？」

ルイズは魔王の煮え切らない返事に対し、彼女にとっての譲れない一線をハッキリ確かめにかかった。

「・・・^{デーモン}悪魔じゃないのよね？」

「はい。彼らとて、誇りを持って否定することでしょう！」

「ツノとか生えてないわよね？」

「おお！よくお分かりになりましたね。オマケに一つ目です！」

「やっぱり悪魔なんじゃない!!魔法陣から召喚って時点でおかしいと思ってたのよー！」

そう言うところルイズは頭を抱え込んだ。

「ああもう、杖に頼らない召喚ですって？」

しかも呼び出すものが悪魔だなんて、ブリミルに仇なす邪法だわー！」

だが魔王は怪訝そうな顔をして、彼女に残酷な現実を突きつけた。

「ルイズ様、そうは言ってもこの局面、彼らのチカラを借りなければ切り抜けられませんよ?」

「う、うぬぬぬぬ。いや、私だってメイジの端くれよ！」

始祖ブリミルの信徒として一線を越えたりはしないわ!!」

「これはヒトリゴトですが、ここは地下です。」

当事者以外、何が起ころうがワカラナイに違いありません。」

「い、いや、それでも！」

「それにルイズ様。彼女たちに簀巻きにされてもいいんですか?」

「え? 別にあんたが簀巻きにされたところで知らないわよ」

お前は何を言っているんだという表情で、ルイズは魔王を見返した。

「・・・ちよっと傷付きました。」

それはともかくルイズ様、私は見ました。

彼女たちが長々としたロープを携えているのを・・・『2本』、ありました」

「そ、それって、どういうことよ!？」

「まあ、つまりは『そういうこと』なんじゃあないでしょうか。

ショージキ、簀巻きにされる破壊神さまというのは聞いたことがあります、

この世界ナンでもありでしょう。モグラがダンジョン掘るぐらいですし」

「わ、私が簀巻きですって!」

ルイズは思わず身震いした。かつて見た簀巻きの魔王は、グルグル巻きにされてなお、イモムシみたいになうねうねもそもぞ動き回っていた。ルイズは自分も一緒に縛られ、魔王の隣へ並べられることを考えるだけで、死にたく思えてきた。

「そ、そんなの冗談じゃないわ!!!」

そこからの彼女の決心は早かった。

「分かったわよ!デーモンとやらを呼ばばいいんでしょ!呼ばば!」

「ご決断頂きナニヨリです。ついでに言うと、サツサとたくさん召喚して下さい。

時間が無いので、今すぐにも養分をかき集めて頂けると有り難いのですが」

それを聞いたルイズは身体を固まらせた。

「・・・え?1匹呼ばばいいんじゃないの・・・?」

魔王はやれやれとため息をついた。

「ルイズ様、ブツチャケこのマモノは1匹だけ召喚しても大して役に立ちません。

複数召喚して、その効果を重ね掛けしてこそそのマモノなのです。

しかもコイツ、繁殖はしないので地道にツルハシで数を増やしていく必要があります。

戦闘でもあまり大きな期待は出来ないんで、早々に倒されてマモノの防御力が落ちぬよう、

ダンジョン後方での召喚をおススメします。」

「それって、結局養分たっぷりいるんじゃない！どこがお得よ!!」

「まあ、ダンジョン全体で見れば防御力がソコアゲされて、

チヨツピリお得になるんじゃないでしょうか。

1匹呼ぶだけなら繁殖出来る分、トカゲ男を呼んだ方がマシです。多分。」

「あんたの話を信じた私がバカだったわ!」

邪教認定必須の悪魔モドキ一匹を召喚するために大きな決心をしたと思っていたら、

結局何匹も召喚する羽目になっていた。ルイズはもう涙目だった。

「ああ、始祖ブリミルよ！私の罪深い行いを、どうか今ばかりはお目溢しく下さい!」

そう言つてルイズは魔法陣にツルハシを振り下ろした。

魔法陣が扉のようにパカツと開く。

ルイズは恐る恐る、中から出てくるデーモンを見つめた。

それは、一言でいえば赤いずんぐりむっくりといった姿であった。

「か、かわいい?かしら」

デーモンは、確かに角の生えた一つ目の異形である。しかし眠たそうな眼をしつつ、大手を振つてのっそのっそ歩く姿には、どこかしら愛嬌が感じられた。それでいてルイズには、デーモンの赤い体軀をじっくり見つめていると、何だか自分の心が不安定になっていくような気もして、その胸中はますます複雑になっていった。だがキュルケたちにおめおめと負けるわけにはいかない。彼女は気乗りのしない心を奮い立たせて、少しずつ魔方阵を作り出していった。

「ム?。そういえば相手はメイジなので魔法攻撃がメインになるのでしょうか?.....」

魔王はしばらく考え込むと、冷や汗をダラダラ流し始めた。

デーモン、それは確かにマモノたちの防御力を高める頼れる味方はあった・・・物理的な意味で。

「どうしたのよあんた、何か顔色が悪そうな・・・いや、何時ものこと

だったわね」

「そうですね！この頭痛や吐き気がしてきたような顔が、

マモノにとつてのハイって奴なのです!!」

「・・・あなた、何か隠してないでしょうね？」

「まさか！そんなことよりルイズ様！あなたは好きですか？」

「何のことよ・・・って、そうよデーもんよ！たくさん作らなきゃいけないんだし、

あなたと話してる暇なんてないのよ！」

ルイズはぶんぶん怒りつつも、再びツルハシを振るう作業に戻っていった。

そうしてまた一人になった魔王は、しばらく考え込み、やがて結論を出した。

「まっ、最近は魔法でも物理がハヤリみたいですし、へーキでしょう！」

.....

「さあ行くわよタバサ、それにフレイム！」

「・・・」 「キュルツ！」

無言のうなずきと短い鳴き声を確認したキュルケは、

学院の中庭に突如として現れたダンジョンへと足を踏み入れた。

「うわっ！早速なんかいるわね」

彼女の目の前にはつやつやした塊やら巨大なムシたちが数多く蠢いていた。

「初めだし、派手に行こうかしら？」

キュルケはスペルを素早く唱え始めた。

沢山のコケやムシたちが迫りくる中、彼女は落ち着いて詠唱を唱え続け、最後に杖を一振りした。すると一気に、通路を埋め尽くさんばかりの大きな火の玉が現れた。火の玉は通路を真っすぐに飛んでいき、マモノに当たる度に轟という音を立て、より一層明るく燃え上がった。やがて形を保てなくなった火の玉は、奔流となって通路に広がり、物陰にいたマモノたちまで巻き込んで、炙り出した。地面には融けたコケが湯気を立てながら染み込み、宙にはムシたちの残骸が火

の粉となってゆらゆらと揺れた。僅かばかり生き残っていたムシにも、須らく火が燃え移っていた。羽を燃やされたデスフライがボトリボトリと地面に落ちていく。中には地面に落ちてなお歩き出すムシもいたが、身体に付いた火が全身に回ると、やがて動きを止めた。キュルケたちの目の前にひしめいていたマモノは、もはや見る影も残っていないかった。

「んーっ！っ！やっぱ全力で放つのは気持ちいいわね！」

「魔法は温存するべき・・・どれだけ長引くか分からない」

「キュル！」

「それもそうね。じゃあしばらくはフレイムに頑張って貰おうかしら。」

トカゲがムシに負ける訳ないものね」

「キュル〜ッ！」

張り切って先に行くフレイムに続き、キュルケとタバサはその後ろをてくてくと歩いて行った。しかしそう時間も経たない内に、フレイムはピタリと歩みを止めた。訝しんだキュルケは、照らし出された道の先を見て唖った。

「この場合、どっちに進むのが正解なのかしら？」

彼女の目の前には、どちらが本道かも分からない二手に分かれた道が、見通せないぐらい遠くまで、延々と続いていた。

「ねえタバサ、この先がどうなっているか分からないかしら？」

キュルケは、風メイジの耳の良さを頼りに出来ないかと彼女に期待を寄せた。

しかしタバサは静かに首を振った。

「音が土に吸収されている。奥の方まで分からない」

「あ残念。じゃあどっちにルイズがいるのかしら？」

そうしてキュルケがしばらく悩んでいると、地を這ってひっそりとデスガジガジが近付いてきた。

「キュル〜！」

だがデスガジガジは、辺りに目を光らせていたフレイムに啄まれると、そのまま口の中でバリバリと音を立てることになった。

「よし、二手に分かれるわよ！」

「危険・・・戦力が分散する」

「それはそうだけど、ルイズ相手にビクビクするのもしゃくじゃない」
タバサは非難するような眼差しでそれに答えた。

「油断大敵」

「分かってるわよ。でもギーシュだつて途中までは一人でそれなりに戦えたつて話よ。」

馬鹿にするわけじゃないけどドットの彼でもそうなんだから、
トライアングルの私たちはもつと上手くやれるはずよ。違うかしら？」

「・・・」

「夜は短いわよ。ささつと勝つて、ささつと帰りましょ？」

タバサはしばらく考え込んでから、こくりと頷いた。

「ありがと、タバサ。じゃあ私はどっちに進もうかしら？」

また時間を掛けて悩みそうになったキュルケを差し置き、タバサは
手にした杖をすつと傾け、左側へ続く道を指し示した。

「私はこっち」

「そう？じゃあ私は右ね。フレイムもそっちに付けようかしら？」

何かと便利よというキュルケの提案に、タバサはふるふると首を
振った。

「気を使わなくていい」

「でも、折角来てくれたのに悪いわ」

「使い魔は主を守るもの。そしてフレイムの主はあなた。」

「使い魔もあなたといた方が連携を取れるはず」

「それに加えて、タバサはこう返した。」

「心配ない。一人で動くのは慣れてるから・・・」

「・・・そう。ならこっちは遠慮なくフレイムと一緒に動かして貰う
わ。」

「あなたのことだから大丈夫だとは思いますが、気を付けなさいよ」

「タバサは再びこくりと頷いた。」

「あなたも気を付けて」

そう言うなり、タバサはとてと先を歩き始めた。
キュルケは、タバサの言葉の意味について、深く立ち入ることはない。

それが彼女たちの関係の取り方だった。
キュルケには、親友のタバサが何事か事情を抱えていることは分かっていた。

しかしタバサは話してくれない。きっとこちらから聞いたところで、同じことだろう。

自分には力にもなれない程に、大きくて、深い事情なのかもしれない。

それでも、いつか話して貰える仲になれば・・・
彼女はそう思わずにはいられなかった。

「ねえ、いいこと思いついたわ!」
キュルケの大声にタバサはぴたりと立ち止まった。

「ルイズを捕まえられなかった方は、今度街に出たとき奢りよ!」
「・・・絶対に負けない」
そう言ってから二人は別れ、地中深くに続く道を突き進んでいった。

「さあ、気を散らさずにどんどん魔法陣を作るのです。余所見している暇なんてありませんぞ。」

「分かっているわよ。デーモンをたくさん出して、今よりもっと強くなったマモノたちを」

「あいつらにぶつけなければいいんですよ」
ルイズはツルハシを握りしめつつ、ふと疑問に思ったことを魔王に尋ねた。

「ねえ、デーモンって土から生み出したわけじゃなくて、どこかから召喚してるのよね。」

「じゃあこの魔法陣って、一体どこに繋がってるのよ?」
ルイズには、この真っ赤で奇妙なバケモノたちがどこかの山や森に住んでいる姿を、到底想像することが出来なかった。

「まさか・・・地獄とかじゃあないでしょうね」

「とんでもない!」

魔王はけしからんとばかりに首を振った。

「それはデーもんを舐め過ぎというものです。あなたたちニンゲンはとかくマモノを

野蛮な存在と思いがちですが、彼らとて立派な文化人なのです。

地獄なんて辺鄙なところにいると本気でお思いですか?」

それを聞いてルイズは、一応悪魔ではないのかしらと、僅かばかりの安心を得た。

「この魔法陣は、当然彼らの自宅に繋がっているに決まっています!」

「・・・え? 自宅ですって!?!」

「何がおかしいんですか。」

「え、だって、マモノでしょ? あ、分かったわ!」

家って言っても、穴倉の中だとか、巢みたいなものなんでしょう!」

それを聞いて、魔王は更に不快そうな顔をした。

「赤い悪魔の異名で莫大な年俸を稼ぐ彼らが、そんな暮らしをしているはずがありません。」

彼らだって立派にマイホームを持って暮らしていますとも」

「そんなの想像できないわよ!」

「ダメですねえ。ダンジョンの主たるもの、想像力が豊かでなくては務まりません。」

思い浮かべてみるのです。デーもんは赤いものが大好きなんです。

深紅のふかふかな絨毯に、朱色の家具の数々。当然、壁紙もクリームゾンです。

そうやってお気に入りのもものばかりで出来た、赤い部屋の中で彼らは暮らしているのです。」

ルイズは困惑を隠せなかった。

この赤いデカブツが、安心できる自分の家の中でゆったりソファに腰かけたり、ごろんとベッドに寝転んだり、おなかが減ったらふらつと台所に立ったりするのだろうか?

彼女がいくらデーもんを眺めてみても、そこから生活感を感じ取る

ことは出来なかった。

「何なら魔法陣に耳でも近づけてみてはどうですか？」

もしかしたら音の一つでも聞こえるかもしれません」

ルイズは不気味に思いつつも、好奇心に負けて魔法陣に顔を近づけ、そつと耳をそばだてた。

「……」

何も聞こえない。

ルイズは諦めて、顔を元に戻そうとした。

「あなたは好きですか？」

「……ッ!!!」

ルイズはいきなり聞こえてきた、小さくも甲高く無機質な声に跳ね上がった。

「い、今、何か聞こえたわよ！だ、誰かが喋ったわ!!」

「ふむ？おかしいですね。デーもんってニンゲンの言葉を喋れたのでしょうか？」

いや、もしかしてあの部屋でシェアルームしている……」

魔王がしきりに首を傾げる中、ルイズは本当にデーもんを呼び出してしまったてよかったのか、改めて悩み始めた。

……

「フレイム！また奥から出て来るわ！」

「キュルーツ!!」

トカゲ男たちはキュルケ達の姿を認めると、鳴き声を上げながら突進して来た。

しかし彼らの刃が、キュルケに届くことはない。

群れの先頭を走っていたトカゲ男たちは、フレイムの吐き出した炎に包まれ火達磨になった。そうしてしばらくは誰もフレイムに近寄れず倒れていったが、次第に火の息が弱まると、後続のトカゲ男たちが距離を詰め始めた。彼らは懸命に剣を突き出しキュルケに襲いかかろうとするも、フレイムはその巨軀を活かして道を塞ぎ、彼らの侵攻を食い止めた。加えてフレイムは、引っ掻いたり、噛み付いたりして、トカゲ男たちを翻弄し続けた。そうして彼らが戦っている隙に

キュルケは魔法を唱え終わり、トカゲ男たちを炎の渦に巻き込んだ。魔法の炎は辺りを焦がしつくし、やがて掻き消える。その時、既にフレイムは大きく息を吸い込んで、次なる敵に備え終わっていた。しかしもうその場には、彼が火の息を吹き付けるべき相手は何処にも残っていないかった。

キュルケとフレイムのコンビは、こうして強固なトカゲ男迎撃体制を確立していた。

しかし全く問題がない訳ではない。

当然のことながら、この体制は前衛のフレイムの消耗が激しいものとなる。

またキュルケはキュルケで、魔法力の消耗に気を使わなければいけなかった。

初めはムシやコケも大きな炎で焼き払っていた彼女たちだったが、その数の多さを認識してからは必要に応じて火を弱め、時にはフレイムの打撃によってマモノたちを退治していた。

「もつと楽勝かと思ってたけど、結構大変ね。」

ムシも話と違って、赤くて速いし、どうなってるのかしら？」

彼女らにとってはトカゲ男こそが一番の強敵であったが、他のマモノも脅威であることに変わりはない。キュルケはお見舞いと称してギーシユに情報収集を行ったとき、青銅のゴーレムに歯形を残すムシの話聞いており、決してマモノたちを自分に近付かせないよう意識していた。そんな彼女から見て、小さい身体ですばしく動き回る赤いムシたちは、加減した火の魔法を当てるには難しく、大きな炎で焼き払うには力を使い過ぎるといって、十分に悩ましい存在であった。

「しかもあのスライムがイヤらしいのよね。」

火で倒すには弱すぎるし、触れるとたまに身体が痺れるみたいだし……

フレイムが動けなくなったときは焦ったわ」

今のところ、彼女たちはまだまだ安定した戦いを進めているが、この先どれだけのマモノと出くわすかによって、彼女らの有利な戦況はひっくり返ってしまうだろう。

「・・・思った以上に手強いじゃない。」

物量でも攻めてくるなんて、ルイズのくせにナマイキよ」

そう言う彼女の顔には、獰猛な笑みが浮かんでいた。

彼女は、使い魔の一件での意趣返しに挑むというだけでなく、純粹に好敵手が力を付けたこと、その彼女とこうして全力でぶつかり合えるようになったことを喜んでいた。

「ゼロの癖に誇りを失わないあんたは、いつかきつと化けるって思ってたわ。」

でも・・・私に勝てるなんて思わないことね、ルイズ!!」

微熱は情熱となって燃え上がり、ダンジョン内のマモノを焼き尽くしていった。

.....
ふにふに。

タバサは通路に屈んでオレンジ色のぴちよんとした塊を杖で突っついていった。

触ればヒンヤリして気持ち良さそうにも思えるが、とある事情から毒に詳しくなった彼女は、決して安易に素手で触れたりはしなかった。野生には、無害そうな姿とは裏腹にとんでもない毒を持った動植物がいることを、彼女はよく勉強していた。だがこのイキモノは動物と植物、どちらに近いのだろうか？彼女の興味は、そんな学術的な方面へも刺激されていた。彼女がそうやって初めて見る奇妙で貧弱なイキモノを観察していると、闇に紛れてひっそりと、微かな羽音を立てて飛ぶデスフライが現れた。デスフライは静かに少女の頭上まで近付くと、コケを見つめる彼女の首筋目掛けてゆっくりと降下していった。そしてかのムシが着地の姿勢を取り、喉の渴きを赤き血で潤そうと鋭く硬いアゴをぱっくり開きいたその瞬間、大きく開かれた口には氷の杭が突き刺さっていた。屈みこんだタバサのマントの下からは、いつの間にか杖先が覗いていた。地面にボトリと落ちたデスフライは、しばらく身体をピクピクさせていたが、次第にその動きは鈍くなっていた。

「紅色の体色、毒性は不明」

しばらくムシを見下ろしていた彼女は、ふいに耳をそばだて始めた。風メイジ特有の優れた耳を持つタバサは、今いる道の曲がり角を進んだ先に複数のマモノどもがいることを聞き取った。彼女は静かに詠唱を始めつつ、逃げも隠れもせず道を進んでいった。そしてついに青色のトカゲ型亜人と出くわすと、彼女は淀みなく杖を振り、彼らに鳴き声を上げる暇すら与えず氷漬けにした。彼女は何事もなかったかのように氷のオブジェの脇を通り過ぎた。

「楽勝」

その時、凍ったはずのトカゲ男の瞳がギョロリと動いた。

「クアワアアアー!!」

タバサの行く道は、ダンジョンの奥の方から這い出てきたトカゲ男たちによって、再び塞がれていた。しかしやることは変わらないとばかりにタバサが杖を振りかざしたところで、彼女の背後からパキパキという音が鳴り響いた。急いで彼女が振り返ると、『殺した』はずのトカゲ男たちが、全身を覆う氷を打ち砕いて、のろのろと歩き始めている。

「・・・」

今やタバサは完全に囲まれていた。だんだんと足を速め近づいてくるトカゲ男たちを前に、彼女は顔色一つ変えずに手を懐に差し込み、あるものを取り出した。

「クア!?!」

トカゲ男たちは発達した嗅覚で彼女が取り出したモノを察知した。そして目でそれを確かめると、興奮したように鳴き声を上げて騒ぎ始めた。彼らはもつと距離を詰めた。近付いて見ても間違いない。やはりそこにあったのは、見るからに美味しそうな、こんがり焼けたグレートなお肉であった。トカゲ男たちがじゅるりとよだれを垂らす中、タバサは突如として肉を道の端へと放り投げた。

「クアワワアー!!!」

一斉にトカゲ男たちは肉目掛けて殺到し、仲間同士での醜い争いを始めだした。餌を与えられた魚たちがバチャバチャと水面を波立た

せるがごとく、トカゲ男たちは代わりに剣と盾をガチャガチャとぶつけ合わせた。幾重にも及ぶ激しい剣戟の末、ついに一匹のトカゲ男が雄たけびを上げた。そのトカゲ男は、仲間たちの恨めしそうな視線を一身に集めながら、手にした戦利品を豪快に頬張った。

「グワアツ・・・!?!」

彼は短く叫んだ後、動かなくなった。周囲の仲間が何事かと思つめる中、彼の体はさらさらと、砂塵のごとく崩れ始めた。呆気に取られたトカゲ男たちは、ぐるつと首を回して肉の出どころを見つめた。彼らは、少女が身の丈ほどもある長い杖を掲げた姿を、そしてそこから幾百もの鋭く尖った氷が雨あられと飛んでくるところを見た。タバサはトカゲ男たちの断末魔を耳にしながら、メモを取った。

「偽装性良し。効き目も甚大、即効性あり」

彼女はお手製のお肉の評価を詳細に書き込んでいった。料理は、ここ最近の彼女の趣味であった。彼女は無口な態度であるために、よく周りから冷たい人間と誤解されるが、決してそうではない。その証拠に、彼女はとある切っ掛けで仲違いした親戚のおじさんに美味しく食べて貰おうと、天にも昇るようなレシピを作り上げるべく、日夜努力を重ねているのだった。

「・・・」

タバサがメモに夢中になる中、いつの間にかその背後では、橙色の塊がニョキリと幹を伸ばし、葉っぱのようなものを生やし始めている。しばらく何かを吸い込むように脈打ったパララメリカは、やがてその先端につぼみのような膨らみを付けた。そしてついに、そのつぼみが開こうとしたとき、長い杖がヒュツと風を切り、それを打ち据えた。開花寸前まで成長したパララメリカはみると茶褐色に変わり、最後はバラバラになって崩れ落ちた。タバサはパタリとメモを閉じた。

「調査終了」

彼女はそう呟くと足を少しずつ速めていき、通路の奥へ奥へと消えていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ウヌヌヌヌ！あの身のこなし、あの青い小娘タダモノではありませんな。」

「それよりもこっちよこっち！トカゲ男がどんどんやられてちゃってるじゃない！」

「いや、キュルケ嬢の方は既に結構魔法を使っている様子。」

もう辺りを焼き尽くす程の大きな炎は出せないのではないでしょうか。

次なるトカゲ男の一团をぶつければ、きっと倒せるハズです！」

「あ、ぶつかったわよ！」

「それっ！いくのですっ！」

「「ギューーエエエ」エ「エー！」」

間も無く、遠くからトカゲ男たちの悲鳴が響いてきた。

「あ、アレ？」

「やられちゃったじゃない！どういうことよ!？」

「・・・もしかして、いやもしかしなくても

あの一带にムシが居なくなっているではないですか！

これではエサがなくてトカゲ男の体力が減る一方です!!」

「デーもん作るのに忙しかったのよ！ムシの面倒なんて見られないわっ！」

「ああ、もう！ 後に残されたトカゲ男は・・・いないではないですか！」

「何よ！あんたが倒せるって言ったんじゃない！」

「こ、これは・・・まさか・・・！」

「さ、さあアンタ、使い魔の甲斐性を見せるチャンスよ！」

先に行って足止めしてきなさい！」

「何をムチャな！ ルイズ様だけ逃げようたってそうは行きません！」

「ちよつと！足引つ張るんじゃないわよ！いや！簀巻きはイヤあああ！」

.....

トカゲ男の一群を片付けたキュルケ達は、ふらふらになりながらも

進んでいき、ついに開けた場所を見つけた。

「この奥にルイズ達がいるのかしら？」

キュルケは一步足を踏み出し・・・そこで身を竦ませた。

その部屋は、蠢く巨大な『赤』に満ち満ちていた

トカゲ男も人と同じぐらいという意味では大きなマモノであったが、彼女が今日にしている相手は、まるで大熊のような体格をしていた。しかもそれが何匹ものっそのっそと歩き回っている。キュルケはそつと足を引っ込め、通路の土壁に隠れてから息を吐いた。

「あんなのがいるなんて聞いてないわよ！」

キュルケはギーシュに『お見舞い』に行った時のことを思い起こした。

『スライム、ムシ、トカゲ男。ルイズたちが操るマモノはこの3種類さ！

彼女の目の前にまで辿り着いた僕が言うんだから間違いない。

ああ、あと少しでも魔法を放つ力が残されていれば、

勝っていたのは僕だったんだがね・・・』

『それ本当なの？』

『馬鹿にしないでくれたまえ。僕は負けた上に嘘を付くほど恥知らずじゃあないさ。』

本当に惜しかったんだ。何ならルイズたちに嘘かどうか聞いてみればいいじゃあないか』

『嫌よ、そんなの』

『君は僕に喧嘩を売っているのかね?!』

今から思えば相手はギーシュなのだから、ルイズたちが奥の手を隠していたとしてもおかしくはない。あるいはあの初戦を経て、ルイズたちも力を付けてきたということだろうか。

とにかく、これから戦うべき相手の情報がないのは問題だった。普段の彼女なら、正々堂々と正面から焼き払いに掛かっていただろう。だが生憎今の彼女は、ここに来るまでに大分魔法を使ったことから、あとどれだけ魔法を使えるか不安に思っていた。敵は大きい上に、悪魔と言って差し支えないような姿である。トカゲ男よりは幾分鈍そ

うであつたが、単純に身体の大きさだけ見れば、驚異的な体力を持つていてもおかしくはない。しかもそういう相手が複数いる。動きが遅いからと相手を侮った挙句、じわじわと囲まれてなぶり殺しにされるのだけは避けねばならなかった。そしてそもそも、彼女は相手を倒せるとしても、ここで力を使い切るつもりはない。道半ば、考えなしに精神力を使い果たしたギーシユの二の轍を踏むつもりは、彼女にはなかった。

「帰りのことを考えられないなんて、ギーシユのおつむもドットよねえ」

クラスメイトの馬鹿さ加減を思い出しながらも、彼女は決断を迫られていた。

彼女にもあまり余裕はない。このまま進むか？それとも退くのか？

「ここまで来て引き返すのは嫌よねえ。この場所を突破したら、絶対に私の勝ちのはずよ」

「キュル？」

「あら、私の勘が外れた試しはないわ」

「キュー・・・」

キュルケはどうしたものかと考えを巡らせ始めた。

フレイムは暇そうに欠伸をした。息に乗って出た細い炎がチロチロと揺れた。

「そうだわー！」

突如、キュルケは声を上げた。

何だろうか、フレイムはゆっくり振り向いた。

「ねえフレイム、ちょっと試してみたいことがあるのよ。協力してくれるかしら？」

「きゆる？」

フレイムはクイツと首を傾げた。

キュルケはフレイムの耳元にそっと口を寄せ、作戦を伝えた。

「！キュル!!」

「私は大丈夫よ。これでも自分の身は自分で守れるわ。それよりも危

険なのはあなたよ」

「キュキュキュツ、キュキュー！」

「そう？ やつてくれるのね。ありがと、フレイム」

キュルケはそつとフレイムの頬に口づけすると、彼を優しく撫でて送り出した。

フレイムはただ一匹、すばしこく地面を駆け抜けた。如何に強い彼と言えど、大きな体格のマモノに複数囲まれてしまつては危うい。しかし彼は主の指示を忠実に守り、広げた空間の中央辺りまで、すると立ち止まることなく突き進んだ。そこで彼はピタツと止まると、来るなら来いとばかりに頭をもたげ、周囲のマモノたちを睨み回した。その鋭い眼光には、例え囲まれようとも、他の赤いマモノに負けたりなんかしないという、強い意志が宿つていた。しかし周りの赤い奴らといえば、全く彼に見向きもせず、大手を振るつて呑気に徘徊を続けていた。

「やつぱりね。予想通りだわ」

キュルケはフレイムを遠目に観察しながら呟いた。

「私が隣に付いていなければ、フレイムが敵か味方かなんてマモノたちには分からないのよ！」

そもそもフレイムは、つい最近まで野生に生きていたサラマンダーである。使い魔になったからといって身体の色が変わつたりする訳でもないし、身体に刻まれたルーンだつて傍目に分かるものではない。そもそもルーンが見つかったところで、マモノたちにその意味が理解できるか怪しいところだ。彼女の唯一の懸念は匂いだった。野生生物の多くは匂いに敏感だと言うし、特にキュルケはよく香水をつけているので、その匂いがフレイムに移っていないか、それが彼女には心配であつた。しかし、未だあの赤い化け物たちが鼻を利かせている様子はない。そこまで見届けて、キュルケはほつと一息つくと同時に、勝利を確信した。これならフレイムだけを頼りにこの場所を突破し、ルイズたちを捕まえてこさせることが出来るだろう。キュルケの脳裏には、反則よ！と騒ぎ立てるルイズの姿がはつきりと目に浮かぶ

ようであった。

「でもこれも勝負、言い訳するようじゃまだまだよね」

キュルケは半ば、既に勝った気になりながら、再びフレイムに目を移した。そこで彼女は奇妙なことに気が付いた。先ほどはまるで関心を示していなかった赤いバケモノたちが、いつの間にかフレイムの後ろへとつつそり近づいて来ていた。

「何よーやっぱりフレイムが仲間じゃないって分かるわけ？」

ああもう、フレイム！ 気付いて頂戴!!」

いざとなれば自分が出ていくが、精神力の心許ない今、出来れば彼自身に対処して欲しい。キュルケは大声を上げることも出来ず歯噛みしたが、間もなくフレイムは背後から忍び寄る気配に気が付き、くるつと身体をバケモノたちへと向け直した。

「きゅる~~~~!!!!」

さあ来いと、フレイムは氣勢を上げた。赤きバケモノたちは、一切の動揺を見せず、歩み寄り続ける。いよいよ距離が詰まる。さあ戦闘かと、フレイムが身構えたところで・・・バケモノたちは彼を素通りした。

「・・・キュルケ?」

フレイムは訳が分からないよという風に首を傾げた。他のバケモノたちもフレイムを通り過ぎていく。そこでまたフレイムがくるつとダンジョンの奥の方へ体を向けると、丁度通り過ぎていった化け物たちが向きを変え、再び彼にむけて歩き出すところだった。フレイムは再び油断なく身構えたが、やっぱり赤い奴らはゆつくりと彼に近付いたかと思えば、そのまま彼に目も向けず素通りするのだった。

「キュルキュルキュル?!?!」

フレイムは大いに困惑した。この先、どうすればいいのだろうか？

バケモノどもを無視して進めばいいのか？それとも今戦うべきなのだろうか？

キュルケは物陰からその様子を眺めつつ、ある推察をしていた。

「もしかして、あいつらは火に誘き寄せられてるんじゃないかしら?」
あの赤いバケモノたちの動きは明らかにフレイムの影響を受けて

いるが、しかしフレイム自身に関心があるようには見えない。となれば、やつらはフレイムの尻尾に灯る火に向かつて歩いていっているのではないだろうか。

「明るい方に誘き寄せられるなんて、まるで虫みたいね」

人間にとつては鑑賞の対象となる成りの良いサラマンダーの尻尾の火も、野生生物にとつてはただの明かりに過ぎないだろう。キュルケは、なんだか今まで自分が警戒していたのが馬鹿らしく思えてきた。火を見て引き寄せられる程度のおつむの相手であるなら、取り敢えずは一安心である。

「ああフレイム、薄暗い場所で見るとあなたも美しいわ。

あなたのキュートな尻尾の炎、まるで宙に浮かび上がった鬼火みたいで幻想的よ！」

デーもんが、揺れ動く『鬼火』をギョロリと目で追った。

初め、キュルケは目の錯覚を疑った。

フレイムの炎に照らされた赤いバケモノの、その大きなお腹を横切るように、

突如として真っ黒な線が現れた。その線は見る見る内に太くなっていき、

遂には腹がパツクリと真横に裂けた。キュルケが動転している間にも

裂け目は広がっていき、やがてその中から幾つもの白い杭が覗き出した。

やつとその『杭』が歯で、『裂け目』が口だったことに彼女の理解が追いついたとき、

既にその口からは丸太の様に太い舌がベロンと飛び出していた。

デーもんは長く伸びた舌を器用に操り、瞬く間に『エレメント』らしきものを

尻尾ごと絡め取ると、一気に腹の中へ引きずり込んでバクンツと口を閉じた。

「ギュル、ウヴウヴウヴウヴウヴウ!!!」
「フレイムツォーゾーゾー!!!」

キュルケは叫ぶと同時に走り出していた。彼女はバケモノに近寄り急いで魔法を放とうとしたが、フレイムが大きく暴れまわるため、中々バケモノに狙いを定めることができなかつた。彼女が二度、三度と、必死でファイアボールを当て、ようやくそのバケモノを倒した時には、既にフレイムはぐったりしていた。

「大丈夫!? フレイム!!」

「きゆる・・・」

小さくフレイムが鳴いた。普段は人魂のごとく見事に燃え盛る尻尾の炎もどこか弱弱しく、それは彼の不調を如実に表していた。サラマンダーの尻尾の炎、それは命のともしびでもある。尻尾の炎が消えるとき、その命は終わってしまうという。キュルケがしきりにフレイムを心配する中、急にぞわりと彼女の背中が震えた。

彼女が急いで振り返ると、部屋中の赤いバケモノがこちらを眺めていた。

彼女にも、今ならはつきりと分かつた。

やつらは暗闇の中に浮かぶ炎、チロチロと燃えるフレイムの尾の先を

じつとりともの欲しそうな目で見つめていた。

同時に彼女は、自身に向けられ始めた殺気にも気が付いた。

ニンゲンという敵を見定めた彼らが、怒気を以って大手を振り上げ、叩き殺しにかからんとぐいぐい近づいて来る。デーもんたちは今や大きな赤い壁となつて押し寄せ、キュルケたちを真っ赤に染め上げようとしていた。

「いやあああああ!!!」

キュルケはフレイムを必死に抱き寄せながら、這う這うの体でその場を逃げだした。

.....

「な、な!」

ルイズが言葉に詰まる中、魔王は朗らかな笑顔で喋り出した。

「いやあ、デーものの捕食シーンは豪快で、いつ見てもホレボレとしますね。

しかし好物のエレメントとマチガえて飛びついたのでしょうか？

何にせよ、デーもんグツジョブです！

後は彼女らに追撃を加えて仕留めれば完璧です！」

「何なのよあれはああ!!」

しかしルイズの叫びの意味は魔王には伝わらず、スゴイでしょう！
等という返事が返された。

「ルイズ様も今の活躍を見ていたでしょう？ まあ、ちよつと特殊な状況でしたけど。

ズルしてラク々にダンジョンクリアしちゃおうなんて奴らには罰あるのみです！」

「いや、確かに助かったけど、そうじゃなくて！ あんなのつて!!」

それを聞いて、急に魔王は顔を強張らせた。

「んん？ いやそんなまさか・・・あの赤い部屋からデーもんを

召喚しておいて、それは・・・いや、しかし一応確認しておきましようか。」

そう言うと魔王は、深紅の瞳でルイズを真っ直ぐに見据え、問いかけた。

「あなたは赤い・・・好きですか？」

「あんな赤いやつ、嫌いよっ！」

STAGE 14 ゴレムでも助走つけて殴るレ
ベル

「好きです好きです好きです好きです好きです私は赤いデーもんが大好きです……!?!」

私は何を言っているの???

「もう、シツカリしてくださいルイズ様。いくらデーもんが

プリチーだからって夢中になり過ぎです」

「わたしが、デーもんに夢中ですって……?」

見ればデーもんは相変わらずのそのそ歩いて、キュルケたちを追い掛け回していた。

歩みの遅いデーもんらがキュルケたちに追いつく様子はないが、それでも追われる側の彼女たちには気が気でないことらしい。キュルケの焦燥に満ちた足取りを遠目に眺め、ルイズは胸のすくような思いがした。

「キュルケったら口ほどにもないわね! いいザマだわ!」

「そうでしょうそうでしょうとも! さあルイズ様、ブーツとしてるヒマはありませんぞ!」

「へ? 何よ?」

「何を言っているんです! ここからが本番じゃあないですか。

相手が逃げている今こそ、こちらが一方的に攻撃するチャンス。

彼女らにツイゲキを仕掛けて仕留めてやるのです!」

熱く語る魔王に対し、ルイズの反応は薄かった。

「何よ、もう逃げてるんだからいいじゃない。私の勝ちでしょ?」

「アマい! アマいです、ルイズ様! このままノコノコと逃げ帰られて、勝負は付いていないと開き直られたらどうするんですか!」

デー蒙んのセツカクの特攻攻撃? も次回からは通用しないでしょう。

勝負を決めたければ今しかないのです!」

「そんなことって!」

ルイズは青ざめた。正直に言っただけで心当たりがありすぎた。

ルイズにしてみればとんでもないことだが、キュルケという女は貴族の誇りというものに対し、随分と柔軟な考えを持っているようだ。おめおめと敵に背を向けておきながら、負けを認めずリベンジを凶つてきても不思議はない。

「事によると、あのサラマンダーを外に逃がした後、青髪のコムスメと合流してまたすぐに

攻めてこないとも限りません。いいんですか？あの二人が一緒になつて呪文を放つのですよ。」

どうせ炎と氷の呪文を重ね合わせて、無のエネルギーだとか言つて、ダンジョン内を

ジューリンするんです。そんなのルイズ様の魔法が形無しじゃないですか！」

「折角出した炎と氷を打ち消してどうすんのよ……」

ルイズは魔王の妄言に呆れたが、それが彼女に冷静さを取り戻させていった。

「トモカク、彼女らが体力を消費している今がチャンスです。」

「さあ、今の内にトドメを刺すのです！」

「でももうマモノが残ってない……って、ああ、また掘って補充すればいいのね」

「そうです。今までに倒されたマモノの持つ養分は近くの土に染み込んでいます。」

「ですから少し掘れば、コケやムシなど出し放題です。」

それに今なら、もつとスゴイものが土にタップリ含まれているハズ。

ルイズ様、このダンジョンを見渡して、気付くことはありませんか？」

ルイズは言われて、キュルケがこれまでに辿つて来た道に目を凝らした。

「土が、光ってるっ！」

ルイズは首を傾げた。確かキュルケたちが来る前には、こんな奇妙

な土は無かったはずだ。

「フフフフ。ルイズ様、思い返してみてください。」

その光ってる土、どういう場所に出来たか分かりますか？

マモノがやられてアタフタしている時のルイズ様には

気付けなかったかもしれないが・・・」

それを聞いたルイズはピンときた。

「もしかして、キュルケが魔法を放った場所？」

「ご名答です！その光っているモノは、魔力が土に染み込んだ成分、いわゆる魔分なのです。」

スバラしいことに、魔分からは養分とはまた違った特徴的なマモノたちが生まれます。

セツカクの機会ですし、試してみると良いでしょう！」

ルイズはキュルケを先回りした場所でツルハシを振るい、光る岩盤を崩していった。

すると中から、ふよふよと漂う鬼火らしきものが現れ、ルイズを仰天させた。

「な、何なのよこれ!!」

「出ましたー！それこそが魔分系の基礎ともいうべきマモノ、エレメントです！」

ルイズは一瞬、まさか精霊魔法の精霊エレメントかと身を強張らせたが、よく考えてみれば、精霊がこんな風に目に見えるなどという話は聞いたことがない。いや、むしろこれは・・・

「ねえ、これってまさか・・・墓場とかに現れるっていう『アレ』じゃないわよね？」

「はい？アレというと、鬼火とか人魂とかですか？さあ、多分これなんじゃないですか？

メイジの墓とかがあると、土に染み出した魔分から生まれることもあるのでしょう。」

ルイズはそれを聞いて思わず口を噤んでしまった。

「ついでに言うと、これがデーモンの大好物です。」

ルイズ様ももう一度あの豪快な捕食シーン、見たくないですか？

何だか、魂を啜り食らうアクマみたいでコウフンしてしまいますよね！」

「よし、養分系でいきましよう」

「エ、エエエエ！なぜですかっ！」

「文句を言いたいののはこっちよ！なんでいちいちマガマガしいものばっかり出てくるのよ！」

こんな人魂みたいなもの連れてたら、死人ネクロマンサー占い師になっちゃうじゃない！」

ルイズは尚も不満を上げる魔王の声を切り捨て、養分系の溜まった土を掘り始めた。

キュルケの向かう道を先回りして、次々とマモノが生み出されていく。

しかしコケというコケはあらぬ方向へニジリ寄り、ムシというムシはコケを食ってすぐにサナギになる。中々、戦力となるマモノは現れてくれなかった。何とか養分をかき集めて作ったトカゲ男は数を揃えることが出来ず、単騎で突っ込んでいく有様。あともう一息でキュルケたちを倒せそうなところで決め手を欠く今の状況に、ルイズはやりきれなかった。

「もう！キュルケのくせにナマイキよ！」

あともうちよつとで私の勝ちなのに全然攻撃が届かないじゃない！」

「時にルイズ様、穴を掘る力はまだ残っていますか」

「そうね。大分ツルハシを振るう手が重くなってきたわ。」

でもキュルケの帰り道をマモノで満たしてやるには、まだ十分余裕があるわよ！」

それを聞いて、魔王は満足げに頷いた。

「そうですね、それはスバラしい。どうせ彼女たちに逃げられるぐらいなら、

残る力を全て振り絞ってでも倒しに行きたい。ルイズ様もそう思いませんか？」

「何よ、何かあいつを倒すいい方法があるわけ？」

魔王は二カツと笑った。

「ついに、ついにルイズ様にこのワザを伝授する時が来たようですね。」

「ワザ？」

「ええそうです。今までルイズ様には、ツルハシで穴を掘ってどうするかということを

お伝えしてきました。しかし実はツルハシには、何と！ 穴を掘れるだけでも凄いのに、

それ以外にも秘められた能力があるのです！」

ルイズは白い目で魔王を見返した。

「少なくともツルハシで穴が掘れるのは秘められてもいないし、当たり前じゃないの」

「・・・ナゲカワしい。ツルハシは掘れて当たり前、そういう思い込みが

感謝のココロを人々から奪い去ってしまうので「掘れないツルハシは、

ただのツルハシ以下でしょうが！」

ルイズに睨まれた魔王は、しぶしぶ説明を再開した。

「ルイズ様のお使いになるツルハシは、穴を掘ってさあ終わりというものではありません。

デーモンやパラメリカが通常攻撃以外にも、特殊な能力を持っているように、

ツルハシにだって穴を掘る以外に、とつてもベンリな能力が備わっているのです。」

「このツルハシに、そんな力があるってどういうの？」

ルイズは自らの手にしたツルハシをまじまじと見つめた。確かにこのツルハシは平民が使うものとは明らかに違う。真紫色の柄や手に吸い付くようなグリップ等、普通のツルハシとは一線を画す特徴が見て取れる。だが一番に驚くべきは、その刃であった。彼女のツルハシは、今までたくさんの岩盤を砕いてきたというのに、傷一つ付かずピカピカと輝いていた。名工の鍛えた剣は魔性の輝きを放つと言わ

れるが、彼女のツルハシにも何がしかの魔力が宿っているように見えた。

「いいですか、これから教えるワザは強力ですが、それだけにルイズ様の力を多く消耗します。

使い過ぎて、気付けば穴を掘る力が残っていないなんてこともあり得るため、

十分使いどころに気を付けてください。まあ、相手が逃げ帰ろうとしているこの状況では、

もはや出し惜しみは無用でしょう！」

魔王のもつたいぶった説明に、ルイズは思わず唾を飲んだ。

「この技によって、今、新しい伝説が生まれようとしています。魔界の伝説が再びよみがえる。

悪霊の神々にも増してマガマガしき破壊神様の究極奥義に触れたが最後、

魔界全土がハルマゲドン！ ダンジョンを揺るがすキューキョクの衝撃、

それがダンジョンクエイクなのです！」

略してDQとお呼びくださいという魔王の言葉に、ルイズは何となく不穏な気配を感じた。

「ダンジョンクエイク？それって、まさか地震を起こせるの!？」

「その通りです。DQとはダンジョンを揺らし、ニンゲンどもの足を竦ませ

行動不能にする技なのです。その威力ゆえに、DQの衝撃が走り抜けるとシゴトの手が

止まってしまうプロのハンターもいるんだとか。いや、あくまでウワサですが。」

「とにかく大きな揺れを起こせるのね。それって、なかなかすごい魔法じゃない！」

「どうやってやるのか早く教えなさいよ！」

ルイズは、自分に泥臭い労働ばかりを強いると思っていたツルハシに意外な機能があることを知って、早くもそちらに意識を奪われてい

た。

「ダンジョンクエイクを使うにはツルハシにありったけの力を流し込んで下さい。」

途中、力が漏れ出てダンジョンが揺れますが、そこで慌てずグツと力を入れます。

するとダンジョンが更に大きく揺れ、上手くいけば侵入者たちを行動不能に

追い込むことが出来るでしょう！」

早速ダンジョンクエイクを試そうとしたルイズは、ふとある疑問が頭を過った。

「揺れて相手の足を止めるのはいいけど、マモノ達も動けなくなったりしないのかしら？」

「フッフ、マモノ達を舐めてはいけません。野生の感を持っている彼らはニンゲンと違って、

大きな揺れが来た時にどう動けばいいのか、身体が知っているのです。」

ダンジョンクエイクを発動したところで、何の問題も無くマモノ達は動き回ることが

出来るでしょう。」

「じゃあ、上手くキュルケを足止め出来れば、

その間は一方的にマモノたちが攻撃できるのかしら？」

「その通りです。普段は一撃でやられてしまうようなマモノが、何度も相手をグサグサ、

ガジガジする様はミモノですよ！『マモノを作る』、『ダンジョンも揺らす』、

両方やらなくっちゃあならないのが破壊神様のつらいところですが、もうルイズ様の

覚悟は出来てますよね？・・・ルイズ様？」

ルイズは逡巡した。確かにキュルケは自分にとってにつくき存在である。

しかしこの状況、手負いの彼女らが無防備な状態でマモノに晒し、

骨の髄までしゃぶり尽され兼ねない危険な状況に追い込んでよいものだろうか？

もしデスガジガジに身体を齧られたり、トカゲ男に刺し貫かれては、無事に生きて帰ることすら怪しくなるだろう。ルイズは自分の選ぶべき道を見定めるため、トリステイン魔法学院への入学以来、共に1年間過ごしてきたキュルケとの日々を追想した。

初めて出会ったときは、ヴァリエール家代々の仇敵だということであんなにやっめたものだ。

そしてこちらに気付いたあいつにフンツと鼻で笑われた。心底、小馬鹿にしたような目線を向けられた。ツエルプストー一族が敵だということ、頭ではなく心で理解した瞬間だった。その後、私が魔法の実技で失敗し黒焦げの姿になったのを見て、キュルケは腹をよじって笑い続けた。誰よりも早く笑い始め、誰よりも遅くまで笑い続けていた。

バスタイムの時間がたまたま重なったときに、胸をジロジロ見ながら真顔で

『あなた本当に16歳？』と言われた屈辱は忘れられない。

それ以来、他の女生徒までもが私の胸を可哀想な目で見るようになった。・・・くそう。

まだまだある。私がマナーのなっていないクラスメイト達を相手に、貴族かくあるべしと説教をかましたとき、『言ってることは立派だけど、魔法が駄目じゃ形無しよねえ』と口を挟まれ、皆の爆笑を買う羽目になった。後になって、神妙な顔で話し掛けてくるから何かと思えば、『あんなことになっちゃったけど、立派だと思っただけは本当よ？ まあ後の言葉も本気だったんだけど』等という、有り難くて涙が出そうな言葉を貰った。殺してやろうかと思った。・・・もう、いいよね？

「フフフフ！あいつに別れを告げるには良い機会ね！」

「おおルイズ様、見違えるようにマガマガしくなりましたぞ！」

ダンジョンクエイクは発動までチョット時間がかかります。ですから、彼女らの歩く速さ

トカゲ男はキュルケに気付くと、一心不乱に駆け出した。

「ぎゅるるるるーっ!!!」

「何ですって!!」

いつの間にかムシたちを粉碎していたフレイムが、トカゲ男の前に立ちはだかった。

「まったく、キュルケったら何て悪運の強いやつなのかしら!!」

でもそのサラマンダーも手負いよ!トカゲ男、やっておしまいなきい!!」

「クアアアアア!」

トカゲ男は剣先を真っ直ぐにフレイムへと向け、何度も突きを繰り返す。

「ぎゅるるるるる!!」

フレイムは必死に動き回り、トカゲ男が懐に入り込むのを何とか防いでいるが、その自慢の赤い肌には、幾つもの浅い切り傷が刻まれてつあつた。ルイズは彼らを見る内に白熱し、思わず大きな声を上げていた。

「行け!そこを突くのよ!」

「クアアアアア!」

「ぎゅるるるる!!」

二匹の戦いがいよいよ活況を迎えようとしたその時、無粋な声がそれに割り込んだ。

「ファイアボールツ!!」

かの死闘は結局、特大の火の玉によって終着を見た。

「大丈夫だった!?フレイム!」

「ぎゅるるる」

「助けてくれてありがと、でもゆっくりしてる暇はないわ。

さあフレイム、もうひと頑張りするわよ!」

フレイムは息を荒くして、疲れを隠せない様子である。キュルケは、そんな彼女の使い魔を元気付けながら、また一歩、また一歩とダンジョンの出口に向けて歩き出した。

「ああ惜しい、あともう一息でしたのに！」

「……………」

逃がした魚は大きいとばかり、ルイズは苦い顔をした。

「ここで勝負を決められなかったのはイタイです。大分、彼女らも出口に近付いてきた

ようですね。ですがルイズ様、全ては過去、終わったことです。

キモチを切り替えていきましょう！過ぎ去りし時を求めても、ここでの勝利は

掴めません！さあ、早急に次なるダンジョンクエイクを準備するのです！」

「言われずともやってやるわよ！今度こそトドメだわ！」

そう言つてルイズは二回目のダンジョンクエイクを試みた。

ツルハシに力を込めると同時に、ダンジョンが微かに揺れ始める。

魔王もついに決着の時が訪れるのかという期待に、わくわくそわそわし始めた。

ぐらりと、体の芯から揺れるような衝撃が、ルイズたちを襲った。

「ぎゃあああ!?!」

ぐらりぐらり、ぐらりぐらりと、揺れは一向に収まらない。

「ちよ、ちよつとルイズ様！力込めすぎです！」

これではワレワレまで行動不能になるではないですか!」

「し、知らないわよこんなの！ 私、もう力なんて込めてないわよ！」

揺れは段々と、がくがく身体を揺らすようなものに変わっていき、その内ダンジョン中の壁という壁にヒビが入り、崩れ始めた。

「嘘でしょ!?!」

「ところがどっこい、これがげんじつ!?!?!」

魔王の頭上に、ぱらぱらと土が落ちてきた。ついに、ルイズ達がいる場所も崩れ始めた。彼女らの頭上の壁にできた小さなひび割れがどんどん大きくなるにつれ、落下してくる土はその量をどんどん増していった。

「いやいやいや、こんな現実ウソでしょ！現実なんてクソゲー、ゲ

ハアツ・・・！」

一際大きな揺れの後に、ダンジョンの最下層も完全に崩れ去り、ルイズたちは土の中に埋もれていった。尚も揺れは収まらない。ルイズたちは成すがままに土の奔流に流された。ルイズは必死に口元を手で押さえ、土砂が口から入り込むのを防ぎ続けた。周りの土は次第に重さを増していき、肺の中の空気を全て吐き出させるような圧力が、彼女の全身から襲い掛かった。ルイズはこのまま死ぬのだろうか。と強烈な不安を抱きながらも、必死に耐え続けた。彼女にとって、ただひたすらに長く感じる悪夢だった。急に、ルイズは押し上げられるような力を受けると共に体が軽くなり、当たりが明るくなるのを感じた。やっと解放されたのかと思つたルイズは、あることに気が付いて再び身を強張らせた。体が軽くなつたのではない。今、自分は落ちているのだ！

「きやああああ!!!・・・グヘツッ！」

悲鳴は最後まで上げられることなく途絶えた。ルイズの身体を何かが締め付けていた。

「きゅいきゅいーっ！っ！」

頭上で聞こえた大きな鳴き声に思わず耳を手で押さえながら、ルイズはその声の正体に気が付いた。聞き覚えのないその鳴き声の意味するもの、それは怨敵キュルケの親友、タバサの使い魔だった。

「ちよつと！離しなさいよ！」

ルイズはじたばた暴れようとしたが、風竜の爪にしっかりと捕まれた身体はピクリとも動かなかつた。

「動く危険」

今度は頭上から細かい声が聞こえてきた。

「あなた、タバサね！　何だつてこんなことすんのよ！正々堂々と戦いなさい！」

ルイズは大声で叫んだ。

「そんな場合じゃない」

「何ですよ！」

ルイズはすぐさま食つてかかつた。しかしタバサが返答する前に、

ルイズの耳には意外な声が入り込んできた。

「何なのよ、あれは・・・」

これまた聞き間違いのようなない、キュルケの声であった。その驚き呆けたような声音に異常を感じ取ったルイズは、土まみれの顔でなかなか開けられなかった目をゆっくりと開いていった。

そしてルイズは見た。

タバサの使い魔が風を切って飛ぶその眼下で、学院の塔に並ぶほどの高さの巨大なゴーレムが、その拳を大きく振り抜いていた。学院の壁に叩き付けられた拳の衝撃が、空気をびりびりと鳴らしてルイズの全身を通り抜けていった。

「な、な、　！」

ルイズの心で、再びうねるよう不安が高まった。よく見れば、ゴーレムの足元には潰れたコケやムシらしき残骸も見える。ルイズは、自分が巨大ゴーレムの召喚に巻き込まれたことに、ようやく気が付いた。

「私たちをこんな目に合わせたのは誰よ！」

思わず感情的になるルイズに、タバサが短く答えた。

「あれ」

彼女が指さした先は、ゴーレムの肩であった。暗い夜空の下で、ルイズがよくよく目を凝らしてみると、そこにフードを被り一段と濃い闇に包まれた人影が見えた。

「多分、フーケ」

「フーケ!?あの怪盗フーケですって！メイジの大勢いるこの学院相手に泥棒!？」

ルイズは信じられない気持ちで一杯だった。確かに大胆不敵だという怪盗フーケの噂を信じるならば、このぐらいのことは十分あり得る。だが彼女は今まで、怪盗なんてものは自分とはほど遠い世界のものだと、心のどこかで思っていた。

ゴーレムの拳を受け凹んだ壁から、バラバラと重そうな積み石が落下していく。難攻不落、この国で一番を競うほどに安全なはずの宝物庫が目の前で破られたのを見て、ルイズは早鐘のように打ち付ける己

の鼓動を抑えることが出来なかった。

．．．．．
その夜、学院の外を動き回っているのは、ルイズたちだけではなかった。

夜の闇を、猫のように音も無く駆け抜けていく女が一人。その女の被ったフードからそつと覗く美しい緑色の髪と理知的な顔つきは、学院長付きの秘書ミス・ロングビルのものに相違なかった。しかし、今の彼女は昼間とは全く異なる空気をまとっている。日が沈み外を出歩く人もまばらになったその時から、既に彼女の中で『ミス・ロングビル』の時間は終わりを告げていた。辺りを照らす光の源が太陽から月が変わったその時にこそ、誰もがその存在を知っていて、誰もがその正体を知らない大怪盗『フーケ』が目を覚ますのだった。

フーケは塔の上から、ゼロとして有名な少女が穴を掘って騒ぎ回っているのを眺めていた。

「全く呑気なもんだねえ、学生っていうのはさ！私がこんなに悩んでいるって時に．．．」

思わず彼女の口からばやきが飛び出た。いくら天下を騒がす大怪盗といえども上手くない時だつてある。昼に夜に、あらゆる仕事のストレスが、こうして誰もいない場所での彼女に口を割らせていた。

「教師も教師だ、あのハゲの蘊蓄なんてロクに使えやしない」

フーケはそう言いつつ、険しい顔で学院の壁を見つめた。

彼女の狙いは、この学院の宝物庫の中にあった。

破壊の杖という、ワイバーンすら倒すと言われる強力なマジックアイテムが、そこには眠っている。しかし問題は、宝物庫に掛けられた強力な守りの魔法の数々であった。

錠前の付いた扉は、アンロックを掛けようとびくともしない。錬金の魔法も、スクウェア・クラスのメイジが数人がかりで掛けたという固定化の前には無力だった。フーケの二つ名通り、壁を土くねにして侵入するという手段は使えない。手詰まりを感じつつ調査を続けていた彼女が、ひよんなことから学院の教師に聞き出した宝物庫の弱点

とは、『物理攻撃に弱い』ことであつた。フーケはその時のことを思い出すと、今になつても腹が立つてしょうがない。

~~~~~

「私が思うに、あの宝物庫には一っだけ弱点がありましたな」

「まあ、それは何ですか?」

昼間、宝物庫の扉の前を調べ回っていたロングビルは、偶然通りがかつたコルベールに見咎められると、咄嗟に宝物庫の目録作りを学院長から頼まれたのだという嘘をついた。特に疑うそぶりを見せなかつたコルベールは、やがてこのうら若き女性と少しでもお近づきになりたい一心から雑談を始めた。本来ならこの手の輩との会話を体よく打ち切るのがミス・ロングビルという女だったが、彼女はコルベールが変わり者であると同時に、その彼の持つ知識は人一倍のものがあることを知っていた。ロングビルは巧みな誘導を繰り返しながら会話を続け、ついにコルベールの口からは、宝物庫の決定的な弱点が聞き出されようとしていた。

「確かにこの宝物庫は、魔法での守りは強力なものです。

しかし意外にも、魔法のまの字もない単なる物理的な衝撃には弱いのではないかと

思うのですよ。この学院の壁は、岩から切り出した石のブロックを積み重ねたものに

過ぎません。別に厚さ数十センチからなる鋼鉄で出来ているわけではないのです。

そうであるならば、大砲の斉射を何遍も繰り返せば必ずや・・・」ミス・コルベール」

何ですか、ミス・ロングビル?」

ロングビルは呆れ果てて言った。

「軍隊をそんな風に動かせるお金持ちなら、盗みを働くような必要はありませんわ」

「ははは、これは一本取られましたな!」

「(笑ってんじやないよハゲ!)」

彼女の内心を知らぬコルベールは、ひとしきり笑い終えると話を続けた。

「しかし、お金は無くとも腕に覚えのあるメイジ相手には危ないでしょうな。」

例えば今、トリスタニアの市井を騒がせている怪盗フーケとか！」

ミス・ロングビルはきらりと目を光らせた。

「まあ、それは大変ですわ。理由をお聞かせ頂いてもよろしくて？」

もちろんですと、コルベールは頷いた。

「かのフーケは錬金の腕だけでなく、ゴーレムの扱いにも長けているという話ですからな。」

巨大なゴーレムに宝物庫の壁を殴り付けられれば、それだけで中々危ないのではないかと、

そう思うのですよ」

ミス・ロングビルは嘆かわしそうに首を横に振った。

「ミスタ・コルベールもお人が悪いですわ。」

それでもやっぱりあの壁を壊せるとは思えませんもの」

「何ですと？私の推論に何か誤りが？」

美人秘書の思わぬ反論に狼狽えるコルベールへ、ミス・ロングビルは彼女の考えを説明した。

「だってこの前、ミスタ・コルベールご自身がおっしゃっていたではないですか。」

この学院はいざという時、お城としても使えるよう頑丈に作られたのでしよう？」

簡単に壊せるはずがありませんわ。トリスタニアの新聞によると、フーケは

30メートルもある大きなゴーレムを操るそうですが、それでもこここの分厚い壁を

壊せるとは思えませんわ」

するとコルベールは得意そうな顔になって言った。

「ふっふっふ、ミス・ロングビルも案外頭が固いですな。ああいえ、けなしているのでは

ありませんぞ。そんなところも・・・可愛いなあと、思っちゃったり?。」

ミス・ロングビルは中年男性から発せられたおぞましき言葉に鳥肌を立てながら、努めて平静を装ってコルベールに問い返した。

「一体どういうことですか?。」

「壁を壊せないとあっても、盗人とはそう簡単に諦める連中ではありません。」

絶対無理だと思われること以外なら、どうにかして目的を達成しよう

と 彼らなりの努力や工夫を重ねるものなのです。全く、嘆かわしいばかりですな。

正しい方向に向かって生きていけば、十分堅実な人生を送れるというのに!。」

ロングビルは取り繕った笑みを顔に張り付けて同意した。

「まったくミスタの言う通りですわ。それで、壁を破る方法とは?。」

「ああ、そうでした。つまりですな、レベルを上げて物理で殴ればいいのです!。」

「・・・ハア?。」

ロングビルは思わず、学院長付き秘書としては、はしたない声を上げてしまった。

「レベルを上げて?。」

「ええそうです。」

「物理で殴れと?つまり努力をしてメイジとしての実力を身に付けろということですか?。」

「はい、その通りです。フーケめが30マイルのゴーレムを操るとい

うのなら、もう少しだけ努力して、その分大きなゴーレムを作れるようになればよいのです。

物理的な衝撃は高さではなく体積に比例しますからな、例えばとも

う2〜3割 大きなゴーレムを作り出せば、それだけで威力は1. 2〜1. 3の

3乗、即ち約2倍もの

大きな破壊力を生み出せるようになるのですよ!」

ロングビルは若干キレながらコルベールに反論した。

「それはトライアングルからスクウエアになれと言っているようなものですよ!」

「いえいえ、言うほど大きな壁ではありませんぞ。何でも怪盗フーケとやらは、

恐らくトライアングル・レベルの土メイジではあるものの、その実力は

スクウエアレベルにも届きそうな程だとか。当然、本人の才能は必要ですが、

少しの修練だけでコロツとスクウエアメイジになつても可笑しくありませんぞ。

例えそこまでは行かずとも、工夫すれば破壊のレベルを高める方法は幾らでもあります。

単に拳を振り下ろすだけでなく、しっかりと腰を入れて体重を込めるだとか、

殴るときに拳に当たる面積を小さくして、局所的に大きな負荷を掛けるだとか、

後はそうですね、助走を付けて殴りつけるとか!」

~~~~~

彼の話は、理知的でクールと思われているはずのミス・ロングビルでも助走を付けて殴るレベルだったが、フーケとしての矜持が彼女に行動を留まらせた。こんなくだらないことで怒って正体がばれるなど、馬鹿げている。

「そう簡単に成長出来たら苦労しないんだよ、あのハゲー!」

フーケは改めて学院の壁を見上げた。悔しいことに、コルベールの発言の一部は理に適っている。全力で助走をつけたゴーレムが一点を突けば、確かに壁の一部ぐらいは壊せそうな気がしないでもない。土系統への才能溢れる彼女は、なまじ大きなゴーレムを作れるばかり

に、今までそういった力の限界を試す真似をしてこなかった。しかしそれだけで本当に壁を壊せるのか？確かにハゲへの怒りを魔法に込めれば少しは大きな力が出るかもしれないが、それで宝物庫を破れると思うのは自分が冷静さを欠いているだけではないのか？・・・この念入りな姿勢こそがただの盗人どもと怪盗フーケとを隔て、度重なる犯行にも関わらず彼女が自由でいられる理由だった。

そんな彼女に今、決断が求められている。備えが大事な盗みの家業とはいえ、一つの獲物に何時までも時間を掛けてはおけない。その点、既に彼女は長く学院に居過ぎていた。確かに、このまま長く学院に残っても『ミス・ロングビル』としてのお金は手に入るだろう。だが、それでは足りない。もっと多くのお金を、手っ取り早く手に入れる必要があるからこそ、彼女は『フーケ』という顔を持っているのだ。フーケはもう、宝物庫のことは粗方調べ尽くしていた。このまま学院に居座っても、学院長にお尻を撫でられ続けるだけである。失敗を承知で盗みを決行するか、それともセクハラに辛抱強く耐え続け、あるかも分からぬ機会を伺うのか。それとも、いつそもつと手頃に盗める獲物を求めて、学院には見切りを付けるべきなのか。少しでも大きな獲物が欲しいが、絶対に捕まる訳にもいかない彼女には、常にリスクとリターンを天秤にかけることが求められていた。決定的な決め手を欠く状況において、迷いに答えを与えられるのは自分しかない。さあ、どうするべきか？

「私にもう少し力があればねえ」

思わずぼやきが漏れ出た。フーケは、やさぐれた気持ちで中庭の様子を眺めた。

いつの間にか、騒いでいた少女たちは姿を消していた。きつと掘られた穴の中で遊んでいるのだろうか。

「学生にもなって土遊びとはね」

フーケはそう言って馬鹿にしたものの、今まで才能が無いことで有名だった少女が、いきなりジャイアントモールのごとく穴を掘れるようになったらしいことについては、少し気になっていた。

「あいつも何かマジックアイテムを使っているのかねえ？」

ゼロの少女が実際に穴を掘っていると、彼女はまだ目撃して
いなかったが、騒ぎの現場であるヴェストリの広場に残された穴は、
結構な深さがあるようだった。

「でも名も無いマジックアイテムじゃ、買い叩かれるのがオチだよ」

そう言つて、彼女はハア・・・とため息をついた。

ふと、彼女は足元が微かに揺れているのを感じた。

「気のせい・・・じゃないね。まさか地震かい？」

こんな場所で珍しい・・・いや、もしかして地下で色々掘つてるか
らかしら？」

ルイズ・フランソワーズというあの娘がどれだけ地下を掘り進めら
れるのか、フーケは知らない。だが彼女は、地下道を掘つていての地
崩れは珍しいものではないし、地下を掘り過ぎて地響きと共に地盤が
沈下したというような話をよく知っていた。そこでふと、フーケの頭
に閃くものがあった。一流の怪盗にとっては、何気ないことから機転
を利かすことが大事である。

「あの辺りは地盤が弱くなってそうだね・・・掘り起こし易そうじゃな
いか」

フーケはかの穴の傍でゴーレムを召喚することを思い付いた。そ
もそもゴーレムの魔法の何が大変かといえば、それは土人形の身体を
作り上げる時である。ゴーレムを操ったり修復したりするのは、既に
形の出来たものへ少しずつ魔力を注いでいけばよい。しかし初めに
形を作るときだけは、重く積み重なった地盤を掘り起こして固め直す
のに大きな魔力が必要となる。これが大きなゴーレムを作る上での
一番の障害になるのだった。

「折角おあつらえ向きの状況が出来てるんだ。やってやろうじゃない
か」

半ば諦めようとしていた盗みである。このまま指を加えて待つて
いてもそうそう良い機会は訪れないであろうし、それならばダメでも
ともと、今あるチャンスを生かしてみてもいいのではないか？

いつ盗るか、今でしょ！

そうと決まればフーケの行動は早かった。

彼女がスラスラとよどみなく長い呪文を唱えて杖を振るうと、穴のある辺りの土がみるみると盛り上がっていった。そして十数秒後には、見事35メートルぐらいはあろうかという巨大なゴーレムが出現した。試してみるもんだと、フーケは小さくガッツポーズした。

「私もやるもんだね！」

フーケは自信を持って、ゴーレムの拳を学院の外壁に叩き付けた。壁はびくともしない。

「癪だけど・・・しょうがない」

フーケはゴーレムを大きく後退させ、走る構えを取らせた。「全力の一撃を食らいな！」

ゴーレムはその重厚な足を振り上げ、地面を大きく揺らしつつ加速していった。

そしてもう間もなく壁に激突するところで、ゴーレムは身体の勢いをそのままに、腰を入れた正拳を繰り出した。直後に錬金が唱えられ、鋼鉄となった拳が塔の壁を打ち付けた。

石を積み重ねて出来た壁は、ぐしゃりと内側に沈み込んだ。

フーケは流れる様な動作でゴーレムの肩から腕へと降りていき、その先にある壊れた壁から宝物庫の中に侵入した。そして部屋の壁に並びかけられた幾多の杖の中から、“破壊の杖”と書かれたプレートのあるものを、必死になって探した。破壊の杖は、さして時間を掛けずに見つかった。

「これが杖なのかい？」

フーケはその奇妙な形に眉を顰めるも、マジックアイテムにはよくあることだと思い直し、

破壊の杖が目立たぬよう袋に包み込んだ。

「おっといけない、忘れるところだった」

そう言って彼女が杖を振るうと、壁に文字が刻まれた。

『破壊の杖、確かに領収致しました。土くれのフーケ』

そしてフーケはお宝を大事に抱えて外に持ち出し、再びゴーレムの肩に戻っていった。

彼女が空を見上げると、穴に潜っていたはずの少女たちを乗せた風竜が、空高く舞っていた。

「生き埋めになってないとは運の良いやつらだね」

少女たちは何事が起きているのかと、必死にこちらを眺めているようだった。

しかしそんなこと、フーケにとって障害にはならない。彼女にとって、夜闇に紛れて消え去ることなど造作もないことだった。風竜が飛ぶ向きを変え、騒がしい彼女たちの視線が外れるその隙に、フーケは自身と同じ姿の土像を一瞬で作り上げた。そうして自分はゴーレムから滑り降りていき、地面に降り立った。彼女は植え込み身を隠すと、今度はゴーレムを学院の外へ向けて歩かせた。彼女の狙い通り、風竜はゴーレムの方を追って飛んでいった。

フーケは杖を下した。後は彼女自身が学院から逃げ出すだけだ。ゴーレムは込められた魔力が切れ次第、独りでに崩れ去るだろう。馬を拝借し、空から目立ちにくい森を伝って隠れ家まで戻る。もしたら後は、彼女自身のルートでお宝を売り捌いて終了だ。

この学院での『仕事』は、彼女にとっても特に準備期間が長く、我慢することも多かった。

しかし何だかんだ言って、結局は今回も簡単な仕事だったなどと、そうフーケは余韻に浸りつつ、馬屋への道を急ぐのだった。

STAGE 15 フーケは大変なものを盗んできました

翌朝、学院のそこかしこで目覚めた人々が騒ぐ中、宝物庫には険しい顔をした教師たちが集まり、

重苦しい空気を醸し出していた。

「ミセス・シュヴルーズ！当直に眠りこけていたとは何事ですか！」

「それは・・・本当に、申し訳ありません・・・」

「こうも簡単に破壊の杖を盗まれたのは、あなたの責任ですぞ。」

しつかり弁償して貰わねばなりません！はてさて幾らになることやら・・・」

「どうか、どうかそれだけのご勘弁を・・・。まだ家のローンだつて残っているのです・・・」

「そんな事情などどうでもよろしい！これは泣いて済むことではありませんぞ！」

教師たちが殺伐とする中、ルイズは目の前のやり取りをうんざりとした面持ちで眺めていた。キュルケも同様の顔をしており、タバサはというと何時ものごとく本へ目を落としていた。彼女らは宝物庫襲撃の目撃者として朝早くからこの場に呼ばれたが、今のところ教師たちは責任の追及に必死で、彼女たちに詳しく話を聞こうとするものはいなかった。

「何だか大変なことに巻き込まれちゃったわね」

キュルケのつぶやきにタバサがこくと頷いた。返事こそ返さないが、ルイズも同じ気持ちであった。フーケを目撃した当時の彼女たちには分からなかったが、かの怪盗が盗み出したのは学院一の秘宝として有名な『破壊の杖』であつたらしく、そのことが教師たちを殊更に色めき立たせているのだった。フーケの衝撃に踊らされ、まるで進まない話し合いに一石を投じたのは、遅れてやってきた校長のオスマンであった。普段はただの狒々爺にしか見えない彼だが、来て早々に『今は責任追及なぞしとる場合か！』と教師たちを一喝し、責任は皆に

あることを説いた。

「我々皆が油断しておった。フーケがメイジの大勢集うこの学院を襲うはずがないとな」

紛糾していた話し合いは、オスマンによつて一気に落ち着きを見せた。これこそが偉大なるオールド・オスマンという人物かと、ルイズらはかの老人を尊敬の眼差しで見つめた。もつともそれは、オスマンがシュヴルーズのお尻を触るまでの短い間しか続きはしなかったが・・・

「さあミセス・シュヴルーズ、いつものように元気を出しなされ。さあ。

ほれ、お尻なんか触っちゃったりして」

「ええ、ええ、いくらでも触ってください！学院長のお心遣いには感謝しきりですわ」

オスマンの行動に好意的な反応を返してくれるのは、先程までやり玉に挙がっていたミス・シュヴルーズただ一人であった。周囲の白い目に耐えかねて、オスマンはわざとらしく咳き込んだ。

「ゴホン！」

彼なりのジョークに誰も笑わなかったことをオスマンは嘆きながら、彼はルイズたちに事件当時の状況を詳しく尋ねた。オスマンは、あらかたの話を聞き終えたところで、ふと気がついたように言った。「ところでミス・ロングビルはどこかのおう？姿が見えんが、誰か知らんかね」

「いや、今朝は見かけておりませんぞ」

「私もです」

教師たちは顔を見合わせた。普段なら、一番に駆けつけてもいい彼女の不在に、皆首を傾げた。

「全く、普段は真面目でも、肝心な時に駆けつけられないようではいけませんな」

「その通り、こんな時にいないとは、職務への自覚が足らんというもの

です」

教師らは再び下らない言い合いを始め出したが、間もなくコンコンというノックの後に宝物庫の扉が開かれると、ツカツカとした足取りでミス・ロングビルが彼らの輪に加わった。

「遅れて申し訳ありません」

「ふむ、ミス・ロングビル。今までどこに行っておったのだね？」

「朝からフーケの足取りを追っておりました」

それまで散々に彼女をなじっていた教師たちは、驚きの声を上げた。

「何と！もう既に調査を進めておいてくれたのかね！」

「はい。朝起きてたら大騒ぎでしたから、これは大変と思って、急ぎ取り掛かったのです」

「やはり君は良い秘書じゃ。何も言わずとも、必要な時に的確な仕事をしてくれるの。」

「して成果は？」

オスマンは期待のこもった声で問いかけた。

「フーケの居所を突き止めましたわ」

おお！と感心するような声が一様に上がった。ルイズたちも、この有能な学院秘書へと驚きの眼差しを送った。

「素晴らしいことじゃ。詳しく話してもらえるかね」

「はい、勿論です。周辺の農民に聞き込みを行ったところ、近くの森の廃屋に向かっている

黒づくめの男を見たそうです。ここからの距離は徒歩で半日、馬で4時間といったところ

でしょうか。かさ張りそうな棒状の物を抱えていたとのことですので、おそらくフーケかと」

「ふむ、きつとそれが盗まれた破壊の杖じゃろうて。よく調べてくれた。

そうと分かれば、ここからは時間が命じゃ。今すぐ搜索隊を出そう。

我こそはと思う者は杖を掲げよ」

オスマンは威厳ある声で皆に呼びかけた。だが困ったことに、それに応え杖を掲げるものは誰一人としていなかった。不落と思われた宝物庫を打ち破る程のメイジに対峙する勇氣は、どの教師も持ち合わせてはいなかった。

「何じゃどうした？我こそはと思う者はおらんのか！どうなんじゃ！！」

オスマンの何時になく激しい啖呵に教師たちは震え上がり、余計に彼らは杖を上げるどころではなくなった。少し強く言い過ぎたかのと、オスマンは声のトーンを変え、教師らを鼓舞するように語り掛けた。

「聞け、お主ら！ 諸君らは貴族じゃろ。貴族ならばじゃ。我らの誇りを否定する盗人を

どうして追わんのじゃ。諸君の中に一人でもやつを追おうと立つ奴はおらんのか？」

だが彼の弁舌空しく、教師たちは皆一様にうつむき、黙りこくるばかりであった。

オスマンは皆に失望したのか、虚しそうに一言呟いた。

「……一人もいないのじゃな？」

だがここにただ一人、彼の言葉に感化された者がいた。彼女は心を決めると、すつと杖を掲げた。

「ミス・ヴァリエール！あなたは生徒ではないですか！」

シユヴルーズが彼女を見咎め、心配そうに声を掛けた。

「だって誰も杖を掲げないじゃあないですか！」

教師たちが気まずさから目をそらす中、またも杖を掲げる者が現れた。

「ミス・ツエルプストー！君まで！」

「ヴァリエールには負けられませんわ」

そして残された最後の生徒、タバサまでもがすつと杖を掲げた。

「タバサ！あなたはいいのよ。私が好きで行くんだし」

「二人とも心配」

それを言われ、キュルケは感極まった様子で彼女に抱き着いた。一

方ルイズは、昨日敵に回った相手なのにと、奇妙な思いを抱きつつも、普段無口なタバサの心優しさに触れた気がして、素直にありがとうと告げた。オスマンは反対する教師たちを上手く宥めながら、如何に彼女らが素晴らしい生徒で、捜索隊に相応しいかを語っていった。

「ミス・タバサはその年にしてシユバリエの称号を得ており、

使い魔として風竜を召喚する等、才能著しいメイジじゃ。」

教師たちから驚きの声が上がった。シユバリエとは実力を持ったメイジだけが授けられる爵位であり、家柄や金だけで手に入るものではない。ルイズもこのことには驚いたが、意外なことにタバサと仲の良いキュルケまでもがそのことを知らなかったらしく、『本当なの?』と、驚いた様子でタバサに問い掛けた。それに対しタバサは、彼女らしくこくんと一回頷くだけであった。

「ミス・ツエルプストーもミス・タバサと同じくトライアングルであり、

強力な火の使い手じゃ。確か使い魔はサラムンダーだったかの、戦いにおいて申し分ない働きが出来ることじゃろうて」

自らを称えられてまんざらでもないのか、キュルケは得意げに自慢の髪をかき上げた。

ルイズは負けじと胸を張り、自分への称賛に備えた。

「ミス・ヴァリエールは……うむ、その、なんだ…… 彼女の引き起こす爆発は

非常に強力で、一部の生徒からは『破壊神』とまで呼ばれるほどだとか」

「」

ルイズの視界の端で、シユヴルーズがしきりにうなずいていた。

「それに呼び出した使い魔は見るもマガマガしき亜人だとか「フーケも恐れをなして逃げ出すに

違いありませんわ!」……いやミス・シユヴルーズ、逃がしてもらっては困るがの」

真っ白になって突っ立つルイズを、キュルケは面白そうに見つめていた。

「ふむ、ところで・・・その使い魔の姿が見えんようじゃの。

いつも連れ歩いているのかと思っていたのじゃが・・・」

言われて初めてルイズは、自分の使い魔の姿がどこにも見当たらないことに気が付いた。

「もうーあいつ主人をほったらかしてどこ行つたのかしら？」

「あの、そのことでしたら私が・・・」

ミス・ロングビルが何か言いかけたところで、バタンと大きな音がし、宝物庫の扉が開け放たれた。果たしてそこには、ボロボロになって薄汚れたローブを身にまとう、やつれた魔王の姿があった。

「あんた、今まで一体どこ行つてたのよ！」

「何ですとー！そういうルイズ様は私がどこにいたと思つているのですか！」

すぐさま言い返され、ルイズは思わずたじろいだ。

「どこにつて・・・」

そこまで言つてルイズの首筋に嫌な汗が流れた。

「まさか・・・今まで埋もれてたり？」

「そうですねよ！何かジンジョーでないユレを感じたと思つたら、全身ズツポリ土の中に埋まつて！」

息も苦しく、土が口に入り込み！強い圧迫感にまるで身動きも取れず！

潰れたコケを吸つてノドの渴きを癒し！そうやって、孤独にずっと耐え忍んでいたのです。

ヒョットしたら、こんな地の底でも誰かがフラツと助けに来てくれるんじゃないかと、

夢想しましたが誰も来ませんでした。そうやって、いつ救出されるのだろうかと

涙を拭いて待ち望んでいたというのに、ルイズ様は呑気にグツスリ眠つて、その後は

長々と事情聴取ですか！」

「えーと・・・」

ルイズは頬つぺたを手で搔きつつ、目を反らしながら魔王に答え

た。

「あんたヒョロツとしてるし、そのー……大丈夫だったか凄くシンパ
イしたわ。」

「いや〜ヨカッタヨカッタ」

「ダメらっしやい！今思いついたようなコトバを言ってもバレバレで
す！」

そういうと魔王は目に見えてしよげかえった。

「エエ、分かっていましたとも。」

どうせ破壊神様って、どなただろうとそういうおヒトなんですよ
ね。

私が勇者に捉えられて吊るされそうになっても、ニヤニヤとその様
を眺めて笑ってる。

エエ、知っていましたとも。所詮ルイズさまにはヒトゴトですもん
ね。

セカイセーフクにキョーミないならナオサラです。

だから私がどうヒドイ目に会おうがオカマイなし、そうなんでしょ
う……！」

場を気まずい沈黙が包み込んだ。

何とかしなさいよ！とでも言いたげなキュルケに、ルイズは何度も
小突かれたが、

彼女にしてみてもどうしたらいいのか分からなかった。

「……とまあ、埋もれていた彼を私が帰り際に見つけ、

とりあえず宝物庫の外で待たせておいた次第なのです」

沈黙に耐え兼ねたミス・ロングビルはそう言い加えると、ルイズの
方を見た。彼女だけではない。その場の教師、クラスメイト全員が目
がルイズに向けられ、どうにかしろと無言で語りかけていた。どうに
も気まづくなつたルイズは、覚悟を決めて魔王に話し掛けた。

「あー、えーと、そのー……。私が悪かったわよ。」

別にアンタのこと、ほつたらかしにしようだなんて思っては無かつ
たのよ？

ただね、昨日はとっても疲れていたし、何というか、あんな大きい

ゴーレムが現れて、

踏みつぶされてもおかしくなかったなと思つたら、気が動転しちゃつたのよ。

それでついうっかり・・・ごめんなさいね」

「・・・」

「そうだ！おわびに何か希望があれば応えてあげるわ。

あんまりムチャなのはダメだけど・・・」

「・・・」

ルイズはこれでどうだ？と探るように魔王を見た。

彼女の隣ではキュルケはやきもきしたような顔をしていた。

どうせもつといい言葉は無かつたのかとでも思っているのだろうか。

ルイズにしてみれば、立場を変わつてくれるなら喜んで變わつて欲しいぐらいだった。

「・・・」

二人は息を飲んで魔王の反応を待った。

他の教師たちも、どうなるんだと使い魔の顔を窺いながら事態を見守つた。

タバサだけただ一人、相変わらず視線を下に落とし、手にした本を読み耽つていた。

「・・・まあ、そうですよね。」

やっと出てきた魔王の言葉は相変わらず暗く、ルイズは一瞬、失敗したかと身構えた。

「この私が、ラブリーチャーミーで愛され系なこのワタクシが、

ドーでもいいと思われてほつとかれてたなんて、そんな訳ないですよね！」

魔王の声音はだんだんと明るなものに變わつていき、最後には普段のハイテンションを完全に取り戻していた。皆が胸を撫で下ろす中、ルイズはただ一人、そういえば昨日寝る直前に、『眠たいしあいつのこゝとほつといてもいいか』と考へたなあと、今頃になつて思い出していた。

「ちよろい」

タバサが微かな声で呟いた。

「いやはやルイズ様、大変お見苦しいところをお見せしました。ルイズ様を疑うとは、私もどうにかしておりました。お許しください」

何時ものお調子な様子では想像がつかないぐらい、魔王は素直に頭を下げた。

そんな魔王に、ルイズはあたふたしながら返事を返した。

「いえ、いいのよ。私こそ悪かったわね」

何とか乗り切ったと、ルイズは心の中でガッツポーズした。

「それはそうとルイズ様、トーゼン、かのフーケに対するリベンジのケークは

持つていらつしやるのでしようね？」

「リベンジ？フーケを追うってこと？」

安心なさい、さつきこの3人で捜索隊を組むことに決まったわ。

ミス・ロングビルのおかげでフーケの居場所も特定済みよ」

キクルケとタバサもこくりと頷いた。魔王はそれを見て喜色を浮かべた。

「それはケツコウ！後でそのロングビル殿の話とやらも詳しく聞かせてください」

「ええ、分かったわ。ところで、疲れてるだろうけど一緒に付いて来てくれるかしら？」

すると魔王は、今まで見たこともないぐらい暗い表情で彼女に答えた。

「モチロンです。この私、こうもコケにされてハラワタがニエくりかえる思いです。」

そのフーケとやらには目にモノ見せてやりましょう・・・！」

「そ、そうね！ 頑張りましょう？」

魔王の背後からにじみ出てくる、何時にない迫力にルイズは後ずさりした。

しかし彼の怒りがルイズではなくフーケに向いたというのなら、乗

らない手はない。

「さあ、タイム・イズ・マニーです。今すぐにも出発しましょう！早く動けばボーナスだって上がるかもしれませんよ。ほら、早く準備を整えるのですー！」

「ちよ、ちよつと急かさないでよ！」

「あはは、使い魔の方がやる気がありそうね」

「何ですってー！」

「・・・」

オスマンは皆の意思がまとまったことを見て取り、安堵に胸を撫で下ろした。

「わしらの方で馬車等、必要なものは用意しておこう。

ミス・ロングビル、帰ってきて早急に悪いが道案内を頼めるかの？」

「もちろんですわ、オールド・オスマン」

ロングビルはそう言って、品のある微笑みを返した。

こうしてルイズ達は、魔王にせっつかれつつ急いで準備を整え、盗まれた秘宝を取り戻す旅に出かけたのだった。

STAGE 16 ロングビルですが、馬車内の空気が最悪です

春のうららかな日差しが降り注ぐ。

馬車のゴトゴトという振動も相まって、ルイズ達は思わず眠りそうになっていた。

「ああ、もう退屈ねえ!」

キュルケが声を張り上げた。

「何よもう、いきなり。そんな声出して、はしたないわねえ」

「そういうルイズはどうなのよ。あなただって、眠りそうになってるじゃない!」

「わ、私は違うわよ。そう、考え事!考え事しようとしたのよ。

来るべきフーケとの戦いに備えてね!」

「はいはい。そんな子供も騙せないようなウソ付かないの」

「嘘じゃないわよ!」

そんな調子で少しは元気の出た二人だったが、その内また言葉少なになり……

二人の頭は自然と傾いていった。

「つて、これじゃダメよ!これは大事な任務なのよ?」

眠りこけてるだなんて緊張感が無さすぎるわ!

ねえタバサ!何か気を紛らわす良い方法はないかしら?」

「……イメージトレイニング?」

「ルイズみたいに眠っちゃうじゃない!」

「だから私は寝てないわよ!」

「それも時間の問題じゃないの。ねえ、他に何かないの?」

「……もう少しの辛抱」

そう言うとタバサは本のページをめくった。

「ああもう、よくそんな分厚い本を読んで起きていられるものね」

タバサは少し首を傾げた後、はつきりと言り返した。

「貸さない」

「いらぬわよ！今のはね、私だったらそんな本を読んでは、もつと眠たくなつちやいそうって言いたかつただけなのよ」

「・・・そう」

再びタバサは本に目を落としました。ルイズは眠らぬように歯を食いしばっている。それでも頭が傾いてきては直してを繰り返しているあたり、限界に近いのだろう。キュルケは何かないのかと、馬車を見渡した。外の代わり映えない風景で気を紛らわすのはもう諦めている。ふとキュルケは、今まで特に気にもしていなかった御者台へ引つ掛かりを覚えた。一体何がおかしいんだろう？あまりの退屈のなせる業か、彼女がそれに気付いた時、それはそのまま言葉として出ている。

「なぜ手綱を取つてらつしやるの、ミス・ロングビル？」

そんな仕事、平民に任せておけば良かったじゃありませんか」

「・・・いいのです。私は貴族の名を失っておりますから」

ルイズがびくつと動いた。

彼女の興味を引く話であつたらしい。だが、キュルケはそれ以上に驚いていた。

「え？でも貴方は学院長の秘書なのですよ？」

「オールド・オスマンは貴族や平民の違いに拘らないお方ですので」

私のような者には有り難いことだと、そうロングビルは付け加えた。

確かにオスマンには、平民相手にも多くの友人がいるともつぱらの噂である。生徒にとって身近なところでは、学院の料理長がまさしくそれであつた。かつてトリスタニアの市井で名を馳せたコックである彼は、当時、並居る貴族から引く手数多であつたにも関わらず、その誘いの全てを断り続け、使いの者をにべもなく追い払う頑固ぶりを発揮していたという。そんな折にオスマンは、権威あるメイジらしくらず自ら店へと足を運び、彼を直接口説き落として学院の料理長に据えたというのだ。おかげで学院の料理は非常にレベルが高い。またこれも噂だが、その料理長の彼に出されているお給金は、下手な貴族の収入よりずっと高いという。貴族か平民かに拘らない、そんなオス

マンの人柄を示す話を思い出して、なるほどとキュルケは思った。

だが彼女の興味はそれだけで尽きることはなかった。

貴族の名を失うということ。

しばしば聞く話である。恐ろしいこととも思う。

しかし彼女の身近では起きたことがないし、当然その実態をよく知っている訳でもなかった。こんな機会でもなければ、話に聞くことは出来ないだろう。キュルケはこの状況を良い巡り合わせだと思い、食い下がった。

「差支えなかったら、事情をお聞かせ下さらないかしら？」

だがキュルケの期待に反し、ミス・ロングビルは言葉を返さず微笑みを浮かべるばかりであった。

「失礼とは思いますが、私どうしても知りたいんです。どうか教えてくださいな」

「分かってるならやめなさいよ」

途端にキュルケはうんざりした表情をした。

「何よ、ヴァリエール。あんたは引つ込んでなさいよ」

「昔のことを掘り返すなんて、良い趣味じゃないわ」

「掘るのはとてもイイ趣味だと思います！」

「とりあえずアンタは黙ってなさい」

ルイズは魔王に睨みを利かせてから、キュルケに振り返った。

「とにかく、人の聞かれたくない話を聞き出そうなんてするものじゃないわ。」

例えしつこく訊ねた結果、話して貰えたとしても、それは恥ずべき行いというものよ」

キュルケは大きいため息をついた。

「・・・まったく、カツコつけなんだから。アンタも多少は興味があつたくせに」

ルイズは言い返すことなしに、ふんつと息を吐いた。キュルケも、もうそれを相手にはしなかった。馬車の上には、再び静けさが舞い戻っていた。車輪のごとごとという音だけが鳴り響いていた。

「いやしかし、この場にはセンサクするまでもなくイロイロとバレバ

レな者もおりますな」

ひよんな魔王の一言に、ルイズは眉をひそめた。

「は？ 誰のこと言ってるのよ？」

「それはモチロン、彼女のことです。」

そう言つて魔王が差し示したのは、ロングビルについての話に加わらず、ずっと本に目を向けていた青髪の少女、タバサであつた。指差された彼女はその一瞬、微かに動いたが、すぐにそのまま微動だにしなくなった。ルイズは首を傾げて魔王に尋ねた。

「どういうことよ？」

「そのタバサ嬢でしたっけ。何でも彼女はナゾ多き生徒だとウワサされているらしいですな」

「まあ、それはそうだけど・・・」

ルイズも思わず同意した。何せタバサというのは犬や猫に付けるような名前であり、つまりは明らかな偽名である。そして彼女は喋らない性質であるので、クラスメイトの大部分にとって彼女は謎の存在であつた。おまけに唯一仲良くしているキュルケにも話していないことは多いらしい。なんせ、つい先ほどシユバリエであることが判明したばかりだ。学院に通うような年でその称号を持つなどと、謎は一層深まるばかりだつた。

「それが一体、なんでバレバレだつていうのよ？」

「ルイズ様、私をバカにしちゃあいいけません。これでも私、魔王ですよ？」

「まだそんなこと言う。それで結局何だつていうのよ？」

「私は魔王。つまりはソレナリに博識であるということですよ。」

上に立つ者はジョーホー通でないと務まりませんからな。

そしてそれはつまり、ルイズ様たちの目には分からぬコトでも、

私からすればまる分かりなんてコトがあるということですよ！」

そう言つて魔王は得意げに胸を張つた。

「アンタが博識ねえ・・・」

「・・・」

タバサは先ほどから無表情を貫いているが、魔王の主であるルイズ

は胡散臭そうな顔を隠しもしなかった。タバサのことがバレバレと聞いて、親友の秘密の危機に警戒していたキュルケも、自分のことを博識だと抜かすこの亜人には大いに毒気を抜かれたのだった。

「フッフ、あなたヨユウそうですね。どうせウソだと思っっているのでしょうか。」

学院の狭い敷地に押し込められた私なんかに分かるはずがない、と。」

魔王は周囲の白けた空気に気付いていないのか無視しているのか、タバサに向かって話し掛けた。

「トコロがドッコイ、我ら魔王軍の手は広いのです！ルイズ様が初めてツルハシを

振るわれたその日から、我が魔王軍のニジリゴケネットワークは日々その範囲を拡大し、

今では世界中の幅広い最新情報がコケのニジる速度で手に入るのです！」

「あんた、私の知らないところで何やってるのよ！」

「コケのニジる速度って・・・速いの？それ」

タバサは本から目を離さないまま呟いた。

「ギーシュとの決闘騒ぎは10日前。あのスライム状の魔物をコケだというのなら、

休まず動き続けたとしても、辿り着けるのは良くてガリアやゲルマニアの中腹当たり。

当然、往復は不可能。そもそもあの弱さなら全滅が妥当」

「・・・フッフ！わ、私に追い詰められたからと言って、話を逸らそうとしてもムダです！」

そんなオドシには屈しません！」

「なんでアンタが狼狽えてんのよ・・・」

ルイズは呆れてため息をついた。しかし魔王の往生際は悪かった。「私を誤魔化そうとしてもムダだということですよ！」

魔王の手から簡単に逃れられるとは思わないことです！」

「あなたもいい加減しつこいわねえ。それならこの子のこと、何か言

い当ててみなさいよ。

当たるとは思えないけど」

魔王はそれを聞いてニヤツと笑った。

「言いましたね！それでは私のフカイ洞察力にオソレおののくがいいでしょう！」

「早く言うー！」

急かされてやつと魔王は考えを述べ始めた。

「先ずはその大きな杖です！ズバアリ、それは父親から譲り受けたものですね？」

「・・・」

思ったよりまともな予想で、ルイズとキュルケは思わず顔を見合わせた。

「どうなのよ？タバサ」

タバサが相変わらず本に目を落としているのを見かねて、キュルケが尋ねた。

「・・・この杖は古風の大振りな杖。私の背丈とのバランスを考えても、予想は簡単」

「・・・つまり当たってるのね？」

おお、とルイズとキュルケは感嘆の声を上げた。

「それで？まさかアンタのいうイロイロっていうのは、それだけじゃあないでしょうね」

「モチロンです、ルイズ様」

魔王は不敵な笑みを浮かべた。

「次に言い当てるのはもつとスゴイですよ！

ズバリあなた、マモノとコトバを交わしていますね？」

「・・・」

タバサはまたも沈黙を守った。ルイズの目には、心なしか先ほどよりもタバサが硬い表情をしているように見えた。

「具体的に言っていると、使い魔とよく話しているのではないのでしょうか？」

「あの風竜と？」

キュルケは再びタバサに問いかけた。

「で、タバサ。どうなのよ?」

「・・・飛竜は喋らない」

「そりやそうよね。喋るのは韻竜だけよ」

「そうよ、それに韻竜はもうとっくに絶滅してるはずだし」

だが彼女らの反論を聞くも、魔王は動じなかった。

「まあ、言いたくないのであれば、この件はあまり掘り下げないでおきましょう。

私も紳士ですから、マモノにはやさしいのです。

真相は私のムネの内にとまっておきましょう」

「・・・」

何よ外れたくせにと、外野の二人は騒ぎ立てた。

「その代わり!もつとヤバい事実をアバいてしまいました!」

「・・・」

タバサはパタリと本を閉じ、ゆっくりと顔を上げた。

彼女は無表情を貫きつつも、その眼差しだけは魔王を射抜くようであつた。

「これは結構デリケートな問題ではありますが、私、ダンジョンに攻め入る勇者どもには

ヨウシヤしないと決めているのです!ズバリ、あなたの両親はケツコウ大変な、というか

フコウな目に遭っているのではないのでしょうか?」

「・・・」

「ちよつとあんた!」

ルイズが非難の声を上げる中、キュルケもすかさず話に割って入つた。

「そうよ、この子が悲しむようなこと言うなら許さないわ!」

その目は、親友を守る決意に満ちていた。

しかし彼女のその高潔な意思是、思わぬところから遮られるのだつた。

「別にいい」

「タバサ!」

心配そうにキュルケが見つめる中、タバサはか細い声ながらも堂々と魔王に答えた。

「私が出自を秘密にしている以上、両親に何かあると噂されても不思議はない。」

それにみんな、多かれ少なかれ不幸を背負って生きている。

この手の言葉は、占い師や詐欺師がよく使う手」

「……まあ、いいでしょう。私から言わせれば、どう考えても大きめの

フコウだと思えますがね」

タバサはそれには答えなかった。

「ねえ、もうやめましょうよ」

キュルケが不安げな声で言った。

「私が暇潰ししようとしたのが悪かったわ。だから、ね？」

「そうよ。こんな下らないお話はもうお終いよ」

ルイズも一緒になってやめさせようとする。

だが、それは張本人の言葉で遮られた。

「構わない」

「タバサ!」

「この使い魔とはここで決着を付ける。」

あなたの言っていることがペテンだと、ここで証明する」

「無理しちゃダメよ!タバサ!」

「……」

タバサはキュルケに声を掛けられても、振り返りはしなかった。

その目はじっと、魔王を睨み付けていた。

「どうやら、ホンキのようですね。」

ヨロシイ!ならば私もゼンリヨクで叩き潰して上げましょう!」

「あんた!」

もはや、誰にも二人を止めることは出来なかった。

何よりも、タバサと魔王が彼ら自身の対峙を望んでいた。

「あなたの最大のヒミツをアバきます!一気に畳み掛けてやりましょうとも!」

「……………」

ルイズとキュルケは、二人の間に火花が飛び散るような空気を感じた。

魔王はくらえ！というようにタバサを指さし、とんでもないことを口走った。

「あなたは王家の血を引いていますね！それも直系です！」

ルイズもキュルケも、顔を真っ青にした。内容にも驚きだが、そもそもこの予想には当たっているかいないか以前の問題があった。王家の血筋を騙るということ、それ自体が大問題だった。誰かがふざけて、アイツは王家の血を引いていると言ったとしよう。国は、それを単なるお遊びでは済まさない。その軽々しい発言は、王家の名誉に泥を塗る行いであり、万死に値するものだと言断される。そこに、一切の言い訳、如何なる事情も通じはしない。その累は家族から友人に至るまで及び、下手をすれば皆々死刑になってもおかしくないのである。

キュルケは青ざめた顔でタバサの様子を伺い、そして余計に心を締め付けられることとなった。

タバサの顔も真っ青だった。相変わらず魔王に目を向けたまま微動だにしないが、もうその目からは対抗しようという力強さを感じられなくなっていた。それどころか彼女の眼には、恐れさえ浮かんでいるように見えた。

「まさか本当に王族だというの!?タバサ、あなた一体……!?」

キュルケの心の内の疑問に答える者はいなかった。

ただこの場に響くのは……魔王の更なる追及の声だけだった。

「どうですか！ズボシでしょう！ヒテイできないでしょう！」

だがまだ終わりません！今度こそトドメです！

二度と我ら魔王軍に立ち向かえなくなる程のショックを与えてやりましょう！」

衝撃を受けたルイズやキュルケには、魔王の口を止めることが出来なかった。

「あなたの母親の名、それは！」

「やめて！」

タバサがその無表情をかなぐり捨て、声を張り上げた。

「フローラです！」

「」

「フローラです！」

「.....」

「フフフフ、声も出ないでしょう。当然ですよね。」

あなたの父親という奴は、結婚するとき幼馴染のムスメを取らずに金持ちのムスメを、

それもアイテム欲しさになびいて選んだのでしょうか？知ってます。こういうの、

ニンゲンどもはヒトでなしと言うんでしょう。出自を明かせなくてトウゼンです！」

「.....」

「その大きな杖は伝説のマモノ使いにして、グランバニア王である父親から

受け継いだのでしょうか？なんせ彼のトレードマークですからね。

一目で分かりましたとも！

そしてそんなマモノ使いの才能を受け継いだムスメ、それがあなたという訳です。

あなた、マモノとココロを通わせ、言葉を交わすことが出来ますね？

今は丁度馬車に乗っていることですし、どうせマモノが飛び出て来たらボコボコにした挙句、

仲間に出ててしまうのでしょうか」

「.....」

「父親は幼少期に片親を殺された上、青年期までずっと奴隷に身を落とす、

過酷な労働に耐えてきたのですよね。そして脱出後、都合の良いヒトと結婚し……

ああ、誰を運命の人として選んだかは、あなたの髪の色ですぐに分かりました。

とにかく結婚して子供が生まれ、順風満タン……と思ったら妻と一緒にマモノに捕まり、

石にされ、年月が過ぎるのを何も出来ぬまま眺め続ける……私も簀巻きにされたら

何も出来ないでチョツピリ共感してみたり……いえいえ何でもありません。魔王たるもの

勇者一味に共感などとアリエナイです、ええ。それから何やカンヤあつて、

どっかの魔王を倒して、今は王宮暮らしでもしているのでしょうか？
そんなもつて、

家族水入らずのピクニックでは、パパ、地獄の帝王倒しちゃうぞー
とか言ってるんです。」

「……」

「ま、そんな訳であなたのことは全部まるつとお見通しなのです！」

「違う」

「え？」

「全然違う」

「またまたご冗談を！」

魔王はまるで気にもしていない風にふてぶてしく答えた。

しかしタバサは凍り付くような沈黙でそれに答えた。

「……」

「え？いや、まさか……フローラじゃ、ない？」

「全く違う」

タバサは無表情ながらも、その身から怒りが吹き出ているようであつた。

それは凍てつく寒さを伴いつつも、激しさに満ち溢れた吹雪のようであった。

「う、ウソです！私のシックスセンスだって間違っていないと言っています！

だってアナタ、どうせ双子なんでしょう？そんでもって片割れの方が、

あなたには無い伝説的なチカラを受け継いでるんですよね？」

「双子も、兄妹も、いない」

タバサはきつぱりと言いつつ切った。

「・・・もしかして、実は知らないだけで双子だった、とか」

「ない」

「ないでしょ」

「あり得ないわよ」

タバサの否定にキュルケとルイズも加わり、魔王は完全に立つ瀬を失った。

「そ、そんなまさか・・・私のカンペキなハズの観察眼と推理力が通用しないとは・・・or2」

魔王はそう言って崩れ落ちた。手狭な馬車の上で全身を使って項垂れる様は、

非常に滑稽であった。

「はあ・・・結局、こいつはこいつって訳ね」

思わずついて出たルイズの言葉にキュルケ、タバサの二人もうんうんと頷いた。

「結局、本当に暇潰しでしかなかったわね。・・・むしろ気疲れしたというか」

「逆効果」

「うん、もう十分目は覚めたし、後は大人しく待ちましょ？」

そうして3人は黙り込んだ。話し声が消えると、再び馬車のゴトゴトという音が、彼女らの耳によく聞こえるようになった。

「こ、このままでは引き下がれませんー！」

「あなた、まだそんなこと言ってるの？」

魔王の往生際は悪かった。あれほど落ち込んでいたのに、もう元氣を取り戻したらしい。

「あなたこれ以上喋って、私の顔に泥を塗る気？」

「いえ、今度こそ、今度こそは自信があるのです！」

いや、むしろ先ほどの推理が外れた時点で、

残るコタエはこれしか無かったと言っていいでしょう！」

ルイズはどうする？といった表情で、キュルケとタバサに顔を向けた。

「いいんじゃない？黙ったままでも逆に気になるわよ」

「変なことを言ったら、返り討ち」

その返事にひよったのか、魔王は不安げな声で最後の推理を語った。

「タバサという珍しい名前から導かれる答えは、もはや一つしかありません。

あなたのお父様の・・・奥様は魔女？」

「当たり前！」

ルイズとキュルケがすぐさま非難の声を上げる傍ら、タバサはさっさと本に目を下していた。

そうやって彼女たちが騒ぐ間にも、馬車は森に近づきつつあった。フーケのアジトは、ようやく見えてきた鬱蒼と茂る森を抜けた先にあるという。長かった馬車での道のりも、ようやく終わりを告げようとしていた。

STAGE 17 最後の掘りは、せつない。

一行は森の茂みが深くなったところで馬車から降り、細い小道を辿っていった。この先にフーケが潜んでいるという事実が、森の暗がりよりも一層怖いものに思わせ、ルイズの心をざわつかせた。しかし、しばらく行くと深かった森の繁みはいきなり途絶え、一行の前に大きく開けた場所が姿を現した。先頭を歩いていたロングビルは、そこにポツンと建った小屋を見て、きつとこれが例の小屋でしようと言った。小屋は見るからに年季が入っており、果たして本当にフーケはこのような場所で寝泊まりするのだろうかと思わせる代物であった。貴重なお宝を幾つもせしめ、大いに儲けているはずの怪盗も、案外金の出が多く苦勞しているのかもしれないと、ルイズは益体もないことを考えた。

「先ずはあの小屋を探らないといけないわね。とりあえず作戦を立ててみましょうか？」

キュルケの言葉に、ルイズとタバサも頷いた。

「ハイ！私に腹案があります！」

一番に手を挙げたのは魔王であった。皆、嫌な予感がしつつも、フーケの搜索に乗り気であった彼の話を初めに聞くこととなった。

「フーケは強敵です。中途半端なことをしては、返り討ちがイイトコロでしょう。」

それに我々には向き不向きもあることですし、ここは適材適所、皆が最適な役割を担っていく

ヒツヨーがあるのではないのでしょうか？そこで提案があります。

皆で我が地下帝国の誇る陣形を

組んで、あの小屋を強襲するというのはどうでしょうか？」

「役割を決めるって発想は悪くないでしょうけど・・・」

内容はともかく、それを言った相手が相手なだけに、キュルケは警戒を隠さなかった。

「とりあえず、あなたの言う陣形とやらを詳しく話してみなさいよ」
ルイズの許しを得て、魔王はつらつらと自分の考えを述べ始めた。

「よいですか、ルイズ様。我々は地下インペリアルクロスという陣形で戦います。

防御力の高いフレイムが前衛、両脇をタバサ嬢とキュルケ嬢が固める。

ルイズ様はシルフィードの後ろに立つ。つまりルイズ様のポジションが一番安全です。

安心して戦うと良いでしょう!」

それを聞いたルイズはすぐさま突っ込みを入れた。

「あんたのポジションはどこよ!」

「私は控えます。悪のオヤダマ的に皆が戦う様子を地下から見つて笑っておけばいい、

オイシイ役割ですね!」

「使い魔が一番楽しんでどうすんのよ!」

タバサやキュルケもこの反論に加わった。

「無意味どころか不合理」

「地下の要素ゼロじゃない」

バツサリだった。

「いや、だから私が地下に潜む皇帝的な感じで、他の皆が地上で頑張るという陣形です」

「却下よ!」

「先ずはフーケが小屋にいるか確認すべき。

いるならフーケを外に誘き出す。後は皆で袋叩き」

タバサの提案には、魔王と違って一人の反対も起きなかった。彼女らは意見を出し合い、実行の段取りの詳細を詰めていった。この作戦には、第一に偵察を行う人員が必要となる。フーケに気付かれない方がいいため、一人が小屋の近くまで様子を見に行くこととなった。

「誰がいいかしら?」

「捕まっても平気そうなの」

一斉に皆の視線が魔王へ集中した。

「・・・何でしょう。このウレシくない信頼感は・・・」

簀巻きにされて、引きずられて、吹き飛ばされて、そんなことをさ

れた挙句にビツタンビツタン動き回れる。戦闘ではまるで使い物にならない魔王の隠れた才能だった。

「良かったじゃない。あんたも補欠と言わずに役に立てるわよ」

「いいえ、ジョーダンじゃないです！戦闘要員でもなく、シナリオ進めるためだけに入れられた

メンバーなんて、大した思い入れもなく使い捨てにされるのがオチじゃあないですか！」

「自ら補欠になろうとした奴が、何言ってるのよ！」

「ルイズ様、もつといい方法があります。フーケがいるなら、

その時点で小屋ごと燃やしましょう。窓と扉を監視しておけば、

確実にフトドキモノを葬り去ることが出来るハズです。」

「破壊の杖ごと葬ってどうすんのよ！」

結局、小屋への偵察役が覆ることは無かった。魔王はしぶしぶと、慎重に身を潜めながら小屋へと近付いて行った。しかし魔王が窓をひっそり覗いてみても、中に人がいる気配はなかった。一先ず簀巻き
の危機が回避されたことに魔王は安堵して、皆を呼び寄せた。

「どこかに出かけてるのかしら？」

「まさかもう逃げ出した後じゃないわよね？」

ルイズは不安そうに言った。

「確かめるべき」

「そうですね。小屋の周りの茂みにひっそりと隠れているなんてこともあるかもしれせん。」

私は周りの森を見えますわ」

ミス・ロングビルはそう言うのと、辺りを囲うように生えている木々に分け入り、フーケを探し始めた。

「じゃあ私は小屋のすぐ外から見張ってるわ。森からだろうと小屋からだろうと、

フーケが飛び出してきたら火で巻いてやるわよ。ね？フレイム！」

「キュキュキュツ、キュキュ〜」

「上から見張っておく」

「きゅいゅいゅ」

「・・・私は小屋の中を探すわ」

火を吹いたり、空を飛んだり出来る使い魔を持たないルイズは、渋々と誰もいない小屋内の探索を申し出た。

「それじゃあ、私は余りということで「あんたも一緒に探すのよ!!」

ルイズと魔王が小屋の中に入ってみると、中には至る所に埃が積もっていた。しかし最近になって人が出入りしたのも確かなようので、床にはくつきりとした足跡が残っていた。扉から続く足跡は、そのまま真っすぐと、大きなチェストの前まで続いていた。ルイズはチェストの引き出しにひっそりと手を伸ばし、触れそうか触れまいかというところで、その手を引つ込めた。

「この中に破壊の杖が隠されてるかもしれないわ。」

「ねえアンタ、学院の秘宝に興味はない？開けてみなさいよ」

「まあ、魔王的にはキョウミシンシンです。」

秘宝を集めて新しきカミになるというのも悪くないかもしれないかもしれまん」

そう言うのと魔王は手を伸ばし、ガラツと勢いよく引き出しを開けた。

「む？何か入っておりますな」

「手に取ってみなさいよ」

「ルイズ様は手に取られないのですか？」

「いいのよ。使い魔の手柄はメイジの手柄なんだし、

あんたへ破壊の杖を初めに手にする栄誉を与えて上げるわ」

魔王はルイズの様子に妙な違和感を覚えつつも、奇妙な形の『杖』に手を伸ばした。

「アラアラララ？」

魔王はそれに触れた途端、へなへなと体の力が抜けて床に座り込んだ。左手のルーンが一瞬だけ、光を放っていた。

「ルーンが反応しただけ？・・・どうやらトラップのたぐいは無さそうね」

「何てことに私を使ってるんですか！イキナリ栄誉を与えるだとか言い出して、

「アヤシーと思ってたのです！」

「何よ！どうせあんた自身は、フーケに出くわしても何もできないじゃない！」

「私はあるに使い魔としての活躍の機会を与えただけよ！」

それを聞いてなお、魔王は不満そうな顔をしていたが、ルイズが取り合いそうもないのを見て、ハァーとため息を付いた。

「そもそも使い魔のくせに楽しんで過ごそうってのが甘いよ。」

それにしても、これが破壊の杖なのかしら？これって杖というより……」

学院の秘宝を手にして、ルイズは思わず困惑した。古い時代の杖は、タバサが手にしているような大きいものがほとんどだが、破壊の杖はそれにしても重く、また太かった。

「どうやらルイズ様、それが破壊の杖でマチガイないよーです。」

私のこのルーン、ヤツカイですが、どうやら武器に反応する性質があるようです。

それに触れた途端、その『破壊の杖』の本当の名前や機能、使い方が、

スーツと私の頭に入ってきました。まあ、私の意識もスーツと消えかけたんですけどね！

サイテーですよ！」

ルイズはあんまりな使い魔の状態に頭を抱えつつも、魔王に問い返した。

「ちよつと待って、それじゃ破壊の杖は武器だってこと？」

「ああ、それはですね……」

その時、小屋の外からキヤー！というキュルケの叫びが響いた。ルイズたちは何事かと身構えたが、彼女らは小屋を出るまでもなく、何が起きたのかを思い知らされることとなった。突如として、小屋の屋根が轟音と共に吹き飛ばされた。ルイズが見上げると青い空、そして高くそびえ立つ巨大なゴーレムが目に入った。ゴーレムが腕を振りぬいた先へと、元は屋根であった木片が、ばらばらになって落ちていく。

「ルイズ様！」

魔王が声を掛けた時には、既にルイズは詠唱を始めていた。タバサやキュルケも既に呪文を唱えており、竜巻や火の球がゴーレムにぶつけられている。ルイズが杖を振ると、狙いの定まっていなような爆発がゴーレムの表面を弾き飛ばした。しかしゴーレムは動きを鈍らせることなく、彼女らに襲い掛かった。始めゴーレムは、その巨大な腕をぶん回し、空を駆ける風竜を叩き落そうとした。しかし風竜はタバサを乗せたまま必死に羽ばたき、ゴーレムの腕の合間を縫って、攻撃を器用に避けた。ゴーレムはその後も腕を振り回したが、風竜が距離を取り始めたのを見て取ると、今度は巨大な火の玉を放ち続ける地上の邪魔者に目を光らせた。

「勝てるわけないわ！退却よ！」

キュルケは既にフレイムにしがみ付いていた。地を這うトカゲの動きは中々早いもので、あつと言う間に彼女らは森の茂みに姿を隠した。そこまで来て、ゴーレムの動きに迷いが生じた。このまま木々を薙ぎ払って、キュルケを追うべきか、それとも……。ゴーレムはしばらく動きを止めた後、ようやく今の今まで無視して来たルイズたちの方へと振り向いた。

「ルイズ様、早く退却しましょう！」

魔王は必死になって叫んだ。だがルイズは『ファイアーボール』を唱え続けた。

成功もせず、ろくに当たりすらしないその魔法を、彼女は何度も何度も唱え続けた。

ルイズの足は、後ろに引くどころか、ゴーレムに向かって少しずつ前に進んですらいた。

「ルイズ様!!」

「使い魔は黙ってなさい！」

ルイズは、まるで聞く耳を持っていなかった。

「このままじゃ勝てる訳がありません！」

「あんた言ったじゃない！私には大きな力があるつて！」

「その通りです！ですからツルハシを振るうためにも、早く地下に逃

げましょう！」

魔王が言い返しても、一つの思いに囚われた彼女の顔が変わることはなかった。

「私はメイジなのよ！ツルハシを振るう者をメイジと呼ぶんじゃないわ！」

魔王に言い返しつつもルイズは杖を振るい、一際大きな、それでいて失敗している魔法を解き放った。

「杖を振るう者を、メイジと呼ぶのよ！」

「・・・それは、まあ、ゴモットモで」

ゴーレムはその身体の一部を吹き飛ばされても、すぐに周りの土で欠けた箇所を埋め、元の形に戻る。それでもルイズは諦めずに、何度も杖を振るった。そしてその間にも、ゴーレムはずしずしと地面を揺らしながら、彼女に近付いて来ていた。ゴーレムが間近に迫り、持ち上げられた大きな足の裏側を仰ぎ見る頃になって、ようやくルイズは踏み潰される未来に恐怖し青褪めた。ゴーレムは戸惑いなく、その足を踏み下ろした。

「ふん、バカなガキもいたもんだよ」

森の陰からゴーレムを操っていたフーケは、くだらなさそうに呟いた。

彼女はゴーレムが踏み下ろした足を、ゆっくりと持ち上げさせた。

「チツッやっぱり逃げたか」

ゴーレムの巨大な足跡の内側に、底を見通すことの出来ない、深い深い穴が掘られていた。

「まあいいさ。まだ機会は十分にある」

木陰に隠れたフーケは、風竜と共に空を舞うタバサと、森に身を潜めつつゴーレムを窺うキュルケを盗み見た。

「あの小娘が、あれの使い方を知ってるといいんだけどねえ。」

まあ、知らなきゃ皆殺しにするまでさ！」

それまで立ち止まっていたゴーレムが、グオオオオと大きな唸り声を上げた。

.....
地の底深く、地上で暴れまわるゴーレムの物音一つ届きはしないところルイズは潜んでいた。あらゆる音が吸い込まれていくように消えていくその場所では、コケがにじり寄っては壁にぶつかり引き返していく、ゆったりとした時が流れている。ルイズはツルハシを片手に、肩で息をしながら穴倉の底にうずくまっていた。そこに、ゼイゼイと息を切らしながら、魔王が転がり込んできた。

「し、死ぬかと思いました！あのままじゃ、ゴーレムを駆逐してやる前に

我々が踏みつぶされてオシマイです！」

「.....」

「ルイズ様、先ほどはなぜすぐに逃げなかったのですか？」

相手にまわりこまれてしまった訳でもないのに『逃げる』を選ばないなんて、

いくら何でもガンガン行き過ぎです！」

興奮冷めやらぬ様子の魔王に向け、ルイズはぽつりと呟いた。

「杖が.....使いたかったのよ」

「杖ですか？ まあ最近はずっとルイズ様、ツルハシを握ってききましたからね。」

たまにはそんなキブンの時もあるでしょう。しかし今は状況がチガウのではないのでしょうか？

今のルイズ様はツルハシでこそ、その秘められた力を発揮出来るものだと思います！」

しかしそれを聞いたルイズの反応は鈍かった。彼女はそのままずっと黙っていきそうな様子だったが、『はい』か『いいえ』の返事をひたすらに待ち続けるかのような魔王の視線に気付くと、諦めたようにため息をついた。

「確かに、あんたの言うように私はツルハシを使って、すごいことが出来るようになったわ。」

地面に一瞬で穴を掘れるし、見たこともないようなマモノを何匹も呼び出せる。それに地下の

様子なら全て見通すことが出来るから、ここにフーケが乗り込んで来てもすぐに分かるわ。

本当、今までならどれも出来なかった、夢のようなことよ」

「おおー。ルイズ様にもようやくツルハシの素晴らしさがワカッてきましたか？

この魔王、辛抱強く待った甲斐があるというものです！」

「何も出来なかった今までより、ずっと良いはずなのよ」

「そうと分かっているなら話は早いです。さあ今からでもツルハシを！」

「でもイヤなの！　いくらツルハシを通じて不思議なことを起こせても、

普通のメイジみたいな魔法は使えないじゃない！」

「・・・」

「このままツルハシを振り回していたら、一生懸命練習すれば出来ていたかもしれない魔法まで

出来なくなってしまうそうじゃない！　私、魔法から一生遠ざかってしまうのは嫌よ！」

ルイズが叫び終わると、途端にその場を静寂が包み込んだ。再び全ての音が土の中に吸い込まれていく。魔王はしばらく考え込んだ後、ゆっくりと口を開いた。

「・・・私もルイズ様にそういう願望があるのはワカッています。

確かに杖とツルハシは違うでしょう。いくらツルハシを振るっても、

他の生徒みたいに呪文一つで空を飛べるようになるワケではありません」

「・・・」

「ですが、それを踏まえてなお、今はルイズ様にツルハシを持っていて頂きたいのです。

ルイズ様の身を守る武器として、また盾としてツルハシを使って欲しいのです。

コレ、主を思う使い魔としての真摯なお願いです。

まあ、少しは私の願望も入ってますケド……」

ルイズは魔王の言葉を聞いてはいるものの、普段の元気はなく、彼のふざけたひと言にも反応を返さない有様だった。魔王はどこか調子が出ない様子で、言葉を続けた。

「私もツルハシだけ持っていてくれ、なんてことは言いません。いくらルイズ様が杖でシツパイ続きだろうと、魔法の練習をするにと、

その努力を笑ったりはしません。むしろ応援したいぐらいです。杖もツルハシも両方使えたら、歴代破壊神様サイキョウもユメではありませんしね。

あ、でもD●mp様超えは……いやいや、私が限界を見定めてはいけません」

これはシツケイと魔王は謝ったが、ルイズはそれを聞いても複雑そうな顔をしたままだった。

「トモカク、私もセツカクこの世界に呼ばれた訳ですし、ルイズ様には笑顔で世界征服して

貰いたいのです。そのためならこの魔王、多少ムチャなことでも努力は惜しまないつもりです。

ああ、でもあのゴーレムに剣を突き立てに行けだとか、七万の軍勢を一人で押し留めろだとか、

そういうのは無しの方でお願いします。いやホント、これジューヨーですからね。

……無反応は困ります。エ？いやマサカ、ホントーにそんなことしませんよね!!」

急におどおどし始めた魔王を見て、ルイズは少しだけ笑った。

「……あんたも相変わらずね」
それをきっかけに、ルイズはぽつりぽつりと胸の内を明かし始めた。

「私、一年生の間はずっと馬鹿にされてきたわ。みんなからはゼロと呼ばれてばかり……」

でもアンタを召喚して、そしてツルハシを振るうようになってからは、少しは違う目で

私を見てくれる人も増えたのよ。まあ、気に入らない二つ名も増えたけど……

何よ『破壊神』って！ 完全にあんたのせいじゃない！」

ルイズは荒くなった息を整えると、話を続けた。

「でもね……やっぱりそれだけじゃあなかったのよ。あんたには言つてなかったけど、

ゼロのルイズは遂に杖を諦めたとか、ツルハシを振るって平民になるつもりなんだとか、

そんな陰口も叩かれてきたのよ」

それを聞いて魔王はいきり立った。

「それ、どこのどいつですか？ 名前を教えてください。私がフルボッコにしてきましょう！」

マリコルヌですか？マリコルヌですね。ルイズ様にはあいつの丸焼きをご覧に入れましょう！」

「なんでマリコルヌをそんな目の敵にしてるのよ！まあ、マリコルヌなんだけど。

でもそういう話じゃないのよ」

息まく魔王を宥め、ルイズは話を続けた。

「悪く言う人が出るのも無理はないわ。私だつてはじめは散々嫌がってたもの。

でも、そのことでクラスメイト相手に何か思っている訳じゃあないのよ。

だってこのツルハシを使えば、下手なメイジよりずっと凄い力を発揮できるじゃない。

私がこれをもっと上手く使いこなせば、トライアングルメイジとだって、十分に

張り合えるんじゃないかとすら、今では思ってるわ。クラスメイトに何か言われたところで、

アンタたちの振るう杖より私のツルハシの方がずっと凄いわよっ

て、言い返してやれる。

でもね・・・」

ルイズは自分の心の内を確かめる様に、胸に手を置き、ゆっくりと言葉を続けていった。

「でも・・・ツルハシを振るうこと、それを今、みんなに胸を張って誇れるかと言ったら、

それは違うわ。この捜索に出かけるとき、私は杖を掲げて貴族としての名誉を誓ったわ。

そこで思ったの。確かにクラスメイトには何を言われても気にせずにいられるけど、

これがもし尊敬する先生方や、父様母様に咎められたとしたら、どうなんだろうって。

正直、私には胸を張れる自信がないわ。もし杖を使えないことを責められたら、

きつと私は何も言い返せない。先生方は、面と向かって私に何かを言うことは無いけれど、

心の内で悪く思っただけでもおかしくないわ。父様母様だって、きつと良い顔はして下さらない。

そう思ったら、つい杖を使って、何とかしてやろうって思ってしまったの。私はもうこの先、

立派なメイジとして見られることは無いのかしらって、不安に駆られてしまったの。

・・・なんて、今までずっとゼロだったくせに、生意気よね。ごめんなさい、

あんたが私の力を引き出してくれたのに・・・」

「ルイズ様・・・」
ルイズは物分かりよく冷静になった風を装っていたが、魔王の目には、彼女が今なお深い悲しみに囚われていることは明らかだった。こんな形でツルハシを頼りにされても、それは魔王にとってまったく嬉しくないことだった。

「ルイズ様、確かに杖とツルハシは似て非なるもの・・・というより、

ブツチャケ少ししか共通点がありません。形状も、使い方も、それから効果だって、

「だいぶチガウものです」

「・・・」

「ですが、ツルハシを使う時に込めるチカラも、元を正せば全てルイズ様のモノです。

つまりそのチカラは、きつと魔法にも通じているハズなのです。

杖を使っても、なぜか魔法が上手くいかない。

残念ながら、私はそれをどうにかするスベを知りません。

ですが・・・もしルイズ様が私を頼って下さるのであれば、ルイズ様がメイジらしく活躍し、

皆に認められる・・・そんな活躍が出来るよう、私もお手伝いしたいと思うのです。」

魔王の言葉を聞いて、ルイズは儂げに微笑んだ。

「・・・ありがとう。でも無茶をしなくていいわ。

私のわがままで、これ以上アンタが危険な目に遭うことは無いもの」

「いいえ、ムチャなどではありません！ルイズ様はもつと自分の可能性を信じるべきなのです。

だってルイズ様には、杖やスペルがどーだとかいう、そんな偏見や常識を跳ね除けるだけの

ビッグなポテンシャルが秘められているんですから！」

「・・・」

「おや？その様子は信じていませんね？」

「だって・・・じゃあ、あのゴーレムにどう立ち向かえというのよ」

「私に腹案が「その言い方は信用出来ないわよ！」

あまり気の乗っていない様子のルイズを見て、魔王は考え込んだ。「思うに、ルイズ様はまだツルハシの絶大なチカラと可能性を知っていないのです。」

ツルハシによるホンキの100%を出せていないのです。だから普通のメイジはどうだとか、

そういうことに意識を囚われ、自信を持たなくなるのです。トライアングルどころか、

スクウェアをも超える大メイジや伝説級の勇者どもすら捻り潰すツルハシの真価を

発揮出来ていないから、大人たちへと胸を張れないように思うのです。今のルイズ様には、

ツルハシが杖より劣って見えるかもしれませんが、決してそんなことではないのです。

ルイズ様の努力は、そしてツルハシは、ルイズ様のユメを裏切ったりしません！」

「でも・・・ツルハシじゃあ、杖を振るう時みたいな魔法は使えないでしょ？」

まあ、ダンジョンを揺らさたりはするみたいだけど・・・」
力ないルイズの返事に、魔王はニヤリと笑みを零した。

「確かにツルハシと杖とでは力を向ける方向性がズレております。

しかしズレているからと言って、重なるところがまったく無い訳ではないのです！」

知っていますか、ルイズ様？　メイジが使う、メイジらしさ極まらない魔法の一部は、

ツルハシを使うことで同じように再現出来るのです。」

「なら、具体的に言ってみなさいよ。どうせしょぼい魔法なんですよけど」

まるで期待していない風に言うルイズだったが、その実、彼女は注意深く耳を傾けていることに魔王は気が付いていた。

「ルイズ様。土メイジにとって、ゴーレムというのはなかなか象徴的な魔法のようすな。

フーケしかり、前に相手したギーシュしかり・・・」
「・・・まさか!？」

信じられないというように目を見開いたルイズへ、魔王は力強く頷いた。

「ルイズ様さえ上手くやれば、どんなメイジよりもずっとイイモノが

作れることでしよう。

ゴーレムを超えたスーパーゴーレムだって、作ってのけることが出来るハズです。

ルイズ様がメイジとして認められるためには、どんな魔法を使えるかがダイジなのでしょう？

周りのニンゲンどもが、そういうモノの見方に捉われているのであれば、

そんな見方に当てはめてでもルイズ様がサイキョーであることを示すまでです。

地底最強のルイズ様の力を皆に思い知らせてやるのです！」

ルイズは呆れて言った。

「地上最強ではないのね」

「細かいことはいいいではないですか！地底でもサイキョーなら地上でもサイキョーです。タブン。

ツルハシに不可能はナアイイ!!・・・というのは言い過ぎですが、ドロボウ相手に遅れを取るようなツルハシと破壊神様ではないハズです。」

「ウソでしょ？あの巨大なゴーレムにどうやって立ち向かえというのよ！」

「ダイジョーブです。だって私には腹案がありますから！」

「だから、それをあんたが言っても安心出来ないわよ！」

しかし魔王は構うことなくケラケラと笑った。マガマガしさのにじみ出た笑い声であった。

「確かにまともに相手したら、あの超大型ゴーレムに打ち勝つのはムズカシイでしょう。」

しかしワレワレにはツルハシがある！しかも今は、破壊の杖だって我らの手中にあるのです。

まさに鬼に金棒、破壊神にツルハシです！」

「破壊神にツルハシはいつものことじゃな・・・い？」

ルイズは、自分がいつの間にか魔王の常識に染まり、破壊神がツルハシを持つものと思い込んでいたことに愕然とした。

「今回はワレワレがああ、のゴーレムに引きずり込まれましたからね。」

今回はワレワレがああ、のゴーレムを地下に引きずり込んでやりましょう！

さあ、そうと決まれば、とつとと準備しますよ。

今のこの状況、ルイズ様の名を上げるのにまたとないチャンスです。

世間に名を馳せたフーケをメイジらしくやつつけたとなれば、

もはや誰がルイズ様のことを後ろ指差して笑えるでしょうか！

さあ、私について来て下さい!!」

「ちよつと、待ちなさいよー!」

魔王は、少し前まで補欠になろうとしていたのが嘘のように、イキイキと動き始めた。使い魔に引きずられる形のルイズは、魔王の様子を見ているだけで元気が出てくるような気がして、単純な自分に少し自己嫌悪した。しかしルイズは、この奇妙な使い魔ならば、自分の諦めや失望を思いも寄らない形で裏切ってくれるんじゃないかと、そんな期待をいくつか寄せてしまっていた。

.....

「どうなってんだい! あの小娘、隠れたまんまじゃないか!」

フーケはゴーレムにキュルケらを襲わせながら、乱暴に吐き捨てた。ゴーレムが腕を振るうごとに、森の木々が宙を舞う。フレイムは器用に逃げ回っているもの、彼にしがみつくキュルケの表情は既に真っ青だ。風竜に乗り空を飛んでいるタバサは、隙を見て彼女を救い出そうと地上への接近を試みるも、フーケのゴーレムはそれを許すほど甘くはない。タバサらが少しでもキュルケに近づくと、すぐさまゴーレムは標的を変え、彼女らを地上に叩き落とそうとする。その間に地上のフレイムは少しでもゴーレムから距離を取ろうと走り出す。しかしさして逃げる間もなく、ゴーレムの剛腕がフレイムの隠れ込もうとした茂みを吹き飛ばす。先ほどからその繰り返しだった。だが、圧倒的に優位なはずのフーケの表情は優れない。それどころか、彼女はこんなことを続けなければいけないことに辟易して来ていた。

キユルケらには知る由もないことだが、彼女の目的は彼女たちを叩き潰すことではなかった。実のところ、彼女は手加減すらしてまで、キユルケらのピンチを演出し続けていた。

彼女が、こうしているのには当然、訳がある。その訳とは、フーケが学院から鮮やかな手口で盗み出したはずの秘宝、破壊の杖そのものにあつた。破壊の杖は、それ自体を『杖』と呼んでいいものか、戸惑われる様な形をしていた。だが確かにその品が『破壊の杖』と呼ばれているあたり、それは杖で、そして噂によればワイバーンすら容易に打ち倒すほどの強力な力を秘めているはずなのだ。噂に尾ひれが付くことは珍しくないといえど、ハルケギニアに名高い大メイジ、オールド・オスマンに縁の秘宝ともなれば、その話にも信憑性がある。そんな高く売れるに間違いはないはずの秘宝を手に入れて、さしものフーケも当初は興奮を隠せなかつた。そこで昨晩、彼女はアジトに立ち寄るや否や、破壊の杖を試そうとした。ところが、片手で扱うには大きく重すぎるそれを、普段扱う杖のように振って呪文を唱えるという難儀な作業の末に分かつたことは、それが普通の杖としては全く機能しないということだけだつた。かと言って、ただ単に魔力を込めて振ればいいのかというと、どうもそういうものでもないらしい。何も起きないそれを必死で振り回した後、フーケの心には空しさだけが残された。秘宝の名に恥じないお宝を手にして、フーケは深い憂鬱を抱え込むことになつた。

使えない秘宝に用はない。特に高そうな宝飾が施されているわけでもないそれを貴族相手に高く売り付けるには、どうしてもその使い道を知っておく必要があつた。折角苦労して手に入れたお宝を買い叩かれるようでは、この商売はやっていけない。そんな訳だから、自分をエサに引きずり込んだ教師たちを逆に捕まえ、杖の使い道を聞き出すというのが、フーケの本来の計画だつた。ところがその計画は、物知りぶつた教師連中の誰もが搜索に参加すらしようとしなかつたことで、破綻しかけていた。そんなことだからフーケは、搜索隊に志願した生徒を人質にオスマンから杖の使い方を聞き出そうか等と、物騒なことも考えた。しかし外国からの留学生や大貴族ヴァリエール

の娘を人質に取ったとあっては、流石に魔法衛士隊が動きかねない。選りすぐりの実力者ぞろいだと言う部隊を相手にするのは、分が悪すぎるかとフーケが悩んでいたところ、彼女の頭に閃くものがあった。「(そういえば・・・ピンク頭のこいつは確か、二つ名が『破壊』とか言ったね。

使い魔も妙な杖を持っているらしいし、『破壊の杖』の使い方も分からないもんかねえ)」

彼女自身、特に期待が大きいわけではなかったが、可能性があるなら試してみるのも悪くない。そう考えたフーケは、あえてルイズに破壊の杖を取り戻させ、その上で杖を使わせようという賭けのような選択をした。もし彼女が使い方を知らなくても、その時は破壊の杖を奪い返せばいい。フーケにとって、面倒だか失うもののない賭けであるはずだった。だからこそ、今の状況は彼女に取って、想定外もいところだった。杖を手にしたはずのルイズが、穴に逃れたまま一向に姿を現さない。

「さあ！隠れてないでとつとつツラ見せな！」

この私からお宝を奪い返そうなんて100年早いんだよ！

何ならその破壊の杖でも使って戦ってみるかい？」

焦れに焦れたフーケは、身を隠すのもやめてルイズの掘った穴まで近付き、大声で挑発を始めた。しかし穴の中から返事が返ってくる様子はない。地上がどんなことになっているか、想像が付かない訳ではないだろうに、全く音沙汰がない。

「早く出ておいで！ お仲間が苦しんでるのにダンマリかい？」

まさか、地下で人目がないのをいいことに、聞こえないふりでもしているのか。そっちがそういうつもりなら、もっと耐え難い挑発をしてやるまでだと、フーケはルイズのプライドに訴えかけるような文句を叫んだ。

「こいつは驚いた！ まさかお仲間を見捨てるつもりだったとはね！

そうやって隠れ続けて、仲間がやられた隙に逃げ出そうってかい？

ハッ、ヴァリエールの名が泣くね！ いや？ ある意味とーっても

貴族らしいかもしれないね。

普段は綺麗ごとと並べ立てても、人目のないところではいくらでも汚いことをやってのける。

それが貴族ってもんさね！」

フーケは、ルイズが青筋を立てた顔で飛び出してくるのを今か今かと待った。彼女の知っているルイズとは、こういう言葉にすぐ反応する短気で無駄にプライドの高い少女であるはずだった。しかし、穴の中から物音一つ返って来ない。・・・おかしい。流星に何かが変わると、ようやくフーケも気付き始めていた。まさかあの小娘の心は、ゴーレムに踏みつぶされそうになった時に折れてしまったというのか？

「まさかビビっちまってるんじゃないだろうね！」

臆病な使い魔の性格があんたにもうつったかい？こいつは傑作だ！

使い魔は主人に似るってね！」

挑発を続けていてふと、フーケの頭に嫌な考えがよぎった。確かに、あのピンク頭のガキは短気ですぐ挑発に乗りそうな、扱いやすい性格をしている。しかし彼女の隣には、あのお調子者でろくでなしな使い魔が付いている。もし彼女があおの使い魔に何か吹き込まれたら、ホイホイと口車に乗ってしまわないだろうか？ あれだけ小屋の偵察を嫌がっていた彼のことである。もう秘宝は手に入れた、だからフーケなんて無視して帰ってしまえだとか、仲間はトライアングルなんだから、自分たちでどうにかするだろうだとか、そんな悪魔のささやきで彼女をそそのかしていないだろうか？

「まさか、今この場から逃げてる最中なんてことはないだろうね！」

もしそうならまずい。フーケは途端に焦りだした。お宝の使い道を知ろうとして、お宝を失ったのでは本末転倒である。ゴーレムでキュルケらを弄ぶようなダラダラとした動きは止め、すぐさま穴に乗り込みルイズを確保しなければならぬ。フーケはキュルケたちを叩き潰してでも排除し、杖の回収に取り掛かることを決めた。彼女に操られたゴーレムは大きく足を踏み出した。1歩、2歩とゴーレムが歩くごとに、キュルケとの距離がぐんと縮まる。キュルケが踏み潰さ

れるのも時間の問題かと思われたその時、ゴーレムの足がずぼっと、地面に沈み込んだ。

「へ?」

フーケは思わず呆気に取られるも、直ぐに気を取り直して、ゴーレムが倒れないように杖を振るった。

「一体何だつてんだい! この辺りで地盤沈下なんて・・・まさかあいつらか!」

フーケの疑問に答えるように、ゴーレムが足を取られた場所の近くから、桃色の髪をした少女がひよこつと頭を出した。ルイズは思うように動けずもがいているゴーレムを見上げると、不敵な笑みを浮かべた。

「フツッ! 巨大ゴーレムなんて言ってもざまあないわね。」

足を取られたら何にも出来ないじゃない!

どうやらルイズはゴーレムに夢中で、潰された小屋のそばにいる自分に気付いていないらしいと悟ったフーケは、黙って杖を振るった。その動きに合わせ、ゴーレムはルイズを叩き潰さんと、腕を目一杯に伸ばして振るった。だが、彼女まではあともう少しのところ距離が足りない。フーケは考えを切り替え、まずは地面からゴーレムの足を引き抜くことにした。

「おつと、そうはいかないわ! 私にはこの破壊の杖があるんだから!」

フーケはびくつと眉を動かした。彼女は杖を振るう手を休めずに、ルイズの動きを観察し始めた。ルイズは破壊の杖の両端からカバーのような部品を取り除くと、破壊の杖をぐぐつと引っ張って、その胴部を引き延ばした。

「(何だい、あの杖は! あんな風に引き延ばせるだなんて、分かるわけじゃないじゃないか!)」

フーケは破壊の杖の思わぬ構造に驚愕するも、こうも上手く使い方のお手本が見れることにほくそ笑んだ。見ている間にも、破壊の杖の常識を超えた使い方が明らかにされていく。ルイズは今や、破壊の杖を肩に担いでいた。そんな使い方をする杖など、聞いたこともない。

「で、次にどうするんだっけ？」

「ココです！ この部分を照準に使って、ここを押すのです！」

ルイズの隣にひよっこり顔を出した使い魔が、彼女に指示を与えていた。

「あいつが使い方を知っていたのか。まあ、もうどうでもいいけれどね」

ついにルイズが、破壊の杖をゴーレムに向けて、姿勢を固めた。これで破壊の杖の威力も明らかになる。

「その汚い顔を吹っ飛ばしてやるわ!!」

ルイズがそう叫んでから、破壊の杖がバシユツと音を立てた。杖の両端が光ったかと思うと、次の瞬間には既に、杖から飛び出た光がゴーレムの体に吸い込まれていた。耳を塞ぎたくなるような轟音と共に、ゴーレムの体が弾け飛んだ。下半身だけ残ったゴーレムの体から、土砂が血のように流れ落ちていく。フーケが破壊の杖の威力に目を見開いていると、地面がゴゴゴゴと音を立てて揺れ始めた。

「キヤーーー！」

ルイズたちは叫び声を上げながら、地中に引っ込んでいった。ゴーレムの足を呑み込んでいた地面が、更に深く陥没していく。やがて、ズシンという響きが地面を伝ってフーケの身体を揺らした。今や、フーケの作り出したゴーレムは完全に土にまで戻り、落ち窪んだ地面を埋めるのに使われていた。

「チッ！ まさかあいつ、あんな深い穴を掘っていたとはね！」

ゴーレムが崩れたことで、先ほどまでルイズらが顔を出していた穴も塞がれてしまった。フーケは、ゴーレムを一発で倒してしまう破壊の杖の威力だけでなく、短時間にあれだけの穴を掘っていたルイズという少女の力にも注意を払わざるを得なくなっていた。

咄嗟に、フーケは背筋が冷たくなるような気配を感じ、急いでかがみ込んだ。彼女の背中を、猛烈な突風と共に大きな影が掠めていった。フーケがそれを目で追うと、上空に舞い上がったそれは、きゅいー！と鳴いた。ついにタバサに見つかってしまったらしい。ゴーレムという難敵が失われた今、彼女と使い魔のコンビはいくらでも地

面すれすれまで降下して、フーケの身を脅かすことが出来る。フーケがちらりと森の方に目を向けると、そちらはそちらで、赤い大きな影が茂みから姿を現すところであった。一目散に這い寄ってくるフレイムの口からは、絶え間なく炎が漏れ出ている。強力な使い魔を従えた彼女らを相手にしては、フーケ単身では身が持たない。だが彼女らの接近を防ぐためのゴーレムは崩れ去ってしまったし、もう一度あの大きなゴーレムを作り出そうとノロノロしていれば、彼女たちのコンピによる死の暴風をお見舞いされるのは目に見えていた。

「くそッ！ 私に地下へ逃げろってかい！」

フーケは迷わず小屋の跡に残された深い穴へと飛び込んだ。そして足が地に付くと、目にも止まらぬ杖さばきで小型のゴーレムを作り出し、辺りにひしめく不可解な生き物たちを一掃した。フーケは頭の上に空いた穴を見上げると、杖を振ってその入り口を固く閉じた。

「これで一先ず、挟み撃ちの心配は無いね」

彼女は窮地を脱し、ようやくと息を付くことが出来た。だがその顔は未だ険しい。先ほどからフーケともあろうものが、不覚を取ってばかりいる。落ちこぼれだったはずの生徒に、良いように翻弄されている。おまけに自慢の巨大ゴーレムが、その大質量ゆえに落とし穴という手段で封じられてしまった。破壊の杖も、奪われたままである。もはや、ルイズらを放っておく訳にはいかなかった。何よりフーケの『土くれ』としてのプライドが、自慢の魔法に土を付けられたままで終わることを許しはしなかった。

「ふん。ガキでも舐めてかかると痛い目見るって事かい？ だがねえ！」

彼女は獰猛な目をひと際輝かせて言った。

「私の自慢のゴーレムをこんな形で倒して見せたこと、死ぬ気で後悔させてやるよ！」

フーケは凄惨な笑みを浮かべ、穴の奥深くへと突き進んでいった。

.....

「どうですか、ルイズ様？ あんな巨大なゴーレムが相手だと、最後の一掘りがセツナイ感じになったりするんでしょうか？

ちなみに私は、笑いが止まりません！」

「馬鹿言ってるんじゃないわよ。本番はこれからでしょ？」

「モチロンです！ 条件は全てクリアーしました！ 後はフーケを血祭りに上げるのみです！」

それを聞いてから、ルイズは深呼吸した。いよいよ直接フーケと対峙しなければならぬ。そこで自分の、そしてツルハシの真価が試される。ルイズは決意を新たにツルハシを握りしめた。

フーケの巨大ゴーレムは倒れた。いよいよルイズ自身が、フーケと対峙せねばならない時が来る。

「巨大ゴーレムも倒しましたし、これで今まで逃げ惑っていた地上の二人も休めることでしよう。」

ですがここからが本番です。自慢のゴーレムを倒されたことで、フーケも本気になって

攻めてくるハズ。彼女がここに到達するまでがタイムリミット、まさに時間との勝負です!」

「えっ? 彼女ですって?」

「あっ・・・」

「まさか、あんたフーケの正体に心当たりがあるんじゃない?」

「・・・ハイ! 時間がないので後にしましょう!」

「後で絶対、話して貰うからね」

ルイズは魔王に睨みを効かせるも、状況を考えて引き下がった。

「理解が早くて助かります! そのまま忘れてくれてもいいんですが・・・」

さて、フーケを地下に引きずり込むことには成功しました。

まさにここからがワレワレのターン! ですが問題もあります。

先ほどの落とし穴を掘るのに、ルイズ様も大分チカラを消耗したのではないのでしょうか?」

「そうね。いくら簡単にツルハシを振れるからって、流石にあれだけ掘ったら疲れるわよ。」

正直、この後どれだけ掘れるか不安だわ」

「フム、やはりもう余裕が無くなってきているようだな。」

そうなるよ、今からたくさんのマモノを呼び出すような余裕はありません。」

マモノの強化だってムズカシイでしょう。つまり今回は、敵を倒す

のに

数で押し切ることは出来ません、代わりに例え一匹であれ、とにかく強いマモノを

作り出す必要があります。ですからルイズ様には今からツルハシを駆使して、

出来得る限り最強のマモノを呼び出して頂きます！」

「最強、ね。本当にこの絶体絶命な状況をひっくり返せるの?」

「もちろんです! それであのフーケを打ち負かし、やつの世にはせた名を

栄えあるルイズ様の名で塗り潰してやるのです! さあ、私に着いて来て下さい!

「...あ、ルイズ様、私のいう方向を先に掘って貰ってもいいですか?」

「.....」

「...ハイ、ありがとうございます。それでは私に着いて来て下さい!」

ルイズはやっぱりコイツを信じて大丈夫なんだろうかと不安になりながら、魔王の後ろに続いた。

.....

「今からルイズ様に掘って頂くのはここです。」

「ここって、あのゴーレムが崩れた場所?」

「その通りです。 見てください、このマバユイばかりの輝きを!」

魔王の言葉通り、辺り一面の土がキラキラと怪しい光を放っていた。

「これって、もしかして魔分?」

ルイズの疑問に、魔王は嬉しそうにしながら答えた。

「ウフフフ... 狙い通りに行き過ぎて、ジブンの才能がオソロいですね。」

あのゴーレムは巨大でしたから、幸いここにはアレに使われた魔分が

まだタップリ残っているようなのです。」

「じゃあ今回は、ここの魔分を使ってマモノを生み出す訳ね」

ルイズは魔分を含む土を掘り起こそうとツルハシを振り上げた。「お待ち下さい、ルイズ様。確かにここの魔分をはいはします。」

ですが、ここで目的のマモノを作り出すワケではないのです。」

「何よそれ？ どういうこと？」

「まあまあルイズ様、あまり時間がありませんのでハナシは後、

まずは魔分をより深い地層に導いて下さい。」

そこでまた次の説明をしたいと思います。」

「・・・分かったわ。魔分を運ぶにはエレメントを使えばいいのかしら？」

「その通りです。エレメントは魔分をホンノリ含んだ土から生まれるマモノ。」

動きのパターンはコケと変わりません。魔分がタツプリ溜まってる土を見ると

つい掘りたくなるかもしれませんが、ここではそれをグツと堪えて、

魔分をより深くに移動させてください」

ルイズは急ぎながらかつ慎重に、地中に穴を穿っていく。縦にも横にも、幾重にも連なるトンネルにエレメントのマガマガしい光が満ちていき、幻想的にすら見える光景が地中に広がった。これらのエレメントは、皆すべて一か所に集められるべく、誘導されていた。コケと同様にT字路を掘っておくと、壁にぶつかったエレメントは新たな道に沿って曲がり、先へ先へと進んでいく。そうやってエレメントが掻き集められた深い地の底で、ルイズは魔王に次の指示を仰いでいた。「さあ、魔分を運んで来たわ。後からも、次々とエレメントがやって来てくれるはずよ。」

次にどうすればいいのかしら？」

魔王はニツコリ不気味にほほ笑んで、ルイズに告げた。

「お待たせ致しました。いよいよルイズ様に、アレを召喚する方法をお伝えする時です。」

「・・・これから作るのは、ゴーレムなのよね」

ルイズは少し不安そうに呟いた。

「いえいえ、ただのゴーレムではありません。フーケを倒すのにフツのゴーレムでは

力不足というものです。ルイズ様には是非、ゴーレムを超えたスーパーゴーレムを

作り出して頂きたいものです」

「私、土魔法の基本の錬金すら失敗するのよ。

そんな私が、本当にそんな凄いゴーレムなんて作れるのかしら？」
「フフフ、弱気などらしくありませんぞ。確かに今からやろうとしていることは、

ある程度の労力を必要とするかもしれませんが。ですがルイズ様はもう知っているハズです。

そのツルハシが、杖とはチョツピリ違う方法でフシギを実現することを。

そしてそのチカラは、ほんのチョツトかもしれませんが、ルイズ様が目指しておられる

立派なメイジの魔法と重なっているし、それを飛び越えても行けるのです！」

「・・・ダメだったら恨むわよ！」

ルイズはそう言ってツルハシを持つ手の力を強めた。

「ではルイズ様、ここに魔法陣を作り出してください。」

ルイズの眉がぴくりと動いた。

「魔法陣？ 魔法陣って、デーもんを作ったときのアレ？」

「確かにそうです。しかし前の時とまったく一緒ではありません。

先ず一つ目に魔法陣を作る場所が違います。よく見てください。

ここは上の方と比べて、土の色が変わって来ているでしょう？

ここまで掘って地層が変わると、同じ魔法陣でもデーもんではなく、

ゴーレムが召喚されるようになるのです。」

「どうして違うものが出てくるのよ？」

「どうしてって・・・深い地の底に埋もれた、超古代文明のキオクが

呼び覚まされるとか、まあそんなカンジじゃないでしょうか？」

「適當ねえ」

ルイズは話しながらも、魔分を一か所に集め出していた。

「！　土が淡いピンク色に輝き始めたわ！」

「順調なようで何よりです。ですがまだまだです。もつともつと魔分をかき集めるのです。」

そこ！　魔分を吐きつくしたエレメントは土の近くで潰してやるのです！」

ルイズは魔王のアドバイスに従い、エレメントを時折間引きながら、更に魔分をかき集めていく。

「さあ、話の途中でしたな。今回の魔法陣、二つ目の違いは魔分を使うところですよ。」

「魔分からは、養分とは違うマモノが生まれるのよね」

「そうです。フツのゴーレムを生み出すなら、ただの養分で良かったでしょう。」

しかし今回作りたいのは、スペシャルなゴーレムですから」

ルイズはゆっくりと動くエレメントにやきもきしながらも、必死に頭を働かせ、ツルハシを振るい続けた。ルイズがやっとの思いで、魔王が満足するだけの魔分をかき集めた頃には、彼女の額から汗が噴き出していた。魔分が貯まった土は、今やギラギラとした紫光を放ち、異様な様相を呈している。

「何だか魔力に満ち満ちて、おどろおどろしいぐらいに見えるわね」

「感傷はあとですよ！　急いでその土の周囲を掘って、魔法陣を完成させてください！」

ルイズはあつと言う間に魔分を貯めた土の周りを掘り、最後の仕上げにツルハシをぶんと振り下ろした。重々しいガタンという音と共に、威圧感あふれる、いつか見たような魔法陣が完成した。だがその魔法陣は淡い藍色の光を放っており、そして紋様も以前デーモンを召喚した時とは異なっていた。ようやくこの大変な土掘りを終わらせることが出来る。ルイズはふうと息を吐いた。

「後はこれを突けばいいだけね」

「待った！」

ルイズは魔王の大声にびくりとして、動きを止めた。

「フー、アブナイところでした。」

「・・・何よ、いきなり大声出して！ どういうつもり!?」

あまりの大声に耳がキンキンと鳴って不機嫌になったルイズは、魔王に掴み掛った。

「いやいや、揺さぶらないでください！ 異議は受け付けません！」

ルイズ様、まだここから最後の仕上げが残っておるのです。」

「ええ、何ですって！ なら早く言いなさいよ！」

ルイズは慌ててツルハシを握り直した。

「ああ、そういうことではないのです。もうツルハシをガンガン振るう必要はありません。」

準備だけはもう整っているのです。後は放っておけば、勝手に強力な魔法陣が

出来上がることでしょう。ルイズ様、本当にお疲れさまでした。」

「??? 何よそれ、一体どういうこと?」

「まあ、ノンビリ眺めていて下さい。ほら、ルイズ様が作り出したエレメントが

魔法陣に近付いて行きますよ?」

ルイズが目を向けると、上の地層にはまだたくさんエレメントがゆらゆらと、道を行ったり来たりしながら漂っていた。その内の何匹かが、少しずつ魔法陣に向かっていく。

「それがどうしたっていうのよ。・・・急いでたからしょうがないけど、ちよつと余分に作り過ぎたみたいね」

「いえいえルイズ様。努力が勇者のユメを裏切らないかどーかは知りませんが、

エレメントは魔法陣を裏切りません・・・ホラー！」

魔王が指さした先で、魔法陣に近づいたエレメントが突如、ぎゅんと動きを速めると、そのまま魔法陣に突っ込んで消えた。後に続くエレメントたちもまた、ひゆるひゆると音を立てながら魔法陣へと吸い

込まれていく。

「何よあれ！ 一体何が起こってるの!?!」

「魔法陣はああしてエレメントごと魔分を吸い込み、蓄える魔分を高めることが出来るのです。」

すると！ なんと、それまでよりもハイレベルなマモノを呼び出すことが

出来るようになるのです！ さあ、魔法陣が変化する瞬間を見逃さないでください！」

ルイズと魔王がじつと見守る中、エレメントは一つ、また一つとその姿を魔法陣の中へ消していった。そしてもうエレメントが残り僅かになった頃……

「あっ！」

ルイズは思わず声を上げた。魔法陣はその色を変え、目立たないグレーに変化していた。だがルイズには、自己主張の薄いその目立たない色こそが、そこに潜むマモノの強さを暗に示しているような、そんな気がした。

「今度こそ、本当に完成です。ルイズさま、お疲れ様です。」

いやはや、間に合ってホントーにヨカッタ……

後は調子に乗ったフーケがやってくるのを待つだけです。」

「結構、危なかつたかしら?」

ルイズは、地上からここに至るまでに長々と穴を掘ってきた。しかしフーケはそれを物ともせず突き進み、間もなくルイズらのいる所まで至らんとしていることを、彼女は地中を見通す視界の中に捉えていた。

「ねえ、戦いが始まる前に、これから呼び出すものの名前を教えなさいよ。」

ただのゴーレムではないんでしょう?」

「いいでしょう。これから我らのイノチを預けるマモノ。」

ゴーレムを超えたスーパーゴーレム。

それを手にした者は、始祖かみにも悪魔シャイターンにもなれる!」

「シレッとブリミル様を冒瀆してんじやないわよ!」

「その名も！」

「その名も？」

「その名も!!」

「その名も、って早く言いなさいよ！」

魔王は大きく息を吸い込んで叫んだ。

「マジング、ゲフツ！ ゲフンゲフン！ ゲフン！ ……いえ、まじんです。ハイ。」

「…今、まじんって言った後に何か言いかけたわよね？」

「いえ、ただ咳き込んだだけです」

そう言ってから、魔王はもの悲しそうな顔でルイズに答えた。

「このまじんは、今この状況で出せるマモノの中でも、間違いなく最強な存在の一つなのです。」

ですが魔王的には、このまじんにもっと高いポテンシャルが秘められていて、

ワレワレはそれを十分に引き出すことが出来ないでいるのではないかとも思うのです。

こいつを呼び出す手間も結構掛かりますしね。」

「秘められたポテンシャルねえ。私はまだ見てないから何とも言えないけど、

そんなに期待出来るのかしら？」

「まあ今回、戦闘に関して心配はいらないでしょう。」

ルイズ様は元気良く、まじんGO!とでも応援してやって下さい。

…ダンジョン内を歩き回って、アメでもたくさん舐めさせてやれば、

こう、名前の後ろにガーツと付いた強そうなマモノに進化させられたんではないかと…。」

「何の話よ？」

「いや、無いものねだりをしてもしようがありませんな。ポケットの中のマモノですら、

マガシンカしてもXやYにしかねないんですから、Zなんてなおさら無理です。」

「いや、だから何の話よ」

「ああ！ でももし可能なら、目から怪光線とか出て、吐く息で敵を粉々にし、

胸からは全てを溶かし尽くす熱線を放射するマジック、ゲフンゲフンの大活躍で、

世界征服もラクシヨードだったことでしょう！ クヤシイ！ クヤシすぎる！」

「それつてもはや、ゴーレムってレベルじゃないわよ」

ルイズは呆れた声を出した。

「まあルイズ様はそんなもの手に入れなくても、既に破壊神様ですから、

世界を好き勝手に手玉に取ることも可能でしょうケド」

「馬鹿なこと言っていないで、気をつけなさい。フーケがもうそこまで来たわ」

「む、もうですか。流星はフーケ、素早さも高いようです。

では今こそまじん出撃と行きましょう！」

.....

ダンジョンの静けさを破る足音が、徐々に大きくなっていく。長い距離を走ってきたであろうに、フーケに疲れの色は見えない。彼女は怒りを情熱に変えて、地下の長い道のりを駆け抜けて来た。そして今、彼女はみなぎる自信を胸に、堂々とルイズ達の前に躍り出た。フーケは二人の姿を認めると、敵意を剥き出しにしながらに言った。

「あんたたち、さつきはよくもやってくれたじゃないか」

だがルイズも負けてはいない。

「あら、盗賊ともあろうものが、コソコソと隠れもせず姿を現すなんてね。

捕まりに来たのかしら？」

強気で言い返したルイズを、フーケはふんと鼻で笑った。

「こんな誰の目にもつかない地の底にいるんだ。隠れるまでもないね。

それに誰が誰に捕まるだって？ 馬鹿言っちゃいけないよ。

そういうお前たちこそ、そんなところに突っ立って、逃げ隠れるのは諦めたって訳かい？」

お些末なことだねえと、フーケは嘲笑った。

だがルイズは、胸を張って言い返した。

「ふん。私はコソコソしなきゃいけないような生き方はしていないのよ。誰かさんとは違ってね」

フーケはそれを聞くと、口元をムツと歪めたが、すぐに獰猛な笑みを浮かべて言った。

「まあ、どうせあんたじゃ、逃げようにも逃げられなかっただろうさ。相手はこのフーケなんだからね。さあ、とつとつと私のお宝を返しな！」

するとルイズは破壊の杖を見せびらかすように、フーケの目の前に掲げた。

「どれがあなたのお宝ですって？ この破壊の杖は学院のものよ！」

私はそれを取り返したまだけだわ！」

「ふんっ、話にならないね。学院の生徒は世間知らずで、これだから困るよ。」

王都じゃ街外れの平民だつて知ってることだつていうのに……」「何ですって？」

平民を引き合いに出され、ルイズの眉間がみしつと寄った。

「不勉強なお貴族様に教えてやるよ。」

貴族のお宝はフーケのもの、フーケのお宝はフーケのもの、つてね！」

フーケはそう言うと同時に、鮮やかな杖さばきでゴーレムを作り上げた。地上で暴れ回っていたものとは比べるべくもないが、それでも大熊ぐらいの大きさはある。とても生身の人間が敵う相手ではない。

「どうだい、こいつは？ こんなせまっくるしい穴の中じゃ、この程度のゴーレムが限界だよ。」

だがね、それでもこいつはお前たちをペタンコにするのに十分だろうさ」

そう言うフーケは、どこか自慢げな様子であった。

「さあ、きつさとその杖をよこしな」

「嫌よ！ あんたこそきつさとお縄について、チエルノボーグにでも入れられるがいいわ」

強気を頑なに崩さないルイズを前に、フーケは冷たく返事を返した。

「・・・話を通じない奴だね」

「元より泥棒に話を通じるなんて思っていないわ」

「あんには、このゴーレムが目に入らないのかい？」

「冗談、そんなちっこいの、真正面から叩き潰してやるわ」

フーケは、深く被ったフードの下から覗く口元を、不快そうに歪めた。

「ゼロのくせに大した自信じゃあないか」

ルイズは、はつと目を見開いて、フーケの姿をまじまじと見つめた。

冷酷残忍で、口汚く、乱暴な女、フーケ。

だが、例え彼女がどれだけの女性とかけ離れているのだとしても、

そのフードの下から覗く美しい緑髪が、ローブを身にまとった彼女の背格好が、

そして何よりも今の発言が、彼女の信じ難き正体を物語っていた。

「ミス・ロングビル、あなたがフーケだったのね」

「ほんと、学院のやつらにはぶくて助かったよ。いや、ここは私の演技力を褒めるべきかしら？」

しかしやけに冷静じゃあないか。アンタたちを守るために付いてきたやつが敵だったんだ。

ほら、もつと驚いてみせな」

「おあいにく様、驚くのは使い魔のせいでもう慣れたわ」

二人はそう言ったきり、しばらく睨み合った。

魔王はバツが悪そうに、顔を掻いている。

「どうしてもそいつを手放す気はないってのかい？」

「私の気が変わることはないわ」

「それじゃあ、お望み通りこいつにやられちまいな！」

フーケのゴーレムが、物々しい唸り声を上げながら動き出した。
「今までの私なら、勇敢に立ち向かって、そして何も出来ずに死んでいただしようね」

「でも今は違います！　今のルイズ様には、私が、そしてツルハシが付いている！」

「お前のような使い魔に何が出来るってんだい！」

ルイズは、一歩二歩と後ろに下がり、背に隠していたツルハシを前に掲げた。

彼女の背後に隠されていた魔法陣が、フーケの目に露わになる。

「魔法陣？　そんなもので何をするってのさ！」

フーケのゴーレムはずんずんと足を前に進めている。

今まさにルイズを殺めんと、その腕を前に突き出して、駆け寄って来ている！

だがルイズは狼狽えない。

ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールは狼狽えない！

ルイズは毅然として、ツルハシを頭上へと振り上げた。

「そうです！　今こそ、無敵なチカラをワレらのために！」

じゃあくなココロをツルハシでオンツ！！

一閃の元、ツルハシは魔法陣へと突き立てられた。

すると、地面をガタガタと揺らしながら、魔法陣がゆっくりと扉のように開いていく。

そしてフーケは見た。

胸だ！　頭だ！　巨大な腕だ！

そうだ！　それこそが地下にそびえるくろがねのキャツスル！

「まじん！！」

「はは、はははははは、ハハハハハハハハ！」

警戒心を露わに魔法陣を見守っていたフーケは、そこから出てきたものを見て、笑いが止まらなくなった。異様に長い腕と、馬鹿に短い足をした黒っぽいゴーレムが、彼女の前に立ちはだかっていた。

「この私を相手にゴーレム勝負だつて？ はっ！ はははははは！
しかも何だい、その不格好なやつは!? ハハハハハハ!!」
お腹を振り涙を浮かべながら笑うフーケを、ルイズは真剣な表情で
睨み返した。

「舐めるんじゃないよ！」

二人のゴーレムがついに動き始めた。自らが傷つくことを恐れな
い、ゴーレムだけに出来る全力疾走で、互いのゴーレムはぶつかり合
いに行った。

「散々コケにしやがって！ ぶつ潰してやる！」

「絶対に負けないわ！」

ついに互いのゴーレムが交差した。

互いの腕と腕が組み合わされる。

否！ 組み合いにすらならない！

フーケのゴーレムは彼女の予想に反し、一瞬で崩れ去った！

まじんと腕を組み合わせるや否や、その衝撃に耐えきれず、先ず腕
の先から吹き飛んだのだ。

そしてそのまま、まじんの体当たりを防ぐことも叶わず身に受け
た。

フーケのゴーレムは、まるでその身体が水で出来ていたかのような
勢いで、

その身を成す土を撒き散らし、脆くも崩れ去ってしまったのである
！

「まさかそいつは鉄くろがねで出来てるつてのかい！」

「驚いたかしら！ 降参するなら今の内よ！」

「調子に、乗るんじゃないよっ!!」

フーケは向かってきたまじんの突進を地面に転がって避けると、急
いでスペルを唱えながら杖を振るい、3体のゴーレムを生み出した。
更にもう一度彼女が杖を振るうと、ゴーレムの身体は鏡のように輝き
始めた。

「ならこつちも鉄を使ってやるさ！ フルメタルの威力を食らいな
！」

まじんを取り囲むように立ったフーケのゴーレムたちは一斉に突進し、まじんに向け激しい殴打を浴びせかけた。殴打、殴打、殴打！
止むことのない連打！

「ほらほらほら！ どこまで耐えられるかい！」

「バカにしちゃあいけません！ その程度のものにやられるまじんではないのです！」

魔王の声に答えるかのように、まじんが動き出した。まじんは彼を取り囲むゴーレムの内の一体に狙いを定めると、その異常に長い腕を伸ばし、メルヘンな見た目からは想像もつかないような激しい動きで振り回した。狙われたゴーレムは、みるみる内にボコボコにへこんで、動かなくなっていく。見かねたフーケは慌てて杖を振るい、残る2体のゴーレムに距離を取らせた。

「あら、敵わないと知って退却かしら？」

「冗談もほどほどにしな！」

フーケは残った2体のゴーレムに肩を並べさせ、一方向からの突進を仕掛けさせた。だが、まじんもそれに合わせて駆け出していた。その場に、重い金属同士のぶつかり合う鈍い音が響き渡った。

「くっ！ これでもまだ足りないってのかい！」

「ふはっ！ フハハハハ！ 取り囲んでダメなら、

一方向から薙ぎ倒せばいいとも思ったのですか？

しかしムダですっ!!」

2体のゴーレムはまじんと組み合ったまま、一歩も前に進むことが出来ないでいた。やがてまじんはその長い腕を大きく広げ、彼らをガツシと抱え込むと、前へと倒れ込むかのように、重そうな上体を傾け始めた。するとゴーレムたちは、まじんの体重に耐え切れず、元来た方向へとズルズル押し返され始めた。まじんはそこへ更に力を込めて前進し、足を速めていく。ついにゴーレムたちは、猛烈な勢いでダンジョンの壁に身体を叩き付けられ、大きなひび割れと共に沈黙した。フーケは苦々しい表情をしたまま、杖を振るった。再び、ピカピカのゴーレムが3体、姿を現した。

「同じことをしても無駄よっ！ いい加減、大人しく降参しなさい！」

「ご忠告どうも！ それじゃあ、同じじゃないことをしてやろうじゃないか！」

フーケは呪文を唱えながら、杖を複雑な動きで振った。フーケのゴーレムたちが、体を組んで身を寄せ合う。すると、見る見る内にその体は溶け合い、一つのゴーレムとなった。

「な！ なによそれ!!」

「グウオ、オ、オ、オ！」

ルイズたちの前で、見るも威圧的な異形のゴーレムが叫びを上げた。

そのゴーレム、3つの頭と6つの手足を持っている！

「何よ！ 人のゴーレムを馬鹿にしておいて、あんたのゴーレムも大概じゃないっ！」

「勘違いしないでほしいね。私はただ、あんたのゲテモノゴーレムに合わせてやっただけさ！ さあ行け！ アシユラよっ！」

アシユラと呼ばれたゴーレムは、6つの手足をワラワラと動かしながら、まじんに組み付いた。まじんがぐらりとよろめいた。まじんはすぐさま足を踏ん張って、持ち堪えた。

「何よ、大口叩きながら、さつきと大して変わらないみたいね」

「それはどうかしら？ ゴーレムの足元を見てみな！」

「!! 何ですって!!」

まじんは確かに、フーケのゴーレムとがっしり組み合っている。だが足元を見れば、少しずつではあるが、後ろへと押し戻されつつあるのが分かった。

「見たかい、この威力！ アシユラのパワーは、3つの首が表すようにゴーレム三体分！」

「そう簡単に抗えはしないさ！」

まじんはパワー負けしているのか、時折 姿勢を崩し、その度に一歩、また一歩と後退していく。

「さあ、今度はあんなたちが思い知る番だよ！」

このままあんなたちのゴーレムを、あんなたちごと押し潰してやろうじゃないか！」

だがルイズは悔やまない！ ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールは悔やまない！

「そうよ！ 私は迷わない！ 魔王、あんたは言ったわね！ このまじんは最強だって!!」

さあまじんよっ！ そんなことしてないで、早くそいつを叩き潰しなさい！」

まじんは腕をブンと振り払った。雪崩れ込むように、フーケのゴレムがまじんの胴へと押しかかる。まじんは2歩、3歩とよろめいたが、そこでまた持ち堪えた。そしてまじんは腕を縮めた。蛇腹状になったその長腕を、まるでばねのように、限界まで押し縮めた！

「何をしようってんだい！ そんなもの許さないよ！」

フーケのゴレムは、腕二本でまじんの胴を押したまま、もう二本の腕でまじんを掴み、

残る最後の二本の腕でまじんを殴打し始めた。まじんの頭が殴られる度に、がくんがくんと揺れる。

「どうだい！ これでも何か出来るってのかい！」

だが出来る！ まじん、お前になら出来る！

まじんは縮めていた腕を一気に伸ばした。

腕を捕まれていようとも、そんなものは無意味だとばかりに腕を伸ばして、

拳を勢いよく弾き出した。その拳、まるで小さな岩石の様！

だがその拳もやはり、鋼鉄で出来ている。その破壊力は計り知れない。

それだけではない。まじんの鉄拳は、長腕を活かして宙を舞う！

放たれた鉄拳は、勢いをそのままにゴレムの背後まで回り込み、そのまま後ろから突っ込んでいく！

この技に名前を付けるのなら！

トリストイン語で『岩』を意味するRockに、『小さな』を意味する接尾語-etを付けて

その名を！ その名を!! その名を!!! その名を!!!!

「ロケット・パ——ンチ!!!」

拳が一発、そして二発！ ゴーレムの背中から突き刺さった！
「グウオオオオ！」

めり込んだ拳の周りに、大きなひびが入っていく。

まじんは、めり込んだ拳を引き抜くように、腕を大きくしならせた。
ボコツとまじんの拳が抜けると同時に、ゴーレムの体は切り出された岩のごとく、

バラバラに砕けて地面に転がった。

フーケの顔が、引きつったまま固まった。

「どうやら、あんたの負けのようね」

「くっ!!」

まじんは、次のターゲットとしてフーケを見定め、勢いよく突進してくる。

だがフーケは、まじんが突進してくる前に、素早くその半身をダンジョンの曲がり角に隠すと、冷酷な笑みを浮かべてルイズに言い放った。

「認めようじゃないか。どうやったかは知らないが、確かにあんたのゴーレムは強力だよ。」

「ここが学院だったなら表彰ものだろうさ。」

だがね！ 土メイジ相手にその真似事で勝てる訳はないってこと、思い知らせてやるよ！」

「あなたに勝ち目なんてあるのかしら？」

「あるさ！ 実は私には、ゴーレムを作るよりも得意なことがあつてね！」

そう言つて、フーケは聞こえよがしに呪文を唱え始めた。

ルイズは、そのスペルを聞いて真っ青になった。

「青くなつてももう遅いよ！」

私のありがたき二つ名通り、お前のゴーレムも土くれに変えてやる！ 錬金！」

フーケは容赦なく杖を振り抜いた。
ルイズの努力の結晶を、灰塵に帰すべく杖を振り下ろした！

だが変わらない！

杖を振っても、黒光りするまじんのボディには、いささかの陰りも見られない！

「そんなまさか！ あいつのゴーレムは、スクウェアにも匹敵するつてのかい!?!」

そうだ！ まじんのボディは、超高濃度にまで濃縮された魔分を使っている！

フーケの錬金では、この濃縮された魔分によってゴーレム化したボディを

変質させることは叶わない！

つまり、フーケはまじんを止められない！

まじんは、決して止まらない！

「ガッ・・・!」

フーケは慌てて身を守る土壁を錬成したものの、壁ごしの衝撃にその身を弾き飛ばされた。あまりの痛みに息も出来ない。彼女の体は地面をゴロゴロと転がっていき、ダンジョンの壁に当たってその動きを止めた。フーケは起き上がろうとしたが、身体中に走った激痛に耐え兼ね、その意識を手放した。

「ググウオオオオオオオオオオアアアアアアアア!!」

勝利を誇るかのように、まじんが吼える。

耳をつんざく凄まじい咆哮が、ダンジョン全体を揺らしていった。

STAGE 19 捕縛魔王伝 零

フーケとの戦いが一段落ついた後、ルイズの心には改めて喜びが吹き上がって来ていた。

「・・・やったわ。私、ついにやったのね！」

「お見事でしたルイズ様。これでルイズ様も名実ともに偉大な破壊神さまとして称えられることでしょう！」

「すぐさま魔王の頭がポカンと殴られた。」

「あイタツ！ どうしてです、ルイズ様！ 私、しっかり協力したじゃありませんか！」

「いいこと、私が褒め称えられるべきは『メイジとして』よ！」

そうじゃなかったら、何のためにこいつを苦勞して作ったか分からないじゃない！」

「・・・それにしてもこいつ、本当に大人しくなったわね」

そう言っつてルイズは、彼女の作り出したスーパーゴーレム“まじん”を見上げた。まじんは、いくらルイズが眺めまわそうとも、ちよこんと正座したまま微動だにしない。つい先ほどまで、フーケのゴーレム相手に大暴れしていたのが嘘のような姿であった。

「いやはや、アブナイところでしたな。もし私がネムリ球を持っていなかったら、

折角生け捕りに出来たはずのフーケが、まじんの手でホネホネにされてしまう

ところでした。ヤツパリ、討伐報酬と捕獲報酬じゃ、イロイロ違って来ますもんね」

「そう言う問題じゃないわよ！ ゴーレムを作れたのは嬉しいけど、こいつ全然命令に従わないじゃない！」

「イヤイヤ、そこをルイズ様のツルハシさばきで自由自在に操るのがクロウトっぽくて良いんじゃないですか」

「そういうもんかしら？」

「そうですとも。ゴーレムは人に似た身体がある分、扱い易いし、素人から玄人まで

幅広く使われている土メイジの基本武器、対してルイズ様のゴーレムは見た目なんかは

フツのゴーレムとほとんど変わらないですが、あえてバランスが悪い様に足が短い分、

硬度と重量をかなり増加させてKILLよりDESTROYを目的とした玄人好みの

扱いにくすぎるゴーレム。使いこなせないとギョシユのゴーレムよりとろい

ただの鉄クズみたいなもんだつてのに何であのガキは？

と、大絶賛を受けるにマチガイないでしょう！」

「それ、けなしてるようにしか聞こえないわよ！」

「・・・まあ、本当に強かったからいいけど・・・」

そう言いながらルイズは、まじんに吹き飛ばされ、今なお倒れ伏しているフーケを見つめた。ルイズは大いに喜んでる今でも、自分の才能でフーケを倒したという事実がピンと来ない。

「さて、いい加減 あやつを縛っておかないといけませんな。あの性格では、

目が覚めたとき、往生際悪く暴れるに違いありません。さあ、ルイズ様の手で

フーケをお縄に付けちゃってください！」

さあさと、魔王はルイズを促した。

「それもそうね。じゃあ縛るもの貸しなさいよ」

「えっ？？」

魔王は、信じられないものを見るように、目を大きく見開いた。

「・・・まさかルイズ様、ロープ持ってないんですか？」

「・・・悪い？」

二人の間に気まずい沈黙が流れた。

「フーケ、捕まえに来たんですよね」

「細々とした道具は、使い魔が用意しておくべきものよね」

「いや、でも私だって、縄も持たずにダンジョン飛び込んでくる勇者なんて見たこと

ありませんよ。立ちほだかるものを全部なぎ倒して相手を追い詰めたのに、縛る縄が

無くてオロオロしてる勇者とか、なんかダサいじゃないですか。

そりゃあ私の立場だったら、有り難いでしょうけど、」

「いや、だから私の使い魔のあんたが持つて来れば良かったじゃない」

「……」

「……」

二人の見解は平行したまま、交わりそうにもなかった。

「地上のお二人、呼んでみましょうか？」

ルイズは黙ってツルハシを地上に走らせた。

……………

ダンジョンの入り口が掘り返されてしばらくすると、キュルケとタバサの二人は転がりそうな勢いで、ルイズたちのいる地下層に姿を現した。

「ルイズ！ 平気だったの!？」

ずっと走ってきたために、彼女たちの息は大きく乱れている。どうやら普段は仲の悪いキュルケも、今この時ばかりはルイズを心配していたらしい。

「私は平気よ！ それにフーケも倒してやったわ」

「ウソ！」

目を丸くしたキュルケに思わず自慢しなくなったルイズだったが、彼女はその思いをグツと堪えて火急の要件を告げた。

「その話は後よ、それより早くフーケを縛りたいんだけど、私ロープを持ってないの！」

あんたたちなら、どうにか出来ないかしら？」

「任せなさい！ 今、縛り上げてやるわ」

そう言うとキュルケは、ロープを取り出しながらも、ルイズたちに向かって勢いよく走り出した。そして彼女に追隨するタバサが杖を振ると、ロープの先は宙に浮かび、やがて目的の人物目掛けて飛んでいった。ロープはそいつに触れた途端、するすると巻き付いて、一瞬の内に不審人物を縛り上げた。

「アイエエエエ！ スマキ!? スマキナンデ!？」

グルグル巻きにされた魔王は、バランスを崩して地面にぐねつと倒れた。

「ちよつ！ ちよつと、何でそいつを縛ってるのよ！」

「何でって、フーケを縛ってあげたんじゃない！ それよりもミス・ロングビルは平気なの!？」

「気を失って倒れてるじゃない！」

自分たちが何を仕出かしたか、まだ分かっていないキュルケたちに、ルイズはぷつぷつと切れた。

「いい加減にしなさいよ！ あんたたちの縛った相手をよく見なさい！ そいつは私の使い魔よ！」

「あ、あら？」

キュルケが困惑した表情で見下ろした先では、魔王が縛られたままうねうね動き回っていた。

「ご、ごめんなさいね、今すぐ解くわ。後姿だけ見て、てつきり……！」

「だけどルイズ、それじゃあフーケはどこに行ったのよ？ もしかして、逃げられたの？」

ルイズは黙ったまま、手にした杖でフーケを指し示した。

「なにしてんのよ。黙ってたら分からないじゃない。フーケはどこ？」

ルイズは腕を震わせながら、もう一度フーケを杖で示した。

「だ・か・ら、それよ！ そいつがフーケだったって言うてるの！」

キュルケはきよとんとした表情をした後、はっと息を飲むと、大声で叫んだ。

「えええええ!!！」

タバサは煩そうに耳を抑えた。

.....

「よくよく考えてみれば私、少し変だなとは思っていたのよね」

誤解と共に魔王の縄が解かれると、キュルケは億面もなくそんなこ

とを言い始めた。

「ほら、行きの馬車でのことよ。私、彼女に話しかけてたでしょ？」

ロングビルがフーケだったなんて、だから過去のこと話したगरなかつたんだわ。

全くもう、あの時ルイズが止めなければ良かったのに、ほんつと余計なことしてくれたわ！」

当然黙って聞いている様なルイズではない。彼女は眉間をぴくぴくと動かしながら、キュルケに言い返した。

「何よそれ、後からなら何とでも言えるじゃない！」

大体、フーケが自分から正体をばらす訳ないでしょ！」

「だから、その隠してる正体をこちらから暴けたかもしれないじゃない！」

嘘を重ねる人つてのは、何かしらぼろが出るものよ。

人生経験の足りないチビルズには分からないでしょうけど」

「ハア〜!? そんな都合のいい妄想みたいに上手く行く訳ないでしょ!？」

大体チビじゃないわよ！ ちよつと身長低めなだけよ！

アンタは身長とか、その、胸とかに栄養が行き過ぎて、頭がお粗末になつてゐるみたいね！

大体、いくい？ だ・れ・が、フーケを捕まえたと思つてるのかしら！」

そう言つてルイズが威張ると、今度はキュルケが眉間に皺をよせた。

「そうやって、あんたが悠長に地面の下で構えてる間、死ぬような思いをさせられた人のことは

頭のないみたいね！ あんたに、あの巨大ゴーレムに追い掛け回される恐怖が分かつて!？」

ねえタバサ！ あなたも怒つていいのよ？」

「別に」

タバサは一言だけ返事を返すと、まじんをしげしげと見上げる作業に戻つた。魔王の持つていたネムリ球のおかげで、じつと大人しくし

ているかの奇妙なゴーレムを、タバサはもの珍しそうにペタペタと触っては、眺め回しているのだった。

「ほら、別に・・・ですって。難癖はやめてくれないかしら」

「タバサはやさしいから、何も言わないのよ。大体、フーケを『捕まえた』ですって？

確かにあんたのゴーレムは凄いわ。そこだけは認めてあげる。でもあんたたち、

私たちが来るまでフーケを縛りもせずにはあったらかしだったんじゃない！

私がロープを持ってなかったらどうするつもりだったのよ。確か、ロバ・アル・カリイエには、

泥棒を捕らえて縄を縋うってコトワザがあるらしいわ。

今のあなたにぴったりじゃない！ ねえそう思うでしょ、使い魔さん」

「あんたが縛ったコイツに聞こうだなんて、どんだけずうずうしいのよ！」

魔王は彼女たちの話をろくに聞いてもいなかったが、呼ばれたことに気が付くと感慨深げに語った。

「まさか、こうしてダンジョンに攻め入ってきたユウシヤを簀巻きに出来る日が来るとは・・・

ルイズ様に呼ばれてホントーに正解でした。この魔王、感涙に堪えません！」

また妙なことを言い出したと、ルイズは呆れ返った。

「何が勇者よ。泥棒じゃない」

「いいんです！ 魔王に挑もうと考えた無謀さ、もとい勇気があるならみんな勇者です！」

ブツチャケ、過去の世界征服でもイロイロ怪しいのは、ちらほらいましたし・・・

それはそうと、もうフニキは十分味わったんで、縛るの交代して貰えますか？

正直、ぐるぐる巻きにも飽きてきました。」

「あんたが自分から、人の手で縛り上げるのが風情だつて言つたんじゃないの。」

ちよつとそこ、縄が緩んで来てるじゃない！ もつと真面目にやりなさいよね」

「もう、時間が掛かるのなら私がやるわ」

キュルケはひよいと杖を振った。

「あ……！」

仕事を奪われた魔王の嘆きへ、タバサの声が重なった。何事かとルイズたちが振り返ると、丁度まじんがグオオオと咆哮を上げながら崩れ去るところであった。

「おや、ずいぶん時間が経っていたようですね。フーケも……縛り終わってしまった」

ことですし、そろそろ地上に戻りましょうか。」

行きと違って、今回の魔王の提案に反対するものは居なかった。

……

一行は馬車に揺られながら学院への道を引き返していた。ルイズたちにとつて大きな冒険の場となつたあの森の姿も、だんだんと遠く、小さくなつていく。もつとも今の馬車内には、そんな呑気に外の景色を楽しもうという雰囲気はなかった。

きつく縛られ馬車の床に転がされたフーケは、当初、呻き声を上げながら青い顔をしているだけだった。しかしつい先ほど意識を取り戻してからは、あらんばかりの罵倒をルイズたちに浴びせかけている。

「チビどもが調子に乗るんじゃないよ！ とつとつこの縄を解きな！」

ルイズとキュルケは互いに顔を見合わせると、自分たちに散々怖い思いをさせたこの泥棒に、ニヤニヤといやらしい笑みを投げかけた。

「学院長付き秘書ロングビル改め泥棒のフーケさん？」

あなた、怪盗を名乗ってるんでしょ？

見ててあげるから逃げ出して御覧なさいよ。

私、そういうのつてどうやるか、スゴク興味あるもの」

「舐めてんのか！ 私は手品師じゃないんだよ！」

フーケにどすの利いた声で怒鳴られても、キュルケは涼しい顔をしている。

「聞いてんのか！ この肌に食い込む縄をとつとと緩めな！ これじゃ痣になっちまうよ」

「うくん、よく聞こえなかったわね」

今度はルイズが、これまた涼しげな表情で呟いた。

「ならその腐った耳でも聞こえるように、もつと大きな声で言ってみようか!？」

「いやいや、そういう意味じゃないのよ。ただね、人にもものを頼む態度には

まったく聞こえなかったわ。私、貴族の作法しか習ってないから、もし間違ってたなら

悪いんだけど、確か盗人が人をお願いする時は、床に頭を擦り付けて泣きわめきながら

懇願するのが作法じゃなかったかしら？」

ルイズとキュルケは再び顔を見合わせると、キャハハハハと大きな笑い声を上げた。結局のところ彼女らは、普段はケンカするような仲であるとはいえ、今は大仕事をやり遂げて上機嫌なのだった。いや、少しばかり上機嫌過ぎて、ちよつとテンションがおかしなことになっている。一方タバサは、フーケに一瞥もくれないことなく、静かに本のページをめくりながら『いい気味』と囁いた。フーケは顔を真っ赤にしてふるふると震えたが、このまま学院に着いてはマズいと必死に自制心を働かせ、冷静に打開策を探るべく神妙な顔をした。

「ねえねえタバサ、それにルイズも、今の見た？」

プルプル震えちゃって、挙句必死に落ち着こうとしてるのwwww

まだ諦めてないんだわ、こんな状況なのにwwww

「けなげねwwww フーケちゃんカワイイわwwww いやウソ、キモイわよwwww

またプルプル震え出してキモイわwwww

「wwww必死過ぎてドン引きよねwwww 緑髪の頭が震えてイモムシ

みたいwww」

「ユニーク」

ルイズたちは、またどつと大きな声を立てて笑った。そこには貴族らしき慎みを感じさせない、子供らしく無邪気な残酷さがあった。フーケはフーフーと凶暴なネコのように荒い息を吐きながら、この耻辱に堪えた。そこへキュルケが顔を近付け、こんなことを聞いてくる。

「ねえねえ、アンタの新しい二つ名を考えてみたんだけど、聞きたい？

ねえ、聞きたいわよね？」

「・・・言ってみな」

「あんたのこれからの二つ名はね、ブフツwww 簀巻きよ。簀巻きのフーケwww」

だってすごく似合ってるものwww」

「ちよつと、自分で笑ってちや、ブフォwww」

「wwwwww」

「ふん、もういい！ どうせアンタらが私を捕まえたからって無駄なことだよ！

脱獄して必ずあんたらを殺しに行つてやる。覚えてな！」

「え？ もしかして今のつて・・・捨てゼリフつてやつうく？うわ！超ウケるわ！」

「まさかあのロングビルが、こんなに面白い人だったなんて知らなかったわ。

今までもつと話しておけばよかったかもwww」

「無様」

「ちよ、タバサwww」

「wwwwww」

フーケはもう、ピクリとも震えなくなった。冷静になった訳ではない。い。

今彼女を支配しているのは、己の心臓が燃えているような感覚を覚えるほどの、

激しい怒りだった。フーケは、ルイズらの笑い声をどすの利いた声

で遮った。

「おいこのちんちくりん！ みんな知ってることだけどね、あんたみたいなピンク髪のやつは

頭の中までピンクなんだろ？ 普段は真面目なふりしちやってき、こそこそと人目のない

ところでは男に媚び売って股広げてんだろ？ この淫乱ピンク！」

「な、な、何ですってええええ!!」

ルイズは怒りのあまり、頭がフットーしそうになった。

「あらルイズ、あなたって実はむつつりドエロだったの？」

知らなかったわ、アハハハハ「アンタは一目見ただけで

ビッチって分かるんだよ！ 愛は国境超えるってかい？

男漁りがしたいんならトリステインじゃなくてアルビオンに行きな。

女に飢えた傭兵どもに、念入りに使って貰えるだろうさ！」

「・・・ハ？」

キュルケの顔から笑いが消えた。彼女は無表情を顔に張り付けさせながらも、ただ不気味に見開かれた瞳だけは『クロス』という意味をはつきりと示していた。

「馬車の上」

暴れられては困ると、タバサが一言告げた。だがフーケは、そんな彼女へもお構いなく噛み付いていった。

「この無口な人形娘め！ 何がタバサだ。そんな名前を名乗るだなんて、

ままごと遊びと現実の区別が付いていないんじゃないのかい？

この痛いネクラ女め！」

タバサはそれを無視するように本を持ち上げ、その顔を隠した。

「当てるやろうか！ どうせママの愛情が足りずに育つたんだらう？」

一人ぼっちでの人形遊びも物足りなくなつて、それで自分がお人形さんみたいに

遊んで貰いたくなつたのさ。違うかい？」

「・・・・・・・・」

「それならね、このフーケ様がいい方法を教えてやろう。真面目な振りなんて止めて、

とつとと男拾って股を開けばいいのさ！ やり方が分からなければ、そのビツチに

教えて貰いな！ なあに、胸が無くても心配はいらないよ。世の中にはお前みたいな

幼児体系が大好きだっていう物好きがわんさかいるのさ。そりやあこの上なく遊んで

貰えることだろうさ。良かったじゃないか！」

タバサは持ち上げていた本を下に降ろした。ギヤハハハハと下品に笑うフーケに、タバサは仮面のように無表情な顔を向けたまま、微動だにしない。見かねたルイズたちは、フーケへの対応を話し始めた。

「猿ぐつわもはめておくべきだったわね」

「これだからゼロのルイズは。メイジならサイレントを使うものよ」

キュルケはそう言って、胸元に挟んだ杖を取り出そうとした。

「もつといい方法がある」

「タバサ？」

タバサは傍らの大きな杖を取り、すつくと立ち上がった。

「口を封じればいい」

そういうなり彼女は暗い声で呪文を唱え始めた。

「このスペルって・・・まさかアイスストーム!？」

「やめてタバサ！こんな場所でやったら、私たちまで死んじゃうわ！」

ルイズたちは顔色を変えてタバサを取り押さえにかかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

キュルケとルイズの必死の努力もあり、タバサはどうにか魔法を使うことを思い留まった。彼女は取り押さえられそうになる間、もがきながら隙を見て何度も重たい杖の一撃をフーケにお見舞いした。どうやらこれが、彼女の機嫌を幾分か回復させたらしかった。またこれでフーケは相当に痛い思いをしたらしく、今やサイレントをかけるま

でもないほどに大人しくなっていた。

「それにしても」

ルイズは疲れたという様子で、どっさりと座席の背もたれに寄りかかりながら言った。

「こんなのがあのミス・ロングビルだったなんて、ちよつと信じられないわ」

「ふん、あんたたち含めて、学院のやつらは皆鈍いのさ」

ゴンツと再び大きな杖の一撃が振り下ろされる。フーケは身悶えながら、再び沈黙した。

「まあ、分からなくもないわ。私もロングビルは知的で真面目な人だとばかり思ってたもの。

それが今やまるで別人よ。きつと貴族としての立ち振る舞いは知っていても、

心は根っからの盗人だったんだわ」

「猫かぶり」

学院秘書の豹変に多少なりとも動揺していた彼女らは、そんな思いののことを言い合った。そこへ、御者台からも声を掛ける者がいた。

「・・・ルイズ様」

「何よ、御者なら代わらないわよ。そんなの使い魔の仕事でしょ？」

行きはロングビルに任せていた御者も、帰りはそうはいかない。平民に任せれば良いような仕事が魔王に割り振られたのは当然の流れだった。初め魔王は、馬車に繋がれた馬たちを見てマモノじゃないと渋っていた。だがルイズが一言、『ウ魔かもしれないじゃない』と言うと、彼は少し考え込んだ後で意気揚々と手綱を手に取った。散々使い魔に振り回されてきたルイズも、だんだんとこの魔王の扱いが分かってきているらしかった。

「いえ、そのことではないのです。私、ルイズ様たちの話を聞いていて、

トンデモナイことに気が付いてしまったかもしれません。」

「何よ」

「もしかするとワレワレは今、重大なマチガイを犯しているのではないでしょうか？」

「何よそれ。どういう意味かしら？」

魔王はしばらく戸惑うそぶりを見せた後、恐る恐るといった様子で考えを告げた。

「フーケって・・・実はロングビルではないのでしょうか？」

お前は何を言っているんだという顔で、ルイズらは顔を見合わせた。

「なに馬鹿なこと言ってるのよ。あんたの目には、ここにこうして無様に縛られてる女が

見えない訳？　そもそも、あんたもこいつを捕まえたその場にいたんじゃない」

だが魔王は神妙な顔で首をゆっくりと振った。

「いえ、そういう意味ではないのです。」

「ならどういう意味なのよ？」

「確かにシヨーゲキ的でしょう。身近な信頼できると思っていた人がフーケと知れば、

誰しも動揺するものです。でも、こんな時だからこそ冷静さを失ってはいけません。」

そう言うとき魔王は、くわつと目を見開き、うずくまるフーケを指差した。

「騙されてはいけません！　ルイズ様達はミス・ロングビルがフーケだったと

思い込んでいるようですが、私の眼はゴマカせません！

シンジツはただ一つ、フーケがロングビルを騙っていたのです！」

「・・・は？」

ルイズとキュルケがぼかんとした表情を浮かべる中、タバサだけは既に無視を決め込んで本に目を落としていた。誰も見てはいなかったが、フーケですら『何言ってるんだこいつ』という表情をしていた。バカバカしくなって聞き返しもしないルイズの代わりに、キュルケが疑問を投げかけた。

「それって・・・何が違うのよ?」

「ぜんっぜんチガアーウ!! いいですか、これはジューダイなことなのです。」

一人の罪なき女性の名誉が掛かっているのです!」

「ちよつと、まさか今さら私の大捕物にケチ付けようって訳じゃないでしょうね!」

魔王の言葉に聞き逃せないものを感じたルイズは、食って掛かるように言った。

だが魔王は、それに対し静かに首を振った。

「そういうことではないのです。ルイズ様が捕まえたのは間違いないく大泥棒フーケです。本当に、皆に誇っていい快挙ですよ」

その返事を聞いて余計に意味が分からなくなったルイズは、これ以上魔王から話を聞いても、聞くだけ空しいだけなのではないかとすら思った。しかし、魔王をそのままにしておく、それはそれで後味の悪いものを残しそうな気もする。そもそも馬に揺られ続ける退屈な帰り道を、何もせずには過ごすのは彼女たちにとって耐え難いことでもあった。結局ルイズは、根負けして魔王にもう一度問うた。

「つまり、アンタが言いたがってるのは、一体どういうことなのよ!」
「分かるように説明しなさいな」

タバサがまた一ページ、本をめくった。魔王は端からタバサに話を聞いて貰えるとは期待していなかったのか、二人の注目を集めただけで満足そうな表情を浮かべると、ようやく彼の真意を明かし始めた。

「いいですか? 相手は土くれのフーケ、大ドロボーです。今までどんな盗みも

成功させてきたツワモノです。だれ一人として捕まえることが出来なかつた相手、

それこそがフーケなのです。オカシイと思いませんか?」

「まあ、私たちは捕まえられて運が良かったわよね」

「あともう少しでペチャンコだったし」

魔王は二人の反応に頷くと、話の先を続けた。

「確かに私たちは運も良かったでしょう。まあそれを活かせるのも
ジツリヨクの内でしょうが、逆に言えばフーケの運が悪かったとも
言えます。」

しかしどうですか？ フーケの普段の運はどうだったと思います
？」

「フーケの運ですって？」

考えてみたこともない話に、ルイズもキュルケも困惑を隠せない。
「私は聞きました。なんでも今までフーケが盗みに入ったところに
は、腕に覚えのある

メイジが何人も集まって目を光らせていた場所もあるそうではな
いですか。

そんなものを相手に犯行を重ね、それでいて捕まらないで済むとい
うのは、

果たして『運が良かった』という一言だけで済むものでしょうか？」

ルイズとキュルケは、少し考えてから返事を返した。

「まあスゴウデってことよね」

「確かに魔法の実力だけで大勢の相手を煙に巻くなんて、

ちよつと信じられないけど・・・」

魔王は我が意を得たりといった様子で頷いた。

「そう、そこなのです。信じられない、アリ得ないことが起きている。

そこにはきつと、ソレナリの理由があるはずなのです。

フーケがなぜ今まで派手な盗みの数々を成功させてきたのか？

わたくし、先ほどのルイズ様たちのやり取りを見て、やつとそのコ

タエが分かりました。

私のハイイロのノーミソがこのトリックに気が付いたのです！」

「トリック？」

「そう、ズバアリ！ これは大泥棒フーケによる巧妙な入れ替わり作
戦だったのです！」

魔王の力説を聞いても、未だルイズとキュルケの二人はきよとんと
していた。タバサのページをめくる音が響く。

「入れ替わり？」

「何よそれ。何を言いたいのか、サッパリ分からないわ」

「いまいちピンと来ないルイズたちに向け、魔王は決定的な一言を告げた。」

「ルイズ様・・・一体いつからロングビルとフーケが同一人物だと錯覚していましたか?」

「何・・・ですって・・・!!」

ルイズたちはあまりに奇抜な発想を耳にして、目をのけぞらせた。

「まさかあなた、ロングビルがフーケだったんじゃないかって、

あのロングビルにフーケが成りすましてるって言いたいの?」

「あんた、何てこと言い出すのよ!」

騒ぎ出す二人に、まあまあと言いながら魔王は話を続けた。

「落ち着いて下さい。今からこの結論に至った私のスイリを語ってご覧に入れましょう!」

「あんた、また行きの時みたいなべらぼーな話をするんじゃないでしょうね?」

「とんでもない! 私は大体何時でも大マジメです!」

「大体って何よ。いつもふぎけてるじゃない」

「もうルイズさま! 私はマジメな話をしようとしているのですぞ!」

魔王はそう言つて少し怒ると、神妙な面持ちで自分の考えを披露し始めた。

「思えば、この事件を巡る『フーケ』の在り方は不可解なものだらけでした。」

なぜか学院秘書に収まっているフーケ、あえて残される犯行声明、そして彼女自ら明かした隠れ家の場所・・・

ルイズ様達はフシギに思いませんでしたか?」

「それは・・・まあちよつとは不思議に思っただけど・・・」

魔王はフフンと笑った。

「そうでしょう、そうでしょうとも! ですが聞いてオドロいて下さい。」

これらの不可解な謎が、フーケのロングビル成りすましを想定することです。

一挙、氷解するのです!」

「本当かしら?」

ルイズとキュルケは、興味と不審の入り混じった目で魔王を見た。「そもそも話、今までなぜフーケは捕まらなかったのでしょうか? メイジとしての腕が高いとはいえ、泥棒として名が売れるということとは、

それだけ警戒されるということでもあります。それなのになぜ?」
キュルケは、あつという表情をした。

「分かったわ! 今回みたいに、信頼できる人物に変装してたのね!」

「私のスイリを先回りしないでください」

「え? あ、はい・・・え?」

キュルケの困惑を無視して、魔王は何事も無かったかのように話を続けた。

「トモカク、今回フーケが知的で生真面目なカンジのロングビルに化けて

犯行を行ったように、大ドロボーともあろうものにとって、他人を真似るのは

容易いことなのです。・・・はい、ココ、合いの手入れるトコロですよ。」

そわそわする魔王を前に、ルイズは嫌そうな顔をしながら返事を返した。

「・・・本当にそうかしら?」

「そうなのです! なんせ実体験ですからね。私、過去にダンジョンを大泥棒サンセイに

荒らされた時なんかは、私自身に変装されたりもしました。」

「え!? その泥棒、あんたに化けたの?」

巫人に扮するなんて、そいつどうなってるのよ?」

「いやマツタクです。かのサンセイは変装の名人、誰も彼が変装していることに

気づかず、彼をダンジョンの奥まで素通りさせてしまえますからね。

あれにはホントーに参りました」

ルイズは魔王のあからさまにマガマガしい出で立ちを見つめ、そんなものに変装出来るなんて信じられない、自分だったら自殺ものだと目を見開いた。

「ニンゲン、やろうと思えば誰にでも化けられるものなのです。

あの時はそのせいでイタイ目に会いました・・・主に簀巻きのイミで。

そう言えば今回も・・・」

魔王からのチラツチラツという視線をキュルケは全て受け流しながら、先を促した。

「私、今はあなたの推理の方に興味があるわ」

「そうよ。私たち、まだ全然納得してないんだからね！」

「おお、これは失礼しました。さて、盗みを成功させるためには1にも2にも

下調べがジューヨーです。ですが、貴族のダイジなお宝というものは、

信頼の置ける部下にのみ情報を与えて管理されるモノ。外の人間がおいそれと

保管場所やセキュリティを伺い知ることは出来ません。」

「まあ、そうよね。そもそも一番大事なお宝は、自分だけで管理するという人も多いはずよ。

まあ、うちみたいに家宝が多いと、そういう訳にも行かなくなってくるけど・・・」

「そうそう！　うちだって、お父様が一番信頼している召使いに宝物庫を任してあるわ」

二人の反応を聞いて、魔王はそうでしょうとも頷いた。

「だからこそ、盗みをモクロムものは、そこにこそ活路を見出すのです。」

とは言え、召使いになって相手に取り入るのもタイヘンです。そも

そも貴族仕えたるもの

信用がイノチですから、どこぞの信頼ある人物からの紹介でもなければ、まずもって

雇ってもらうことは不可能でしょう。適当に酒場をたむろして、そこに入り浸った

貴族を誑し込んで採用、という訳にはいかないのです！」

「当然よね。私のところの召使いも、そんなぼつと出の人を雇ったりはしないはずよ」

魔王は相槌を打ちながら、話を続けた。

「しかし、ここからがフーケの巧妙なトコロなのです。フツーにしていたら信用もなく、

貴族に雇って貰うのはムズかしい。そこで彼女は発想をギャクテンさせました。

新たに雇われようとするから上手いかない、ならばもともと雇われる予定だった

人物に、自分が成ってしまえばいいのです！」

「そこで変装して入れ替わるのね！」

「その通りです！ フーケは自分を新規に雇わせる代わりに、元々雇われる予定だった、

あるいは雇われている人物に変装して成り済まし、周囲に溶け込んでしまうのです！

そして彼女は皆の警戒心を解きつつ、ヌスミのジュンビを万全に整えたところで

犯行に及ぶのです。これが、フーケが不可能にも思える数々の犯行を成功させてきた

カラクリです。そしてさらに、ここでフーケの犯行の癖が効いてくるのです。」

「犯行の癖？」

ルイズとキュルケの声が重なった。

「なぜフーケがここまで有名になったのか。それには理由がありましたよね？」

ルイズもキュルケも、ああという声を上げて答えた。

「派手な犯行もそうだけど、やっぱり犯行声明のことね。」

「そうそう、確か『土くれのフーケ』の署名入りなのよね。でもそれがなぜ?」

「考えてもみてください。本来、泥棒がメッセージを残すなどあり得ません。」

アンプロフェッショナルなシゴトの流儀なのです。泥棒の成否は、犯行後

速やかに逃走することに掛かっていますから、下手なプライドを發揮して

自らの身をキケンにさらすなど、愚の骨頂なのです。バカの極みと言わざるを得ません!」

誰も見ていないところで、フーケのこめかみがぴくぴくと動いた。「とは言え、それをやっているのはかの有名なフーケ。ここに大きな矛盾があるのです。」

実力者であるはずのフーケが、なぜそのようなバカな真似を行うのか?」

増長していると考えるのはカンタンです。しかしワレワレが真相に辿りつくためには、

そのような短絡的な予想をこそ避けるべきなのです。」

「真相ですって? あの不ぎけたメッセージに?」

「ええ、そうです。あの犯行文には、ターゲットを馬鹿にしているという以外にも、

隠された重要な意味があると考えるべきなのです。」

「あなたにはそれが分かるっていうの?」

ルイズたちの問い掛けに、魔王は静かに頷いてみせた。

「フーケの残すメッセージに秘められた深いイミ・・・」

それは、ジブンへの疑いを晴らすことにあつたのです!」

「何よそれ! メッセージを残すんだから、フーケがやったのはバレバレになるじゃない」

ルイズは唇を曲げたが、それに対して魔王はチツチツと指を振つ

た。

「確かに、一見ムジユンしているように思えるかもしれませんが。ですがそのムジユン、

つきつける前によく考えてみてください。いいですか、宝が盗まれた時にフーケは、

フーケであってフーケでないのです。なんせフーケはその正体を隠し、別人として

宝の持ち主から信用を勝ち得ているのですからな。フツーなら、厳重に守ってきたはずの

宝が消えれば、その疑い是否が応にも身内に向きます。ところが、ここで犯行声明が

効いてくるのです」

「あの有名な『確かに領収致しました』ってやつよね」

「そうです。そして何よりも重要なのが、その犯行文に添えられた署名です。

なんせ『土くれ』の名は偉大ですからね。今まで名立たる貴族を相手に

盗みを成功させてきたワケですし、その名を聞けば被害者はこう思うわけです。

あの『土くれ』が相手なら仕方がない。フーケはどんなに不可能に思える犯行でも

成し遂げてしまう、そういう相手なのだと言いが信じ込む。

かの二つ名には、そんなパワーがあるのです。結果、本来なら一番に疑いの目が

向けられるハズの身内に扮したフーケは、その立場から一転、ただの被害者へと

変わります。カリスマフーケの名が全ての咎を引き受けることで、彼女の身に

嫌疑が掛けられるのを防ぐ。つまりフーケは、自らが化けたその人へと疑いが向かぬよう、

カモフラージュとして『土くれ』の名を最大限に活用しているので

す。」

それを聞いて、キュルケはうなつた。

「確かに、今朝ロングビルが姿を見せなかった時も、誰も彼女を疑わなかったわ」

「被害者側に化けてるから、監視がいくら外を探し回ろうが捕まりつこないって訳ね」

なかなかよく考えられてるじゃないと、ルイズも素直に感心した。

「今回は秘書に扮してた訳だし、今までも似たようなことを繰り返してたでしょうね」

「しかもそれだけではありません。今回そうだったように、あえてフーケを追及する者に

犯人の目撃情報などを吹き込めば、フーケ確保に向けた有力な情報源として、

捜査関係者に対し有利な地位を築き上げることが出来るのです。

もちろん語る内容は思いのまま、ニセの情報掴ませて捜査をかく乱するもよし、

最新の捜査情報を掴んで逃走や盗品の売りさばきに役立てるもよし。

そしてほとぼりが冷め、次なるターゲットに取り掛かる気になつたら、

堂々と職場から立ち去り、人の目のなくなつたところで変装を解く。すると後で

アイツが怪しいとなつても、被害者たちはフーケの変装した姿しか知りませんから、

彼女は何不自由なく街中を歩き、悠々と逃げおおせることが出来るのです！

これこそがフーケの鮮やかな犯行に華を添える、不可解な犯行声明のカラクリだったのです！」

おお！とルイズたちの口から歓声が漏れた。いつの間にかタバサも興味が出てきたのか、彼女は本を閉じて膝の上に置いていた。だが、タバサはその話を黙って聞いているつもりはなかった。それとい

うのも彼女は、推理小説の犯人を探偵に先立って見つけようとするような性格なのだ。まして彼女は、行きに魔王のテキストな推理で痛い目を見ている。タバサは容赦なく魔王の推理の穴を突いた。

「異議あり。顔を変える、確かにそういう術はある。」

でもそれには腕の良い水メイジの力が不可欠。フーケは土メイジのはず」

「そういえばそうよね。そこのところ、どうなのよ?」

キユルケが問い質すと、魔王はやれやれと大げさな身振りで首を振った。

「ドロボーが一人で成り立つとは限りません。むしろ裏の仕事を行う者は、得てして

優秀な協力者と組んでコトに掛かるものなのです。私がかつて苦しめられたサンセイも、

ニジゲンとヤエモンという、強力な助っ人と共にカツヤクしていました。

それを考えれば、フーケにだって水メイジの協力者がいてもフシギはありません!」

「・・・」

タバサは今現在、馬車の上空で呑気に『るるる』と歌いながら羽ばたいているであろう

己の使い魔に思いをはせた。たしかに裏の仕事を進める上で、協力者というものはいてもおかしくないのかもしれない。だがやはり彼の推論には問題があると、タバサは冷静に考えた。

「協力者がそばにいないと、魔法の効果が切れる。それに学院は人の入れ替わりが

少ないから、フーケ以外の協力者が入れるとは思えない」

「なにも変装するのに杖に頼ってばかりいなくてもよいのです。私聞いたことがあります。」

ポリ何とか薬とかいう柑橘系っぽいジュースをジョービしておけば、一人でだって

いくらでも他人にバケられるのでしょうか? 何の問題もありません

ん！」

「その種の秘薬は高すぎる。長く変わり身をしてると、割に合わない」
だが魔王は、タバサの鋭い突っ込みに待ってましたといわんばかりの笑みを返した。

「もちろん、そこら辺の事情も考えてあります。確かに何時もの犯行ではポリナント力薬を

多く使うワケには行かないでしょう。ですから普段の犯行では、潜入期間も短いに

違いありません」

「じゃあ、一体フーケはどうやってロングビルに成りすましたのよ！」
「彼女、去年からいたわよね？」

ルイズとキュルケは、口々に声を挟んだ

「ええ、ですから今回の犯行に関しては、いつもと手口がチガウのです。

何と彼女は今回に限り、秘薬の代金を全く気にすることなく、
情報を集めることが出来たのです。」

「.....」

魔王の意図が読めずに、タバサは押し黙った。

「フフフフ、こんなことが分かってしまうなんて、私なんてアタマが
いいんでしょう。」

ジブンのムラサキイロの頭脳が恐ろしいです。」

さつきは灰色って言ってたじゃないと、ルイズは心の中で悪態を付
いた。

「とはいえ自分も、今回ばかりはフーケが緑髪でなければ、このトリツ
クを

見落としていたかもしれません。ルイズ様も緑髪の人物を見かけ
たら、

豹変にだけはお気を付けてください。ああ、それから双子の姉妹にも
気を付けるべきですね」

「緑髪や姉妹に何の関係があるっていうのよ。御託はいいから早く教
えなさい。」

「どうやってフーケはロングビルに化けていたの?」

「分かりませんか? そこはメイジの悪い癖ですぞ。確かに魔法はなんでも出来ます。」

「エー! そんなのアリ!? みたいなことをいっばいやって見せられる。」

「しかし、何もフーケが常に魔法で変装しているとは限らないのです!」

「何ですって!?!」

ルイズたちは強く反論した。

「そんなの無理よ! 下手な仮装で周りの人を騙せなんかしないわ!」

「そうよ、劇団員が分厚い化粧で勇者や魔王になり切るのとは訳が違うのよ?」

だが魔王は、そんな反論もどこ吹く風と、不敵な笑みを浮かべた。

「フフフフフ... 分かりませんか? この世には魔法よりもずっと強力で、

見分けの付かない変装手段があるのです。それはまさに天性のもの。」

望んで手に入るものではありません。持たざる者の方が多い、

非常にキチョーなモノなのです。」

「そ、そんなものが本当に存在しているというの?」

魔王は大きく息を吸いこんで、彼の思い至った真実を告げた。

「ズバアリ! フーケとロングビルは双子の姉妹だったのです!!!」

「えええええええ!!」

ルイズとキュルケは、大声で叫んだ。

一人声を上げなかったタバサも、目をまん丸くして驚いている。

「なによその突飛な発想は!?!」

「ですがルイズ様、そう考えればこの事件、全てのナゾに説明がつくのです!」

ミス・ロングビルからフーケへの、信じ難いほどの性格の豹変... トライアングルレベルの実力を持ち、学院長付きの秘書という好待

遇を得ながら

泥棒に身をやつすその訳・・・そして追手をわざわざ自分の隠れ家に人呼び込んだ、

その訳さえも！」

「どういうことよ！ 詳しく話さない！」

「・・・長い話になります。それでもよろしいですか？」

「私たちは先が気になってるの。話してもらわないと困るわ」

魔王は居住まいを正すとしんみりと語り始めた。

「遠い昔のことです。あるところに緑色の髪をした、裕福な貴族がおりました。

一家には双子の娘がおりました。双子はお互いよく似るものと言いますよね。

確かに二人の容姿はウリ二つでした。髪形と口調を変えれば、見分けがつかないほど・・・

ですが性格までは、そうではなかったのです。一人はおしとやかそのものでまじめな

性格でしたが、もう一人はユーフクさにかまけて荒れた生活を送り、やがてロクデナシに

育っていったのです。」

まあ裕福な家庭にはアリガちな話ですな、と魔王は言った。

「まさか、それがフーケ？」

「しばらくは一応幸せに暮らしていた一家でしたが、その生活はロクデナシの娘のために、

いつも不穏な影が付きまわっていました。そしてある年の夏の終わりのこと・・・

ヒグラシがカナカナと悲しい鳴き声を上げる頃に、ついに破局が訪れます。」

ルイズたちはごくりとつばを飲み込んだ。

「荒れた方の娘は放蕩セイカツの末、シャッキンまみれになって首が回らなくなりました。」

そして彼女はついに盗みに手を出したのです。なまじ魔法の才能

だけはあつたため、

彼女自身は盗みを遂げ、その後、身を隠しました。しかしこの犯行は、やった本人こそ

捕まらなかつたものの、誰がそれをやったかは周囲にバレていたのです！

モチロン一家は爵位を剥奪されました。路頭に迷う一族・・・やがて、何やかんやあつて

家族はちりぢりのバラバラになってしまったのです」

「まあ、何てこと・・・！」

キュルケは口元に手をやり、息を飲んだ。心なしか、タバサもより深く聞き入っているようだ。ルイズも同様に、真剣な眼差しで話へ聞き入る中、ただフーケだけはこめかみをぴくぴくさせながら身悶えていた。

「しかし、残されたもう一人の娘は諦めませんでした。まじめで純粋な彼女は、暖かな一家

の生活を取り戻すことを夢見て、再起を図ります。彼女は地道な努力でお金を少しずつ

貯めていきます。そしてある時、運よくオールド・オスマンに才能を見出された彼女は、

ついに学院秘書になることができました。」

「涙ぐましい努力だわ！ ミス・ロングビルにはそんな過去があつたのね」

キュルケは目元を抑えながらに言った。

「しかし・・・やつとこれからだという、まさにその時・・・！」

ついにロングビルの命運は尽きてしまったのです!!」

「一体何があつたっていうのよ!?!」

「血の縁は切つても切れぬもの。学院秘書としての仕事が軌道に乗り始めた丁度その頃、

彼女の前にたつた一人の姉妹、フーケが現れたのです!」

「な、なんてこと!」

熱心に聞き入る二人は、驚愕に顔を歪ませた。フーケはもうウンザ

リというような、吐きそうな顔をしている。

「血縁ゆえのシガラミ、また人の意見を断りにくい、押しの弱い彼女の性格も災いしました。」

「ロングビルは自己嫌悪を覚えつつも、フーケに度々稼いだお金を渡し、学院の情報を

少しづつ漏らしていったのです。もちろん彼女も大事になるようなことまでは教えない

つもりでした。しかしそこはフーケのこと、彼女の方が一枚上手だったのです。

フーケはロングビルに扮しつつも、方々から情報を集めていき、ついには学院の皆が

思いもよらなかつた大胆不敵な方法で、破壊の杖を盗み出しました。」

「それが昨晚のゴーレムという訳ね！」

魔王はそうだと頷いた。

「ところがこれは思わぬ引き金を引くことにも繋がりました。」

ついにロングビルがフーケを見限つたのです！ フーケの行き過ぎた行為が、

ついにミス・ロングビルを反抗へと駆り立てました！」

「偉い！ 偉いわ！ 姉妹に立ち向かうなんて、相当に勇気のいることよ！」

ルイズは自らの長姉を思い浮かべながら、ロングビルに喝采を送つた。

「もう分かりますよね？ 今朝、ロングビルが短時間の調査でフーケの隠れ家を

見つけ出すことが出来、またそれを皆に明かしたのは、そのためだったのです。

ルイズ様たちはあの時、そんな簡単にフーケの足跡を追えるだなんてロングビルは

優秀な人だなあぐらいに思っていたかもしれませんが、トンデモナイ！ 実際には

フーケ本人と頻繁に会っていて、その隠れ家のことも鼻から分かっていたのです！」

だがここにルイズは、待ったを掛けた。

「いや、でもそれはおかしいわ。ロングビルは馬で遠出してフーケの隠れ家を探し当てた

という筋書きだったはずよ。知ってたんなら、そんなことする意味がないわ！」

「・・・そこです。それこそが最後のカギなのです。これが決定打となつて、

私は自身の考えの正しさを確信致しました。ルイズ様、宝物庫で教師たちが居並ぶ中、

ロングビルがなんと言ったか詳しく覚えていますか？」

そう言われてルイズは不安げな表情を浮かべた。

「そんな一字一句まで覚えていられないわ。あの時ロングビルが言っていたのは、

フーケの足取りを調査して、それが掴めたということぐらいでしょ？」

「確かにそうです。ですが、問題はその時間です。彼女の話しでは、朝に目が覚めてから

騒ぎに気が付き、それから調査のために馬を走らせたのだと言います。結果、フーケの

目撃情報があり、その隠れ家は馬で4時間ほどの距離にあると判明したというのです。

さあ、ここでよく考えてみてください。彼女は農夫から目撃談を聞いたそうですが、

その農夫がそこらを歩き回っていたとしても、そんな大層な距離を動けるハズは

ありません。必然的に、話を聞いたロングビルも4時間で行けるといふ場所の近くまで

行ったと考えるのが妥当です。往復で8時間になりますから、すごく遠いですよね。」

「本当よ。行きも帰りも、ずっと馬車に揺られ続けて退屈すぎるわ！」
キュルケはそう言つて、心の底から嘆いた。

「そうでしょうとも。朝一に出掛けたというのに、もう日が傾いて来ておりますからな。」

問題は、ミス・ロングビルはそんな遠くまで行っておきながら、どうして今朝、

宝物庫での集まりに顔を出せたのか、ということ。朝起きてから調べたのでは、

どう考えても時間が足りません！ しかも単なる行き帰りではなく、人もまばらな道中での

聞き込みを終えてそれです。ここら一体の景色を思い浮かべて見てください！

こんな人家もマトモに見つからない場所で人を探すとすれば、一日かけて終わるか

「どうかも怪しいでしょう」

「つまりミス・ロングビルがフーケを探したつていうのは真つ赤な嘘だったつてことね。」

ならやっぱりロングビルが嘘つきで、フーケの正体だったんじゃない！」

ルイズは気色をまいたが、魔王はすぐさま反論した。

「いいえ、私はそうは思いません。まさにここ、ココこそが推理の分かれ目です。」

フーケは大胆だけでなく、綿密な準備を怠らぬ周到さを兼ね備えた大ドロボー。

そんな彼女が少し考えれば分かるようなウソを皆の前でつくとは思えません。

なのにフーケはあんなウソを付いた！ しかも身を危険にさらすウソをです。

実際、それが元でこうしてフーケは捕まった訳ですしね。ここに大きな矛盾があります。

ルイズ様にはこういうところこそ、ゆさぶつたり、待ったをかけて

「追及して欲しかったものです。」

「ちよつと、良いかしら？」

キユルケが恐る恐るといった感じで口をはさんだ。

「正直、朝にあの話を聞いたとき、何だかおかしいとは思ったのよね。でもあの時はミス・ロングビルを信頼出来る人だと思ってたし、自分が気づいて

いないだけで、何か帰ってこられる方法があつたのかと思つたのよ。

自分が下らないことを言つて、あの場をかき乱すことはしたくなかつたし・・・

だから、黙つたままだつたわ」

魔王はそれを聞いて、彼女を労わるように言った。

「無理もないことです。会議などで人と人が顔を突き合わせると、何か問題があつても

それが放置されるということが往々にして起こるものです。変だなと思うことが

あつても、自分の理解が及んでいないだけで大した問題ではないのではないか、

これを質問して周りにバカだと思われたくないだとか、そういう心理が働いて、

結果、指摘されるべき事柄がそのまま見過ごされてしまうのです。」
「ちよつとキユルケ、こいつのその煙に巻くような話に騙されたりしちゃあダメよ。」

確かに、フーケがそういう隙のあるウソを付いたのは不思議よ？
でも、そもそもばれる様なウソを付いたことと、ロングビルがフーケでないことは

何の関係もないじゃない！その議論、全くの無駄だわ！」

「それは違います！ まさにそれ、その矛盾こそがロングビルの無実を証明するのです！

ルイズ様、こういう時は発想を逆転させるのです。

なぜフーケがそんなウソを付いたのか？ そう考えるのではなく、

そもそもロングビルはどうしてウソを付かなければいけなかったか？

その理由を考えてみるのですー！」

「さりげなく自分の考えをすり込もうとするんじゃないわよ！

いいからさっさと結論を言いなさい！」

「ルイズ様には自分で何も考えず、プレイ動画だけを見て満足するよ
うな人には

なつて欲しくないのですが・・・」

「い・い・か・ら、早く言いなさい！」

魔王はしばらく話の続きを渋っていたが、ルイズが懐にしまつてい
た鞭を取り出し

バチバチと音を鳴らすと、それだけですんなりと口を割った。

「ロングビルは金をせびるに飽き足らず、ついに大事を起こしたフー
ケを見限りました。

そして何としてでも、自らに恩のある学院の秘宝を取り戻したい、
そう考えたのです。」

「うん、それで？」

「しかし彼女は、そのことをそのまま明かす訳にはいかなかったので
す。なぜなら自分と

フーケは瓜二つ。それに自分にも落ち度があるわけですから、素直
に真実を語っても、

自分が一番に疑われ、話が進まなくなるのは目に見えていました。」

「まあ、そりゃあそうよね」

キュルケはそう言つて、理解を示した。

「だからロングビルは、会議に遅刻してまで調べに出かけたふりをし
たのです。

しかし本当に隠れ家まで行つて帰るまでの時間を遅刻したのでは、
その間に

フーケが隠れ家から去ってしまうかもしれませぬ。フーケの居場
所を明かすのなら、

早ければ早いほどいい。ゆえに彼女は、自らとフーケの関係性がば

れる危険を冒しつつも、

ああやって教師の前で情報提供を行ったのです。」

「まさか！・・・じゃあ、あのロングビルの証言の矛盾は！」

「そうなのです。あのバレやすいウソこそが、彼女に出来る最大限の譲歩だったのです！」

きっと今までフーケと繋がっていたことへの負い目もあつたのでしよう。」

「ああロングビル、なんて可哀そうなの！」

キュルケはハンカチを取り出して、涙をぬぐった。

「しかし運よく、あの慌ただしい場で彼女の矛盾に気が付く者はいませんでした。」

例え気付いたとしても、皆ジブンの些細なカンチガイと違って、その疑問を心の内に

引っ込めてしまったのです。そしてロングビルは、予め知っていたフーケの隠れ家に

我々を案内したのです。」

ルイズはそれを聞いて、考え込んだ。

「・・・でも、じゃあロングビルはその後どうなったの？」

ここにいるフーケは流石に本物でしょ？　じゃあ、こいつはミス・ロングビルと

いつ入れ替わったっていうのよ！」

「ロングビルは自分に出来る精一杯の情報提供を行いました・・・ですが相手は肉親。」

流石に直接対峙するのは気が引けたのでしよう。いざフーケのアジトに突入という時に

なって、彼女は一人になることを選びました。それが外の見回りを申し出た理由です。

自分の姿をフーケに見せ、刺激したくなかったという考えもあつたことでしょう。

ところが、この判断こそが一番の大きな過ちだったので。彼女が一人になったことで、

フーケは気兼ねなく彼女を襲い、そのまま彼女に成りすますことが出来たのです！」

「まあ何てこと・・・!!」

キュルケは言葉を失った。

「さらに言えば、フーケが隠れ家の外にいたのだって、偶然ではありません。

なんとフーケは、ロングビルが裏切ることを読んでいたのです！」
「何ですって！」

「放蕩者でたかりやのフーケといえど、いやだからこそ、姉妹であるロングビルの思考は

手に取るように分かっていたのです。ゆえに彼女はロングビルを外で待ち伏せし、

彼女と入れ替わりました。そして自らは悠々とゴーレムを操り、我々に襲い掛かったのです!!」

ルイズとキュルケは、あまりの想像を超えた話に黙り込んでしまった。

「待った！」

「!!」 「!!」 「!!」 「!!」

沈黙を破ったよく通る声に、ルイズや魔王、キュルケやタバサまでもが、びくりと動いた。

声を発したのは、なんと今の今まで黙っていたフーケだった。

「作り話にしちやあ、よく考えてるじゃあないか。本当、腹立たしくて仕方がないよ！」

「だがね、その話には大きな矛盾がまだ一つ残されているのさ！」
「矛盾・・・ですと？」

魔王は冷や汗をかきながら、フーケに問い返した。

「そうさ！ 私はロングビルの双子じゃあないってこと、証明してや

ろうじやあないか！」

証言開始

「私が、ミス・ロングビルと双子だったって？」

「馬鹿を言つちやあいけないよ！ そんなの全部デタラメさ！」

「自分の隠れ家をばらしたのは何故かって？ それは・・・言いたくないね」

「ともかく、こいつの言うことは嘘ばかりさ」

その証拠に、大きな矛盾が一つ残されている」

「破壊の杖のことさ！ あんたたちが来ると知っていたんなら、どうしてあれを隠れ家に

置いていたんだい？ おかげで自慢のゴーレムが壊されちまったじゃないか！」

証言終了

「・・・」

「・・・」

「・・・」

皆が、黙り込んでしまった。嫌な空気が流れている。

「ねえ、アンタ・・・もちろん、反論出来るわよね」

ルイズが問うた。

「・・・」

「ねえったら」

「・・・グオオオオツ！」

魔王が頭を抱えてうずくまり、ルイズたちを唾然とさせた。

「ハハハハ！ ザマあないね！ こいつの言うことは、何から何まで嘘だったのさ！」

こいつの言葉へ真剣に聞き入るあんたたちの顔は、

見ている笑いを堪えるのが大変だったさ！」

フーケが勝ち誇ったように言う。

「そんな、まさか今までの話は、全て間違っていたというの？」
「待ちなさいルイズ、それじゃあフーケの思うつぼよ！」

今までの話、何から何まで間違っていたとは思えないわ。

ただ……私たちは、何かを見落としているんだわ……！」

「ルイズ様……私の代わりに、真実を明らかにしてくださいませ……！」

……グフっ！」

「そんな、私にどうしろって言うのよ」

「ご心配なく、ルイズ様。ただルイズ様は、フーケの証言のムジユンを見つければ

よいのです。そしたら、そこに証拠を突き付けてやる。それだけです」

「でも今の証言に矛盾なんて……！」

「そういう時は、相手の証言を揺さぶってみてください。きっと真相に辿り着くための

ヒントが隠されているはずですよ。それでは、頼みましたぞ。

私は……コレ、マデ……！」

魔王は今度こそ、ばったりと倒れた。

「ルイズ、あなたがやるしかないのよ！」

「どうしてこんなことに……」

／／／
尋問開始

「私が、ミス・ロングビルと双子だったって？」

「待った！」

「あなたはロングビルと双子だったんでしょ？」

「あんたも人の話を聞かないねえ。だから違うって言ってるんじゃないか。」

そんなもの全部こいつのデタラメさ」

「ぐふっ……！」

「それともなんだい？ 私が双子だとも言う証拠があるのかい？」

「でも、あんたの不可解な行動は、それで説明がつくわ」

「いいや、それは違うね。それをこれから話してやろうじゃないか」

.....

「馬鹿を言っちゃあいけないよ！ そんなの全部デタラメさ！」

「待った！」

「じゃあ、あなたは今までの魔王の話が全部嘘だったって言うの？」

「その通りさ。少し考えれば分かりそうなものだけどねえ」

「そんなこと言って、証拠はあるの？」

「・・・あんた、少し勘違いしてないかい？」

「え？」

「一体誰が、私たちが双子であるところを見たって言うんだい？」

そんなもの、誰も見ちゃいないよ！ だって、私は双子なんかじゃないんだからね。

証拠を示すべきは、突飛なホラ話を信じてるあんたたちの方なのさ
！」

「きゃあああああ！」

ルイズは両腕で自分の体を抱きしめながら、その身を震わせた。

.....

「自分の隠れ家をばらしたのは何故かって？ それは・・・言いたくないね」

「待った！」

「言いたくないって、何よ！ 子供じゃあるまいし」

「ふん、言いたくないものは言いたくないのさ。」

あんたたちこそ、お得意の推理で考えてみればいいじゃないか。

『・・・あれ？ 何か、ちよつと気になるわね。気のせいかしら？』
どうして私が隠れ家で、ロングビルとやらを待ち構えていたのか」

「ルイズ、少しでも気になることがあるのなら、証言に追加して貰った方がいわい」

「・・・シヨウゲンドウシ・・・ムジュン・・・ツキツケル・・・！」

魔王が死にそんな声で言う。

「それもそうね。ねえフーケ、今の話を証言に追加してもらえないかしらっ。」

「ふん、いい加減諦めたらどうだい？ 自分の非を認めた方が、ラクになると思うけどねえ」

．．．．．

＝＝＝＝＝証言が追加されました＝＝＝＝＝

「どうして私が隠れ家でロングビルとやらを待ち構えていたかつて？

あんたたちこそ、お得意の推理で考えてみればいいじゃないか」

「待った！」

「だから、それはロングビルが裏切ることをあんたは予想していた．．．」

「いい加減にしな！ まったくあんたたち、よくそんな話を信じられるね」

「そんな話って、どうしてよ」

「考えてもみな。ロングビルという双子がいたとして、そいつはどうかしてるよ。」

そいつは、自分のウソがばれてもおかしくない証言をしてまで、

私を追いに来たんだろう？ 馬で4時間か、今考えると傑作だね！

「きつとミス・ロングビルは、自分ひとりではあんたに敵わないって知ってたのよ。」

それであえて危険を冒したんだわ」

「ふん！ だからって、自分が捕まるかもしれないような真似をするなんて、

私には信じられないね！」

．．．．．

「ともかく、こいつの言うことは嘘ばかりさ」

その証拠に、大きな矛盾が一つ残されている」

「待った！」

「だから、それは一体何だっというのよ！」

「やかましい！ それを今から話そうとしてるんじゃないか！」

黙って話を聞いてな！」

フーケに怒られてしまった。

.....

「破壊の杖のことさ！ あんたたちが来ると知っていたんなら、どうしてあれを隠れ家に

置いてきたんだい？ おかげで自慢のゴーレムが壊されちゃった

じゃないか！」

「待った！」

「本当、どうして破壊の杖を家に置いていたのよ」

「だから、それがあんたたちの矛盾って言ってるじゃないか！」

あんたたちがもつともらしく語るその話、こんな大きな矛盾を

説明できないようじゃ、受け入れる訳にはいかないよ！」

「.....どうしても認めないつもり？」

「もちろんさ」

「どうしても、どうしても？」

「どうしても、どうしてもさ」

「どうしても、どうしても？」

「どうしても、どうしても、どうしても.....って、くどいんだよ！」

フーケに怒られてしまった。

「.....手強いわね」

.....

一通りの話が終わったのを見計らい、キュルケはルイズに話しかけた。

「どう？ 矛盾は見つかった？」

「うーん・・・ちよつと、気になるところはあるのよね」

「なら、思い切って突きつけてみるのもいいかもしれないわね」

「・・・シヨウゲンドウシ・・・ムジユン・・・ツキツケル・・・！」

「ほら、使い魔さんもこう言ってるじゃない」

「あんた、何で死にそうになってるのよ・・・」

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／
尋問再開

「破壊の杖のことさ！ あんたたちが来ると知っていたんなら、どうしてあれを隠れ家に

置いてきたんだい？ おかげで自慢のゴーレムが壊されちゃった

じゃないか！」

「異議あり！」

フーケはびくつと体を震わせた。

「なんだ、なんだい！ そんな大声を出して？」

「フーケ、あなたは証言の中でこう言っていたわよね。

『どうして私が隠れ家でロングビルとやらを待ち構えていたかって？』

あんたたちこそ、お得意の推理で考えてみればいいじゃないか』つて

「ああそうさ。まったく考えなしにホラ話を広げるのは、やめて貰いたいもんだね。

あんたたち、破壊の杖の謎を解けないんだから、いい加減間違いを認めちまいな」

フーケはそう言って、ため息を付いた。

だがルイズは胸を張って、不敵な笑みを浮かべた。

「・・・なに笑ってるんだい」

「私ね、あんたの言葉通り、お得意の推理で考えてみたの」

「ふーん、そりゃ虚しい努力だろうね。何か分かったかい？」

「あんたは気付かないの？」

「何がさ？」

「あなた自身の矛盾のことよ」

「・・・ふん、何を言うかと思えば。」

矛盾があるのは、あんたたちの話の方じゃないか！」

眉を顰めるフーケに、ルイズは念を押した。

「あなた、さっきこう言ったのよ。『あんたたちが来ると知っていたんなら、』」

どうしてあれを隠れ家に置いてきたんだい？』って。

それはつまり、私たちが来ると知っていたなら、

破壊の杖を隠れ家に置いてはおかなかったということよね？」

「もちろんさ。だってそうする理由がないじゃあないか」

「だから、それが真相なのよ」

「何がさ！」

「あなたは、隠れ家でロングビルを待ち構えていた。

双子とはいえ凄いわね。相手の考えを見透かすだなんて。

でもたった一つだけ、あなたは読み違えていた。それは、ミス・ロングビルの勇気よ!!」

「ロングビルだって？　もしそんなのがいたとして、私相手に捕まるようじゃねえ」

フーケはやれやれとでも言いたげな表情をした。

「それよ。ミス・ロングビルはあんたには敵わないって知っていた。

かと言つて、皆の力に頼ろうとすれば、どうしても自分の身に疑惑が降りかかるような

ウソの証言をしなければならぬ。だからミス・ロングビルはジレンマに陥るはずだった。

自分がフーケと繋がっていたことを隠したければ、あんたを追うことを諦めるか、

無茶を承知で、自分一人であんたと対峙するしか無かったのよ！」

「まさか！」

「そうよ！　あんたはミス・ロングビルの勇気を見誤ったの！　自分

が問い詰められる

ことを覚悟で、ウソの証言をした彼女にね！ 一人であんたとの決着をつけに

隠れ家に姿を現すはずだった彼女は、実際には私たちと一緒に現れた。

森の中で彼女に襲い掛かろうとしていたあんたは、実際には複数人で現れた私たち

手出しが出来なかったのよ！」

「ぐう！ そんなこと！」

「フーケ、あんたは焦ったはずよ。自分のことをよく知るロングビルが裏切った上に、

自分の予想を超えてきたんだから。このまま放っておいたら、彼女がどれだけの脅威に

なるか分からない。だからあんたは、一刻も早くロングビルを捕えなければならなかった。

結果、あんたは隠れ家に置いていた破壊の杖を、みすみす私たちに奪い返されたのよ！」

「凄いわルイズ、まさかそんな真相があつたなんて！ これで矛盾はすべて消え去ったわ！」

「さあフーケ！ 大人しく真実を認めなさい！」

ルイズに指を突き付けられたフーケは、口元をわなわなと震わせた。

「・・・そんな・・・」

「・・・そんな・・・」

「・・・そんなバカなあああああ・・・！！！！！！」

認めるか、誰が認めるかそんな話

フーケは縛られたままガタガタと小刻みに震え出した。

馬車の床が軋み、不快な音がかき鳴らされる。

「うるさい」

タバサの杖の一撃で、フーケは沈黙させられた。

「お手柄だったわね、ルイズ！」

「いやはや、お見事でした。ルイズ様にこんな意外な才能がおりとは思いませんでした。」

私が宗教裁判にかけられたときは、是非ともルイズ様に弁護をお願いしたいものです。」

「あなた、何いきなり元気になってるのよ。まさか今まで、演技してたってわけ」

眉を吊り上げたルイズに魔王は慌てて返事を返した。

「いえいえ、そうではありません。フーケの口撃に傷ついた私の身体が、

フーケの発した苦悩の叫びを感じ取って、癒されたのです。」

「また、あなたは・・・」

みようちくりんな魔王の生態に、ルイズは言葉も出ない。

「まあまあ、全て終わったんだからいいじゃないの」

キュルケがルイズをなだめる。馬車の上の空気が緩みだしたところで、タバサは呟いた。

「なら、今ロングビルはどこ？」

「あ」

「・・・気付いてしまいましたか？ それこそが我々の犯した最大のマチガイなのです。」

フーケはあの森でロングビルと入れ替わりました。ですから今もロングビルは、

どこかあの森の中に拘束され、倒れているに違いないのです。もし仮に、フーケが

類まれな逃亡スキルを發揮し、この馬車から逃亡したとしたら・・・するとどうでしょう！

犯人のフーケもといミス・ロングビルは、彼女のアジトと思われる森の小屋の近くで

変死体として発見された・・・そうやって全ての事件に決着が付いてしまうのです！

我々は絶対にこの惨劇に挑まねばなりません！」

ルイズたちは一斉に青ざめて、フーケに詰め寄った。

「フーケ！まさかあんた、もう既にミス・ロングビルを

殺しているなんてことはしないでしょうね！」

「ふざけんな！ そんな奴はいないよ！」

「私は真面目に聞いているのよ！ 真実はすでに暴かれたんだから、

いい加減、本当のことを話さない！」

「だから違うって……！」

「そうよ、ロングビルをどこにやったの？」

今からでも遅くないわ！ 彼女のためにも改心するのよ！」

「何が改心だ！ いもしない奴のためにどうしろってんだい！」

「これ以上罪を重ねてはいけないわ！ たった一人の姉妹なんですよ？！」

フーケはこめかみにしわを寄せて叫んだ。

「だ・か・ら、何がロングビルだ！ わたしや初めからフーケ、ただ一人だよ！」

「そんなこと言つて、親をもつと悲しませるつもり!？」

「ふんっ、親なんかもうとつくに死んでるよ！」

フーケがそう言うと、いつもは感情的な振る舞いを見せないタバサまでもが立ち上がり、冷たい顔でフーケを見下ろした。

「人間失格」

その声色に、とんでもない侮蔑の念が込められているのを感じ取ったフーケは、顔をより一層赤く染め上げた。

「……こんのおおお!! どうしても私をロクデナシにしたいみたいだね！」

こんなブジヨク、許しちゃあおけないよ！」

「さあ、早くミス・ロングビルの居場所を教えなさい！」

「ツ……！」

フーケは縛られたままに、全身を悶えさせた。彼女の体が馬車の上を転がり、あちこちにぶつかる。やがて彼女の頭が馬車の座席にガンと当たると、フーケはようやく暴れるのをやめて、苦しそうな息を整えだした。その様子は、彼女の中で大きな葛藤があったということ

を、見るものに感じさせた。

「・・・そうさ。ロングビルは私の妹さ！ まさかあの鈍臭いやつのせいで

私がこんな目に会うとはね！ 私も焼きが回ったもんさ！」

「!!! ついに認めたわね！」

キュルケが叫んだ。

「フン、認めたくないね。あんたとろくさい奴と血縁だなんて。

だが今はあいつに感謝すべきかもねえ。おかげで私は逃げ出せるんだから」

「何ですって!?!」

フーケの浮かべた凶悪な笑みに、ルイズは恐れ戦いた。

「心配しなくても、あいつは生きてるよ。ただ気絶させて縛り上げただけだからね。

でも、いいのかい？ このまま帰ればあいつの居場所は絶対に教えてやらないよ。

それにあんな森の中だ。例え後で私が口を割ったとしても、その頃には日も沈んで、

野犬や熊の餌食になってるだろうね」

「フーケ・・・！ あんたって奴は・・・！」

ルイズたちは、フーケの邪悪さに胸糞悪い気分を覚えた。年端もいかぬ少女たちには、きつすぎる現実だった。

「さあ、とつとこの縄を解きな！ ロングビルの隠し場所を教えてくださいければね！」

それを聞いて、馬車の上にいる者たちは皆黙り込んだ。

せつかく命の危険を冒してまで捕まえたフーケ

・・・しかしロングビルの命を大事に考えるなら、それをみすみす逃がすしか手はない。

さあ、いくらでも悩み苦しむがいい！とフーケがいい気になったところ、魔王は呟いた。

「あの一、ちよつといいですか？」

「なんだい、このもやし亜人」

「もやしっ!? ……まあ、いいでしょう。良くありませんケド…
今はもつと大きな問題がありますからな」

「ふん、何だか知らないが聞いてみな。あんたらとはもうすぐおさらばだからね」

すると魔王は、恐る恐るといった様子でフーケに問い質した。

「その…あなたの妹様の、ミス・ロングビルのことなのですが…
「森に戻るまで、居場所は明かせないよ」

「いえ、そういうことではなく…」

魔王は、言おうか言うまいか、悩み苦しんだ末に告げた。

「まさかとは思いますが、その『妹』とは、あなたの想像上の存在にすぎないので

ないでしょうか？ もしそうだとすれば、あなた自身のおつむがザンネンであることに

ほぼ間違いないと思います。」

「ちよつと、どういうことだい!!!」

啞然とするフーケを他所に、ルイズたちはぺらぺらとおしやべりを再開した。

「まあ、そうなるわよね」

「うん、知ってたわ」

「想定範囲内」

やっぱりフーケって面白いわー！

それが彼女たちの結論であった。

フーケはガチギレした。

「なんでここまでコケにされなきゃいけないんだい！

後で脱獄の機会を窺えばいいと思っていたがやめだ！この場でぶつ殺してやる！」

そう言うと、フーケは縛られた両足を器用に振り上げ、御者台から身を乗り出していた魔王目掛けて思い切り振り下ろした。

「フゲエエエ！」

「死ね！死ねッ！」

フーケは振り下ろした足をそのまま魔王の首にあてがい、体重を掛けて絞め落としにかかった。するとただでさえ青白く不健康そうな魔王の顔が、見る見るうちに死相を感じさせる白さに変わっていった。

「・・・カ・・・カヒユ・・・タ・・・タスケテ!・・・」

キュルケは縛られていたはずのフーケがここまで暴れまわれたことに衝撃を受けながら呟いた。

「惨劇ね」

「むしろ喜劇」

ああ楽しかったわとキュルケが感慨にふけり、タバサが閉じていた本を再び開き出す中、ルイズだけはあたふたしながら魔王をどう助け出そうかと、焦りを募らせていた。空になった御者台に強い日差しが照り付ける。馬たちは、退屈しのぎに鞭を鳴らす迷惑な御者がいなくなったことで、悠々と学院への路をひた走り始めた。道行く先には小高い峠が見える。あれを超えれば、学院はもうすぐだ。

「ほら、とつとと死んじまいな!」

「・・・コ・・・コウナツタラ・・・!・・・ハメツ・・・ジユモン・・・!」

~~~~~

雪風のしらべ

少女は、いつも本を抱えている。いつも、どこでも本を抱えている。部屋の中ではもちろん、食堂に向かう時も、教室に向かう時も、常に本を手放しはしない。

暖かな日差しの下で、あるいは冷たい月明りの下で、

ある時は馬車に揺られながら、またある時は竜の背中に乗りながら・・・

彼女がそんなに大事にしているのはなぜだろう？

彼女の正体は魔女、ならきつと本の中身は魔導書だ。

何の変哲もない紙の束に、とてつもない驚異が隠されていること





## STAGE 20 LOVEじやよ

学院長室へ事の顛末を報告しに行ったルイズたちを、オスマンは諸手を挙げて迎え入れた。

「ようやった！ まさか破壊の杖を取り戻すばかりか、フーケの身柄まで捕えようとは

思わなんだぞ！ お前たちはまさに貴族の鏡じゃて」

「有難う御座います」

「お褒めに預かり光栄ですわ」

「・・・」

ルイズは礼儀正しくすました表情で返事を返したが、その心の内は、湧き上がってくる感動いっぱいだった。普段、ルイズが学院長と声を交わす機会といえば、授業での失敗がちよつとで済まなかった時ぐらいなもので、毎度怒られはせずとも複雑な表情を向けられるのが常であった。

だから、こうしてオールド・オスマンから称賛の言葉を受けることが、彼女にとっては何れしくてうれしく堪らなかった。

「いやはや、本当によくやったものじゃ。この功績を称え、宮廷にはシユヴァリエの爵位を

申請しておこうぞ。ああ、それからミス・タバサには精霊勲章あたりが良いかのう？」

「まあー」

「本当にいいんですか!?!」

ルイズたちは、ぱあつと顔を明るくして言った。学生の身分で爵位を授かるとは、大変に名誉なことである。

「いいのじゃ。君たちはそれに見合う働きをしたからの。そのポロポロになった姿を

見れば分かるが、フーケとの戦いは余程の激戦だったのじやろう？

「まったく、まるで崖から転落したかのようなひどい有様じゃて！」

「え、ええ、まあ、それほどでも」

ルイズたちは冷や汗をかきながら、オスマンの称賛へ控えめに応え

た。

「まったく、素晴らしい限りじゃて……しかし……」

喜色を声に滲ませていたオスマンは、一転して深刻そうな表情を浮かべた。

「やはり君たちの口から直接聞きたいの。わしには俄かには信じられないのじゃ……」

ルイズは居住まいを正してオールド・オスマンに向き合うと、彼へと真実を告げた。

「ミス・ロングビルがフーケだったのです。間違いありません。」

オスマンはキュルケらの方へも顔を向け、同様に尋ねた。

「……君らもかね？」

「私も確認致しましたわ。間違いありません」

キュルケが言うと同時にタバサも一回、こくりと頷いて視線をオスマンに返した。

「いえ、ミス・ロングビルがフーケだったのではなく、

フーケがミス・ロングビルだった可能性も微レ存「アンタは黙ってなさい！」

オスマンは、彼女らの言葉をしっかと受け止めたようだった。

「そうか。そうじゃったか……」

彼はそう言うのとルイズたちに背を向けて、窓の外を眺め始めた。

その後姿は、どこか寂しげに見えた。

「心中、お察しします」

「いや……いいんじや。わしの見る目が足りないばかりに、

君らを危ない目に合わせてしまったのう……」

「いえ、そんな……」

ルイズが気まずい思いで返事を返すと、オスマンはくるりと向き直って、

彼女たちへと頭を下げた。

「本当にすまなかった」

「やめてください、オールド・オスマン！」

「相手は、あの土くれですもの。騙されたとしても、無理はないです

わ

ルイズとキュルケは慌てて答えたが、オスマンは頭を下げ続けたまま言った。

「そういう訳にもいかん。これは学生を預かる身として必要なことじゃて・・・」

言い訳はできん」

すこししみりした空気が部屋に満ちたところで、コルベールがおもむろに声を上げた。

「そういえば、まだ取り戻したという破壊の杖を確認しておりませんでしたな」

「おお、そうじゃった。戦いの最中に、壊れたりしてはいかん。見せてくれるかの？」

キュルケは首を傾げた。

「誰が持つてるんだっけ？」

「私の使い魔よ。あんた、ちゃんと大事に持ち帰ったでしょうね？」

「モチロンです！ ツルハシと同じぐらい大事に持ち帰りましたとも！」

「・・・それだけ聞くと、不安になってくるわね」

「見てみればわかる話」

タバサは魔王から『杖』を受け取ると、自分の杖を掲げて呪文を唱えた。

『杖』が傷付かないようにと、丁寧に巻きつけられていた布がぐるぐると解かれていく。

「あれ？ そんな形だったかしら？」

「もうルイズ様だったら、自分で使ったのに分からないんですか？」

やがて姿を現した『杖』を見て、ルイズたちははっと息をのんだ。

オスマンも、ほう！と声を上げた。

「この杖と言うには随分な太きと、武骨なまでのフォルム。

これは間違いなく、アレじやろうて。のう？」

コルベールは、オスマンの後ろから顔をのぞかせるなり、怪訝な表情をして言った。

「・・・何ですか？　これは？」

居たたまれない空気の中、魔王はポツリと言った。

「・・・スミマセン。　マチガイなく、マチガえました。」

「ツルハシ出してんじゃないわよ！」

使い魔に任せてはもらえないと、ルイズたちは魔王を蹴り転がしてローブを引っぺがし、もう一つのそれらしき『杖』を手にした。今度はルイズ自らがその手で布を解いた。

「そうよ、これだわ」

ルイズはフーケへの反撃の狼煙となったその杖を見て、満足げな声を上げた。

「・・・これが、ねえ・・・」

キュルケは怪訝そうに言った。オスマンは杖を覗き込んで、一目見るなりお墨付きを与えた。

「うむ、今度こそ間違いないようじゃの」

「おお、これこそ宝物庫で見たとの間違いありませんな」

教師ら二人に向け、キュルケは納得がいかない様子で口をはさんだ。

「でも先生方？　これ、とても杖には見えないですけど・・・」

ルイズはそれをはんと鼻で笑った。

「何バカなこと言ってるのよ。これはどう見ても杖じゃない！」

少なくとも、ツルハシに比べればぜんぜん杖よ」

「ルイズ、自分が何言ってるか分かってる？」

不本意なことに、本気で頭の心配をされたルイズは大いに憤慨した。

「ふん！　自分の感性の無さを棚に上げて、他人のこと悪く言おうだなんて、

あんたつてば本当に強情ね。これが杖なのは当たり前なのに、

そんなことも分からないのかしら？」

「なんですって？」

キュルケが睨み返す中、ルイズは胸を張って言い返した。

「これが何て呼ばれているか、忘れたとは言わせないわ。」



これが杖じゃなきや、どうして『破壊の杖』なんて呼ばれてるって  
いうのよ！

ね、これは誰がどう見ても間違いない杖ですよね？ オールド・オ  
スマン！」

オスマンは、ルイズの顔をしっかりと見据えて言った。

「は？ 何言ってるんじや。どこからどう見てもデカすぎじやろ。頭  
ダイジョブか？」

「」

ルイズは、口から魂が飛び出したかのように、茫然として固まって  
しまった。もしかしてフーケとの戦いで頭でも打ったか？と、しきり  
に心配するオスマンを他所に、コレベールは、いや私も杖というより、  
どちらかという大砲のようだなあとは思っていたのですなどと、感  
慨深げに語った。

「しかし、その口ぶりからするとオールド・オスマン、これはやはり杖  
ではないのですね？」

「おお、そうじゃともコレベール君。これはまさしく大砲じやて。

火を吹き玉放つ、紛うことなき大筒じや」

オスマンはそう言うのと、破壊の杖を懐かしそうに見つめた。

キュルケは意味が分からないとばかりに声を上げた。

「お聞きしてもよろしいかしら、オールド・オスマン」

「何かね？」

「これってつまり、杖じゃなくて大砲なんですよね。

『破壊』はともかく、どうして『杖』なんて呼ぶんですの？」

彼女の疑問にコレベールも同調した。

「ほう！ 確かにそれは気になりますな。それに、こんな手軽に持ち  
運べて

威力も凄まじい大砲など、聞いたことがあります」

もしこんなものが広まればハルケギニアの歴史が変わりますぞと、  
研究家気質の彼は熱く語った。

「お主らの疑問ももつともじや。ミス・キュルケ、この破壊の杖の威力  
は見たじやろ？」

「ええ。気付いた時には、あんなに大きかったフーケのゴーレムが粉々になっていましたわ」

「ならば分かるはずじゃ。これはただの大筒ではない。大砲大国のゲルマニアにだって、

こんな武器は無かろうて・・・とても我らの手で作れる代物ではないのじゃよ」

「では、やはり?」

「コルベールが先走り気味に聞いた。

「うむ、これは『場違いな工芸品』の一種であろうと、ワシは考えておる。

遙か彼方、遠い世界のものと予想されておるが、詳しいことは全く分からぬ

超文明の産物じゃ」

「場違いな工芸品なら、私の家にもありますわ!」

「キュルケは興奮したように言った。

「本当に、不思議な話じゃ。遠い世界があるのはまだしも、その道具がどうやって

このハルケギニアに流れ着いたというのか? 分からないことだらけじゃよ。

「じゃが、いくら場違いな工芸品が珍しく希少なものとはいえど、

それだけで国の秘宝に認定されたりはせん。この破壊の杖が特別なのは、

「これが人と共にこの世界へと至ったからなのじゃよ」

「何ですって!」

「キュルケは大いに驚いたが、それ以上にコルベールの興奮は大きかった。

「謎に包まれた『場違いな工芸品』、それが人と共に現れたとなれば、その超文明の秘密が明らかになるではないですか! 今、彼はどこに!」

「コルベールにまくし立てられたオスマンは、ぽつりと言った。

「死んだ」

「な……！」

興奮に沸いていたコルベールは一転、言葉も出なくなってしまう。キユルケもタバサも、神妙な面持ちを作っている。今になって、ようやくルイズもどこかへ飛び出していた魂もとい正気を取り戻し、真剣な表情を作った。

「いや、正確には死んだと決まったわけではないが、あれに当たったわけだしの。

おそらくは……」

しばらくの沈黙の後、コルベールは静かに尋ねた。

「二体……何があったのです？」

オスマンはふむとつぶやくと、破壊の杖を手で撫でつつ、懐かしそうに思い出を語り始めた。

「昔話をしようかの。あれは今から36……いや140年前じゃったか。

まあいい、私にとってはつい昨日の出来事じゃが、君たちにとっては多分

明日の出来事じやろう。この破壊の杖には、ええと、何通りの名前があつたか、

うー……む……」

キユルケはコルベールに向かって、『このおじいさん、頭は大丈夫ですか』と、その表情で問い掛けた。だがコルベールは視線を返しつつも、ただただ首を振るばかりだった。

「まあいい。長話になってもいいかんし、掻い摘んで話すとうかがいの。わしがまだもう少し若かった頃に、森でワイバーンと出くわしての」

掻い摘みすぎだろうと皆は思ったが、彼らにとってはそれ以上に話の内容が衝撃的であった。

「ワイバーンですって！」

キユルケが信じられないといった様子で、恐れを含んだ声を上げた。ワイバーンは飛竜に勝るとも劣らない力を持つ幻獣である。しかも性質が悪いことに、気性の粗さが尋常ではない。そのため、ワイ

バーンに出くわして成すすべなくやられたメイジの話は枚挙に暇がなく、オスマンの話は驚きをもつて迎えられた。タバサですら、表情の変化に乏しいながらも目を見張っている様子であった。そんな皆の反応を他所にオスマンは、『あやつめ、噂通りに獰猛での』と、話を続けた。

「あれは若気の至りじゃった。ワイバーンに出くわしたのは偶然だったのじゃが、

その後がいかなかった。きやつのは足は速い、じゃから逃げようにも逃げ切れん・・・と、

そういうことを言い訳に、ワシは呪文でどうにか倒してしまおうと思つたのじゃよ。

良い自慢話にもなりそうじゃったしの」

「何と・・・！」

コルベールはオスマンのことを、普段から酔狂な人だとは思つていたが、無鉄砲なことだけはしないとばかり思つていただけに、今の話を聞いてただただ驚いていた。

「多くの愚かなメイジと同様に、ワシも慢心しておつたのかもしれない。始めの内は、きやつのは動きは速いがどうにかできんこともないと思つておつたのじゃが、

そう思つて攻撃しておると、突如そやつのが目が赤く光り出しての。ワシの攻撃に

本気で怒つたのか、ただでさえすばしこかつた動きが余計に速くなりおつた」

目を覆いたくなるようなオスマンの話に、皆、深く聞き入っていた。「そうなるからには、もう逃げ惑うので精一杯じゃや。決して手放すまいと、

自分の命と思つて大事に抱えていた杖も、遂には振り払われてしまったのじゃ」

『あの時は、わしの命もここまでかと覚悟したものじゃよ』等と、オスマンはひょうひょうと語つたが、聞く側にとってはただただ絶句するばかりの話であった。トリステインにこの人ありと言われた大メイ

ジ、オールド・オスマンといえども杖がなければただの人である。それでなくともメイジにとって杖は命だと、メイジは皆、幼い頃から口を酸っぱくして言い聞かせられる。特に、本当に命を懸ける機会の多い騎士や軍人は、万が一に備えて杖を複数持つ者もいるほどだ。そんな大事な杖をワイバーンの目の前で落としたりとなれば、それはもう『詰み』ではないか？ なぜこの老人はまだ生きているのかと、ルイズたちから驚嘆の眼差しを向けられるオスマンへ、コルベールは話の続きを促した。

「しかしオスマン殿、あなたがこうして生きておられるということは、その絶体絶命の状況をどうにか切り抜けたのでしょう？」

「おお、そうじやとも。まさにそれ、その時だったのじやよ。あの男を目にしたのは……」

「あの男？」

オスマンはそうじやと言ってうなずくと、目をきらきらと輝かせて、

興奮した面持ちで喋り始めた。

「わしが命を諦めようとしていたとき、あの獰猛なワイバーンに一人立ち向かう影が

あつたのじや。見たことも聞いたこともないような、異国情緒あふれる姿形の鎧を

着こんだ男じやった。しかもなんとその男、驚くべきことに杖を手にしておらなんだ！

大砲にはあまりに細身で軽そうな筒を携えたまま、そやつはワイバーン目掛けて

走り出したのじや」

「正気の沙汰じゃないわー！」

キュルケは思わず叫んだ。

「わしも、そんな装備で大丈夫かと思った。じやが男は、大丈夫だ、問題ないとばかりに、

きやつ目の前へと躍り出たの。そこからが凄まじかったのじや。

その筒から放たれる、恐るべき破壊の渦！ 一発撃つごとに木々は

燃え尽き、地は抉れ、

それはまるで破壊の化身が舞い降りたかのような光景じゃった。流石にワイバーンも

素早いもんじゃから直撃はせなんだようじゃが、それでも爆風に煽られるだけで、

きやつめが大きく傷付いていくのが分かった」

「つまり、その筒の正体が破壊の杖だったというわけですね！」

オスマンは、コルベールの言葉にうむと頷いた。

「しかもその男、どうやら歴戦の勇士であつたようでの。

ワイバーンにギリギリ当たるか当たらないか、いや絶対当たってるじゃろと

思うような距離でも、巧みにスライディングを駆使してやつの攻撃を避け続けての。

やつを撃つては離れ、また撃つては離れを繰り返したのじゃ。そうしてみるみる内に

あやつの頭や爪を目茶目茶に潰していき、拳句尻尾を千切り飛ばす始末じゃった！」

「そんなことって……！ 信じられないわ……！」

キユルケは、思わずため息を漏らしそうになりながら呟いた。

「いやはや、余程名うての狩人だったのでしようなあ」

いくら破壊の杖を携えているとはいえ、それを担いでいるのは生身の人間である。超人染みた男の活躍に、ルイズたちはまるで神代の伝説を聞いているかのような気分になった。

「わしはそれを見て、天の声を聴いたような気がしたもんじゃよ。

始祖は言っておる。わしはここで死ぬ運命さだめではないとな……」

しかしオスマンはそれを言うなり、顔を曇らせた。

「じゃが、それも限界が訪れての。また男が華麗にワイバーンの突進をかわすのかと

思っておったら、ついに一撃を食らって吹っ飛ばされてしまったのじゃ。

男はそのまま立ち上がれずに転がっておった。当然のことじゃろ

うて・・・」

キユルケたちも分かっていたこととはいえ、再び沈痛な面持ちにならざるを得なかった。

「わしにとつては運の良いことに、ワイバーンも相当傷ついておったのか、

そのまま足を引きずって何処かへ去って行きおった。わしは急いで彼に駆け寄った。

驚くべきことに、彼には目立った外傷はなかった。じゃが、あの怪力のワイバーンの

攻撃を受けて、ただでおれるはずもない。彼はもうぐったりして動けそうにもなかった。

わしは彼が意識を手放してはいかんと、必死に話しかけた。彼はうわ言のように、

まだ尻尾から剥ぎ取ってないだとか、三落ちは嫌だとか、意味のよく分からぬことを

呟いておったわい」

あれほど悔しそうな今際の言葉はついで聞いたことがない故、今でもわしの頭から離れぬのじやと言う老オスマンに向け、ルイズらはその心痛を察したようであった。ただ一人、魔王だけが何か言いたそうにもぞもぞした挙句、こそつと小声で呟いた。

「それって案外、数分後にはケロッと忘れてるやつじゃ・・・」

「なに不謹慎なこと言ってるのよ！ あんた、死んだらオシマイって言いたいわけ!？」

「いや、ある意味オシマイなのですが、意味がチガってるというか・・・」  
「無礼な発言はよしなさい!」

ルイズたちの小声でのやり取りを他所に、オスマンは話の続きを語り出した。

「当然、わしは彼を学院まで連れて行って、治療を受けさせようと思っただ。

わしは自分の杖を拾い上げる前に、彼にとつて大切なものと思い、破壊の杖を拾い上げた。そのわずかに男から目を離した隙の出来

事じゃった・・・

なんと今度は、ニャーニャー言う亜人の群れがわんさか現れての！」

彼の語る超展開に、思わずキュルケたちは目を白黒させた。タバサも、目をまん丸に見開いて、思わず口から言葉が漏れ出ていた。

「にゃー？」

「・・・猫？」

「いやしかし、猫型の亜人など、このハルケギニアでは聞いたこともありませんぞ」

首をかしげる彼らへ、魔王は非常に何か言いたそうにあーとかうーとか唸ったが、これ以上不謹慎なことを言わせまいと警戒するルイズに口を阻まれた。

「わしが啞然として亜人どもを見ておると、そやつらはわらわらとわし目掛けて

駆け寄って来ての。そうして、わしの手から破壊の杖を奪おうとしたのじゃ！」

あー、まー、そうでしょうねと魔王は囁いた。

「大切な恩人の形見になるかもしれないその武器を、どこぞの珍妙な亜人どもに

くれてやる謂れはない！　じゃが相手は小型の亜人とはいえ、ツルハシだか

ピッケルだかよく分からん道具を手に武装しておったから、

わしには逃げることにしか出来なんだ・・・」

『先に杖を拾っておればと、今でも悔やむわい』と、オスマンはたいそう悔しそうに語った。

「メイジにとつて、杖は命という訳ですな」

「まったくその通りじゃ。わしは大メイジとまで呼ばれておきながら、

あの時まで杖の何たるかを分かつてはおらんのだ。『杖は命』という言葉の意味を

頭で分かつたつもりになりながら、本当の意味では分かつておらん



かったのじゃ・・・」

本当に悔しそうな表情を浮かべるオスマンの姿を、ルイズたちは大メイジからの尊い教訓として受け止めた。

「オールド・オスマンにもそんな時代があったのですね。

私、絶対に杖を手放さないことを誓いますわ」

「うむ、そう言ってもらえると、わしも恥ずべき自分の過去を

語ったかいがあるというものじゃ」

それを聞いた魔王も、遠い目をしながら言った。

「いやマツタク、武器は手放すモノではありませんな・・・死んだ後でも・・・」

「そうよね。死んでも手放さないという覚悟が、メイジの道を切り開くのよね！」

「いや、『破壊の杖』の持ち主に向けた話なのですが・・・まあ、いいです」

また不謹慎な事を言おうとしたと怒るルイズを傍目に、オスマンは事の顛末を語った。

「わしは逃げながらも、後ろ目に男の方を見た。するとなんと男は、巫人どもの手で

荷車に乗せられておった。そしてわしが止める間もなく、彼を載せた荷車は

巫人と共に茂みの中へと姿を消してしまったのじゃ・・・

ロバ・アル・カリイエには、化け猫が車に化けて死体を奪い去るといふ話が

あるそうじゃが、案外わしの見たようなことが関わっておるのかもしれない」

「ううむ。それは何とも、興味深いですな」

コルベールはそう口をはさんだ。

「ともかく、そうしてわしは生き残り、後には破壊の杖だけが残されたというわけじゃ。

その後わしは、王宮から派遣されたワイバーン討伐隊と共に森に戻り、辺りを

探し回ったのじやが、男も亜人も、影も形もなく消え失せておった。ただ深く傷付いた

「ワイバーンの存在だけが、ワシの話を裏付ける唯一の証拠となったのじや」

オスマンの話を聞き終えた一回は、その奇想天外な物語に誰も彼もがしばらく口を噤んでいた。

やがてキュルケが、その破壊の杖の来歴は分かりましたわと言った。

「でも、それがなんだって杖と呼ばれることになったんですの？」

オスマンはそれを聞いて、ふおっふおっふおと笑った。

「そりゃあおぬし、素直に魔法も使わん武器でワイバーンが撃退されたなどと言っても、

なかなか信じては貰えんじやろ？ よしんば信じられたとしても平民の道具と侮られ、

どうせいい加減な扱いをされるに決まっておる。だったらいっその事、杖ということに

して保存しようと思つたのじや」

なーに、ただの棒きれですら手にして歩けば杖となるのじやから、これだって棒状だし問題なからう？ オスマンは堂々と、そう言いきった。ルイズは非常に不満そうな、複雑な表情を浮かべたが、一方でコルベールは破壊の杖を惚れ惚れと見つめながら、賢明な判断でしたとオスマンを褒め称えた。

「しかしこう言つては何ですが、オールド・オスマン。こうして結局、学院長の手元に

この破壊の杖を置いておけると分かってさえおれば、わざわざ扱いを気にして

杖と名付ける必要もありませんでしたな。我々の手で大事に仕舞っておける訳ですし……」

「とんでもないわい。これが秘宝に認定されなければ、アカデミーでの調査も

出来んかったし、学院で管理するにしても補助金一つ出なんだろう

て」

オスマンは白い長ひげをさすりながら言った。

「それに問題はそれだけではないわい。これがただの大砲として

秘宝に登録されるとどうなるか？ 分かるかの、コルベール君」

「は、や、いえ私にはさっぱり……」

コルベールは頭を掻きながら、そうやって言い淀んだ。

「君も研究ばかりではなく、こういうことも勉強せんといかんぞい。

よいか、この破壊の杖はトリステインの未来のためだけでなく、わしにとつても

大事な代物じゃ。じゃからわしの目の黒い内は、学院の宝物庫で大事に保管もする。

しかし、やがてはわしもこの世を去るじゃろう？」

「や、まあ、それはそうですが……」

まだオスマンはぴんぴんしているようには見えるものの、既に彼は100歳とも200歳とも噂される程の老メイジである。そんな彼の死後を見据えた発言に、コルベールはたじたじになるしかなかつた。

「それでじゃ、もしそうなった時これを大砲と扱っておったのでは、先ほども言うたように

魔法と関係ないからと言って、価値の分からぬ役人どもに舐められるからのう。

そうなったが最後、金を惜しんだあやつら目によって、この破壊の杖は売り払われて

しまうじやろう。この杖が学院に置かれているかどうかなど、関係ないのじゃよ」

「むう……貴重なお宝が、見知らぬところへと渡ってしまうわけですか」

コルベールの言葉に、オスマンはゆっくりと首を横に振った。

「それぐらいなら、まだましじゃ。この手の品に目がない好事家連中の中には、

場違いな工芸品を単なるおもちゃか何かと勘違いしておる輩も多

い。

もしこれが、そんな者の手に渡ったら最後じゃて・・・  
やれ、飾るには大き過ぎるから二つに切ってしまうおうだとか、見栄  
えがしないから

錬金で真鍮製に変えてしまおうだとか、そんなことは平気で行われ  
るわい」

「なんと！ そんな馬鹿げた話が・・・！」

コルベールは、信じられないといった表情で、顔を固まらせてし  
まった。

「学院の本分は、まだ幼いメイジを教え育むことじゃが、それも全ては  
未来のために

行っておることじゃろ？ それなのに、遠い将来、きつと役に立つ  
であろう代物を

手にしながら、それを台無しにするようではいかん。じゃからの、  
多少手間は掛かったが、

アカデミーにいるわしの教え子に相談して、これは杖ということに  
しておいたのじゃ。

それならば、名前を見ただけで無下に扱われるということもあるま  
いで

「いやはや、オスマン殿がそこまで深く考えておられるとは、思い至り  
ませんでした」

「学院長って、色々大変なのですわね」

皆は口々に、感心の声を上げた。

「おお、そうじゃとも。まあ、国中の貴族の子弟を預かっておるのじゃ  
から、

これぐらい出来なくては務まらないの。

いやはや、大分長話になってしまったな。これも年寄りの悪い癖  
じゃて。

さて、他に何か聞きたいことはあるか？ ついでじゃし、今なら何  
でも話すぞい？」

オスマンの言葉に、ルイズはおずおずと手を挙げた。

「あの、よろしいでしょうか」

「なんじゃね？」

ルイズは歯切れ悪く言葉を返した。

「あの、これは、別に学院長を責めている訳ではなく、純粹に後学のために」

聞いておきたいんですけれども・・・」

「構わんよ。遠慮はいらん。話してみるがよい」

「土くれのフーケ、いや当時はロングビルを名乗っていたんでしようけれど、

彼女はどうかやってこの学院に入り込んだのですか？」

「ふむ」

「だって、彼女は学院長が採用なさったのでしよう？」

「やっぱり、高貴な家の出を装って近付いてきたのですか？」

「そこへ、すかさず彼女の使い魔が口をはさんだ。」

「いや、ですからフーケは妹のロングビルに成りすまして・・・」

「その話はどういいわよ！」

「妹じゃと・・・？」

「なんでもありません！」

ルイズは誤魔化すように声を張り上げた。オスマンは訝しんだが、コルベールからも言葉を掛けられたことで、彼の意識はそちらに向けられた。

「彼女の疑問、私も気になります。今回の一件、フーケを捕まえられたからこそ」

「良かったようなものの、もし破壊の杖をそのまま盗まれておれば、当学院の」

「大きな汚点となるところでした。再発防止のためにも、職員採用方法を」

「見直さねばなりませんからな。是非、お聞かせ願いたいものです。」

「一体、彼女はどんな伝手で学院長の秘書に？」

「コルベールに迫られたオスマンは、エヘンと咳ばらいをしてから短く答えた。」

「バーじゃ」

「は？ バーじゃ？」

「だからバーじゃよ、バー。・・・酒場じゃ」

皆が意味を理解し終えるのに、しばらくの時間が必要であった。

「・・・は？ いえ、酒場？ あの街中にある？」

「そりやそうじゃろ。畑や草原のど真ん中に、ポツンと建つとる酒場などあるかね？」

コルベールは激発して言った。

「酒場!? まさか、誰かから紹介を受けた訳ではないのですか!？」

ゴロツキもいかさま師も集まるあの酒場で？」

そんなもの、トラブルが起こって当然ではないですか!」

信じられないというような顔をするコルベールに向けて、オスマンは落ち着き払って答えた。

「君、確かにむしろ貴族の社会では、人からの紹介というものが重要じゃ。

相手が信用出来るかの秤として、多くの場合、それが採用の前提となっておる。

しかし考えても見たまえ。有能な人材というものは、市井に埋もれておる。

君が何時も舌鼓を打つとる、この学院の料理を見よ! あれを作っておるのも、

誰かから紹介された者なんかではないわい!」

オスマンの啖呵に、コルベールはうつとたじろいだ。

「いや、まあ、確かにマルトー氏を連れて来たのは、学院長のお手柄というものですが・・・

しかしそうなると、今回はその学院長の裁量に付け込まれたという訳ですな」

「うむ、残念なことにそうじゃの」

しばらく二人が黙り込んだのを見て、今度はキュルケが口をはさんだ。

「酒場での彼女の様子はどうでしたの? やっぱり彼女の方から

声を掛けて来たのかしら？ 仕事がないから、採用してくれって？」

「いやいや、流石にそこまで露骨に言い寄ってくるもんを相手にはせんよ。」

腹に一物抱えておるのがバレバレだしの。思えばそこも彼女の巧みなどころじやった」

「と言うと？ 一体どんな巧妙な手口で、人を見る目に定評のあるオスマン殿を騙したのですか？」

コルベールは真剣な口ぶりで、そう問い質した。

「店で仲良くして顔なじみになってから、ふとした機会に彼女が漏らしたわけじゃよ。」

実は、もつと実入りの良い仕事が無いか、探しておるとな。じゃから、自分は何時までも

この店にいられる訳じゃあない、いつかあなたにもお会い出来なくなるよ……

そんな風にしおらしくされたら、つい力になってやりたくなるじゃろ？」

「ん？ んんん？ それは、冷静に考えればちよつと怪しいというか……」

コルベールの疑念の声は、オスマンの一喝で遮られた。

「バッカモー……ン!! 想像してみるが良い！」

あの、見目麗しいミス・ロングビルがじゃよ？

物憂げな様子でため息を付きながら、寂しそうにしておるのじゃ。

これで何も感じないなど、おぬしの血は何色じゃ！」

コルベールはオスマンの抗弁を聞いていて、自分もミス・ロングビルの魅力にくらりと来たことを思い出した。そういえば、彼女と会話するのが楽しくて、宝物庫の弱点などをべらべらと喋っていたような気もする。

「いやはや、流石は学院長！ 慈しみ深くあらせられる！」

教育者たるもの、やはり暖かく広い心でもって人と接しませんとな！」

「おお、そうじゃとも！ 何だ、分かっておるではないか、コルベール君！」

二人の妙に浮ついた声でのやり取りに、ルイズたちはじつとりと冷たい眼差しを向けた。

「いや、しかしそうなると、今回は学院の職を回したのが失敗だったということに

なるのでしょうか？ せめて、他所への推薦に留めておくべきでしたな」

「そうは言ってももう。自分のところで雇えないと思う相手を、他所には回しておけんじゃろ？ 何よりわしは、彼女なら学院での仕事を

上手くやつてくれると思っていたのじゃよ」

「ああ、確かに彼女は優秀でしたな。事務仕事ができるのはもちろん、何より魔法の腕が

ピカイチでしたからな。よくこんな人が、他所へ行かずに学院へ来たものだ

思ったものです。まあ、それも今思えば当然だった訳ですが……」  
コルベールの言葉の途中で、オスマンの眉間に皺が寄った。そして年寄りとは思えぬ勢いで、再びの怒鳴り声が上げられた。

「バカタレー……ッ!!」

「え、ええ!?!」

コルベールは、何がオスマンの琴線に触れたのか分からず、おろおろと狼狽えた。

「魔法の腕じゃと？ 確かにそれは重要じゃろうて。魔法が上手く使えるものに、

教職は務まらんからの。じゃが！ 学院に勤めようという者には、もつと大切に尊く、

欠かすことの出来ない資質があるのじゃ。わしは何も魔法が使えるだとか、

単に可哀想だったからとか、そんな理由だけで彼女を採用したのではないわい！」



コルベールは畏まった様子で、オスマンの言葉を受け止めた。

「これは大変失礼致しました。若輩の身にして、考えが至らずに申し訳ありません。」

して、その最も重要な資質とは、何なのですか？」

オスマンは目を細めて言った。

「それは、直接目に見えるものではない。手に抱くことも出来ぬ。

じゃが、世界中をあまねく風のように包み込んでおり、

この世の如何なる魔法よりも強い力となるものじやて。つまり……」

コルベールはごくりと喉を鳴らした。

「LOVEじやよ」

「……は？」

「ラヴじやよ、ラヴ」

「……」

「愛とも言う」

コルベールは、目元を指で押さえながら言った。

「あー、まあ、言わんとすることは分からないでもないですが、

随分抽象的なことを言われるのですな」

「じゃが重要じやろ？」

「ええ、まあ、そこは分かります、そこは……」

生徒に愛情を持って接するのは、それはそれは大事なことだと、

そういう意味では分かりませんが……しかしそれとミス・ロングビルと、

一体どうやって結びつくというのですか？」

「そりやあ、アレじや」

オスマンは言った。

「彼女、店で皿を運んできた時にお尻をさすつても、怒らなんだ」

「「は？」」

皆、あまりの内容について口から声が漏れ出ていた。

「何で？」

「分からんか？ わしのようなよぼよぼのじじいが触っておるのに怒らんのじゃぞ？」

普通、嫌な顔の一つもするもんじゃて…… それどころか何と彼女、ニツコリと

微笑みを返してまできよつたのじゃよ！ こんなに慈しみ深い愛をわしは知らんわい。

惚れてると思うじゃろ？ まさしくLOVEじゃよ、LOVE！」  
まあ、採用した途端に冷たくなってしもうたんじゃがの、とオスマンは寂しそうに言った。

「……………」

オスマンの回答は、ただただ冷たい沈黙で迎えられた。

「少なくとも一つ言えるのは……………」

コルベールは軽蔑の眼差しとともに言い放った。

「学院長の大事にしておられる『LOVE』は、ベクトルが間違っております。

主に、ひわいな方向に」

「私からもご忠告申し上げますわ」

キュルケも釣られて声を上げた。

「お酒の場で始まる愛は遊ぶもの。遊ばれるものではなくってよ？」

オスマンは自分の意見が思いつ切り否定されたことで、肩を落とすてしよげ返った。

「ふむ、わしもまだまだじゃのう。若いもんの意見を聞くと勉強になるものじゃ……………」

のう、モートソグニルや」

「チュウツ！」

オスマンの肩に一匹のネズミが顔を出し、一声鳴いた。

それを見た一同は、ぎよつとして身を固まらせた。

「お、オスマン殿？ そのネズミは…………？」

「なんじゃね、コルベール君。まさか君、わしの使い魔を忘れたとは言わんじやろうな。

このかわいい、かわいいモートソグニルのことを！

こいつに対する愛情だけは、誰にも否定はさせなくて・・・！」

「そ、そう言うことじゃありません！」

「じゃあ、なんだと言うんじゃね」

「そのネズミ、真つ黒ではないですか！」

丸々太った黒ネズミは、チ、ユウー！ とふてぶてしい鳴き声を上げた。

オスマンはコルベールの指摘を受け、細めていた目をカツと見開いた。

「カアーーーーッ！ まったくおぬしというやつは！ 至らんところがあるといえど、

少しは見どころのあるやつじゃと思っておったのに、見損なつたぞ！！」

「ええええええ!!」

なぜそこまで言われたのか分からず、コルベールはそれまで以上に狼狽えた。

その様子を見守っていたルイズたちも訳が分からず、目をぱちくりさせた。

「まったく、おぬしがそんな奴だと知っておったら、

この学院の門をまたがせはせなんだものを！」

あつち行け、しっし！ と、自分を邪険に扱うオスマンに彼の本気さを理解したコルベールは、

慌てて口を開いた。

「お、お待ちください、オールド・オスマン！ オスマン殿の気を害したようなら

申し訳ありません！ しかし、しかし一体どうして私は怒られたので!?!」

「分からののか！」

「ははあ！ 常日頃よりお目を掛けて頂きながら、本当に申し訳ありません！」

頭を低く垂れたコルベールの姿を横目に、しぶしぶといった様子でオスマンは答えた。

「これじゃから、自覚のない奴は嫌なのじゃ。」

お主、今LOVEとは真逆のことを行いよった」

「は、すみません！ 気付かずそのような事を仕出かしてすみません！」

「お主、今、息を吐くかのようにネズミ差別をしておった・・・！」

「いやはや、私としたことがそんなことをするなど甚だ恥ずかしいばかりで、

差別など・・・え？」

コルベールはポカンとした表情になって、顔を上げた。

「オスマン殿、今、何と？」

「お主はさつき、ネズミ差別をしたのじゃ！ わしの使い魔を、肌の色で差別しおった！」

コルベールは、先ほどまで真っ青にしていた顔を真っ赤に紅潮させると、猛烈な勢いで反論し始めた。

「何かと思えば、なんと馬鹿げたことを・・・！」

オスマン殿、自分の使い魔取り違いを指摘されたからといって、そこまでして自分の非を認めたららないとは！ 大人げないですぞ！」

「何を言うか！ こいつは正真正銘、わしの使い魔じゃ！

それをやれ、黒いからと言ってこんなのモートソグニルじゃないなどと言っておって！」

とんだ差別主義者じゃ！ 恥を知るがよい！」

いや、それはただ分別を無くしているだけなのではと、ルイズたちは心の内で思った。

「恥を知るのは、そっちの方ですぞ！ 私もこの学院に勤めて幾年と経っておりますが、

オスマン殿のネズミは白！ 黒かったことなど、一度もありませんぞ！」

「カアアアア！ 分からん奴じゃ！ それが差別じゃと言っておるのじゃ！」

ずっと見てきたわしの使い魔が白かったから、じゃからモートソグ

ニルは白ネズミで

無くてはならないじゃと？　もう、その考え方が差別的だと言つてるんじゃない！

お主、無意識的に黒ネズミを白ネズミの下に見ておるな？

どうせお主も、白ネズミより黒ネズミの方が不潔だとか思ってる口なんじゃろ？」

「そう言う問題ではありません！

白いネズミが黒かったら、そりゃあもう別のネズミでしょう!？」

コルベールの決定的な一言に、それまで息を飲んで目の前のやり取りを見守っていたルイズたちも声を上げた。

「あの、オールド・オスマン？　私も、学院長の可愛らしい使い魔をお見かけした時は、

白かったと覚えているのですが!？」　ねえ、あなたたちはどう?」

「へ、わたし!?　・・・ええ、白かったはずよ」

「白」

この場にいる、自分以外の誰もがモートソグニルを白と思い込んでいた。オスマンは深い深いため息を付いた。

「嘆かわしいのう。黒いぐらいで皆、お前を見分けることが出来なんだとは」

オスマンに喉元をくすぐられたネズミはチュウと短く鳴いた。

「しかし、モートソグニルは白でしょう?」

「馬鹿を言うでないわ!　そもそもの話、わしのネズミが白いだなどと

一体誰が決めたというのじゃ?」

「いや、そんなことを言われなくても・・・」

「ほれ見よ!　本のどこを探してみても、そんなことは書いておらんわい!」

オスマンはそう言って、青表紙の本を持ち上げた。

「知りませんよ、そんなこと!　大体、何の本ですかそれは!」

「580エキューで買ったのじゃ」

「高つ!?　エキュー金貨ではなくスウ銀貨の間違いでは?」

・・・って、そんな街中で売ってるような大衆小説のことなどどうでもよろしい！」

「おいおいコルベール君、その言い草はないじゃろう。」

これにはこの世界の全てが描かれておると言うに・・・  
これに書かれていることこそこの世の真実で、これに書かれていないことは

如何様にでも読み手に解釈をゆだねられておるのじゃ」

「何をおっしゃりたいのかサツパリ分かりませんが、じゃあ何ですか？」

コルベールは言った。

「その本に書かれてきえないのならば、

実はオスマン殿がゲイだったとしても構わないと？」

オスマンはゴホンゴホンとむせ返った。

「な、何ということと言うんじゃ！　いくらワシが女にモテずとも、

男に走りたくなんか無いわい！　あり得んことを言うでないわい！」

「じゃあネズミはどうなのです。白が黒に変わる訳ないでしょう！」

「それは、きつとあれじゃろう。煙突の中でも通って、黒く汚れてしまったんじゃろうな」

「いや、そのネズミの色つやは、そんな風には見えないのですが？」

「じゃあ、アレじゃろ？　きつと今までが白く汚れておったのじゃ！」

「は？　白く汚れる？」

「きつと、小麦粉が何かで汚れておったのじゃ！　小麦袋の中で遊ぶとは、

こやつめ中々いたずらっ子じゃのう」

「それ、マルトー氏に聞かれたら殺されますよ」

コルベールは、うんざりとした顔で言った。

「まったく、そもそもどうして色すら変わっているというのに、それをご自身の使い魔だなどと思うのです？」

オスマン殿にはネズミの顔に見分けがつくのですか？」

「簡単なことじゃよ。わしのモートソグニルは、小指の先が欠けておってな・・・」

オスマンはそう言うと、肩に乗った黒ねずみに顔を近づけ、その小さな前脚をまじまじと見つめた。一、二、三、四、…五本、そろつている。

「誰じゃお前は―」

黒ねズミは、ぢゆうづつ！と鳴きながらオスマンの肩を駆け下り、そのまま部屋の片隅に逃げ去っていった。呆気に取られてオスマンを見つめる皆の視線の中、彼はよろよろと歩きながら、疲れ果てたような声を出した。

「参つたの。どうやら、またモートソグニルがどこかへ行つてしまつたようじゃ。

ああ、心配じゃ。この間、生徒の猫に食われそうになつたばかりじゃというのに」

「…」

皆は微妙な顔をしてオスマンを見つめていた。

「うーむ、また探して貰わんといかんな」

そう言うとオスマンは、執務机の上に置かれた呼び鈴を手に取り、りんりんと鳴らした。

「ミス・ロングビル！ ミス・ロングビルはおらんか?!」

ルイズたちは、えつという表情を浮かべた。これは一体どういうことかと、彼女たちがコルベールに顔を向けると、彼はあちやあという、見られてはいけないものを見られてしまったような、そんな悔いのある表情を浮かべていた。りんりりんりんと鐘の音が鳴り響く。

「ミス・ロングビル！ どこじゃ？ 近くにはおらんのかね？」

「…オスマン殿」

コルベールは険しい顔をして言った。

「ですから、ロングビル殿の代わりとして、私はここにおるのです」  
「馬鹿を言うな。おぬしのようなさえないハゲ頭に、ロングビルの代わりが務まるものか。

君と彼女の共通点など、婚期を逃しとることぐらいしかないではないか！」

「な…」

あんまりな暴言に絶句したコルベールを他所に、キュルケは思わず尋ねていた。

「あ、あの、オールド・オスマン？」

「何じゃ？」

「その、・・・冗談、ですわよね？」

「・・・？ 一体何がじゃ？ とかく世はすべて冗談のようなことばかりじゃて・・・」

それにしてもおかしいのう。普段なら、呼べばすぐに来てくれるんじゃないか・・・」

顔を強張らせたキュルケの前で、オスマンはまたよろよろ歩くと、ふと思いついたように言った。

「そういえば、取り返したという破壊の杖を見せて貰っておらんのだ。見せてくれるかの・・・おおう！ もうすでに机に置いておったか！

とろくさい学院の教師どもと違って若い子は話が早い。

いやはや、懐かしいのう！ この杖は確か 36・・・いや140年前じゃったか・・・

わしにとつては昨日の出来事じゃが、君たちにとつては・・・」

オスマンはその虚ろな瞳で虚空を見つめたまま、ベラベラと聞いたような思いつ話を喋り始めた。彼の明るい声音が、より一層の異常さをルイズらに印象付けた。コルベールは深刻そうな表情で

ルイズらに向き直り、オスマンの耳に入らぬよう小さな声で事情を告げた。

「オールド・オスマンは、信頼していた秘書に裏切られたことが余程ショックだったらしく、

実は先程からこの調子なのだ」

ルイズらは何と言つていいか分からないといった困惑の表情を浮かべ、お互いに顔を見合わせた。

「あまりこういう事情を生徒に明かしたくはないが、オスマン殿の力で

回されている予算のこともある。どうかこのことは内密に・・・」



「あり得ぬ！」

コルベールの言葉は、突然のオスマンの叫びでかき消された。その声の大きさに、皆がビクツと震えた。

「あり得ぬ、おお、始祖は何と残酷なのか・・・」

ミス・ロングビルが、彼女がフーケだったじやと！

彼女が捕まるじやと・・・？」

「・・・ミス・ロングビルを余程信頼していたのね」

キュルケがしんみりと言うと、一同は少し暗い顔をして俯いた。

「そんなことが、そんなバカなことがあつてたまるものか！

あのお尻をもう二度と触ることが許されぬとは!!」

「・・・」

「盗みをやるほど金に困つておつたじやと？」

カアーツ！ 知つてさえおれば、幾らでもわしの財産を投げ打つたものを！」

オスマンはそう叫ぶなり、押し黙つて窓辺によろよると歩いて行った。

そして窓の外を眺めながら、ぶつぶつと弱々しい独り言を続けるのだった。

「どうか」

静かになつた部屋にコルベールの声がよく響いた

「どうか、この件は内密に頼む！」

彼は深々と頭を下げた。

「もちろんですわ、ミスタ」

キュルケが冷たく言い放つた。

「こんなの、在校生にとつても大いに恥ですもの」

ルイズとタバサも、その言葉に頷いて同意を示した。

ただ一人、魔王だけが彼女の厳しい物言いに抗議した。

「そんなことをお年寄りに言うものではありません。

見てください、あのYOLLO YOLLOな姿を！ かわいそうとは思わないのですか!？」

そう言つて魔王は、かの哀れな老人を指差した。

オスマンは皆の視線に気付くこともなく、今なお一人でつぶやき続けていた。

「わしは残りの人生、あと何回お尻を撫で回すことができるのじやろうか……？」

こんな仕事をしておつては、おちおちナンパも出来んわい。

いつそ辞めてしまおうかの。人生は一度きりじやて……！」

「私には、人生を謳歌しようとしているようにしか見えないわよ！」

魔王の反論はあっけなく退けられた。

まあまあと、コルベールがルイズらを諫めた。

「あんなボケ老人のことなど放っておきましようぞ。

学院長はこんなになってしまっているが、今晚はフリッツの舞踏会。

主役はなんとといっても、フーケを捕らえた君たちですぞ！　しつかり楽しんできなさい」

キュルケは、浮かない顔をして問うた。

「しばらくしたら、治るわよね？」

「……ええ、もちろんです」

コルベールは、不安になるような笑みを返した。

「ま、まあ、とにかくこうしちやいられないわ！　早く準備しましよ！」

ほらタバサも！と、キュルケは彼女の手を引いて、扉に手を掛けた。

「ルイズも、そんなボロボロの服着たままじゃダメよ！」

彼女たちは、その場から逃げ出すように走り去っていった。

ルイズは黙って、自分の薄汚れたローブ姿を見下ろした。

「確かにこんな格好のままじゃ、大恥かいちやうわね。私も早く着替えないと」

ルイズはそう言うと、魔王に顔を向けた。

「あんたもしつかりした格好で準備してきなさい。服はあるかしら？」

「ダイジョーブです！という自信満々な魔王の態度に不安になりながらも、

ルイズは部屋を辞そうとした。

「おお、コルベール君！　なんとということじゃ！」

学院長の再びの叫びに、ルイズは思わずビクツとして、扉に伸ばした手を引っ込めた。

「何ですか、オールド・オスマン？　下らない話ならば・・・」

「彼女は秘宝を盗むほど金に困っておった、ということとはじゃよ？」

コルベールは息を飲んだ。先ほどまでのよぼよぼな姿が信じられないと彼は思った。

今話を続けるオスマンの瞳には、知性の輝きが灯っていた。

「もしわしらが上手く立ち回ってさえおれば、あんなことやこんなこと、

もしかしたら、あのぱふぱふだって出来ていたのかもしれないのじゃよ！」

「あ！　ああああっ！　何てことだ！　オールド・オスマン、やはりあなたは

ボケても天才・・・！　あつ・・・」

いい歳こいたコルベールは、まるで叱られる少年のようなおどおどした様子で、

ルイズの顔色を覗った。

「失礼しますっ！」

学院長室の扉は、大きな音を立てて閉じられた。

呆然とするコルベールを他所に、オスマンはその叡知を語った。

「のう、コルベール君。わしは間違っておった。こんな筒切れなんかより、

発育の良い女性たちこそ、我らの最大の秘宝とは思わんかね？」

コルベールは誰に聞かせるでもないため息をついた。

「・・・それで、あなたは何でここに残っているのです？」

何か聞きたいことでもあるのですか？」

コルベールは力なく魔王に問い掛けた。

「いえいえ、大した用事ではないのです。ルイズ様にキュルケ嬢は

シュヴァリエの爵位、

そしてタバサ殿は精霊勲章ですか。いやはや、大変ヨロコバシイ」

「・・・心配しなくても、申請は私の方からちゃんとしておきましょう」

「あ、イエ、そのことではなく・・・」

「そのことではなく？」

首を傾げたコルベールに向け、魔王はイイ笑顔で尋ねた。

「私には、何をくれるのですか？」

やはり、この学院エリアの支配権とかイイですね等と嬉しそうにはしゃぐ亜人を前にして、

コルベールは深い深いため息をついた。

## STAGE 21 魔王と踊ろう

無数のろうそくの明かりを受け、煌びやかに輝くシャンデリアの下に、大勢の着飾った生徒たちが集まって来ている。ここ学院のホールでは、皆が待ちわびたフリッツの舞踏会が、今まさに始まりつつあった。今朝方は開催が危ぶまれたこの催しも、フーケの一件が迅速に解決したことで、予定通り執り行われる運びとなったのである。生徒たちは、何時も以上に豪華な食事の置かれたテーブルの周りで、皆との歓談にふけりながらも、早くダンスタイムが始まらないだろうか、そわそわしていた。

トリステイン魔法学院ではこの種の舞踏会を、生徒たちが社交を学ぶためという名目で開催している。だが、生徒たちにとって重要なのはそんなことよりも、この舞踏会が普段気になっている相手と接点を持つための貴重な機会であるということだった。また既に思いを寄せ合う相手がいる者にとっても、学生の身分でその仲を更に深め合い、確実なものにしていく上で、この舞踏会は欠かせないのだった。このホールに集まった大勢の生徒たち、そして時に教師までもが、思いを寄せる相手との甘い一時を夢見ている。だが一方で、そんなロマンスに満ちた会場のムードの裏には、あの人は自分に振り向いてくれるだろうかという不安や、この大切な機会に相手の前で上手く振る舞えるだろうかという緊張も、隠されているのだった。

お目当ての相手がいつ来るだろうかと待ちわびる者から、恋のライバルが自分より魅力的な姿で現れないかと気を揉む者まで、様々な思惑が入り混じった視線が、新たな入場者には向けられる。その視線に余裕たっぷりの笑みを返す者もいれば、緊張してそそくさと知り合いのいるテーブルに向かう者もいる。そうやって、ホールに一人、また一人と人が満ちていく。

俄かに、会場から騒めきの声が巻き起こった。今日の舞踏会における主役の一人、キュルケの登場だ。真っ赤なパーティ・ドレスに身を包んで現れた彼女は、彼女自身の燃え盛るような赤い髪色と相まって、まるで炎の妖精のようであった。キュルケはその美しく妖艶な姿

で、今日も今日とて、大勢の男子生徒の情熱を燃え上がらせようとしていた。普段ならば、それと同時に女子生徒たちの心を嫉妬で滾らせもするのだが、今日は少しばかり様相が違った。フーケを捕まえたという驚くべき功績に、女子生徒たちも皆思うところがあるのか、キュルケは珍しくも嫉妬より羨望の眼差しを多く受け取ることとなった。

一方、キュルケの後ろに続いてホールに入ったタバサもまた、人々の目を大いに引き付けていた。タバサが着て来た黒いドレスは、普段から謎の多い彼女のミステリアスな雰囲気を増すと同時に、その妙に大人っぽい恰好とのコントラストが、逆に彼女の少女らしい可憐さを浮き上がらせもしていた。その姿に胸を打たれた男子生徒たちは彼女をダンスに誘おうと試みたが、生憎タバサは、キュルケの様に声を掛けて来た生徒たちの品定めを始めるようなことはしない。普段からの無口さに加え、色気より食い気が勝っている彼女は、他人が引き止める間もなく、ぐんぐんとテーブルに近付いていった。そして椅子にちょこんと座ると、目の前に置かれた料理の数々を確保し始めた。ダンスを誘い損ねた生徒たちは苦笑すると共に、それでもなかなか彼女を諦め切れず、遠巻きにその姿をちらりと眺めては、密かにチャンスを窺うのだった。

二人の登場に沸いたホールが落ち着いてしばらくすると、また一人、ホールへと姿を現す者がいた。もう粗方、皆がホールに集まって来た時分、今度来たのは誰だろうと目を向けた者たちは、あっと息を呑み、それを目で追うこととなった。その者は、思わず息を飲むような美貌を備えているわけでも、胸がすくように格好良いわけでもない。だが普段の胡散臭げな様子が嘘に思えるほど、きつちりとしたスーツに身を包んで現れた彼は、生徒たちが望んでも出すことの出来ない、大貴族のような威風ある雰囲気をも身に纏って、その姿を皆の前に晒した。その堂々たる有様は、彼がその実、使い魔に過ぎないという事実を、皆に忘れさせる程であった。男子生徒たちは、自分には出来ないその立ち居振る舞いに、亜人相手とはいえしてやられたと、ちよつとしたショックを受け、女子生徒たちの一部は、自分の思い人もこれぐらい貴族然としていてくれればと、密かに思うの

だった。魔王は、黒髪のメイドが差し出したワイングラスを手に取り、周囲からの視線を満足そうに見返しつつ、ホールをゆつたりと歩き回った。貴族としての模範になりそうな威厳を見せつける魔王、それは普段秘められている彼のカリスマ故か？　ともかく、偉そうにすることに掛けては右に出る者のいない、そんな魔王の入場は、先の二人に負けず劣らず、大いに皆を沸かせたのであった。

魔王はホール全体を見て回り、生徒たちの引き攣った顔を一頻り楽しむと、今度は月明かりの照らすバルコニーを見つけ、そこに腰を落ち着けた。そして腰元に指していた剣を外して立てかけると、その鏢を少しだけ押し上げた。すると剣の唾と刃の間に設えられた金具がカタカタと揺れ、口のように動いた。

「よう相棒、楽しんでるみたいじゃねえか」

魔王はそれに頷く代わりに、手にしたグラスの中のワインを揺らした。

「相棒にもそんな立派な恰好が出来たんだな。お前さんは剣士って柄じゃあねえとは思ってたが、

貴族としてならやっていけそうじゃねえか」

「カンチガイしてはいけませんな。私は貴族どころか王なのです。

何せ私、魔王 王 ですから！」

魔王はそう言つて、フフンと笑った。

「相棒が魔王とはねえ。まったく、人は見かけによらねえもんだ。それに相棒と来たら、

あのチビっ娘と一緒にフーケを倒したんだって？　てーしたもんじゃねえか」

「フッフッフ、もつと我らが偉業をホメ讃えるがいいでしょう！」

調子に乗った魔王は、愉快な笑い声を上げた。普段は胡散臭いばかりのその仕草も、今日は格好も相まって、本当に魔王らしいものとなっている。

「ああ、相棒は凄いいとも。本当におでれーた。凄腕のメイジを相手取るなんて、

なかなか出来ることじゃねえよ。おめえさんと呼んだ娘っ子だっ

て、鼻が高いだろうさ。

「ただな、一つだけ気になることがあるとすれば……」

「ム？　なんですか？」

「デルフリンガーは少しばかり言い淀んでから、次の言葉を吐き出した。」

「俺の出番って、ねえの？」

魔王はハアーツと、深くため息を付いた。

「あのですねえ。そんなこと言っちゃってアナタ、まともに柄を握ったが最後、

私の力を吸い取ってしまうではないですか！」

「違うぜ相棒。確かに相棒の力は抜けるかもしれないねえが、それはおめえがただ一人でに

ルーンの効果で疲れていくだけで、俺にはなんの力も入ってこねえんだぜ？」

「知ったことですか！　私にとっちゃドツチでも似たようなもんです！」

デルフリンガーは、怒れる魔王にもめげず、彼へと頼み込んだ。

「まあまあ、そう言わず、俺にも活躍の機会をくれたって良いじゃねえか。フーケと戦った

相棒たちになら、今後もイロイロと剣を使う機会があるかもしれないだろう？」

魔王は、軽くため息をついてから彼に言い返した。

「いいですか？　そもそも魔王たるもの、平素より敵と直接刃を交えるようなマネは

しないモノなのです」

「でも相棒は、追い詰められたって戦えねえじゃねえか」

「それが分かっているなら、ドーしてあなたを使えというのですか！」

デルフリンガーは、再びの魔王の憤慨をまあまあとなだめつつ、彼に提案した。

「そうは言ってもよ、折角俺を手にしたんだ。これを機に戦えるようになればいいじゃねえか。」



力が抜けるつつつてもよ、案外体力付ければどうにかなるかもしれないぞ？」

「カンベンしてください。そりゃあ、まあ？ 私にワカワカしいのは否定しませんケド？」

でも流石に、魔剣片手にスタイリッシュなカンジでレッツ・パリイ出来るような

トシではないのです」

「かあー！ つれないねえ、相棒も！ だが許す、相棒だかんね」

「やつと分かってくれましたか」

だがしかしデルフリンガーは、まだまだ自分の売り込みを諦める気は無かった。

「確かに、相棒自身が俺をブンブン振り回すのは無理なんだろうさ。

でもよ、なんかあんだろ？ だってほら、相棒って魔王を名乗るぐらいなんだから」

「フム…… つまり誉れ高くもマガマガしき、この崇高なる私に、ナンカ使い道を考えて？」

「おうよ、そういうこった」

魔王は額に指を当て、しばらく考え込んだ末に言った。

「こういうのはどうでしょう？ 取りあえずあなたを宝箱にでも入れておくのです。」

「宝箱！ 伝説の俺には相応しい待遇だな。でもそれで、どうやって活躍しろってんだ？」

魔王はやれやれといった様子で、彼に言った。

「分かりませんか？ 困難極まるダンジョンの中に置かれた宝箱なのですよ？」

「剣の俺には、相棒の考えることあよく分からねえな」

「なら想像してみてください。先ずルイズ様がダンジョンを掘ったら、

そこにあなたを入れた宝箱を置きます」

「おうよ」

「勇者が来ます」

「それで？」

「勇者はマモノとの激闘を続け、その果てに一つの宝箱を見つけます」  
「胸が高鳴るつてもんだらうな」

「トラップかな？ いやでも、もしかしたらレアアイテムかも！」

そんなことを期待しながら、勇者は宝箱を開けます」

「いやあ、そんな期待されちゃ照れちまうな」

「なんと出てきたのは、二束三文でしか売れないボロい剣！」

「おい！」

「うるさく騒ぐので、下手したら買取拒否すらあるかもしれません」

「否定出来ないのが悔しいぜ！」

「何だよ、このしょぼい剣は…… とモチベーションがガタ落ちした勇者は、

動きに精彩を欠いて、魔物の攻撃する隙が増える。そんなことあったらいいな、

出来たらいいなというモーターにふけることが出来るというワケです」

「相棒が真面目に考えてないってことだけは、よく分かったぜ」

「他にどう使えと言うんですか！」

「武器として使えよ！」

それを言われた魔王は、ぐつと口ごもってから、その胸の内を明かした。

「いや、それは芸がないと言うか…… 何というか、マジメに使ったら負けかなって

思うんですよね」

「なんの負けだよ！」

魔王とデルフリンガーがそんなしようなしもないことを言い合う内に、ホールへと訪れる者がまた

一人現れた。門に控えた呼び出しの騎士は彼女の姿を認めると高らかに声を張り上げて、今晚の

舞踏会における3人目の主役の登場を告げた。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・

ラ・ヴァリエール嬢の

おな—り—り—!!」

寶石のように輝く可憐な少女の登場とともに、そつと音楽が奏でられ始めた。

ダンスの時間の始まりだ。

.....

ルイズの美しさに中てられた生徒たちが、彼女の元へと近寄っている。ルイズは、自分がからかわれるのではなく、本気で熱のこもった視線を向けられ、ダンスに誘われていることに戸惑いを覚えつつも、自分が今、確かにこの場の主役になっているのだということ強く自覚した。辺りを見回すと、キュルケはすでに一人目のお相手を決めたらしく、情熱的なダンスを踊り始めていた。その姿を遠巻きに見る大勢の男子生徒たちの姿から、今夜のキュルケはいったい何人と踊り、男の子たちを一喜一憂させていくのだろうか、ルイズは思いを巡らした。一方、タバサはどうしているだろうか、ルイズが目を向けると、タバサはテーブルの上の食事に夢中の様子であった。彼女には、テーブルのそばで何時話しかけようかとそわそわしている男子生徒たちの姿は目にも入らないらしく、豪勢な食事を前にその健啖ぶりを発揮している。ルイズはその姿を見て、タバサらしいわねと、思わず頬を綻ばせた。キュルケとタバサの彼女らしい振る舞いを見て、ルイズは普段の落ち着きを取り戻すと、皆からのダンスの誘いを断りながらも、誰かを探すようにホールの中を歩き回った。そしてついに探していた相手を見つけると、バルコニーに向けその足を進めた。

「いよっ！ 娘っ子じゃねえか！」

近付いてくるルイズに、一番に気が付いたデルフリンガーが声を上げた。ルイズは、魔王が貴族らしい華やかな刺繍の施された立派なシャツとコートに身を包み、どこへ出しても恥ずかしくない装いをしていることを見て取ると、目を見開いて驚いた。

「びっくりしたわ。あんたのその恰好、随分似合ってるじゃない」

「フフフ、魔王だって王です。必要とあらばご覧の通りですとも。」

「そう言うルイズ様も、よくお似合いですよ」

「あら、ありがとう」

「おうとも、相棒の言う通り似合ってるぜ！」

デルフリンガーも魔王に同意し、ルイズに陽気な声を掛けた。

「剣に褒められるなんて、変な気分ね。まあ、ありがとう」

「こういうの何て言うんだったか…… そだ！ 思い出した！ 馬子にも衣装ってやつだ！」

「喧嘩売ってんじゃないでしょうねえ！」

ルイズと魔王と一振りの剣は、そうやってしばらくの間、賑やかに話を続けた。

「それにしてもあんたの着てるそれ、一体どこから持って来たのよ？

舞踏会に着て来れるような

服なんて、簡単に貸し借り出来る様なものじゃないと思うけど」

「ああ、これですか。ホラ、私たちは宝物庫のお宝を一つ取り戻したワケでしょう？

ですからそのゴホウビに、宝物庫からお宝を一つ借りさせて貰ったというワケです」

「ええー！ じゃあその服って、相当由緒正しいものなんじゃ……」

「みたいですね。まあ？ 魔王に似合う服は、王族のもの以外アリエマセンけどね？

根気よく頼んだ甲斐あって、コルベールザ殿がウボアーという悲鳴を上げながら

貸してくれましたとも！」

ルイズは口をあんぐりさせながら、後でコルベール先生に謝っておかないと、と頭を抱えた。

ホールの音楽は、いつの間にか止んでいた。次の曲で踊ろうとする生徒たちはパートナーと手を重ねて、ホールの中央まで進んでいく。

魔王はその様子をちらりと見てから、ルイズに言った。

「シャル・ウイ・ダンス？」

「私と踊りませんかしつかりエスコートしなさいよね？」

ルイズはいたずらっぽく目を光らせた。

ルイズと魔王のダンスは、ホールに集った者たちの目を自然と引き付けた。初めはあの奇妙な使い魔がと、好奇の視線を向けていた者たちも、次第に二人の、美しくもどこか怪しきを感じさせる優雅な踊りに目を奪われていた。可憐な美しい少女とマガマガしくも風格ある使い魔のワルツは、正に舞踏会での主役と言うに相応しいものであった。

優雅にステップを踏みながら、ルイズはポツリと言った。

「ねえ、信じてあげてもいいわ」

「何をです?」

「あんたが、魔王だっていうこと」

「何と! まだ信じていなかったのですか!?!」

魔王は心外だという口ぶりをしながらも、どこかお道化た様子であった。

「今まで半信半疑だったけど……でもあのツルハシ……あんなに強いマモノを

作り出せるだなんて分かったら、信じるしかないじゃない」

それを聞いて、魔王は感極まったような顔を見せた。

「私、ルイズ様がそう言っただけ待ち望んだことか!」

「そんなに感動しなくてもいいじゃない」

「そうはいきません! だって、それはつまりですよ?」

魔王はルイズと共にくるりと回りながら言った。

「つまりその理屈で言うと、ルイズ様は破壊神様であることをも

お認めになったということが、確定的に明らか……」

ガスツとルイズのヒールが魔王のつま先に突き刺さった。魔王は声にならない悲鳴を

上げながらも、今晚威厳を保ち続けてきた意地があるのか、冷や汗を垂らしながら次の

ステップを踏み出した。

「何か言っただかしら?」

「な、なんでもゴザイマセン……」

「感謝はしているけれど、それとこれとは話が別よ！」

二人はまたしばらく、黙って手を取り合い、ゆったりとした音楽に合わせて舞った。

そうして少し時間を置いてから、ルイズは再び魔王に語り掛けた。「こうなるのは、アンタにだって分かっていたことでしょうか？　なのに、どうして私のこと

助けてくれたのよ。アンタを呼び出してから、割と冷たい態度ばかり取っていたと思うけど」

魔王は穏やかな微笑みをルイズに向けた。

「私は何もしていませんよ。全て、ルイズ様が、ルイズ様自身のお力で、

道を切り開いてきたのです。」

「そんなこと……」

ルイズはそう言ったまま、黙り込んでしまった。

「ルイズ様…… ツルハシを使ってみて、どうでした？」

少しは自分のチカラ、信じてみる気になれたでしょうか？

私も、チョットは頼りに思える存在になれたでしょうか？」

ルイズははつと魔王の顔を見た。二人は言葉を交わしつつも、その足先は互いに導かれて、

自然と次の場所へと向かっていく。

「私、召喚後の経緯はどうあれ、ルイズ様とは信頼関係を築いていきたいと思っております。」

二人はゆらゆらと漂う波のようにステップを踏んでは立ち止まり、また動いては立ち止まりを

繰り返した。

「そりゃ確かに、ルイズ様のお力が借りられなくても、世界征服の野望は抱けるでしょう。」

この世界は既に、地上にもマモノが豊富みたいですしね。彼らを率いて暴れ回るといいうのも、

一つの手なのかもしれません。当然、苦労はすることでしょうが、何たってジブンのユメのため

ですからね。勝算がいくら低かろうと諦めず、何度だって挑戦するつもりでもいます。」

ルイズはそれを聞いて何とはなしに、失敗するであろうと分かっているつも、魔法の

練習を繰り返した日々を思い出した。

「でもそんなのって、なんだか味気ないじゃあないですか。むなしじゃあないですか。

ここに呼ばれる前だって、その時その時の破壊神様と、二人三脚で進んできたからこそその

世界征服だったと思うのです。」

二人はくるり、くるりと体の向きを変えながら、次の場所へと足を踏み出していく。

「それに、私もルイズ様に『これは！』と思われるようなスゴイところを見せて

みたかったのです。もともと、実際に働くのはマモノなんですけどね」

締まらないわね、とルイズは微笑んだ。魔王も笑い返して、言葉を続けた。

「まあ、私としてはですね。ルイズ様には、魔法が上手くないからといって落ち込んでばかり

いるのではなく、目の前に立ちただかる限界とか、常識とか、そんな壁をツルハシでもって、

打ち破って行って欲しいのです。そんなもって、ルイズ様には笑顔になつて頂きたいのです。

やっぱり世界征服する以上は、楽しくやっていきたいですしね」

「あんたってば、本当に相変わらずね。……でも、今日だけは許してあげる」

ルイズはにっこりと微笑んで言った。

「ありがとう、魔王」

楽師の奏でる音楽は、少しずつテンポの良い曲に替わっていった。

二人は、傍から見ても楽しく思えてくるような、そんな見事な踊り

を披露し続けた。

「おでれーたー！」

バルコニーから、ひっそりと様子を眺めていたデルフリンガーは呟いた。

「てーしたもんだ！ 主人のダンスの相手をつとめる使い魔なんて、初めて見たぜ！」

デルフリンガーは思う。確かに、相棒が自分を振るうことが出来ないなんて、ホント惜しい。

そのことを思うと、しがない一振りの剣としては、ちよつと落ち込んでしまう。

だが彼は、無数のロウソクの明かりに照らされた幻想的なホールの中、妖しくも優雅に舞い踊る二人を見て、また思い直すのだった。確かに魔王は変わってるし、剣士としての見込みにも欠けている。だがデルフリンガーは、自分の思いもしないことをやってのける彼に、ちよつぴり心を震わされた気がした。

「ま、たまにはこんな相棒もいいか！」

デルフリンガーは、バルコニーに置かれたワイングラスごしに、二つの月が浮かぶ夜空を

眺めた。グラスを通して見る空は、残されたワインの赤紫色に染められ、マガマガしい姿を

浮かび上がらせていた。

「相棒が世界征服を成し遂げた暁には、こんな空でも広がるのかねえ？」

何にしても、娘っ子の手綱次第だな！」

彼はそんなことを呟きながら、今後の使い魔王従の行く末に思いを馳せるのだった。



STAGE 22 気がかりな悪夢から目覚めたとき

ルイズは小舟に揺られながら、ぼーっと空を眺めていた。遠くへ置いてきた喧騒は、もう耳に入らない。

ここには、誰も私を責める人はいない。

ひそひそと私のことを噂する人に煩うこともない。

私だけの、秘密の場所。

昔は家族と遊んだのに、今では皆から忘れ去られてしまった、中庭の池。

石のアーチには鳥たちが集い、東屋の建てられた小島が浮かんで湖面に影を映し出している。

美しい、けれどももうらぶれてしまった場所……

ずっと空を眺めていた彼女が気まぐれに下を向くと、湖面にはさざ波が立ち、複雑な文様が作り上げられていた。その細やかな波の行き着く先を目で追えば、湖岸にて初夏の花々が咲き乱れ、風に揺られているのが見えた。ルイズは、そっと目を閉じた。耳をすませば、小鳥たちのいきいきとした歌声が聞こえてくる。彼女のお気に入りこの場所では、ただただ静かに時間が流れていく。

目に入るもの、聞こえるものだけでなく、肌を撫ぜる風や穏やかな日差し、身体を揺らす

舟の揺らぎまでもが、私を癒してくれる。私の軋んだ心に、染み入ってくる。

ふと気が付くと、ルイズはまた自分の目に涙が溢れていることに気が付いた。

それと同時に、強烈な胸の痛みも彼女を苛んだ。

何時もこうなのだ。ここは、私だけの、私を優しく包んでくれる場所。

それでも、少し落ち着いたと思った自分の心に目を向けると、また唐突に悲しみが

大波となつて押し寄せてくる。そうになると、今度は周りであつて、私を包み込むように

癒してくれるもの全て、その優しさが、自身の無残な状況を余計に引き立たせるかのように

思えて、悲しみが一層込み上げてしまう。

声を押し殺しながら震える彼女の瞳から、大粒の涙がぼろぼろと零れ落ちていった。

「大丈夫かい？」

ふと、ルイズの弱った心をそつと救い上げる様な、優しい声が掛けられた。

「子爵さま……」

ルイズは顔を上げ、それから慌てて目元を拭った。

「こちらにいらしてたのね」

ルイズは何でもないことのように返事したが、彼女は泣き顔を見られた恥ずかしさで一杯だった。

子爵様。私に優しくしてくれる人。私の心に寄り添ってくれる人。

「また怒られたんだね？　大丈夫、僕からお父様に取り成してあげよう」

凜々しくて、かつこよくて、私の憧れの人。

お父様が決めた、私の婚約者。

そんな彼が、にこやかな顔で私に手を差し伸べてくれた。

私の頬も思わずほころんで、そつと彼の手に自分の手を重ねた。

そこに、びゅうと風が吹きつけた。

いつの間にか、照り付けていた日差しは陰り、小鳥たちのさえずりは鳴りを潜めていた。

小舟は風に煽られてゆつくりと向きを狂わし始め、ほの暗い池の奥底からは小さい泡が

昇ってきてはぼこぼここと、やけに不気味な音を立てていた。

「子爵様……！」

ルイズは急にぞつとするものを見つけて、顔を低く俯かせた。

「どうしたんだいルイズ？ なぜそう怖がって顔を隠すんだい？」

ワルドはゆっくりと舟を漕ぎながら、そう尋ねた。

「子爵様には見えないの？ 冠のように尖った頭で、マントを着た魔王が？」

ワルドは優しく諭すように返事を返した。

「ルイズ、あれはただの霧だよ」

湖面に風がびゅうと吹き、遠くから飛ばされてきた木の葉が舞った。

「カワイイルイズ様！ 一緒においでなさい！ とつても楽しいアソビをしましょう！」

地下には色とりどりのコケが咲いて、私のムスメは呪いの首飾りを揃えていますよ」

「子爵様！ 子爵様！ 聞こえないの？ 魔王が私にささやく声が！」

「落ち着きなさい、ミ・レイデイ。それは、風に木の葉が音を立てているのさ」

ワルドはおどけた様子で、ただ少し素っ気なく言った。

「可愛いルイズ様、一緒に行きませんか？ 私のしもべたちが待っています。」

ガジフライたちは夜通し飛び回り、トカゲ男は歌ってルイズ様を眠らせてくれますよ」

「子爵様！ 子爵様！ あそこに見えないの？ 暗い所に魔王のしもべたちがいるのが！」

「ルイズ、そんな風に見えることもあるさ。あれは古い柳の木がそう見えるだけだ」

ワルドは気にせず、オールを手繰り寄せている。

「ルイズ様の可愛い…… ええい、メンドくさくなってきました！ 嫌がるのなら、腕づくです！」

「子爵様！ 子爵様！ 魔王が私をつかんでくるわ！ 魔王が私を苦しめる！」

ワルドは恐ろしくなって、舟を急がせた。苦しむルイズを抱いて、

彼が疲労困憊になりながら岸边に辿り着いた時には、腕の中でルイズは……

いつの間にか、幼い6歳頃の姿から16歳の今の姿になっていた。夢の中のことなので、こんなこともある。一度岸へ辿り着いたはずの小舟は、何かに引つ張られるように再び沖へと流されていた。大きくなったルイズは、尚も変わらず彼へと必死に呼び掛けていたが、背の伸びてきた彼女には、もはやワルドの目深に被ったハットの奥を窺うことは出来なかった。辺りはどんどん暗くなっていく。進路の定まらない舟はぐるぐると回り始め、池の底から噴き出してくる泡はぼこぼこと大きな音を立てた。

「子爵様ー」

あれだけ優しかったワルドは、もう彼女に目線を合わせようとはしない。

まるでルイズの声が聞こえないかのように、じっとその場に座っていた。

池はゴーツという大きな音を立てて、その水位を急速に減らし始めた。

小舟は渦を巻く波の中心でぐるぐる回り、目眩の余りルイズの頭は何も考えられなくなってしまった。そしてゴボゴボという濁った音と共に、急にルイズは身体が浮いたような感覚を覚え、そのまま舟と一緒に渦巻く波の下に吸い込まれていった。

「ぎゃあああー」

ザブンと大きなしぶきを立てて、舟は大きく上下した。未だ揺れ動く舟の上で、ルイズは何事かと周りを見回そうとした。しかし辺りは深い靄に包み込まれており、目を凝らしてもそこが水に満ちた暗がりだ、どうやら洞窟の中らしいこと以外、何も読み取れることは出来なかった。ルイズは周りの濃い靄の形が、何だかニンマリとした笑い顔に見えてきて薄気味悪くなった。

突如として、霧の中を大きな塊がすいーっと横切っていった。何者かとルイズが湖面に目を近づけると、先ほど見えた大きな影だけでなく、もつと小さな影がいくつも動いていることが分かった。その陰の

一つが、舟のすぐ真横をすいと泳ぎ過ぎていった。

「アメンボ？……にしては大きすぎるわよね。足も短いし」

密林の奥地にでもいそうな巨大な蜘蛛が、水を足ではじきながら動き回っていた。

「水の上のクモだから、ミズグモでも言うべきかしら？」

得体のしれないそのクモの一群は、動く度に水面へ繊細な波を作り出していた。ルイズがそれへと手をさし伸ばした途端、急にクモの群れは舟から離れていった。そしてそれらを追い立てるかのようになり、今度はバシヤバシヤと大きな音を立てて、これまた大きなカメがルイズのすぐ傍を通り過ぎていった。もつとも二本足で歩き、手に斧を携えていたそれを本当にカメと呼んでいいものなのか、ルイズには分かるはずもなかった。ルイズはしばらく口をあぐりと開けて、カメの姿が霧の中へと消えていくのを見届けた。

「これってあれよね。絶対にあの使い魔の仕業だわ！」

ルイズが奇妙な体験に憤慨していると、今度は小鳥のように澄んできて甲高い声が聞こえてきた。ルイズが声の方へと振り向いてみると、彼女の目の前を小さな人影がすーっと横切って行った。紫色の髪を一つに束ね、簡素な緑色のドレスを身にまとった、元気そうな少女であった。少女はルイズから少し離れたところまで行ってから立ち止まると、その場でくるくると回り始めた。その様は、まるで凍った水面の上を滑ってでもいるかのようだったが、その足元ではちやぶちやぶと、裸足に触れた水がしぶきとなって散っていた。少女は手の上に横にと動かし、舞台上上がった女優であるかのように舞っている。そこへ、彼女によく似た姿の少女が二人、元氣よく水面の上を走って来て加わり、踊りはより賑やかなものとなった。

「人、じゃないわよね。水の精霊の類かしら？」

ルイズはその少女の踊りを見ているうちに、だんだんと自分も楽しくなってくる気がした。いつの間にか、舟の辺りには紅白の蓮華がたくさん流れて来て、水の精霊たちの踊る舞台を華やいだものに変えていた。一際大きい蓮華の蕾が流れてきて、ルイズの目の前でキラキラと輝きながら花開いた。途端にむっと甘い香りが立ち込め、ルイズは

心が安らぎ、頭がすつきりするような感覚がした。周りの靄はいつの間にか塊としてのくつきりとした形を得て、あるものは杖を手にした悪戯っぽい妖精の姿で、またあるものはどんな攻撃もその身で受け止めそうな恰幅の良いトカゲの姿で、水辺の周りをうろつき始めていた。水面に踊る少女たちの数もいつの間にか増えており、奇妙なことに増えた人影は、チカチカと消えては現れる点滅を繰り返していた。ルイズが呆気にとられて見ていると、その少女の姿は急にふっとかき消えてしまった。かと思えば、今度はぎぶんぎぶんと舟が大きく揺られ始めた。どこから波が来ているのかとルイズが目で追うと、その先ではとんでもなく大きく真っ黒な、魚のような生き物が尾びれをはためかせ、ゆうゆうと泳いでいた。その大魚は軋むような、甲高いような鳴き声と共に、水しぶきを高く噴き上げ、そこから中に雨のごとく水を降らせた。それを見てルイズの胸は逸った。あれはもしかして、伝え聞いた話でしか知らないが、遠き大海に住まうという「くじら」なのではあるまいかと。

「ねえねえ、見て見て子爵様！ あれって、きつとクジラだわ！ お父様にご本で読んで貰って、知ってるもの」

興奮気味に喋るルイズだったが、ワルドの返事はない。不満げにルイズがワルドの方へ顔を向ける。相変わらず彼は帽子を目深に被り、ルイズはその表情を伺うことができない。するとそこに船の外からキヤツキヤと水面を蹴りながら、水の精霊ローレライが近付いてきた。彼女は手を後ろに大きく振りかぶると、ルイズが止める間も無くワルドの顔を目指いつきり引つ叩いた。その小柄な手に見合わぬ威力が込められていたものか、ワルドはローレライの一撃で水面に落ち、ぎつぶんと音を立てた。波に揺られて、舟はワルドから遠ざかっていく。

ワルドはすぐに泳ごうとするそぶりを見せたが、そんな彼を遠巻きに取り囲む影が水面に走った。その正体は、ミスグモであった。ミスグモたちはあごを大きく開くと、ワルドに向け、我こそはと糸を吐きかける。それによってワルドの体中へと細い糸が絡みつき、動きの鈍った彼は余計に苦しそうにもがき始めた。

「ワルド様！」

そこへ先ほどのローレイが、仲間を引き連れてやって来た。彼女たちがキヤキヤツと笑った瞬間、水面に光るものが走った。光はめくるめく速さでワルドに近づいていく。そしてワルドが光に触れると、彼の体はビクツビクツと大きく震えた。

「ワルド!!」

先ほどよりも余計にぐったりとした様子のワルドであったが、ローレイたちはあろうことか、彼を取り囲んではこれでもかどビンダの嵐を送った。悲鳴を上げるルイズの脇を、物々しいカメの一団が通り過ぎていった。そしてワルドに対し一定の距離まで近づくと、よく訓練された弓兵のように、一斉に攻撃を開始した。もつとも放たれるのは矢ではなく投げ斧であるという点が、殊更にマガマガしいところであった。また恐ろしいことにこのミズガメたちは、一体どこに隠し持っているものか、投げる斧に事欠かないらしく、何度も何度も斧を振りかぶっては投擲を繰り返した。何十もの斧が宙を舞い、旋回しながらワルドへと吸い込まれるように飛んでいく。水に住まう魔物たちの集中攻撃を浴びたワルドは、瞬く間に水面へと沈んでいった。

「キヤーーー!!!」

ルイズは恐ろしくなり、叫び声をあげた。

「かくて、ヒーローコンパイの子爵は息絶えてしまいましたときー!」

甲高くもしやがれた声と共に、ルイズの肩へそつと手が置かれた。ルイズが恐る恐る後ろを振り返ると、暗がりの中で一対の赤く光る瞳が妖しく輝いていた。

揺れ動くルイズの感情に構わず、水に舞うマモノたちがぞくぞくと辺りへ集まってくる。水の上をすいすいと、あるいはばしやばしやとやって来ては、彼らは各々のやり方で舞い踊る。彼らの歌声と鳴き声とが混じり合い、水上の空気を揺らしては洞窟の中にこだまする。ルイズはそれらを見聞きしている内に、まるでバレエやオペラを見に来たかのような、そんな夢見心地になってきた。もつとも彼女の厳しい母親は、彼女が街で遊ぶのを好まなかったため、歌劇を見ているようだという感覚も実のところ、彼女の期待が入り交じった想像の上のものなのであった。未経験の事柄でも、素晴らしい体験として感じられ

るのが、夢の素晴らしいところである。彼女はもうすっかりと、ワルドのことを忘れ去っていた。嫌なこと恐ろしいことでも、直前に起きたことをすっぱり忘れられる。これもまた、夢の良いところであった。

「さあ、一緒に征きましよう！」

岸边に立つ魔王が、ルイズへと手を差し伸べた。ルイズはゆっくりと手を伸ばしつつ、魔王の周囲に広がる怪しくも幻想的な景色に目を奪われた。

.....

ある朝、ルイズ・フランソワーズが気がかりな夢から目覚めたとき、彼女は自分がベッドの上で一匹の巨大な毒虫に変わってしまったかのように錯覚した。彼女の体はお腹から背中までがぐるつと布団で包まれており、その上から幾重にもぐるぐると巻かた縄（肩の下から足元まで続いている）が、芋虫のような縞模様を作っている。いわゆる、簀巻きの状態であった。

「な、何よこれ！」

彼女が必死にもがこうとしても、身体はぴくりとも動かない。

「良いざまね、ルイズ・フランソワーズ」

投げかけられた声に驚いたルイズが目を向けると、そこには憎々しげに彼女を見下ろす人影があった。それを見た途端、ルイズは頭にカーツと血が上っていき、顔が熱くなるのを感じた。

「キュルケ！ それにタバサも！ これは一体どういうことよ！」

何で私の部屋にいるわけ？ いや、そもそもこの縄はなんなのよ！

早く解きなさい！」

ルイズが捲くし立てた言葉に対し、キュルケもまた憤慨した様子で返事を返した。

「フン、誰が解くもんですか！ 今日一日、そうやって自分の愚かさを悔いるがいいわ！」

彼女の言葉に合わせて、タバサがこくこくと頷いた。

「な、なんですってええ!!」

ルイズの顔はより一層、リンゴのように真っ赤になっていった。



どうしてこの私が、こんなみつともない姿を晒さなければいけないというのよ！

しかもキュルケの手で！

ルイズは怒りに打ち震えながら声を絞り出した。

「ああああんたたちが、こここんなことをする人だったとは思わなかったわ！

前からあんたのことは嫌な奴だと思ってたけど、寝込みを襲おうだなんて

きたない、さすがキュルケ汚いわね！」

だがキュルケは、ルイズの渾身の罵りをフンと鼻で笑うと、

「自分の手を汚さずに人を貶めようなんて人に言われたくないわ」

と、軽蔑するように言った。心当たりのないことを言われ、ルイズは憤慨と共に困惑を覚えた。しかしキュルケはもうこれ以上喋るつもりがないのか、ルイズを冷たく見下ろすばかりで、視線で彼女を圧するのであった。ルイズは、手も足も出ないこの状況に焦りを募らせた。それと同時に彼女はもう一つの、我慢のならない忌々しい事柄に對して心を捕らわれた。

「私がこんな目にあってるのに、魔王ったらどこほつつき歩いてるのよ！」

普段、自分の部屋に特別に泊めてやっているというのに、肝心な時に番犬のごとく吠えて危機を知らせることすら出来ないとは！ ルイズの心中には、キュルケらに對してだけでなく、頼りにならない魔王への怒りがふつつつと沸き起こり、彼女の苛立ちは募るばかりであった。ルイズは考えた。魔王め、後で戻ってきたら、強烈な折檻をしてやる。いやそれより先に、この二人にお仕置きするのが先か。

「ふん！ 今に見てなさい！ あんたたちなんか、後でけちよんけちよんのぎったんぎったんに

してやるわ！ 私の使い魔が戻ってきたら、すぐに縄を解かせて、ものすつごく怖い目に

合わせてやるんだから！」

だがそれを聞いてなお、キュルケは彼女に冷たい眼差しを向けるこ

とを止めなかった。

むしろ今の言葉を聞いて、その視線に愚かなものを見る哀れみまで浮かんできたようであった。

「な、何よ！ 何とか言いなさいよ！」

「……」

「わ、私をそんな目で見るんじゃないわよ！」

喚き続けるルイズに、キュルケはようやく口を開いた。

「……床を御覧なさい」

そう言われて、恐る恐るルイズが首を回し、ベッドの高さよりも下の方に目を向けると、そこにはもう一匹の巨大な毒虫がいた。簀巻きにされた魔王は、縛られる前にけちよんけちよんにやられたのか、小刻みにびくびくと震えていた。ルイズは、呆れ果ててすぐに言葉が出なかった。

「あなたの使い魔さんなら、当然一番に締め上げたわ」

「魔王！ あんた、声一つ上げることなくやられたというの！」

同じ部屋にいながら、主に危機を伝えることすら出来なかったわけ！

何という失態！ あんた、使い魔失格よ!!!」

それからしばらくの間、ルイズが己の使い魔を散々に罵る姿を、キュルケらは目を細めながら見つめていた。ルイズが思いつく言葉を言い尽くし、息を切らしたところで、キュルケは唐突に語りかけた。

「あなた……もしかして、知らないの？」

「知らないって、何のことよ！」

タバサが、ぽつりとつぶやいた。

「白々しい」

「何ですってー！」

キュルケは、はあとため息をついた。

「あなただったら、さつきから言うのはそればかりね」

彼女はやれやれと、呆れたように首を振ると、ルイズに事情を説明し始めた。

「昨日の晩のことよ。お子さまなルイズは舞踏会が終わってすぐ部屋

に戻ったみたいだけど、

当然私はしばらく外にいたわ。月明かりに照らされた静かな場所で、立派な殿方との

素晴らしい一時を過ごしていたの。ねえ、タバサ」

いきなり話を振られたタバサは、こくりとうなずくと

「おいしい料理…… たくさん残ってた」

と、聞いていたのか聞いていないのか、よく分からない返事を返した。

「それでいい雰囲気も最高潮になって、さあ、これから二人だけで甘く優しくして、

それでいて激しく燃え上がりましょうって気分になって、部屋に戻ってみれば！」

ルイズはこくりと唾を飲み込んだ。

「フレイルムが部屋中、燃やし散らかして大変よ！ ベッドが丸々燃えカスになっちゃったじゃないの！」

「??？」

ルイズは急に出てきた使い魔の話に、大いに困惑した。

「私のシルフィードは、狂ったように窓のへりへ頭を叩きつけて、部屋の中に入ろうとした」

「……」

ルイズは何と言っていいか分からなかったが、とりあえずこの二人に説明を任せたままでは駄目らしいことだけは、はっきりと理解させられた。仕方なく、ルイズは適当に相槌を打った。

「それは、その…… 災難だったわね」

「なに他人事みたいに言ってるのよ！」

いきなり怒鳴られて、ルイズはビクツとした。

キュルケはいきり立ち、タバサはじつとルイズを睨み付けている。だがしばらくすると、キュルケは再びはあ……とため息を吐いた。

「そう言えば、あんたは何も知らなかったんだったわね。いい気なもんよね、周りの苦勞も」

知らずにぐっすりおねんねしちゃうんだから。そんなだから身体

の方も何時までたつても

お子さまなのよ」

とんでもない誹謗中傷だった。なぜかルイズと体格のそう変わらないタバサまでもが一緒に

なつて、「お子さま」と呟くに当たり、ルイズの眉間にはくつきりと青筋が走った。しかし自らの圧倒的に不利な状況を鑑み、我慢に我慢を重ね、彼女は何とか怒りを抑えて先を促した。

「そ、それで？ 一体何が何だったっていうのよ。今聞いた話だけじゃ訳が分からないわ！」

分かったわよとキュルケは返し、話を続けた。

「その後はもう大変だったわ。急いでモンモランシーを呼んだんだけど…… あ、ほら彼女って

水メイジじゃない？ けれど、フレイムが暴れまわるものだから、全然火が治まらなくて！

しかも教師までやってきて、カンカンに怒られたわ！ 使い魔の監督不行き届きですって！」

「同じく」

タバサがキュルケに合わせてつぶやいた。

「折角のロマンに満ちた夜が台無しになって。それで消し炭になったベッドを呆然と

眺めながら、私は思ったわ。どうしてこんなことになっちゃったのかしらってね」

タバサもこくんこくんと頷いた。ルイズは聞いていて、猛烈に嫌な予感がし始めた。

「その時だったわ。窓の外を、大量のワインボトルを手にしたあなたの使い魔が

ひよこひよこ歩く姿を目にしたのは……」

ルイズは急に冷や汗をかき始めた。

「まさか、その…… あんたたちの使い魔の息が、酒臭かったり？」

「その通りよ！ まったく、何てことしてくれたのよ！ てつきり、あんたが普段の報復に、

使い魔を使って仕返ししてきたのかと思ったわ！」

ルイズは、ようやく事態を飲み込んだ。

「事情はよく分かったわ。こいつつたら、本当にどうしようもない奴ね。」

でもその話って、私は何にも関わってないじゃない！ 早く縄を解きなさいよ」

するとタバサがぐいと前に出て言った。

「使い魔の責任は主の責任」

「ま、そう言う訳だから、あんたはそこの使い魔と一緒に反省してなさい」

そう言うのと、二人はツカツカとルイズから離れていき、ぼたんと扉を閉めて立ち去って行った。ルイズは、暗く静かな声を、床下に向け投げかけた。

「あんた……！」

「違います！ これはフコウな行き違いです！」

魔王はすぐさま、苦しげな声で返事を返した。

「今さら何言ってるのよ。もうキュルケ達からネタは上がってるのよ」

ルイズの怒りの深さを示すかのような低い声に、魔王は一瞬たじろいだが、

すぐさま『それでも私はやっていません！』と反論した。

「言い訳は、地獄で聞くわ」

ルイズは、確か鞭を入れたのはあの引き出しだったかしらと考えつつ起き上がろうとして、そのままぎゅうと身体を締め付けられる感覚を覚えた。

「……」

縄が食い込み、彼女は体中が痛くなった。

ルイズはため息をつく気力すらなくなって、そのままベッドに身体を横たえた。

簀巻きとは、かくも人の心から気力を奪い去るものなのか。

しかし無気力ながらも耳は聞こえるもので、魔王の抗弁は確かにル

イズに届いていた。

「そりゃあ確かに私はワインを運びました。でもそれも、元はといえば彼らがそれを

求めたからに過ぎないのです。」

「何ですって?」

ルイズは思わず起き上がろうとし、つつかえるように縄に体を取られ、そのままベッドに叩き付けられた。

「……」

しばらくルイズは不機嫌そうに顔を歪めていたが、それから静かに「続けなさい」とだけ呟いた。

「昨晚、舞踏会が終わった後のことです。私は良い機会だと思い、他の使い魔と親睦を深めに

出かけました。確かに使い魔の仕事は主に付き従うことです。だがしかし、命令に従うのは

ともかく使い魔の生活が主への下僕働きだけではさみしいと、この魔王は考えます」

「あんたは割と自由に過ごしてるじゃない」

ルイズは呆れたように言った。しかし魔王は首を振ると、それだけでは足りないのですと語った。

「二人はみんなのために、みんなは一人のためにの精神です。考えてもみてください。」

私がルイズ様達とともに優雅なひと時を過ごしている時に、我らが同胞である使い魔たちが

狭苦しい庁舎に押し込められて、いつもと変わらぬ餌を食んで過ごしている。

何かしてあげたくなくなるっていうのが、魔人情つてもんじゃあないですか!」

「ふーん。あんまり考えたこともなかったけど、いい心がけなんじゃない?」

「そうでしょう、そうでしょう!　そこで私は、微力ながら彼らも楽しい一時が過ごせるよう

動き回っていたのです。だから別に魔王軍の勧誘だとか、接待ネマワシ袖の下だとかは

カンケーありません！」

「……へえ」

ルイズは白い目で魔王を眺めたが、彼は『ムシヨウの奉仕って、スバラしいですね！』としらを切るのだった。

「やっぱ、殺伐としたこの世の中であって、そういうのってダイジだと思うのです。」

それにこれは資源の有効活用のモンダイでもあるのです。

パーティーでは、えてして料理が余るもの。せつかくおいしいお肉や野菜が

用意されているのに、口に入らないなんてモツタイナイですからね」

「まあ、確かにそうね。使用人の賄いになるにしても、限度があるだろうし……」

「そうです、その通りなのです。世の中、まだ食べられるのに捨てられる食品のなんと

多いことか！ そここはかとなくビミョーに環境派な魔王としてはヤッパリ、こういうところは

見過ごせません」

この使い魔にもそんな殊勝な心掛けがあったとは思ったルイズは、少しだけ彼のことを

見直した。

「そんなわけでパーティー終了後に、あの青髪の少女とのシレッツな皿の争奪戦を繰り広げた挙句、

使い魔たちの好みそうな料理の数々を確保するに至り、みんなでワイワイ盛り上がった

というワケです」

「それって、料理余ってないわよね！」

「使い魔を差し置いて食い意地が張ってるあのちびすけが悪いのです！」

魔王はまったく悪びれた風も無く言った。

「まあとにかく、我ら使い魔は戦利品を分け合って、楽しくやっていたワケです。

そんな中で、件のちびすけの使い魔がこんなことを言い出したのです。

『お肉を一杯持つてきてくれてうれしいのね！ でもいい加減、喉が渴いたのね。折角だから、

いつもお姉さまが飲んでる、肉によく合いそうな赤い飲み物が欲しいのね！』と……」

「そう言えば、あんたって他の使い魔の言葉が分かるんだったわね。

それでワインを持つてったってわけ？」

「そうです。もちろん私も、節度ある楽しみ方をして貰おうと目を光らせてはおりました。

そして初めは和気藹々と、楽しくやっておったのです。彼女も、『甘くて、苦くて、

でも飲んでるとぽかぽかふわふわしてきて気持ちがいいのね！』と喜んでおりました」

ルイズは、あの風竜つてメスだったのかと妙に感心した。

「キュルケ嬢の使い魔、フレイムもいける口らしく、ぐいぐい飲んでおりました。

主が主ですし、当然、彼も酒には慣れているものと思つて、私、気にも留めずに

その様子を眺めておりました。それがまさかあんなことになるだなんて……」

そう言うのと魔王は項垂れるように頭を床に落としました。

「それじゃ、結局あいつの使い魔が自制できずに飲み過ぎたってこと？

それじゃ悪いのは私たちじゃないじゃない！」

ルイズはそう言つて、再びキュルケへの怒りを蘇らせた。

「きつとサラマンダーの彼は、ご主人様の男癖の悪さに辟易していたに違いありません。



それで酔った勢いもあり、ベッドを焼き払うという蛮行を……」  
「そうだったのね」

ルイズは納得した様子で唸った。

「それで、タバサの使い魔の方はどうだったのよ？」

「それが…… 私は他の使い魔たちのためにイロイロ持つてくるため、

少しの間、席を外していたのですが、その間に尋常でない飲み方をしたらしく……」

ルイズは深くため息をついた。それから穏やかに魔王に語り掛けた。

「確かに、あんたも他の使い魔たちに酒を飲ませたのは不意だったわ。

でもあんたも善意でやっていたんでしょ？ なら許してあげるわ」  
「本当ですか、ルイズ様！」

「嘘はつかないわよ。それに今回の件はあんたの言う通り、自己管理が出来てないあいつらの

使い魔に一番の責任があるわ。全く、キュルケには本当に迷惑しちゃうわね」

「本当に、本当にヨロシイのですか？」  
「いいって言ってるのよ」

「おおルイズ様、なんとおやさしい……」  
魔王は痛く感動した様子で、胸を撫で下ろしていた。

「もう、あんたららしくないわね」  
部屋の中のピリピリした空気は、いつの間にか落ち着いたものへと変わっていた。

「いやしかし、昨晩は楽しく終わると思っていたのですがねえ……」  
魔王はそう言いながら、物思いにふけた。

~~~~~

間話 嘘を嘘と見抜けない人は、(使い魔を使うのは) 難しい

「何でも、度数の高い酒を口に含むと、ニンゲンどもですら火を吹けるらしいです。」

つまりキミの火を吐くというときも、絶対のものではないのです！」

フレイムは衝撃を受けた。サラマンダーという自らの種族に絶対の信を置く彼は、魔王の語る言葉にアイデンティティーを揺さぶられる思いがした。

「ですがシンパイすることはありません。見様見真似で火を吹く彼らと、生まれた時から

火と共にあったキミとでは年季が違います！ 君ほどの威力を出せるものはそうそういない

でしょうとも！」

「きゆる〜」

魔王の励ましを聞いて、フレイムは少しだけ安心した。

「それにですよ。もし酒のチカラを借りて火を吹くものが出てきたとして、そうしたら

フレイム、あなたも同じことをやればよいのです」

「きゆる？」

「そう、あなたもアルコールの力を借りて、今よりもっと大きな火を噴き出してしまえば

よいのです！ もしかしたらドラゴンよりも大きな炎が出せるかもしれませんよ？」

魔王の言葉にフレイムは俄然、プライドを刺激された。サラマンダーという種族はその強さだけでなく、美しさからも珍重に扱われる存在である。特に火竜山脈の個体ともなると、その色鮮やかな体色や尻尾の先に灯る見事な炎に非常な価値が付き、好事家たちから王族もかくやという扱いを受けるほどである。はてさて野生のサラマンダーたちは、例えそんな人間たちの事情をよく知らずとも、自らの美しさと力強さに対しては、高いプライドを持っているのだった。だがそんなサラマンダーも、ドラゴンと比べるとどうしても下に見られる

傾向がある。それが若さと誇りを併せ持つフレイムには気に食わなかった。彼は思った。——ただでさえ故郷の「火竜」山脈では、火竜に頭上を我が物顔で飛び回られ、その力の横暴を前に割を食ってきた。そのドラゴンを相手に、自らの種族が誇りとする炎で競えるかもしれない——彼にはもはや退くという選択肢はなかった。自分が種族の榮譽を背負うんだという気概の元、彼は魔王が持ってきた、とっておきの酒を口にしました。

「そうそう、それで先ずは酒を口に溜め込んでおいてですね……」

魔王はフレイムに向け、何やらアドバイスじみたものを語り掛けた。しかし残念ながら、生物的な分類でいえばトカゲの一種に過ぎない彼の口の構造は、液体を飲み込まずにため込んでおけるようには出来ていなかった。フレイムは喉が焼けるような感覚と共に、一気にその液体を飲み干してしまった。

「きゅきゅきゅっ!!
!!」

彼が慌てて吐き出した息には絶えず揮発するアルコールの液滴が混ざり、いい感じに普段より大きな炎が吐き出されるのだった。

「おおー！ 期待通りの出来栄です！ あてずっぽうでも言ってみるものですね」

「!! きゅるーうううづづ!!」

「それにイイ飲みっぷりです。まさかあの強さの酒を一気に煽るとは……」

「おや？ アナタ、ちよつと顔が赤いような…… や、いつものことでしたね」

「きゅるー……!!」

「ふむ、つまりたくさん飲んでも、これ以上顔が赤くならないというわけですか。

その調子ならいくら飲んでも大丈夫そうですね！ さあ、遠慮なくグイツと。

精一杯飲んで、嫌なことは全て忘れましょう！」

「きゅるーっ！ きゅーっ！ きゅーっ！ きゅるー……っ!!!」

フレイムが叫びまわる傍ら、今度は別の使い魔が声を上げ始めた。「なんかこのお酒おかしいのね！ 全然甘くないのね！」

喉もお腹も焼けるように熱くて、目がぐるぐる回るのね！」

「おかしいですね。料理長から天にも昇る程だというものをゆすり受けた……ゲフンゲフン、

ゆずり受けたのですがね。口に合わないようなら水を飲むといいでしょう。幸いここには

命の水がいくらでもありますからね。たくさん飲めば、きっとアルコールも薄まるに

違いありません！」

彼の言葉を聞いたタバサの使い魔シルフィードは、くわっと目を見開いて、魔王を責めるように言い立てた。

「アホなのね！ そんな言葉に乗せられて更に飲むなんて、トビツキりのアホなのね！」

勧める方だつて大概アホなのね！」

「でも同じアホなら？」

シルフィードは、少し考え込んでから言った。

「飲まなきゃ損損なのね！」

そう言つて彼女は、近くの酒樽を叩き割ると、中身をぐびぐび飲み干し始めた。

「まあ、ホドホドに楽しんでおいってください。私はこれからまた料理を取ってきます。

ついでに薬でも持つてきましょう。アレルギーとか大丈夫ですか？ 回復薬でダメージを負う

体質とかはないですよね？」

「大丈夫、問題ないのね。一番効くやつを頼むのね」

シルフィードはぐるぐると頭を揺らしながら、ふやけた声で答えた。

「分かりました。確か医務室に、何となくクリスタルな感じで有名な勇者が飲んでそうな、

ポーションがあつたはずです。サラマンダーの彼の分も含めて、

持つてくるとしましよう」

そう言つて魔王は、マモノひしめく夜の厩舎を後にした。

「いやあ、いい夜です」

彼はしみじみと満足感に浸りながら、マガマガしき月光の照らす夜道をゆつたりと歩き、学院の塔へと戻つていった。

~~~~~

「まさかお酒に酔つたからではなく、あの青いポーシオンを飲んだせいで暴れだすとは……」

「何か言つたかしら？」

「いえ、何でもありません！」

「そう……」

あれつてそんなにマズかったのか？ ならばもう一杯と勧めたのが致命的だったか？

回想に耽り、己の失敗に頭を悩ませる魔王の姿を、ルイズは不信の目で見つめていた。

問い詰めようかとも彼女は考えたが、自分の使い魔があやしく見えるのはいつものことかと

思い直した。その代わりルイズは、寝ている間に見た奇妙な夢のことを魔王に尋ねてみた。

「ねえ魔王、ちよつと聞きたいんだけどいいかしら？」

「何でしょう？」

「ダンジョンのマモノつて、水に住む者たちもいるのかしら？」

「!!」

魔王は目に見えて驚いた様子で、縛られたままじたばたと蠢いた。

「なんとルイズ様、そのようなことをお聞きになるとは！ まさかもうすでに

ラグドリアン湖周辺までを見込んだ侵略計画を考えておいでなのですか!?

学院一つ支配出来ていない内からそのようなシンリョウエンボを巡らすとは、

この魔王、感動を隠せません！ ……なんかピンとこないですね。  
シンボエンリヨウ……

エンリヨウシンボ？ それともエンボーシンリヨだったような  
……？」

ルイズは魔王が言葉を言い終えるか言い終えないかの内に言い返  
した。

「そんなんじゃないわ！ なんてあなたはそうやって何でも世界征服  
に結び付けるのよ。」

だからあんまり聞きたくなかったのよ！ あんたにこんなこと聞  
くなんて、私どうかしてたわ」

そうやってルイズはそのまま押し黙ってしまった。

「分かってます、分かってますって。軽い冗談じゃないですか。そう  
いうていはいくんですよね！」

とにかくココロザシが高いのはいいことです。しかし、とあるタヌ  
キの皮算用カリキュレーターになっても

いけないですし、あんまり無理はしないでくださいね。うん？これ  
も何かシツクリこない

ような……？」

「本当に分かってるんでしようね？」

訝しみつつもルイズは、簀巻きにされたまま大声を出して予想以上  
に疲れた体に逆らえず、そのままふかふかのベッドに沈み込みんで、  
力を抜いた。

「何だかどつと疲れたわ。 ……まさか本当に一日中縛られたままなの  
かしら？」

ルイズの憔悴感漂う声に、魔王はいえいえと言り返した。

「おそろくそういうことにはならないでしょう」

「なんでそんなことが言えるのよ？」

「フフフ。魔王たるもの、勘が良くなくては生きていきません！」

「あんたが強ければ、勘が悪くても生きていけるんじゃないの？」

そんなことを彼らが言い合っていると、果たして魔王の言葉通りと  
言えるのか、ルイズの部屋の前にとある来訪者が現れた。慎ましやか

なノツクの音が鳴り響く。

「ルイズ様、魔王様、いらっしやいますでしょうか？ 使用人のシエスタでございます」

魔王はホレ見たことかと、ぶん殴りたくなるような得意げな笑みを浮かべた。

ルイズは怒りを抑えつつ、扉の外の相手に返事を返した。

「いるわ。一体、何の用かしら？」

ひっ、という小さな悲鳴を使用人は上げたが、その蚊の鳴くような声は部屋の中まで届かず、彼女の目の前にある扉に吸い込まれて消えた。その使用人の少女は、一度深呼吸してから心を落ち着けた後、失礼の無いよう、はっきりとした声で来訪の目的を告げた。

「朝食の時間、食堂にお見えにならなかつたので様子を伺いに参りました。朝食を取り置き、

温め直したものをお持ちしたのですが……余計なお世話だったでしょうか？」

わざわざ言いつけたわけでもないのに食事を持ってきてくれるとは、とルイズは驚いた。しかし彼女は視界の端に、やけに良い笑顔を返す魔王を見て、ああ、そういうことかと一人合点した。

「魔王。あんたが普段、私のいないときに使用人に絡んでるのは知ってたけど、

こういうことを言いつけるのに使ってたわけ？」

「魔王に対しての当然の奉仕を求めていたまでのことです。」

それにルイズ様、こうしてルイズ様のお役にも立つでしょう？」

「確かに、彼女に頼めば縄を解いて貰えるでしょうけど……」

ルイズは縄から逃れる自由と、縄に縛られた姿を晒すことへの羞恥との間に揺れ、扉の外の使用人を部屋の中に呼び込んでいいものかと逡巡した。

「ダイジョーブです。シンパイいりません。彼女には使用人連中のかでも特に念入りに、

ワレワレの偉大さを伝えるキョーイクを施していますから、口は固いハズです。タブン。」

ルイズ様の不利になるようなことはしないし、言わないハズです。きつと」

「多分とかきつととか、一体どっちなのよ!」

「細かいことはいいいではないですか。ジューヨーなのは、ワレワレに逆らったらどうなるか

ということを相手が認識しているか、それに尽きるのではないでしよーか!」

扉の外から、ひつと言う悲鳴が聞こえた。

「怖がらせてどうすんのよ! ……まあ、分かったわよ。あんたの言う教育がどんなものか

知らないけれど、そこまで言うなら信じてみようかしら」

そう言つてルイズは、朝食の他にも頼みたいことがあるからと言つて、使用人の少女へ部屋に入るよう促した。おそるおそる扉を開き、足を踏み込んだ黒髪の少女は、ルイズたちの姿を見ると、目を丸くして口元に手をやった。

「あなたにも聞きたいことはあるだろうけれど、使用人なら黙つて私の指示に従いなさい。

見れば分かるだろうけど、今、体の自由が利かないのよ。この縄を解いて、私たちの身体を

自由にしなさい」

驚きに暮れていた使用人の少女は居住まいを正すと、畏まりましたとルイズたちに一礼した。

「丁度良かったです。硬い結び目を解く自信はありませんが、朝食と共にナイフを

お持ちしましたので、非力な私でも縄を切つて差し上げられます」そう言つて近寄る少女の姿に、ルイズはこれで解放されるのかと一息ついた。

「ちよつと待つてください」

魔王の言葉に、少女はビクンと立ち止まった。

「な、何でしょう?」

魔王は普段から厳しい教育を行っているのか、少女は緊張のあまり



冷や汗をかいているようだった。よく出来た使用人というものは良家の証にもなるため、使用人を厳しく躰けることは非常に重要な行為である。ルイズは貴族社会にも通用しそうな使い魔の意外な才能に、魔王という称号も伊達ではないのだろうかと感心するのだった。

「そのナイフ、ベーコンや何かを切り分けるのに使うにはちよつとばかり、いえかなり

大きすぎませんか？」

「ええと、その……パンです！」

「パン？」

「はい！ パンを切り分けるには大きい方が便利かと思つて、こちらのナイフを持つてきました！」

「ほう、パンですか。パンは大きいですものね。だからそんなに長い刃物を持つてきたワケ

ですか。いやはや、これなら頭ほどもあるパンを切れそうですね。しかしパン切りナイフに

してはギザギザしてませんし、妙に刃先がトガツて見えるのですが……」

「お、お二人は将来、世界を担う特別なお方でいらつしやいます！」

他の貴族の方ならともかく、お二人には切れ味の良いナイフの方が何事につけ、よろしいかと思ひましたのでこちらを選びました！」

途中、吃つたりすることもあるが、基本的にはハキハキと受け応える少女に、ルイズは好感を持った。だが魔王はそんな程度では満足しないらしく、厳しい言葉を投げかけ続けた。

「ほう……そういうことでしたか。しかしこういうものは他の人と一緒に良いのです。

何でも他とはチガウ扱いをしておればよいと考えている内は、マダマダと言わざるを得ません。

まあ、今回は縄を切るのに丁度良かったわけですし、フモンとしましよう

「失礼致しました！ 以後、気を付けます！」

「ヨロシイ」

話が終わったと見て、少女は止めていた足を一步、ルイズの方に近づけた。

「そうそう、縄を切るのは私の方からにきなさい。」

「ハイっ！」

また少女は飛び上がるように驚いた。

ルイズは思った。いくら何でも驚きすぎではないだろうか？

いや、そんなことよりも……

「どうしてご主人様を差し置いて、あんたが先に自由になろうっていうのよ。私を待たせる気？」

使用人の少女は、どうなることかと不安そうな面持ちで、ルイズと魔王を交互に見つめた。

「確かにルイズ様には少々お待ち頂くことになります。ですが、これは彼女への教育でも

あるのです」

「教育？ どうしてよ？」

「ウデを確かめると言ってもいいでしょう。彼女だって、普段から食事をジューンビするのに

ナイフを使ってはいるでしょう。しかしパンを切るのと縄を切るのとはワケが違います。

パンは下手に切ってもパン粉が増えるだけです。今回ウツカリ切り過ぎては、ルイズ様の

お召し物がダイナシになってしまいますからね。私で先に試しておこうというワケです」

ルイズは感激した。この不出来な使い魔にも、ようやく使い魔らしい自覚が出来てきたらしい。自分が今まで彼に冷たくしてきたのは間違いではなかったのだと、彼女は確信した。成長を見せた使い魔を見守るのも、主の重要な務めである。ルイズは寛大な心を持って、魔王の提案に乗ることにした。

「へえ…… あんたも気が利くようになってきたじゃない。

分かったわ、命令よ。私の使い魔から縄を切っておやりなさい」「か、畏まりました」

使用人の少女は、それでは失礼してと、張り付いたような笑顔のままにゆつくりと魔王のほうへ近寄っていった。

「と、ところで魔王様、昨日のお酒は…… どうでしたか？」  
「どう、とは？」

「い、いえ、失礼致しました！ 偉大にして邪悪のキワミであらせられる魔王様にとつては、

気にかけるまでもない、どうでも良い事でございました」  
「構わん。言ってみなさい」

魔王は全身を縛られたナサケナイ恰好のまま、大層偉そうに言った。

「それでは、その、お言葉に甘えて…… 私どもの料理長のマルトーが気にしていたのです。

昨日あなた様にお渡ししたものが、東方の大変珍しいお酒だったらしく、お口に合ったか

どうかと。詳しいことは知りませんが、何でもヤシオリの酒と言うんだとか。変ですよ、

ヤシを折って作るお酒だなんて……」

魔王は、そうだったのですかと頷きながら、満面の笑みで感想を述べた。

「大変度数の高い逸品でしたので、有意義に使わせて頂きましたとも！」

「へ、へえ、それは、良かったです……使おう？」

いえ、噂ではドラゴンもイチコロという強いお酒だったらいいので、

私たちも期待、いえ、心配していたのです。」

「期待？」

魔王は少女の小さな眩きを聞き逃さず、訝しげに眉を潜めた。

「え、ええ、そうです！ 特別強くて希少なお酒だけに、格別な夢見心地を長々と感じて

頂けるかと思っただのです。それこそ翌朝、誰かが枕元に立っても気付かないほど……」

しかし同時に、お体へ響き過ぎはしないかと心配になっていたので、使用人一同を代表して、

こうして私が訪ねたのです。てつきり朝、食堂におられなかったのはそういうことかと……」

黒髪の少女は、どこか凍り付いたようにも見える笑顔を振りまきながら、彼女がこの部屋に来た事情を語った。

「ふむ、アラ削りではありませんが、ちゃんと心配りができてきいるようでナニヨリです。

お酒の酔いはもう残っていません。ですがまあ、今のこの状況は、ある意味お酒の影響が

残っているとと言えるのかもしれませんが」

詳しい事情は聞かない、ウワサしないのが良いメイドの証です！

と魔王はうそぶいたが、

少女はそれを聞いてか聞かずか、自らに言い聞かせるように小さく呟いた。

「そうですね。過程や方法なんかどうでもいいですよ。身動きが取れないという結果があれば、それで良からうなのだって、

きつとみんな応援してくれるわ」

「？ 何か言いましたか？」

「いいえ、何でもありません。すぐに縄を切って差し上げますね」

そう言って少女は花のような笑みを浮かべた。彼女は手にした銀の盆を脇にあったテーブルの上に置くと、そこからかちやりと小さな音を立てて、ナイフを手を取った。彼女はナイフの持ち手を両の手でがっしりと握り込み、腹の前に構えた。窓から差し込む日の光が、ナイフに当たってきらりと反射した。

「魔王様、お覚悟！」

そう叫んで、彼女は手にしたナイフを魔王の腹部めがけて思いっきり突き刺した。

腰の入った一撃だった。

縄がパラリと解け落ちた。

ナイフは幾重にも巻かれた縄を、奥深くまでさつくりと裁断し、その刃先は

魔王のまとう真黒な、それこそ闇のようなころもの前で止まっていた。

呆然としてナイフを取り落とした少女を前に、魔王は怒りの声を上げた。

「何という失態ですか！ そのように強く突き刺しては縄の下の洋服が台無しです！

モノを切るときの慎重さというものをまるで感じませんでした。気合入りすぎです！

私はやみのころもを着ていたから良いものの、他の服を着ていれば大穴が開いていた

でしょう。そんなことでは、この魔王のしもべにしてやるわけにはいきません！」

「も、申し訳ありません！ どうか、どうかお許しくださいませ、魔王様！」

ルイズは目の前の出来事を呆気にとられて眺めていた。

「そんなことではルイズ様の下僕働きをさせるにも、何時までたっても重要な仕事を

任せられません！ ニンゲン失格です！」

怒り心頭な様子の魔王の前で、黒髪の少女はただただ縮こまり、膝をつき、頭を地面に付きそうなほど下げて、どうか、どうかご慈悲をと、悲壮な声で許しを乞うていた。

「どう処分致しましょう？ ルイズ様」

ルイズは冷や汗をかきながらも、貴族としての威厳だけは失うまいと動揺を押し殺して答えた。

「そ、そうね。誰にでも失敗はあるものよ。彼女も反省してるみたいだし、

もう休ませてあげたら？ ……私の縄を解くのは魔王、あんたに任せるわ」

「ルイズ様の寛大なご処置にカンシャすることです。下がりなさい

！」

「はい……」

少女は、まるで自分の失敗により世界が闇に包まれるかのような落ち込みぶり、ルイズの部屋を後にした。その後魔王は、ルイズの縄をてきぱきと危なげなく断ち切っていた。

「まったくケシカランことです。時間がかかっても、私が自力で抜け出すべきでした。」

そうしたら、伝説の魔ジシャン直伝の縄抜けをルイズ様に披露したものを！」

魔王が尚も愚痴を吐き続けようとする中、ルイズはそれを遮って言った。

「うすうす気付いてたけど……あのメイド、何か変じゃなかったかしら？」

いや、彼女だけじゃないわ。最近の使用人たちみんなが、私を敬うと言うより、こう、

何というか、怯えているように見えるわ」

「……教育の方向性を間違えたかもしれないですね。」

まさかあ

んな行動に出ようとは……」

魔王は神妙な顔でそう言った。

「ところで話は変わるけど、あんた、ご主人様を差し置いて貴重なお酒を楽しんでたんですって？」

「ルイズ様……」

「な、何よ！ その呆れたような、哀れなものを見るような目は！」

ルイズが余計に憤慨する中、魔王はままならない世の中にため息をついた。

## STAGE 23 雪風と共に去りぬ

衝撃的なフーケの襲撃から一週間も経つと、あれだけの大騒ぎも少しずつ人々の記憶から薄れ、学院は普段の平穏を取り戻していく。

「そう考えていた時期がわしにもあったのう」

そう言つてオールド・オスマンは一人、学院長室に籠つて頭を抱えていた。オスマンが予想した通り、学院の生徒たちは舞踏会での楽しい一時を経たことで、次の日には怪盗のことなんかすっかり忘れていた。ここまでは良かった。だが2〜3日経つと、生徒たちの中にもミス・ロングビルが姿を消したことを気に掛ける者が現れ始めた。不審に思った彼らは教師にそのことを訊ねたが、帰ってきた答えは満足いくものではなかった。なぜなら教師たちは、彼女は長い休暇を取っているのだとか、やむを得ない事情があつて国に帰つたのだとか、皆がバラバラな、それでいて一様に歯切れの悪い答えを返したからだ。これにより生徒たちの不信感は、一層強まつていった。

その内、生徒たちの間でまことしやかな噂が語られ始めた。曰く、ミス・ロングビルはあの舞踏会の日、酔つて気分を良くしたオールド・オスマンに一線を越えたセクハラを受けたため、耐え切れずに逃げ出したのだとか。誰が言い出したかも分からぬその噂は、オールド・オスマンの素行から来る信憑性もあり、あつと言う間に学院全体へと広まつていった。斯くして高名なるこの老メイジは、男子生徒からは英雄を見るような尊敬の眼差しを、女子生徒からは汚らわしいものを見るような侮蔑の眼差しを向けられる様になつた。

オールド・オスマンは、あんまりな醜聞の広まりに内心叫びたいぐらいだつた。だが彼は噂を否定しつつも、積極的に真実を明かそうとはしなかった。名立たる貴族の子弟を預かる学院の長、オールド・オスマンその人にとっては、不名誉とは言えあくまで噂に過ぎない話が広まることよりも、忘れ去られたフーケの一件がぶり返されることを恐れた。

そもその問題は、ミス・ロングビルもとい土くれのフーケが、オールド・オスマンの肝いりで雇用した秘書であることだつた。魔法学院

の学院長ともあろうものが、あろうことかフーケを自らの手で懐に招き入れたという大失態。折角、生徒がフーケを捕まえたことで高まる学院の名声を、こんなことで落とすたくはないと、そうオールド・オスマンは考えた。ましてや彼女と出会った場所が街の酒場で、採用を決めたのも彼女のお尻を撫でながらであったことが皆に知られれば、王宮や生徒の保護者たる有力貴族たちから猛烈なお叱りを受けることは間違いなかった。

そんなわけでオールド・オスマンはこの数日間、生徒たちから向けられる様々な視線に耐えながら、必死のポーカーフェイスを心掛け、挙句ボケたふりまでして、噂が収まるのを待っていた。必死に耐えようと、頑張っていた。だがつい先日、彼の涙ぐましい努力は、噂を聞き付けた空気の読めない成り上がりゲルマニア女のせいで、あっさり水泡に帰した。いやむしろ彼女は、カードを切って場を混乱させる、最高のタイミングを待っていたのかもしれない。

『ミス・ロングビルがどこへ行ったかですって？ 私は知ってるけど、言うのはちよつと……』

あら、そんなに聞きたい？ ……そう。そりゃあそうよね。でも私、こういう話が広がる

のつて、あんまり良くないことだと思うのよ。留学生として籍を置かせて貰ってる身としても、

あんまりこういうことを大っぴらに話したくはないのよね』

当然、生徒たちはかの赤毛の少女に食い下がる。

『……どうしても？ ダメよ、こういうのは誰かに話したら最後で、あつと言う間に皆に広まって

しまうものなのよ。ダメだったらダメ。だけど……うーん。正直、こんな大きなヒミツを抱え

込んでるっていうのは、結構辛いよねえ』

そして、彼女の周りを取り囲む生徒たちを散々焦らした挙句、こう打ち明けるのだ。

『……ねえ、あなたたち、口は固い方かしら？ ……本当？ 嘘じゃな



いわよね？

……分かったわ。あなたたちを信じるわね。本当、頼むわよ？

ここだけの話なんだけど、実はミス・ロングビルって……」

彼女は同じようなやり取りを、時と場所を変えては繰り返したため、おかげであつと言う間にミス・ロングビルに関する真実は広まった。オスマンには、待ったを掛ける暇すらない。

『あの学院長、僕たちには一言も説明が無かったぞ！ どうなってるんだ！』

『学院の隠蔽体質には呆れ果てたよ。まさかここまでだったとは……』

『本当、酷過ぎるわ。お父様お母様に言いつけてやる！』

『私も手紙を書くわ。父上から大臣に話が伝わればいいんだけど……』

使い魔のネズミが伝えるところ、生徒たちの反応はかねがねこのようなものであった。オールド・オスマンは顔色を一層悪くし、今から言い訳の言葉を考えなくてはいけなかった。

「うーむ、どんな文句がいいかのう？ この度の一件、わしに全面的な非が……」

一部の非が…… 僅かながらの非が…… ある、いやありそうに見えるなくもない。

正直、スマンかった。反省しておる。しかし思い返せば、キレイな女性というものは

それだけでイケナイ魔女であるからして……” いや、これはイカシ。本当にわしの首が

飛びかねんわい。うーむ……」

オールド・オスマンは羊皮紙に思い付く言葉を書きなぐっては、使えないと分かるべくしゃくしゃくに丸めて机の外に投げつけた。今となっては、もうそれを律儀に片づけてくれる秘書もいない。彼は思い出す。彼女が紙を拾うのにつ屈むのか、むちむちな足を、ヒツプラインを、あるいは運が良ければパンティまでを存分に晒してくれるものかと期待して見ていたら、杖を取り出してヒョイと片付けてしまっ

たときのガツカリ感。そしてこちらの思惑に気が付いた彼女から向けられる、眼鏡越しの軽蔑の眼差し。突き刺さるように冷たい視線を向けられた腹いせにと後ろから胸を揉みしだき、その大きさと手に吸い付くような柔らかさに驚愕を覚え、生の潤いというものをしみじみと感じた直後には、地獄の鬼すら血反吐を吐く様な折檻を受ける羽目となった。だがそれも今となっては良い思い出。オールド・オスマンは、自分にとつての彼女の存在が、思っていた以上に大きくなっていったことを、今さらながらに気付かされた。

「ミス・ロングビル、きみがいなくなつて部屋ががらんとしてしまつたよ……」

雇つた理由が何であれ、彼女は秘書として非常に有能だった。それこそ、多少のいたずらにはお目こぼししてもいいと思えるぐらいには…… もつとも普段いたずらを、それも大人なイタズラを仕掛けていたのはオスマンの方であった。

「むー、こんなのはどうじゃろうか？ ッフーケのごとき穢れた大人がひしめく世の中で、

子供たちにだけはキレイな夢を見ていて欲しかった。学院の教職員たちが、皆一丸と

なつて真摯に彼らに向き合おうとしているという夢を…… じゃからわしは、迷いながらも、

生徒たちには黙っているしかなかった。穢れを知らぬ、純粹で真っ直ぐな大人に育つて

欲しかった……” これじゃ！ 子供たちをダシにしておけば、保護者らからの追及も

いくらか弱まろうて！」

学院では、いつでも年若く有能な美人秘書を募集中である。

「今度はドジツ子とかいいかもしれない。泥棒は二度と勘弁じやが、

ラッキースケベなトラブルなら大歓迎じゃ！」

……

生徒たちがいくらか騒ごうと、授業はつつがなく行われる。そして退

屈な時間を過ごす度に、彼らの中の色んな出来事が過去のものになっていくのだ。今日、ルイズを含む二年生の生徒たちが受けようとしている授業は、中でも特に退屈になりそうなものの一つであった。何分、授業を受け持つ教師、ギトーの評判がすこぶる悪いのだ。自らの得意とする系統、風を殊更に持ち上げ他の系統を扱き下ろすという彼の悪癖は、彼の陰気な容姿と共に生徒たちへと知れ渡っていた。だが彼の教師の座が、そんな悪評で揺らぐことはない。それもそのはず、彼は教師の中でも数えるほどしかない実力者、風のスクウエアであった。生徒数の四分の一を占める風メイジたちからの熱烈な支持と、残り四分の三からの醒めた視線を伴って、彼の授業は開始された。「時間だ。授業を始める。諸君らも知つての通り、私の二つ名は疾風。疾風のギトーだ」

彼の実力を鼻にかけた自己紹介に、生徒たちは早くも鼻白む思いがした。

「早速だが、諸君らは最強の系統が何か分かるかね？」

『まあ賢明な諸君ならば当然分かつているものと思うが』と、風メイジ以外の神経を逆なでしつつ、ギトーは教室を見渡した。彼は質問を答えさせる生徒を探し、そしてよく目立つ生徒、キュルケに目を付けた。彼の求めた『目立つ』という特徴は、何も燃えるように赤い髪を持つという見た目の話ではない。クラスメイトたちが一目置かざるを得ない魔法の実力に、皆の注目を集めて止まないその立ち居振る舞い、そういったある種のカリスマを持つ『中心的な』生徒を相手に言葉を交わし、そして反論するようなら打ち負かす。それが彼の授業の進め方であった。当然、こんなことをしていれば生徒には嫌われるが、とかく集中力を欠きがちな彼らの目を、授業に向けさせることは出来る。それに憎めば憎むほど、彼らは学ぶ。そういう考えで、今日も彼は相変わらずな授業を進めるのだった。

「ミス・ツエルプストー。君の答えを聞かせたまえ」

キュルケはあからさまに面倒臭そうな顔をしつつ、質問に答えた。

「虚無じゃないんですか？ 先生」

そう来たかと、ギトーは眉を顰めた。誰もが自分の系統を一番と言

いたはずだが、それをこの教師に否定されるのは目に見えている。そこで彼女は、虚無を持ち出すことで、相手の鼻を折りつつ、自らの自尊心を守ろうとしたのだった。なるほど彼女は気が回るようだ、ギトーは唸った。しかし、この厳しい魔法社会において、自分の系統が一番であるなどという幻想を持っていて良いのは幼い頃だけである。なぜなら現実の世界には、四系統の中での優位性、力関係における上下というものが確かに存在するのだから。そう信じている彼は、幾ばくかの使命感とともに彼女の答えを否定した。

「それは伝説の話に過ぎない。私は現実での答えを求めているのだ」  
彼の返事が癩に障ったキュルケは我慢を止め、本音をギトーにぶつけた。

「もちろん、火に決まっていますわ。ミスタ・ギトー」

「ほほう。理由を聞かせて貰おうか」

「全てのものは、炎と情熱を前に燃やし尽くされるのみですもの」

キュルケの口調からは言外にも、『当然でしょ？』という思いが透けて見えるようだった。彼女に同感する火のメイジたちがうんうんと頷く。だがギトーは、彼女の、そして彼女に同意する者たちの抱く幻想を、冷たく切り捨てにかかった。

「残念ながらそうではない。そんなものは自らの系統をひいき目に見た傲慢に過ぎない。」

これが火ではなく、土や水だろうと同じことだ」

今や、教室内にいる大多数の生徒から敵意の眼差しが向けられる中、彼は自信満々に告げた。

「だが、言葉で語って見せても、どうせ諸君らは納得しないであろう。ならば試してみるがいい。ミス・ツェルプストー、私に君の全力をぶつけてみたまえ。」

全てを燃やし尽くすという君自慢の火の魔法を放つのだ」

キュルケは絶句した。一体全体、この先生は何を考えているのだろうか。いくら彼が腕に覚えのある教師だといっても、自分だってトライアングルである。その全力をぶつけて、ほんの僅かでも相手に火が届いたならば、後に待つのはただひたすらに無慈悲な破壊だけであ

る。それをこの先生は分かっているのだろうか、彼女が動揺を隠せずにいる中、ギトーは何でもないとこのように火の魔法を要求し続けた。

「遠慮なぞいらん。相手を憎しみの炎で燃やすがごとく、全力で火の魔法を放ちたまえ。」

自分を殺しに来た敵に向けるがごとく、容赦なく杖を振るうのだ。君はフーケを

捕らえに行つたのであろう？ その時と同じように、本気の炎をぶつけてみたまえ」

大した自信である。本当に、彼は如何なる炎をも跳ね除けるだけの實力を持っているというのか。絶対に自分は安全だと言い切れるだけの技術を持っている、だからこんなことを言うのだろうか。キュルケはギトーの言葉を聞き、必死に自分を納得させようとしたが、それでもなお、彼女はあと一步のところまで踏み止まっていた。自らの誇る炎の危険さを知るが故の逡巡であった。そんな彼女をあざ笑うがごとく、ギトーは更に口を開いた。

「これだけ言ってもやらんのかね。口ほどにもない。」

その有名なツエルプストー家の赤毛は飾りかね？」  
侮蔑を耳にしたキュルケの顔色がさつと変わった。

「火傷じゃ済みませんことよ」

彼女は詠唱を始めると同時にさつと杖を振るい、小さな火の玉を出すと、尚もスペルを唱え続け、その火の玉をみるみるとメールほどの大きさまで膨らませた。まるで小さな太陽が現れたかのごとき煌めきを目にした生徒たちは、その光に照らされた肌が熱を帯びていくのを感じ、そのあまりの熱量に恐怖した。ルイズの爆発から逃れるときのように、我先にと生徒たちが机の下へ潜り込む中、キュルケはついにギトーに向け火の玉を押し放った。ギトーは、自分を消し炭にしかねない業火が唸りを上げて飛んでくるのを、微動だにせず見守った。そしてあわや、火の玉に飲み込まれるかというところで、彼は腰元に差していた杖を目にも止まらぬ速さで引き抜き、そのまま鋭く振り抜いた。驚くべきことに、たったのそれだけの動作の間に、彼は詠

唱を完成させていた。火の玉は穴を穿てられるようにして掻き消え、そこを通り抜けた風は、キュルケを壁まで吹き飛ばした。その後、緩やかに教室を吹き抜けた風には、あの火の玉の熱さが微かに残っていた。生徒たちが息を飲む中、ギトーは堂々と言い放った。

「諸君、これこそが風が最強たる所以だ。なるほど火は全てを燃やし尽くす。

水は全てを飲み込み、土は何よりも硬き盾や矛になろう。だがそこまでだ。

風を前にして、それらは立ち上がることをすら許されん。

まさしく風は、四系統の中の王者であるのだ」

キュルケは身体を痛そうにさすりながらも立ち上がり、降参というように手を上げた。

しかしギトーは、もうお前は用済みだと言わんばかりに、彼女には目もくれない。

「風は目に見えずとも諸君らを守る盾となり、同時に矛となるだろう。そしてもう一つ、風の最強たる所以が……」

そこでギトーは、くぐもった声を口に押し止め、そのまま黙り込んでしまった。生徒たちが、眉間に皺を寄せた彼の視線の先を追うと、そこには真つ直ぐ上へと伸びた細腕があった。肌は青白く、指の先には長く伸びて尖った爪。ルイズの呼び出したマガマガしき使い魔の姿がそこにはあった。今や彼はこの学院でも有名人である。魔法も碌に成功しないはずのゼロのルイズが、土くれのフーケをもやり込める恐怖の破壊神と化した影には、使い魔の存在があったというのが、生徒たちの間でのもっぱらの噂である。彼が手を挙げていることに生徒たちは興味を募らせたが、主であるルイズはそれどころではないらしく、慌てふためきながらも魔王の手を下ろさせようとした。だが一足早く、ギトーが魔王に返事を返した。もつともギトーにしても、最近目立ちがちな彼へ、仕方なく言葉を返したのだった。

「なんだね使い魔君。何か言いたいことでもあるのかね？」

ギトーは深い疑いの眼差しを隠しもせず、彼へ問いかけた。

「はい。風が強いのはトモカク、伝説の虚無を相手にしても、風は勝て

るんでしょうか？」

ふざけた質問だ。だが嫌な話がぶり返されたと、ギトーは渋い顔を作った。虚無は伝説としては有名であるが、その実、どんな魔法だったのかはまるで伝わっていないため、実在を疑う声すらある。そんなお話の中だけの魔法と現代魔法最強の風、どちらが強いかなど本来何も言えるはずは無かった。

ギトーは一瞬、彼は生徒ではないのだから無視してしまおうかと考えた。だが彼にとっては面白くないことに、今の亜人の発言で生徒たちはまた、風以外の最強に意識を囚われ始めたようでもある。しかも厄介なことに、虚無は始祖の系統であるとされることから、理屈抜きに神格化して捉える者が多い。何も分からずとも、虚無こそが最強というわけだ。するとそれに乗じて、風も大したことないよねと、その真価を理解することなく貶める者が必ず出てくる。だからこそ、今このまま風を舐められる訳にはいかない。例え授業の進行を遅らせてでも、彼は風の価値を説かなければいけない。なぜなら、彼には揺るぎなき信仰があるからだ。風の他に最強は無し、ギトーはその信徒である。彼は己の信念を貫くべく、珍妙な亜人相手に真つ向から風の優位性を説く道を選んだ。

「本来この授業は生徒のためのものであり、使い魔のためにはやっておらんのだが、

まあ、いいだろう。特別に答えてやろうではないか。先ほども言った通り、風は全てを

吹き飛ばす。虚無は伝説ゆえ、残念ながら試すことはできないが、きつと風によって

薙ぎ払われることであろう」

ギトーは一旦教室を見回し、今の答えだけではやはり生徒たちが納得しないのを見て取ると、更に付け加えた。

「よしんば虚無が風で薙ぎ払えぬものだとしても、風の優位に違いない。繰り返しになるが、

風は目に見えぬ。それはつまり、風を相手取る者はどこに迫り来るとかも分からぬ風の刃から

身を守らねばならぬということだ。また風から逃れることも容易ではない。風の強さに

耐え兼ねた者が、何か物陰にその身を隠したところで、風はその横から回り込み、容赦なく

その者へと吹き付ける。更に言えば、風メイジ相手に先んじて杖を振るえば勝てる

思うのも、甘い考えと言えよう。風は他の何ものよりも速きものゆえ、同時に杖を振っても、

先に魔法が届くのは風系統である。生半可な杖捌きでは、その差を埋めることなど出来ない」

魔王は意外にも素直に、ナルホドと頷きながら話を聞いていた。生徒たちも、一時は風が否定されるかもしれないことに浮足立っていたが、話を聞く内に暗い表情へと戻りつつあった。

「しかし虚無が、エー！ そんなんアリ!? とするほど強かった場合は、

流石にツライのではないですか?」

「もしそうだとしても、やはり風の優位性に揺るぎはない。なぜなら、風の力で虚無を

押し留められぬというのなら、自ら風になってしまえばよいからだ」

お前は何を言っているんだという生徒たちの声を代弁するがごとく、魔王は疑問の声を上げた。

「風になる、ですか?」

「分からんかね? つまりは自らに風をまとわせて戦えば良いのだ。風の力を借りて

動き回れば、あまりの速さに相手は付いてこれず、杖をこちらに向けてることすら

難しくなる。そうやって誰にも掴めぬ風になってしまえば、もはや恐れるものは

何もない」

「つまりは、当たらなければどうということはない、ということですね



！」

「その通り。素早き風の力を借りて虚無を避け続け、動きの劣る相手に向け

素早き風の刃を浴びせ続ける。相手が始祖ならばともかく、こんなものは

負ける方が難しいというものであろう」

「どうだねとギトーが魔王を見やると、彼は随分と従順な反応を返した。

「なるほど、確かにゴモットモです。風になってしまえば負け難くなる。いえそれどころか、

先に千の風になってしまえばそれ以上負けるハズがありません！」  
「亜人にしては、なかなか詩的な表現ではないか。ともかく、理解して貰えたようで何よりだ」

ギトーが教室を見回すと、同胞たる風メイジ以外の生徒は、いい感じに打ちのめされてきた様子であった。だが彼の経験からすると、生徒たちを今年一年間、思い上がらせないようにするには、まだ押しが足りない。彼はそろそろ頃合いだろうと、風が最強である決定的な証拠について話をしようと考えた。しかしそこで彼の頭に、ある不安が過った。

あの亜人の使い魔は、いささか自分の見解に従順過ぎるのではないだろうか？

悲しいことに、普段風メイジ以外の生徒から反抗的な態度ばかり取られている彼には、自分の話に素直に頷く魔王の態度をそのまま信じることが出来なかった。

……実はあの使い魔は表面上、納得したふりをしているだけで、後から話を蒸し返して来るのではないだろうか？　そもそも先ほどは、彼の質問が切っ掛けでこんな長話をする羽目になったのだ。風の素晴らしさを語ることで自体に不満はないが、とっておきの『最強魔法』を実演した後で、また同じように授業をかき乱されるようでは困る……  
そう思ったギトーはまず、魔王の真意を確かめておくことに決めた。

「それで使い魔君。今の話で風が最強であることにちゃんと納得はしたかね？」

流石の私も、虚無を無条件に神格化する輩を説得出来るとは考えておらん。

しかし最低でも、現実にある四系統の中で何が最強かぐらいは理解しておいて

貰いたいところなのだが？」

魔王はしばらく考え込んでから、彼に再び質問を投げ返した。

「確か、冷気を起こす魔法も風なのでしたよね？」

「如何にも。冷気どころか、雷すら引き起こすのが風である」

魔王はそれを聞いて納得したように頷くと、自らの答えを告げた。

「やはり話を聞く限り、風が最強だと言わざるを得ません」

すると、教室中の土メイジたちが途端に嘆きの声を上げ始めた。

「使い魔君！ 君はまさか土を裏切るといふのかね!？」

一際大きく嘆いているのは、彼とその主にやり込められたことがあるギーシュだった。

また彼は嘆くと同時に、魔王に対して怒りすら感じている様であった。

「確かに僕と君との間には、あのヴェストリの広場での確執がある。

だがそれでも僕は君のことを、土の力を信じ、土に寄り添う者として尊敬していたんだ！

それなのに君は、僕たち土メイジを、いや何より土を裏切るといふのかね!？」

「いえいえ、裏切るとか、決してそのようなことでは無くてですね、ただ別の視点から

モノを見るのもダイジなことでありまして、えー、そういう捉え方をされるのは

不本意と言いますか……」

「あのシュヴルーズ先生の授業で語った言葉は嘘だったのかね!」

「確かに土は超サイコーかもしれませんが、ザンネンながら、純粋な効果で見ると、

どうしても、その、他に見劣りする、そういう印象を受ける側面が無きにしても非ず

でして……」

「僕に勝った君がそれを言うなんて見損なったぞ！」

君、まさか先ほどの実技を見て億したんじゃああるまいねー」

「いやまさか、勇者の風魔法にズタズタにされるのはもうコリゴリとか、そういう

弱腰な態度ではなくて、もっとこうしなやかというか、したたかというか、

柳腰な態度ですわね、えー、その……」

「君には土に対する愛情というものが無いのかあー!!」

魔王は政治家のごとき玉虫色の弁舌で、宥めるように返事を返すが、当のギーシュはそれを聞いてヒートアップしていくばかりである。また他の土メイジもギーシュに同調して、引っ切り無しに魔王へ野次を飛ばしている。魔王の隣に座っているルイズは、耳を塞ぎながら興味なさげにその応酬を眺めていた。

「何でこんなことに熱くなれるのかしら？」

まだ己の系統もよく分からないルイズにとっては、自らの系統に固執する彼らの熱き思いがなかなか理解できないのだった。

「黙りたまえ」

暗い声で呟かれた一言に、教室は途端にしんとした。ギトーはぐりりと教室を見回して生徒たちに睨みを利かせると、最後に魔王へと視線を戻した。

「ふむ、私はてっきり君が土を推すものかと思っていたが、それは思い過ごしであつたらしい。

いやなに、君は土に造詣が深いとミセス・シユヴルーズが話していたものでな。

だがどうやら君は、物事を判断するに十分な理性と見識を持った人物であるようだ」

魔王は褒められて満更でもないのか、『スバラシイ魔人物でござい

ます！』と陽気に返事を返した。

「残念なことに最近の学生は、すぐ自分の系統こそが最強だと思いたがるから困る。」

生徒諸君にも、君の柔軟な態度を見習って貰いたいものだ」

そう嘆くギトーに対し、風メイジを除く全ての生徒たちは内心、それはギャグで言っているのかと突っ込み、いら立ちを隠せずにいた。一方、ギトーは彼らから向けられる恨みがましい視線を目にも留めず、一人浮足立っていた。何せ、風メイジでもないのに風の真価を素直に認める者というのは、彼の経験上大変少ないものであったからだ。新たなる同胞を迎えたことに喜んだ彼は、もう授業に戻っても良いというのに、魔王との会話をついつい続けてしまうのだった。

「これは興味本位で聞くのだが、君はどんな理由で風を最強だと思うのかね？」

先ほどは冷氣系の魔法を気に掛けていたようだが？」

「ハイ。風の最強を証明するには、やはり冷氣魔法が一番です！」

教室の端ついで、青髪の少女がぴくりと眉を動かした。

「魔界でも多くのマモノたちから冷氣魔法の強さが信頼され、用いられています。」

やっぱり、戦闘では冷氣系を使えるか否かで雲泥の差が出ますからね。

魔界で超人気な伝統あるドラゴン狩猟クエストを受注する魔王には、

一般教養として凍てつくワザの修得が求められるほどなのです！」

「マカイ？ そのマカイとやらの地方では、そんなに冷氣魔法が有り難がられているのかね？」

「ええ、そうです。それにヤッパリ、使うと爽快感がありますからね。勇者が必死こいて

補助魔法を重ね掛けたところに、凍てつく波動拳だとか、凍てつく波動砲やらを叩き込むと、

ゲンナリしたあやつらの顔が見れて、魔王としてもテンション上がっちゃいます！」

ギターは、魔王の言わんとするところがよく理解出来なかったが、話が噛合わないなりに、どうしてもぶつけておきたい自分の考えがあった。風系統に入れ込み過ぎた風メイジとしての、性のさがようなものであった。

「どうにも解せん。確かに冷氣魔法は弱くはない。ウインディ・アイシクル等、

使い勝手の良い魔法もある。だが風には、冷氣の他にも幅広い応用範囲があるはずだ。

君はライトニング・クラウドを知っているかね？ これは何者にも代え難き速さと

貫通力を誇る、強力な雷系の魔法だ。そう、上手く風を操れば、雷ですら起こせるのだ。

この魔法は詠唱の手間こそあるが、ひとたび放てば相手に吸い込まれるように

稲妻が走ってき、どんな防具で身を固めた相手も一瞬で焦がし貫くことが出来る。

これぞ攻撃魔法における、一つ極致と言えよう。だが、それでも君は、冷氣の方が

大事と思うのかね？」

彼の疑問は、彼を信奉する風メイジの生徒たちの疑問でもあった。彼らの注目を浴びながらも、魔王は彼自身のユニークな見解を翻すことはなかった。

「雷魔法は、確かに見栄えもするし、強力でしょう。かく言う私も、勇者の放つ雷系呪文に

悩まされたことは数知れずです。……何だか、思い出すだけでビリツと来そうです。

ですが、それでもやはり、冷氣こそ真に恐るべきものなのです」「なぜかね？ それはもしか、雷は小さな氷の粒がぶつかり合う摩擦から生じる故、

雷魔法も冷氣系に内包されるという、そのような理屈で言っているのかね？」

「いえいえ、そうではありません。何もコムズカシイ理屈があるわけではないのです。」

冷気魔法が風の最強を証明するたった一つのシンプルな答え、それはこの世で最強の魔法が、

冷気魔法の一つであるからです」

魔王の言い放った言葉に、教室中の生徒が騒めいた。今まで最強の系統を論じていた教室で、今度は最強の魔法は何かと来た。今まで白け気味だった風メイジ以外の生徒たちも、最強の魔法と聞くと気にせずにはいられない様子であった。

「ほう？　君は最強の魔法について意見があるというのかね？　面白いではないか。」

私に言わせれば風における最強とは、風があまねく存在することを利用した……

いや、これは後で話そう。まずは君の考える最強とやらを教えて貰おうではないか」

授業が長き脱線が続ける中、ギターはここに来てようやく、彼が元々考えていた授業内容に戻る道筋を思い描き始めていた。巫人の使い魔がいくら風を認めているとはいえ、彼は所詮素人。風の知識に劣る彼の話をダシに、プロフェツシヨナルである自分が語る『最強』を実技とともに披露すれば、生徒たちも大いに風の偉大さを学び取るであろうと、そんなことをギターは考えていた。

「シヨージキ、この魔法が放たれるところは見たくもないですし、口に出すのすら

大変オソロシイ。ですが、これもルイズ様のキョーイクのため。いい機会ですから、

お教えしておきましょう」

魔王は、普段の不遜な態度が嘘であるかのように身震いし、彼の考える最強の魔法を告げた。

「この世で最も強力で、マガマガしい魔法。一度発動すれば、どんな歴戦の勇者だろうが、

あるいは魔王であろうとも、回避はおろか、耐えることすら叶いま

せん。

その恐るべき魔法の名は……！」

「フリーズです！」

教室が凍り付いたように静かになる中、ギターは冷や汗を掻いた。風魔法の教師ともあろう彼が、聞いたこともない魔法であった。相手がどこからやってきたかも分からぬ巫人であることを失念していた、彼の失策であった。これで生徒の皆が知らなければ良いが、もし一人でも知っている者がいれば、ギターにとって、教師としての沽券に關わる。彼は冷や汗を掻きながら、自身の動揺を押し殺して言った。

「えー、諸君。今の見解に対して、自由に意見を述べ合ってみたまえ」  
途端に、生徒たちから疑問の声が上がった。知らない魔法が出てきたとなれば、素直にそれを聞くことが出来るのが、子供の特権というものである。

「聞くからに冷気って感じだな」

「でもそんな名前の魔法、本当にあつたか？」

「何にしても、どうせ凍らせるだけだろう？ 一体どこが最強なんだ？」

否定がちな意見を口にする生徒たちに向け、魔王は嘆かわしいと言わんばかりに首を振りながら答えた。

「どうやらワカッておらんようですな。この魔法は名前こそ単純ですが、『ウインド』のような

ちやちな魔法とはワケが違うのです。『フリーズ』は確かにモノを凍らせます。

しかし、カンペキにモノを凍り付かせるからこそ、サイキョーでサイアクなのです。

『フリーズ』を食らったが最後、その者は時の流れを止め、ブツツという音と共に

闇の世界へと旅立つのです！」

魔王の説明に、教室中は騒然とした。

「何だね、その無茶苦茶な効果は！」

「冷気魔法じゃなかったのか!?!」

余計に訳が分からないと、生徒たちは一斉に非難の声を上げた。しかし魔王は、至って真剣な表情で、さらに詳しくこの魔法のことを語り始めた。

「確かに『フリーズ』は、ものを凍らせる魔法です。でも皆さん、『凍る』ということの

ホンシツを考えてみて下さい。単に『冷たい』なんてことよりも、もつと重要なコトが

あります。それは、あらゆる動きや変化が『止まる』というコトです」

「確かに凍ったならば、流れ移ろう水とて動かぬ氷と化すが……」

ギトーが戸惑いながらも口を挟んだのに魔王は頷きを返し、話を続けた。

「思い浮かべてみてください。激しい寒さの冬に、流れ落ちる滝の水が、落下しながら氷と化す

様を。あるいは遙か北方の凍えるような寒さの海で、うねるような大波がソツクリそのままの

形で凍りつき、動かなくなる様を。そこにあるのは、まさしく時の止まった世界です」

生徒たちは魔王の語る風景を思い浮かべ、常とは異なる極寒の世界に思いを馳せた。

「そしてモチロン、凍ってしまうのは無機物だけではありません。永久凍土に埋もれた哀れな

生き物たちは、腐ることもなく何千年も、何万年も、元の姿を保ち続けるのだと言います。

『凍る』とはキューキョク的に、ものの動きや変化を奪い去り、その時すらも止めてしまう

というコトなのです。では、改めて『フリーズ』の効果を思い出してみてください。

この魔法は凍らせるのです。カンペキに！」



生徒たちはそれを聞いて、ぞつと身を竦ませた。

「この魔法を食らった者は、その場で完全に凍り固まってしまいます。もはや何かを感じたり、

考えることすら出来ません。動けもせず、かといって朽ち果てもせず、世界の時の流れから

取り残されてしまうのです！」

生徒たちは、そのあまりに強力な魔法の存在にショックを受け、茫然とした表情を作っていた。顔色の変化に乏しい青髪の少女ですら、この時ばかりは手にした本を落としていた。そんな中、風メイジの一人であるマリコルヌは、恐怖に耐えきれず、思わず席を蹴って立ち上がり、声を荒らげた。

「あり得ない！　いくらなんでも、そんなの反則すぎる！」

「言っておきますが、別にフリーズだけではありません。冷氣魔法には、他にも似たような

効果を持つ、ある意味もつと恐ろしくてキョークな魔法があるのです！」

「嘘だろ!?　そんなのデタラメだ！」

今度は、別の風メイジであるヴェリエが悲鳴を上げた。

「信じたくなるのも無理はありません。私だって、これが冗談ならどれだけ

良かったことか！　しかしジツサイ、私はいくつも見てきました。この魔法によって

凍り付き、永遠に時を止めた世界の数々を……」

教室中の人間が、ゴクリと唾を飲み込んだ。

「その災厄極まる魔法の名は……！」

「エターナル・フォース・ブリザードです！」

生徒たちはそれを聞いて、先ほどよりも余計に顔を青ざめさせた。なんせ、ただのブリザードではない。エターナル・フォースなのである。意味はよく分からなくとも、字面だけで強そうである。察しの良

い生徒たちは、そうやってこの魔法のとてつもなさを感じ取ったのだった。

「そ、それは、一体どういう魔法なんだ？」

「一瞬で相手を周囲の大气ごと氷結させます。相手は死にます」

聞かなければ良かったと、マリコルヌは体をぶるぶる震わせながら席に着いた。

「でもこの魔法、本当に恐ろしいのは、実はその後だったりするんですよ」

「まだ終わりじゃないのかね！」

生徒たちが更なる悲鳴を上げる中、魔王はこの魔法がもたらす、本当に恐ろしい結末を語り始めた。

「エターナル・フォース・ブリザードはその名が示す通りエターナル、つまりは永続魔法です。

要するに相手を凍らせた後も、どんどん周囲を冷やし続けていってしまうのです」

「なんだそれは！ 世界中が冬になってしまうじゃないか！」

「その程度で済めばヨカツタンですけどね」

「な、なんだね。それじゃ、まるでその先があるみたいじゃないか」

乾いた笑いを浮かべるギーシュに、魔王は沈痛な面持ちで告げた。

「先ず始め、事は世界的な気温の低下から始まります。魔法を使ったその日の内に、

急激な気温低下による気象変動で大雨や雹・霰が降り始め、次の日には海水の塩分濃度が

大きく変化します。これにより大規模な海洋変動が引き起こされ、深層の冷たい海水が

海の表面近くまで押し上げられることで、余計に寒冷化が進んでいきます。そして更に翌日、

魔法が唱えられた日から見て明後日には、極度の寒冷化によりスーパーフリーズ現象が発生し、

世界全てが凍て付きます」

魔王の語る情景は、まるで黙示録にて語られるこの世の終わりのよ

うであつたため、皆は恐れ戦きつつも、彼の言葉から耳を離せなくなつた。

「トーゼン、そうなたが最後、二度とその世界は明日を迎えませんが、どれだけ皆が

新たに紡がれるニンゲンどもの物語に期待を寄せていても、カンケーないので。

待ち続けて1か月が過ぎ、それから半年が経ち、半年が1年、1年が2年、更には

もつと長い年月が流れていく。しかしそれでも世界は一向に変化せず、遠いあの日の

思い出のままに取り残されてしまう……。エターナル・フォース・ブリザードは

そうやって、永遠なる世界を作り出してしまふ恐るべき魔法なのです！」

魔王の話があまりに壮絶であつたため、生徒たちは皆、重く苦しい気持ちを抱き、それと向き合ねばならなかつた。

「ま、安心してください。この魔法はあまりのキケンさゆえ、普段は黒歴史として

封印されています。イロイロと拗らせた魔法使いが現れない限り、そんなことには

ならないでしょう！ ……たぶん」

あまりに重たくなつた空気を軽くしようとしてか、魔王はより愉快な、猛吹雪により敵の集団を遭難させ、狂おしい寒さにより相手をふんどし一丁でハッスルさせる魔法“Hack Colder Sun”について語つた。しかしそれを聞いて笑う者は、誰一人としてい

「二」

「二」

あまりにエゲツナイ冷気魔法の数々を聞いた生徒たちは、もはやドン引きしていた。風魔法の信奉者、ギトーですら死んだような目をして、張り付いたように動こうとしなかつた。重い沈黙が流れた。静寂を破つたのは、一人の生徒の、震えるような声であつた。

「い、今の話！ 本当ですか、先生！」

ヴイリエは狼狽えながら、すぎるようにギトーへ問い掛けた。だがそんなことを聞かれても、困るのはギトーである。普段自分を取り繕ってばかりいる彼が、やつとの思いで口から出したのは、彼の心のままを語る、正直な言葉だった。

「そ、そんな魔法は知らない。私の知ってる風魔法じゃない……」

それっきり、教室は再び沈黙に包まれた。どんよりとした、重苦しい空気の漂う静けさであった。ギトーは、風一つ吹かないじつとりとした空気に耐えかねて、焦るように言葉を吐き出した。

「と、とにかく！ ヘンピな巫人が住む、どこだか分らぬような僻地の魔法はさておき、

諸君らも風が最強であることに疑いはなからう！」

今は、教室中の誰もがモヤモヤした気持ちを抱えて、集中出来なくなっていたが、ギトーはその空気を必死に入れ替えるべく、強引な風を吹かせ続けた。

「さて、既に風の優れた性質について、私は多くを語ってきたと思う。だが風にはもう一つ、

決して忘れてはならぬ重要な特徴があるのだ。おそらく風メイジ以外の諸君らであつても、

一度は聞いたことがある言い回しであろう……『風は遍在する』」

生徒たちは直前に聞いた嫌な話を忘れようと、集中出来ないなりに必死にギトーの言葉へ耳を傾けた。

「これは、風が至るところにさまよい現れることを意味している。そしてこの性質を

最大限に利用した風魔法の極致、それこそが『遍在』だ。この魔法はスクウエアにしか

唱えられぬ」

ギトーは体の前に腕を伸ばし、杖を立てて、生徒に聞かせるように呪文をゆつくりと唱え始めた。

「ユビキタス……」

彼がそう唱えた途端、教室内の空気の何かが変わった。目に見える

何か起きた訳ではない。しかしよく勉強している風メイジの生徒であれば、それは気圧が変化しているのだと気付いたことであろう。

「デル……」

生徒たちは、風と呼べるか呼べないかぐらいの空気の流れが、絶えずギトーの立つ教壇に向け流れていくのを肌で感じた。何か、とんでもないことが起こる。生徒たちは、術者が嫌味なギトーであることも忘れ、机から身を乗り出して魔法が完成するのを待った。ギトーは口元にふっと笑みを浮かべ、最後の一節を唱えた。

「ウインド……中止！ 授業は中止ですぞ！」

急に教室へやってきて大声を上げたコルベールを、ギトーは啞然として見つめた。彼自慢の魔法を遮られたからではない。彼の禿げ上がっているはずの頭に、見事なロールのかかった金髪がふあっさりに乗っかっていたからだ。貴族社会においてかつらを被ること、それ自体は珍しくない。しかし冴えない中年を体現するかのような彼の頭に、突如として髪が不自然にこんもりと生い茂った様を見ると、さしものギトーも唖ってしまうのだった。生徒たちも彼の明らかに作られた頭を見て、妙な雰囲気になっている。

「む、実技の途中でしたかな。まずは杖を降ろして下さい」

「どういふことか、すっかり説明して頂きますぞ」

ギトーは不承不承といった様子で、構えていた杖を下した。その時、不幸なことが起こった。ギトーが遍在を作るためにかき集めていた風は、杖の制御を離れて周囲に散らばっていく。その時に吹いた一陣の風が、コルベールの頭上にあるものを捉え、ひらりと舞い上がらせた。風はすぐに止み、一瞬だけ浮いたかつらはぼとりと床に落ちた。コルベールは周囲の啞然とした表情を無視し、黙って落ちたカツラを拾おうと身を屈めた。そこでまた不幸なことが起こった。遮る物を失った彼の頭頂部に、窓から差し込んだ日の光が反射した。

「うおっ！ マブシッ！」

強い光に目を傷め、魔王は思わず叫んでいた。コルベールはその言葉聞きつけ、ギロリとした眼光で、かの使い魔を睨み付けた。隣に

座っていたルイズが身を竦ませ、他の生徒たちが緊張に包まれる中、教室の端つこに座っていたタバサがポツリと呟いた。

「月は二つ。太陽も二つ」

一瞬の静粛の後、教室は爆笑に包まれた。

キウルケも大笑いしながらタバサの肩を何度も強く叩き、身悶えている。

「あなた、それは反則よー!」

コルベールは肩をふるふる震わせ、額に青筋を立てながら怒鳴った。

「黙らっしやい、この小童どもが! 私だって、私だって好きで禿げているわけでは

ないのですぞ!」

「あなたの頭の事情など、どうでもよろしい」

ギトーによってぴしゃりと叩き付けられた冷たい言葉に、コルベールは一瞬でしゅんとなってしまうた。

「そんなことよりも、授業が中止ですと? それにそのめかし込んだ恰好……」

まさかこの学院に?」

コルベールは、『おお! そうでした』と、慌てて生徒たちに事の次第を告げた。

「えー、急な話ではありますが、今日の授業は全て中止となります。しかし皆さん、

呑気に休んでる暇はありませんぞ。本日はトリステイン魔法学院にとってこの上なく

名誉な、めでたき日となるのですから」

何事だろうかと生徒たちが首を傾げる中、コルベールは皆にとっての一大事を告げた。

「恐れ多くも先の陛下の忘れ形見、アンリエッタ姫殿下がこの魔法学院に行幸なさることと

相成りました」

教室は、生徒たちのどよめきと歓声で、一瞬にして沸きあがった。

「静粛に、静粛に！ 非常に喜ばしいことなのは分かりますが、皆さんは貴族らしく

節度ある態度を心掛けねばなりませんぞ。先ほどのように、何かあったとき下品に

大声で笑い立てるなどはもつてのほかです！ そのようなことでは、王室に教育の成果が

疑われますぞ！」

そう言つてコルベールは一旦息を付くと、改めて生徒たちに向き直り、彼らにすべきことを告げた。

「妃殿下の御一行に対し、粗相があつてはいけません。直ちに学院の全力を挙げて、

歓迎式典の準備を行います。そのための授業の中止ですぞ。正午までに、生徒諸君は正装の上、

門に整列すること。此度の行幸は、諸君らの成長を妃殿下にお見せする絶好の機会と

なります。お目見えがよろしくなるように、しっかりと杖を磨いておきなさい！ 以上！」

そう告げるなり、コルベールは急いで教室を立ち去ろうとした。ギトーも急いで教書を抱え、彼に続こうとした。しかしコルベールはふと立ち止まると、教室の片隅へと目を向けた。そこには手にした本を静かに見下ろす、小柄な青髪の少女の姿があつた。

「そうそう、忘れるところでした。ミス・タバサはこのまま職員室まで来なさい」

力のこもつた怖い声に、タバサは無反応を貫いている。しかし隣に座っているキュルケは、彼女の本を持つ手が少しだけ震えたのを見過ぎしはしなかつた。無口な友人に代わり、キュルケは、恐る恐るコルベールに問い掛けた。

「その、ミスタ。本日はお忙しいのではなくって？」

「忙しくてもやらねばならぬことはやるのです！ なんですか、さっきの貴方のふざけた言葉は！」

妃殿下がお見えになるまでに、キツチリと反省して頂きますぞ！」

コルベールは再び顔を赤くしていた。どうやら先ほどのことを思い出して、怒りがぶり返してきたらしい。これは不味いことになったなどキュルケが焦る間にも、コルベールに急かされたタバサは、ぎこちない動きで荷物をまとめ、今にも席を立とうとしていた。

「そうですわ、ミスタ・コルベール！ 私、先生にお聞きしたいことがあつたんです！」

突如、大声を上げたキュルケに、コルベールは目を丸くした。

「一体、何なんだね、ミス・ツエルプストー？ 先ほどから言っているように、私どもは

これから大変忙しい。質問は後日にして頂きたい」

キュルケはコルベールの険しい剣幕にうっと口詰まるも、そのまま言葉が続けた。

「大事なことなんです！ どうしても今確認しておきたいんです。私だけじゃありませんわ。

他のクラスメイトだって、気になっていることだと思っんです。決してお時間は

取らせませんわ！」

「そんな暇はありません。さあ、ミス・タバサ！ だらだらしていないで

早く荷物をまとめるのです！」

「聞いてください先生！ 私たちは普段から魔法の腕を必死に磨いていて、

今日はその誇りを胸にこのトリステイン王国の妃殿下をお迎えすることになります。

ですが私たちの心は今、大きく揺らいでいますわ。私たちが必死に学び、成長した姿を

お見せしようという時に、私たちの誇りに対して自信が持てずにいるのです！

ですからどうしても一言、先生のお答えが欲しいんです！」

キュルケの深刻そうな言葉に真剣さを感じ取ってか、コルベールは態度を改めてキュルケに向き直った。



「本当に大事なごとのようですね。そこまで言うのならばよいでしょう。」

何が聞きたいのか言ってみなさい」

キルケは彼が耳を貸してくれたことに胸をなでおろすも、すぐにキリツとした表情をするとコルベールに質問を投げ掛けた。

「ミスタ・コルベール、最強の系統とは何ですか？」

それを聞いた途端、コルベールはあからさまに面白くないことを聞いたという顔をした。

「下らない！ 下らないですぞ！ まだ青いメイジたちがその手の話題に夢中になるのは

知っていますが、そんなもの取るにも足らぬ下らない話です！ 全く嘆かわしい！」

コルベールは、『ですが』と続けて、生徒たちを見回した。

「これだけを言っても分からぬ者がいるといけないので説明しますが、そもそも何が最強か

などは、その時々々の状況や術者の力量次第で変わるものです。それに例え、火なり水なり

土なり風なり、果ては虚無まで、どれかが最強であったとして、それが何だというのです！

諸君らがどの系統に秀でたメイジであれ、それら一つ一つの系統は、他のどの系統にも

取って代わることの出来ない、特別な役割を担っているのではないのですか？」

コルベールは一旦言葉を止めると、ゆっくりと息を吸い込んだ。

そして先ほどよりは少し落ち着いた口調で、生徒たちに語り聞かせた。

「もし君たちが不便を感じるであろうとも、自らの系統というものは望んで変えられる

ものではありません。しかし嘆く必要は全くありませんぞ。そもそも系統魔法には、

その全ての属性に思いも寄らないような力や可能性が秘められて

いるものなのです。

私は火のメイジではありますが、世間で言われるように火が破壊だけを司るものとは

考えておりません。そもそも火とは、人類に高度な文明をもたらした偉大な存在であり、

それは今も変わらないはずなのです。嘘だと思えば、火系統の授業で私の発明品を

披露致しましょうぞ。とにかく、一見ものを破壊し尽くすしか能が無さそうな火にだって、

色々な使い道が考えられるのです。それは当然、他の系統でも変わりありません」

コルベールの真摯さが伝わったのか、生徒たちは普段片手間にしか聞かない彼の話にも、深く耳を傾けていた。

「それに世の中、魔法だけが全てではないのです。格下のメイジが、ちよつとした工夫で

格上のメイジを打ち破った話など、戦場ではいくらでもあります。宮廷で杖を振るう

方々だって、皆々トライアングルかスクウェアだなんてことはないでしょう？ 確かに

この学院は魔法を学ぶための場ではありますが、君らはそれだけに囚われず、広い視野を

手に入れるべきなのです。もし今、あなたたちが自分の魔法のことで悩んでいるのだとしたら、

先ず一番にすべきは、自らの系統が持つ可能性を信じていることです。その上で、自らの

置かれた状況や自身の実力を鑑み、どう工夫して、あるいは努力して苦しい局面を

切り抜けるか考えること、これが大事なのです。これは学院を卒業してからでも変わらぬ

一生の真理ですぞ。もし最強の系統などというものがあるとして、そんなものに

かまけていては、いつか足元をすくわれますぞ！」

教室は一度しーんと静まり返った後、爆発的な拍手の音に包まれた。普段の授業で、ここまでの好反応を得ることがないコルベールは、戸惑いを隠せない様子でしどろもどろに返事した。

「……………??? 何か分かりませんが、君たちの助けになれたなら何よりです」

生徒のほとんどが万来の拍手を惜しまぬ中、キュルケだけは一人、ムスツとした表情で不貞腐れていた。

「火を最強とは言つて下さらないのね。火系統の教師だと言うのに……………」

だがここに、もっと大きな不満を抱えた人物がいた。

コルベールは尋常ならざる気配を感じ、慌てて後ろを振り返った。「ミスタ・コルベール。私とあなたとは、教育方針に大きな開きがあるようですね」

「? はて、ミスタ・ギトーは何をそんなに…………… ああつ!! そういう……………」

対人関係の機微に疎いコルベールも、ギトーに関する噂を思い出して、ついに自分が何を仕出かしたか察した。彼の呑気そうな顔が、みるみる内に苦虫を噛み潰したような表情へと変わっていった。彼はギトーから顔を反らすと、生徒に向け、驚くような早口で話を締め括った。

「ま、まあ、今言ったことはあくまで個人的な見解ということ、この手の質問は

正解のあるものではありません。皆さんは皆さんで、自分なりの答えを見つけ出す

ことこそが 重要なのではないのでしょうか? それでは忙しいのでこれにて!!」

「お待ち頂きたい! ミスタ・コルベール!!」

慌てて教室を後にしたコルベールを、ギトーは疾風のような速さで追い掛けた。

「……何とかごまかせたみたいね」

キュルケが胸をなでおろす中、タバサはポツリと呟いた。

「ミスタ・コルベールは良いハゲ」

皆がうんうんと頷く中、キュルケの目に一人きよろきよると辺りを見回しているルイズの姿が目に入った。

「ねえルイズ、あなた何してるのよ」

「私の使い魔が消えたわ！ 気付いたら、どこにもいないのよー！」

「ええ？ ……確かにどこにも居なさそうね。あんなに目立ってたのに……」

ホント、相変わらず、あなたの使い魔って突飛よね」

いつの間に彼は教室を出たのかと、彼女たちが首を傾げていると、突然に教室の外から大声が響いた。奇妙に高く、それでいてしわがれた声は、間違いなく話題の人物のものであった。

「そこの方、教室にワスレモノですよー！」

間も無くして、教室の扉がバタンと開かれた。

そこには立ち去ったはずのミスタ・コルベールが、鼻息も荒く立っていた。

「ミス・タバサ！ 何をしているんだ、早く来たまえ!!」

「」

コルベールは渋るタバサの手を引いて、強引に彼女を教室の外へ連れ出した。生徒たちはそこで、廊下に待ち構えていたギトーがコルベールの後ろから絶えず嫌味な文句を投げ掛ける姿を見た。教師たちはまたも、疾風のような速さで教室から離れていった。ルイズがふと気づくと、いつの間に戻ってきたのか、魔王は何食わぬ顔で彼女の隣の席に座っていた。

「今日もまた一つ、イイことをしてしまいました。私としたことが、コレじゃいけませんよね。」

魔王のコケンに関わりません。何かワルいことで、埋め合わせを考えた方がいいけません！」

「……帰るわよ」

かくして、生徒たちは皆、教室からぞろぞろと立ち去り始めた。

誰一人いなくなった後の教室はしんと静まり返り、もはや風一つ吹かない。

## STAGE 24 炎のおくりもの

純白のユニコーンに引かれた馬車が、学院の門を通り抜けて生徒たちの前に姿を現した。

魔法学院の生徒・教職員一同は、一斉に杖を上に掲げた。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ妃殿下のおな——り——！」

生徒たちは緊張と期待とに震えながら、今か今かと馬車の扉が開かれるのを待った。扉が開く小さな音が響いた。その瞬間から、今まで静かだった生徒たちの間から、堰を切ったように歓声が湧き上がった。しかしその歓声は、十分に高まることなく、自然と止んでいった。馬車から姿を現したのは、やせ細り年老いた、面白みの欠片もない男であった。生徒たちが鼻白み、冷たい視線が集中しているというのに、この真面目さの塊のような男は気にした様子もなかった。

魔王はこれを見て、目を細めながら言った。

「……私、この国を少しナメていたようです。アレがこの国の重鎮、アンリエッタ王女！」

「バカ！ あれはマザリーニ枢機卿よ！」

ルイズが怒気を孕んだ声を上げている間に、周囲から再びの歓声が上がった。ルイズが釣られて顔を向けると、美しく可憐な一輪の百合、アンリエッタ王女が馬車から降りて来たところであった。姫君は学院長のオールド・オスマンと二言三言話すと、彼に連れられて本塔への道を歩き始めた。赤い絨毯を敷いた道の両脇から、万歳の声が沸き起こる。アンリエッタ姫はそれにつこりほほ笑んで、手を振った。

「なあんだ、あたしの方が美人じゃないの」

キユルケは歓迎の列から遠いのをいいことに、随分な本音を漏らしていた。

「ねえ、あなたはと思う？」

「タイプが違う」

タバサはそう言ったときり、本に目を落として二度と顔を上げなかった。どこかで誰かが、『ムスメの方がカワイイに決まっています！』と

叫んだが、それもすぐに喧騒の中に埋もれた。

彼女らとは違い、ルイズはしばらく、真面目に王女とお付きの者たちの行進を眺めていた。しかし、ある時からぼつと頬を染め、一つのものを必死に目で追いつめるようになった。

出会うことの無かった長い年月など関係ない。ルイズは、すぐに気が付いた。遠くからで、あまりはつきりとは見えないが、間違いない。あれは幼い頃に優しくしてくれた、憧れのワルド様に他ならぬ「ウム、ちよつと遠いですね。背伸びしてもなかなか見えません！」

ひよこひよここと、彼女の視界を遮るように背伸びやジャンプを繰り返す魔王に、ルイズは思わず拳を握りしめた。しかし今は、王女殿下をお迎えする場である。そこを弁えて、彼女は力を込めた腕を背中に回し、抑えた声で注意を促した。

「あなた、私の前をウロチョロするんじゃないわよ。」

姫様をお迎えする場なんだから、もっと大人しくしてなさい！」

「しかし、セツカクの機会なんです。近くでよく見てみたいと思うのが

ニンゲンのサガつてもものじゃあないですか」

『特に私は魔人間ですから、たまにはシゴトの息抜きがヒツヨーなんです！』という魔王の言葉に、ルイズははあくど、長いため息を付いた。

「もともと、アンタみたいな得体の知れない亜人には、姫様にお目にかかれること自体が

奇跡のようなものなんだから、遠くから見られるだけでもありがたいと思いなさい」

魔王はそれを聞くと、悩まし気に頬を掻いた。

「ウムム…… これ以上、近付くのはムリとなると……」

セツカク用意したコレが、無駄になりかねませんな」

「……？ 何よそれ？」

ルイズが視線を下ろして見ると、魔王の片手には特に飾り気も無いガラスの瓶が握りしめられており、その中には透明な液体がたぶたと揺れていた。

「私、魔がりなりにも『王』ですからね。この国のお姫様が来られると  
いうことで、

ロマンチックな贈り物でも思っていたのです」

『魔王も王も、王のうち！　そして王のものは魔王のものは魔王のものは魔王のものなのです！』と、彼は元気よく宣言した。ルイズはそれを全部聞き流しながら、首を傾げた。

「まさかそれが贈り物？　姫様に対して敬意を表そうという心意気は認めるけど、

そんな貧相なものを出したら逆に失礼よ。大体、こんな場所でやることでもないわ」

「いえいえ、これだけで贈るわけではありません。本当の贈り物は、これに一工夫加えるのです。それに、これはお姫様方に花を添えるためのモノでもあるのです」

彼の言葉を聞いて、ルイズは余計に首を傾げた。

「一体、どういうつもりだったのよ？」

「いいですか、先ずはこのビンのフタを開けます。」

魔王が腕に力を込めると、固く締められたガラスのフタが擦れ、ギーツという音を立てた。そしてスポンという音と共にフタが外れると、辺りにぶんとした匂いが立ち込めた。

「何よ、そのお酒！　匂いだけで酔いそうだわ」

ルイズがそう言って顔を顰めると、魔王は不思議そうな顔をした。

「お酒ですか？　まあ、ある意味そうですね。お酒100%です。」

100%中の100%と言ってもいいでしょう」

そう言うと彼は、ハンカチ——妃殿下の歓迎に当たり、殊勝にも胸ポケットに突っ込んでいたもの——を取り出した。

「次に、瓶の口にハンカチを押し込みます。……半分ほどで構いません」

怪訝な表情をしたルイズが見守る中、瓶の中でハンカチの端がゆらゆらと揺れた。

「したら外したフタを閉じます。少し力が要りますが、しっかりと閉めておきましょう」



再びガラスの擦れるギギツという音が響いた。

「後は、ビンの外に出ているハンカチの端に火を付ければ、アラ不思議  
！」

炎のおくりものの完成です！」

「……………」

魔王は、ルイズの表情が能面のように強張ったことにも気付かず、  
姫様の行列を見ながら呑気に悩み出した。

「ここからだ、ちよつと距離が足りないかもしれないかもしれませんが、セツカク  
用意したことですし、投げるだけ投げてみましょうか？ 上手くいけ  
ば、歴史に名を残せるはずです。きつと、ギトー殿も褒めたたえてく  
れることでしょう！」

ルイズは沈黙を守りながら、ゆっくりと魔王の横に回り込んだ。

「この贈り物、何がスバラしいって、魔界の人気魔ンガ家、魔ンキー！  
パンチ原作の口魔ンチックなシーンを再現できるところですよ。ね。  
事が終わった後、ルイズ様がさつき夢中になってた、あのダンディな  
おじ様が、姫様にこう語りかけるワケです。『姫様、やつはとんでもな  
いものを盗んでいきました…… あなたの命です！』」

ルイズは、さつと魔王の腕をつかんで捻り上げると、妃殿下の行列  
に背を向けて、ツカツカと歩き出した。

「イタタタタ！ 待つてくださいルイズ様、まだ私なにもしてません  
！」

「何かしてからじゃ遅いのよー！」

歓声を上げて喜びに浸る生徒たちは、彼女たちが離れていくのに気  
付かず、必死に万歳を叫び続けていた。

「あら？」

学院の生徒や教職員に向け、にこやかに手を振っていたアンリエツ  
タは、ある二人組が背を向け、立ち去っていく姿を見つけた。彼女は  
僅かばかりの間、きよとんとした表情を浮かべたが、方々から投げ掛  
けられる歓喜の声に意識を引き戻されると、再び天使のようなほほ笑  
みを浮かべ、手を振りながら学院本塔への道を歩き進めた。その足ど

りは、心なしか先ほどよりも軽やかになっていた。

## STAGE 25 姫君のためなら死ねる

学院からルイズへと貸し与えられた部屋には、何時になく息の詰まるような、殺気立った空気に満ちていた。部屋の主はマガマガしき巫人を壁際に追いやり、憤怒の表情を顔に浮かべている。今だけならば、小さな彼女も、公爵たる父親や厳格な母親に並び立つ迫力を備えているかもしれない。

ルイズは、心の底からアンリエッタ姫殿下を敬愛している。その妃殿下に魔王が狼藉を企てたため、彼女は本気の怒りを見せ、自室に戻ると彼をきつく簀巻きにした。そして彼女は、そのまま彼を部屋に閉じ込め、一日を過ごした。食事を与えに戻ることもしなかった。罰であると同時に、少しの期待があった。そうやって魔王が、ひもじい思いをしながら一日過ごしていれば、それで彼も少しは自身の軽率かつ不埒な行動を反省するものと、そう彼女は思っていた。

ルイズは魔王の様子が気になり始めたこともあり、その日は早めに夕食を終えて、部屋に戻った。そこで彼女が見たものは、何重にも重ねてあったはずの縄をどうやってか振り解き、ワイングラス片手にチーズをつまむという、悠々自適な様子で一人過ごしている魔王の姿であった。魔王は彼女の椅子に腰掛けたまま、ゆらゆらと椅子を傾けて遊んでいたが、ルイズが扉を開けて茫然としている姿に気がつくのと、ビクツと体を震わせ、急いで席を立った。

「ア、・アレ!? これはこれはルイズ様、何時になく早いお帰りです……」

「あんた! 縄はどうしたのよ!!」

「……取りあえず、扉を閉めませんか?」

大声が響かぬようにと、ルイズが無然とした表情で扉を閉じたのを見届けると、魔王は釈明を始めた。

「ルイズ様、私を簀巻きにするのはタイヘンだったでしょう? 慣れていないと、大きなものを縛るのはなかなかムズカしいものです。ですが固く縛ったナワをホドクというのは、もつとタイヘンなことなのです。ですから、もうそろそろ頃合いだろうと思って、私の方でステ

に解いておいたのです！」

『ああ、忠誠。これが誠の献身と忠誠です！』と、魔王は己を称えた。

ルイズは、激怒した。

「きよきよきよ、今日という今日こそは許さないわよ！ わわ、私が今まで、どれだけ寛大な心であんたに接してきたか、分かっているなかつたみたいね!!」

今にも手が飛び出しかねないルイズの姿に、魔王は腰を抜かして怯えた表情を見せたが、彼女の糾弾が落ち着く様子はなかった。

「今までアンタは散々失礼なことをしてきたけれど、まさかここまで反省が見られないなんて……!」

それからルイズは怒りのあまり、しばらく押し黙った。そうして沈黙が続いた後、彼女はぽつりとつぶやいた。

「罰が必要ね」

ルイズは、机にツカツカと歩み寄っていった。そして引き出しを開けると、棒状の道具を取り出した。

「そ、ソレはなんでしょうか?」

魔王の問いかけに、ルイズは冷たい視線を返しながら言った。

「何に見えるかしら?」

彼女の手にした棒は、黒くツヤがあり、小さなグリップが付いていた。

「カタチ的に杖、だったり?」

「……確かに似ていなくもないわね。だけど杖の先には、こんなものは付かないわ」

ルイズはそう言うと、彼女の持つ『杖』の先にある、平たくへらのようになつた部分を手で弄んだ。

「それにね、この胴の部分だって、杖よりずっとよくしなるの」

ルイズは凶悪そうに『杖』を曲げて見せながら、魔王にニジリよつていった。

「まあ、不思議な力を持った棒という意味では、『杖』と言えるかもしれないわね。

ある意味、杖より不思議な力を持っているかもしれないわ」

魔王はモーレッツに嫌な予感がして、ごくりと唾を飲んだ。

「そ、それは、ナゼでしょう?」

「だって、ただ振るうだけで、あんなに私を困らせたあんたの態度を魔法のように変えて見せるんだもの」

『詠唱や精神力だつて必要ないんだから』と、ルイズはうそぶいた。

「ま、まさか……!」

魔王のことばを遮るように、ヒュツという空を切る音がした。

試しとばかりに机に叩き付けられた短鞭が、肝の冷えるような恐ろしい破裂音を立てた。

「覚悟、出来てるわよね?」

「ホゲエエエエ!」

魔王は、鞭を振り下ろされる前から悲痛の叫びを上げ始めた。もつともルイズがそんなことに構うはずもなく、彼女は容赦なく鞭を振り上げて、魔王に無慈悲な一閃を加えようとした。しかし彼女の行動は、こんこんと扉が叩かれる、鞭に比べれば随分と温かみのある音によつて遮られた。

そこからの魔王の動きは速かった。ノックの音に意識を取られ動きを止めたルイズに対し、魔王は流れるような動作で扉まですり寄り、ドアレバーに手を伸ばした。

「ルイズ様、お客様でございます!」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!」

ルイズは焦った。この珍妙な使い魔相手に鞭を構える自分の姿が、人に見られればどんな噂を呼ぶことか! ルイズには正確にどうなるか分からずとも、きつとロクでもない結果が待っているであろうことだけは予見できた。彼女は鞭を隠そうと思ふも、この短い時間と焦った頭では、ろくにそれが叶いそうにないことを察した。次の瞬間、彼女は天啓を得た。少なくとも、彼女はその時、そう思った。

鞭は、隠せなくてもいい。代わりに、扉を開けさせなければいい!

足では間に合わない。なら手を使えばいい! ルイズは鞭を振りかぶり、出来得る限り速く飛ぶよう、全身の力を込めてブン投げた。鞭は、びゅんと風を切りながら魔王へと向かっていき、そこで魔王は

ヒョイと扉を開けた。

「ひゃあっ！」

若く可愛らしい少女の悲鳴が響いた。少女は、扉が開くと同時に足を踏み出していたためか、顔を押しさえながらも、前のめるようにして部屋に入った。彼女は深くフードを被っており、ルイズはすぐにその顔を見ることが出来なかった。しかしその声音は明らかに、憎つくき隣部屋の女や、その他のクラスメイトのものでは無かった。それどころかその声は、ルイズにある特定の人物を連想させるものであった。

「ま、まさか……！」

ルイズは、恐れおののきながら少女に近づいた。床に落ちた鞭を見て呆然と立ち尽くしていた少女は、目の前に来たルイズに気が付くと、顔を覆い貸していたフードに手を掛けた。すると美しくつやのある董色の髪が露わになった。そこにいるのはトリステン王国が王女、アンリエッタ姫その人であった。しかし彼女の顔は、昼間皆へと振りまいていた笑みが嘘であるかのように、涙に濡れていた。息を飲むルイズを前にして、アンリエッタはどうとうと語り始めた。

「世の中変わらないものなんてない。最近のアルビオンの情勢を聞いていると、

……

私を取り巻く環境を思うと、つつい気が塞ぎ込みがちになってしまします」

「姫殿下……」

ルイズはアンリエッタの話を、顔を強張らせながら聞いた。

「しかし、そんなあらゆるものが変わっていく世の中にも、変わらないものはあるのだと、私はそう信じてきました。でも…… そう思っていたのは、私だけでしたのね。あなたとの……ヒック！ ……友情だけは……ヒック！ ……え、いえんに続くと思ってましたのに！ ヒック！ まさか鞭で追い返そうとするなんて!! ひどい！ ひどすぎますわ、ルイズ・フワンソワーズ!!」

ルイズは顔を蒼白にし、声を震わせながら答えた。

「ちちち、違いますわ、姫殿下！　これは何かの間違いなんです。

そう偶然、偶然悪いことが重なっただけなんです！」

「そんな、ひどい……　私が誰にも見つからないようにと、心細くなりながらも

一人であなたに会いに来たことを、悪いことですか?！」

「ち、違います！　それは言葉のあやです！　全ては誤解なんですわ、姫殿下！」

ルイズの必死な弁明にも、アンリエッタの表情は暗く沈んだままだった。

「誤解?　誤解ですって?　誤解も何も、私の呼び方まで仰々しくなって……」

昔はけんかこそすれ、アンと呼んで下さったのに！」

「そ、それは私も幼かったからですわ！　今さらそんな、恐れ多い呼び方なんて出来ません！」

「……やっぱりそれが本音なのですわ、ルイズ・フランソワーズ。

私とあなたとの間の友情は、いつの間にか、崩れ去っていたのですわ……！」

「そ、そうじゃないんです！　これは不幸が重なって、いえ私の至らな

いばかりに、

大変な失礼を働いてしまつて……！」

「思えば馬車から降り立ったときも、私に背を向けて立ち去っていくあなたの姿を見たわ！」

本当に、本当に変わつてしまつたのね……！」

アンリエッタは震える手でフードを被り直し、ルイズに背を向けた。ルイズは、このまま彼女を帰すわけにはいかない、非常に動揺した。しかし、部屋をそのまま出ていくかに思われたアンリエッタは感情が高ぶつたのか、その場にうずくまつてしまった。悲しそうな嗚咽を漏らすアンリエッタにどう接してよいか分からず、そこら中に目を泳がせたルイズは、ここに来てようやく魔王を視線の内に戻した。

「そ、そうだわ！　姫様が今悲しい思いをしているのも、私が姫様にとんだ失礼を

働いてしまったのも、全てはこいつのせいなんです！」

「ヒエッ！」

いきなりダシに使われた魔王は、驚きのあまり珍妙な悲鳴を上げた。

だがその素っ頓狂な声に釣られて、アンリエッタも思わず顔を上げた。

「こいつ……う？」

ルイズは、ここぞとばかりに熱弁を振るった。

「そうです！こいつが悪いんです！ もともと姫様がこの学院に來られた時に、こいつがあまりに失礼な事を仕出かそうとしたものだから、それで姫様を最後までお迎えすることが出来なかつたんです！ そうでなければ、どうして私が姫様のお姿から目を反らしましょうか！」

ルイズは、アンリエッタが話を聞き始めたのを見て取るや、更に声へ力を込めて熱く語った。

「それに鞭だつて、この不屈き千万なこいつを罰するために振るつていたのです。

姫様を大切に思えばこそ、無礼を働こうとしたこいつが許せなくつて、許せなくつて！」

それでつい手に力を込め過ぎたら、勢い余つて滑つて飛んで行つてしまつたんです。

それが間の悪いことに…… いえ、今のは言い訳でした。全ては私の未熟さゆえです。

姫様のお心を深く傷つけたこと、申し開きのしようも御座いません。何なりと私に罰を

お与え下さいませ!!」

そう言つてルイズは膝を付き、齒を食いしぼるように沈痛な面持ちで頭を下げた。

アンリエッタはしばらく黙つてその様子を見ていたが、やがてルイズの堪え切れない様な辛そうな横顔に気付くと、言葉を発した。

「顔を上げてちょうだい、ルイズ・フランソワーズ」



だがルイズは、すぐに首を横へ振った。そんな彼女へと、アンリエツタは言葉を重ねた。

「あなたがそんな顔をしていたら、私まで悲しくなってきましたわ。大切なお友達にそんな顔をさせるだなんて、私も王女失格ね」

「とんでもありません！ 悪いのはすべて私の方ですわ！」

アンリエツタはいいえと、首を振った。

「元を正せば、私が早とちりしたばかりに、いえ何よりもあなたとの友情を僅かばかりでも疑ってしまったばかりに、こんなことが起きたのよ。あなたにはひどいことをしてしまっただわ。本当にごめんなさい」  
「そんな、頭を下げるなんてやめてください！ 姫様が誤解なされたのも無理はありません。鞭を放り投げて姫様に当ててしまうなんて、言い訳のしようもない失態ですわ！」

アンリエツタはしばらくルイズと見詰め合うと、くすりと笑った  
「じゃあ、お互い悪かったってことかしら？」

ルイズは再び焦った。自分が悪いことはあれど、姫様が悪いなんてことは方に一つもあり得ない。しかしここで頑なに否定しては、折角姫様が与えてくださった仲直りの機会を無下にしてしまう。ルイズは心を決めて、返事を返した。

「はい、いいえ。すべてはこいつが悪いんです！ 私と姫様の仲が引き裂かれそうになったのも、余計なことばかり引き起こすこいつが全ての元凶なんです。姫様のお気が普段優れないのも、世の中に暗い話ばかりが蔓延るのも、戦争が絶えないのも、天気が悪いのも、不作が続くのも、不景気や治安の乱れ、悪徳貴族の汚職に悪政、果ては私が何時までたっても魔法を使えないことだって、全てはこいつが原因なんですわ！」

アンリエツタはきよとんとして答えた。

「あら、そうなの？」

「そうなんです！」

ルイズは力強く言い切った。

「……じゃあ、そういうことにしましょうか！」

「はい！」

二人は涙ぐみながらも、笑顔になってお互いを抱きしめあった。  
「……」

魔王は針のむしろに入れられたかのような面持ちで、目を細めつつ非常に居心地悪そうに立っていた。ルイズとアンリエツタはひとしきり笑いあうと、ようやく魔王へと顔を向けた。

「それで、今しがた話のタネにしたその殿方を紹介して頂けないかしら？」

さつきから気になって仕方がないわ！」

王女には既に、その美しき姿に相応しい快活さが戻っていた。

「はい、これが迷惑千万で軽薄不遜ないやしい、いやしい、誇大妄想の気すらある

極悪非道の亜人の使い魔でございますわ」

「亜人ですって！ 確かに頭がとんがって、肌が青白いですものね。瞳の色も真っ赤だわ。」

あなた、昔から少し変わっているとは思っていたけど、亜人を使い魔にしたのね」

「はい、お恥ずかしながら」

顔を羞恥で赤く染めるルイズに対し、アンリエツタは力強く首を振った。

「恥ずかしがることなんてないわ。亜人を呼び出したメイジは、歴史上、何かと逸話を残しているものよ。あなたも人々に語り継がれるようなメイジになるという証だわ」

ルイズはその言葉を聞いて、今度は照れから顔を赤くした。実のところ、確かに亜人を従えた過去のメイジたちは色々と逸話を残しているが、その話の大部分は彼らの業績を語り継ぐというより、いかに彼らが変わりものだったかを面白おかしく伝えるものであるということとは、言わぬが花であった。アンリエツタは魔王をちらりと見ると、ルイズに向けて話しかけた。

「でも、亜人は人間に排他的と聞いわ。危険じゃなかったかしら？」

「心配ありません。見てください、あいつのヒョロつとした腕を！」

何かしようなものなら、骨ごと折り畳んで箆笥にしまっておけます

わ」

『なら安心ね！』という声に続いた二人の笑い声を、魔王はどんよりとした目で眺めていた。

「でも、主のあなたならともかく、私が使い魔さんと仲良くするのは無理なんでしょうね。」

あなたの今までの話を聞く限り、私は嫌われていることでしょうし……」

するとルイズが止める暇もなく、魔王はぐいと一歩、アンリエッタに歩み寄った。

「そんなことはありません。むしろウエルカムです！」

「あ、あら……？」

予想外に歓迎的な魔王の態度に、アンリエッタは意表を突かれた。そんな彼女の様子をにこやかに眺めながら、魔王はフッフフと笑い声を漏らした。

「姫君といえば、王様には及ばぬまでも国のカナメ。それが護衛も付せずにノコノコと自分からやってくるとはイイ度胸です！ そのまま我が世界征服の礎となるがいいでしょう!!」

「ねえ、あれって本当に大丈夫なのかしら？」

アンリエッタの視界の端では、つるはしが頭に突き刺さったまま放置された魔王がびくびく震えていた。

「ごめんなさい、姫様。おっしやる通り、本当はあれぐらいじゃ反省しないんです」

ルイズの返答に、アンリエッタはそういう意味で言ったんじゃないんだけれどもと、もやもやした気持ちを抱え込んだ。だがルイズはそれに気付かず、居住まいを正すとアンリエッタに問いかけた。

「それで姫様、私に会いに来て下さったのは本当に嬉しいのですけれども、何かご用件があつて来られたのではないですか？ 姫様ほどのお方が、人目を盗んでまでここに一人で来られたのには、何か重大な訳があるのでしょうか思えません！」

それを聞いたアンリエッタは、厳しい表情をした。

「それを聞いてしまうのですね、ルイズ・フランソワーズ。正直、言おうか言うまいか迷っていたのです。もしここで旧友を温めあうだけなら、それでも構わないとすら、私は思っていたのです」

厳しい表情の中に悲しみを滲ませたアンリエッタの顔を見て、ルイズは自然と臣下の礼を取っていた。

「そういう訳には参りません。姫様ほどのお方が、話すか話すまいか躊躇う様なお悩み、

聞かぬ訳には参りませんわ。それに何より、私をおともだちと先に言って下さったのは

姫様です。そのおともだちに悩みを話して頂けないというのですか？ 大事なおともだちが本当に困っているときに、何の助けにもなれないだなんて、それほど私にとって残酷なことはありませんわ！」

ルイズの熱意を見て取ったアンリエッタは、心を決めた。

「……ありがとう、ルイズ・フランソワーズ。おかげで決心が付いたわ。

私の悩みは、本当は黙って胸に閉まっておいてはいけないものだったわ」

アンリエッタは目を瞑って深く息を吸い込んだ。そして再び見開かれた目には、それまでが嘘のような、王族らしき冷徹さが宿っていた。

「今から言うことは、決して誰にも口外してはなりません」

「こいつに席を外させましょうか？」

ルイズは、頭を痛そうに抑え込んでいる魔王を指さした。

「いいえ、必要ありません。普段の仲がどうあれ、いざという時に頼りとなるのが使い魔というものです。一緒に聞いていて貰わねばなりません」

そう言ってアンリエッタは、彼女の深刻な悩みを打ち明け始めた。

「ルイズ、アルビオンの反乱軍のことは知っていますか？」

「はい、噂程度には知っておりますわ。何でも、その不屈きな反乱軍相手に、アルビオン王家は随分手を焼いているとか」

アンリエッタは静かに首を振った。

「今はもうそれどころではないのです。反乱軍は今やアルビオン大陸の大部分を

手中に収めるに至りました。かの地において、王室の命は既に風前の灯火なのです」

「そこまで深刻な事態だったのですか!？」

ルイズは目を見開いて驚いた。過去を振り返れば反乱など珍しくもないハルケギニア諸国であるが、始祖の降臨以来、六千年も続いてきた王家が潰れるとは、ルイズの想像だにしないことであつた。

「事はそれだけで済まないのです。恥知らずの叛徒どもはアルビオン王家だけでなく、残る3つの王家も目の敵にしています。王家を打倒し、貴族の手に権力を取り戻すことによつて、ハルケギニア諸国の統一を図る。そして皆が丸になつたところで、エルフに奪われた聖地の再征服レコンキスタを果たすのだと、それこそが始祖の御心に沿う道であると、本気でそう訴えているのです」

それを聞いたルイズは、憤慨した。

「それは狂人の発想ですわ!。そもそも始祖の血を滅ぼそうとしておきながら、どの口が始祖の御心を語るのかしら?。間違ひなくブリミル様のお怒りに触れる行いだわ!」

アンリエッタは頷いた。

「まったくもつてその通りです。しかし現実には、彼らを引き留めるものはないのです。

ロマリアはこの非常事態に重い腰を上げることせず、沈黙を貫き通しました。

我がトリスティンが力を貸すにも遅きに失しました。もはや宮廷の有力者はアルビオンの

情勢が手遅れだと判断し、援軍を送ろうという話すら起きません。事態は既に次へ向けて

動き出しているのです」

「一体どうなるというのですか?」

ルイズは、自らの国が晒された危機に顔を青くしながら問いかけ

た。

「いくら分ならず屋どもの集まった宮廷とはいえ、対応自体は考えています。その内の一つが、今になってようやく実を結ぶこととなりました。……ゲルマニアとの同盟です」

「ゲルマニアですって！」

ゲルマニアと言えば、ルイズの生まれ育ったヴァリエール領と直接に隣り合う国であり、過去にトリステインとの間で何度も戦火を交えて来た相手でもある。また特にヴァリエール家の一員である彼女は、国境を隔てて領地の接するツエルプストー家に、並みならぬ因縁を感じている。そのような、今まで散々成り上がりの国だとか、品性を置き去りにした国だとか蔑み、敵視してきた国と同盟が結ばれることになったのである。ただ事ではない。

「我々にとつて、それだけ事態は逼迫しているのです。ゲルマニアだって、

わが国が墜ちれば、無視できぬ大勢力に脅かされることとなるのですから」

ルイズはあまりに大きな話にくらくらしながらも、ふと疑問に思ったことを聞いた。

「しかし、我がトリステインもトリステインですが、よくゲルマニアも同盟を受け入れたものですわ。いくら必要とはいえ、長きに渡る因縁を捨て去って手を取り合うとは、簡単に出来ることとは思えません」

ルイズは因縁のツエルプストー家であるキュルケと『仲良く』することを思い浮かべたが、それは彼女の全身に悪寒を走らせる結果に終わった。宮廷にも自分と同じように、反感を抱くものが大勢いるのではないかと、彼女は不思議に思った。

「我が国に関しては、マザリーニ枢機卿がこの話を推し進めたのです。彼には多少以上の反発があらうと、意見を押し通す力がありますから」

「ああ、あの……」

ルイズは思わず『鳥の骨』と言いそうになって、言葉を濁した。詳しいことはルイズにも分からないが、彼女の父親であるヴァリエール

公爵が普段領地に閉じ籠っているのは、マザリーニ枢機卿が力を振るう宮廷を嫌つてのことだというのが、もつぱらの噂である。そのためルイズは、彼に対する悪感情と同時に、その権力の大きさと老獪な政治的手腕を思わずにいられなかった。

「ゲルマニアの方々は…… 利に聡い国ですから、気にしない者も多いようです。何よりあの国は、皇帝アルブレヒト三世の一存で多くが決まります。我が国が彼に対して大きな譲歩を行った以上、彼は喜んで同盟を受け入れたのです」ルイズの耳がぴくりと動いた。

「譲歩、ですって？」

彼女の嫌な予感は、すぐさま語られたアンリエッタの言葉によって裏付けられた。

「私、結婚することになったのよ。近い内に、皇帝との婚約が発表されるわ」

ルイズは、その結婚を祝うことが出来なかった。彼女の一番のおともだちに『おめでとう』と言ってあげることが出来なかった。その話を聞いて、ただただルイズは、打ちひしがれるような衝撃を受けた。

「そんな！ あの野蛮な成り上がりどもの国になんて……！」

アンリエッタは悲しそうに首を振った。

「それ以上言わないで、ルイズ・フランソワーズ。かの国は、これから私の第二の祖国となるのですから」

そう言われては、ルイズもそれ以上、言葉を続けることが出来なかった。ただただルイズは、屈辱的な思いに耐え、おともだちの身に降りかかった呪わしい運命に、苦々しい思いを抱くことしかできなかった。

「仕方がありません。小国である我が国がかの大国に差し出せるのは、

今まで大切に守り続けてきた、始祖に連なるこの血だけなのですから」

国民を守るためなのです、とアンリエッタは自分を納得させるように、小さな声で呟いた。ゲルマニアという大国は、新興国として他にはない勢いで繁栄を築きつつも、ただ一つ、始祖の血筋の不在によつ

て、周辺諸国からは軽んじられるという問題を抱えていた。その問題が解決されるとなれば、アンリエッタの身は皇帝にとってこれ以上ない土産となるのであろう。

あまりのことに、ルイズは言葉を返せなくなり、俯いてしまった。しばらくの間、悲しみの籠った沈黙が部屋を包み込んだ。だがその静粛は、再びアンリエッタの言葉で破られた。

「ルイズ、私の悩みというのは、ここからが本題なのです」

今までの話から、アンリエッタの抱える悩みの真の大きさを察したルイズは、より一層表情を引き締めて彼女の話聞いた。

「反乱軍は、我が国に容易に手出しが出来なくなるこの同盟を、快く思ってはおりません。」

今にも同盟にケチを付けようと、血眼になって両国の粗探しを行っているはずです。

そうやって我らの結ぶ同盟を反故にさせようと目論んでいるのです。もしそうなっては、

我が小国に反乱軍へ抗す力はありません。一卷の終わりなのです」

ルイズはそれを聞いて青ざめた。魔王の口からこぼれた、『それはタブン、三巻の終わりなのでは?』という呟きは、完全に無視された。

「まさか姫様、叛徒どもに付け入る隙を与えるものがあるというのですか!?!」

アンリエッタは黙って頷いた。

「私が昔したためた一通の手紙があるのです。アルビオンの皇太子ウエールズに宛てた……もしアルビオンの王政府が墜ちて、手紙が叛徒どもの手に渡れば、私の婚姻に決定的な楔を打ち込むことが出来るのです。そうなれば同盟はご破算、トリステインは一国で反乱貴族どもの牛耳るアルビオンと戦わねばなりません。世界随一の技量を誇り、多数の艦船を有すアルビオンの空軍を相手にしては、我が国に勝ち目はありません。トリステインはお終いなのです」

ルイズは、気でも失ってしまいたいぐらいの思いがしたが、アンリエッタが言葉の途中から唇を青くしたのを見て、自分がすっかりせねばと心を強く保った。



「では姫様、その手紙さえどうにかすれば、同盟を守り切ることが出来るのですね」

「その通りです。劣勢の王政府に接触し、ウエールズ皇太子から手紙を取り戻す。」

引き受けて下さいますか？」

「もちろんです、姫様。姫様のためならば、例えどんなにコケのひしめく地獄の中だろうが

怖くはありません！」

「ありがとうございます、ルイズ・フランソワーズ…… コケ？」

アンリエツタは少し首をひねったが、些細な聞き間違いだと思って話を流した。

「正直、あなたにこれを頼むのは正気の沙汰ではないのかもしれない。かの国は戦争の最中、それも今にも負けそうな王政府と接触を図るなどは、とんでもない苦勞を強いることに違いありません」

そう言ってアンリエツタは首を振った。

「しかし私にはもう、あなたしか頼れるものがないのです。聞けばアルビオンの貴族派は

既に各国の不満を持つ貴族を中心に仲間を募り、隠れた動きをしているとの話です。それでなくとも宮廷は信用のならないものばかりですから、喜々として私の弱みを握り、好きにしようとするでしょう。マザリーニ枢機卿だって、何を考えているのか分かりません！ アルビオン王政府がここまで追い詰められるずっと前から、援軍を送り出すことよりも、同盟を結ぶことにばかり力を注ぎこんできたのは、あの方なのです！ 彼さえその気になれば、並み居る我が国の貴族たちの反対があつてさえ、きつと早くに援軍を送り込んで、貴族派を封じ込められていたでしょうに！ 私だってこんな望まぬ婚約を結ぶことも、同盟だつて必要無かつたのですわ！」

アンリエツタは、途中から荒らげた息を、ゆっくり整えた。

「私には、本当に頼れる者がいないのです。本来ならば、私が宮廷を動かせれば

一番いいでしょうけれども、私にはその力がないのです」

「そりやあそうでしょう。王族なんて飾りです。エライ人にはソレが分かんのです」

鞭打ちを経て魂が抜けかかっている魔王を他所に、ルイズは落ち込んだ様子のアンリエッタを慰めた。

「心配なさらないで下さい。私だけはどんなことがあっても姫様の味方です。姫様のためなら、どんなことでもやってみせますわ。手紙のこと、きつとどうにかしてみせます」

アンリエッタは感極まったように泣き始めた。

「ありがとう、ルイズ・フランソワーズ、これこそ真の友情、真の忠誠というものですわ！」

でも本当に無理はしないで。あなたまでいなくなってしまうたら、私はどうにか頑張ってしまいますもの」

二人ははつしと抱きしめあった。

そうしてしばらくした後、アンリエッタは魔王の方に振り向いて言った。

「使い魔さん、あなたもルイズのことをよろしくお願いしますね」

しかし当の魔王の反応は冷たかった。

「……私は反対です」

すぐさまルイズが、怒りの声を上げた。

「何よ、あんたは姫様がこんなにも苦しんでいらつしやると言うのに、その思いが汲めないってどういうの！ やっぱりあなたも所詮は亜人、人の気持ちは分からないっていう訳!?!」

あなたの血は何色よ！と感情的になる彼女に向け、魔王は静かに首を振った。

「そういう意味で言っているわけではありません。それに亜人にだって魔ゴゴロぐらいあります。私がモンダイにしているのは、この任務のキケンさです。この任務を受けた場合、危ない目に合う機会は、フーケの時とは比べ物にならないでしょう。よほど幸運でなければ、いたずらに命を落とすだけです」

反論し辛い魔王の言葉に、ルイズはうつと口噤んだ。

「それにそもそも！　まだこのエリアを支配していないのに海外遠征しようだなんて、

気が早すぎます！　まだ学院一つ墜とせていないのですよ!？」

「あ、あんたつて奴は！　それが本音なんじゃないの！」

ルイズはわなわなと震えながら、再び鞭に手を伸ばしたが、魔王にとって幸運なことに、その鞭が降り降ろされることはなかった。ルイズが鞭を振り上げるよりも前に、アンリエッタが先に口を挟んだ。

「使い魔さん……　もしかして、あなたは世界征服の野望でも抱いているのですか？」

「姫様！　お気に掛けることはありません！」

「いいのです。私もあなたの使い魔のことを知っておきたいのです。それで、どうなのですか？」

ルイズとしては、魔王が何を喋ろうと自分の恥にしかならないため、話すのは勘弁して欲しかったのだが、姫様にそう言われては断れない。彼女は、とにかく少しでも魔王の言動がマシであってくれと願うしかなかった。当然、魔王はそんな主の気持ちなど気にもしない。彼は真剣に自分の話を聞こうとしてくれるアンリエッタの様子に気を良くしてか、ぺらぺらと自分の欲望を口から吐き出した。

「世界征服を目指しているかですつて？　当然です！　世界征服は地底に住まうマモノたちの悲願です。宿願なんです。彼らを統べるソングザイとして、世界征服を目指さないなんてあり得ません！」

世界征服を目指さない魔王なんて、存在意義を疑います！とまで息巻く魔王に、アンリエッタは若干引きながら質問を続けた。

「なぜそんなに世界征服に興味があるのですか？　私には、地底のことはよく分かりませんが、あなたたちが安全に暮らすだけなら、そこまで必要ないでしょうに」

『件の貴族派どもも、聖地奪還という大義があつて世界統一を目指しているはずです』と、不思議がるアンリエッタに、魔王はこう答えた。

「フンッ、そんな低俗なニンゲンたちと一緒にしないでください。

『なぜ世界征服をするか』ですつて？　そんなの決まっています。

なぜ世界征服をするか？　そこに世界があるからです！」

魔王は決まった！というような自信に満ち溢れた表情を浮かべた。ルイズは、恥ずかしさのあまり両手で顔を包み隠した。アンリエツタはポカンとした表情を浮かべ、そしてついクスツという笑い声を漏らした。

「あらまあ、本当に純粋な思いで世界征服を目指しているのね」

「本当に失礼な奴ですみません」

「いいのよ、ルイズ。夢があるということとは、それだけで素晴らしいことだわ。」

何からも自由で、伸び伸びしていて、少し羨ましいぐらいよ。

こんな大きな夢を持っているなら、きつと向上心も強いんじゃないかしら？」

ルイズは、向上心ねえという疑いの眼差しで魔王を見た。相変わらず彼は、堂々とその場で踏ん反りかえっていた。

「それに引き換え、私は夢の一つも持てぬ、か弱い身……ねえ使い魔さん？」

どうか私の小さな願いを聞いて下さらないかしら？」

「何でも聞いてあげましょう！　まあ、本当に聞いてあげるだけです……」

「あんたって奴は！　いい加減にしなさいよ！」

ついにルイズが爆発した。今度こそ鞭を上段に振り上げ、今にも振り下ろさんとするルイズに、魔王は真っ向から反論した。

「仕方がないでしょう！　こんな任務、16歳の生徒がやることではありません。いいですか、マモノにはマモノの、魔王には魔王のシゴトがあるように、破壊神様には破壊神様のシゴトがあるのです。ルイズ様は戦場で傭兵と切り結ぶ術を知っているというのですか？　王軍とやらを見逃すまいと、厳しい監視の目を光らせる敵を誤魔化すことが出来るのですか？　もっと冷静に考えねばなりません！」

どれもこれも、ルイズの耳には痛い忠告だった。

「でも、確かに大変でしょうけど、いや無茶かもしれないけど！　それでも誰かがやらなければいけないことなのよ！　それがたまたま今、

私がやらなければいけないというだけの話なのよ！ 私だって貴族、何時でも死ぬ心構えは出来てるわ！ 死ぬ気で、死んでも任務をこなして見せる！ トリストインがこの先滅び行くのを、黙って見ておく訳にはいかないのよ！」

二人の言い合いは、よりヒートアップしていった。

「そもそも姫様が私を頼られたのだから、無茶ばかりではないわ！」

フーケを倒して王宮に名を売ったのは、他ならぬこの私よ！」

この力を今使わずして、一体いつ使うのよ！」

「今でしょ……って、騙されません！ ルイズ様、フーケをやったからと言ってカンチガイしてはいけませんぞ。ルイズ様のおチカラは、その地に留まって戦い続けてこそ、その強力無比な力をハッキリ出るので。学院一つ支配しない内からヨソを征服しようだなんて、無謀もいいところですよ！」

「そもそも征服しに行くんじゃないわよ！」

二人が物凄い形相で睨み合いを始めたところで、ボタンと扉の開く音が響いた。

「その二人が行かぬというなら！ その任務、ぜひ私めにお任し下さいます！」

二人が呆気に取られる中、ギーシュは部屋に滑り込みながら膝を付いてアンリエッタの前に躍り出た。

「え、えええっ……!?!」

ルイズも魔王も呆気に取られ、動きを止めた。アンリエッタもまた、あまりの事態に動揺しているようであった。その姿を見て、このままではいけないと気を取り直したルイズは、ギーシュを大声で怒鳴りつけた。

「ギーシュ！ 何であんたがここにいるのよ!!」

まさかアンタ、姫様の後を付けてきたってわけ!?!」

「馬鹿を言わないでくれたまえ！ 僕はただ、見目麗しいその顔を隠した、

可憐かつこの上なく高貴そうな少女が一人で学院を駆け抜けていく姿を見て、

何かあつてはいけないと後ろから見守り続けただけだ！」

「それともう、姫さまだつて分かつてるじゃないのよ！ 大体あんた、姫様の話を聞いていたわね！ トリステイン貴族ともあろう者が、姫様の話を盗み聞きですつて!? あんた最低よ!!」

ルイズは怒りに震えながらギーシュを叱つたが、しかしこれにギーシュも負けじと言い返した。

「しようがないじゃあないか！ いくら君が付いているとはいえ、姫殿下と君のマガマガしい使い魔が一緒の部屋にいるんだぞ！ 心配しない方がおかしいじゃあないか!!」

「」

ルイズに反論の余地を与えない言葉だつた。口を開いたまま固まつてしまったルイズに対し、そんなことを言っている場合ではないアンリエッタは、困惑の声を漏らした。

「困つたわ。今の話を聞かれたのは……」

「どうします？ ルイズ様の身さえ安全なら、いくらでも協力しますよ？」

処す？ 処す？ と、妙にウキウキした様子でアンリエッタに囁き始めた魔王を見て、ギーシュは顔を青くした。

「何てことを言うんだね、君は！ 僕たち地下友じゃあないか！ ルイズ、君からも何か言つてやつてくれ！」

「地下友つて何よー！」

憤然とする彼女に、魔王はこそつと耳打ちした。

「彼らとは先の戦い以来、地下で動き回れるもの同士、同盟を結んだのです」

「いつの間に仲良くなつてるのよ！ 私にも教えなさいよ！」

「いや、だつて『地下』協定ですし」

悪びれることなく言う魔王に、ルイズはくらくらしたが、その様子を見てアンリエッタは彼女に問い掛けた。

「ルイズ・フランソワーズ。その、彼は信用出来るのですか？」

「いいえ、ただの優男「ギーシュ・ド・グラモンに御座います！」

系統は土、複数のゴーレムを操つての戦闘に長けております！」

ギーシュはルイズの言葉を遮って、自分を売り込みに行った。

「まあ！ それじゃあグラモン元帥の？」

「息子にございます」

ギーシュは恭しくそう答えた。彼の身元を聞いて、アンリエッタは好感触を持ったらしい。彼女はルイズの意図に反し、とんでもないことを言い始めた。

「ギーシュ様。あなた一人にこの任務を任せることは出来ませんが、もし私のおともだちのルイズを守って頂けるといふなら、これほど心強いことはありませんわ」

「喜んでお引き受け致します！ 命に代えてもこのルイズ・フランソワーズを守って見せましょう！」

「姫様！ それにギーシュも！ 言っとくけど、あんたに守られるよくな私じゃないわよ！」

「何を！ この僕に、あと一息というところまで追い詰められたのは誰だね？」

「結局、負けてるんじゃない！」

ルイズは頑なにギーシュを認めようとはしなかったが、彼女に助け舟を送る者はいなかった。

「確かに彼は使えるでしょう。任務のキケン性を大きく減らせます」

「魔王！ あんたは黙ってなさい！」

「いいえ、これは考慮すべきコトガラです。彼に頼れば、いざルイズ様が動けなくなつた時でも、カンタンに敵の目を欺き、相手から逃げ出すことが出来るでしょう。セツカクの彼の好意を、ムゲにあしらうことはありません」

ギーシュは魔王を、救世主でも崇めるかのように見上げた。

「おお、有り難い！ 僕を支持してくれるのかね！」

「トーゼンです。ここまで来れない彼に代わり、よくぞメッセージを伝えてくれました」

彼にも感謝していると伝えておいてください」

「へ？ 何を言っているんだね、君は？」

「いや、ですからルイズ様に協力しようというヴェルダンデ殿のウエルでダンディな心意気に感謝をと……」

「僕は使い魔のメッセンジャーじゃないぞ！」

腹を立て始めたギーシユを、ルイズは改めて諭した。

「そんな馬鹿に関わってないで、ギーシユ、冷静になりなさい。あなたはこの任務の危険性を本当に分かっているの？ 本当の本当に命を落とすかもしれないのよ？」

「それは、君だって立場が同じだろう。それに僕はグラモンなんだぞ。軍閥貴族の息子が危険な役を負わずしてどうするとうんだね？」

「あなたは自分に酔っているのよ。本当に危険な目にあってから、それに気付いたって遅いのよ」

「良いではないですか、ルイズ・フランソワーズ」

「姫様！」

ついには姫様にも背後から撃たれ、ルイズはがっくりと項垂れた。

そんな彼女に、アンリエツタは小さく耳打ちした。

「彼は、あなたのクラスメイトか何かなのでしょうか？ 漏れてはいけない秘密を聞かれたからと言って、あなたのおともだちを始末などしたくはありません」

ルイズは、少し考え込んでから言った。

「そういうことならば、分かりましたわ。姫様」

「分かってくれたかね！」

ギーシユは喜びの雄たけびを上げた。そのせいで彼は、ルイズが続けて言った』

いざとなれば弾除けぐらいにはなるでしょうし……』という言葉が聞き漏らした。

「それでは決まりですね？」

アンリエツタがそう言い、ルイズが渋々頷いたところで……『待った』が掛かった。

「お待ちください。まだ、私は認めたくはありませんぞ」

彼ら彼女らの希望を阻む最後の壁として立ち上がったのは、昔から



勇者を阻むものと決まっている魔王であった。

「今更何を言ってるんだね君は！ さつき僕の参加を、というかこの任務自体を認めてくれたんじゃないやなかたのかね!？」

魔王は静かに首を振った。

「ソレとコレとは話が別です。私はただ、協力してくれるという姿勢に感謝を示しただけです。ルイズ様の身がヒジョーな危険に晒されるということにチガイがない以上、断じて認められません」

ルイズは思わず、『この分からず屋!』と悪態を付いた。

「大体、どうせ任務ついでにかの地を征服出来ても、やれマモノがはびこるのはケシカランとか言って、ボカスカと爆弾を投下したり何たりするのでしよう？ そんなのホネ折り損のクタビレモーケではないですか!」

「やっぱり、あんたの本音はそれなのね!!」

怒りを迸らせるルイズ、ギーシユの両名に対し、アンリエッタはただ一人冷静であった。

「ふふふ」

「姫様?」

「あら、ごめんなさいね」

ルイズたちの訝しむ視線を集めたところで、彼女は魔王に語り始めた。

「先ほども話した通り、アルビオンは今や貴族派の巣窟で、王党派は虫の息となっています。

それに私の結婚を機に結ばれる軍事同盟も、決して完璧ではないでしょう。もし、王家の支配から離れ、貴族派どもに奪われてしまった土地を、ルイズの使い魔であるあなたが支配し返して下さるなら、トリスティンだってきつと安泰でしょうね」

「え?」

魔王はオロオロとした様子で、アンリエッタに問い返した。

「え? いや、まさかとは思いますが、ソレってもしかして……」

侵略しちやっても、ダレにも責められなかったり……?」

「貴族派どもは憤るでしょうけど、私たちはむしろ感謝する立場にな

りますわ。

だって、トリステインやゲルマニアにとっては、いいこと尽くめですもの」

魔王は自分の耳がまだ信じられず、自分の頬をつねったりしながら、なおも疑い深くアンリエツタに問いかけた。

「ええと、アルビオンとはどういうところなのですか？」

もしかして、貰っても誰もいらぬような荒れ果てた土地だったり？」

「まあ、アルビオンを知らないのですか？」

アンリエツタは一瞬驚いた顔をしたが、この見たことも聞いたこともない亜人は、きつとハルケギニアから遙か遠く離れたところに住んでいたに違いないと、当たりを付けて納得した。彼女は、魔王にアルビオンのことを簡単に説明し始めた。

「確かに今のアルビオンは内戦の影響もあり、いくら荒れたところもあるでしょうが、

それでも我が国とは比較にならないほど豊かな国ですわ。交易で栄えた港湾都市を

いくつも抱えておりますし、空に浮いているだけあって、風石の大産地としても有名です」

「え、浮いてるんですか!？」

魔王は慌てて口を挟んだ。

「ああ、私としたことが言っておりませんでしたね。アルビオンは、この大地のはるか上空、雲を超えた先にある国なのです」

魔王はそれを聞いてソワソワし始めた。

「もしかして、空に浮かぶ天空チックなお城もあったり?」

「聞いた話ですが、岸壁に立つ城を雲間から見ると、それはそれは見事らしいですわ。まあ実際は、城どころか国ごと浮いているんですけどね。かの国はハルケギニア諸国に数えられはしますがハルケギニア大陸には無く、浮遊大陸という別の大地を国土として居るのです。先ほども言いましたが、風石のお陰で空に浮かんでいらしく、それだけに空の船の運航に必要な風石で困ることがありません。そんな資

源豊富で豊かな国ですから、彼らの空軍は規模・練度共に一級品だと  
言われておりますわ」

魔王はうんうんと唸り始めた

「空に浮かぶ国…… だから、頭を抑えられる形のこの国にとって、脅  
威であるのですね。」

それと同時に、宙に浮いているということは他からも攻められ難い  
に違いありません。

これでもし自給自足が出来るとあれば、中々に理想的な土地です  
な」

「流石にかの国も、貿易を絶たれば根を上げるだろうとは言われて  
おりますわ。現に、戦に必要な火の秘薬などは、ハルケギニア大陸諸  
国からその多くが輸出されていると聞きます。しかし現在、かの国の  
貴族派にあからさまな敵対の態度を取っている国はありませんし、禁  
輸を行おうにも、他の国との足並みが揃わなければ意味がありません  
ん」

「皆が敵対しないのは、どういう理由からなのでしょう？」

「そうですね。やはり、かの国の軍事力には侮れないものがありま  
すし、今のところは刺激したくないと考えている者が多いのでしょ  
う。それに、アルビオンに親類を持つ貴族もまた少なくはないので  
す」

「食料的にはどうなのですか？」

「かの国の農業は小さくありませんわ。そもそもあそこは、大陸の端  
から流れ落ちる川の水が雨となってハルケギニアの大地を潤すほど  
に、水資源が豊富です。ですから農業も、ある程度は盛んなのです。  
もつとも、霧が多過ぎて日照に悩まされる年はあるそうですが……」

聞きたいことを聞き終えた魔王は、一人で考えを巡らし始めた。

「聞く限り、なかなかすばらしそうなエリアですな。景観も良さそう  
で侵略するのにロマンがありますし、征服後も物資の面で悩まされ難  
い。まさに言うことなし、というわけですか……」

魔王は、ルイズにくるりと振り向いて言った。

「さあ、ルイズ様！ なにをボヤツとしているのですか？ 明朝から



アンリエッタが口を挟むと同時に、ルイズとギーシュの二人はさつと跪いた。

魔王の頭も、ルイズとギーシュに掴まれ、無理やりに床に押し付けられた。

「私の依頼を引き受けてくださって、本当にありがとうございます。自らの危険を顧みず、わたくしに忠誠を誓って下さったその姿こそ、まさに真の貴族というものですわ」

ギーシュはそれを聞いて、身に余る光栄に身を震わせた。

「しかし旅は危険に満ち溢れています。もしあなたたちの目的がアルビオンの貴族に知られたら、ありとあらゆる妨害が為されることでしょう。よくよく気をつけて下さい」

アンリエッタはルイズの机を借りると、一通の手紙をしたためた。「始祖ブリミルよ、この身勝手な姫をお許しください。それでも自分の気持ちにだけは、嘘は付けないのです……」

書き終えた手紙に杖が振るわれると、紙がくるくると巻かれ、そこに封蝋が成された。ルイズはその手紙を、アンリエッタの手から恭しく受け取った。

「それをニューカッスルにいるという、ウエールズ皇太子に渡して下さい。すぐに件の手紙を返して下さいるはずですよ」

それからアンリエッタは、手にはめられた青く鮮やかな宝石の指輪を引き抜くと、それをルイズへと手渡した。

「母君から頂いた水のルビーです。あなた方に危険を強いる私からの、せめてものお守りです。お金が心配であれば、売り払って旅の資金に充てて下さい」

ルイズは、深々と頭を下げた。

「この水のルビーが、アルビオンに吹き荒ぶ猛き風から、あなた方を守りますように」

「あの、ちょっといいですか?」

魔王は、ルイズやギーシュから飛んでくる、睨むような視線にヒヤ

ヒヤしつつも、アンリエッタに問いかけた。

「この水のルビーと言うものは、一体どんなシロモノなのですか？」  
「水のルビーは、始祖が作りたもうた4つのルビーの内の一つで、王権の証としてトリステイン王家に代々受け継がれているものですわ。因みにアルビオン王家には風のルビーが受け継がれておりますの」

さらりと語られた事实に、ルイズとギーシュは凍り付いた。

「し、始祖の秘宝ですって!？」

「も、もし無くしでもしたら……」

魔王の、親指で首を搔つ切るポーズを見たギーシュは、後ろに仰け反って失神した。

「聞きましたね、ルイズ様。さつきは売り払ってとか何とか言われてましたが、コトバ通りに受け取ってはいけませんぞ！」

ルイズはガタガタ震えながら、水のルビーをアンリエッタに差し戻した。

「ひ、姫様！　……、こんな恐れ多いもの、私が預かる訳には参りません！」

「良いのです。この任務にはトリステインの命運が掛かっているのですから、それ相応のものを預けたままでです」

「そ、それでも！」

今にも悲鳴を上げそうなルイズを、今度は魔王が窘めた。

「いけませんぞ、ルイズ様。このルビーには彼女の真摯な思いが込められているのです。」

あなたがそんなことで、本当に姫様の期待に応えられるとお思いですか」

ルイズは数回、深呼吸して気持ちを静めんと努めた後、感動の涙を流しながら、アンリエッタに答えた。

「分かりました。姫様の温かいお気持ち、確かに受け取っておきます」  
ルイズは、魔王に振り向いて言った。

「私一人じゃ気付けなかったわ、ありがとう。まさか姫様が、ここまで私の身を案じていて下さったなんて……　手放してはいけない、替えのきかない秘宝を私に預けて下さった意味。つまりは絶対に生き

て帰ってくるようにという思いが込められているのね」

「はて？ 何を言っているのでしょうか？」

「え？」

魔王は、ポカンとした表情を浮かべたルイズに言った。

「ルイズ様は、おそらく大変なカン違いをなさっています。これはそういう願掛けなんかじゃありません」

「へ？ な、なら、どういう意味なのよ！」

「……」

戸惑うルイズに、魔王は説明を始めた。

「ルイズ様。この指輪がどういうものか、よく思い出してみてください。その上で、それをルイズ様が持つことの意味を考えてみるのです」

「何って、王家に伝わる始祖のルビーなんでしょ？ 王家の証ともなるものだから、本来、私のような人間が持っていて良い代物じゃあないわ」

魔王は、静かに首を振った。

「そこが間違ってるんです。ルイズ様はただの人間なんかじゃありません」

「まさかあんた、そこで『破壊神様です！』なんて言いださないでしょうね？」

「ハカイシン？」

「姫様！ 何でもありません！」

慌てたルイズが落ち着くのを待ち、魔王は話の続きを語った。

「確かにそれもジューヨーかもしれないませんが、いま気にしているのはそこではありません。そもそも、それでなくともルイズ様は公爵のムスメ。先を辿れば、王家の血を引いておられると聞きました。そのあなたに王権の証たる始祖のルビーが渡った。その意味を考えて欲しいのです」

「だから、この指輪は本当なら、王家から外れた公爵の娘が持っていて良い代物じゃあないって…… あんた、まさか！」

何かに気付いたルイズへと、魔王はニカツと笑った。

「そう！　つまりその指輪には、自分に代わってルイズ様にトリステインを支配してほしい、そうやって自分を王権という枷から解放してほしいという、姫様の秘められた願いが込められているのです！」  
「なっ！　なっ………!?!」

ルイズは想像を超えた魔王の推察に啞然とし、口をぱくぱくさせた。

「……」

アンリエッタは驚いたように口元を手で隠すも、魔王に向けられた目は、細められているようであった。

「ム？　そういえば、風のルビーとやらがアルビオンにはあるのですかね。……！」

つまり、姫様が言いたいのはこういうことです！　トリステインを支配するだけでなく、何なら世界をも支配して欲しい。だからこの指輪を足掛かりに、アルビオンにある風のルビーも手に入れると、暗にそういう願いも込められているのです！　ルイズ様には、そういう世界征服を託された熱い思いが分からないのですか!?!　私、もうカンゲキを隠せません!!」

「……」

アンリエッタは先ほどよりも、ずっと冷たくなった視線で魔王をじつと見ていた。

「ニンゲンの王族にも、モノ分かりの良い人っているものなんですわ。世界を征服したアカツキには、何分の一かあげても構いません！」

ビシ、バシという音がした後、ルイズは腫れ上がった魔王の顔を床に押しえつけながら、自らも深く頭を下げた。

「本当に、本当に、申し訳ございません」

「い、いえ、いいのです。想像力が豊かなのは、きつとどこかで役に立ちますわ。気にしていませんから、早く頭を上げてくださいな」

ルイズは、再三促された後に頭を上げた。その時、アンリエッタと目が合ったが、ルイズには、彼女の瞳からその真意を読み取ることは



出来なかった。

「全く君も懲りないやつだな！」

いつの間にか復活していたギーシュが、倒れ伏す魔王の背中から、呆れの声を掛けた。

「それではそろそろお暇させて頂きますわ。私がいけないことがばれたら、みんな大騒ぎになってしまいますもの」

「あの……」

頭を持ち上げての魔王の言葉に、すぐにルイズから睨みが効いた。

「最後に、もう一つだけ……」

「あんたねえ!!」

わななくルイズに対し、アンリエツタは少しだけ迷ったような仕草を見せた後、魔王に向き直った。

「……いいでしょう。危険な任務を引き受けて下さるのです。例え忠誠心からではないとしても、報いるところがなくてはなりません」

彼女の許しを得て、魔王は一つ、大いに疑問に思っていたことを問いかけた。

「この宝石って、ルビー、なんですよね？」

「はい、水のルビーですわ」

「青い、ですよね？」

「ええ、鮮やかな青色をしていますわ」

そこで魔王は、意を決して問うた。

「つまりそれって、サファイアじゃないんでしょうか？」

「……」

「……」

ルイズもギーシュも、妙な面持ちをしたまま、その場で固まってしまった。二人とも、自らが持つ『土』の知識と、手にした宝石との齟齬に苦しんでいる様子だった。

「使い魔さん」

アンリエツタは、魔王を覗き込むようにして顔を近付けると、真顔で彼に告げた。

「そこが始祖の凄いとこなんす」

「アツ、ハイ、ワカリました」

.....  
「それでは、アルビオンを支配したアカツキには、公認の程ヨロシクお願いします！」

「ふふつ、使い魔さんも頑張ってくださいね。ルイズ、無事を祈ってるわ」

アンリエッタは今度こそ部屋を去っていった。ルイズは心配して彼女を見送ろうとしたが、目立つといけないからという理由で断られた。姫が部屋を去った後から、ルイズは窓の傍に立ち、外を見下ろし続けた。しばらくしてルイズは、夜闇に紛れて学院の本塔へと帰っていくアンリエッタの姿を見つけた。ルイズは姫君の後ろ姿を眺めつつ、彼女が魔王と交わした、おふざけでしかないはずの約束に、一抹の不安を覚えるのだった。

STAGE 26 悪いな君たち、この使い魔は二人  
乗りなんだ

朝早く、学院の生徒たちが少しずつ起き始める頃にはすでに、小さな密使たちは既の前で出立の準備を仕上げつつあった。しかしなんとも困ったことに、彼女らは課せられた任務を前にして、早くも仲間内での言い争いを始めていた。

「だから、あんたの使い魔なんて連れていけないわよ」

「いいや、ヴェルダンデを置いていくなんて考えられない！ 僕らの地の結束は何よりも強いんだ」

「そうですぞ。彼のマモノ愛をルイズ様は否定するおつもりですか！」

ルイズは、はあとため息をついて、頭を抱えた。

「そういう問題じゃないわよ。あんたたち、正気？ アルビオンは空にあるのよ？」

地面の中を進むモグラなんて、とても連れていけないじゃない」

「それが何さ」

ギーシユはぶつきらぼうに答えた。

「人間だって空は飛べないだろう。それでも立派にアルビオンへ行けるじゃないか。」

地に住まうヴェルダンデを浮遊大陸まで連れていけない道理はないね」

「地中の巨大生物を、わざわざ空の上まで連れていくのが正気の沙汰じゃないって言ってるのよ！ 大体、問題はそこだけじゃないわ。地中を掘り進むそいつを連れて行ったら、ラロシエールに何時つくかわからないわ」

「いやいや、君は誤解しているようだが、ヴェルダンデはこう見えて結構穴を掘るのが速い」

「いいえ、ツルハシの方が速いです」君は何を競っているんだね？」

ルイズはウンザリとした顔で言った。

「何にせよ、モグラじゃ馬には追いつけないでしょ？ ハッキリ言つてあげましょうか。急を要する任務に、そいつを連れてたら邪魔なですよ！」

ギーシュはショックを受けた様子で項垂れ、地面から頭だけ出したヴェルダンデを抱きしめた。

「ああヴェルダンデ！　ここでお別れなんて悲しすぎる！」

するとヴェルダンデは鼻をもぞもぞ動かしたかと思うと、にわか地上へと這い出て、全身を露わにした。

「？　ヴェルダンデ、一体どうしたというんだい？」

その時ルイズは、巨大モグラのつぶらな瞳がきらりと輝くのを見た。

「モギユ〜！」

「きゃあああ！」

ヴェルダンデは小熊ほどの大きさもあるその巨体でルイズに押し掛かかり、彼女の身体へしきりに鼻を寄せ、くんかくんか匂いを嗅ぎ始めた。

「いや、ちよつと何よ！　離れなさい！　ひやつ！　変なところ触らないでー！」

ジャイアントモールが主でもない人様の言葉を聞くはずもなく、彼はたいそう興奮した様子でクンカクンカ！クンカクンカ！スーハースーハー！スーハースーハー！　と鼻息を荒くしていた。

ここにきて魔王は、白い目でギーシュを見つめた。

「ギーシュ殿、まさかこんなアブナイ趣向を持っていらしたとは……ケモノを女性にけしかけて喜ぶなんて、ロクな大人になりませんぞ」

「変な勘違いをしないでくれたまえよ!!」

「ならとつとと、破壊神様から彼を引き離してください」

「ハカイシン？　ああ、彼女の二つ名かね。まあいい、ともかくやってみよう。おーいヴェルダンデ、何をそんなに夢中になっているんだい？」

ヴェルダンデは彼に振り向きもせず、相変わらず熱心にルイズの体

を弄っていた。

「……やはりギーシユ殿は、普通の刺激に飽き足らず」だから僕にそんな趣味はない！」

ギーシユは、魔王の疑うマナザシを前に冷や汗をかきながら、釈明を始めた。

「これはきつと、彼女に何か原因があるに違いない。たぶん、彼女からヴェルダンデが喜ぶ匂いがするのさ」

「主の喜びは、これ使い魔の喜びでもあります。つまり彼は、ルイズ様の桃色ブロンドの髪をクンカクンカしたいという、主の求めに応じて……」

「いい加減その発想から離れたまえ！ 彼が好むのは土のもの以外にない。おそろくだが、彼女の持ち物に、何か珍しいものでもあるのではないかね？」

見るとヴェルダンデは確かに、ルイズの指にした水のルビーへしきりに鼻先を近付けようとしていた。

「こらっ、無礼者！ 姫様から預かった大事なルビーを汚すんじゃないわよ！」

ルイズは巨大モグラの頭をポカポカ殴り始めた。ヴェルダンデは迷惑そうな様子でもきゅもきゅと鳴き声を上げている。

「ほれ見たことか！ これが僕の愛らしきヴェルダンデの特技なのだ。」

珍しい宝石や鉱物をこうして嗅ぎ分けてくれるんだ。土メイジの僕は大助かりだよ」

「ほう、それはそれは……。土中の宝箱とかも探せないものではないか？」

「試したことはないが、出来るかもしれないね」

その一言に魔王は一瞬、目を怪しく光らせるも、はあとため息をついた。

「しかし、やはり大陸に行くまでがモンダイです。馬に乗せての移動とかは出来ないでしょうか？」

「残念だが、それは難しいだろう。なんせこの大きな体格だからね」

ギーシュが指さした先では、ルイズが懸命に鼻を近づけるヴェルダンの頭を押しつけていた。

「あんたたち！ 何時まで私をこのままにしておくつもりよ！」

ギーシュと魔王は顔を見合わせた。

「とにかく、これでは何時まで経っても出発出来ません。彼にはルイズ様から離れてもらいます」

そう言つて魔王はルイズの傍らに向け、一步を踏み出した。

その時、一陣の強い風がその場を凪いでいった。

「モギユ!!」

ヴェルダンは吹き飛ばされ、ゴロゴロと地面を転がっていった。

「フゲ——ッ！」

ついでに魔王も一緒になつて転倒し、そのまま風に煽られズリズリと地面を引き摺られていった。

「なに奴だ！」

ギーシュは怒気を孕んだ鋭い声を上げた。

彼が薔薇の杖を掲げ、周囲を見渡したところで再び強い風が吹き抜け、彼の手から杖をもぎ取っていった。

「落ち着きたまえ。僕は君らの敵じゃない。なんせ、君らは僕の敵じゃないからね」

「あなたは！」

ルイズは、驚きの声をあげた。彼女の見つめる先には、つい昨日、妃殿下の馬車の一番近くを固めていた凛々しい騎士の姿があった。立派な髭を蓄えたその騎士は、まだ若そうでありながらも自信に満ち溢れ、強者の風格というものを醸し出していた。

「悪いとは思つたが、僕の婚約者を襲うケモノと不審者がいたものでね。

「ついつい黙って見ていられなくなったのさ」

「婚約者!?!」

ギーシュと魔王は、思わず顔を見合わせた。

「子爵さま！」

ルイズが、喜びの入り混じった声を上げた。彼こそは、ルイズが幼

い頃に親しい交流があった、憧れのワルド子爵その人であった。

「久しぶりだねルイズ。元気にしていたかい？」

「お会いできて嬉しいですね、子爵さま！ 先ほどは有難うございました。」

あの使い魔たちつたら、本当に使えないんですもの。助かりましたわ」

「おや済まない。まさか君の使い魔だとは思わなかったのだよ。あんな趣味の悪いマガマガしいローブを着ているのが君の使い魔だなんて思わなくてね。つつい一つ一緒に吹き飛ばしてしまったよ」

「無理もないですわ子爵様。誰だって始めて見たらそう思いますもの。だから謝らないでください」

「ルイズは優しいね。許してくれて有難う。でも優しいついでもう一つ頼みを聞いて貰っても構わないかな？」

「何ですの子爵様？」

「その子爵様というのは、やめて欲しい。昔のようにワルドと名前前で呼んでくれないかい？」

ルイズは、ぽつと頬を赤く染めた。

「分かりましたわ。ワルド様……」

「いいや、様はいらない。ワルドと呼ぶんだ」

ルイズは、照れ臭そうに答えた。

「ワ、ワルド……」

そう言うと二人はしばらくお互いを熱く見つめあった。ルイズは、どこか熱に浮かされたようになっていた。憎々しげに彼らを見つめる二人の人影のことなど、目にも入らないようであった。しかし彼女は、はっとして気を取り直すと、ワルドに疑問をぶつけた。

「でもワルド、どうしてこちらへ？ 姫様の護衛でお忙しいのではないの？」

「今、僕に与えられた任務は君たちの護衛だよ。やはり君らだけでは道中困るだろうからね。」

私も同行することになったのさ。お忍びゆえグリフォン隊を動かすことは出来ないが、

まあ私一人ぐらいなら、というわけさ」

「まあ、それは心強いわ！」

ここへ来て、ギーシュが疑念の声を上げた。

「おかしいじゃないか。妃殿下は誰にも気づかれぬよう、お忍びで君に話を持ってきたはずだろう？ それなのに、どうしてその子爵殿にこの任務のことが漏れているのさ」

ワルドはフツと、含むような笑みを零した。

「魔法衛士隊を舐めないで頂きたいな。我々はそのいらにいるメイジとは訳が違うのだよ。」

姫様の寝所を出入りする人影があれば、気付かぬ方がおかしいというものさ。最も我々は、

どこぞの誰かのように、あえて人目を避けたいと願う姫様の前に躍り出るほど無粋ではないがね」

「うぐつ……！」

ワルドの皮肉気な視線に耐えかねて、ギーシュは気まずそうに目を逸らした。

「とはいえ、妃殿下がお帰りになられたとき、黙って見過ごすわけにもいかぬ。諫言<sup>かんげん</sup>を呈すことが

出来ぬようでは、真の忠臣足り得ないからね。その時に、妃殿下から事の次第を聞いたというわけさ」

「それでヒミツのはずの話聞き出したと？ 諫言ではなく甘言のマチガイではないですか？」

ワルドは、魔王のチャチャをまるで相手にせず、話を続けた。

「実は昨日の晩、妃殿下のお顔が何時になく険しいことが気になっていてね。妃殿下の憂いを晴らすのもお側に仕える者の役目と思って、話を聞き出したのだよ。話が話だけに妃殿下の口も堅かったが、ここで思わぬことが役に立った」

ワルドはそう言うと、意味ありげにルイズにはほほ笑みかけた。

「何かわかるかい？」

ルイズは、首を傾げた。

「一体なんなの？ 見当もつかないわ」



ワルドはいたずらっぽく笑うと、両腕を大きく掲げて言った。

「君との婚約だよ！ 妃殿下は、僕が君のフィアンセだと知った途端、私に心を開いて下さった。

そして私は、婚約者である君が重大で危険な任務を果たそうとして、いることを知った。

後は御覧の通りさ。おかげで僕は、この世界のために大いなる貢献が出来ることとなった。

まるで君と結婚する未来を始祖に祝福されたかのような思いがしたよー！」

「まあ、そんな！ あの結婚の約束は、父が戯れにしたものなのに……」

そう言いつつも、ルイズは決して嫌そうな顔はしていなかった。

「いいや、僕は今回の偶然を偶然とは思わないよ。それともルイズ、君は運命を信じられないかい？」

ルイズは、顔をほんのりと赤く染めながら、頬を膨らませた。

「私は子供じゃないのよ」

「もちろんだとも」

ワルドは即座にそう答えた。

「君は立派なレディで、そして昔から思っていたことだが、僕にとってのお姫様さ」

「まあ、ワルドったらー！」

ルイズの顔は、リングのように赤くなった。

「僕は本気だよ。魔法衛士隊での立場を築くためとはいえ、君のことを随分待たせてしまった。

長い間放っておいて本当にすまない。でも、君さえ良ければだが、今でも本気で君と結婚したいと思っ

思っている」

「そんな結婚だなんて、いきなり過ぎるわー！」

「だからこそ、この任務は良い機会だ。僕はこの任務の道中で、君と離れていた時間を取り戻したいと思っ

「ワルド……」

二人の間では、そこだけ薔薇が咲き誇っているかのような空気が醸し出されていた。

「コーヒー要りますか？ギーシユ殿」

「ああ、是非頂こうとも、使い魔君」

「ミルクと砂糖は？」

「いらない。すでに胸焼けしそうなほど甘い空気だからね。とびつきり濃く淹れてくれたまえ」

魔王はエレメントの上にくべていたヤカンの様な器具を手に取り、そこから真つ黒な液体をカップに注ぎ込み、ギーシユにそつと手渡した。濃厚な香りが彼の鼻孔をくすぐる。ギーシユはグイツとそれを飲み干した。

「苦い、もう一杯！」

「何やってるのよ、あんたたち」

ルイズは、あきれた様子でギーシユたちを見下ろしていた。

「話は終わったかね？」

彼女の後ろから、ワルドが顔を覗かせた。

「まあとにかく、誤解もあったことだが、これからは同じ任務に就いた者同士、仲良くしなければな。ルイズ、先ほどは本当に済まなかったね。さあ、君たちもこれから宜しく頼むよ」

「……」

ワルドから差し出された手に対し、ギーシユも魔王も露骨な無視の反応を返したが、これにルイズはご立腹となった。

「ちよつと、なに大人気ないことしてるのよ。もしかしてまだ根に持ってるわけ？」

ワルドが先ほど頭を下げてまで謝ってくださったのに！

ギーシユは、疲れたような声でルイズに言い返した。

「僕のヴェルダンデや使い魔君の件もそうだが、彼が謝ったのは君に對してだけなのではないかね？」

「私が元々この任務を仰せつかったのよ。あんたらはオマケ。だから私に謝れば十分じゃない」

ワルドはぐいと一步、ギーシュに詰め寄って手を突き出した。  
「よろしく頼むよ」

ギーシュはワルドの醸し出す威圧するような雰囲気気後れし、しぶしぶと手を差し出した。

「ところで君たちは、さつき何を揉めていたんだね？ 遠目には何か言い合っていたように見えたんだが……」

ルイズはそれを聞いて、弾けるように口を開いた。

「助けてちょうだい、ワルド。このおバカなギーシュが使い魔を連れていくと言って聞かないのよ。こいつの使い魔はジャイアントモールだっていうのに！」

当然、黙って聞いているギーシュではない。

「おバカとは何だ。そういう方がバカなんだ。使い魔とメイジは一心同体、彼を置いていくなんて考えられないね」

再び睨みだした二人を前に、ワルドは大きな笑い声を上げた。

「はっはっは！ ルイズ、あまり彼を悪く言っではいけないよ」「ワルド！」

信じられないというような目でルイズはワルドを見つめるも、彼は堂々としてギーシュを褒めそやした。

「流石はグラモン家の子息、君の才能は稀有なものだ」

「おお！ 僕は間違っつてないと、そう言っつて下さるんですね！」

ワルドがいくら嫌な奴とはいえ、彼は皆のあこがれ魔法衛士隊の隊長である。そんな彼に褒められたギーシュは、つい先ほどの嫌な出来事を忘れ、エへへへと頬を緩ませた。納得のいかない顔をしているルイズをワルドが宥める傍ら、ギーシュは相槌を打ちながら彼の話を聞いた。

「いいかい、ルイズ。人は皆、重要な任務を目の前にするとどうしても緊張するものだ。」

だから、今の君がこういうことに敏感になっているのは分かる」

ギーシュはそれを聞いて、もっともらしくうんうんと頷いた。

「だが緊張は焦りを、焦りは失敗を生む。良くない傾向だが、人は人である以上、この性<sup>さが</sup>から

逃れることは出来ない。だからこそ僕みたいに隊を率いる者には、皆の緊張を解すこと、つまり

ジョークを言う才能が求められるんだ「うんうん……え？」

ギーシュが思わず動きを止めたのに構わず、ワルドは言葉が続けた。

「ジャイアントモールを連れてアルビオンに行く？　あり得ないだろう!!　彼は自分がバカだと

思われることも厭わずに、緊張で固まった皆の心を解きほぐそうとしてくれていたんだ。

プライドを地に落としてまでそんなことを言うとは、これは中々できることじゃない。

ルイズ、君は友達思いのいい仲間を持ったじゃないか!」

「まあ、そうだったのね!　てつきり私は、またギーシュが馬鹿をやっているものかと思ったわ!」

「……」

押し黙るギーシュに、ルイズはしおらしく話し掛けた。

「ごめんなさいギーシュ。私あなたのことを勘違いしていたわ。まさかあなたが考えなしに

馬鹿を言っているだけじゃなかったなんて、思いもしなかったわ。本当はあなたもイロイロ考えて

生きていたのね。見直したわ!」

ギーシュは俯き気味に、目を潤ませながら答えた。

「……そうだろう。魔法衛士隊の……隊長様にも褒めて貰えて……鼻が高いよ……」

下を向いた彼の顔を、ヴェルダンデがもぐゆ?と鳴きながら不思議そうに覗き込んだ。

「はっはっは、何も嬉し涙を流すことはないだろう!　いくら私が、スーパージェットの魔法衛士隊隊長だからと言って、今は同じ任務を共にする同士なんだ。もっと気楽に行こうじゃないか」

「はっ……」

ギーシュは潰れた声で返事を返した。彼の様子に満足を覚えたワ

ルドは、もう一人の随行者に目を向けた。

「さて、それで君は……?」

魔王は返事を返さない。代わりにルイズが恥ずかし気に答えた。

「それが私の使い魔の亜人です」

「ほう、やはり亜人だったか。フム…… あまり強そうには見えないが、中々どうして興味深い」

ワルドは、魔王の頭のとっぺんから何から、嘗め回すように見つめると、ニコツと笑顔を作った。

「さあ、君も同士となるのだから、握手しておこうじゃないか」

ワルドは一応、魔王のことをニンゲン扱いすることに決めたのか、彼に右手を差し伸べてきた。

しかし魔王はこれにも応じず、断りの言葉を返した。

「私のいたところでは握手の習慣がないもので……」

「ほう? ではどうするのだね?」

「お辞儀をするのです」

「お辞儀だと? 亜人の癖に妙に礼儀正しい文化を持っているな」

ワルドは妙な顔をしつつも、頭を軽く前に下げた。

「ふむ、こうかね」

「いえいえ、まだまだ浅いです」

魔王の言葉に従い、ワルドは更にもう少し深く頭を下げた。

「こうかね?」

「全然、まだまだです! お互いが見えなくなるぐらい、深く頭を下げるのです」

「……こうかね?」

「スキありいい!!!」

魔王は、普段から彼が手にしている大きな杖を振りかぶっていた。髑髏を象った重そうな杖頭が、風を切りながらワルドの後頭部に近づいていく。杖がそのままワルドの頭にぶつかるかというその時に、一足早くルイズが動き、魔王をツルハシで突き倒した。

「フゲエツ!! ルイズ様、手を出すなんて卑怯ですぞ!」

「何が卑怯よ! ワルド様に何てことするの!」

「彼はお辞儀をしたのです！ 格式ある伝統に則ってお辞儀をしたのだから、これは決闘です！」

手出し無用！ 手出し無用なのであります！」

「そんな騙すような真似して何が決闘よ！」

ルイズは、とどめとばかりにツルハシで魔王をぶん殴ると、ワルドに振り向いた。

「本当にごめんなさい、ワルド。この使い魔ったら油断も隙も無い奴で、何を言っても治らないのよ」

「ははは、元気があつていいじゃあないか。馬鹿とハサミも使いようだよ」

「まあワルドったらー！」

ルイズがまたも恥ずかしそうに頬を赤く染めた。

「僕も先ほどは悪いことをしてしまったからね。これでお相子ということにしてくれないだろうか？」

「もちろん大丈夫よ」

言い終えると同時にルイズはさつと魔王に振り向き、睨みを利かせて言った。

「アンタ、ワルド様の寛大さに感謝しなさいよね」

「……ハイ」

魔王は渋々、返事を返した。無事二人への挨拶を終えたワルドは満足そうに頷いたかと思うと、急にピュイーツと口笛を吹いた。

「今度は僕の使い魔を紹介しよう」

ルイズたちの頭上から、バサバサと羽ばたく力強い音が聞こえてきた。そしてワルドが上空に向け手を振ると、驚頭をした獣が二対の立派な翼をはためかせながら降下してきて、彼の傍らに降り立った。誇りの高さを伺わせる力強い眼光に、全てを包み込んでしまえそうなほど大きな翼、そして朝日を受けて金色に輝く体躯……その幻獣のあまりの優雅さに、ルイズやギーシュは思わず息を飲んだ。ワルドはその反応を満足そうに眺めながら、この幻獣の紹介を始めた。

「御覧の通り、僕の使い魔はグリフォ」これは私でも知っています！ ヒツポグリフですよね！」……おい」

ワルドは怒気をはらんだ声で、魔王に言いつのつた。

「この優雅で凛々しく誇り高い生物が、ヒツポグリフに見えるだと？  
馬鹿にしないでくれたまえ！」

いいか、これはグリフォンだ。ヒツポグリフなんかとは全然違う！  
その違いと言ったら、

ガチヨウとアヒルぐらい違う！ 二度と間違わないでくれたまえ  
！」

ワルドは凄いい剣幕で言い終えると、さっと顔を元に戻して、にこやかにルイズへと話し掛けた。

「さあルイズ、馬なんかに乗らずに僕のグリフォンに乗っていつておくれ」

「まあ！ いいの？ ワルド」

ルイズは目を輝かせながらはしゃいだ声を上げた。

「グリフォンに乗るのは初めてだろう？ さあ、手を取って」

きやつきやウフフ

ルイズとワルドは、二人だけの世界で再び盛り上がっていた。

「ねえ、ワルド。このグリフォンにも名前を付けているのかしら？」

「ああ、もちろんだとも。僕の心強い相棒だからね。その名もバック  
ビークだ」

「まあ、良い名前ね！」

「……」

魔王は目の前で繰り広げられるやり取りを白い目で眺めていた。

「……それであるマモノは、アヒルとガチヨウ、どっちの方なんですかね？」

「僕に聞かないでくれよ」

ギーシュと魔王の二人は、トボトボと乗馬の準備を再開した。

「……」

ピィィ——ッ という甲高い鳴き声が、晴れ渡った青空に染み込んでいった。グリフォンは悠々と翼を広げ、ゆったりと空を飛んでいく。その姿は、かの存在がまさしく生物の頂点に立つ種族の一つであることを見るものに思い起こさせる。それに比べて、地を這う我々の

何と至らぬことか。

馬を走らせ続け、息も絶え絶えなギーシユは、そんな考えても仕方のないことに思いを巡らせていた。グリフォンがまた一声、甲高く鳴いた。先を行くかの幻獣の力強い羽ばたきに、その後ろを追い掛けるギーシユらとの距離がまた開いた。これまでの道中で、ギーシユらは馬を何度も乗り換えたというのに、まだこれである。使い魔が使い魔なら乗り手も乗り手で、ワルドは疲れを欠片も感じさせない様子でグリフォンを乗りこなし、ルイズに笑顔で語り掛ける余裕がある始末であつた。ギーシユは、思わず悪態を付いていた。

「ええい！ 魔法衛士隊の連中は化け物か！」

「使役動物の性能の違いが…… 戦力の決定的差ではないという事を…… 教えてやりま…… グフツ！」

口を挟みかけた魔王は、全てを言い切る前にグツタリとして馬の背にもたれ掛かった。馬は辛そうな表情をして、唯でさえ遅くなり気味な足の動きを更に鈍らせた。

「使い魔君、またかね！」

ギーシユは、彼の後を追う形の魔王を叱責した。

「何度言ったら分かるんだね。そうやって馬に負担を掛ける姿勢を取ったら、余計に追い付けなくなるだろう！」

だが彼の厳しい言葉にも、もはや魔王は反応を返す気力を失っているようだった。ギーシユは、口から魂が半分飛び出ているかのような魔王の疲労困憊した様子を見てため息をつくと、大きく声を張り上げた。

「おい、少し待ってくれ！ 使い魔君がへばりそうだ！」

ワルドからの返事はない。しかし遠目に、ワルドとルイズが何か話し込んでいる姿が見えた。

そしてしばらくすると、グリフォンは段々と飛ぶ勢いを弱め、ゆるゆると空を進むようになった。

「ふん、止まってはくれないのか」

ギーシユは馬を止めると、大声を出して余計に疲れた体を引きずりながら、魔王の乗る馬へと近付いていった。



「君は本当に体力がないな！ そんなことじゃあ、ラ・ロシエールまで辿り着けないぞ」

彼はそう声を掛けつつも、自分だつてこのままいけばワールドたちに置いて行かれるのではないかという焦燥を抱いた。

「さあ、先ずは一旦、馬から降りて呼吸を整えたまえ。水も飲むといい」

ギーシュは、カヒユクという弱弱しい息を立てる魔王を馬から降ろしてやりながら、いくら何でもこの使い魔は疲れ易すぎではないかという呆れを抱かずにはおれなかった。

「そもそも私は、ウマになんて慣れてないんです。ウ魔だと思って耐えてきましたが、やっぱりマモノとは全然違います！」

「君は何を言っているんだね」

ギーシュは白い目で魔王を見つつも、彼に水の入った革袋を手渡した。

「さあ、それを飲んだらもう一度頑張りたまえ。ここまで来て置いてかれるなんて、冗談じゃないからな」

魔王はゴクゴクゴクと水を飲み干していく。残り僅かになってく飲み水を目にして、ギーシュは水も足りなくなるのではないかという心配をしなければならなかった。魔王はプウハ——と大きく息を吐くと、満足そうに唸った。

「少しゲンキが出てきました。さつきはもうウマはダメだと思つてましたが、こいつをUMAだと思つてもう少し頑張つてみようと思ひます」

「言つてゐることは分からないが、まあ何よりだよ」

僅かな休憩を終え、再び騎乗に戻る時間となつた。ギーシュは、鞍に乗るのに難儀している魔王を馬の上に押し上げようと、彼の足を支えてやり、力を込めた。するとその拍子に、魔王の懐から何かが地面に落ち、カランと音を立てた。

「うん？ 何だねこれは？」

見れば、それは棒状の持ち手の先に、これまた太い金属の刃が付いた道具、つまりはツルハシであつた。ギーシュは感心したように言つ

た。

「ほほう、これが前に僕を苦しめたツルハシか。ヴェルダンデにも負けない穴を人手で掘れるなんて、君もすごいマジックアイテムを持っているものだな」

「フン、それはチョット違いますな。それをフツの人が振るってただのツルハシです。破壊神としての才能溢れるルイズ様が振るってこそ、深々と穴を掘り、幾多のマモノを生み出せるサイキョーの装備となるのです」

「破壊神ねえ」

ギーシュは感慨深げにつぶやいた。ゼロと呼ばれていたはずの、あのちんちくりんの彼女は、彼を蹴散らすだけに留まらず、他の生徒との小競り合いも制し、ついには怪盗フーケを捕えるまでに至った。今でも信じられないあと、ギーシュは先を行く彼女の小さな後姿を見つめた。

「さあ、じゃあその大事なご主人様に早く追いつこうじゃないか」

ギーシュは落ちたツルハシを魔王に手渡すと、中途半端に馬に乗ってかっていた魔王の足元をもう一度持ち上げ、彼をしっかりと座らせるべく踏ん張った。

すると魔王の懐からまた大きなものが幾つも滑り落ち、ガラランガランと音を立てた。

「なっ！」

ギーシュは目を大きく見開いて、それらを見た。見間違いないやなかろうかと、目をごしごしこすりもした。しかし、やっぱり彼の見たものは、変わらなかつた。ギーシュは表情を硬くし、魔王に問いかけた。

「これは、一体何だね」

「これらが、我が地下帝国の誇るツルハシーズです！」

魔王は胸を張って答えた。トゲが付き、細かな細工が埋め込まれたツルハシ。ほの蒼く、清涼感を感じさせる光沢を持ったツルハシ。巨大なピンク色の玉石がはめ込まれたツルハシに、くわのように三又に分かれた刃が付いたツルハシ。その他にも、この世のどこを探しても見つからないような、妙に立派なツルハシの数々が、そこには散ら

ばっていた。もしこれらをヴェルダンデが見たら、珍しい宝玉や金属の多さに喜んだかもしれない。土系統のメイジであるギーシュだつて、普段ならば興味深くこれらを眺めたことであろう。しかし、激しい旅の行程に息を切らし、だくだくと汗を流しながらここまで進んで来たギーシュにとっては、そんな関心を抱くよりも前に、思うところがあるのだった。

「ずいぶん、重たそうなんだが」

「そりやそうです。金属のカタマリがこんな数あるわけですからね。このズツシリと来る重みがまた、ツルハシに秘められた絶大な力を思わせるようで、スバラしいんですね。これなんかすごいですよ、見てください！ このツルハシ・ワミター、ここにはまった水晶を通して相手を観察するとですね、なんと他人の隠れたヒミツを探ることができるのです。これを使ってみんなのスキャンダルを集めれば、毀誉褒貶に富む貴族社会でも輝ける人生を「使い魔君！」

ギーシュは剣呑な声で魔王の言葉を遮った。

「これらのツルハシは、全部この旅に必要な、大事なものなんだよな？」

だからこんなにも重たくても、全部運んでいるんだよな？」

「ええモチロンですとも」

魔王はもつともらしく肯いた。

「イマドキ、一つのモノを売り込むのにもバリエーションがないとやっていけない時代ですからな。破壊神様のあらゆる気マグレに応えるツルハシをお届けする。これ、魔ーケテイニングのキホンですよ」  
「はっ！」

「お分かりになりませんか？ つまり、ルイズ様にダンジョン作りへの興味を持って貰う上では、ツルハシ一つとっても選択肢が多彩だということがヒジョーにジューヨーなのです。だから、例え一度穴を掘り始めたら、手にしたツルハシ以外に目を向けてるヨユーなんぞ無いとしても、これらのツルハシは大事なんです！」

魔王の力説を聞いて、ギーシュは肩を震わせた。

「さあギーシュ殿、馬から降りるのタイヘンなんで、それらのツルハシも拾って貰えませんか？」

「……」

「ギーシュ殿？」

「……僕が、預かっておこうじゃあないか」

「おお、心の友よ！ ブツチャケ重たくて重たくて、持ってくれないかなーとか思ってたんですよね。助かります！」

ギーシュは、地面に散らばったツルハシを大きな麻袋の中に一つ一つ詰め込んでいった。そして彼は、麻袋の口を縄できつく縛ると、それを魔王に手渡す——かと思いきや、近くに立っている木のそばまで歩いていき、その幹に袋を括り付けた。

「ギーシュ殿？ 一体何をやっているのですか？」

「時に使い魔君」

不審がる魔王の声を遮り、ギーシュは言った。

「君は馬を長く、速く駆けさせるにはどうすればいいか、知っているかい？」

「？ さあ、姿勢とかでしようか「重みだ。余計な荷を載せないことが一番に重要だ。」

これを気に掛けないなんて、論外に等しい」

ギーシュの一変した態度に魔王は恐々としながら、それでも言葉を返した。

「いや、あのですな。やっぱり張り詰めた任務の中でも、遊びゴコロを忘れてはイケナイと思うのです。ですからルイズ様も、一つのツルハシだけで飽きないよう「君は馬を潰すつもりかね！ こんな重たいもの大事に抱えて、それでルイズに置いていかれたら意味ないだろう。ツルハシはここに置いていく。全てが終わった後にでも、回収に来ればいいさ」

魔王は声にならない悲鳴を上げた。馬が、迷惑そうに嘶く。

ギーシュは魔王に向け、更に暗い声で言った。

「荷を軽くしても、今までに蓄積された馬の負担が消えるわけじゃない。それに加えて君の騎乗姿勢が崩れてくると、馬は余計にストレスを感じ、疲弊していくんだ。しかし、そうは言っても乗馬初心者の君が、正しい姿勢を維持するのは難しいだろう。そこで、使い魔君。

君がどううごめこうとも、関係のない運搬方法を思いついた……」

そこでギーシュは、先ほども彼が使っていたある道具を持ち上げ、魔王に見せた。

「これを使う」

「ええと、イヤな予感がするのでお先に！」

魔王はそれを見た途端、馬を急ぎ立てて逃げ出そうとした。

「待ちたまえ」

—— しかいギーシュは、彼が手にしている細長くしなやかで便利な道具—— 縄を、カウボーイのごとくひゆるると投げて、輪つかになった先端を魔王に引っ掛けた。そして彼が手元の縄を強く引っ張ると、始めは緩かった縄の輪つかが狭まり、魔王の腕と胴体をぎゅつと締め上げた。

「ヘエアツ！ こ、これはナニゴトですか！」

「君が下手に馬にしがみつけないよう、体を固定させて貰った。姿勢が崩れてきたら、僕が引っ張ってやろうじゃないか」

魔王は、すぐさま非難の声を上げた。

「これじゃあ、まるで罪人みたいではないですか！ あ、でもちよつと罪人というヒビキはマガマガしいような…… いや、やっぱりダメです！ 簀巻きにされるのと変わりません！」

しかしギーシュは、それを聞いてさらに良いことを思いついた。

「簀巻きにされるのと変わらない、か。よくよく考えれば、馬の負担をもっと軽くする方法があったな」

「そ、それは、何でしょうか」

魔王は冷や汗を描きながら、ギーシュに尋ねた。

「馬に何も乗せなければいい」

ギーシュは、自分の馬に乗り上げると同時に、強く縄を引っ張った。魔王がもう一頭の馬からドサツと落ち、悲鳴を上げる。その妙な甲高くしわがれた声を耳にしながら、ギーシュは淡々と、乗り手を失った馬の鞍にロープの端を括り付けた。そして二頭分の手綱を同時に握り絞め、馬を走らせ始めた。魔王が、するすると地面を引きずられていく。

「ホゲエエエエ！ これは、いわゆるシチュー引き回しの刑……！」  
「嫌なことを言わないでくれたまえよ。確か君は、元いた場所ではよく簀巻きにされ、引きずり回されていたそうじゃあないか。今回は、その経験がやくに立つというわけさ。なあに、馬に少しばかり楽をさせてあげるだけの話だ。使い魔君、男なら覚悟を決めたまえよ。はいやっ！」

ギーシュは、勢いよく馬を駆けさせた。ワルドらの乗るグリフォンに追い着くためには、急がねばならない。置いて行かれてなるものかと闘志を燃やすギーシュは、魔王の忙しい悲鳴を背後に聞きつつ、鞭を振るった。

……………

「もう、何やってるのよあいつら！」

珍妙な悲鳴が耳に入り、思わず振り返ったルイズは、あきれと怒りの入り混じった声を上げた。

「いや、しかし彼らもよく追い付いて来ているものだ。置いていくつもりでいたんだがなあ」

「まあ、ワルドったらいけない人ね」

ルイズは冗談だと思つて笑つたが、しかしワルドの目は笑つていなかった。

「見てごらん」

ワルドは前方を指さした。

「あそこに見える山間がラロシエールの入り口だ。到着は夜中になるだろうが、何とか今日中には着けそうだな」

二人を乗せたグリフォンは、遠くの山間に日が落ちるその時まで、悠々と大空を飛ばたき続けた。

## STAGE 27 やがてマモノに変わるもの

日が沈み、空高くに上った月が街道を淡く照らすようになってなお、ルイズ達一行は街を目指しての騎行を続けていた。彼女らの行く道は、目的地のラ・ロシエールに近づくほどに、険しく曲りくねったものとなっていったため、ワルドはグリフォンの足を地に降ろし、馬に乗るギーシュを先導しなければならなかった。ようやく道の先にある山間から街の光が見えた時、一行の口からはため息が漏れ出た。「もうまもなくだな」

ワルドの呟きに、ルイズやギーシュはほっと胸をなでおろした。丸一日をかけた旅路が、これでようやく終わる。彼女らはそう思い、安堵したのだった。だが魔王だけは、その一言を全く異なる風に理解した。

「ええ、もうまもなくです。あと15秒ほどで勇者どもが現れるでしょう」

「は？ いきなり何だね。誰が現れるって？」

呆気にとられた様子のギーシュに、魔王はもっともらしく答えた。「勇者です。皆さんお待ちかねの勇者が現れるのです。それも、たくさん！」

「なんだね、勇者とは？ おとぎ話じゃあるまいに……」

ワルドが煙たそうな顔で魔王に問い掛ける一方、ルイズの顔色はさーっと青くなっていた。

「待ちなさい！ あんたの言う勇者って……！」

「あ、もう来たようです」

魔王が全てを言い終えぬ内に、突如、近くの崖の上から明るく燃え盛る松明が投げ込まれた。

「うわっ、何だ！ 誰かいるのかね?！」

いきなりのことに暴れ出した馬から、早々にギーシュは振り落とされた。次の瞬間、つい先程まで彼が座っていたその場所を、何本もの矢が通り抜けていった。それを見て、ワルドが叫んだ。

「敵襲だ！」

思わず身が竦んだギーシュに、ワルドから厳しい声が飛んだ。

「ぼさつとするな！早く身を隠せ！」

ギーシュは慌てて馬影に隠れると、杖を振るった。すると地面が盛り上がりついていき、彼と馬を守るように、大きな土壁が築かれた。矢はぶすぶすと土壁に刺さっていくが、壁を通り抜ける様子はない。そうしてギーシュは、ようやく止めていた息を吐くことができた。

崖上から、粗野な罵声が投げ掛けられる。

「てめえら、金も馬も何もかも、全部ここに置いていけ。さもないと、てめえらの命はねえぜ！」

どうやら、一行は野盗にでも襲われたらしい。ギーシュは思わず顔を歪め、一人文句を吐き捨てた。

「何が勇者だ。あんな勇者があつてたまるものかね！」

一方ワルドは、ギーシュと違って隠れるような真似はせず、迫りくる矢を危なげなく風の魔法でいなし、悉く地面へと叩き落としていた。逃げも隠れせず、まるで何事でもないかのように堂々と振る舞う様子は、優雅ですらある。彼は、自らも得意げになつて語った。

「安心してくれルイズ。スクウエアたる僕の前では、彼らは何もできはしない。賊どもを追い払うなんて、僕にとってはアリを踏み潰すぐらいに簡単なことなのさ。……ルイズ？」

返事がないことを不審に思ったワルドが後ろを振り向くと、そこに座っているはずのルイズの姿はなかった。まさか気付かぬ内に矢で射られたのかと、彼が青ざめて騎乗するグリフォンの足元に目を向けても、彼女の倒れた姿が見つかることは無かった。ただその代わり、地面には先を見通せない、暗い穴がぽっかりと口を開けていた。ワルドはしばし唾然とするも、姿を消したのがルイズだけでなく、その使い魔も一緒であることに気付くと、状況を察して大きく舌打ちした。「これが噂の、フーケを捕まえたという力か。しかし、これではルイズに私の活躍を見せられぬではないか」

ワルドは、何も見えない穴の中を苦々しく睨み付けつつ、どうしたものかと考えあぐねることになった。

.....



ところ変わって土の中、まだダンジョンと呼ぶのもおこがましい程にしか掘られていない穴の中に、ルイズと魔王は身をひそめていた。その場所は、咄嗟に掘られたものゆえに、まだ戦力になり得るマモノは一匹たりともいなかったが、賊たちが放つ矢を避けるには十分過ぎるほど深い穴であった。

自らの手で危機を凌いだルイズではあったが、しかししばらくすると、彼女は地上の仲間と離れ離れになったことを不安に思い始めた。

「私だけ隠れても良かったのかしら？」

「イイんです。ルイズ様はこの任務において最もダイジなニンゲンです。ですから、矢面に立つのはオトコどもに任せておけばよいのです」

「あんたもオトコよね？」

「何を言いますか。私はこの世界の支配者となるべき魔王なのですぞ？ ルイズ様に負けず劣らず、ダイジにされるべきに決まっています」

「なおさら矢面に立った方が良かったんじゃないかしら」

著しき自己愛を見せる魔王へ白い目を向けるルイズだったが、彼女自身、自分の咄嗟の行為が間違っていたのではないかということに気を揉んでいた。

最近の生活があまりにもツルハシに染まり過ぎていたために、矢を射られた時は、何の疑いもなく地上へと隠れたが…… 本来の自分は、敵に背を向けないことを矜持とし、もっと立派に振る舞っていたのではないか？ 例え、ワルドのように杖一本で全てをこなすようにはいかないとしても、少なくとも自分だけ逃げ隠れるなどという卑怯な真似はしなかったのではないか？

そのように、魔王の忌まわしき性質が自身を墮落に導いている可能性へと思いついたルイズは、居ても立っても居られなくなって、穴から這い出ようとした。

「やっぱり私、地上で戦うわ。いくら魔法が下手だからって、何も撃てないわけじゃないのよ」

だが、そうやって意気込んだルイズに、魔王は冷や水を浴びせる様なことを口走るのだった。

「別にこのままほつといてもいいんじゃないでしょうか」

「何ですって！」

いきり立つルイズを、魔王は静かに宥めた。

「まあ、そう熱くならないでください。賊の行動をよく見てください。あいつら、さつきから矢ばかり撃ってきています。つまりあの連中の中にはメイジなんていないのです」

「だからどうしたっていうのよ」

「今、地上で戦ってる彼は魔法衛士隊の隊長なのでしよう？ ギーシュ殿はともかく、彼はスクウエア。ほつといっても全員倒してくれるはずです。それに上の彼らが倒れない限り、連中がこの穴に近づくことだってありません。ワレワレは、ただキラクに彼の活躍を眺めておればよいのです」

だがルイズは、魔王のこの話を聞いて、目に見えて不機嫌になった。「そんなわけにはいかないわよ。ギーシュはともかく、ワルドを一人矢面に立たせたままではおけないもの。確かにワルドは一人だけでも十分強いでしょうけど、それに甘えて何もしないだなんて、貴族のあるべき姿じゃないわ」

「はあ、そういうものなのですか。しかしこのまま穴から這い出ても、降り注ぐ矢に全身を突き刺さされるだけで、足手まといは必至です」  
「うっ！ それは、そうだけど…… じゃあ、どうすればいいのよ」  
『だから放っておけば……』という魔王の言葉は、ルイズの一にらみで尻つぼみになった。

「マツタク、ルイズ様もメンドウごとがお好きですねえ。ならば、こういうのはどうでしょう？ まず先にダンジョンを掘っておき、マモノをそろえておくのです。その後で、賊どもの後方まで穴を掘り進め、そこから連中をダンジョンにおびき寄せるのです」

「悪くないじゃない。それでいくわよ。これでワルドにも、私がもうゼロじゃないってところを見せられるわ」

その一言に、魔王はぴくりと耳を動かした。

「もしかして、ルイズ様はあの子爵にイイトコロを見せたいのですか？」

「何よ、悪い？ ワールドは素敵な方で、幼い頃は本当に親切にして貰ったものよ。私が魔法で悩んでいるときに、何度も慰めて下さったんだもの。今の私を見せるのが、あの人への礼儀というものだけだわ」

魔王はそれを聞いて少し考え込むと、意味ありげな笑みを浮かべた。

「そういうことなら大歓迎です。是非とも賊をコテンパテンにしてやりましょうー！」

「何よ、急にやる気になるなんて。何か裏があるんじゃないでしょうね？」

「トンデモありません！ これもひとえに、ルイズ様にお力添えしたければこそです。ルイズ様が頑張ることで、逆にあの子爵がイイトコ見せられなくなつて涙目だなんてことは考えていませんともー！」

ルイズは、そんなことを口走った魔王を鼻で笑った。

「ふん。あんたと違って、ワールドはそんな浅ましい考えをするような方じゃないわよ」

「まあ、ルイズ様がいいなら、それでいいのですがね。それでルイズ様、どんなダンジョンを作るか、ビジョンはおありですか？」

「いいえ、それはこれから考えるわ。でも出来るだけ早く戦力を整えて戦わないと、私がただ地下に逃げただけになっちゃうわ」

「ふむ、つまり時間を掛けて強いマモノを作るより、あまり手間がかからないマモノを」

数そろえていくおつもりでしょうか？」

「でもムシじゃあ、さすがにあいつらを倒せないと思うわ。やっぱりトカゲ男ぐらいは強くないと駄目よ」

魔王は、それに頷いた。

「確かに相手は賊ですからね。荒事に慣れた相手に、半端な物理攻撃では分が悪いかもしれません。では、こういうのはどうでしょう？

向こうにメイジはいないようですから、魔法攻撃なら相手にケツコウな打撃を与えられるはずです。有り難いことに、この土地には元から魔分が散らばっておるようです。これを使わない手はありません」

それを聞き、ルイズは険しい顔をした。

「まじんなんて作ってる悠長な時間はないわよ」

「いえいえ、そこまで魔分をかき集めずとも、十分強力なマモノは作れます。ルイズ様は出来るだけ早くに賊をどうにかしたいのですよね？　ならば今ワレワレに必要なものは、重たい攻撃に耐えられる防御力よりも、相手をソッコで倒し切る攻撃力です」

「まあそうでしょうけど、ちょうど良いマモノがいるのかしら？」

「フッフ、まさにこの状況にピッタリなマモノがおります。『彼女たち』にやつらの相手をして

貰いましょう。丁度、夜も更けてイイ時間帯ですしね。今こそ、スナック・リリスを開店するのです！」

「……へ？」

.....

「矢を絶やすんじゃねえ！　やつらに隙を与えるな！」

「「へいっー」」

荒くれ者どもの間に怒号が飛び交う。相手には矢を風の魔法で弾くメイジもいるというのに、彼らに怯んだ様子はない。彼らとて、メイジの強さと恐ろしさを知らぬ訳ではないが、いざ戦いとなれば、攻めに攻めて攻め抜いて、最後には相手を倒す。つい先日までアルビオンの戦場を駆け抜けていた彼ら傭兵——もつとも戦場を離れた今は、賊に過ぎないが——にとって、それこそが日常であるのだった。

敗色濃厚な王党派の傘下から引き揚げた彼ら傭兵たちは、とあるラ・ロシエールの酒場にて、謎の男に大金を積まれたために、ここへと来た。日時と場所の指定を受け、とある一行を襲うという、大いに裏を感じさせる仕事ではあった。しかし傭兵というものは大概にして、金さえ貰えれば誰であれ、何であれ引き受けるといふ、そういう類の人間の集まりでもある。そしてそもそも、戦が終わった後の彼らは、そっくりそのまま野盗に鞍替えして暮らすつもりでもあったため、彼らにはその依頼を断る理由が無いのだった。アルビオンでの稼ぎも終わった今、珍しくまとまった報酬を得ることの出来るこの依頼は、彼ら傭兵にとってご褒美のようなものですらあった。

「あいつらを見ろ！　まともに戦える奴はあのヒゲ男しかいねえ。あ

「いつが魔法を使い果たすまで、撃って撃って撃ちまくれ！」

「へい!!」

荒くれ者どもが一斉に返事を返す中、ただ一人、別の声を上げるものがいた。

「お頭あ！」

「何だあ！」

「後ろに妙なのがいますぜ！」

「何い？」

お頭と呼ばれた男が振り返ると、そこには崖の下にちらりと見えたはずの、ピンク頭のガキが地面から顔を出していた。一瞬呆気にとられた彼だったが、土メイジなら地中を通ってこんな芸当も出来るのだろうか、すぐに冷静さを取り戻した。

「何だこのチビ女、命ごいでもしにきたか？ 自分から捕まりにくるたあ殊勝な心掛けだが、どうせなら、お仲間も誘ってくれると嬉しかったんだが、なあ？」

傭兵たちはそれを聞いて、ゲラゲラと下品な笑い声を上げた。

「こら！ 手を緩めるんじゃない！」

「へへえ!!」

お頭の一声で、彼らは一層盛んに、崖下に向けて矢を放った。そんな中、露骨に侮られ、いないも同然の扱いを受けた桃色の髪の乙女は、プライドを大いに傷付けられたためか、声を震わせながら返事を返した。

「だだだ誰がチビ女ですって？ それどころか、この私が事もあるうに“命乞い”ですって？ 馬鹿を言わないでちょうだい！ 下劣な卑怯者どもの癖に！ 隠れていきなり弓を引いてくるだなんて、恥を知らなさい！」

傭兵たちは、それを聞いて一様に苦笑を漏らした。メイジ相手に奇襲を掛けるのは当然のことであり、それでやられるようなメイジこそが間抜けであるというのが、戦場に生きる彼らの価値感であったからだ。

「へっ、気に食わねえ！ こんなションベン臭えガキが、いつちよ前に

貴族を気取ってやがる。おいお前！ 殺されたくなきや、とつと出てきな！」

だが、罵倒を受けた少女は、赤くした顔をより一層赤くして、声をわななかせつつ怒鳴り返した。

「本つ当に、あんたたちは下品で野蛮なやつらね。それに私をどうにか出来るでも思ってるのかしら？ あんたたちの貧相な頭では、この穴が何だか理解出来ないみたいね！」

妙な物言いに、傭兵どもは首を傾げた。どうやら少女は、何か考えがあつてここまで来たらしい。ガキとはいえメイジが相手と思ひ、身構えた傭兵たちへと、少女は偉そうに告げた。

「あんたたち、感謝しなさい。ここにあんたたちがしつかりと休める穴を掘ってやったわ。それも今後一生、目覚める必要すら無く寝て過ごせる穴よ」

傭兵たちが意味を理解し、顔を歪めたのと、ルイズが叫んだのは同時だった。

「着いてらっしやい！」

「撃てー！」

お頭の一言で急ぎ矢が放たれたが、少女は一足早く穴の中へ隠れており、矢は地面に突き刺さるだけであった。

「ちっ、逃げやがったか。おい野郎ども、追うぞ！」

傭兵たちは顔を見合わせた。一人が矢を放ちながら声を掛けた。

「そりやあいいですが、しかし崖下の奴はどうしやすか？」

「知るか！ あのガキを捕まえりや、あのヒゲ男だつて、俺たちに手出しは出来ねえだろう。第一、あんな貴族のクソガキに舐められたんじゃ、腹の虫が治まらねえ。いいからあのチビを狩るぞ！」

「へい、頭！」

そう言うと、荒くれものの傭兵たちは、次々に穴へと駆け込んでいった。

傭兵たちは暗く狭い道の通った地下を、松明の明かりを頼りに、ぐんぐんと進んでいく。時折、傭兵たちの前に緑色の軟体生物が飛び出して、くることもあったが、特に彼らの動揺を誘うでもなく、踏み潰されて終わった。普段、戦場を転々する彼らにとって、野生の魔物なぞ珍しくもないのだった。

少女の姿は、相変わらず見えない。そのことに、彼らが少しの苛立ちを感じ始めた頃、地下に響いた微かな声を、彼らの耳はしかと捉えた。

「こつちの道からだ。あのチビを追い詰めるぞ」

傭兵たちは、声のした方に向かって、ぞろぞろと押し掛けていった。

「ウッフッフッ♪」

「いたぞ！ あのチビおんな……じゃねえな。何だ、あいつは？」

声の正体を見つけた傭兵の一人が訝しむように声を上げた。彼の視線の先にいたのは、先ほどの生意気を吐いていたちんちくりんの少女とは異なり、ピンク色のワンピースを着た、金髪の可愛い少女であった。彼女はフライの魔法を使っているらしく、傭兵たちが遠目に睨み付ける中、ふよふよと宙に浮かんでいる。

「他にもメイジのガキがいやがったか！」

「待て、様子がおかしいぜ」

少女は、襲撃を受けている最中とは思えぬ落ち着きぶりで、マイペースに辺りを飛び回っていた。行方を定めず、あっちにふらふら、こつちにふらふらと漂う様子は、ただただ気まぐれに行き来することを楽しんでいるようにも見える。その内、少女はようやく物々しい気配を察したのか、不思議そうに首を傾げ、一声鳴いた。

「ピュイ？」

少女の上げた、あまりに人間らしからぬ甲高い声に、傭兵たちは顔を見合わせた。

「ありやあ亜人じゃねえか？」

「よく見りやあ、頭に羽みたいなのが生えてやがる。間違いねえ」

「妖精みてえだが、あのチビの使い魔か？」

「まあいい。まずは頭に報告だ」

話を聞きつけた頭は、その亜人の整った顔立ちを一目見るなり、ヒュウと口笛を鳴らした。

「間違いねえ、こいつは良い金になるぜ。下手したら、あの仮面の旦那から貰ったよりも儲かるかもしれねえ」

品定めを終えた頭は早速、皆に命じた。

「野郎ども、そのノロマそうな奴を捕まえろ。出来るだけ傷は付けないよ。高く売れなくなっちゃうからな」

指示に従い、傭兵たちがおっかなびつくりその少女に忍び寄っていると、ついに彼女も傭兵たちに気が付き、彼らに顔を向けた。

「ソフ？」

首を傾げた彼女の顔は、穢れを知らぬ無垢な少女そのものであった。少なくとも、その時だけは彼らにとって、本当にそう思えたのだ。

「こいつ本当に使い魔か？ 警戒心のカケラもねえ」

「先住魔法を使うそぶりもねえしな。こりや楽に捕まえられるってもんよ」

下卑た笑みを浮かべながら傭兵が更に近づくも、彼女は全く逃げるそぶりを見せず、微笑みを浮かべていた。それどころか彼女は、彼らの目の前でくるりと一回転、バレリーナのように踊って見せた。

「ピルピー♪」

「うっへっへ、こりやあいい目の保養になりそ、」

傭兵たちは、そこで思わず口を噤んだ。可愛いしい妖精がくるりと回り終えた時、彼女の手にした杖は、彼らへと真つすぐに向けられており、あろうことか、そこからは既に魔法が放たれていた。紫色のマガマガしい光を帯びた魔弾が、すぐさま傭兵たちの眼前に差し迫る。

「うわああああああっプゲ——ッ」

「逃げろ——!!」

「ピユイツ！ ピユイツ！ ピユイツ！」

完全に油断しきっていた傭兵たちは、思わぬ反撃を受け、慌てて逃げ出した。しかし妖精の様な少女は、その無垢な笑みに似合わぬ強力な魔法の弾を、その場でくるくると回りながら何発も何発も間断なく



放ち続け、傭兵たちをなぎ倒していった。地に伏せて頭上を飛び行く魔弾を避けた頭は、同じく地面に伏した仲間たちに怒鳴り立てた。

「おい、起き上がれ愚図ども！　まだくたばるほどやられちやいねえだろう！　よく聞け、このまま後ろに逃げても背中から撃たれるだけだ。それに前に進まにゃ、元々追ってたあのチビも逃がしちゃまって、踏んだり蹴ったりよ。そうなるぐらいなら、弾に当たっても前に出て、アレを取っちめた方が早い」

だが、当初の意気を挫かれた彼らの中から、びゅんびゅんと飛び交う魔弾にあえて身を晒して進もうという者は、すぐには現れなかった。地面を這ってのそのそと動く仲間を見かねて、再び頭は怒鳴った。

「何、呑気やってる。ビビッてやがんのか、え？　いいか、手前らが多少死のうが、それがどうした？　運よく生き残りや、死んだ奴の数だけ取り分だって増えるんだ。ここでやる気出さねえでどうする？　ここで立たねえ奴は、俺が代わりにぶっ殺してやるぞ！　いいから進め、今だ!!」

お頭の号令と共に、傭兵たちは一斉に起き上がり、前へ前へと駆け出した。魔弾を浴びて気を失った仲間を、後ろに続く傭兵たちは容赦なく盾として使い、邪魔になれば脇に押しつけ、進んでいった。そうして妖精の元へと辿り着いた傭兵の一人は、走る勢いのままに、彼女の胸へとナイフを突き立てた。

「ピューーーーッ！」

妖精は、悲痛な声を上げながら煙のように消え去った。後には何も残らず、まるで全てが幻であるかのように消え去った。

「なんだったんだこいつあ？」

「ふん、呆気ねえ！　さあ、こいつのことは忘れて、さっさとピンク頭を追いやがれ！」

傭兵たちは、再び穴の中を駆けだした。遅れを取り戻すため、彼らは慣れぬ地下道を急ぎ進み行く。そしてすぐにまた、思わぬものと遭遇することとなった。

「頭あ、大変でえ！」

「何だ？」

頭は返事を聞く前に全てを理解することとなった。彼が見ている中、声を上げた傭兵の一人が紫光煌めく魔弾の直撃を受け、体をくの字に折って地面に倒れ伏せたからだ。魔弾が向かってきた先には、先ほど倒したはずの妖精のような少女が、キャツキヤと甲高い声で笑っていた。

「二匹目がいたってのか!？」

「馬鹿な！ 使い魔は一人一匹だろ!？」

「待て、3匹目も出てきたぞ!！」

だが、実際にはそれどころではなかった。しばらくすると、曲がり角という曲がり角から、ふよふよと何匹もの妖精が飛び出て来た。彼女らは傭兵に気付くや否や、キャツキヤ、キャツキヤと笑いながら、魔弾を叩き込みにかかった。またおぞましいことに、現れる妖精という妖精が、皆全く同じ顔付き、同じ表情を浮かべており、そのことがより一層、傭兵たちの恐怖を煽った。情け容赦なく叩き込まれる魔弾の数々に、傭兵たちは一人また一人とノックダウンされていく。彼らには、明確に全滅の危機が迫りつつあった。

「は、はははは。こんな時どんな顔すればいいんだろうな」

「笑ってんじやねえぞ新入り！ おめえは死ぬ！ 誰も守ってくれやしねえからな！ 死にたくなきや、てめえ自身で死ぬ気で戦いやがれ！ 野郎ども、掛かれ!！」

その一声を皮切りに、地に伏せていた傭兵たちは、決死の突撃を開始した。妖精たちは、ナイフの一突きで倒れるほどに脆かったが、反対に傭兵たちは、その彼女らへと近づくまでに何発もの魔弾を叩き込まれ、身悶えることとなった。一方で傭兵の頭は、そんな手下を上手く盾にしながら妖精たちに近付き、戦場で培った剣技でもって、彼女らを次々と切り払った。敵の数が減るのに合わせ、地面に膝を付いていた傭兵たちも負けじと立ち上がり、妖精に向かって突っ込んで行く。

「遅えぞ、馬鹿やろう。このまま一気に押し潰してやれ」

盛り返した傭兵たちに、頭は相変わらずの罵声を浴びせたが、その

表情は少しばかり緩んでいた。そうして彼が、次なる獲物を見定めて、相手に近付こうとした時、それは起こった。

頭は、踏み出した足に違和感を感じ、思わず下を見やった。すると彼の足元には、蜘蛛の巣を幾重にも束ねたかのような、べとべとする繊維状のものが取り付いているではないか。彼は苛立ち紛れに、それを乱暴に振り払おうとした。その衝撃がいけなかった。途端に、足元からぷんという匂いが立ち上り、頭の鼻孔をくすぐった。彼はそこで、訳も分ならず恍惚な気分を襲われ、そしてその過ぎたる刺激に耐えかねた彼は目眩を起こし、その場で足を止めてしまった。目眩のする気分は中々抜けず、お頭がやっと正気を取り戻した時には、何匹もの妖精が放った魔弾が、もう避けられないところまで近付いて来ていた。

「ピュイッー!」「ピュイッー!」「ピュイッー!」

「このくそがあアアア!! うおおおおお!」

頭の絶叫が、ダンジョン中に響き渡る。小悪魔たちは、まるでいたずらに成功した子供のよう、無邪気な笑みを浮かべてこの狂騒を楽しみ続けた。

#### ※リリスに関する機密資料

.....

「なかなか良い感じじゃない!」

「フン、そうでしょう、そうでしょう?」

少し興奮気味に有利な戦況を見守るルイズの傍らで、魔王はいい仕事をしたと言わんばかりに、満足げに汗をぬぐっていた。

「やはり彼女たちに頼って正解でしたな。成虫になるまで時間がかかるムシとは違って、魔分から生まれるリリスは生まれた時から完成形なのがイイトコロ。中途採用にピッタリの即戦力となってくれただけでなく、餌となるエレメントを食べて、すぐさま数を増やしてくれるのです。上手くやりくりすれば、短時間でリリスひしめくダンジヨ

ンの出来上がりというワケですな。ありがたいことですよね。一匹が死んでも、代わりがいるんだもの！」

「それにやっぱり、魔法を使って遠くから攻撃出来るところが強いわよね」

ルイズは少し羨ましそうな顔をしながら、元気よく杖を振るうリリスを眺めた。

「それだけではありません。ルイズ様は見ましたか？ 先ほど、偉そうにしていた賊の一人が、立ち往生していた様を！」

「そうよ、あれは一体なんなの？」

「フェロモンです！」

「フェロモン？」

「リリスたちは、ムシをペロツと平らげるオマケに、勇者どもをメロメロにして酔わせるフェロモンの罠を作り出すのです。これに引つかかった勇者どもは、一時の夢心地と引き換えに、ダンジョンへと養分や魔分をたんまり落としていってくれるというワケです。おかげでスナックリリスのお・も・て・な・しは大成功のようですよ」

ルイズは、スナックという言葉の意味は分からずも、その言葉のいかかわしい響きに顔をしかめた。彼女は、再びリリスたちの戦いの場に目を向け、言った。

「それにしても、まさかこんなおとぎ話から飛び出てきたような、かわいい姿のマモノがこんなに活躍するなんて驚いたわ。ただ、体力はあんまりないみたいね。さつきから賊どもに結構倒されてるじゃない」「フム、元々リリスの体力は低いですからね。それに数が増えやすい分、餌となるエレメントも不足しがちで、体が弱くなりやすいのです」「使用どころを間違えると、逆にこっちが大変になるってことね」

ルイズはそれから、リリスの活躍を眺める傍ら、彼女らのエサとなるエレメントを供給すべく、地下に何本もの通路を掘り進めた。しかし、それでも賊との戦いに傷付いたリリスは、だんだんとその数を減らしていく。賊も同時に倒されてはいるものの、ルイズの心には再び不安が首をもたげて来るのだった。

「ちゃんと、全員倒しきれるかしらっ？」

「不安なようなら、勇者どものモチベーションを下げてください。モチベーションが下がると、彼らは動きに精彩を欠き、今まで以上にラクに倒せるようになることでしょう」

「そんなことも出来るの？」

ルイズの驚きの声に、魔王はこくりと頷いた。

「魔界でも特殊な技能を持ったマモノにしか出来ない芸当ですが、確かに出来ますとも。ルイズ様、地下深くを掘るのです。デーもんやまじんを作った時よりもさらに深い地層で、魔法陣を作ってみてください」

「分かったわ。それにしても魔法陣から出てくるマモノって、みんな不思議な力を持っているのね」

「まあ、おおむねそんなカンジのアレですな。魔法陣系のマモノはスゴイと覚えておけばケツコウです。あ、今から集めるのは養分ではなく、魔分にしておいってください」

「魔分で？ 少し大変そうね」

そう言いつつルイズは、上手になつてきたツルハシさばきでエレメントを操り、早々に魔法陣を作り上げた。

「後はこれをツルハシで突くだけよね。今更だけど、変なマモノが出てきたりしないわよね？」

「変な、と言われても困りますが、このスナック・リリスのおもてなしを、さらにハイグレードにするにはピッタリなマモノであることだけは確かです」

「……。まあ、呼び出せばわかる話よね。えいつ！」

ルイズは心を決めてつるはしを振り下ろした。すると魔法陣からキラキラ鮮やかな光が漏れ出し、そこから赤い髪と青い肌というエキゾチックな色合いをした大女が姿を現した。古代の彫像のごとく、口々に服もまとわぬ状態で……

「なあっ……！」

ルイズが顔色を失うのも、無理は無かった。新たに召喚されたマモノは、その下半身が地中に埋もれていることを除けば、そのグラマラスな身体を隠すものは何もなかった。それでいて彼女は、己のその姿

を誇るがごとく、女王のように堂々とした態度でダンジョンの中を動き回り始めていた。

目を丸くして口をあぐり開けたルイズに、魔王はなけなしの弁解を始めた。

「そりゃあちよつと、ファントムレディのわがままボディはシゲキが強すぎるかもしれません。ですがそれこそが、戦闘に向けた勇者どもの意識を掻き乱し、モチベーションを下げるにはもってこいなのです。ああ、ちなみに彼女は腹が減ると、嫉妬深い女の本性ゆえか、リスを捕食し……ルイズ様？」

魔王は急にルイズから立ち込めた強烈なマガマガしい気配に、すわ何事かと目を向けた。

直後、ルイズはツルハシをズダダツと振り下ろし、ファントムレディを一瞬の内に塵へと変えてしまった。

「ドヒエーツー！ な、なにをするのですか!!」

ルイズの大暴挙に、魔王は思わず声を張り上げた。だがルイズからは相変わらずマガマガしい気配が立ち込めている。彼女はゆつくりと口を開いた。

「だって、考えてもみなさいよ」

「なにをですか!」

「あいつ、赤い髪だったわよね」

「はい?」

「燃えるように赤い髪だったわよね。しかも長髪。そんなもって、お、おっぱいも大きかったわよね」

「まあ、そうですね……まさかルイズ様、彼女のスタイルの良さに嫉妬しただなんてことは……」

「それって、キュルケよね」

「……………」

「……………」

「ア、ハイ、ルイズ様。今度は養分の方で行きましょう」

気を取り直して、ルイズは養分を掻き集め始めた。

「たっぷりと養分を集めておいてください。まじんを召還した時には魔分をたくさん使いましたが、今度は養分をたくさん使って魔法陣を描くのです」

地中の養分は魔分よりも多いためか、今度の魔法陣も先ほどと大して変わらない時間で描かれた。ルイズは完成した魔法陣を突いた。先ほどと同じようなグラマラスな美女が現れたが、今度はグレーの髪色をしており、赤い要素は欠片も見当たらなかった。

「これがファイアレディです。先ほどの彼女とは違って、今度は勇者どものモチベーションを上げ難くするマモノになります。少し消極的なのですが、これでやつらの士気がひとたび下がれば、再びモチベーションを取り戻すことは難しく……ルイズ様？」

再び、ルイズはマガマガしい気配とともにツルハシを振り上げていた。魔王は慌てて彼女の腕を抑え、ツルハシによる暴挙を止めんと体を張った。

「もう、今度は一体何なんですか！ ルイズ様のワガママに答えて、赤い髪じゃ無くなったでしょう!?!」

ルイズは、暗い表情でぼつりと返事を返した。

「だって、おっぱい大きいわよね」

「そんな人、いくらでもいるでしょうが!」

「ここまでの大きさとなると、中々いないものよ。それにね、何といつても肌の色がイケナイわ。だってそれ、褐色肌よね」

「……まさか」

「それって、キュルケよね」

「……………」

「……………」

二人の間の沈黙を、『ぎにやあああ!』という断末魔が切り裂いた。

「……どうやら、レデイの力を借りずとも何とか倒せたようです。地上に戻りましょうか」

二人は、言葉少なに地上への道を歩いて行った。

.....

魔王は、ダンジョンの出口からのそつと身を乗り出しつつ、そつと呟いた。

「全く、ルイズ様のキュルケアレルギーにも困ったものですな、ナアアアアア?!?!」

「なに?!? なんなのよ!」

突如として吹き荒いだ風が、魔王の体をコロコロと転がした。ルイズは突然のことに目を白黒させている。そんな彼女へと、落ち着き払った声が投げ掛けられた。

「あら? てつきり賊が出て来るものかと思ったら、あなただったのね」

「まさかこの声って!」

ルイズが慌てて穴から外を伺うと、そこには風竜に乗って宙を舞う二人の少女の姿があった。

「見たところ、逃げて来たってわけでもなさそうね。それじゃあ、その穴に踏み込んだ賊たちは、みんなあなたが倒したってことかしら?」

「キュルケ! タバサ! 何よあんたたち、何でここに居るのよ!」

キュルケは、ゆっくりと旋回して降りてきた風竜からすとんと飛び降りると、ルイズに返事した。

「だって、何か面白そうなことしてるじゃない? ダンデイな魔法衛士隊のおじさまと一緒に、愛の逃避行だなんて、なかなか燃えることしてるじゃない」

ルイズは、呆れ返ったように返事を返した。

「そんなんじゃないわよ。よく見なさい。ギーシユも一緒よ」



「それが不思議だったのよねえ。何であなた、お邪魔虫なんて引っ付けてるのよ。もしかして、他人がいる方が燃えるとか？」

「あああああんた、いい加減にしなさい!!」

キュルケは、怒りがフットーしそうなルイズからそそくさと逃げると、今度はワルドにすり寄って行った。

「は〜い、素敵なおじさま。幼い子供を愛でるよりも、情熱的で大人な恋愛はいかが？」

だがワルドは、にべもなく彼女を振り払って告げた。

「婚約者に悪いのね。近づかないでくれたまえ」

「あら、ルイズ。あなただって彼と婚約してたのね。ぎ〜んねん」

彼女は大きく息を吐いた。言った。

「それでギーシュ。あんた何が好きでこんな針のむしろに付いて来るのよ。」

あんたって、そこまで男女のことがわからないバカだったの？

「失敬な事を言わないでくれたまえ！ 元はと言えば、僕たちだけで秘密裏に事を進めるはずの任務に彼が「ギーシュ!!」

ルイズが声を張り上げた。しかし、はつとしてギーシュが口をつぐんだ時にはもう遅かった。

「……ふーん。秘密の任務、ねえ。やっぱり面白そうじゃない。付いて来て正解だったわ。ね、タバサ？」

「興味ない」

ワルドは、この好ましからざる追跡者に苦笑するしかなかった。

「参ったな。本当は我々だけで動きたかったのだが……」

「フー！ あなたが私達に同行さえしなければ、彼女たちの目を引くことも、

私がこうして風で吹き飛ばされることもなかったのです!!」

起き上がった文句を垂れる魔王を無視しながら、ワルドはルイズに話し掛けた。

「ルイズ、君は随分強くなったようだね。素晴らしい。君はいつか立派なメイジになれると信じていたよ」

「本当に？ 嬉しいわ、ワルド」

ぱあつと顔を明るくするルイズを横目に、キュルケは「お子様の恋愛ね」と呟いた。

そんな傍ら、息巻く魔王は、今度はタバサとの睨み合いを始めていた。

「……何か？」

「うぬぬぬぬ！ シラジラしいとはこのことです！ あなたでしょうが、私を風で吹き飛ばしたのは！」

襲撃を受けたすぐ後だというのに、緊張感に欠けるその場の雰囲気、ギーシュは呆れてため息を漏らした。

「全く呑気だな。隠れることしか出来なかった僕が言うのも何だが、襲ってきたあいつらは、貴族派の刺客だったかも知れないんだぞ？」

「……ギーシュ」

「あつー！」

ルイズに白い眼を向けられ、ギーシュは口元を手で押さえた。しかし時すでに遅し、キュルケはその瞳を爛々と好奇心で輝かせていた。「貴族派の刺客ってことは、アルビオンの騒乱にまつわる任務なのね。中々スリルのあることしてるじゃない。私にも参加させなさいよ。フーケを捕まえた仲じゃない」

馴れ馴れしくすり寄ってきたキュルケを見て、ルイズは、はあーつと深いため息をついた。ワルドはワルドで、頭を抱えている。

「まったく、なんという…… しかし、もうここまで知られてはしようがあるまい。決定的なことさえ隠し通しておれば、それでいいさ」

ワルドは力の抜けた声で言った。厳しくは責められなかったギーシュだが、彼自身は己の失態に酷く落ち込み、しゅんと肩を落としていた。

「しかしギーシュ君、君の言っていたことにも一理ある。少し、賊の様子を検めて来よう。手伝ってくれるかね？」

「………！ はい、喜んでー！」

ギーシュは、力んだ様子で返事を返した。

「ワルド、私も行くわ」

「いや、君はもう十分働いてくれただろう？　ここは僕たちに任せ、休んでいてくれたまえ」

そう言うと、ワルドとギーシュは二人連れだつて、ダンジョンの中へと向かつていった。

「倒れた相手には興味ないわね」

「練習にもならない」

「あんたたちねえ〜！」

ルイズは、きーつとなつて、忌まわしき二人組を睨み付けた。

.....

しばらくして、ダンジョンから出てきたワルドは、ルイズを見るなり黙つて首を振つた。後ろから付いて来たギーシュはいえ、少し青い顔をしているようでもある。

「すまないな。時間を無駄にしてみましたようだ。おそらく彼らは、傭兵崩れの物取りだろうと思うが、正直、分かったことは何もなかった」

それを聞いたキュルケは、不思議そうに口を挟んだ。

「あら？　相手は平民なんですよ？　魔法で脅せば、すぐに口を割るものではなくつて？」

「いや、まあ、大概はそうなのだが……」

珍しくも口ごもつた彼の後を引き継ぎ、ギーシュがそれに答えた。

「残念ながらと言うには語弊があるが、賊は一人残らず『倒れて』しまつていてね。話を聞き出すことは出来なかったのだよ」

「……ああ、そういうことね。まあ、仕方が無いんじゃない？」

「死人に口なし」

ルイズが顔色を少しずつ悪くしていく中、ワルドは再び口を開いた。

「僕はてつきり、襲つてきた者たちを捕える機会があるものだと思つていたのでよ。だが、これで彼らの正体は分からなくなった」

「そんな！　ごめんなさい、ワルド。私そこまで頭が回らなくて……

必死だったのよ」

ルイズは、自らの誇るべき戦果の落とし穴に気付き、大いにショツ

クを受け、うつむいた。

「いや、いいんだ。僕の想定が甘いのが悪かったんだ。そもそも君を危険に晒してしまった。」

「それこそが一番の問題さ」

「いいえ、私が悪いのよ」

「そんなことはないさ。ただ…… 次からは、自分一人で危険に突っ込まないようにはしてくれたまえ。無事切り抜けられたからいいものの、君がもし傷ついてしまったらと思うと、僕はつらい」

ルイズはしゅんとし、小さな声で『はい』と答えた。しかし、ここに落ち込むばかりか、逆に怒りの炎を燃え上がらせる者がいた。魔王である。

「黙って聞いておれば、ルイズ様の業績にケチをつけるとは……！」

だが当のルイズが落ち込んで、乗り気ではない。

「魔王、あんたは静かにしてなさい」

「ムムムム…… 納得出来ませんー！」

不満の収まらぬ魔王へと、ワルドは諭すように語り掛けた。

「使い魔君、いけないな。君も大人だろう？ ルイズの代わりに、君がしっかり判断していかねければいけない時だつてあるだろうに、困るよ」

その上から目線の説教じみた言葉に、カツチーンと頭に來た魔王は、怒り交じりの笑みを浮かべ、荒々しく言い返した。

「フフフフフフフフ……！ まったくオロカなことです。考えが足りないとはこのことでしょう。コケ・ムシ、いずくんぞトカゲ・リスの志を知らんや。矮小なニンゲンには理解できないでしょうが、ルイズ様のお力は、常人の想像のはるか先を行くのです。敵を全滅させたから、話を聞き出せない？ 全くもってノープロブレムです！」

「いや、君は気にしないかもしれないが……」

魔王の言葉に、ワルドは冷笑的な笑みを浮かべて答えたが、しかし魔王の話はこれで終わりではなかった。

「いいでしょう。なら、我々を襲ってきた者の話を聞いてみせようではありませんか。一人どころか、全員起き上がらせてやっても良いの

「ですぞ？」

魔王の言葉が理解できず、皆が首をかしげる中、彼の奇妙な言動に慣れているルイズが一番に疑問を投げかけた。

「あんた、何を言ってるのよ。賊たちは、もうみんな倒れてしまったというじゃない。それとも、まだ生き残りのあてでもあるわけ？」

魔王はそこで、やれやれと首を振った。

「ルイズ様は、ご自身のお力をまだ理解しきれていないようですね。ルイズ様の手に掛かれば、命を操ることなどワケのないことなのです。賊が死んだから話を聞けない？ 気にすることはありません。そのしかばねを蘇らせて、話を聞き出せばよからうなのです！」

一瞬みんな黙り込み、その静けさの間に貯めた音を吐き出すかの如く、大声を上げた。

「「はああああああ？」」

「……ほう？」

ルイズらが呆れて叫びを上げる中、ワールドだけは興味深そうに魔王の話へ耳を傾けた。

「そんなバカなこと、出来っこないわよ！ 私を一体なんだと思ってるの!？」

そんな大それたことを出来るとしたら、きつと始祖ぐらいのものだわ！」

「何を言うのです。ルイズ様は、今まで散々土くれに命を吹き込んできたではないですか。死んだ彼らを蘇らせるぐらい、訳のないことでしょうか？ ルイズ様は、これまで何だかんだ、しかばねの出る戦いをしてこなかったですからね。試してみるには、いい機会というものです」

「えっ……？ まさか、本当に出来るの？」

あまりに自信あふれる魔王の態度に、ルイズは思わず半信半疑となった。そこへ、更にその背中を押すものが現れた。

「僕からも頼むよ、ルイズ。君の力というものを見てみたい」

「ワールドまで！」

「嘘か真か分からぬが、レコン・キスタの指導者は命を操る術を使い、

それを虚無と称しているらしい。ルイズ、もし君にも同じことが出来るというのなら、それはこのハルケギニアにとって、途轍もなく重要なこととなるだろう」

ルイズは魔王の話を到底信じ切れてはいなかったが、婚約者から期待の眼差しを向けられては、無下に断るわけにもいかない。結局、実際に試してみようということになった。ギーシュの助けを借りて、穴の中から賊の頭目と思われるしかばねが運び出される。

「ギーシュ殿、そーつと、そーつとですぞ」

「分かっている。レビテーションの魔法で失敗することはないから、黙って見ていてくれたまえ」

「それを聞いて安心しました。マモノに倒されたニンゲンの体は、魔界の瘴気に触れ、大変崩れやすくなっておりますからね。そこそこ、しばらく地面に放置していたら、勝手に肉がポロツと剥がれ落ちるぐらい、モロくなって「嫌な話をしないでくれたまえ！」

月明りの元に、賊のしかばねが晒される。リリスの魔弾をこれでもかと食らい、息絶えたしかばねは、肌に見える場所いたるところに大きな青あざが出来ており、見るからに痛々しい。

「せっかく、月明かりの届くところまで運んだんだ。一応、所持品を調べておこう」

ワルドがしかばねを検分する最中も、ルイズの心は大いに揺れていた。

「嘘よ。信じられないわ。大体、どうやればそんな奇跡じみたことを起こせるのよ？」

「カンタンな話です。しかばねをツルハシで一突きすればいいのです」

「たったそれだけ？　あり得ないわ」

「何も驚くようなことではありません。なんせニンゲン、指先一つでダウンすることもあるぐらいなのです。ツルハシ一突きで蘇ってもフシギはありません」

「不思議すぎるわよー！」

首を振って否定にかかるルイズであったが、いつまでもそうやって

彼女が嘆いているわけにはいかなかった。大して時間を掛けることもなくワルドの検分も終わり、魔王の提案が試される時が来た。それは同時に、ワルドにとつての困惑の時の始まりでもあった。

「ルイズ……？　なぜ君は、その……　僕の目がおかしくなければ、ツルハシを握りしめているんだい？」

「アハハハハ！　嫌だわ、ワルドったら。どう見てもこれは『杖』じゃない！」

「いや、それはどう見ても」さあ見てて、ワルド！　精一杯頑張るわあ！」

ルイズは目を泳がせながら、急ぐようにしかばねの前へと走り寄った。魔王からのアドバイスの言葉が、彼女へ投げ掛けられる。

「さ、ルイズ様。ツルハシでグサツと一突き、ホネに届くまでいちやつて下さい」

「……やっぱイヤあ！　なんで私が、こんなおぞましいこと……！」  
「いけませんな。こういうのは心構えがダイジなのです。ツルハシでマモノを間引く時と同じ要領で、しかばねにツルハシを振り下ろしましょう。ダンジョンに慣れて来たルイズ様は、もはやマモノを間引く時に、いちいちブッコロス！　なんて、強く意識しないでしよう？」

……今回のレデイ類のこと、私、忘れられそうありません。あれはまさに、ブッコロスと思う前に手が動いている感じでした。あれには、血も涙もない破壊神様の本性を見た気が……」

「その話はもういいでしょー！」

「ともかく、同じようお願いします。今回はブッコロスではなく、逆にブツ生き返すワケですが、そう心の中で思ったなら、その時スデにツルハシは振り終わっている、というのが理想です。『ブツ生き返した！』と、自信を持って言えるといいですね」

「頭がこんがらがって来たわ。殺すつもりでコレを振るうならまだしも、生き返すつもりで振るうなんて、どんな心境でいればいいのか、まったく想像がつかないもの」

「いいですか、命を操るということは、出来て当然と思う精神力なんです。大切なのは『認識』することなんです。このしかばねに、ヤバイ

魂をIN出来ると思いなされ！ ニジリゴケが養分を吸って吐くことのように！ 杖を振って、爆発が起きるのと同じようにツ！ 出てトーゼンと思うのです！」

「余計なお世話よっ！」

ルイズは怒り交じりに、ツルハシをぶんと振り下ろした。ツルハシの刃先がしかばねに食い込む感触が手に伝わると、ルイズは直前までの怒りを忘れ、小さく悲鳴を上げた。地面に、からんからんとツルハシが落ちる。すでにしかばねは、ふるふると小刻みに震え始めていた。

「おお……！」

一人で立ち上がったしかばねを見て、ワルドは思わず歓声を上げた。ギーシユやキユルケは、あまりにも信じ難い光景に、息を飲んで見守っていた。しかばねが、ぎこちなく一歩、二歩と歩く。

「し、信じられない！ だけど、現実なのよね……？ これで話を聞き出せるわ！」

「あ、お待ち下さい、ルイズ様!!」

魔王がルイズに声を掛けた直後のことだった。歩みを進めようとしていた賊は、糸の切れた人形のように、その血肉をドサツと地面へと落とした。血肉のみを地面へと落としていった。彼は、皮膚、筋肉、臓腑、その一切を身にまとわぬ状態になってさえ、湿り気ある白骨だけの姿で、その場に残っていた。

血の通わぬ体は、それ以上動くことが出来るのか？

肉を失った体は、そのまま立ち続けることが出来るのか？

出来る、出来るのだ！

見よ、魔物と化すまでに恨み込められた内骨格

見よ、死神のごとく刀身を握り締める手骨の指先

そこから放たれる恐怖の一閃を知る者は

遠巻きにて行方を見守る一人の魔王

破壊神に与えられた精神力で動く彼は、もはや命を支える血肉は不要とばかりに、骨のみの姿でケタケタと動いてみせた。



「二」 「二」

皆、ドン引きである。

「ああ、やっぱりムリでしたか。ルイズ様は見た目を気にすると思つて、私も努力はしました。けれど、やっぱりスケルトンはスケルトン。生身のカラダを維持させるのは不可能だったようです」

「二」 「二」

すさまじいショックを受けた一行からは、未だに言葉の一つもこぼれない。

「さ、気を取り直して、話を聞き出していきましょう。スケルトンとなった彼は、もうマモノの一員なので、ルイズ様では話が通じないでしょう。僭越ながら、代わりに私がその務めを……」

魔王が喋っている途中で、突然スケルトンがケタケタと走り出した。彼はワルド目掛けてまっしぐらに駆け寄り、剣の切っ先を向けて突き刺そうとした。ワルドは直前まで啞然自失といったていであったが、すんでのところで腰に差した杖剣を抜き放つと、そのままスケルトン目掛けて振り抜いた。彼の杖剣の一薙ぎでスケルトンの全身はばらばらになり、地面に転がっていく。散らばった骨は、もうピクリとも動かなくなっていた。

「い、今のは……」

このあまりの出来事に、流石の魔法衛士隊隊長も動揺を隠せない様子であった。

ルイズは、震える声を張り上げた。

「ワルド、助かったわ！ 賊の“生き残り”を倒してくれてありがとう！ まさか、あんな姿になって生きてるとは思わなかったわ！」

「え？ いや、ルイズ、今のは君が……」

「いやだわ、ワルド。死んだ人間が生き返る訳ないじゃないの！ フフフフッ！」

錯乱気味に現実逃避に走ったのは、ルイズだけではなかった。近くでこのザマを見ていたギーシュまでも、「既に死んでる賊なんていなかった。ルイズ、そういう訳かい？ そりやそうだよな！ あっはっはっ！」等と、狂った笑い声を上げ始めていた。

「そうよね！　ちよつと骨ばつて見えただけ、目の錯覚よね！　てつきり死霊か何かかと思つたわ！」

キユルケまでもが上擦つた声でその流れに乗つかる中、タバサは自分の杖を握りしめつつ、ガタガタと震えて言った。

「騙されちゃ、ダメ」

「そ、そうよ！　ワルドがいなかったら今頃、上手いこと『死んだふり』をした賊にやられて、大変なことになつてわ！　本当にありがとう、ワルド！」

「……ルイズ。君の心の平穩がそれで保たれるなら、僕は何も言ひはしないよ」

「ああ、ワルド。何かから何までごめんなさい！」

「いいんだ、ルイズ。僕のかわいいルイズ」

ワルドはそう言うと、震える彼女の身体を優しく抱き止めた。

魔王は、ペツペツと地面に唾を吐きるそぶりを見せた。

「あんなヒゲ子爵のどこがいいんでしょうか？　頂点は常に破壊神様ただ一人でなければいけないのに、婚約者などとはとんだジャマモノです！」

「アツハツハツハツハツ……　ハア……　……まさか使い魔君、それでさつきみたいなおぞましいことを起こしたわけじゃああるまいね？」

ギーシュの問い掛けには、酷く憔悴の色が含まれていた。

「まさか！　むしろ子爵のせいで、スケルトンから話を聞き出せなくて、ホントーにザンネンです。てつきり私は、あのスケルトンから話を聞き出す機会があると思つていたのですが、これで彼らの正体は分からなくなりました。ルイズ様、仕方がないので、別のしかばねでもう一度お願いします」

「冗談じゃないわよ！」

泣き声交じりのルイズの叫びは、夜の静けさの中によく響いた。ワルドは、体を震わせるルイズを優しく抱きしめつつ、その瞳だけは鋭い眼光をもって、魔王を睨みつけるのだった。

STAGE 28 おい、決闘しろよ

賊の襲撃を切り抜け、道に行くこと半刻、ルイズたち一行はようやく目的地のラ・ロシエールに到着した。切立った崖に挟まれて家々が並ぶ、この特徴的な街に足を踏み入れた彼らが、まず一番初めにしたことは、眠そうな眼で宿を探すことであった。一行の護衛役であるワルドこそ凜とした姿勢を保っているものの、それ以外の面々は、皆ふらふらになつて、辺りを見回している。しかし、彼らの眼鏡に適う宿は、なかなか見付からなかった。

「見ろよ。あれも宿じゃないか?」

ギーシュの声に振り向いたルイズたちは、うーんと唸った。反応が悪い女性陣の中でも、特に大きく眉をひそめたのはキュルケであった。

「駄目よ、ギーシュ。あんなボロ宿のベッドじゃ、私きつと眠れないわ」

「君は何をしに着いて来たんだ!」

「ハツハツハ! しかし、あながち悪いことでもあるまい。皆、今日は移動続きで疲れただろう。体を休めるなら、快適な宿の方が良い」

ワルドの言葉に、ルイズもこくりと頷いた。

「そうね。明日以降、今日の疲れを引きずるのは止したいわ」

「休息、大事」

女性たちの支持を取り付けたワルドは、思案気に顎を撫でつつ、街を見回した。

「実は一つ、宿に心当たりがあつてね。とはいえ、僕も立ち寄るのは初めてなものだから、場所が定かでない」

彼は、ひっそりとした夜の街において、唯一賑わいを感じさせる酒場へと目を向けた。

「このまま歩き回っても埒が明かない。少し街の者に話を聞いてこよう」

卑下た笑いが漏れ聞こえて来る酒場は、ルイズたちにとって近づくに遠慮したい場所であったが、ワルドは気にした様子もなく、一人で

ずかずかと店に乗り込んでいった。そうして、さして時間を掛けることもなく、彼は外で待つルイズらの元に戻って来て、言った。

「あそこに、崖が大きく突き出ているところがあるだろう。その少し手前辺りに、例の貴族向けの宿はあるらしい」

ルイズたちはワルドの先導の下、間もなく目的の宿へと辿り着いた。崖に沿って、岩肌をくり抜いて出来た建物が並ぶ中、その宿は実際立派な門構えをしており、ルイズたちの目を引いた。宿の前には、杵の形が彫られた看板が吊るされており、金箔を施されたそれは、かがり火の光を反射し怪しく輝いていた。

「ほう、ここに泊まるんですね！」

今まで特に意見をすることもなく、皆に着いてきた魔王も、この宿にご満悦の様子であった。

『『女神の杵きね』、なかなか良さそうな宿ではないですか。ただ実にオシイのが、カタチ的によく似ていても、ツルハシと杵じゃあワケが違うところですかね。今からでも改名すべきではないでしょうか？』『女神のツルハシ』、ルイズ様が泊まるにはピッタリです』

ルイズは、実に嫌そうな顔をして、これに答えた。

「そんな宿はまっぴら御免よ。名前にツルハシが付くなんて、労働者向けの安宿みたいじゃない」

宿の前に、ルイズら女性陣が早く一息付きたいという思いを募らせる一方、ギーシュはというと、土メイジとしてラ・ロシエール特有の岩造りの家に思うところがあるのか、少し元気を取り戻した様子であった。

「うむ、素晴らしい。ラ・ロシエールの街並みは芸術だが、ここは特に素晴らしいじゃないか。巨大な一枚岩をこうも綺麗にくり抜いて、こうも風格ある造形に仕上げるとは、土系統の技術がどれだけ駆使されているか分らないね。まさに至高の逸品だよ」

「そりゃあ、岩をくり抜いて作るのは大変でしょうけど、泊まる側からしたらただの宿屋よ。ねえ、タバサ？」

「興味ない」

ワルドは苦笑しながら声を掛けた。

「外で騒いでいてもしょうがないだろう？　早く入って休もうじゃないか」

そこでふとルイズは、思い出したようにワールドへ尋ねた。

「船は何時出るのかしら？　ここで泊まっついて、次の便を逃したりしたら大変だわ」

「心配しないでくれ。この宿を取ったら、僕がすぐに棧橋まで行って、船出の時刻を聞いてくるつもりさ。それまで君たちは、ここでくつろいでいてくれたまえ」

「まあ、いいの？　あなたに全て任せてしまっても」

ワールドは、ルイズに紳士然とした笑みを返した。

「もちろんだとも。君たちは軽く食事でも取りながら、ゆっくり待っていてくれればいいさ」

「亜人のお連れ様はちよつと……」

「」

シヨックを受ける魔王の傍ら、ルイズは精一杯尊大なそぶりでの、宿の主に告げた。

「これでも私の使い魔よ。メイジが宿泊するのに、使い魔を置いておけないなんて話があるかしら？」

「ああ、これはとんだ失礼を致しました。使い魔ということなら、安心してお泊り頂けます。いやなに、以前、狩猟帰りのお客様が捕獲した亜人を無理に連れ込みましてな。色々と、難儀したのでございます」  
「問題はないようだな」

ワールドが宿泊の手続きを再開する中、ルイズは魔王へと振り返ってニヤリと笑った。

『女神の杵』、相応しくないのは杵という名前じゃあなくて、泊まるあなたの方だったみたいね」

魔王は、カエルが潰れたような声を出した。

.....

高級宿『女神の杵』は、一階部分が小洒落れた酒場となっており、ワ

ルドを除く一行はそこで各々くつろぎ始めた。岩屋という言葉から想像されるものを覆す、この見事な建築物の内部に入ったことで、ギーシユは益々興奮を隠せない様子であった。

「見てくれよ、この艶やかでありつつ、落ち着きもある色合いの壁を！ピカピカに磨き上げられているお陰で、岩石の内に刻まれた美しい層状の模様がつぶさに見て取れる。これらの層が形成されるに至った、悠久の時間を思いながらワインを楽しむことが出来るだなんて、素晴らしいと思わんかね」

「タバサ、興味ある？」

「ハシバミ草がうまい」

タバサは、宿の内装にはまったく興味がなく、もっぱら酒場のメニューとして提供されるサラダにご執心であった。

「おお、これはすごい！ テーブルの脚を見てくれ。脚と床との境目がないだろうか？ しかも肌目にきれいな層が並んでいて、継ぎ接ぎや変形の跡が全くない。つまりこのテーブルは、床と同じ一枚岩を、そのまま切り出したものだ。岩をまったく割ることなく、また魔法による無理な癒着・変形を行うこともなくこの形を作り上げるだなんて、この一枚岩のテーブルにはスクウェア・クラスの匠の技が込められている！」

「そこまで一枚岩にこだわらなくても、テーブルぐらい他所から持ち込めばいいじゃない」

土魔法の芸術に目を奪われたギーシユの興奮は、キュルケにはなかなか伝わらないようであった。

「ハシバミ草とフライドオニオンに若鶏のローストを添えたラ・ロシエール風サラダを持って参りました」

どこか引き攣った顔のウェイターが、タバサの前に新しい一皿を持って来た。引き換えに古い皿の数々を片付けようとする彼へ、タバサは振り向きざまに口を開いた。

「ハシバミ草とトマト、燻製ベーコンのサウスゴータ風サラダを大盛りで」

タバサの、物怖じせずハッキリとした声での注文に、ウェイターの

顔が更に引き攣った。小柄な彼女一人で、サラダ大皿5度目の注文であつた。

「ちよつとタバサ、そんなにハシバミ草ばかり食べてたら、体に悪いわよ?」

「そんなことはない。ハシバミ草はとっても健康的。この苦みが体にいい」

タバサはそう言って、再びむしゃむしゃとサラダを平らげ始めた。そんな彼女に、そろりそろりと背後から近づく怪しい影が一つ。

「そんなにオイシイのですか?」

魔王は、彼女の後ろから声を掛けると、ヒョイとサラダを一つまみ、手で持ち上げ、口に放り込んだ。その際、ハシバミ草の上に添えられた具が、ごっそりと持っていかれたのは、これ悲劇にあらずや。呆然と見つめるタバサの前で、魔王は実に良い笑顔をしながら、つまみ食いの感想を言った。

「とっても、マガマガしい味ですな」

それは褒め言葉なのか? タバサはふるふると震えた。

「でもこの料理には、もつと改良の余地があると思います。それも必要なのは、味の足し算ではなく引き算です。この料理は、もつとシンプルな作り方をする事で、食材のおいしさが更に引き立つハズです……そう! この料理、ハシバミ草さえ入っていなければカンペキです!」

タバサご自慢の大振りな杖が、魔王のとんがり頭へと振り下ろされるのに時間は掛からなかった。

「痛ッ! 何をするのですか! ちよつと、その大きな杖はシヤレになりませんぞ。言ってる傍からまた! ああ、ヤメテ!!!」

酒場にゴツン、ゴツン、という鈍い音が何度も響き渡る。

「あいつつたら、本当に元気ね」

ルイズは、目の前で繰り広げられる馬鹿げた風景を前にして、物憂げにため息を付いた。そうして彼女が一人、手持無沙汰にワイングラスを傾けることしばらく、カランカランと宿の扉に吊るされた鐘が鳴った。

「やあルイズ、戻ってきたよ」

「ワールド！」

彼女の声に、好き勝手やっていた一行もワールドに気付き、彼の元に集った。

「皆、聞いてくれ。困ったことに、明後日まで船が出ないらしい」

一拍置いて、叫び声が上がった。

「エエ、ーッ!? ナゼですか、あれだけ苦労してウマを駆けてきたというのに!」

「そうだそうだ! 何のためにヴェルダンを置いて来たか分からないじゃないか!」

「あつそう。私たちは別に構わないけど、ねえ?」

「明日は一日観光」

好き勝手言い始めた同行者どもに、ルイズは怒りを爆発させた。

「あんたたち黙りなさい! キュルケにタバサ、誰も物見気分で付いて来たあんたたちの話は聞いちやいなわよ。それにギーシユたちも、これが大事な任務だつて分かっているんでしょね? 疲れたぐらいで文句言ってるんじゃないわよ!」

彼らが不満そうな顔をしながらも押し黙ると、それを見届けたルイズは、改めてワールドに向き直った。

「それでワールド、一体どういうことなの?」

「うむ。それがどうも、今日明日は、大陸へ行くにも距離が離れ過ぎているらしくてね。大きな軍艦ならばともかく、今の我々が乗れるような普通の商船は、アルビオンが最接近する時にしか出港しないそうなのだよ」

「それが明後日なのね」

「ああ。朝早く、日が昇る前には出るらしい」

それを聞いたギーシユが仕方ないかと唸る中、魔王だけは首を傾げた。

「ウヌヌ、話が良く見えません。待とうが待つまいが、遠いことに変わりはないのでしょうか? 早く着きたければ、その分早く船を出して貰うしかないのではないですか?」



「ああ、そう言えばあんたは、アルビオンのことをよく知らなかったわね」

ルイズは一人納得すると、魔王に説明した。

「アルビオン大陸というものは、ただ宙に浮いているだけじゃなくて、ゆつくりとハルケギニア上空を周回しているのよ。だから、ここら・ロシエールに一番近付いた時じゃないと、船に積み込んだ風石が足りなくなつて、とても辿り着けないのよ。分かったかしら？」

「ナルホド、それは分かりました。しかしそうになると、また別のことが気になつて参りますな」

「別のこと？」

魔王は、怪訝な表情をしたルイズから顔をそらし、ワールドに振り向いた。

「あなた、確か風メイジでしたよね。魔法衛士隊の隊長ということは、スクウエアだったり？」

「ああ、もちろんだとも」

「じゃあ、そのチカラで多少の無理は効きませんかね？」

「もしかして、風石が足りない分を風魔法で補えないかということかい？ 少しは出来なくもないが、相手は巨大な船だ。丸一日と浮かせることは出来ないさ。それに、予定と違う運航を船にさせて、悪目立ちしてしまうのも考えものでね」

だが魔王はすぐには納得せず、ワールドへと強い口調で言い返し始めた。

「それがどうしたというのですか！ この任務は速さがイノチなのでしよう？ それにワル目立ち、結構じゃあないですか。ルイズ様にはそれぐらいがちょうど良いんです」

「ちよつと、どういう意味よ」

ルイズは憤慨したが、速さが尊ばれるというところは正しいと、ギーシユは魔王の言葉に聞き入っていた。

「確かに、速さは何事にも勝る。『兵は拙速を尊ぶ』、軍人にとっては常識さ」

「いや、確かにそれはそうだが……」

変わらず難色を示すワールドへ、魔王はさらに言葉を加えた。

「何より、今度はあなたの番なのです」

「うん？ 何だつて？」

聞き返したワールドに、魔王はとてもイイ笑顔で答えた。

「この街までは、ワレワレが馬車馬のようにアセミズ垂らして苦労しました。今度はオマエの番です！」

ガチンと音を立てて、魔王のすぐそばの床をツルハシが跳ねた。

「チツ、外したわね」

「ル、ルイズ様、何ということを!!」

「それはこっちのセリフよ！ あんたワールド様を何だと思っているのよ。絶対、許さないわー！」

「これは心外です！ ギーシュ殿だつて、きつと心の底では私に同意しているハズ！」

「僕に振らないでくれたまえよ！」

場の紛糾を収めるように、ワールドが声を上げた。

「僕の力を使えば、なるほど早くに出港させられるだろう。しかし、そういう勝手を通すにはお金もいる。それだけの資金は持って来ているが、アルビオンに渡つてからも何かと入用だろうし、ここは辛抱して船出を待とうじゃないか」

それを聞いて、ルイズははつとした。

『お金が心配であれば、売り払って旅の資金に充てて下さい』

彼女は、指輪をはめた手をぎゅつと握り締めた。酒場の明かりを反射して、青い宝玉がキラキラと輝いている。姫様から預かった、大事な大事な指輪。これを売り払うなんてことは、絶対にあつてはならない。

「出発は、明後日の日の出前で決定よ。これは、任務を仰せつかった私からの命令よ。これ以上の文句は許さないわ」

そう言われては是非もなく、魔王もギーシュも、不満を口の中に押し留めた。キュルケは、やっと終わったかといった様子で、欠伸のそぶりを見せている。

ルイズは、改めて彼らに睨みを聞かせ、忠告した。

「あんたたち、明日の予定が空くからと言って、羽目を外し過ぎないようになさい。明後日にもし、どうにかなっていたら、置き去りにするからね！」

話はこれまでとばかり、ルイズは皆に背を向け、宿泊部屋のある2階へ向かった。階段に足を掛けようとした彼女の耳に、再び言い争いを始めたらしき魔王の声が届く。

「なに？ ルイズ様があなたと同室ですと!？」

「婚約者なんだから当然のことさ。部屋の格を考えても、大使の彼女と衛士隊長の僕が一番良い部屋に泊まるのは、理に適っている。それに彼女とは、大事な話もある」

「認めません！ 二人きりでお泊りだなんて、お父さん、そんなことは認めませんよ！」

「誰がお父さんよ！」

.....

「再会を祝して乾杯」

二つのグラスが小気味良い音色を奏でた。宿泊部屋にて二人きりとなったルイズとワールドは、大きく座り心地の良いソファに腰掛けてくつろぎつつ、ワインの芳純な味と香りを楽しみながら、少しずつ会話を進めていた。

「いや、それにしても今日はまったく驚かされたよ」

「確かに驚いたわ。まさか、任務の初日から賊に襲われるなんて、思わなかったもの」

ルイズの返事に、ワールドは小さく首を振って応えた。

「いや、そうじゃあない。確かに賊の襲撃にも驚かされたが、僕が本当に驚いたのは君自身の成長ぶりだよ。まさか君一人で、あれだけいた賊どもを壊滅させてしまうとは思わなかった。もしかして、僕の護衛はいらなかったかな？」

「とんでもないわ！」

ルイズは、すぐさま否定の声を上げた。

「私なんて全然駄目なもの。襲われた直後は何が起きたか分からなかったし、気が付いてすぐに出来たことは隠れることだけだったわ。」

私が賊を相手に出来たのも、ワルドが風魔法であいつらを寄せ付けなかったおかげだもの。もしワルドがいなかったら、私たち今頃、賊に殺されるか、捕われていたわ」

「それを聞いて安心したよ。どうやら僕は役立たずにならずに済みそうだ」

ワルドは、少しおどけた様子で答えた。

「しかしルイズ、今回は君こそが一番に仕事をしたんだ。自分のことをそう卑下することはない。君がフーケを捕縛したという噂は聞いていたが、まさに話の通りだったというわけだ」

「まあ、知っていたの？ あれは、運も良かったのよ」

「運も実力の内と言う。運勢を掴めるのだから、実力があればこそさ」ルイズは、ワルドの言葉を否定しつつも、褒められた嬉しさを顔から隠し切る事が出来なかった。そんな彼女を微笑ましく見つめるワルドは、感慨深げに語り始めた。

「思えば君は、幼い頃からずっと、自分の能力を示すことが出来ずに苦しんできた。学院に入ってからでも、しばらくは大変だったろう。だが今や君は、フーケを捕らえられるまでになった。昔の君ならばともかく、今はもう、君の今後を疑う者はおるまい」

ワルドはそこまで言うのと、くいとワインに口を付けた。

「だが実のところ、僕は前から思っていたのだよ。君は偉大なメイジになるとね」

ワルドが妙に真面目腐った顔で言うものだから、ルイズは少し吹き出しそうになったが、それでいて彼女の心の内には、止まず嬉しさがこみ上げていた。

「そんな、お世辞なんて嫌だわ。私みたいな出来の悪い娘が、偉大なメイジになるなんて買い被りすぎよ」

「そんなことはない！ 僕は本気で、君が素晴らしいメイジになるだろうと信じていたる」

そこでワルドは、急にいたずらげな笑みを浮かべた。

「もつとも君は、芽を出して、伸びるまでも随分長いんだろうがね」

「もう！ ワルドだったらイジワルね。私ったら、恥ずかしいわ」

「いやいや、恥じることではないよ。人は誰しも成長の前には大きな壁にぶつかるものさ。それを乗り越えてこそ、人は偉大になれる。君の才能の開花は遅かったとはいえ、だからこそ君があれだけ力を振るえるようになったと思えば、まったく嬉しい限りだよ」

「……ありがとう。ワルド……」

彼女は、心に温かいものが広がるのを感じた。幼い頃、出来損ないの自分にあれだけ目を掛けてくれた子爵様が、今こうして自分を褒めてくれている。思えばいつもワルドはそうだった。自分がどうしようもなく悔しくて悲しくて泣いているときに、彼は風のように不意に現れては、優しく自分の手を取り、慰めてくれた。彼女は、昔のように彼の温かさに浸りたいと、そう願った。

「ルイズ、君はとても素晴らしい仕事をした。ただ……」

ワルドは、グラスを弄ぶように傾けながら言った。

「ただ、願わくば、君が活躍する姿を私も見てみたかった。地上で杖を振るう、君の姿をね」

ルイズは、今まで射していた日差しが雲に隠れてしまったかのように、心が寒くなるのを感じた。

「それは……」

ルイズには、口ごもることしか出来なかった。彼女は、まだ杖を振るえはしない。そしてツルハシを握りしめている限り、彼女は自らが力を発揮する姿を、周りに堂々と示すことも出来ない。ルイズは、一人小舟で揺られているかのような心細さを感じた。

「いや、いいんだ。何事にも順序というものはある。例えば杖を介さぬといえども、今まで形にならなかった君の力がこうして示されるようになったのは、前進に違いない。それに、君へ力の使い方を教えたというあの使い魔は、一癖も二癖もあるようだ。思い通りにはいかず、主の君もさぞ苦勞していることだろう。まあ、そんな風に粹から外れていることも含めて、さすがは伝説の使い魔と言ったところか」

ルイズは、それを聞いてきよんとしてしまった。

「ワルド、あなた一体何を言っているの？ 私の使い魔が、何か特別だ

とでもいうの？ 確かにあの使い魔は亜人だし、普通ではないけれど……」

ワルドは、意外だというように目を見開いた。

「おや、学院の教師からは聞いていないのかね？ あの亜人の左手に刻まれたルーン、あれは伝説の使い魔『ガンダールヴ』のものだ。始祖が従えし四の使い魔、その内の一人に刻まれていたものに他ならぬ」

ルイズは、思わず目を見開いた。

「冗談でしょう？ そんな風にからかうだなんて、嫌だわ」

「いいや、冗談でも嘘でもない。確かにあのルーンはガンダールヴのものだ。僕は始祖の歴史に興味を持っていてね。見間違えようがないのさ」

未だに信じられないルイズは、呆然とつぶやいた。

「何であんな使い魔なんか……」

「それは考え方が違う。あの亜人に伝説が刻まれたことが重要なんじゃない。君が伝説を刻み込んだことが重要なんだ。大切なのは君なんだ。君に、伝説へと通じる力が眠っているということこそが、大事なんだ」

ルイズは気が動転して、言葉を返すことが出来なかった。彼女としても、よくよく考えてみれば、あの日、召喚に成功したこと自体が奇跡的だった。さらに、そこで刻んだルーンが伝説であるというこの異常に、ルイズは不気味なものを感じた。

「こう言つては何だが、僕にとつては驚くべきことではなかったよ。言つただろ。君には特別な才能があるんだと」

ルイズの心の戸惑いは、余計に大きくなった。本当に、自分にはワルドが言うような素晴らしい才能が眠っているのだろうか？

「そして、だから……」

ルイズには、何も分からない。何一つ、分かりはしない。

「今の状況は、問題だと言える」

「ワルド？」

ワルドの様子からはすっかり、優しく包み込むような温かさが消え

失せていた。それどころか、今の彼は寒風のごとく、ルイズの心を凍えさせるまでになっていた。彼は、その場にいない魔王を責め立てるように、口火を切った。

「君の使い魔は一体、何を考えているのだろうか。確かに、君は偉大な才能を秘めている。だがそれは当然、偉大なメイジとしての才能であって、得体のしれない妙な力を操るためのものではない！」

ワルドが怒りを向けているのは使い魔であって、ルイズではない。しかしルイズには、彼の激しい言葉によって、自分の足元がぐらつくように感じられた。

「彼の奇妙な言動や振る舞いも、君の力の覚醒に繋がるというのなら、それも良からう。しかし彼は、君のメイジとしての才能を引き出そうともしていない！ それどころか、ツルハシ等という力仕事にしか能がない平民が使う道具を君に与えて、これまたおかしな力の使い道を君に植え付けようとしている。そんなものを使って君の力を引き出したところで、始祖の御業であるところの魔法に辿り着くことはあるまい。君も薄々気付いているのではないかね？ このまま進んでは、君は普通のメイジにすらなれない」

ルイズは言葉を返す事が出来なかった。確かにツルハシを通じて不思議なことは起こせる。中には、メイジの魔法のように見えるものもある。しかし、決してそれらは、杖を振るって起こす魔法と同じものではなかった。

「君は特別だ。君の内に眠る力は偉大なものだ。しかし今のままでは、君は偉大なメイジにはなれない。今の君の状況は、地に繋がれた鳥のようなものだ。いや、もつと酷いかもしれない。地に繋がれるどころか、君はもつと下、地の奥底にまで引きずり込まれようとしている」

「ああ、なんてこと……」

ルイズは、ワルドの話を聞きながら、胸に刺すような痛みを覚えた。彼女は、大切な婚約者の前では笑顔でいたいと思っていたのに、その心の痛みを抑えることが出来ず、沈み込むような表情を顔に浮かべた。そのことに遅れながらも気付いたワルドは、はっと息をのんだ

後、罰が悪そうにルイズから眼を反らした。

「いや、すまない。いきなりこんなことを言っただけで、戸惑わせてしまったね。僕はただ、君の才能が活かされようとしていないことをもどかしく思っただけなんだ。それが許せなくて、つい熱が入ってしまった。どうか、許しておくれ」

「謝らないで、ワルド。あなたが私のことを思ってくれていることは、私が一番よく分かっているもの。きつとあなたは疲れているのよ。今日一日、私のためにずっと気を張っていたのでしよう？ あなたらしくないことをしてしまったのも、無理はないわ」

「ありがとうルイズ。君は優しいね。それにしても、『僕らしくない』か…… どうやら、僕は話を急ぎ過ぎたようだ。物事には順序があるというのに、僕はそれを無視しすぎた。そう順序、順序だ。何事もいきなりという訳にはいかない……」

ワルドはそう言うと、少し目を落とす。

「……君と離れていた時間が長くて、それが僕は心配なんだ。再開した君との間に、埋められない距離が開いていやしないかとね」

「そんな心配なんて！ 私、今だってあなたのことは好きよ」

「ありがとう。でもそれだけじゃ足りないんだ」

「え？」

「ルイズ、結婚しよう」

ワルドの言葉に、ルイズはしばらく呆気にとられた後、頭から煙が出そうなほど顔を赤くした。

「な、なにを言っているのかしらワルド、私なんてまだ学生よ？」

「君は立派なレディだよ。今まで放っておいて済まない。王宮での地位を築くために必死で働いてきたが、そうしたらこんなにも長い間、君と離れることになってしまった。でも君への思いが変わったことはない」

ルイズはワルドの情熱的な言葉にくらくらしながら、それでも否定の言葉を返した。

「そんな、私…… まだ一六歳なのよ」

「もう一六歳だ。立派な大人だよ」



「お父様にだつて話していないのに！」

「もうとつくに婚約は交わしているじゃあないか。今さら反対されはしないさ」

「それでも私、こんな、いきなり…… すぐには答えられないわ」

その返事を聞いて、ワルドは一瞬残念そうな顔をしたが、またすぐにルイズへ言葉を返した。

「そうだね。だからこそ、僕たちの間にも順序というものが必要だ。二人の間の距離を縮めるための順序がね。僕は君との結婚のため、この旅で君との離れていた距離を近付けたいと思っている。そのことだけ知っておいてくれると、僕は嬉しい」

ルイズの頭は、ワルドの熱烈な言葉とワインの酔いが入り混じつて、もうどう返事してよいのか分からなくなっていた。そんな彼女に向け、ワルドは優しく笑いかけながら言った。

「少し酔いが回り過ぎたかもしれないね。それに今日は疲れただろう。もう休むといい」

ワルドはグラスを片付けると、ふらつく足取りのルイズをベッドまで導いた。

「おやすみ、ルイズ」

ワルドはそう言いながら、肩を抱き寄せた。

「ごめんなさい、ワルド。まだ私……」

ルイズの言葉にワルドは目を見開くと、やがて苦笑した。

「ごっちょごめんよ。僕はまた急ぎ過ぎたらしい」

ルイズはベッドにごろんと身体を預けた。そうやってワルドの顔を見上げると、彼女はまた恥ずかしくなつて、彼から目を反らした。

「この旅で必ず君の心を射止めて見せる。さあ、今度こそお休み」

そう言つて、ワルドはルイズから離れていった。ルイズは布団にもぐりながらも、胸の高鳴りを抑えることができなかつた。だが彼女は、それと同時に微かな痛みが胸の内に残っていることにも気付いていた。

ルイズは考えた。ワルドは、自分に力があることは認めてくれても、ツルハシを使うという力の振るい方のことは認めてくれなかつ

た。あれでも、私は必死に頑張っていたというのに……

そこまで考えて、彼女は思い直した。いや、それも当然じゃない。真面目に魔法の研鑽を積んできたワルドが、ああいう反応を返すことなんて当たり前だわ。自分だって初めは、あんなに嫌がっていたし…… いやいや、今はそんなことよりも、結婚のことが重要だ。ワルドのことは嫌いではない。でも、結婚だなんて、本当にいいのだろうか？

「本当に、どうすればいいの？」

彼女の小さな声は、誰に届くこともなく消えていった。

.....

翌朝、ラ・ロシエールの空は雲一つなく晴れ渡っていた。開け放たれた部屋の窓からは、眩しいばかりの光が差し込み、爽やかな風が吹き込んで来る。

「ウーム、今日もスガスガしい天気です。こんな日にこそ、あの大空をマガマガしく染め上げたいものですね」

魔王の朗らかな呟きに、ギーシュは眠そうな声を返した。

「うーん、もうちよつと寝かしてきてくれたまえよ」

「何を言っているのです！ 今日是一日フリーなのですぞ？ 普段ならばタイクツな授業に身を置いているハズだというのに、今日は何に追われることもなく自由！」

空はこんなにも青いのに、風はこんなにも暖かいのに、どうして起きないというのですか」

「睡眠不足なんだよ！ 君のイビキのせいでちつとも眠れやしなかったぞ。というか、何だね。君は地下によく潜るくせに、そんなに日なたがいいのかね」

魔王は、さも不服そうに腕を組んで答えた。

「当たり前です。地上侵攻さえ出来るなら、誰があんなジメジメしたところに何時までもいたいと思うのですか」

「ちよつと待てい！ 君、前は土が最高だとか言ってただろう！」

憤慨するギーシュに、魔王は逆ギレしつっ言い返した。

「そういうあなたはどのようなのですか！ 土メイジだからと言って、一

生地下で過ごしていただきたいなどは思わんでしよう！」

「ム、それはそうだが」

「いいですか、地下というのは、たまに潜るから良いんです。それが、年がら年中続くとなれば、気が滅入るに決まっています」

「そういえば、君はここに召喚されるまでは地下で暮らしていたんだったな」

魔王は頷きながら、地下生活の実情を語った。

「実際、地下帝国なんてロクなもんじゃありません。日がな苦しい労働に、絶えざる危険、少ない給料。楽しみといえば、地下の氷室でキンキンに冷えたビールにおつまみ、それからマガマガしい細工を駆使した超エキサイティングなチンチロぐらいしかないのです」

「案外、楽しそうにしてるじゃないか」

ギーシュはぶんと布団を跳ね飛ばして、上半身を起こした。

「まったく、君と話していたら目が冴えてきてしまったじゃないか」

「いいことではないですか。どうせ明日は船に乗ったら、狭い船室の中、何もすることはないので。今日、目一杯遊んで、明日は寝て過ごせばいいのです」

「まったく元気なことだな。それで？ どこに行くか当てはあるのかね？」

ギーシュはのろのろと着替えながらも、魔王に問い掛けた。

「ええ、実はとっても気になる木を見かけたのです。名前も知らない木ですけど、見たこともない、なんともフシギな木ですから、見たこともないミステリーをフシギ発見できそうな気がしてなりません」

「ああ、あの巨木の、世界樹のことかね」

「世界樹！」

魔王は、喜びの叫びをあげた。

「やはりそうでしたか。そうでしょう、そうでしょうとも、そりやあトクベツな木に決まっています。遠目にもあそこまで大きな木であれば、きっと何かトテツモナイ神秘を秘めているハズだと思っていました。そうと分かれば、是が非でも行かないワケにはいきません。何としても、葉っぱの一枚でも見つけて持ち帰るのです！」

「なに？ 葉っぱだったって？」

「おや、ご存じないのですか？ 世界樹はその神秘さゆえ、葉っぱ一枚、いやそれどころか葉から滴るしずく一つとっても、傷付いた体をたちどころに直すようなゴイスーなチカラが秘められているのです。このような強力なアイテムを手に入れることが出来れば、きつとこの旅にも役立つに違いありません！」

それを聞いてギーシュは唖った。

「なるほどな。確かに伝説の木ともなれば、そういうこともあるのかもしれない。君も少しは任務に役立つことを考えているというわけだ。だが君、致命的な見落としをしているぜ」

「何ですって？」

氣にしたそぶりを見せる魔王に、ギーシュは決定的な事実を突き付けた。

「あの木は、とつくに枯れている」

「……イヤイヤイヤ、まだ諦めてはいけません。木というものは、一見枯れたと思っても実は生きているということが多々あるものです。あの木の周りをぐるりと巡ってみれば、そこには健気にも新たに芽吹いた世界樹の若木が……！」

「もう一つ君に教えて進ぜよう。あれが枯れたのは、たしか数千年は前の話だ。代わりに何か生えてきたなんて話も聞かない」

「ええい、ヤツカイな！ 地上がダメなら、地下はどうです？ マツピングなり何なりして探索を続ければ、トーゼン世界樹の三つ葉やら根っこやらをゲット出来るのでしょうか？」

「は？ 地下がなんだって？」

「なんと！ まさか、あれだけ立派な世界樹が生えていて、その地下に迷宮の一つもないだなんて言わんでしような!？」

「それこそなんだね。君らの穴掘りじゃあるまいし、そんなものがあるわけなからう」

「地下もダメ！ それなら逆に天辺はどうです？ もしかして、世界樹を上まで登り切ると、すべての叡智を授けられたり、あるいはそれをすてるなんてとんでもないというような剣をゲット出来たりするの

ではないですか!？」

「ない。アルビオン行きの船の係留所があるだけだ」

「ああ、ワカリマシタとも、ソーですよ。何かあるのはその更に上なんでしよう……? 世界樹の天辺よりも更に上には箱舟が浮かんでいて、そこにイカツイ肩当てをした骨ばった至高の御方がいるんですよ?。」

「一体、どんな妄想だね?。」

「本当に何も無いではないですか!。」

「いや、知らんよ」

魔王はなおも諦め悪く、一人で小さくブツブツと呟いては首を振ったり、大きさに手を振り上げたりしていたが、やがて背中を縮こませ、顔を両手で覆って黙り込んでしまった。

「……………」

「諦めたらどうだね?。」

「……………実は、あの木の穴場的なところに、チョコビツとだけ葉っぱが生え残っていたり……?。」

「だから枯れたって言ってるだろ。ついでに言うと、木の幹がくり抜かれてもいるぞ」

ついに魔王は、ガツクリと項垂れた。

「おお、なんと…… or 2 セツカク、良いアイデアだと思ったのに…………」

「まあそんなこともあるさ。普通に、街の市場にでも遊びに行こうじゃないか」

「いやでも、もしかしたら誰も気付いていないだけで、芽の一つも出ている可能性が微レ存…………」

「もし本当に見つけることが出来ても、そんな貴重な葉っぱを筆つたなんて人に知れたら、縛り首じゃすまないぜ」

そう言ってギーシユが呆れていると、急にこんこんと扉がノックされた。

「ム、誰でしょうか? もしかしてルイズ様から、一緒に街で遊ぼうというお誘いとか」

だが魔王が扉を開けた先に姿を現したのは、見目麗しい少女どころか、もつかりと髭の生えた胡散臭い青年子爵であった。

「おはよう、使い魔君。よく眠れたかね」

「チエンジです！」

「連れないな。まあいい。君、今日は暇だろう？ 付いて来るといい」

「どこに行こうと勝手ですが、私はルイズ様と離れるつもりはありませんぞ」

ワルドは、魔王のつつけんどんな言葉にも飄々と返事を返した。

「彼女も来る。それに、そもそも宿から外へ出る訳ではない。君は、この街がかつて砦だったことを知っているかね？ 中庭に行けば、その歴史を肌で体感できるのさ。ギーシュ君、君も名誉ある貴族の歴史に興味があるなら、付いてくるといい」

「……そういうことならば、分かりました」

ワルドは魔王の返事を聞き終えると、下で待っていると言い残して、立ち去ろうとした。

「そうそう、言い忘れていたが、朝食は抜いてくるといい」

「おや、オープンテラスで食事とシャレこむワケですか？」

「フッフ、それはどうかな？」

ワルドはそう言うと、今度こそ立ち去って行った。ギーシュは心配そうに魔王へ声をかけた。

「使い魔君、本当に大丈夫なのかね？ 僕には嫌な予感しかしないんだが……」

魔王は首を振りつつ答えた。

「仕方ありません。何だか分かりませんが、ルイズ様もそこに向かうというのです。使い魔をやっている以上、行かないワケにもいきません」

二人はため息を付きながら、のろのろと身支度を整えていった。

.....

ラ・ロシエールは、トリステインとアルビオンを繋ぐ、空の玄関口である。それは取りも直さず、この街がトリステインにとって、アルビオンの侵攻を防ぐ要衝となることを意味している。かつて、始祖に

連なる四の王家が互いの覇を競い合って止まなかつた時代、ラ・ロシエールは街が丸ごと要塞であった。より正確に言えば、かつて要塞であったものが、時代と共にその役目を変え、街と化したのである。崖の岩を切り出して作られた堅牢な建物の数々は、そうした軍事施設の名残に他ならない。

今となつては高級宿の一つに過ぎない『女神の杵』も、創建当時は要塞の重要な一画を成しており、その中庭は、練兵場としての役割を持っていた。大勢の武装した将兵が居並び、国王陛下の閲兵を受けたというその場所に、今、ワルドと魔王は向かい合つて立っている。

「貴族たちが真に貴族たらんとしていた時代、この場所は数多くの決闘の舞台にもなつた。介添人が見守る中、互いの誇りと名誉を掛けて、貴族たちは杖を振るい、魔法を唱えあつたのだ。故に、二人の男が雌雄を決するのに、これ以上の場所はあるまい」

ワルドはそう言うと、魔法衛士隊の証たる、杖を兼ねたレイピアを抜き放ち、その切っ先を魔王に突き付けた。

「使い魔君、君に決闘を申し込む！」

ワルドの明朗な声は隅々にまで響き渡り、かつての面影を僅かに残すのみであつた中庭に、往年の剣呑な空気を甦らせた。もつとも、当の本人たちの内、堂々としているのはワルドだけで、魔王はというとただただあんぐりと口を開けている。

突然のことに言葉を失っていたルイズが、我に返って叫んだ。

「何言ってるのよ、ワルド！　いくら仲が悪くても、同じ任務を共にする仲間じゃない！」

「そうだぞこのヒゲ子爵！　君は何をもち狂つとるんだね。まあ僕はあんたのこと、仲間だとは思ってないんだが……」

「一番とち狂ってるのはあんたよ、このアホギーシユ！」

ワルドはギーシユのことを露骨に無視し、ルイズに向け語りかけた。

「仲間か。確かにそれはそうだ。仲良くしていた方が、普通は良いのだろう。しかし君も分かっているように、これはただの任務ではない。昨日も賊に襲われたように、これは危険な任務だ。しかもアルビ

オンに渡ってしまえば、もつと危なくなる。そういう時に仲間の実力が分からないと、非常に困るのだよ。更に言えば、どちらが上かもはっきりさせておかねばならぬ。彼はどうも私を軽んじているようだからな。そんな状態で、大事な時に盾突かれては、一行の全滅すらあり得る。この決闘は、必要なことだと理解して欲しい」

ワルドはそう言うのと、ルイズから目を反らし、再び魔王に向き直った。

「君はルイズに召喚されて以来、君自身では全く動かず、代わりにルイズに変な道具を渡してマモノを作らせているらしいな。僕は、そんな君の実力を知りたいのだよ。君に刻まれたルーンが伊達ではないのか、確かめてみたいのだ。それに何でも、君は魔王を名乗っているそうじゃないか。マモノの王を語るといことは、それなりに腕に自信があると見た。それが相応の実力に裏付けられたものなのか、はたまた井の中の蛙の妄言に過ぎぬのか、確かめてやろうというのだよ」

「そんな、そいつが魔王だなんていうのは妄想で、まじめに取り合うほどのものじゃないのよ！」

ルイズも必死になって言葉を投げかけるが、彼女の思いはワルドには届かない。

「そうなのかい？ それは困った。婚約者のすぐそばに、そんなデタラメなやつを置いてはおけない」

「ワルド！」

悲鳴のような声を上げるルイズへ、ワルドは宥めるように語り掛けた。

「君がやつとの思いで呼び出した使い魔だけに愛着は強いのだろうが、それでは駄目なんだ。昨日の夜も話しただろう？ 彼が君について回る限り、君は本当に進むべき道を見失うことになる」

「そんな！ こいつは、確かにバカで、お調子者で、失礼で、いい加減なことばかり言って、見るもマガマガしくて、迷惑極まりないやつだけど……」

話していて、ルイズ自身が混乱し始めた。あれ？ やつぱりコイツは、この場で懲らしめておいた方がいいのではなからうか？ 途中で



口ごもってしまったルイズを見て、ワルドは満足げに頷いた。

「そうだろう。君も冷静に考えれば、この使い魔とは距離を取った方がいいということに気が付くはずだ」

「待って、ワルド！ それでもそいつは、私の大事な使い魔で、大切な仲間なのよ！」

「獅子身中の虫という言葉もある。第三者としての冷静な立場から言わせて貰うが、この使い魔は君に似つかわしくない。それに、本当に彼が価値ある使い魔ならば、それをこの場で示してくれるはずだ」

「でもあなたは魔法衛士隊の隊長じゃない！ 勝てるはずはないわ！」

「当然僕だって手加減ぐらいはする。君の心配するようなことにはならないさ」

「でも！」

ワルドはルイズから顔を背け、魔王を睨み付けた。

「さあ、使い魔君。君が今、ここで何を成すべきかは分かっているだろう！ 掛かってきたまえ！ 君の手にした大仰な杖が、飾りではないと言ふのならば！」

ワルドの勇ましい言葉に、ルイズはいよいよ決闘が避けられないものになっていくのを感じた。

「魔王、彼の言葉に乗っちゃダメよ！ お願い、私のために戦わないで！」

「ムリムリムリ、戦うなんてゼータタイムリ、ムリです！ 誰かのために私が何かと戦うだなんてとんでもない！」

一切、迷うそぶりもなく戦いから逃げようとする魔王の態度に、その場には白けた空気が流れた。ワルドは、露骨に不機嫌そうな顔をしている

「まさか、この期に及んで私から逃げようというのかね」

「だって、私は影のフィクサー的な感じでホクソ笑んでいるのが仕事なんです。イタイのとか苦しいのとか、イヤなんで……」

「君の希望などどうでもよろしい。現に君はルイズの使い魔だろう。そして主を守るためにこの旅に着いてきた。違うのかね」

「いや、どちらかというと世界征服のためにですな……」

「何でもいいさ。とにかく、君の役目は彼女を守り通すことだろう？

君にだって使い魔としての意地があるはずだ。僕だって、戦ってみて君が彼女の使い魔に値する存在だと分かれば、それ以上君に文句を言ったりはしない。ルイズと共にフーケを捕まえ、賊を倒したその実力、僕に見せてみたまえ！」

魔王は、ヤレヤレと大きなため息をついた。

「あなたは本当に大きなカンチガイをしているようすな」

「なに？」

訝しむ様に魔王を見るワルドへ、彼は決定的な一言を告げた。

「ルイズ様を私が守るのではありません。ルイズ様が私を守るのです！」

「なん……だと……！」

あまりの物言いに絶句してしまったワルドへと、魔王は自慢にもならないことを自慢げに語り始めた。

「私のコマンドにたたかうの文字はありません！ もしここに錆びてボロボロの剣を携えた、訓練のくの字もしたことがないようなパーカー少年が現れたとしても、マツタク勝てる気がしません！」

あんまりな告白に、聞いていたルイズやギーシュまでもが、顔を覆いたくなくなった。

「ルイズ様に勝てない相手に、私が敵うはずありません。どうせそうなつては、逃げるを選んでも回り込まれるに決まっています。いやあ、メイジと使い魔は運命を共にするとは、まさにこのことですよ！ トモカク、決闘なんて、何を言われてもムリ、ムリなものはムリなのです！」

ワルドはしばらく目を見開いて驚いていたが、やがて軽蔑の眼差しを魔王に向けると、唾棄すべきものを見たという思いがありありと表

れた、冷たい声音で話し始めた。

「驚いた！ それで本当に使い魔か？ 使い魔とは主の目であり耳であると同時に、その働きで主と名誉を共にするものだ。貴族の使い魔なればこそ、当然誇り高くあらねばならない。それなのに、相手に立ち向かう勇氣すら持ち合わせていないとは、実力以前の問題だ。君のような使い魔では、ルイズを守れやしない。彼女を危険に晒すばかりだ」

ワルドは魔王から顔を背け、言い捨てた。

「君はせいぜいそこで妄想にでも耽つているんだな。君にはいたく失望したよ。君を召喚したルイズがかわいそうだ」

魔王はそれに言い返すことなく、黙って立ち尽くした。

「行こう、ルイズ」

「ま、待ってよワルド！ 彼は戦いが苦手なだけなのよ。他のことだったら、きつと……！」

だがワルドは彼女の言葉を押しとどめた。

「いや、もういい。彼は余程僕に負けるのが怖いようだ。そんなことで使い魔が務まるのか、はなはだ疑問だがね。そしてルイズ、あんなやつに心を割く必要はない。君のやさしきは美德だが、それだけでは君は失うばかりだ。君が真に必要なとしているのは、もつと別なものだ。僕ならそれを君に捧げられる……」

ルイズが黙り込んだのを見届けたワルドは、急に声音を変えて言った。

「まったく、使い魔君のせいで変な空気になってしまったな。さ、別の場所でも気分でも変えようじゃないか。歴史深きラ・ロシエールには、ここその他にもいくらでも見るべきところがある」

ワルドはルイズの手を取り、練兵場に背を向け歩き始めた。ルイズは後ろをちらちらと気にしつつも、ワルドの手を振り解いてまでは、その場に留まりはしなかった。

「知っているかい、ルイズ？ ここラ・ロシエールは、遙か昔、神話の時代には世界樹が生える聖地として栄えていて、木の根元には聖なる剣が刺さっていたのだそうだ。この剣は心正しき者にしか抜けな

かったと言うが、興味深いことに空を隔てたアルビオンにも似たような伝承が……」

二人の声が遠ざかっていく。ギーシユはなおも立ち尽くす魔王に近寄り、そつと声をかけた。

「まあ、元氣出したまえよ。あれは相手が悪い。手を出さなかった君の判断は英断だったと僕は思うね」

「でも、いくら何でも言ってることが情けなさすぎやしねえか」

「うおつ、何だねこの声は！ 僕たち以外に誰かいるというのかね!？」

声はすれども姿は見えず、すわ決闘に敗れた者の幽霊か！ そう思ったギーシユが顔を青くして、しきりに後ろを振り向いたり、前に向き直ったりして慌てる中、魔王はクワツと口を大きく広げ、異言を吐き始めた。

「カキベ・クオデサ・ラハ・ミラウー！ カキベ・クオデサ・ラハ・ミラウー！」

ギーシユは、ヒエツと肝を冷やした。魔王の口から漏れ出る言葉の意味は分からずとも、それがなにかとんでもなくマガマガしい呪詛の言葉であることは間違いないように思われたからだ。

「お、おい！ 気味が悪いからやめておくれよ」

「S a K u j O s A k U j o s A k u J o s a k U j  
o S a K u j O s A k U j o s A k u J o s a k  
U j o o !」

「聞いちやいないー！」

「ワ・レワル・ド・ヲウラム・コトタ・ユール・キナシ！ ワ・レワル・ド・ヲウラム・コトタ・ユール・キナシ！」

「お前さん、一体どうしちまったよ?」

魔王の妙な迫力に、ギーシユはゾツとさせられた。加えて、姿無き何者かの声も相変わらず聞こえることだし、もうギーシユは勘弁して欲しかった。

魔王の呪詛は、その始まりと同様に、唐突に終わった。それから魔王は、静かに語り始め、その言葉の最後に怒りを爆発させた。

「初めてですよ…… ここまで私をニジリ、コケにしてくれたのは

……

……許さん。絶対に許さんぞワールド——ツ!!」

「おお、こりやあなかなかの心の震えだな相棒。でも相棒は剣を振るえねえんだよなあ。ハア……」

「なんだ、インテリジエンスソードだったのか。なんでそんなもの持ってるんだか」

ギーシュは、先ほどからの謎の声の出所が剣と分かってほっとしながら、改めて魔王に声を掛けた。

「とりあえず、君があまり気落ちしていなさそうなことはよく分かったよ。そうだ、その意気だ。この任務、まだ先は長いしチャンスはいくらでもある。いつか一緒にあいつの鼻を明かしてやろうじゃないか」

魔王は叫んでスッキリしたのか、大分落ち着きを取り戻した様子でギーシュに返事を返した。

「それもそうですな。ですが、いつかと言わず、今からでも仕掛けを打てるではありませんか?」

「なんだと、もう何か思いついたというのかね?」

魔王は周りを見回し、他に誰もいないことを確認すると、小声で話し始めた。

「この街は、アルビオンとの玄関口。当然、出稼ぎの傭兵のタグイも多いのでしょくな?」

「まあ、そうだろうな。昨日の賊どもも、もしかしたらアルビオン帰りの傭兵だったかもしれない」

「金が掛かっておれば、どんな仕事でも引き受けてくれるのでしょくな?」

「おいおいおい。君、それはシャレにならんよ。第一、金はどうするんだ? 君個人が出せる金なんか、たかが知れてるだろう」

「まあ、先ずは聞いてみてください。この街にたむろしている傭兵どもに、噂を吹き込むのです。王党派に通じた『ヒゲの立派な御方』、もとい『ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワールド』が、アルビオン王政府に重大な機密を伝えんとこの街に滞在している、と。お忍びゆ

え、目立たぬように一人で、この宿に滞在している、と」

「それは、とんでもないことになるぞー！」

「そうでしょうとも。貴族派に売り飛ばすにはもってこいの人物の登場に、傭兵たちは息巻いて宿の襲撃をモクロむことでしょう。後は、顔と名前が割れていることを理由にワルドを置き去りにし、彼をおとりとして我々はラ・ロシエールへの出立を試みるのです」

魔王のマガマガしい策謀に、ギーシユは呆れて言った。

「君は鬼かね。それとも悪魔かね」

「魔王ですとも。それで？ この話、乗る気はあるのですか？」

「僕たちまで危険にならないかね？」

「なあに、危ない場面は全て護衛の子爵に押し付ければよいのです。なんせスクウエアなのですからな。幸い、この宿には裏口がある様子ですし、我々が逃げる分にも問題はないでしょう」

「とんだ悪者だな、君は」

「フッフ、それ、褒め言葉ですぞ？」

二人は、なんともマガマガしく顔を歪めて、笑いあった。一方、インテリジエンスソードのデルフリンガーはというと、結局他力本願でほくそ笑んでいる自らの主に対し、悲しいやら情けないやらで、ため息を重ねることになった。

「それでは、噂を吹き込む役はお願いいたしますぞ」

「は？ なんて僕がやるんだね？」

「何を！ 私が作戦を考えたのですぞ？ 今度はあなたの番です」

「子供の僕に、そんな役をやらせようというのかね！」

「あなたしかいないではないですか！ あなただって、昨日のトラブルは見ていたでしょう？ 私のこのナリでは、やれ亜人なんだと行って、目立ちすぎます。下手したら、荒くれ者ども相手に、見世物扱いで捕獲されかねないではないですか！」

「そんなこと言ったら、僕だって子供の貴族だぞ！ 誘拐して身代金をせびるのに、これ以上の楽な相手がいるかね？ 第一、子供の話す噂話を誰が怪しまずに信じるというんだ」

「ツベコベ言わずに、先ずはやってみれば良いではないですか！」

「君こそ無茶を押し通そうとするんじゃない！ ワールドをどうにかする前に、僕がどうにかなってしまおうではないか！」

「一体、こんな所で何をしているのかしら？」

「あー！」

二人が話になんか夢中になっている間に、いつの間にか起きてきたキュルケが、彼らのすぐそばまで近付いて来ていた。その後ろにはタバサまで控えている。

「随分、楽しそうにお話ししていたわね。気のせいかな、物騒な言葉が聞こえたような気がしたけれど？」

魔王とギーシュの二人は、冷や汗を流しながら黙り込んだ。嫌な沈黙の時間が流れる。

おもむろに、魔王は口を開いた。

「ギーシュ殿……いくら冗談でも、言っているいいことと悪いことがありますなあ」

「ホワア！　なんてこと言うんだね、君は。元はと言えば、君が言い始めたのではないか！」

二人による泥沼の言い争いの勃発を、キュルケとタバサの二人は白い目で眺めた。喧しい声が辺りに響いていくと共に、練兵場はいつの間にか古き歴史を思わせる魔力を失い、ただ空き箱や樽が転がるだけの中庭にしか見えなくなっていた。

STAGE 29 やめてください しんでしま  
います

ルイズはその日一日中、ワールドに様々なラ・ロシエールの名所を案内されて過ごした。初めは浮かない顔をしていた彼女も、時が経つにつれ素直に観光を楽しむようになっていき、昼頃にはなごやかにワールドと食事を取るまでに至った。しかし、だんだんと日が傾いていくにつれ、彼女の心の内に再び、今までの出来事やこの先のことが思い起こされ、楽しかった気持ちが消えていってしまうのだった。

いよいよ明日の明け方には、アルビオンに向けて船が出港する。それに乗れば、もはや引き返すことの出来ぬ、危険な地を突き進むしかないという事実が、彼女の心に重くのしかかっていた。ルイズは、夕方になって宿の扉を前にしたとき、今さらながらに今朝方のことを後悔し始めていた。自分はある時、もっと何か出来ていたのではないだろうか？ あんなことがあって今、使い魔はどんな様子でいるのだろうか？ そんな憂いを抱きながら、彼女は扉を開いた。

「チクショー!!」

「フハッ！ フハハハハッ！ 私に勝とうなどとは、100魔ン年早いのです！」

ルイズが目にしたのは、落ち込みのカケラも感じられないほど調子に乗った魔王が、笑い転げる姿だった。ギーシュはテーブルに拳をガンガン叩き付けて悔しがり、キュルケはそれを高笑いしながら眺めている。

「あんたたち、一体なに騒いでるのよー！」

魔王は、ルイズに気が付くと意気揚々と返事を返した。

「フッフッフ、聞いてくださいよルイズ様。私ってヤツパリ幸運の星の下に

生まれついてるんじゃないかと思うんですよね！ フハッ！

フハハッ！」



「だから何があったのよ」

「賭けよ」

「ご機嫌で笑いの止まらない魔王に代わり、キュルケが答えた。

「今日一日をより刺激的なものにするため、ギーシュと私たちとで賭けをやったのよ。」

「それで私たちとあなたの使い魔が勝ったってわけ」

「タバサもぼつりと言った。」

「勝った」

「満足げな笑みを浮かべるキュルケたちに、ルイズは呆れながら答えた。」

「明日はいよいよアルビオンだっというのに、ほんつと緊張感ないんだから！」

「ギーシュもギーシュで、何それぐらいのことで落ち込んでるのよ。どうせあなたの小遣い程度、大した額じゃないでしょ？」

「ルイズの言葉を聞き、ギーシュは恨めしそうに顔を上げた。」

「君みたいな公爵家に生まれた人間には分からないだろうが、僕にとっては大金だったんだ。それに第一、これはお金の問題じゃあない」

「そう言うとギーシュはまた頭を頂垂れた。ちょうどその時、ワールドが外から帰ってきて、驚いた表情で告げた。」

「グリフオンの様子を見に小屋まで行ってきたんだが、びっくりしたよ。」

「昨日置いてきたはずの、あのジャイアントモールがここにいるじゃあないか！」

「感心した様子で話すワールドだったが、ギーシュはそれを聞くと余計に悔しそうな呻き声をあげた。」

「良かったじゃないギーシュ。これならアルビオンまで使い魔を連れていけるじゃない」

「そんなことはもう知ってる」

「ギーシュは、不機嫌そうにルイズへ言葉を返した。眉をひそめたルイズに、キュルケは説明した。」

「私たちのやった賭けはね、日没までに彼の使い魔が到着すれば彼の勝ち、間に合わなければ私たちの勝ちだったのよ」

「え？ まだ外は明るくない」

魔王はそれを聞いてチツチと舌を鳴らした。

「ルイズ様、肝心なことを忘れていませんか？ ここはいつもの学院ではないのです」

「こんなことなら、あんたも賭けに誘えば良かったかしら」

ニヤニヤと笑う魔王とキュルケに、ルイズが慥然とした表情をしていると、ワルドがああと、感心の声を上げた。

「なるほど、山か」

「その通り。ここら・ロシエールは、平原に建てられた学院とは違って、山並みに囲われています。トーゼン、地平が高くなった分、日の入りだって早くなるのです。何時もの調子で、『日没まで余裕があるだろう』なんて考えでいると、足元をすくわれるというワケですな。いやしかし私、カンゲキいたしました！ ヴエルダンデ殿は日没にこそ間に合わなかったとはいえ、その直後に到着なさるとは、本当に優れた力をお持ちですなあ！」

「うるさい！ そのギリギリでの到着が一番悔しいんじゃないか！」

ギーシユがギリギリと歯を食いしばる中、魔王とキュルケは再び笑い出した。

「なんででしょう？ 別に賭けに勝ったという以上の儲けは無いハズなのに、こう、ギリギリで相手が負けたと知ると、余計にユカイな気分になれるんですよね」

「分かるわ！ なぜかその分、得した気持ちになるのよね！」

二人が嬉しそうに騒ぎ立てる一方で、タバサは深く項垂れるギーシユへと近づき、肩を突いた。

「なんだね。もう、そつとしておいてくれないか？」

疲れ果てた様子で喋るギーシユの前に、タバサはぼんと金袋を置いた。彼女の儲けのすべてだ。

「もしかして、僕を憐れんで、返してくれるのかい？ だが、僕も男だ。意地がある。賭けの負けを誤魔化したりはしない」

タバサは、首をふるふると振った。

「違う。けれど、意地があるなら丁度いい」

そう言うタバサは、首を傾げるギーシュの前へ、一つのカップを置いた。

カップの中から、カランコロンと小気味よい音が鳴り響く。出た目は、4と5と6。

カップの底に、3つの小さなサイコロが並んでいた。

「負けたなら、取り返せばいい。足りないお金は、借りればいい」

みるみるしおれていくギーシュへと、タバサはコールした。

「倍プツシュ」

ルイズは頭を抱えなくなった。

.....

羽目を外しすぎるなよというワルドの忠告空しく、魔王らは臨時収入を惜しげもなく費やし、大いに騒ぎまわった。特に魔王の浮かれ具合は凄まじく、店にあるマガマガしい名前の酒を制覇するんだと意気込んで、デビルだのサタんだのディアブロだのといった、聞くからに度数の高さそうな酒をくいくいと飲み干していった。

「プフアーラー!! いやはや飲み過ぎました。段々暑くなってきましたね！」

ルイズ様、ちよつとこのローブ、預かっておいてください」

「ちよつと！ 何で私がそんなことしなげりやならないのよ！」

ルイズはそう抗議したが、ゴキゲンになった魔王は強引にローブを押し付けると、再びキュルケと一緒に種々の酒を煽り始めた。

「ダイジなものですから、無くさないようにしてくださいね！」

ルイズはこんなもの、そこらへんに放り捨てておこうかとも思ったが、後で魔王に大騒ぎされるのも面倒だと思いついて、溜息を吐きつつ彼のローブを手元に収めた。そこでふと彼女は、その暗い色をしたローブが妙に上等な代物であることに気が付いた。作り自体はシンプルだが、その見事に黒く滑らかな生地、肌触りは絹にも似ていて、それでいながら随分と丈夫そうでもあった。

「ちよつと魔王、これってずいぶん軽くて着心地も良さそうじゃない。

何で出来てるの?」

「やみです」

「やみ? やみって、あの?」

目を見開いたルイズに、魔王はそうですと返事を返した。

「魔界のマガマガしさが溜まって、長い年月をかけて深いやみになるんです。そのやみを織って作るのです。特にその品は、知り合いの魔王から譲り受けたアレフガノレド産の逸品です。月日と共に効果が薄れる模造品とはワケが違いますよ。どうです? ルイズ様も試しに着てみては? きつとよくお似合いでしょう」

いつもなら、魔王の勧めるものなど趣味が悪いと相手にしないルイズだが、この時ばかりは興味が勝った。彼女は羽のように軽いそのローブをするすると身にまとった。そしてくるりと一回転して、どうかしら?と聞いた。

「実にお似合いですよ、ルイズ様。あ、ダイジなものなので、後でちゃんと返してくださいね? そうびを奪ったら仲間から外すとかはナシの方向でお願いします」

「分かってるわよ! どうしてそうあんたは、そう余計な一言が多いのよ!」

ルイズが怒っていると、キュルケもそれを聞きつけ、話に加わりに来た。

「あらルイズ、何だか良いもの着てるじゃない。普段より、ずっと大人っぽく見えるわよ? 何というか、そうね…… 悪女ってカンジだわ」

「それって、本当に褒めてるんでしょうね?!」

ルイズがキュルケに噛み付く中、タバサはボソツと呟いた。

「マガマガしい」

それを聞いたルイズが、嘆きの悲鳴を上げようとしたとき、にわか  
に魔王は立ち上がると、大声で告げた。

「ルイズ様! あと30秒で勇者が訪れるヨカンがしますぞ!」

ルイズとギーシュはそれを聞いてビクリと動きを止めた。キュルケとタバサは首を傾げている。酒やつまみを給していた宿の主も、不

思議そうに問い掛けた。

「使い魔のお客さん、ここへ勇者が来るといふんで？ 魔王のお次に勇者と来れば、ハハハ、この宿もより一層繁盛しそうですね」

だが彼の言葉に返事を返す者はいなかった。ワルドは特に、苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「あんたの言う勇者って！」

ルイズは、慌ててツルハシを振るい始めた。床石がガツガツと削られ、みるみる内に深い穴が掘られていく。ギーシュも、飛び上がるように机から跳ね起き、薔薇の杖をさつと取り出した。

「早くテーブルを倒せ！」

「お客様、ああんてことを！ 困ります！ 床も家具も傷付けないでください！ この家は何から何まで、一枚岩から切り抜いた、歴史ある希少なもので……」

「そんなこと言ってる場合じゃない！」

その時、宿の扉が乱暴に蹴り開けられ、大きな音を立てた。一行がそちらに振り向くと、今まさに矢を放たんとしている大勢の男たちの姿が目に見え飛び込んできた。

「身を隠せ！」

ワルドが大声で叫ぶと同時に、矢が雨あられと飛び込んできた。店の棚に並べられたボトルが、次々と音を立てて割れていく。根元からポツキリと脚が折れた机の陰に、皆が身を竦める中、ワルドは机から杖を除かせては、早口に短い呪文を唱えた。

「デル・ウインデ」

途端に扉の方から悲鳴が上がり、しばらくは矢が止んだが、ギーシュが恐る恐る机の端から様子を窺おうとしたところ、次なる矢が彼の頭を掠めて飛んでいった。

「ひいっ！」

ワルドは、すぐにギーシュを引っ張り、机から飛び出さないよう、彼を押さえつけた。ギーシュが落ち着いたのを見ると、ワルドは皆に語り掛けた。

「どうやら呪文で相手してもキリがないようだ。おいルイズ！ 戻っ

てきておくれ！」

ワルドが宿の床に開けられた大穴に向けて叫ぶと、間もなく顔を土で汚したルイズが、慎重そうに顔を見せた。

「まだ全然マモノを作れてないわ」

「いや、それはもういいんだ。ここであいつらを迎え撃つには無理がある。外の様子を少し見ただけでも、辺りを埋め尽くさんばかりの傭兵が押しかけているようだ。とても相手にしてはいられない」

ルイズは、僅かに声を震わせながら答えた。

「これって、貴族派の差し金よね？ 一体、どうしてばれたのかしら？」

「それを追求するのは後だ。今はこの場を切り抜けねばな。予定より早いから、今から船に乗ろうと思う」

「こんな時間に船を出せるのですか？」

魔王の言葉に、ワルドは軽く頷いた。

「僕は貴族だ。それも王家直属の、魔法衛士隊の隊長だ。船乗りたちに断らせはしない」

「しかし、アルビオンとはまだ距離があるんでしょう？」

今度は、ギーシュが疑問を上げる番だった。

「それも問題ない。風石の足りない分は、スクウェアである僕が補う。時間がないから、次の話に移らせておくれ」

ワルドはそう言うと、改めて一行を見回して告げた。

「いざという時のために下調べしておいたのだが、この宿には裏口がある。我々はそこから脱出し、そのまま港へ向かうことが出来る」

すると、今度はキュルケが声を上げた。

「裏口にもあいつらが潜んでいないかしら？」

「よく耳を澄ましてみてくれ。表の扉から聞こえる怒号が裏口の方からは聞こえてこないだろう？ あんなに大勢いる荒くれどもものことだ。もし裏口に気付いているなら、そちらからも騒ぎつつ、押し寄せて来ていなければおかしい。それに、誰かが潜んでいたとしても、少なくとも表から出るよりはマシだ」

「じゃあ、裏口からみんな逃げるのね」

しかし、そこでタバサが厳しい事実を告げた。  
「無理」

タイミングよく、窓を割って突入しようとした傭兵がいたため、ワルドは急いで杖を振るって、彼らを牽制した。

「この通りだ。今にもこの宿に雪崩れ込もうとしている奴らを、誰かが食い止めねばならない。それに、もし我々が逃げたことを悟られれば、足の速い奴らに港までの道を先回りされかねない」

「じゃあ、どうすればいいの？」

ルイズが震えた声を上げると、ワルドは彼女の手をそつと握りしめた。

「良いかい、ルイズ。この種の任務は、半数でも目的地にたどり着けば成功とされる」

「まさか、そんな…… 仲間を見捨てるなんて」

非難の声を上げるルイズへと、ワルドは静かに首を振った。

「そうじゃあない。確か、その君たちはトライアングルだったな？」

キュルケは優雅に、またタバサは素っ気なく頷いた。

「あんな奴らに後れを取る私たちじゃないわ。傭兵なんて、一人残らず足止めしてみせるわ」

「心配ない」

「ありがとう。助かるよ」

ワルドは短く礼を言うと、今度はギーシュに向き直って言った。

「そしてギーシュ君。君の得意なゴーレムは、彼女らの攻撃魔法ほどの威力こそないが、メイジが最も無防備となる詠唱中には、身を守る最良の手段となる。もし万が一、外の奴らが彼女たちの隙を突いて近付いた折には、君がいてくれれば安心なのだよ」

「お任せあれ！ レディを守るのは僕の役目だ」

ギーシュは、使命に燃えるような面持ちで、堂々と言い放った。

ワルドは最後に、ルイズへと顔を戻して言った。

「分かったね、ルイズ。港へは僕と君とで行く」

ルイズが悩んでいる内に、先に魔王の方が頷いた。

「妥当なところでしよう。ここでグズグズしていて、港を押さえられ

「たら目も当てられません。私と一緒に、港まで行きましょう」

「戦えもせぬ君も着いてくる気か」

「何か言いましたか？」

「……いや、いい。それでは僕が、合図として三つ数える。キュルケ君、君は大きな炎を放って、外の人間の目をくらませてくれ。その隙に、僕たちは裏口へ走り抜ける。ルイズ、君も走る用意をしておいてくれ」

有無を言わさぬ逼迫した口調に、ルイズはこくこくと頷いた。

キュルケが、スペルを唱え始める。

「皆、いいな？ それでは1、2の、3！」

途端にキュルケの杖先から大きな火炎が飛んでいき、宿の入り口に落ちるとすぐに炎柱となつて、目が痛くなるような光を放った。ルイズたちは、背後からの強烈な光を感じながら、裏口への道を駆け抜けた。ワルドが扉を蹴り開けて外に飛び出し、後からルイズ、魔王と続いた。辺りには誰もおらず、表の喧騒が嘘のように、皆の寝静まる夜の世界が広がっていた。だが、ルイズたちはそれに安堵する暇もなく、全力で港に向け走り出した。

ワルドの後に続き、ルイズと魔王が息を切らしながら丘の上へと駆け昇っていくと、やがて天を突くほどに高い、巨大な木が姿を現した。巨大な枝が方々に伸び、所々に丸みを帯びた形の船が吊るされている様は、まるで木が数多の果実を実らせているかのようだった。

「よし、いいぞ。ここから見る限り、栈橋に待ち構えている連中はいいようだ」

ルイズたちは、足の速いワルドを必死に追い駆けながら、人影のない木の根元を通り抜け、そこから長く続くらせん状の階段へと、足を進めていった。木で出来た階段は、時折ギシリと軋み、ルイズや魔王を大いに不安がらせた。

「ム！ 後ろから誰か来ます！」

「そんな！」

ちらりとルイズが後ろを振り向くと、そこには彼女たちの元にぐんぐんと近付いてくる、白い仮面の男がいた。



「ギャース！ 何ですかあの不審者は！ ルイズ様、あんな仮面の怪人に捕まりでもしたら、大変ですぞ。きつと醜い素顔を持った、幻影のようなオトコに無理やりケツコンを迫られるに違いありません！」  
「変なこと言わないでよー！」

そこへ、魔王の背中からも声が掛かった。走る勢いで、剣の鞘が緩んだのだ。

「おい相棒！ 今こそオメエ、男を見せる時じゃあねえのかい？」

「私が剣抜いたって、倒れるだけじゃあないですか！」

声を張り上げる魔王に、デルフリンガーは冷静に言葉を返した。

「いんや、何も剣を振り回すばかりが戦う道じゃねえ」

魔王は目を丸くして言った。

「おや、剣のあなたがそれを言うのとは！ ナカナカですな」

「剣の俺にこれを言わす方が、どうかしてると思うけどな。まあともかく、俺も伊達に長生きしてねえ。少しは知恵も付くってもんよ」

「それは頼もしい限りです。それで、どんな考えがあるのでしょうか？」

「うんにや、おめさん、ご主人を守りたいだろう？ 知ってつか相棒、草食動物の群れってのはな、天敵に襲われると、身体の弱い個体から脱落していったな。こう、肉食動物の襲撃から群れを守るってワケよ。イヤー、自己犠牲の精神なんて男らしいね」

「それって、死んじゃうじゃないですか！ ヤダー!!」  
「バカ言っていないで走りなさいー！」

そうこうしている内に、仮面の男はますます近付いてくる。男は、突然に杖を取り出し、さつと振った。男はひらりと宙を舞い、魔王を飛び越え、ルイズの背後に降り立った。

「ルイズ様！」

「きやあ!!」

仮面の男はルイズを抱きかかえると、そのまま階段の外に向かって、飛び降りようとした。彼女をさらって、そのまま階下へ逃げようというのだ。黙って見ているワルドではない。彼はすかさず、風の魔法を男へ叩き込み、その体をがくと揺さぶった。たまらず腕を緩め

た男の元から、ルイズだけが放り出され、真つ逆さまに落ちていく。  
「いやああああ！」

「ルイズ！」

魔法の使えないルイズは、そのままにしていれば、地面に激突し死んでしまう。ワルドは、自らも階段から飛び降り、ルイズに追い縋ろうとした。それとは対照的に、白い仮面の男は、階段の上から飛び出していくワルドを見送ると、それを追うことなく、魔王の前へと立ちはだかった。

「エ、イヤ、そんな、チョット、ゑ?!」

一対一となり、ひとり慌てふためく魔王を前にして、男は仮面の下から覗く口元を、にやりと歪ませた。

「ラグーズ・イル・ウオータル・クラウディ……」

男は、反撃がこないと分かって、悠々と呪文を唱え始めた。

使える武器も、身を守るころもさえも持たぬ魔王には、もうどうすることもできない。

男の構えた杖から、閃光が迸った。宙を切り裂く稲妻は、男を近付けさせまいと突き出された魔王の左手に吸い込まれ、そのまま腕を爆ぜさせた。

「ぬ、わーっつっ!!」

魔王の叫び声を聞きつけてか、ワルドがルイズを抱きかかえたまま戻ってきた。彼は、フライの魔法を解いて階段に降り立つや否や、エア・ハンマーを続けざまに放った。今度ばかりは仮面の男も耐え切れなかったらしく、彼は強風に煽られ階段から足を踏み外すと、そのまま気絶してしまったのか、力なく下へ下へと落ちていった。

「魔王！」

ルイズが慌てて近寄ってみると、魔王には左手の先から腕にかけて、見るも痛々しい傷跡が刻まれていた。

「こ、この私に、デイン系の魔法をくらわすとは、きつと、ユウシヤの一味……!! ぐふっ!!」

「魔王！」

ワルドは、ルイズの後ろから近づくと、興味深そうに言った。

「ふむ、ライトニング・クラウドを食らって生きていられるとは運がいい。あれに耐えられるとは亜人だからか？ それとも、その剣が運よく電撃を地下に逃がしたのか？」

「さあな」

予期せぬ返事が返ってきて、ワルドはハトが豆鉄砲を食らったような顔をした。

「インテリジェンスソードか。これまた珍しい」

ルイズはワルドに振り向くと、必死な声音で訴えかけた。

「ワルド！ 早くこいつを治療しないと！」

「ここでは無理だ。それに…… 彼は置いていくべきだ」

「何を言うのよ、ワルド！」

ルイズから信じられないものを見るような目を向けられたワルドは、弁解を始めた。

「先ほどの男は僕が退けたが、ここでぐずぐずしていたら、また次の追手が来てしまう。傷付いた彼を引き連れて、時間を取られる余裕はない」

「そんな、船着き場まであと少しじゃない！ それに使い魔を見捨てるなんて、貴族のすることじゃないわ」

ワルドは、表情を変えずにルイズへ言い返した。

「戦場では、あと少しだとか、これぐらいなら大丈夫だとか、そういう油断が死を招く。使い魔を守ろうとするのは立派だが、しかしそれの主である君が命を落としては意味がないだろう？ それに、王家から受けた任を全うするため、自らの全てを捧げるのも貴族の務めだ。さあ、時間がないんだ。付いて来ておくれ」

そう言うとワルドは、ルイズにそっと手を伸ばし、彼女を引き連れ先へ進もうとした。しかしルイズは、ワルドの手を振り払うと、必死な表情で彼に反対した。

「いやよ！ こいつはこれでも私の大切な使い魔なのよ！ ワルド、あなたは私なんかと違って、立派なメイジだわ。私のことは放っておいて、あなたが先に船に乗っていてちょうだい。私たちは…… 間に合わなかったら、置いて行ってしまっって構わないわ」

そう言うとルイズは、懐に大事そうにしまっていた手紙を取り出した。

「手紙はここにあるわ。それから指輪も……受け取ってちょうだい」

「……だ……ダメです、ルイズ……様……！」

「無理して喋らないで！」

ワルドは、ルイズの手の内にある手紙をしばらくじっと見つめていたが、やがて首を振ってこう言った。

「使い魔の言う通りだ。そういう訳にはいかない。いくら相手が、滅亡寸前の王家であろうと、会いに行くのが誰でも良いという訳ではないのだよ」

「私なんてただの学生じゃない！ それならあなたが……！」

「それは違う。しがたない子爵でしかない僕とは違って、君は公爵家令嬢だ。王家の血を引く君を、アルビオン政府も無碍には扱うまい」

「でも、あなたは魔法衛士隊の隊長でしょ!？」

しかしワルドは、ルイズの言葉に自嘲の笑みを浮かべた。

「いかにもその通りだ。僕は普通のメイジとは違う特別な地位にいる。トリステイン王家から、特別な信を置かれる立場にあるし、庶民や若いメイジたちからも人気だ。だが、そんなものは国内の有力な貴族相手には通用しないし、まして他の王家から相手にされることもない。僕は所詮、ただ一人の護衛に過ぎないのだよ。アルビオンに一人赴いたところで、王子にお目通り叶うかは怪しいものだ」

そう言うとワルドは、悔しそうに続きの言葉を吐いた。

「ただの伝令ならばそれでも良いかもしれないが、その手紙は王子に直接届けるべきものなのだろうか？」

ルイズはそれを聞かれて悩むそぶりを見せたが、結局、彼女は静かに首を振って応えた。

「……例えそうでも、いざとなったら仕方がないわ。大丈夫よ、王党派にはもう、最後まで王家に忠誠を誓った人しか残されていないでしょう？ 例えウエールズ殿下に直接取り次ぎが出来なくても、きつと悪いようにはならないわ。だって、損得を顧みず王家に尽くしている人

たちが、あえてトリステインに仇なすようなことをするとは思えないもの」

彼女はそう言うと、魔王の傷付いていない方の肩に手を回し、彼を立ち上がらせようと力を込めた。

「君も頑固だな。ええい、分かったよ。僕が悪かった。彼も連れて行けばいいんだろう？　僕が彼を運ぶから、君は走るのに集中してくれ」

そう言うとワルドは、ルイズが必死に支えようとしていた魔王の体をひよいと片腕で抱え込むと、杖を持ったもう片方の腕を前に突き出した姿勢で、船着き場に向け走り出した。

「ありがとう、ワルド」

ルイズは、そう一言言ってから、ワルドに置いて行かれぬよう、必死で彼の後ろ姿を追いかけた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「船長はいるか！　急用だ！」

ワルドは、船にずかずかと乗り込み、大声を上げた。甲板に寝ていた船員たちが、驚き慌てて起きる中、ルイズは気まずそうにタラップを渡り、ワルドのいる甲板へ、ちよこんと降り立った。

「な、何でえ一体？　どこの誰だ！」

「船長を呼べ。今すぐにだ」

ワルドはそう言うと、見せつけるように杖剣を持った手を掲げた。

「貴族！」

船員は、ガタガタと床を踏み鳴らし、勢いよく甲板を走り抜けて、船室へと姿を消した。そうしてしばらくすると、船員は白髪交じりの眠そうにした男を引き連れて、甲板に戻ってきた。男は大きな三角帽をかぶっており、船に乗る機会に乏しいルイズにも、一目で彼が船長だと分かった。

「ようこそ、我がマリー・ガラント号へ。貴族様方、こんな時間に何用ですか？　まさかとは思いますが、今から出港しろとは言わんでしょうな？　たまにおられるのですが、その手のご相談にはお応え致しかねますぞ。当船にも都合というものがありません、いくらご要望

「があろうと、こんな時間に船は出せぬのです」

船長は、迷惑な客が来たとばかりに、いぶかし気な目でワルドを見ていた。

「勘違いするな。何も酔った勢いやわがままで船を出せと言っている訳ではない。これは勅命だ。僕は魔法衛士隊隊長のワルド子爵で、こちらの大使殿と共に今すぐアルビオンへ発たねばならぬ」

「勅命ですと！　なんとまあ、これは大変失礼をば……」

船長は目を見開くと、帽子を取って恭しくワルドに礼をとった。

「しかし、やはりご希望にお応えすることは難しいですぞ。せめてあと6時間は経ってからでないと、この船がスカボローの港に辿り着くまでに、風石切れで沈んでしまいます」

「風石の足りぬ分は僕が補おう。僕は風のスクウエアだ。その程度は何とかして見せよう」

船員たちは驚いたように声を上げた。メイジの相手をするのは彼らにとって珍しくもないが、スクウエアメイジとなると話が違う。凡百の貴族が乗り込んだところで、船にトラブルが起きれば、彼らは成すすべなく右往左往するだけだ。しかし風のスクウエアメイジともなると、時に沈みそうになった船を立て直すことさえ出来るため、偉ぶった貴族を嫌う船乗りたちも、彼らへは一目置いているのだった。船長は、念を押すようにワルドへ問い掛けた。

「時に、体調や精神力の方は万全なのでしょうな？」

「無論だ。沈没させるような真似はさせん」

「それならば結構で。しかし、無茶を通しての出港です。料金は弾んで貰いますぞ」

そう言う船長は、唐突に甲板に置かれた積み荷を指差した。

「ご参考までに、当船の積荷は硫黄でございます。アルビオンでは今、これが黄金並みの値で売れるので、この船には詰めるだけ積んでおるのです。それに最近は空賊も出ることですから、値上がりし……」

「皆まで言うな。その運賃と同額を出せば良いだろう」

ワルドが、金貨で詰まった袋を取り出してみせると、船長は、商売人らしいずる賢そうな笑みを浮かべた。

「お前ら聞いたな？　今から出港だ。もやい放て！　帆あげ！」

船長は、その体格からは予想も出来ぬほどの大声を上げ、船員に指示を伝えた。船員たちが、手慣れた様子で素早く動き回る。やがて船は一度、がくんと沈むように動いた後、ゆっくりと浮かび上がり始めた。船がぐんぐんと上昇するのに合わせて、ルイズは自身の体が下に引っ張られるのを感じた。

しばらくして、ようやく船員たちの動きが落ち着いてきたのを見計らい、ルイズは近くの船員を捕まえ、薬を貰えるように頼んだ。ワルドは、口笛と共に使い魔のグリフォンを甲板へ呼び寄せ、船員たちを驚かせていたが、ルイズはそれに意識を割くこともなく、そわそわとしていた。そして船員から薬を受け取ると、大急ぎで魔王に駆け寄った。

「さあ水の秘薬よ。これで少しは傷を抑えられるはずだわ」

しかし、そう言われた魔王は、呻きながらも体を起こし、首を横に振った。

「その薬って、たぶん、聖なるチカラが宿ってますよね？」

「え？　まあ、精霊の涙が使われてるから、そうだと思うけど……　それが何よ？」

「セツカクですが、それではダメです。魔王ともあろうもの、フツの回復薬では、……逆に、ダメージを負ってしまうのです」

ルイズは、大きく天を仰いだ。

「ああ、そんなことも言っていたわね。まったく、なんて厄介な体質なのよ！　それじゃあ、どうすればいいの？」

「そうですね……　コマンド漢方……　は土が無いので無理にしても、せめてコケとか混じってそうな、生薬系のクスリなら、きつとダイジョーブです……」

「分かったわ！　無いかどうか聞いてみるわ」

ルイズはそう言って、その場を後にした。入れ替わるように、今度はワルドが魔王のそばに座り込む。

「僕は耳が良くてね。今の話を聞いたが本当か？　水の秘薬が使えないとは？」

「……………」

魔王は答える元気も無さそうにしつつ、眼だけ動かして、ワルドを恨めしそうに見つめた。しかしワルドは気にした様子もなく、あっけらかんとした様子で言葉を続けた。

「いや、言わずとも分かるさ。僕とて、気持ちが変わらぬでもない。しかし君も、まったく子供っぽいところがあるものだな。まあ、薄々分かっていたことだが……………」

「……………」

魔王は、ワルドが何を言いたいのかわからず、困惑げに眉を潜めた。「つまり、僕が言いたいのは、君はウソを付かなくていいということだよ。水の秘薬が効かないなんて、そんなことフツの生き物ならあるはずがない」

そこまで聞いて、魔王は嫌な予感がし始めた。

「一体、……………どういふつもりですか？」

「それはごっちのセリフさ。折角ルイズが心配して持ってきてくれた薬を無下に扱うものではないなあ。確かに水の秘薬は、傷によく染みる。子供は例外なくアレを嫌がるものだよ。しかし君は大人で、それに傷も深い。好き嫌いしている場合ではないということさ」

「いいえ、ウソなんかでは……………」

その時、魔王は気が付いてしまった。ワルドの顔には、無邪気な子供が平然とアリを踏み潰して楽しむような、そんな残酷な笑みが浮かんでいた。

「いやいや、君は普段から冗談が過ぎるからな。こういう場面で騙されたりはしないとも。そして安心するがいい。そんなにこのクスリが嫌なら、早く治るように僕が手伝ってやろう」

「あ、あなた、分かってやってるんじゃないあー！」

「うん？ 何のことかわかんないなあ？」

魔王は逃げ出そうとしたが、傷を負い疲れ果てた状態では、身体を少しずらす程度が限界だった。ワルドは、秘薬の入った瓶を開けると、微笑みながら魔王に語り掛けた。

「君も運がいい。乗船料を払うついでだ。秘薬の代金は、僕が経費で



賄っておこうじゃあないか。さあ、その傷ついた左腕に、たつぷりとこいつを染み込ませようか」

そう言うワルドは手にした瓶を傾け、とぶとぶと音を立てながら水の秘薬を魔王の傷へと垂らしていった。

「ヒギャー……!!!」

「うん？ キズが悪化したような？ ……まさかな。気のせいだろう。もっとたくさん秘薬を使ってやらねばな！」

「!!!」

「！」

魔王は再び身悶えると、今度は白目を向いて失神してしまった。

「……なんだ。つまらん」

丁度、そのときルイズが戻ってきた。

「別の薬を貰ってきたわ！ ……魔王！」

ワルドは、さり気無く手にした瓶を袖元に隠すと、悪びれることなくルイズに言った。

「彼も、どうやら限界だったようだ。君が離れてすぐに気を失ってしまった。無理もない。これだけの傷を負っていたのだから、仕方ないことさ」

ワルドは、ルイズが慌てて新たな薬を使って看病し始めたのを尻目に、そつとその場を離れていった。船は、もうすでに世界樹の木を見下ろす高さにまで上昇していた。

「何はともあれ、概ね予定通りだな」

ワルドはそう独り言を呟くと、身を翻し、船室に姿を消した。

ハルケギニアの、一つに重なった月が照らし出す空にただ一隻、船は止まることなく上へ上へと昇っていった。

## STAGE 30 フーケのごきげんよう

「おーほっほ！ 楽勝じゃない」

キュルケらの留まった女神の杵亭は今、大勢の傭兵に取り囲まれているところであつた。普通なら大勢に無勢、傭兵たちを相手に悲壮な戦いが繰り広げられるところである。しかし生憎彼女たちはそんなものと全く無縁、それどころか相手を圧倒する状況を作り出していた。元々が要塞の跡地に建てられたこの宿が、そう簡単に敵の侵入を許さない造りであつたことに加え、何よりも大きな要因はキュルケ・タバサの二人が若くしてトライアングルの実力を有しているということに尽きた。大人でも苦勞してなるかなれぬかというトライアングルの力は伊達ではない。傭兵たちにしてみれば、そのような実力あるメイジの攻撃というものは、逃れるだけで精一杯であつた。また、ただでさえ強力なキュルケの火の魔法に、ギーシユのゴレムが宿の厨房から運び出した油が加わることで、文字通り火に油を注ぐ勢いの猛火が、傭兵たちを寄せ付けなかつたのだ。

「ウフフフ！ 圧倒的じゃないの、私の魔法は！

さあさ、名も知らぬ傭兵の皆様方、私の炎に身も心も燃え上がってくださいますか？」

傭兵たちの怒号が上がるが、かと言って彼らが積極的に攻めてくる訳でもない。まさに成すすべ無しといった傭兵たちの様子に、キュルケは満足げな笑みを浮かべていたが、一方ギーシユは不安そうな顔を崩さずにいた。

「調子に乗っているヒマはないぞ。精神力を使い果たしたら、

僕らなんて一瞬でやられてしまうんだからな」

忠告したギーシユに対し、キュルケは口をとがらせて言い返した。

「もう無粋ね。良い気分なときに嫌なこと言わないでくれないかしら？」

「そんなお気楽な調子だから、不安なんじゃあないか！」

二人の間で喧嘩でも始まりそうになつたところで、タバサがちよんちよんとキュルケの肩を叩いた。

「交代」

二人は座る位置を入れ替えると、キュルケに代わってタバサが宿の入り口に杖を向けた。タバサはさっそく魔法を放ち、ちようど宿の入り口から足を踏み入れそうになった傭兵を、再び宿の外まで吹き飛ばした。外からは、相変わらず傭兵どもの怒号ばかりが聞こえてくる。キュルケは一息ついてから、ギーシュに言った。

「それにしても戦力になるのが私たちだけなんてね。まったく、頼りにならない男はダメね」

ギーシュは思いつきり眉をひそめた。

「何を言うんだね、君は。僕にはワルキューレがあるじゃあないか。

さつきだって、君の助けになるよう油を運んできただろう?」

「でもその時に、矢が刺さりまくってボロボロになつてたじゃない。

あれじゃあ、傭兵相手に持ちこたえられないわよ?」

「あれは早く動かすために身軽にさせてたからさ。盾を持たせていたら、ああはならなかった」

ギーシュが小難しそうな顔で語った反論に、今度はキュルケが眉をひそめた。

「盾って、そんなものがなくてもあんたのゴーレムは鎧じゃない」

「だから何だと言うんだ。いいかい、僕のワルキューレは、あの鎧こそが本体なんだ。人でいう生身の部分が、ワルキューレにとつてのヨロイに当たるのだよ。だから矢で射られたら、ブスブスと突き刺さつてしまつても仕方がないのさ」

「いや、その理屈はおかしいわよ。鎧の恰好してる意味がまるで無いじゃない。あなた、デザインにこだわり過ぎて、強度が疎かになつているんじゃないでしょうね?」

キュルケがギーシュを問い質そうとしたところで、タバサが二人に向かつて言った。

「声が変」

「二は?」

二人は同時に声を上げた。タバサはたまによく分からないことを言う。

そんな彼女の言葉の解読は、彼女と共にいる時間が多いキュルケの仕事であった。

「タバサ、それじゃ分からないわ」

解読を諦めるのも、また彼女は早いのだった。

それに対するタバサの返答は、またも短いものだった。

「外のこと」

「は？ 外？ 外がなんだというんだね？」

「ああ！ 傭兵たちのことね。彼らの上げている声のことを言っているのよ」

タバサはこくりと頷くと、杖で外を指し示した。ギーシユはキュルケに小声で囁いた。

「君は、今のでよく分かったな」

キュルケらがタバサの意図を理解して耳をそばだててみると、確かに傭兵どもの上げる声の質が変わってきていた。先ほどまでは怒号ばかりが飛び交っていたというのに、今ではそれに歓声のようなものが混じっている。

「一体何が起きているというんだい？」

「知らないわよ。けれど、嫌な予感がするわね」

タバサは、小さくうなずいた。

次の瞬間、全身を揺さぶるような激しい衝撃と共に、宿の入り口が壁ごと崩れ去った。思わず身をすくめた3人が、再び宿の入り口があった方へ目を向けると、その先には辺りを埋め尽くさんばかりの傭兵と、夜の空にきらめく星々、そしてその間にあって黒々と大きな影を落とす、巨大な土人形の姿があった。

「あ、あれはゴーレムじゃないか！ あんなもの、凄腕のトライアングルでもないと作れないぞ！」

それを聞いてピンと来たキュルケとタバサが、油断なく杖を構えたところで、ゴーレムの肩のあたりから、気の強そうな女の声が響き渡った。

「ごきげんよう、あんたたち。しばらくぶりじゃあないか！」

「フーケ!!」

フーケの操る巨大ゴーレムは、以前とは違って岩で出来ており、目にも増して凶悪そうな姿であった。これは岩の多いラ・ロシエールならではと言ったところで、土地の土砂を大量に使うフーケの巨大ゴーレムは、それを作る場所ごとに在り方を変えるのだった。

「どういうことだ！ フーケは君らが捕まえたんじゃないのかね？」

ギーシュが困惑した様子で叫んだが、キュルケやタバサにもどういうことなのか、さっぱり分からなかった。トリステインが特段目を光らせて見張る筈の、チエルノボーグの監獄に投獄されたフーケが、そう簡単に出てこられるはずはない。

「どうしてあなたがここにいるのよー！」

フーケはキュルケの問いに、得意げに答えた。

「さる親切なお方が出してくれたのさ！ 美しい小鳥に檻は似合わないってね！」

信じられない話だが、現にフーケはここにいる。キュルケは自分を苦しめた難敵の再びの出現に、大いにショックを受けた。とはいえ、調子に乗った様子のフーケを言わすがままにしておく彼女ではない。すぐにフーケへと挑発の言葉を返した。

「はあ？ 小鳥ですって？ ニワトリの間違いなんじゃないかしら？ どうせ後ろ暗い連中に、食い物にされるために檻から出されたんでしょう？」

この襲撃だって、貴族派に良いように使われたのが目に見えてるわ！

凶星を付かれると人は癩にさわるもので、フーケの表情はみるみると歪んでいった。

「言ってくれるじゃないか」

「どういたしまして、オバサン！」

「おぼっ……！」

絶句するフーケへと、とどめを刺すようにタバサも呟いた。

「ばあさん」

それがフーケにとっての、我慢の限界だった。

「アアアアアッ！ わたしや！ まだ！ 20代だよ！」

「どうせアラサーでしょ？」

「キエ——!!!」

フーケが女を捨てた声を発しながらゴーレムの腕を振り上げたので、キュルケらは慌ててルイズが残っていた穴に逃げ込んだ。

「ひいひい!!」

ギーシュがすんでのところで穴に飛び込むと、直後にはゴーレムの大きな拳が地面に打ち付けられていた。岩のこぶしは地面をずんと揺らしたが、流石に地を割るほどの威力はない。フーケは一行に逃げられてチツと舌打ちした。

「またこのパターンかい!？」

地下に逃げられては、巨大ゴーレムとてどうすることも出来ない。折角用意した自慢のゴーレムが、今日も無駄になりそうなことをフーケは忌々しく思いながら、雇った傭兵らに指示を出した。

「いいかい、お前ら！ とつとあの穴に突っ込んで、ガキどもを始末しな！」

おう！という威勢のいい声上がり、傭兵たちは穴の近くまで駆け寄った。そして、さあ飛び込もうという直前になって、穴の中からこうと火の柱が噴き出した。傭兵たちは慌てて後ずさりし、元いた場所まで戻ってきた。

「メイジのおぼっ……姉さん、こりゃあちよつと厳しいですぜ」

「今、なんて言おうとしたんだい！」

「へえ、まあそれはともかく、どうしやすか？」

フーケは怒りを必死に心の奥底へ沈めると、声を掛けてきた傭兵の頭目へ更に言葉を返した。

「あんなのは、ただの牽制じゃないか。あいつらは精神力が切れたら終いなんだから、

あんな魔法は何度も撃てやしないよ。そもそも相手はまだガキなんだ。

それを、大の男が揃いも揃って情けない！」

「へえ、そうは言いますが、傭兵とはいえあつしらはただの平民、そ

れに対して

相手はお貴族様と来りやあ、これはちよつと手こずるってもんです。

特にああして穴にたてこまれると、攻め辛くて敵いませんや」

それを聞いたフーケは、煩わしそうに答えた。

「言い訳は聞きたくないね！ 金は出してゐるんだ。その分の働きを見せな」

すると頭目は、にへらにへらといやらしい笑みを浮かべつつ、それでいてさも困ったような顔ぶりをした。

「いやあ、弱ったなあ。これははたまた言いづらい。しかしなあ……

いやあ、弱った」

「なんだい。言いたいことがあるならさつさと言いな！」

頭目は『へえ』と答え、言葉を続けた。

「いやあ、確かに姉さんらにはたんまり金を頂きやした。ありがてえことです。でも、あつしらが請け負ったのは、あれらの足止めでさあ。別に、あいつらを捕えろとか、始末しろとまでは聞いてませんで、こりや契約外になるってもんです」

その言い分を聞いて、フーケは思わず不満を漏らした。

「あれだけ金を渡しておいて、この程度の融通も利かないってのかい!?!」

「それを言われると頭が痛えですが、これでもサービスしている方なんですぜ？」

今だって、やってみようと努力はしやしたでしよう？ ただ……」

「ただ、なんだって言うんだい！」

勿体ぶる頭目を、フーケは我慢ならないといった様子で問い詰めた。

「ただ、あつしらは戦場で稼ぎ終えた後の小遣い稼ぎにまで、命は張らねえってことよ。

これ以上やって欲しければ、さらにもっと弾んで貰わねえとな！」

頭目はそう言つて、へっへっへと笑った。周りの仲間たちも薄ら笑いを浮かべている。

「なんて奴らだ！ あれだけ出したのに、まだせびろうつてのかい？  
もう、これ以上渡すものなんかはないよ！」

「別にそれでも構いませんぜ？ あっしらは、ここでガキどもが逃げ  
出さないか

見張っておくだけでさあ」

頭目は、相変わらずの笑みをこぼしながら言った。フーケは憤慨し  
つつも、彼女の冷静な部分はこの事態のどうしようもないことを理解  
し、空を仰ぐこととなった。周りの傭兵どもが動かないとなると、  
フーケは以前のように、自分一人で穴に飛び込んでいくしかない。

「やっぱり、こいつは無駄になるってのかい！」

フーケは無念そうな顔をしながら、自慢の巨大ゴーレムを見上げ  
た。そこでフーケの頭に、ふと良い考えが思い浮かんだ。そしてすぐ  
に彼女は、一人ほくそ笑んだ。

「おい、お前たち。本当にこの穴に突っ込む気はないんだね？」

「仕方ありませんや。姉さんとは、ここまでのご縁ということ……」

頭目は、さも残念そうな表情を取り繕っているが、内心では金さえ  
手に入れば、後はもうどうでも良いと考えているに違いない。そんな  
彼に、フーケはにんまりと、優しそうな微笑みを返した。

「そうかい、そうかい、よく分かったよ、ご苦労だったね。残念だが、  
足止めだけならもうお前たちの仕事はこれで十分だよ。後は疲れを  
癒せるようぐっすり眠るといいさ。それじゃあ私の方から、仕事のお  
礼に少し色を付けてやろうじゃないか」

「色？ あんた美人だし、どうせなら金じゃなく、あんたの肌で色を付  
けてくれてもいいんですぜ？ そうすりゃ、本当にグツスリ眠れるっ  
てもんでさあ！」

傭兵たちはそれを聞いて、ゲラゲラと下品な笑い声を上げた。フー  
ケは、それには返事を返さずに、黙ってゴーレムに向けていた杖を降  
ろした。ゴーレムから、ぽろっと小さな石が転がり落ちた。

「色は、私のとっておきで付けてやることにしたよ」

傭兵たちが、おおっと騒めいた。

「話は最後まで聞きな。私のとっておき、それはもちろんこいつのこ



ときね」

フーケは杖を逆手に持って、ゴーレムの巨体を指し示した。傭兵たちは皆、胡乱な表情を浮かべ始めた。

「いいかい、私はちゃんど、あんたたちのことを考えているのさ。疲れたあんた達にぴったりの

もてなしをしてやろうっていうんだよ」

傭兵の一人が大きな叫びを上げた。ゴーレムの体から、岩が一つ二つと転がり落ちて来たからだ。

「あんたたち、土の下で誰にも邪魔されずぐつすりと眠れるよう、岩のシャワーを浴びていきな!!」

傭兵たちは顔を青くして、一目散に逃げ始めた。崩れ出したゴーレムからは、今や大きな岩の塊がゴロゴロと落ちいく。慌てふためき、方々に逃げ惑う傭兵たちの様子に溜飲を下げたフーケは、意気揚々と穴の中に飛び込んでいった。

「ねえギーシユ、本当にこの道で合ってるんでしょうね?」

「もちろんだとも。地下のことなら僕のヴェルダンデに任せておけば間違いないさ」

「でも、何時までたっても地上に出ないじゃない!」

ギーシユを怒鳴ったキュルケの声が、少し籠って辺りに響いた。タバサは口元に指を立て、そつと言う。

「静かに」

キュルケは諦めたような表情をして、はあとため息をついた。

「分かったわよ。着いて行けばいいんでしょ? 着いていけば」

一行は地下に潜ってすぐに、張り巡らされた道の数々に惑わされることとなった。そんな折に現れたのが、ギーシユの使い魔ヴェルダンデである。ギーシユは彼についていけば大丈夫と言い張り、後の二人も勝手分からぬ地下のことはモグラに任せればいいかとそれに付き従った。そして、そこからが本当の苦労の始まりであった。ヴェルダンデはモグラというイメージからは思いもよらぬ速さで、狭く暗い地下の穴倉を素早く這い進んでいく。そんなモグラの後を追って、変わ

り映えしない狭き穴の中を駆け回っている内に、彼女らは方向感覚を完全に失い、果ては登っているのか下っているのかもよく分からなくなってきた。

「お、ヴェルダンデが何か見つけたみたいだ」

ヴェルダンデはモツモツと鳴きながら、追いつくのが大変なぐらいの速さで穴の先へと突き進んでく。ギーシュは自分の使い魔が何かを探し当てたのが嬉しいらしく、疲れを忘れた様子で一緒になって走り始めた。

「ちよつと、待ちなさいよ！ はぐれるじゃない！」

「何だって？ 早くついて来てくれ！」

使い魔のこととなるとすぐ夢中になるギーシュは、生返事を返したまま先へ先へと行ってしまった。キュルケは再びため息を付いてから、タバサに話し掛けた。

「やつと出口かしら？」

タバサはふるふると首を振った。

「違う」

「あら、何でそんなことが分かるのよ？」

「風に動きがない。出口から遠い証拠」

「外の空気を吸えるのは、まだまだ先つてことね」

キュルケがうんざりした顔をしていると、道の先からギーシュの悲鳴が聞こえてきた。

「あいつ、何やってるのよ！」

二人は急いで穴の中を駆け出した。キュルケらがギーシュに追いついてみると、彼は腰を抜かして道に転がっていた。震えながらも前へと突き出した手には、杖が握りしめられている。

「ぼ、僕のヴェルダンデに手出しはさせないぞ！」

「クワアアア!!」

キュルケらがギーシュの視線の先を追うと、そこにはトカゲおとこの集団が道を塞ぐようにひしめいていた。二人はギーシュに倣い、急いで杖を構えた。

「まったく、とんでもないものと出くわしたわね！」

キユルケの首筋を冷汗が流れた。すわ戦いかと思われたその時、ヴェルダンデがもそもそと前へ歩み出た。

「どうしたんだいヴェルダンデ！ 僕より前に出てはあぶなブヘツ！」

ヴェルダンデは、ギーシュを脇に押し退けてトカゲおとこの前に出ると、もきゅもきゅと鳴いた。

「クワア？」

もぐもぐ、もぐもぐもぐと、ヴェルダンデは人にはよく分からない調子で唸り続ける。すると、それに呼応するようにトカゲおとこたちもカァー、クワァーと鳴き返した。

「ヴェルダンデ？ まさか君は、そいつらと話せるのかい？」

ヴェルダンデは僅かに振り返り、モッ！と鳴いた。

「よし、ここは彼が引き受けてくれるようだ。僕らは魔物たちを刺激しないように、

ゆつくりと引き返そうじゃあないか。ゆつくりとだ、ゆーつくり……」

しかし何を思ったかヴェルダンデは、突如トカゲおとこたちにそっぽを向くと、どこどかと穴の壁面を掘り始めた。

「ああ！ 何てことするんだヴェルダンデ！ そんなことしたら……！」

ギーシュがその先を言う必要はなかった。彼の予想通り、道幅が広がったのをいいことに、トカゲおとこたちがわっと押し寄せて来ていた。

「ひいひい！」

「あんたの使い魔は何がしたいのよ！」

3人は改めて杖を構え直し、急ぎ詠唱を始めた。しかしトカゲおとこたちは、道幅が広がったところで急に立ち止まると、それ以上前には進まず、その場をせっせと掘り始めた。そしてある程度の深さの穴ぐらが出来ると、その中へどこかどかどか入り込んでいき、ひんひんと鳴き始めた。訳が分からず3人が顔を見合っていると、最後に残ったトカゲおとこがくいと首を振って、彼らの群れが今まで塞いでいた

道の先を指し示した。

「二体、どういうことなのよ？」

困惑している3人に向け、トカゲおとこは同じジエスチャーを繰り返す。

「これは…… 先へ行けということなのか？」

「モッ！」

ギーシュに答えるように、ヴェルダンデがギーシュの足元に這い寄り、つぶらな瞳を彼へと向けた。ギーシュはしやがみ込むと、可愛い使い魔の鳴き声に真剣に耳を傾け始めた。

「なにになに？ ふんふん…… ほう、そういうことだったのか！」

ルーンの恩恵か、使い魔とその主とでは、例え言葉が通じなくても、意思の疎通を図れることがある。だがはた目から見れば、ギーシュはモグラの鳴き声に唸り声を上げる変人にしか見えない。焦れたキュルケは乱暴に言った。

「一人で納得してないで、私たちにも分かるように言いなさいよ」

「いやはや、どうやら僕のヴェルダンデは、彼らのために快適な広い空間を掘ってあげたらしい。

その見返りに、僕らを見逃してくれるということのようだ」

キュルケは大勢のマモノを相手にせずに済んで、ほっとひと息付いた。

「あんたの使い魔が有能で良かったわ。使い魔はね」

「僕が無能みたいに言うのはやめたまえ！」

一行が先へと進みながらしばらくすると、俄かにトカゲおとこたちの鳴き喚く声が後ろから響いてきた。声の調子から、興奮している様子が伺えた。

「フーケが追ってきたのかもしれないわ。急ぎましょ！」

「頼むぞ、ヴェルダンデ！」

ヴェルダンデは今度もぐんぐんと先を進んでいき、分かれ道に出くわしても鼻先を少しひくつかせたかと思うと、すぐにどちらに進むかを選び取るのだった。

「まあ、トラブルもあつたが今度こそ僕のヴェルダンデが出口を探り

当ててくれることだろう！

これだけ分かれ道も多いんだ。そうそうフーケだつて追いつけないはずさ」

すると、先ほどと同じようにまたヴェルダンデが興奮し始めた。モツモツと唸りながら、追い付くのが難しいほどの速さで、どこかかと穴をかき分けて進んでいく。

「おっ！ 今度こそ出口なんじゃないかね？」

キュルケはそれを聞き、すぐタバサへと振り返った。

「違う」

キュルケはがっくりと肩を下した。

STAGE 30 (EX) リアルトカゲごっこ

「クアー！」「クワアア！」「カアー！」「クウワー！」「クワー！」「カー！」

「あーもう、うっとおしいねえ！ キリが無いじゃないか、まったく！」

フーケは、次々に立ち向かってくるトカゲおとこたちを、苛立たしそうに睨んだ。

キュルケたちを追って穴に入った彼女は、先ず穴を通れるサイズのゴーレムを作り、これを先頭に立たせて搜索を開始した。自らを牢に追いやった生徒の一味であり、また今回の再会に至っても侮辱の言葉を投げかけてきた、舐めくさしたクソガキどもに焼きを入れてやろうというのが、彼女の意気込みであった。そこへ早速邪魔しに現れたのが、トカゲおとこの群れである。数匹倒せばすんなり先に進めると思っていた彼女は、十四二十匹と出て来て通行を阻む彼らにうんざりとして来ていた。

「なんだい、アリみたいに次々出てくるなんて。近くに巣でもあるつてのかい？」

フーケのゴーレムを以つてすれば、トカゲおとこ一匹一匹を倒すこと自体はわけのないことだった。しかし、精神力を温存した上で、早くキュルケらに追い付きたいと願うフーケにとって、トカゲおとこの

群れをいちいち相手にするのは、決して好ましいことではなかった。とはいえ、フーケになんの対策も無いわけではない。彼女には、以前地下で魔物と戦った時から考えてきた、ある秘策があった。

「しようがないね。早速、私のコレを試してみる時が来たようじゃないか」

フーケはゴーレムに戦闘を任せたまま、自らは携帯してきたあるものを取り出していた。そのあるものとは、彼女が以前、とある好事家の手にあったものを盗んだはいいが、なにぶん需要がニツチ過ぎて、買い手がつかず持て余していた品であった。

フーケは、その野性味あふれるごつごつした逸品を頭まで持ち上げ、おもむろに被った。

彼女の整った顔が隠れ、古代生物を思わせる凶悪なフォルムが頭を覆う。

見る者に底知れぬ不安を与える不気味な眼球二つに、今にも肉を切り裂きそうな歯がずらり。

恐怖のワニ人間、フーケの完成だった。馬鹿馬鹿しいと笑うこと勿れ、メイジの象徴であるマントで体を隠すと、トカゲおとこのように見えなくもない。彼女の作戦とは、ワニキャップを被ることで魔物に化け、敵を欺いている間にその群れをすり抜けることであった。

フーケはゴーレムに攻撃を止めさせ、おもむろに自身が前へと躍り出る。

トカゲおとこたちは、突如として出現したトカゲじみた姿の彼女に、一瞬たじろぎ、戸惑ったように見えた。フーケは心の内でガツツポーズを取った。

『どんなもんだい！ 野生生物ってのはバカだからね。ちょっと姿形を似せてさえおけば、簡単に仲間だと信じ込んでくれるものなん  
n「ガブリッ」ギャ——ッス!!!」

バレバレであった。トカゲおとこはアゴを大きく開けて、ワニキャップにガツガツ噛みついて来る。野生生物を舐めてはいけない。リリスなど他種族に変装したならまだしも、自らと同族に扮した人間ぐらい、トカゲおとこは一発で見抜いてしまうのだ。

「チクショーッ！ やっぱり駄目なのかい！」

フーケは矢鱈めつたら杖を振るって、噛み付いたトカゲおとこを引き剥がそうとする。自ら招いた絶体絶命のピンチに、フーケは必要以上の体力と精神力を費やさなければならなかった。

EX STAGE 終

「ちよつと、これどういうこと？」

「いや、違う。これはきつと何かの間違いなんだ」

「今はその何かが一番起きちゃいけないときでしょうが！」

キュルケはギーシュに向かって叫びながら、その肩をつかんでがたがた揺すった。何ということか、ヴェルダンデが辿り着いたのは、またまたまたしても行き止まりであった。タバサはギーシュを罵りこそしないものの、杖を持つ手にはだいぶ力が入っている様子である。

「あんたが言うから、信じてついてきたっていうのに何よ！ そもそもこの地下道って、本当に他の出口に繋がってるんでしょね？」

「それは間違いないはずさ。そうじゃなけりや、どうしてヴェルダンデがルイズの掘った穴の中から出てくるっていうのさ？」

「じゃあ、何で行き止まりになんて来てるのよ！」

「うっ、それは…… なんとも」

ギーシュは思わず口ごもってしまった。文句を言い足りないキュルケは、尚もギーシュを責め立てる。

「そもそもあんたの使い魔って、本当に出口に向かってるんでしょね？」

「ええ！ まさかヴェルダンデ、ただ地中をお散歩してただけだというのかい!？」

「何で飼主のあんたが把握出来てないのよ！」

二人が状況を忘れ、喧嘩を始めそうになったところで、ちよんちよんと二人の肩が叩かれた。

「何よ、タバサ！」

「何かある」

指さされた先を見た二人は、行き止まりになった道の壁から、何が

しかの物体がのぞき出ていることに気が付いた。ヴェルダンデはその周りを丁寧に掘り続けている。視線に気づいた彼は、ギーシユの元まで戻つてくると、褒めてくれるのを期待するような眼差しで、もぐもぐと鳴いた。

「おお、何か見つけたというんだね？ えらいえらい！」

「こんな時になにやってるのよ」

キュルケは刺々しく言いながらも、ヴェルダンデの探り当てたものへ興味無さげに目をやった。果たして、ヴェルダンデが見つけたのは古めかしい箱であった。そこでキュルケは、おや？と思つた。なにせ、ただの箱ではない。土に塗れて汚くは見えるものの、その表面には数々の装飾の跡が見て取れた。おそらく、土に埋もれて月日を経る前は、美しい箱であつたに違いなく、少なくとも、ただの船荷を運ぶためだけに使われるような箱ではあり得なかつた。

「これって、もしかしてー！」

キュルケとギーシユは、互いに顔を見合わせた。

タバサは一目見て、口に出した。

「宝箱」

「モグッ！」

我が意を得たりというように、ヴェルダンデが誇らしげに鳴いた。「すごいぞ、ヴェルダンデ！ 歴史あるラ・ロシエールの地下からこんなものを見つけ出すなんて、君だったらどうしてそんなに素晴らしいんだい？」

「モグッ♪」

「ちよつと、使い魔バカもいい加減にしなさいよ、こんな時に！ ……でも本物、なのよね？」

フーケに追われている時だというのに、いきなり出くわしたお宝の予感にキュルケも少し舞い上がっていた。それに比べると、タバサは大分悲観的だ。

「中はカラかもしれない」

「夢がないな、君は！ だが大丈夫、それでも値打ちはある筈だ。こんな地中に埋もれている歴史ある品なら、アカデミーあたりが高値で買



い取って

くれるに違いない。それがダメでも、こういう発掘品には好事家が目の色を変えるものなのさ」

「いやいや、やっぱり宝箱といえは中身があつてこそでしょう？ 早く開けてみましょうよ」

キュルケは浮足立って、宝箱に手を伸ばした。

「何やら楽しそうにしているじゃあないか」

「げえっ！ フーケ！」

キュルケたちが気付いた時には、彼女らが元来た道にフーケが立ち塞がっていた。

「あれだけ魔物がいたのに、もう追いついたの!？」

「あんなもの、このフーケにとつちや、わけないさね。一度私を捕まえたぐらいで舐めてるんじゃないよ。さあ、どうやってあんたたちにお礼をしてあげようかねえ」

「お礼？」

ギーシユは不思議そうに首を傾げた。

「もちろん牢にぶち込んでくれたお礼さ。グラモンの坊ちゃん、あなたには直接の恨みはないが、その二人と仲間外れは可哀想だからねえ。ついでにお礼してやるよ」

「ひい！」

フーケによる私怨の巻き添えを食うと知って、ギーシユは震え上がった。

その怖がる様子を見て舌なめずりするフーケに、キュルケたちは黙って杖を向けた。

しかしフーケは、それを鼻で笑った。

「勝てるでも思ってるのかい？ こつちにはこいつがいるつてのにさ！」

彼女がそう言うと、フーケの脇に控えていたゴーレムが、ガシヨン、ガシヨンと音を鳴らしながら進み出た。地上にいた巨大ゴーレムは、岩をそのまま切り出してきたかのような威つい姿であったが、今度の

ゴーレムはもつと整った表面を持ちつつも、手足のバランスが狂ったような長さの、美しき白金色に輝くゴーレムであった。それを見て、キュルケは息を飲んだ。色合いこそ違うものの、彼女には確かにそのゴーレムへ見覚えがあった。

「まさかー！」

「そうさ、そのまさかさー！ あのおチビにやられた時から、あんたらへの復讐はコイツでするって決めていたのさー！」

キュルケには、そしてタバサにとつても忘れようがない。あのゼロだったルイズが、初めてメイジらしくゴーレムを作り上げたこと、何よりそのユニークな姿のことが、確かに彼女たちの脳裏には焼き付いている。節くれ立って長々とした腕に短めの足、それはまさしくルイズの作り上げたゴーレムの形そのものであった。事情を知らないギーシュだけが、状況を忘れてぷつと吹き出した。

「ま、待ってくれ。なんだい、その珍妙な姿のゴーレムは？ しかもわざわざ真似して作っただなんて、ちよつとセンスを疑ってしまうね！」

「あんたに私のセンスを疑われたかないよ！ どうやら一番に死にたいみたいだね」

「なんで!?!」

ギーシュは一転、理不尽な怒りをぶつけられたことで我に返り、再び震え出した。フーケは鼻を鳴らすと、今度はキュルケとタバサへ向き直つて、自慢げにゴーレムを紹介した。

「本当はあいつと同じ鉄くろがねで作ってみようかとも思ったけれど、まったく同じじゃ芸が無いからね。私なりにアレンジさせて貰ったよ。言うなれば、きれいなゴーレムさね。こいつの眩く輝くボディは、くろがねにも劣らない鎧となり、そして武器になるのさー」

キュルケは自分たちの不利を思い知り、唇を噛み締めた。相手するゴーレムのサイズが小さ目である今、ただの土くれで出来たゴーレムならば、彼女たちにもどうにか倒せただろう。しかし、特殊な金属製

のゴーレムともなると話が変わってくる。タバサやギーシュと協力し、何発か魔法を撃ち込めば倒すことが出来るのだとしても、それまでにゴーレムに近付かれてはお終いだ。後ろに控えたフーケに魔法を当てようにも、これまたゴーレムが邪魔となつて上手くいきそうにない。

「どうだい、これからお仲間のゴーレムそっくりな奴にやられる気分つていうのは？」

不安が大きくなつてきたキュルケの肩に、そつと小さな手が置かれた。タバサは大きな杖を掲げつつ、キュルケの前へと歩み出た。

「来るなら道連れ」

そう言つて、タバサは狭い穴の天上をこんこんと杖で突いた。壁からはそれだけで土がどさどさつと零れ落ちる。

「私たちがここを壊せば、貴方も生き埋めになる」

「ふん、強がるんじゃないよ。ガキにそんなことが出来るもんかい」  
フーケはタバサの脅しを鼻で笑つたが、タバサに勇気を貰つたキュルケもそれに言い返した。

「嘘じゃないわ。どの道、ここに逃げ場なんてないもの。そうと決まれば、死なば諸共よ」

「ガキのこけおどしになんて付き合つていられないね！ だけど、そうだね。万が一ということもある。あんたたちの相手はこのゴーレムに任せて、私は先に穴の外に出ていようかね」

それを聞いたキュルケは、慌てて叫んだ。

「そんなの認めないわ！ 今この場で特大の炎を放つてやるわ！

そうしたら近くにいるあんたなんて、ゴーレムを盾にしたつて蒸し焼きよ！」

「おお、こわいこわい。だけど、それは近くにいるあんたたちも一緒だろ？ こんな狭苦しい場所で威力に任せた魔法を撃とうつたつて、自分の身を焼くのがオチさ。ま、本当に出来るなら撃つてみればいいさ。その覚悟があるならね」

キュルケはくつと顔を歪めた。タバサは表情を崩さないが、杖を掲げたまま動くことが出来ないでいる。それを見たフーケはニヤニヤ

と笑いながら、ゴーレムをその場に残して引き返そうとした。

「それじゃごきげんよう、さようなら」

「待って！」

キュルケの叫びに耳を貸さず、フーケはすたすたと去っていく。このままでは、ゴーレムに一方的にやられてお終いである。キュルケは覚悟を決めて杖を振り上げた。そこに来て、ギーシュがいきなり大声を上げた。

「そうか！ ああ、そういうことだったのか！ 分かったぞ、全ての意味が！ やっぱり僕の使い魔は天才だね。よくやったぞヴェルダンデ！」

突然の大声にびっくりして振り返ったフーケは、ゴーレムを前にしてモグラに抱き着いているギーシュにぎよつとした。

「一体どうしちゃったんだい？ そいつは？」

思わず尋ねてしまったフーケに対し、キュルケは気の毒そうな顔で返事を返した。

「彼は……そう、残念な人なのよ」

「失敬な！」

ギーシュは彼女の言葉を力強く否定すると、フーケに向き直った。彼は、何時になくキリツとした表情で話し始めた。

「ミス・ロングビル！ ……じゃなくって土くれのフーケ！」

このギーシュ・ド・グラモンがお前と取り引きしてやろうではないか！」

「締まらないわねえ」

「ダサイ」

「君たちは黙っていてくれたまえ！」

フーケは目の前の茶番にしか見えないやり取りに眉をひそめた。

「お前、偉そうにして、自分の立場が分かっているのかい？ ああいやだ、これだから貴族は嫌いなんだ。それに取り引きするのは、扱うブツがあつて初めて成り立つもんだよ」

だがギーシュは、フーケの呆れと怒りとが入り混じった様子にも物怖じすることなく言い返した。

「もちろん、ブツならある。さつき見つけた」

「バカ言うんじゃないよ。所詮学生、しかも貧乏貴族のグラモンの息子から、出るものなんかあるもんかい……って何だい、それは？」

フーケは、ギーシユが黙って指差した先を見て、目の色を変えた。「宝箱さ。さつき僕の使い魔が見つけた。僕の使い魔はジャイアントモールだ。土メイジのあなたなら、こいつがどれだけお宝を見付けるのが上手いか、知らないわけじゃないだろう？」

「もつとよく見せてみな！」

フーケは踵を返して、ツカツカとギーシユらのいる方に近付いて来た。

「おっと、それ以上寄るんじゃないわー！」

キュルケとタバサがさつと杖を向けた。

「それ以上、近付いたら撃つわよ」

フーケは黙って従うと、その場で嘲るように声を上げた。

「それで？ まさかそいつと引き換えに、見逃して貰おうってんじゃないだろうね」

ギーシユは偉ぶった仕草で頷いた。

「もちろん、その通りだとも」

それを聞いたフーケは、ゲラゲラと笑い出した。眉を吊り上げて、ギーシユは聞き返した。

「何がおかしい！」

「いや、だってそうじゃないか。わざわざそいつを教えてくれて、ご苦労なことだと思ってるねえ。」

そんなお宝なんて、お前たちを痛めつけてから奪えばいい話じゃないか」

ゴーレムが一步、ずしんと足を踏み出した。

「こんのバカギーシユ！」

キュルケは悪態を付きながらスペルを唱え始めたが、ギーシユはそんな彼女を手で制すと、再びフーケに語り掛けた。

「あんまり僕を舐めないで頂きたい。僕だって土メイジだ。」

その意味が分からないあなたじゃあないはずだ」

「つまり、何だっけ言うんだい？」

ギーシュは黙って宝箱に杖を向けた。

「僕たちの身をどうにかしようものなら、『鍊金』一つでこいつは台無しになる」

フーケはチツと舌打ちした。相手は所詮ドットとは言え、土メイジのそれである。長い年月を経て固定化の切れかかったお宝なら、子供に過ぎない彼の腕でも一瞬にしてガラクタに出来てしまうことだろう。加えて言えば、フーケにとっては、宝に僅かの傷が入ることすら許容できないことであつた。なにせ、ハルケギニアは固定化の魔法が多用される世界である。魔法で物の状態を完璧に保てるからこそ、宝物もまた完璧な状態のものが求められる。故に、お宝を高く売ろうものなら、少しの傷や錆も許されないとこの事情があつた。

「フーケ、あなたは破壊の杖を盗むのにも失敗したじゃあないか。失敗して、牢に入つて、それきりじゃあないか。そろそろこいつが恋しくなつてきた頃合じゃあないのかい？」

ギーシュは宝箱を足で突いて、不敵な笑みを浮かべた。

「何にしても、まずは中身を確認してからだよ」

フーケは乱暴に吐き捨てると、再び足を踏み出そうとしたが、すぐにキュルケたちがそれを杖で制した。

「近付かないでと言つたはずよ」

「じゃあどうやってその中身を確認しろつてんだい？」

キュルケとギーシュは顔を見合わせた。偉そうに交渉を進めてきたものの、中身がどんなものかは確認していない。もしも中身が空だつたりしたら、考えるだけで恐ろしい。キュルケがタバサに目で見えを求めると、彼女はふるふるすると首を振り、小さく囁いた。

「準備だけはしておくこと」

「なにこそ話してんだい！ 私はそれほど気長じゃあないよ。早くして貰おうじゃあないか」

「いやねえ、おばさんは…… そうやってすぐ怒りっぽくなる」

「また言つたね！ 小娘が舐めるんじゃないよ。わたしやまだ23だっ！」

「えっ、ウソ」

「なんだいその反応は!!」

こんなことでフーケの機嫌を損ねては堪らないと、ギーシュが慌てて声を上げた。

「おばさんなんてとんでもない！ あなたはとても、とてもお綺麗です！」

知的で、それでいてミステリアスな魅力があつて、学院でも男子生徒たちの憧れでした！

「……フンツ、バカなガキなんぞにモテても嬉しくなんかないね」

言葉とは裏腹に、フーケの頬は少し緩んでいた。褒められること自体は満更でもないらしい。彼女の怒りが静まったのを見計らつて、ギーシュは提案を始めた。

「宝箱を検分するのはいいが、そうと見せかけて僕らに杖を振るつたり、

あるいは宝だけ搔つ攫われては困る」

「よく分かつているじゃあないか。だがね、あんたたちだつて似たようなもんだらう？」

私が宝箱を開けている隙に、あんたたちが攻撃してこない保証はないね」

「ならこうしよう。まずは僕の使い魔に、もつと奥まで続く穴を掘らせる。そうして、この二人にはある程度下がってもらう。そうだな、8メートルぐらい離れておけばいいだろう」

「ちよつと、なに勝手に決めてるのよ」

キュルケが不満の声を上げた。

「仕方がないだろう。君たちトライアングルが近くに残っていたら、フーケも宝の確認なんて

おちおち出来ないだろう。その代わり僕は、宝箱から3メートルの距離にはいさせてもらう」

「あんたも下がればいいじゃないか」

「近くに僕がいないと、いざというとき鍊金を唱えられないだろう？」

それに僕が残るのは、あなたにとつても悪い話じゃあないはずだ。

僕がそこに立っていれば、それが邪魔になって後ろの二人はあなたに魔法を撃てなくなる」

「その代わり、私の攻撃もそいつらに当て難くなるってかい？　勇敢なことだねえ」

フーケは小ばかにするように言った。

「話を続けるぞ。僕たちが宝箱から離れたら、今度はあなたがこの箱を開けるために近付く。ただし、箱から3メートルは離れたところで止まって貰う」

「それじゃ宝箱まで手が届かないじゃあないか」

「そのゴーレムの長腕ならなんとか届くだろう？　要は、宝を確認するのにかこつけて何か仕出かさないう、十分距離をとって貰う必要があるということさ。まあ、もしもの時は、僕の鍊金で宝をガラクタに変えるまでだがね。これだって、あなたにとっては悪くない話さ。僕がどさくさに紛れて攻撃しようとしても、距離があればその分、あなたは避け易くなる」

「フン、そんなもの不便なだけの浅知恵だろうけどね。それで？」

「宝箱を開けて中身を確認したら、すぐにそのゴーレムと一緒に後ろへ下がって貰う。」

10メートルは距離を取って貰おうか」

「遠いよ！　5メートルにしな！」

ギーシュは余裕そうな笑みを浮かべながら、ゆっくりと首を横に振った。

「いいや、それは認められないな。宝を確認して納得したなら、大人しく下がって貰う。」

なんせ、僕たちは命が掛かっているんだ。あなたとは失うものが違う」

「ふん、ピンチのくせに偉そうなガキだね。分かったよ、そうしてやろうじゃないか。それで？」

「この間に僕の使い魔には穴を掘り回って貰い、彼が戻ってくるのを待つ。要するに、地上へ通じる逃げ道を用意させて貰うということさ。もちろんあなたが追って来られないように、たくさん分かれ道を



掘る。それからもう一つ、あなたの後ろに回り込む穴も掘らせて貰おう」

「何だつて？ 私を挟み撃ちにしようだなんて、そんなこと許すとも思ってるのかい？」

フーケが剣呑な眼差しを向けても、ギーシュは冷静に話を続けた。「勘違いしないで欲しいな。これはもしもの時のための保険さ。もしあなたが

僕らを追い掛けようものなら、一人がその道から回り込んで宝を破壊する。

その重そうな箱を運びながら僕らを追い掛けるのは、流石に無理だろう？」

「手間がかかるだけで無駄だよ。その時は私が2体目3体目のゴーレムを出すまでさ。

本当にお宝が手に入るなら、私にとっても悪い話じゃないんだ。少しは信用したらどうだい？」

「いいや、『土くれ』を相手に信用は出来ないな。それに無駄とも思わない。どうせお得意の巨大ゴーレムに、精神力を使い込んでいるんだろう？ それに今作っているゴーレムにだって、だいぶ力が入っているそうさ。もはやそう何体も強力なゴーレムを作り出せるとは思えないな」

ギーシュは、「同じ土メイジの僕には分かっちゃおうのさ」と嘯いた。

「さあ、どうだろうね。能あるメイジは杖を隠すものさ」

「それはまさしく、僕たちだってそうさ」

「……まあいい。好きにしま。それで、後はあんたらが逃げてお終いかい？」

ギーシュは頷きを返した。

「最後は、僕たちがあなたから見えなくなるところまで離れて終わりだ。あなたはじっくりとお宝を賞味すればいい。もし後から追って来ようものなら、ヴェルダンデ自慢の地下迷路がお相手をしよう。それじゃあ早速、初めに時間が掛かりそうな穴掘りを先に済ませようじゃ

あないか。さあ、ヴェルダンデ「待ちな」

フーケは無を言わせぬ調子で続けた。

「掘るのは見通しの付く範囲までだ。必要な分だけ掘って、残りは後にしな」

「でも穴掘りにも時間が掛かるわけだし、掘れるだけ掘って時間の無駄を省いた方がいいだろう?」

「本当にそれだけならね」

フーケは見透かすように言った。

「私が心配しているのは、そのご立派な箱の中身がガラクタだった時の話さ。そうと分かった時に、既にあんたたちの逃げ道が掘ってあるだなんて、そんな都合のいい話を認めるとでも思ってるのかい? あんたたちの逃げ道を掘るのは、宝を確認した後だ。これは譲れないね」

ギーシュはごくりと唾を飲んだ。もし逃げ道があるなら、宝箱が空でも一か八かで逃げ切れる可能性はある。だがもし道が無いままなら、明らかに強そうなゴーレムを相手に勝ち目は無い。ギーシュは助けを求めるようにキュルケたちへと目を向けたが、帰ってきた答えは無情だった。

「死なば諸共」

「そうよギーシュ、その精神で頑張りなさい。あんたはやれば出来る子よ、多分。」

当然、私たちも協力するけど、あんたが一番槍になりなさいよね」  
ギーシュもワルキューレというゴーレムを操るものとして、もしもこの時の自分の役目を分かっている。例えば敵わぬと知りつつも、相手のゴーレムをワルキューレで押し止め、その隙にキュルケらが相手をどうにかする。例えば自分が一番に殴り飛ばされることになろうとも、彼はやらねばならない。ギーシュは軍閥貴族の息子として、そして何より男として、レデイのために命を賭す覚悟は出来ているつもりだった。そう、自分の役割を理解している、してはいるが、もう少しこのレデイたちは、自分に優しくしてくれてもいいのではないだろうか  
と、彼はそう思わずにいられない。

「もう少しマシな言葉はないのかね？」

「あら、ちゃんと褒めたじやない」

「どこかぞんざいだったじやあないか！」

そう言って嘆く彼の肩を、タバサはぽんと叩いた。

「大丈夫」

ギーシュは意外に思った。

何時もは不愛想というか無口な彼女から、励ましの言葉を聴けるだなんて……

実は彼女は、自分が知らないだけで、温かい心の持ち主だったのか。そう感じ入ったギーシュへと、タバサは尚も言葉を続けた。

「あなたが死んでも代わりはいるもの」

ギーシュはがっくりと肩を落とした。

「行きな」

フーケの命令に従って、ゴーレムが歩みを進める。フーケ自身もその後に続き、宝箱に近寄っていくが、その視線は油断なくギーシュの方へと向けられていた。一方ギーシュも、フーケの杖からは決して目をそらさず、自らの杖先だけを宝箱へと向け続けた。その後方ではキュルケたちが杖を構え、フーケがおかしな動きをした時のために、動きを見守っていた。

「いやはや、楽しみじゃあないか」

宝箱から少し離れた位置に立ち止まったフーケは、笑いながら言った。

「中身がお宝ならもちろん嬉しいし、中身がガラクタでもあんたらは絶望する顔が見れて、

それはそれは愉快なことだろうさ」

「もったい付けずにさっさと開けなさいよ」

キュルケのぶつきら棒な返事にも、フーケの機嫌が損なわれることはなかったようで、彼女は喜色のこもった声でゴーレムに指示を出した。

「さ、それじゃあお望み通り御開帳と行こうじゃあないか」

ゴーレムが前かがみになり、長い腕を伸ばした。太い指先が、宝箱のふたに触れる。

キュルケたちは嫌な胸の高鳴りを覚えながら、中身が明らかになるのを見守った。

宝箱の蝶番がギイツと軋む。僅かに開いたふたの隙間から、キラキラとした輝きが漏れ出た。

これを見て我慢できるフーケではない。彼女のゴーレムは、一気にふたを開けた。

ボワツと、青い炎が揺らめいた。

箱の中からいきなり立ち上った青い炎は一気に膨らみ、仰け反ったフーケの顔を微かに撫でた。

炎はゴーレムの頭上よりも高く燃え上がって、そのまま消えた。

声を上げる暇も無いほどの、一瞬の出来事だった。

フーケは動揺しつつも、すぐにこの宝箱の何たるかを悟った。要するに、これは罠だ。<sup>トラップ</sup>

一拍置いてフーケが憤怒の形相を浮かべ、未だ愕然としているギーシュに怒鳴りつけようとした時、今度はゴーレムが足元から燃え始めた。今度は赤々とした炎である。フーケには知る術も無いことだが、宝箱から噴き出した青い炎はマガマガしき魔法の炎であり、近接するものへと必ず引火する性質を持っていた。

ゴーレムは、一挙に赤々と燃えた。すぐ近くに立っていたフーケも、この炎に巻き込まれたものだから、それを間近に見ていたギーシュは言葉が出ない。ゴーレムの全身を一気に包み込んだ赤い炎は、燃え盛る音の余韻と僅かな煙とを残しながら、これまた一瞬にして消えた。

この僅かの中に、なんとゴーレムは半壊していた。白く輝いていた体には無数の亀裂が走り、少し体を動かしたら、ボロボロと体が崩れ落ちていきそうな有様である。ギーシュたちは、宝箱に仕込まれていた悪辣な炎の罠に戦慄した。

この痛々しい様子の子のゴーレムを見るにつけ、フーケももはやこれま

でかと思いきや、ギーシユたちはすぐにも無事なフーケの姿を見付けることが出来た。どうやら魔法の炎は、相手に合わせてその威力を増減させるらしかった。とはいえ、フーケもまったくの無事とは言い難い。

フーケは、ゴーレムの陰に隠れるようにして、ぽっかり口を開けたまま立ち尽くしていた。自分が燃えるというあまりの出来事に、理解が追い付いていないらしい。彼女の美しかった髪は焦げてちりぢりになり、顔は真っ黒、すすだらけになっていた。ローブなどに至っては、もはや襤褸切れといった有様である。キュルケたちが様子を見守る中、フーケは思い出したかのようにケホツと、けむり混じりの息を吐いた。

「……今だ！ かかれえ！」

ギーシユがワルキューレたちを一挙に召喚、それと同時にフーケも我を取り戻した。突撃を仕掛けるワルキューレの集団を前に、フーケは壊れかけのゴーレムに大手を広げさせると、逆にワルキューレたちの方へと突っ込ませた。フーケのゴーレムは見た目こそ散々でも、まだまだ力が残っていたらしく、束になったワルキューレをしばらく押し留めたかと思うと、それらと共に姿勢を崩して地面に倒れ込んだ。

「次は私たちの番よ！」

「へぶっ！」

いつの間にかギーシユのそばまで駆け寄っていたキュルケは、背中を押して彼に身を屈めさせた。狭い穴の中を、彼女の放ったファイアーボールがフーケ目掛けてすっ飛んでいく。しかし長い手を持ち上げたフーケのゴーレムに阻まれ、火の玉はボボンと消え去った。同時に、元々千切れそうだったゴーレムの腕がぶちりと吹き飛んだ。ゴーレムが、もう一本の腕を使って起き上がろうとする。続け様に放たれたタバサの氷槍を、ゴーレムはぼろぼろになった胴体で受け止めた。硬いもの同士がぶつかり合うキンという音がしたかと思うと、ついにゴーレムの体は仰け反る様な形に歪み始め、そのまま上半身が千切れ落ちた。青褪めたフーケが急いで杖を振るうも、もうゴーレムはうんともすんとも言わず、土に戻っていく。

「やったわ！ あたしたち、勝ったんだわ！」

キュルケが歓喜の声を上げ、ギーシュも目に見えて顔が綻んだ。

「っ ばんざい、バンザーイ！ ぼくの錬金で、フーケに勝ったんだ！」

「やったわよタバサー！」

興奮冷めやらぬ友人を前に、タバサは無言でVサインを返した。

「やりました、勝ちました！ このギーシュ・ド・グラモン、姫殿下のために戦い抜きました！ 僕の錬金が、フーケに勝ったんだ！」

「ちよつとギーシュ、話を盛るんじゃないわよ」

そう言いながらも、キュルケの顔には笑顔が絶えない。

「けれどギーシュ、確かにあんたはお手柄だったわ。それじゃあ、最後の仕上げにフーケを捕まえようじゃない」

「ああ、僕のワルキューレに任せておいてくれたまえ。ワルキューレ！」

ギーシュの一声で、倒れ伏していたワルキューレが各々立ち上がった。

「さあワルキューレよ、勇壮にして精巧にして華麗なる…… 華麗なる……」

ギーシュは、思わず口ごもった。ワルキューレはフーケのゴーレムに手酷くやられたためか、ベッコベコに凹んでおり、前衛的な芸術家の彫像がごとき姿になっていた。

「あー、えーと…… とまかく、フーケを捕まえろ！」

ギーシュが杖を振るって命じると、ワルキューレたちは歪んだ体でぎこちなく動かして、二歩三歩、歩いた。歩いた後、一体がこけたのに連なって、他のワルキューレも将棋倒しとなり、派手な音を立てながら地面に転がった。ギーシュは罰が悪そうにしつつ、杖を振るいなおしたが、今度はワルキューレたちがぴくりとも動かない。

「あ、あれ？ おかしいな」

「何よ、精神力切れ？ やっぱりあんたって最後の最後で締まらないわねえ」

がっくり来るギーシュの肩をポンポンと叩きながら、キュルケは

フーケに向かって杖を掲げた。

「さあ、大人しくお縄に付いてもらおうかしら。こんなこともあるうかと、ロープを持ってきておいたのよねえ。前みたいに、しっかりと巻きにしてあげるわ」

キュルケは腰元に取り付けたロープを手に取って呪文を唱え、軽く杖を振った。ロープは、あたかも蛇が頭をもたげたかのように宙に浮かぶと、フーケに向かって真っすぐに伸びていった。しかし、ほどなくしてロープはよろよろと揺れ始め、ぱたりと地面に落ちた。

「あ、あら？ 流石に疲れたかしら。集中力が切れたみたいね」

キュルケはもう一度杖を振った。縄はびくともせず、地面に横たわっている。キュルケは顔を引きつらせてタバサに振り返った。

「ごめんタバサ、後は頼んだわ。あなたは、流石に大丈夫よね？」

タバサは無表情を保っている。首を縦にも横にも振ろうとしないことが、暗に答えを指し示していた。

「ぶへえっ！」

弾丸のように駆け出したフーケに、ギーシュが殴り飛ばされていった。

「魔法が打ち止めなら、こっちのもんだよ！」

「往生際が悪いわよ、このオバサン！」

フーケはすぐにキュルケをギロリと睨むと、そのまま殴り掛かってきた。

キュルケも負けじと、拳を握りしめる。

「よくもこのフーケに二度までも土をつけてくれたね！」

フーケの拳がキュルケの下腹部に突き刺さった。

「ぐううっ!! あんた、土くれのフーケでしょ!？」

今度はキュルケの拳がフーケの脇腹にめり込んだ。フーケはゲエツと苦痛の声を漏らした。

「土がつくぐらいが丁度いいんじゃないかしら！」

そのまま二人は転がるように揉み合い、殴ったりつかんだりの戦いを始めた。

そこへ、ボカンと重い一撃が放たれた。

「痛い！」

目を大きく潤ませながら、キュルケが叫んだ。

「手元が狂った」

タバサは叩き付けた大杖をもう一度、頭上まで振り上げた。いかつい杖のこぶは見るからに硬そうで、それが今まさにもう一度振り下ろされようとしていた。フーケは慌てて抗議を始めた。

「ちよ、ちよつと待った、そりゃ反則だよ！」

「問答無用」

今度は狙いを外さず、フーケの頭へ杖のこぶが当たった。フーケはひぎいっと悲鳴を上げた。

「分かったよ、分かった！ 私の負けだよ。だからそいつは止めておくれ！」

またもタバサは杖を振り上げた。今度はお尻が叩かれる。

「ひいん！」

「一方的に殴りつける。それはとてもとても気持ち良いこと」

「ちよつと、待アッ！ ツ！ ツ！ ひぎいー！」

フーケは痛みに耐えるのに精一杯な様子で、一方的にやられている。キュルケは、土で汚れた服を振らいながら立ち上がった。

「これでようやく安心ね」

ギーシユも殴られた頬を痛そうにさすりながら起き上がった。

「いやあ、酷い目にあつたもんだ」

けれど、ようやく終わったんだな。そんな実感が湧いてきて、ギーシユに安堵をもたらした。やり込められているフーケを見下ろしたギーシユは、頬を赤く染めた。なんせ彼女の服はボロボロの上、キュルケとの揉み合いで、いい感じにはだけ来ていたからだ。加えて、タバサに叩かれる度に上がる悲鳴が、妙に色っぽかった。そんなことだから、緊張の抜けたギーシユは、ついこう思った。

しかし、何だな。痛みに喘ぐ女性つてのは、ある種官能的だな」

気の緩んでいたギーシユは、ついつい独り言を漏らしていた。漏らしてしまっていた。

途端に、地下が静まりかえる。一斉に振り返った女性陣を前に、



ギーシュは固まった。

「うつわあ……」

「ち、違うぞ、誤解だ！ 僕はそういうヘンな意味で言ったわけでは……！」

「引くわあ……」

「変態」

「あんた、女性の敵だね」

ギーシュは、事もあるうかフーケにまで罵られ、ドブネズミを見るかのような眼差しを向けられていた。彼はガツクリと地面に膝をつき、項垂れた。

「最低だ。僕って……」

「そうよ！ あんたなんて、むつつりスケベなモグラ野郎よ！」

女性陣に責め立てられるギーシュの哀れな姿を、ヴェルダンデが遠巻きに、心配そうに見つめていた。

出港から一夜が明けた。船は夜の間に高度を上げていき、ハルケギニア大陸の如何なる山の頂すらも超えて、アルビオン浮遊大陸へと近付きつつある。陽は大分上がり、船をさんさんと照らし付けるまでになっていたが、甲板を吹き抜けていく風は依然として冷たいままだった。ルイズは、外の風が船室の窓を叩き付けていく音を聞きながら、魔王の包帯を甲斐甲斐しく交換していた。

「痛みはどう？」

「エエ、ジクジク、ヒリヒリとイヤな感じがいたします。誰かさんのおかげで、傷も深くなったことですし……」

「そんなこと言わないの。ワールドだって、謝ってたじゃない。あれは事故よ事故」

ルイズはそう言いつつ、血に黒ずんだ包帯を見てはあとため息をついた。

「やっぱり、魔法薬と違って生薬なんてすぐ効かないのね。所詮、平民のための薬だからしょうがないけど、困ったわ」

「コマンド漢方さえあれば、もうちょっと早くに治ったと思うのですが……」

「何よコマンドって。そもそもカンポウヤクって、本当に効くのか分からないような」

怪しい材料が入ってるんでしょ？ コウモリやミミズだとか、得体のしれない

動物の骨や肝が使われているだなんて、ぞっとするわ」

ルイズはそう言って、身震いした。

「何を言うんです！ そこが良いんじゃないですか」

「ええ？ 本当に？ そんなもの効くのかしら」

疑わし気なルイズへ、魔王は自信を持って答えた。

「トーゼンです！ そんなマガマガしい材料が入っているからこそ、

私のマガマガ成分が補給されて元気になれるんじゃないですか！」

ルイズは、魔王を呆れた目で見つめた。

「それ、この薬をくれた船医の人には絶対に聞かれちゃダメよ……

あら、いやだわ。どうしちゃったのよ、これ！」

ルイズは包帯を解いた魔王の左腕から、なおも血が噴き出てきているのを見て悲鳴を上げた。

「まだ傷が塞がりきってなかったの？ それとも包帯を解いたせいで傷口が開いたかしら？」

慌てるルイズを落ち着かせるように、魔王はのんびりとした様子で彼女に声をかけた。

「いえいえ、心配する必要はありません。すぐにでも血は止まるでしょう」

「強がるんじゃないわよ。その傷、昨夜から全然治ってないじゃない！」

急いで新しい包帯を巻こうとするルイズに対し、魔王はのんびりと返事した。

「フシギですよね」

「何がよ！」

「どうしてカサブタって、剥がしたくなるんでしょう？」

「……」

ルイズは黙って下を向くと、暗い声で言った。

「……どうして」

「ハイ？」

「どうして、そんなことしたのよ！ このバカ！」

魔王はうーんと思いついた末、答えを得たのかニカツと笑った。

「あえて言うなら、こうなつた情熱を忘れたくは無いか、そんな感じの理由でって、イタタタタ！」

ルイズは、包帯で魔王の腕をぎゅうぎゅうと縛り上げると、すつくと立ち上がった。

「ルイズ様、イタイです！ これはイタイ！」

「その痛みは罰よ。少しは反省しなさい！」

ルイズはつかつかと扉まで歩み寄り、ドアノブに手を掛けると、つ

と立ち止まった。

「……私だつて心配してるんだから、バカやってないで早く治しなさいよね」

「オロローン！ イタイ！ 私はビョーニンなのですぞ！

……あ、ルイズ様。今何か言いましたか？」

「知らないっ！」

ルイズはそう言い捨てると、ボタンと扉を開け放って、甲板へと立ち去っていった。ビュービューと冷たい風が船室の中に吹き込んで来て、風に煽られた扉が大きな音を立てながら閉まった。魔王はため息を付きながらもよろよろと立ち上がり、彼女を追って甲板に向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

魔王が扉を開けて、辺りをきよろきよろと眺めても、そこにルイズの姿は見当たらなかった。どうやら、広い甲板のどこかへ歩いて行ってしまったらしい。それならばと、魔王も船の上を見物がてらにあちこちを歩き回り、ルイズを探すことにした。だが魔王がそうして一番初めに遭遇したのは、風の似合う男、ワルドであった。ワルドは爽やかな雰囲気醸し出しつつ、魔王に問いかけた。

「やあ使い魔君。傷の調子はどうだい？」

ワルドは昨晚とは打って変わって、その表情から嫌味さを完璧に消し去ってみせていた。他所から見れば、その様相は好紳士にしか見えないだろう。これだからルイズ様は彼に夢中になるのだろうか、魔王は複雑な思いを抱きながら、彼に返事した。

「おかげさまで、左手がビツシリとカサブタだらけです。イロイロと剥がれ落ちそうですな」

「おいおい、まさかまだ怒っているのかい？ いやあ、悪かったよ。まさか君が魔法薬の効かない特異体質だとは思わなくてね！」

ワルドは明るくそう言うと、調子を変え、魔王の耳元に口を寄せて囁いた。

「それでどうだい？ 昨晚のことで、君にもこの任務の危険さが分かっただろう？ 彼女に付き従い守り抜く役目は、君のような半端者

には務まらない。その傷付いた腕こそが、その証拠だ」

ワルドはおもむろに魔王の腕を軽くつついた。すぐさま、魔王は苦悶のうめき声を漏らした。

「いくらお前にガンダールヴのルーンが刻まれていようと、関係ない。お前に使い魔は務まらない。君も本当の痛みと苦しみを知って、使い魔を辞めたくなくて来たんじゃないかね？」

魔王は脂汗をかきながらも、それに無然とした表情で言い返した。「そんなもの、私は何時でも辞めたって構わないのです。なんせ、私が使い魔でなくなつて、私は私、ルイズ様はルイズ様なんですからね。私は一生、破壊神様に着いていくだけです。あつ、マチガえた。ルイズ様に着いていくだけです！」

「……本当に懲りないやつだな。何なら、言葉通りに使い魔を辞めさせてやろうか？」

「はて？　使い魔は一生をメイジと共にすると聞きましたか？」

「そうだ。つまり一生を終えれば、使い魔を辞められるということだ。私の手にかかれば、その包帯の下に隠れたご立派なルーンを、お前からきれいさっぱり消し去ってやることも出来るという訳だな」

「……」

魔王が黙り込んだのを見て、ワルドはぶつと噴き出した。

「はっはっは！　冗談、冗談だ。本気にしないでおくれよ！　君はルイズとケンカしたようだったからね。ちよつとしたジョークで気を紛らわした方がいいかと思つたのさ！」

魔王は返事を返さず、黙つて笑い続けるワルドを見つめていた。怪しい赤を灯した瞳が、ワルドの仮面を見透かすように、じつと彼の顔を捉え続けていた。

「とはいえ」

再びワルドは、声の調子を変えて魔王に語り掛けた。

「君も自分の限界がよく分かつただろう？　もう船に乗り込んでしまった以上、ここから先

置いていくなどとは言わないが、せめて君には身の程を弁えた行動を取って貰いたいものだ。

これ以上、ルイズに必要な以上に近づくのはやめたまえ。彼女に余計なことを吹き込んで、

わけの分からぬ君の野望に付合わせるんじゃない」

ワルドの表情は、一切の甘えを許さないような真顔になっていた。

魔王は表情を変えず、ワルドの言葉に切り返した。

「フム、どうやらそれは、お互い様のようです」

「なんだと?」

ワルドの眉が、大きく吊り上がった。

「私、ホントーに不思議に思っております。昨日の襲撃は、ナゼ起きたのでしょうか?」

「どこからか情報が漏れたのだろう。貴族派の手は我々の思っている以上に広がっているということだ」

「ええ、ホントーに広いようですな。いや、ホントーに!」

魔王はそう言って、ワルドをジロジロと眺め回した。ワルドは険しい表情を浮かべながら言った。

「……何が言いたい」

「いえ、この旅は想定外な出来事がよく続くものだと思ひましてね。旅立ちの初日から賊に襲われ、その次の日もまた襲われると来たものです。アア、そういえば一番最初の想定外は、あなたの加入でしたな」

ワルドは不機嫌そうな表情で言い返した。

「旅人を待ち伏せする賊なんてものは、この世にはありふれている。昨日の晩のことは、

あまり考えたくはないが、確かに我々の誰かから情報が漏れたのかもしれないな」

「ほう?」

「昨日は君たちも一日中、外を出歩いていたのだろうか? 疑いたくはないが、子供のやることだ。

ラ・ロシエールに残ったメンバーの誰かが、うっかり秘密をこぼしてしまったのかもしれない。

もちろん、君がそれを漏らした可能性だってある。こういうことは、無意識に起こるものだからな」

「つまり、あなたかから漏れた可能性もあると？」

ワルドは魔王の言葉を鼻で笑った。

「馬鹿を言うな、僕は魔法衛士隊の隊長だぞ。王宮の任務は口の堅い者でなければ務まらない。」

当然、秘密を漏らさぬための訓練だってあるし、一般人と同じに考えて貰っては困る」

「それでは無意識的に情報が漏れるのはアリエナイということですか」

「そういうことだ」

「つまり漏れるとしたら、意識的なものだ」と

「いい加減にしたまえ！」

ワルドは声を荒らげた。

「これは大事な任務なのだ。例えば君が私をどう思っているかと、任務に同行する以上は

君にも責任というものがある。根拠なく人を貶めるような言動は慎んで貰いたい。」

任務の成功率に大きく関わる故な。これ以上何か言おうものなら、ルイズに相談して

君を本当に置き去りにするよう取り計らわねばならぬ」

「……」

ワルドは魔王が黙ったのを確認すると、重ねて言った。

「お前もここまで来て、帰りたくはないだろう。ならば、せいぜい大人しくしていたまえ」

そう言うワルドはそこから立ち去ろうとした。

「どこへ行かれるのですか？」

「機関室だ。無理に船を出したからな。風石に私の力をありつけたけ注いでやらねば、港に着くまでにこの船が沈んでしまうのだよ。精神力を費やす以外にも、風メイジの感覚を活かして手伝う仕事がある。おそらく着港まで掛かり切りになるだろう」

「ナルホド、ではあなたは働き詰める直前のせつかくの一時を、この私と話し込んで費やしてしまったというワケですな。愛しのルイズ様

との距離を縮めるでもなく！ まったくゴクロウサマですな」

ワルドは露骨に不機嫌な顔をした。

「勘違いするな。私は偶然空いた僅かな時を潰したに過ぎん。もともと甲板にいたのだから、操船を手伝うためだ。風メイジの仕事は機関室に籠もるばかりではないのだよ。君のように、働きもせずグースカと寝て食って、外に出れば周りの景色にはしゃいでおればよい愚か者とは違うのだ」

ワルドはそう言い捨てると、今度こそせかせかと歩いて、船室に去っていった。

「ウーム、彼もなかなか忙しいようですな。やっぱり、働かないで食うメシより、嫌な奴を働かせて食うメシの方がウマいんでしょうか？  
今から昼食が楽しみです！」

魔王は船の外に目をやった。普段は見上げる高さにあるはずの雲が、船から見下ろす高さに延々と広がり、日の光を受けて眩く輝いている。

「ちよつと、あんた。まさかまたワルドを怒らせたんじやあないでしょうね」

景色に見とれていた魔王のそばに、いつの間にか頬を膨らましたルイズが立っていた。

「これはこれはルイズ様、モチロン我らは仲良くしておりますとも」  
「本当に？ そうは見えなかったけれど」

「いえいえ、とんでもない！ それは誤解というものです。彼は、ケガに苦しむ私へと、それはそれは真剣に語り掛けてくれましたからね。私も、もし彼がケガをしたならきつとオミマイしに行きますよ。やられたらやり返す、倍返しです！」

「それ、お見舞いの意味が違ってるじゃない！ やっぱりケンカしてたのね！」

怒り出したルイズをなだめる様に、魔王は言った。

「しかしルイズ様、人にもマモノにも相性というものがあるのです。デーモンとサターンしかり、アッシュレディとファントムレディしかり…… ルイズ様だって、いくら仲良くしようと思っても、キュルケ



殿とはそりが合わないでしょう?」

「まあ、それはそうだけど……」

ルイズは少しむっつとした表情をしながら、魔王の横に並んだ。二人してボーッと景色を眺めている間にも、外を漂う雲はもこもここと形を変えていく。二人はしばらくの間、会話もせず、その場でじつと過ごしていた。気温は低い、日の光が体に当たると妙に温まる。だがそこへ、一際強い風がびゅうと吹いた。顔を叩き付けるような風には、思わずルイズは目を細めた。体が冷えてぶるりと震える。そろそろ船室に戻ろうかとルイズは考えたが、そこで彼女はふと、あることを思い出した。

「そういえば、預かってたローブを返してなかったわね。寒いしこれ着ておきなさいよ」

ルイズはそう言つて、懐から闇を湛えたように黒いローブを取り出した。

「おお、これは私のダイジな闇の衣ではないですか! これはこれは有難うございました。」

魔王が手を伸ばしたところで、ルイズはきつと、ローブを上を持ち上げた。

「いいこと、今回は仕方なく預かってあげたけど、本来こういうのは使い魔であるあんたの仕事よ! 二度と同じマネするんじゃないわよ」  
「ええ、モチロンです。今後は二度と手放しませんとも。今回は、ルイズ様もケガが無くて何よりでした」

「あら? あんた、妙に素直ね?」

いつもとちよつと違う魔王の態度に、ルイズが首をかしげていると、にわかには船内が騒がしくなり始めた。ルイズたちが何事かと思つていると、マストの上から、船員のよく通る声が響いてきた。

「アルビオンが見えたぞー!」

その一言で、船内はより一層活気付いたようだった。

「なんと、ついにそこまで来ましたか。それではアルビオンとやらをぜひ拝ませて貰いましょう。どちらの方角でしょうか? 私、これでも視力には自信があるのです。……んん? アレ、本当にどつち

でしょう？ エエ？ 何も見つかりません！」

ルイズは、キョロキョロとし出した魔王を見て、ニヤリと笑った。アルビオンに初めて訪れる人は皆、必ず一度はこういう失敗をする。ルイズも、かつてはそうだった。まだ幼かった彼女が家族に連れられ、一回だけアルビオンへ渡った時のこと……ルイズは背伸びして船から身を乗り出し、一面に広がる空の中から必死に大陸を見つけ出そうとした。ルイズは、そんな自分へと投げ掛けられた長姉の言葉をも覚えている。

『まったくバカね、このおチビは！ アルビオンがどこにあるのか、よく思い出してみなさい』

いつも通りきつい言葉だったが、その時の長姉はどこか楽しげでもあり、得意げでもあった。ルイズは外へと必死に目を凝らす魔王を見つめながら、今度はかつての姉の役を自分がやるのかと思つて、くすつと笑った。

「馬鹿ね、どこ見てんのよ」

きよとんとする魔王に、ルイズは得意げになつて言った。

「アルビオンがあるのは、上よ！」

魔王が空の上を大きく仰ぎ見ると、一面の白い雲の隙間から、延々と広がる大地が姿を覗かせていた。大陸の端の岩肌を細々と水が流れ落ち、それらが幾重にも横に連なつて、大きな滝を形作っていた。そして滝の水は、しばらく下へ落ちると空中で散らばり、きらきらと輝く純白の霧となつて、大陸の下を深く包み込んでいるのだった。

「!! おお……!! おおう……!!」

魔王の口から、思わずといった感嘆の声が漏れた。

「どうよ？ すごいでしょ。アルビオンの川の水はね、ああやって大陸の端から流れ落ちて霧になるの。常にあの真つ白な霧で包まれている国。だから『白の国』<sup>アルビオン</sup>というのよ」

「いやはや、これほどとは…… 思わず息をのむ美しさですな」

ルイズはそれを聞いて嬉しそうにしながら、魔王に語った。

「あの大陸はトリステインほどの広さがあるのよ。その全体を包み込むほどのたくさんの霧が、

やがて雲となつて、ハルケギニア大陸に恵みの雨をもたらすの」

「ウウム、何から何までスケールの大きな話ですな。これはヂブリのラプユタ以上かも分かりません」

「何よそれ？」

首をかしげたルイズに、魔王は『いやなに、コツチの話です』と言つて誤魔化するのだった。

「トモカク、これはスバラしい！　こんな雄大で美しい大地をこれからマガマガしく染め上げていくのだと思うと、カンドーもひとしおです！」

「感動が台無しよ！」

怒るルイズの言葉を聞き流しながら大陸に見惚れていた魔王は、ふと空に浮かぶ黒い影に気が付いた。

「まったく、アンタって奴は！」

「ほらほらルイズ様、そんなことよりもアレ、何か飛んできますよ？」

「あんたつてば、人の話を……つて、あら本当ね。いやだわ、あれつて貴族派の船じゃないかしら？」

ルイズは魔王の見つけた船を見て、眉を潜めた。遠目に見ても、船の脇に大砲がずらりと並ぶその様は、軍艦のそれに違いない。

「王党派は劣勢らしいから、ああして堂々と飛んでいるのはきつと貴族派の船よ」

「フム……　となると、あまりお近付きにはなりたくない相手ですな」

だがその船は、ルイズ達の願いとは裏腹に、目一杯広げた帆で風を拾い、ぐんぐんと彼女たちの乗る船へと近付いて来ていた。青々とした空の中に、軍艦らしく黒く塗られた船体が浮かぶ様は、まるでそこだけ明るい空を切り抜いたかのようなのである。その黒い影がだんだんと大きくなつていくと共に、ルイズの心も段々と重苦しくなつていくのだった。もつとも、船員たちにとっては軍艦なぞ見慣れたものらしく、船の方々に彼らが文句を言う姿が目についた。

「まったく、奴さんらの硫黄を運んでやっつるとこののに、臨検で航行を邪魔されてはかなわん！」

船長が濁声で怒鳴ると、意を汲んだ見張り員が手旗をパタパタと

振った。この船が怪しいものではないということを、そうして相手に伝えるのだ。

「返答はまだか？」

船長は忙しなく甲板の上を行ったり来たりしながら呟いた。

「船長、大変です！ あの船は旗を掲げておりません！」

「なにい!？」

見張りの一言で、船員たちの様子のがらりと変わった。先ほどまでは管を巻いていた彼らが、今では顔に緊張を張り付かせている。魔王は、状況を確かめるように呟いた。

「旗がないですと？ それって、つまり……」

「空賊よ」

ルイズは絶望の表情で、真実を告げた。

「取り舵いっぱい！ 全速前進！」

船長は厳しい声で指示を下した。一斉に船員たちが動き出す。ところがそこへ、ズガンと大きな音が響き渡った。一拍置いて、船首に設けられていたマリィ・ガラントの女神像が粉々に吹き飛んだ。船長も船員たちも、それを見て顔を強張らせた。どうやら相手の空賊には、恐ろしく腕の立つ砲手がいるらしい。これでは逃げ出そうにも、相手の心一つで、どこへでも狙い通りに弾を打ち込まれてしまう。船内が重苦しい沈黙に包まれる中、空賊船からようやくこちらへのメツセージが送られた。白地に青の旗と、青地と白地のチエツク柄の旗が、空賊の乗る黒い船のマストに高々とはためく。見張りの船員はそれを見て、声高に叫んだ。

「掲揚旗はS i e r r a, N o v e m b e r! 『停船せよ、さもな  
くば撃つ』です！」

「言われんでも分かるわ！」

船長は乱暴に帽子を脱ぎ捨て、床に叩き付けた。

「停船急げ！ このままじゃ、一発で沈められるぞ。回答旗を早く掲げろ！」

船員たちが蒼白な表情をしながら慌てて動き回る中、船長はドカッ

と甲板に座り込んだ。

「チクシヨウ！ 折角の俺の船が、これでお終いだ！」

そこへ副長が恐る恐る進言した。

「船長、あの男を呼んでみては？」

「そうだ、あいつがいた！ もっと早く言え！ 急いで連れて来い！」

「はっ！」

副長は、船内に向けて駆け出した。

.....

船の乗組員たちは必死で駆け回り、誰もルイズたちのことを気にしていない。ただただ茫然と立ち尽くすルイズの袖を、魔王は強く引っ張った。

「ルイズ様！ ルイズ様！」

ルイズは魔王に振り替えると、悲嘆に暮れた様子で弱音を吐いた。

「これで、何もかもお終いだわ」

「諦めるんじゃないやありません！」

魔王は大声で叫んだ。

「まだ手はあります！ 急いで裏手に回りましょう！」

「どこへ行くというのよ！ 船なんてものは、大空に浮かぶ孤島に過ぎないのよ。もう、どこにも逃げ場なんてないわ」

「いいから、早く着いて来てください！ 手遅れになる前に！」

魔王はルイズの腕を引っ張って、空賊船の目から逃れるように船体の反対側へと回り込んだ。船員たちは皆、空賊が近付いてくる右舷に集中しており、魔王の訪れた左舷はそこだけ、妙な静けさがあった。

「ありました！ アレです！」

魔王が指差した先には、ロープに括り付けられ、固定された短艇カッターがあった。

「さあ、この縄を解いて大空に漕ぎ出すのです！」

「無茶だわ！ こんなのは、苦し紛れの避難用じゃない！ こんな小舟じゃ、逃げてもすぐ追いつかれるわ！」

「イイエ、そうとは限りません。ここらは雲も多いですし、すぐ身を隠せるハズ。」

何より、アルビオンがあんな近くに見えているではないですか。

一旦、雲に入ったら、後はアルビオンへ向け一直線です！」

それを聞いたルイズは、より一層のヒステリックな声で叫んだ。

「無理よ！ 無理だわ！ あんただって、さつき見たでしょ!？」

こんなものに乗っていたら、大砲で舟もろとも木っ端みじんよ！」

そう言うと、ルイズは目に涙を浮かべてうずくまってしまった。そうやって、『姫様、ごめんなさい』と呟やくルイズを、魔王は黙って見守りはしなかった。

「あなたがそんなことでどうするのですか！ 破壊神たるもの、諦めの悪さだけが取り柄で

勇者に打ち勝つものですぞ！ ルイズ様はやればできるヒト、いや破壊神です！

しかし閉じられた心では、活路など見出せませんぞ。さあ、顔を上げて！」

魔王は、ルイズに合わせてしゃがみ込むと、ひそひそ声でルイズに告げた。

「確かに相手の大砲は脅威です。しかし、フフフフ…… それこそがあやつらの盲点にもなるのです。逃げれます、私たち二人だけなら……！」

ルイズはびつくりして顔を上げた。今の言葉を誰かに聞かれていないか、彼女は不安になって辺りを見回したが、左舷には人影も少なく、また彼らもすぐに右舷の方へ戻ってしまい、彼女らの様子を気にしている者はいなかった。ルイズは、声を潜めて魔王に問い返した。

「どういふことよ？」

「いいですか、ルイズ様。確かに今すぐ舟を漕ぎ出したら、すぐさまあの大砲の餌食です。しかしチャンスはあります。空賊はこの船を拿捕せんと乗り込む。ワレワレはこの船から逃れんと漕ぎ出す。つまり、ハサミ討ちの形に「ならないわよ」

一言の元に切り捨てられた魔王は、少ししよげながら先を続けた。「要するに、空賊船がこの船を拿捕しようと近付いた、ちょうどその時にワレワレが逃げ出すのです。そうすれば、第一にこの舟が逃げ出す

ことを気付かれ難く出来ます。なんせ、空賊船からはこの船体が邪魔になつて、反対から逃げる我々の姿が見えませんか」

「そうは言うけど、それも時間の問題じゃない。それに大砲はどうするのよ？」

「同じことです。先ほどルイズ様は否定しましたが、確かにこの船、マリー・ガラント号はハサミ討ちとなるのです。あの空賊船がワレワレを撃ち落とそうと思えばこそー！」

「……なるほど、そういうことね。マリー・ガラント号の船体が邪魔して、あの大砲を撃てなくなるのね！」

魔王は大きく頷いた。

「彼らにとつて一番の目的は積荷のはずですからね。いくらワレワレに人質の価値があつたとしても、金に換えるには手間も掛かりますし、奴らにとつてはオマケのようなものでしょう。それに、もしあの船ごと大砲を撃つたならば、空賊船ごとドカンです」

「うまくいきそうじゃない！」

「オマケにもう一つイイコトがあります。空賊どもは、ひとたびこの船を拿捕しに掛かつたら、容易には船を動かさなくなるのです。空賊船は、この船への接舷のために一度停止します。その後、我々の逃亡に気付いたところで、マリー・ガラント号を置いたまま小舟を追い掛けるワケにはいきません。その隙にガラント号に逃げられてしまいますからな。また一方で、あの2隻の船を同時に動かしてワレワレを追おうにも、先ずはマリー・ガラント号を完全に掌握しなければなりません。ワレワレはそれまでの時間を活かして、上手く逃げ切れればよいのです！」

魔王の話聞き終えたルイズは、いつもの強気を取り戻して、その瞳を爛々と輝かせた。

「分かつたわ。急いで舟を降ろしましよ」

「先ずはこの縄をどうにかせねばなりません」

「悠長にほどいてる暇はないわよね。誰かからナイフを借りないと……」

しかし船員たちは忙しそうに動き回っており、とてもルイズたちに

かまけてくれるものとは思えない。すると魔王は、身にまとったロブをひらりと脱ぎ捨て、背中をルイズに向けた。

「どうぞ、コレをお使いください」

「そういえば、こんなものもあつたわね」

ルイズが魔王の背中に括りつけられた剣を両手で引き抜くと、途端に喧しい声が響き渡った。

「やい！今日も俺を放っておきやがったな！もうちよつと鞘から出してくれてもいいじゃねえか。剣の俺にだって、心はあるんだぜ？持ち主がいるつてのにおはようやお休みも言えねえだなんて、味気ねえじゃねえか。寂しいじゃねえか」

「アー、エーつと、マア、そうですね」

魔王はどこかゾンザイげに、背中からの声へ返事を返した。

「ほんのちよつと、朝起きたら鞘から抜く。たつたそれだけじゃねえか。

あんまり仕舞いっぱなしだと、俺の存在、一日中忘れられたままなのかと思つちまうぜ」

「私は完全に忘れてたわ」

「黙ってる、娘っ子！ わざわざそんな事実聞きたくねえよ！」

声の正体は、ルイズがかつて100エキューというお手頃価格で買い取った、珍しそうで珍しくない、でもちよつとは珍しいインテリジェンスソードのデルFRINGガーだった。デルFRINGガーの鍔元がかちやかちやと、ひとりでに揺れる。

「それで？俺を引き抜いたつてことは出番か？」

デルFRINGガーは、どこか期待のこもった声で今の状況を聞いた。

「我々は今、空賊に襲われておるのです」

「なるほど！空の上じゃ、逃げ回るつてワケにはいかねえよなあ。それで剣もロクに触れねえ相棒に替わつて、これまた剣もロクに握れねえ娘っ子が俺を振るうつてワケだな？」

「あんたねえ！」

喧嘩を売っているかのような剣の言葉に、ルイズは声をわななかせた。



「いや、気を悪くしたら済まねえ。勘違いして欲しくねえんだが、俺はこれでも女子供が剣を振るうつてのはアリだと思ってるんだぜ？」

俺がキライなのはあくまで、使えもしねえ剣を手にして強くなった気になるやつらだ。今のお前さんみたいに、例え自分が素人と分かっていても、覚悟を決めて敵と切り結ぼうつて奴あ、大歓迎よ。俺はそういう心を震わせて戦うやつが大好きなんだ！」

理想の持ち主について熱く語るデルフリンガーだったが、ルイズはそこへ非情の宣告をした。

「何を勘違いしてるのよ。私はただ、あのロープを切りたいただけよ」

デルフリンガーのカチャカチャと金具を掻き鳴らす音が消えた。

「ろーぷ？　ロープだあ!?!」

デルフリンガーは不満を爆発させるように、声を張り上げた。

「俺は由緒正しき剣であつて、ただの日用品なんかじゃねえ！　そんな仕事はナイフにでも任せるんだな」

だがルイズも黙ってはいなかった。

「言われなくてもそうするわよ。改めて見ても、あんたつてばサビサビじゃない。

そんな刃じゃ、いくら時間を掛けてもロープなんて切れやしないわ」

「!!　何おう！　馬鹿にするない！　そんなロープごとき、10本でも20本でも切つてやらあ！」

この剣つて、チョロい。ルイズと魔王の心が一つになった。

「さあ、早く俺を振り下ろしな！　すぱつと切つて見せようじゃねえか！」

「そんなに言うなら、あんたの実力見せて貰おうかしら?」

ルイズは両腕に精一杯力を込めて、重たいデルフリンガーを振り下ろした。

「やあつー！」

ドゴツと、重たい物がぶつかる鈍い音が響いた。

「つつつ！　痛つたい、手が痺れたわ！」

剣がぶつかった衝撃が腕に来て涙目になるルイズに、魔王は恐る恐

る告げた。

「あのう、ルイズ様」

「何よ」

「ロープ、切れてません」

「うそ!？」

ルイズが懸命に持ち上げた剣は、確かにロープの上に振り下ろされたはずだった。しかし、ロープは少し凹んだようになっていただけで、依然として頑丈そうに繋がっている。

「やい、へたつぴ」

デルフリンガーの一言に、今度こそルイズは怒りを爆発させた。

「誰が下手よ誰が! 私、思いっきりあんたを振るつたわよね? それでも切れないだなんて、どんだけナマクラなのよ!」

「失敬な! 俺のこの姿はあくまで仮初めのものに過ぎねえ。」

本当の自分なら、それはそれは良い切れ味を……って、俺は何を言ってるんだ?」

自分で言った言葉に戸惑うデルフリンガーだったが、そんな彼の話をまともに聞く心の余裕は、ルイズに残されてはいなかった。

「その酷いなりでよくも大口叩いてくれるじゃない!」

そんなに言うんなら、あんたがへし折れるまで思いっきり振るってやるわ!」

魔王が止めようとするのも構わず、ルイズは憤怒の表情で剣をもう一度振り上げた。

「おおー! 今度は、すげえ心が震えてるじゃねえか! それなら俺も本気出さねえとな!」

そして魔王は見た。さび付いて鈍く光るだけだったデルフリンガーの剣身が、突如として研ぎ澄まされたような銀色に輝き始めた。もつとも、頭上高くまで剣を振り上げたルイズは、その変化に気が付いてはいない。彼女は、先ほどよりもだいぶ力のこもった様子で、怒りのままにデルフリンガーを力任せに振り下ろした。姿を変えたデルフリンガーは、先ほどの無様な様子が嘘のようにサククリとロープを断ち切り、そのまま下にある船体にまでのめり込んだ。

「そうだ！ これだこれだ。今思い出したぜ。いやあ、すっかり忘れてた」

デルフリンガーが、感慨深げに語る。

「これが！ これこそが、俺の本当の……！」

「魔王、背中を向けなさい」

「あつ、ハイ」

興奮した様子デルフリンガーの声は最後まで紡がれることなく、剣が鞘に納まると同時に途絶えた。

「まったく、本当に失礼な剣で嫌になっちゃうわ」

「あのー、ルイズ様？ もうちょつとあの話を聞いてた方が良かったのでは？ 最後、なんかイミシンな感じに光り輝いていた様な……」

しかし残念ながら、重たいやら痛いやらで剣を持ち上げるのに必死だったルイズは、最後までデルフリンガーの変化に気付いてはいなかった。また何よりも、彼女の抱いた憤りと、100エキューの値で買った安物という先入観が、彼女自身の目を曇らせていた。

「あんた、何あの剣みたいな寝言を言ってるのよ。まったく、2回目は当たり所が良くて助かったわ。あんなボロ剣でも、まだ切れるところは残っていたのね。ああ、もう！ あんなに思いつきり振るうんじや無かったわ！ 手がつりそうになっちゃったじゃない！」

「……まあ、時間も押していることですし、ルイズ様が良いならそれでいいでしょう」

ルイズは強張った手を揉みほぐしながらも、ロープから切り離れたカッターの中を丹念に確認していった。

「非常用の風石もちゃんと積んであるみたいだし、これならすぐにも舟を出せるはずよ」

「ではサツソク乗り込みましょう」

「あんたはそうしてなさい。私はワルドを呼んでくるわ」

そう言うルイズは身を翻し、船内に向かって駆け出そうとした。だが魔王は、彼女の手をがっしりと掴んで、その場に引き留めた。

「お待ち下さい、ルイズ様。我々にそんな悠長なことをしているヒマはありません」

ルイズは目を見開いた。

「あんだ……！ 自分で何を言っているか、分かっているの？」

「ルイズ様こそ、事態がヒツパクしているのを忘れて貰っては困りません。空賊はもう目と鼻の先にまで近付いて来ていて、逃げ出すチャンスは一回しかないのですよ？」

そう言うとき魔王は、大げさな身振りでマリー・ガラント号の船体を指し示した。

「見てください、この船を！ 貨物船だけあってナカナカ大きいですよ。彼を見つけ出すには、こんな大きな船の入り組んだ通路や部屋を探し回らねばならないのです。場合によっては、すぐに見つからないこともあるでしょう。彼を連れ戻った時に手遅れでしたでは済まされないのです！」

ルイズはその言葉に狼狽えはしたが、それでも考えを簡単に変えようとはしなかった。

「馬鹿言わないで！ いくら空賊がいつ乗り込んでくるか分からないからって、ワルドの欠けた任務なんて！」

それを聞いて魔王は、ルイズへと真剣な眼差しを向けながら語った。

「いいですか、ルイズ様。この種の任務は、半数が目的地にたどり着ければ、成功とされるのです！」

「」

つい最近聞いた言い回しが魔王の口から飛び出したのを聞いて、ルイズは思わず絶句してしまった。

「それって、ワルドの……！」

「そもそも、ルイズ様は！」

魔王はルイズの言葉を遮るように言った。

「あの学院での密会で、例え一人であろうとも、この困難な任務をやり遂げる！」

そういう決意を抱いていたはずです。違いますか!？」

ルイズははっとした様子で、胸に手を当てながら魔王に答えた。

「そうだったわ…… 私、いつの間にかワルドに甘えていたのね」

その返事を聞いて、魔王は満足げに頷いた。

「ではー」

「待って、それでも彼一人をこの船に残していくなんて、不安だわ」

「それならシンパイはいらないでしょう。なんせ彼は王宮直属、魔法衛士隊の隊長まで登りつめるほどのデキル男です。きつと空賊相手にも上手く立ち回れるに違いアリマセン。むしろ下手に我々がここに残るより、自由に立ち回れるはずです。我々の護衛を気にしなくてよくなりますからな」

ルイズは悩むように俯いたが、ついには納得して顔を上げた。

「分かったわ。私も覚悟を決めようじゃない」

「ご英断です、ルイズ様」

ルイズと魔王は、風石の力で軽くなったカッターを、軽々と持ち上げながら船のへりまで運んだ。

「さ、どうぞルイズ様、お乗り込み下さい」

魔王に手を引かれたルイズは、カッターの中に座り込みながら、ため息を付いた。

「せめてワルドの居場所さえ分かっていたら、すぐにでも呼んで来れたんでしょけど……」

まさかあんだ、ワルドがどこにいるか知ってないわよね」

「ナニモシリマセン」

「そうよね。あんたたち、ケンカしてたんだものね。」

私たちだけで逃げ出す算段を、船員に手伝って貰うわけにもいかな  
いし……」

その時、マリー・ガラント号の船体がぐわんと大きく揺れた。

「今ですー」

……………

「お貴族様の力で、ここはどうか一つ……！」

「無理だ。どうにかするにしても、伝えるのが遅すぎる。ちょうど風石に魔力を

補充し終えたところで、僕の精神力はからつきしだ。大人しく諦めるんだな」

「そんなー！」

船内の機関室へとワールドを呼びに向かった副長は、甲板へと足早に向かう道すがら、彼へ必死に助力を頼み込んだ。だがそれが結局は幻の希望でしかなかったことを知り、大いに落ち込むこととなった。

「そんなことより、僕の連れはどうした？　こんな状況だ。早く合流しておきたい」

「はあ、それでしたら甲板でお二人の姿を見かけましたが……」

「そうか、まだ船内には戻っていなかったのか。ならすぐにでも会えるな」

ワールドはそう言うと、甲板へとつながる扉を開けた。

「動くなてめえら！　これから先、許可なく動いた奴は、船の外に突き落としてやるぜ！」

「……チッ！　遅かったか」

空賊たちはまだマリー・ガラント号に乗り込んではいなかったものの、もうすでに空賊船からは何本もの鉤付きのロープが投げ込まれ、船体を引き寄せている最中だった。この分では、もう一分とせず空賊は乗り込んでくるだろう。彼が甲板に置いてきた使い魔のグリフォンを目で探すと、彼は不自然な姿勢で寝込んでいた。

「スリープ・クラウドにやられたか」

相手の空賊にはメイジまで紛れ込んでいる。この分では精神力が残っていても、彼らと戦うのは難儀しただろうと、ワールドは考えた。マリー・ガラント号が空賊船の間近まで引き寄せられると、船体がぐわんと揺れた。

「よし、てめえら乗り込め！」

派手な格好をした、空賊の船長と思しき男の指令と共に、屈強な体付きをした空賊たちが次々と乗り込んで来る。

「おうおう！　この船はお貴族様まで載せてるのか！」

空賊の一人がワールドまで近寄り、その首元に剣を突き付けて彼を脅した。ワールドは刃に触れるのを避けようと、顎を大きく上にそらしながらも、落ち着き払った様子で空賊に語り掛けた。

「如何にも私は貴族だ。だからその剣を下して貰おうか」

「てめえ！ 自分の立場が分かってんのか！」

怒鳴る空賊へ、ワルドは不敵な笑みを浮かべた。

「十分分かっているとも。この船の荷を奪って、それを誰に売りつけるつもりなんだ？」

「なに？ 船荷はなんだ！」

「硫黄だ」

「おい、この船の船長！ そいつは本当か？」

「へえ、積み荷は全部、硫黄でございます」

空賊たちから、おおと歓声が上がった。

「喜べてめえら！ 硫黄だ！ ……それでてめえ何だつて？」

俺たちやてめえらの命でそいつを買うんだ。文句があるか？」

「そういうことではない。ただ、今の情勢でそいつを売りつける相手は貴族派だろうか？」

丁度良いことに、僕には貴族派の伝手がある。だから商売を上手く運びたければ、

僕とその連れのごとは丁重に扱うんだな」

それを聞いて、副長が嘆きの声を上げた。

「そんな貴族様！ 俺たちのことも少しは守って下せえ！」

「うるせえぞ手前ら！ 心配しなくても大人しくしてりや命だけは残しといてやる！」

それで？ そのお仲間とやらを紹介して貰おうじゃねえか、え？

貴族派の旦那さんよ」

ワルドはその言葉に頷いた。

「良いだろう。連れは一人、桃色の髪をした少女だ。おそらく甲板にいるはずなのだが……」

「杖を出せ！」

「だから、僕は貴族派だ。お前たちの商売相手だぞ」

「良いから出せ！」

「……ちゃんと、後で返して貰うぞ」

ワルドはしびしび、腰に差した杖剣を彼へ預けた

「着いてこい！」

彼に従い、ワルドは甲板の上を歩いて回る。

「見つけたら言いな！」

船員たちが甲板のあちこちで縛られ、床に転がされている中を、ワルドは歩いて回った。船員たちは皆、空賊に捕まるというこの上ない不幸を思つてか、力なく項垂れている。

「おい、そつちにピンク頭はいるか？」

「そんな奴はいねえよ！ 他所を探しな！」

「だとよ！ 次はこつちだ」

ワルドたちは甲板の上をぐるりと探し回ったが、ルイズの姿は見つからない。そして彼らはずいに、元いたところまで戻ってきてしまった。

「どういうつもりだ、てめえ！ 俺たちを馬鹿にしてるのか？」

再び剣を首元に突き付けられたワルドは、相手を興奮させまいと、慎重に言葉を返した。

「すまない。いつの間にか彼女は船内に戻っていたようだ。

離れ離れになっていたから、気付けなかったのだよ」

「チツ！ それじゃあてめえはここで縛られてな！」

「待て、だから僕は貴族派だ。その積み荷をお前たちから買い取つてやる客だと言っているだろう。実は僕は反乱軍のトップ、クロムウエル司教に顔が利いてな。もし僕を粗雑に扱えば、お前たちなど……」

「大変でさあ!!」

ワルドの言葉を遮るように、空賊の一人が大声を上げて駆け寄ってきた。その手には双眼鏡が握られている。

「脱走者だ！ 非常艇で逃げてる奴がいらあ！」

空賊たちはどよめきながら、脱走者が逃げたという方向へ駆け寄った。そこには肉眼では見ることも難しいほど小さな点となって、確かに浮かんでいるものがあつた。

「どんな奴らだ？」

「ピンク頭をしまさあー！」

「！ てめえ!!」

ワルドを見張っていた空賊が眉を吊り上げた。だがワルドは、彼の



剣呑な様子に気が付かないほど、狼狽えていた。ワルドはいきなり走り出して、外を見張っていた空賊から双眼鏡を取り上げた。

「貸せっ！」

「てめえ何しやがる！」

空賊たちが一斉に彼へと掴み掛る中、ワルドは奪い取った双眼鏡を空へ向け、脱走者の姿を探した。そして彼は見つけた。とても小さな舟の上で、桃色の髪の乙女が必死にオールを漕いでいる。間違いなくルイズの姿だ。だがもう一人いた。彼女に向かい合うようにして座り、深紫色のローブに身を包んだ怪しい男。なんと、双眼鏡越しに彼と目が合った。まさか奴は、ここまで目が利くのか？ ワルドが更に動揺していると、レンズに映る男の口元がニカツと笑った。

「ガンダールヴウウウ!!!」

ワルドは双眼鏡を奪い取られ、そのまま幾人もの空賊たちの手によって、床に押さえ付けられた。

「舐めやがってこの野郎、俺たちを謀りやがったな！ そいつは嚴重に縛っておけ。」

貴族派の秘密を洗いざらい吐かせてやる！」

ワルドを取り囲んだ空賊たちが彼をドカドカと蹴りつける中、少し離れた場所では空賊の船長へと話しかける部下の姿があった。

「どう致しましょう？」

船長は双眼鏡を逃亡者に向けながら、うーむと唸った。小舟の姿は、見る見るうちに白い霧の中へと沈み込んでいく。

「少し遠いな。それに、この大きな船で近付けば気流を乱してしまう。あの小舟を沈めずに近づくのは難しいぞ」

「それでは？」

「捨て置くしかあるまい。我々の責任を感じないでもないが、こことて貴族派の軍艦がいつ通るとも知れぬ。なあにこの距離だ。この風のことを多少なりとも知っていれば、あんな舟でも大陸には辿り着けるだろう。もっとも、その後のことまでは保証できんがね」

船長の言葉に、部下は苦笑を漏らした。

「まったくその通りで。貴族派の連中と来たら、野盗が出ようがモン

スターが出ようが、

ろくに対処もしておらんようで…… あの逃げ出した二人も、襲われるかもしれない」

「だが、それは今のアルビオンに来る以上、当然のことだ。覚悟無くして来たわけでもあるまい」

そう言うのと船長は再び、双眼鏡を空へと向けた。彼の持つ、蒼空のごとく青き眼が、霧に包まれた広大な大陸を捉えていた。

STAGE 32 その空舟（ふね）を漕いでゆけ

大空に浮かぶ囚われのマリー・ガラント号の姿が、遠く、小さくなっていく。魔王とルイズの二人は、必死に舟を漕ぎ続けた。

「追って来てないでしょうね?！」

「おそらくダイジョーブです。これだけ時間が経って動きがないのです。十分逃げ切れるでしょう」

やがて舟は霧に近づき、その中へと突入していった。二人は肌を刺すような冷たさと、霧の中を乱反射して一面を白に染め上げる強烈な光に必死で耐えながら、オールを漕ぎ続けた。やがてふつと寒さが和らぎ、閉じたまぶた越しの光が弱まったのを感じ取ったルイズが目をつすら開けていくと、目の前にはいよいよ近くなって来た、雄大なアルビオン大陸が広がっていた。

「これでもう逃げ切れたかしら?！」

「ええ、もう安心して良いでしょう。空賊だって、白い霧を掻き分けて小舟を探すようなヒマ人ではないでしょうね。ですがルイズ様、ここからが本番ですぞ。陸地につくまでが脱走ですからな」

「分かっているわよ。任務はこれからだもの」

ルイズは一度後ろを振り返って、深い霧に隔てられてしまった先の情景に思いを馳せた。

もう既に空賊船は、マリー・ガラント号を連れて空賊の根城に向かっていているのだろうか？

ワルドは、果たして上手くやっているだろうか？

ルイズは目を閉じてワルドの無事を始祖に祈り、気持ちを切り替えて再び舟を漕ぎ出した。

.....

この世には、2種類の船がある。水に浮かぶ船と、空に浮かぶ船だ。これらの船は見た目上、とてもよく似ている。それもそのはず、海を行く船を造っている大工たちが、空の船も作っているからだ。

かつて、ハルケギニア大陸とアルビオン大陸の間を行き来できたの

は、ドラゴンを召喚したメイジだけだった。空を飛ぶ幻獣は他にもいたが、ドラゴンほど力強く、素早く、また長く飛べる種族は他にいなかった。故にその時代のドラゴンは、天と地を結びつける力と権威の象徴として、今日以上に神聖視されていた。特に空を介してしか他の国とやり取り出来ないアルピオンではその傾向が顕著であり、アルピオン王家の紋章にドラゴンが描かれるようになったのは、その時代の影響あつてのことだろうと歴史家たちは言う。だが当時、ドラゴンを介して行われる人やモノのやり取りは、極々限られたものに過ぎなかった。いくらドラゴンが力強いといえども、その数が絶対的に足りなかったのである。保有できるドラゴンの数を増やせないかと、ハルケギニア中の国が躍起になったが、いくらメイジたちが喉から手が出るほどに欲したとしても、サモン・サーヴァントで思い通りにドラゴンを呼ぶことなど出来ないし、また手懐けることが出来る野生のドラゴンなんてものもまず存在しない。結局彼らはどうする事も出来ず、ハルケギニア大陸と浮遊大陸の間では、とても貿易とは呼び難い程度のわずかな物資がやり取りされるだけであつた。二大陸間には文字通り、天と地の隔絶があつた。

ドラゴンを使わずに大陸間を行き来する。それはかつてのメイジにとつて、果てしない高みへの挑戦であつた。この勇敢とも無謀ともとれる空への挑戦は、二大陸間の交易を切り開く巨万の富を賭けた一大事業として、王侯貴族の強力な支援の下に幾度となく繰り返された。だが当時、誰もがその難しさを真には理解していなかった。

グリフォンやマンティコアでは力が足りない。ならば、これらの幻獣を束ねてそりをひかせてはどうか？ 幻獣を使ったのでは、どうしても力尽きてしまう。ならば、空に浮かぶのは気球に任せて、そこに火のスクウエアメイジや風のスクウエアメイジを乗り込ませてみてはどうか？

幾多の試みが成され、その全てが失敗に終わった。誰もが、ハルケギニアの上空に吹き荒れる風に打ち勝ち、その先にある高みへと至ることが出来なかった。運よく生還した者は、ハルケギニアからアルピオンを目指すのは、大しけの中を船も無しに泳いでいくようなものだ

と語った。幾多の犠牲を重ね、誰もが空への夢を諦めかけた頃、土メイジの手によってある発見がなされた。かつては単に魔石とだけ呼ばれていた雑多な鉱物の内、特に軽いものに適切な刺激を加えると、強力な浮遊力を得られることが明らかにされたのである。古くからその存在が知られていた『風石』の意義が、本来の意味で発見された瞬間だった。この成果により、大地に眠っていた『ただの石』は、一躍大資源となった。やがて風石の大鉱脈が発見されるようになると、かつては夢想家だけが思い描いたアイデア、空を飛ぶ船が現実のものとして考えられ始めた。嵐の波風にも耐え得る船を宙に浮かべれば、風の猛り狂う空域を乗り越えて、はるか上空のアルビオン大陸へも向かえるのではないか。帆を上手く張れば、風を味方に付けることすら出来るし、何よりヒトとモノを沢山持ち運べる。各国の大号令の二元、空船の開発が進められた。

当初は、空石を積んで宙に浮かぶも船体が逆さまになったりしていた船も、やがて姿勢を安定させたまま航行出来るまでに発展した。そして空に一番近い世界樹の頂から、ついにアルビオンに向けて船が飛ばされた。船には、幾人ものスクウェア・メイジと共に、操船と操舵を熟知した一流の船乗りたちが乗り込んだ。彼らは未知なる空の環境に戸惑いながらも、必死で船を操った。メイジや平民の区別なく皆、船内を駆け回り、船乗りが帆を、舵を操る間に、メイジたちは魔法で船体の姿勢が保たれるよう、間断無く魔法を掛け続けた。やがて船が最も強い風の吹く空域を超えると、その上空にアルビオンの姿が見えた。そこから、アルビオンを見下ろす位置にまで上昇するのは、すぐのことであった。船は、風石による浮遊力を抑えていき、ついに浮遊大陸に降り立った。

斯くして、2大陸間の航路は切り開かれた。初めは熟練の船乗りと凄腕のメイジの相乗りが必須だったこの航行も、造船の技術が発達するにつれ、平民だけでの行き来が可能になっていった。こうして空船乗りの仕事は平民のものとなっていき、同時にアルビオンとハルケギニアの各地は、幾多の空船によって結ばれることとなった。空船を介して人と物とが行き交いするようになったハルケギニア世界は、より

一層の豊かさを甘受するに至るのだった。

.....

舟から突き出された2本のオールが、ゆったりと空をかきわけて回る。ルイズは魔王と息を合わせながらオールを手繰る内に、ぼんやりとした気分になってきた。もはや追っ手を気にする必要もないため、二人は息を切らさない程度のペースで舟を漕いでいる。皆に恐れられるアルビオンの強風も、彼女たちのいる宙域では大分収まっているらしく、舟は静かに揺れるのみであった。ルイズは暖かな日差しを身に浴びながら、これはまるでラグドリアン湖でボート遊びをした時のようだと思ってしまった。もともと、ラグドリアン湖と違って舟は水面ではなくひたすらの青い空の中に浮かんでいるし、また彼女たちが操るオールも、水面を浮かぶ舟のものとは大きく異なっていた。普通のオールのはきは、水をかけるように平たい形となっているが、空用のオールには代わりに、大きな鳥の羽が扇のように括り付けられていた。羽には硬化の魔法が掛けられており、これで風を掻き分けるのである。そのようなものを使って本当に前に進めるのかと思われるかもしれないが、宙に浮く舟は重たい水の抵抗を受けない分、これ以外、漕ぎ続けると早く進むのだった。

「まあー！」

ルイズは外の景色を眺めていて、歓声を上げた。燕の群れが、彼女たちの乗る舟のすぐそばを通り過ぎていき、アルビオン大陸の岸壁へ向け飛んで行った。

「もう、上陸も目前ですな。全てが順調でナニヨリです！」

魔王はオールを持つ手を休めずに言った。

「着いたら、まずはお昼をいっぱい食べたいものです」

ルイズは一漕ぎしてから、返事を返した。

「街が近ければね。多分、港町も近くにあると思うけれど……」

魔王も、一漕ぎしてから言葉を返した。

「まあ、いざとなったらコケでも食べましようか」

「コケって、食べられるの？」

ルイズの訝しげな声に、魔王はたと奥を漕ぐ手を止めた。

「何をバカなことを言っているのです。ガジガジムシだって、コケを食べているじゃあないですか」

「ムシじゃない。私は人が食べられるかって、聞いてるのよ」

ルイズに促され、魔王は再びオールを漕ぎつつ答えた。

「当然、食べられます。なんたつて、養分とコラーゲンがタップリですからね。」

魔界でも、不健康食品の材料としてヒジョーに注目されております」

「ダメじゃない」

「偏見はよくありませんぞ」

魔王は汗を拭いっつ言った。

「コケは魔界の超ロングセラー食品、マガ汁の材料になっているほどポピュラーな食材なのです。」

『マズい！ もう一匹！』のCMで、それはそれはよく売れているものなのです」

「余計に食べたくなかったわよ」

二人はそうやって、下らないことを話しながら舟を漕ぎ続けた。周りを風が吹き抜けていく。

.....

「なんで……」

ルイズは怒ったような、疲れたような、それでいて焦ったような声を上げた。

「なんで着かないのよー！」

彼女たちの前方には、相変わらず浮遊大陸がでんとその威容を誇っている。大陸の上から下まで続く岩肌を、ルイズはもうかれこれ半刻以上も見続けていた。

「オカシイですね。もうすぐ着くと思っただのですが……」

あんまり大陸が大きすぎて、遠近感が狂っていたのかもしれないん」

実際、アルビオンへの航行に不慣れなものは、よくこの錯誤を犯す。空は物に溢れた地上とは違い、何も無い空間がどこまでも広がっている

る。すると、空に浮かぶものの背景には何もなかったために、見たものが自分からどれだけ離れているか分からなくなってしまうのだ。同様の現象は、日常的なところでは月を見上げている時にも起きる。空に浮かぶ月は、人の目には雲より少し高いところにあるように見えてしまう。しかし実際には、月は雲が浮かぶ高さの何万倍もの高さに浮かんでいる。それと同じ錯覚が、過去にアルビオンを目指した船人の多くを惑わせてきた。

「イヤー、オソロしいですな」

「じゃあ何よ、私たちがまだまだ漕がなきゃいけないわけ？」

首を垂れるルイズを、魔王は元気に励ました。

「クヨクヨしても仕方ありません。ここはファイトいっぱいつ、

ワシにでもなつたつもりでこの空を駆け抜けましょう！」

「もう、嫌。うんざりだわ」

どれだけ嫌でも、漕ぎ出さなければ始まらない。ルイズは機嫌を損ねたままに、再びオールを漕ぎだした。

.....

「これは…… どういうこと？」

先ほどよりも更に機嫌悪そうに、ルイズは言葉を吐き出した。

「なんで辿り着けないのよ！ 全然、近付いた感じがしないわ！」

「イヤ、心なしか遠くなった気がしますな」

「うそ！ うそよそんなの！ だって、こんなに必死に漕いでるじゃない！」

「こんなに風を切つて舟が進んでるのよ!?!」

ルイズは魔王の言葉を、そんなものは認められないというように強く否定した。

「ムム？ ルイズ様、ちよつと景色も変わって来てませんか？」

「どこがよ？」

「ホラ、先ほどは左手に見えていたあの岩山が、今は右手に見えています」

「それって…… 流されてるじゃないの！」

ルイズは、ついに現実を無視できなくなつて、頭を抱え込んだ。始



め、ルイズたちの舟は確かに前へと進んでいた。しかし実は、大陸側から舟に向けて緩やかな風が吹き込んで来ていたのだ。風は、ルイズたちが気付けないほど穏やかに、緩やかに強まっていき、やがては舟を大陸から遠ざけ始めた。しかし周りには何も無い空の上では、舟が風を切って前に進んでいるのか、それとも強風を受けて後ろに押し流されているのか、判断するのは容易ではない。彼女たちは今になってようやく、自らの置かれた状況を理解したのだった。

「まさか、このまま流され続けたりしないわよね？」

ルイズは弱気な声を上げた。

「と、トーゼンです！ 考えてもみてください。マリー・ガラント号を発った時と比べたら、

チャクジツに舟はあの陸地へ近付いたはずでしょう？ きつと今は風が悪いだけなのです！」

「そ、そうよね！ 今はただ、向かい風で舟が進み難くなってるだけよね！」

「そのとおりです！ もうかれこれ一時間以上も流されてるかと思いましたが気のせいでしょう！」

風だって、いつかは向きが変わります。明日は明日の風が吹く！ 「良いこと言うじゃない！ そうよ風向きは変わるわ。明日になってからじゃあ遅いけど！」

ルイズと魔王の二人は、それまでになくせかせかと、オールを手繰っては前へ、手繰っては前へと動かし始めた。

「やったわ！ 岸はもう目の前よ！」

「イヤッフウ！ さあ、ラストスパートです！ ここまで近付いたら、もう後はラクショーでしょう！」

.....

「.....」

「.....」

「.....」

「.....どうして.....」

「……」

「どうして…… また…… こんなに岸から遠ざかってるのよ！ さつきはあんなに近付いてたじゃない！」

ルイズはがつくりと俯き、オールを操る手を止めてしまった。

魔王もゲツプウと苦しそうな息を吐き出して、ぐったりと項垂れた。

「ホ、ホントどうなってるんでしょう？ 何が何だかサツパリです。

まるでナニモノかに翻弄されているかのようなキブンはです」

「ナニモノかって、何よ。そんなものいてたまるもんですか ……あ

ルイズはそう言うと、顔色をより一層悪くした。

「ルイズ様？」

呼びかけられても、彼女は返事を返さなかった。ルイズは先ほどの魔王の話を聞いていて、ふと遠い日の出来事を思い出した。今の彼女はまさにその記憶で、頭の中が埋め尽くされそうになっているのだった。

~~~~~

あれはまだ私が幼いころ、家族に連れられアルビオンへ旅行に来た時の事だった。

「わあ、キレイ！」

ルイズは、初めて見るアルビオンの空の青さに興奮を覚え、今にも空に向かって駆け出しそうな勢いだった。

「こらおチビー！ そんなにみつともなくはしゃぐんじゃないわ」

すぐさま小言を言う長姉のエレオノールに、ルイズは露骨に不満そうな顔をした。

「ええ？ だつてえ……」

「だつても何もないわよ！ どうしてアンタは素直に言うことが聞けないかしら？」

「い、いひやい！ いひやいですエレオノール姉さま！ 助けて、ちいねえさま！」

「あらあら」

助けを求められた次姉のカトレアは、二人の姉妹の微笑ましいやり取りを見てのほほんと笑った。

「ち、ちいねえさまー！」

「よそ見するんじゃないわよ、おチビ！ いいから私の話を聞きなさい！」

大体何よ、なんでカトレアだけちいねえさまと呼んで、私は名前呼びなのかしら？

「おおねえさまって呼べばいいじゃない？」

不思議そうに訊ねたエレオノールに、ルイズはこう答えた。

「ええ？ だつてえ……」

エレオノールはキーツと悔しそうに歯噛みした。そしてより一層激しくルイズのほっぺたを引っ張り倒した。

「いひゃ！ もげる！ ほっぺがとれちゃうー！」

「そう簡単にほっぺはとれないわよ」

「これこれ、その程度にしておきなさい。カトレアや」

「！ はい、お父様」

エレオノールは父親ヴァリエール公爵の一言で、借りてきた猫のように大人しくなった。ルイズは引っ張られたほほをまだ痛そうに手で抑え込んでいる。そこへカトレアが、優しくルイズの頭を撫でた。

「痛かったわね、ルイズ」

「ちいねえさまー！ エレオノール姉さまがまたいじめるー！」

そう言つてルイズはカトレアに抱き着いた。エレオノールの頬が再びぴくつと吊り上がった。

「あく、ゴホン。娘たちよ、少し大事な話があるのだ」

公爵の言葉に、三姉妹は居住まいを正した。公爵は思った。娘たちは、言うことを素直に聞いてくれる良い子、いや素晴らしい子だが、目を離すとすぐに、こう、なんとというか…… これも遺伝か。そう思つて公爵がちらりと横を見ると、彼の妻カーリヌとバツチリ目が合った。

「何か？」

公爵はその一言に、自分の考えが見透かされたのではないかと思う

ような威圧感を覚え、慌てて『何でもないので』と白を切った。

「そうだ、時に娘たちよ。アルビオンの空はどうだね？」

「とつても美しいですわー！」

元気いっぱいな様子で、ルイズが一番に返事を返した。

「ええ、まったくルイズの言う通りですわ。美しくって、見ている心が洗われるようですもの。」

お父様、わざわざ旅行に連れて行ってくださって有難うございませす」

そうかそうかと、満足そうに公爵は頷いた。

「カトレアはどうだ？ アルビオンは空気が澄んでいると聞いて連れてきたが、旅で少し堪えなかつたかね？」

「平気ですわ、お父様。こここのところ私、とつても調子が良いんですもの。」

こんな素晴らしいところに来て、私とつても嬉しいですわ」

「それは良かった！ それでこそ、お前たちと一緒にアルビオンまで来た甲斐があるというものだ。思う存分このアルビオンを満喫していこうではないか」

笑顔を漏らす公爵に、娘たちも微笑みを返した。何時もは厳しい顔をしている彼の妻も、この時ばかりはすこしだけ口元が緩んでいた。だが公爵は、そこでキリツと表情を変えると、低い声で話し始めた。「お前たちは私の「私たちの」……私たちの自慢の娘だ。あえて何も言わずとも、良い子でいてくれることだろう。だが娘たちよ、ここアルビオンにおいてこれだけは守って欲しいということが一つだけあるのだ」

「それは何ですか？」

長女のエレオノールが聞き返した。次女カトレアと三女のルイズも、真剣そうに公爵へ顔を向けている。

「ここアルビオンの空は素晴らしい青さだ。そして、おあつらえ向きなことにここアルビオンには、空用のボートというものまである。湖畔に置いてあるような、少しばかり漕ぎ出して遊べるようなやつだ」「わあ、楽しそうー！」

ルイズが歓声を上げた。

「まだお父様の話の途中よ」

エレオノールはルイズを諫めたが、彼女やカトレアも、空のボートに興味がありそうな顔をしていた。

「そうだろう。舟で空を進むのは、フライで宙に浮くのはまた別な楽しさがあるという……」

だが娘たちよ。絶対に自分たちだけでは舟に乗らないと約束してくれたまえ。例え十数マイルの距離を漕ぎ出すだけであろうともだ。舟に乗りたければ、必ずカリーヌと一緒に行きたまえ」

「分かりましたね？」

カリーヌが公爵の後を継ぎ、厳しそうな声音で質した。

「分かりましたわ。お父様、お母さま」

「私たちだけでは、絶対に舟に乗りませんわ」

エレオノールとカトレアが返事したのを見て、ルイズもこくこくと頷きながら、返事を返した。

「誓いますわ。絶対にお父様の言いつけを守ります」

「よろしい」

カリーヌからの重圧が解け、ルイズはほっと胸を撫で下ろした。

「ですがお父様、それにお母様も」

エレオノールは少し不思議そうに言った。

「病気がちなカトレアやおチビはともかく、少し過保護すぎじゃありませんこと？」

私だってトライアングルですよ。十数マイルぐらい、フライですぐじゃありませんか。

例え数十マイル岸から離れても、いざという時は妹たちを守れますわ。

もちろん言い付けは守りますけど……」

公爵は、首を横に振りながらそれに答えた。

「お前がそう思うのも無理はない。ここがもし別の場所であれば、それももつともだったことだろう。だがここはアルビオンなのだ。土地が変われば、常識も変わる。アカデミーへの入会を目指すお前がそ

れではいけまい。お前たちも、風の怖さを知らんわけではないだろう？」

「そ、そうですね」

娘たちは、顔を強張らせながら公爵の言葉に頷いた。公爵は、そこでちらりと視線を横に向けた。またも彼の妻カリーヌと、バツチリ目が合った。

「何か言いたいことでも？」

「いや、別になんでもない、大したことではないのだ！ 風に熟知したお前なら、風の怖さもよく知っているだろうと思つてな」

カリーヌは、公爵の何かを恐れるような、また何かを隠すような態度に、はあとため息をつく。娘たちに向き直った。

「あなたたちは風の怖さと聞いて、どうせ私から折檻を受ける時のような突風を思い浮かべているのでしょう。ですが自然に吹く風の恐ろしさとは、そう目に見えて分かるようなものばかりではないのです。一つ話をしましょう。ここアルビオンの岸边に住む者は、皆知っている有名な話だそうです。心してお聞きなさい」

カリーヌは、背筋を真直ぐに伸ばして聞き入る娘たちへ、空の恐ろしさを語り始めた。

.....

『アルビオンの空には魔物が住んでいる』と言われるが本当か？

船乗りたちはみな口を揃えて言う。まったくのその通りだと。時にアルビオンの空には、50マイルを超える大船を転覆させそうになるほどの強風が吹き荒れる。船がいきなり何十マイルも落下することもあるし、そうかと思えば今度は船体が大きく傾いて、船員たちが船から振り落とされそうにもなる。実際、振り落とされる者もいる。力と度胸、経験、それから運、全てが無ければ切れ抜けられない。俺たちは、そんな恐ろしい空の魔物を征して今ここに生きているのだと。船乗りはそうやって空に怯えつつも、どこか誇らしげに皆へ語る。だが空の魔物は、何も嵐の中だけに住んでいるわけではない。例え魔物の姿は目に見えずとも、穏やかな空の中、その手は岸边すぐのところまで伸びている。

惚れ惚れするような青い空が広がる日には、みんな思わず空に漕ぎ出したくなるものだ。決して大船でなくてもいい。小舟で少し漕ぎ出すだけでいい。暖かな日差しの下で、あたり一面の青い空に包まれながら、風を切って進む。その快感は何物にも代えがたい。浮遊大陸を外側から眺めて、生い茂る木々や、剥き出しになった岩肌、轟々と流れゆく滝を見て回るのもいい。アルビオンでの自然の魅力全てが詰まった空での一時……その魅力に憑りつかれる者は少なくない。だが、決して忘れてはいけない。この広いアルビオンの沖に漕ぎ出す舟は数あれど、そのいくつかは帰らぬということ。

穏やかに吹き抜ける風の中を、夢中になって遊びまわり、ふと気が付くといつの間にか舟が沖の方に流されている。遠くへ行き過ぎたと思つて、舟の進路を岸に向けてオールを漕いでも、なかなか前には進まない。進んだと思つても、時折吹き抜ける強い風が、舟を元の位置へと押し戻す。湧き上がってくる、じれったい思い。だがその思いはしばらくすると、焦りへと変わっていく。少しずつであれ進んでいると思つていた舟が、実は陸から遠ざかりつつあることに気が付くからだ。広大な空の中、遠く、小さくなつていく岸边。乗り手は腕の力を強めて、バタバタとオールを掻き動かす。しかし舟は戻らない。穏やかな風に吹かれているだけだというのに、必死になつて漕いでいるというのに、決して前には進まない。そんな時、舟はもう既に魔の手に落ちている。目に見えぬ風の大きな流れ、離岸風という空の魔物にとらわれているのだ。離岸風はただの風ではない。例え弱い風だと感じようとも、離岸風は全てを沖へと押し流す。なぜならその風は、風の精霊たちが宿つて吹く魔の風だからだ。

風の精霊は、沖から大陸へと吹き付ける風に乗つて、浮遊大陸にやつてくる。しかし風の精霊は移り気だ。大陸中が風の精霊たちで満ち溢れ窮屈になると、彼らはのびのびと動き回れる空へまた戻ろうと、岸から沖へ向かう大きな風の流れを作り出す。その風はとても強く、風メイジでなければトライアングルの唱えたフライであろうと、逆らつて進むことは難しい。だが離岸風に飲まれた者は、その恐ろしい流れの強さには気付けけない。それと言うのも、風の精霊たち

は大抵、人の気配を感じるとそれを避けて進むからだ。風の精霊に気に入られた生き物だけが、彼らを見て、彼らの声に耳を傾け、そして彼らに触れることが出来る。彼らの流れを感じることが出来る。逆の人々は、どれだけ沢山の精霊たちが自分たちの周りを取り囲み、彼らの乗る舟を押し流そうとしていても気付けない。舟を推す力がどれだけ強くても、肌を感じる風は穏やかそのものなんてことが起こる。

離岸風、それこそが穏やかな空に住まう恐ろしき魔物の正体である。小舟程度では、それに逆らって進むことは敵わない。舟の漕ぎ手が諦めず、力を尽くしたところでその流れからは抜け出せない。やがて疲弊した漕ぎ手とともに、舟は遙か遠くへと流されていく。そして岸辺から眺めると、舟はどこまでも青い空の中へ吸い込まれていくかのように姿を消す。そうだったが最後、舟は二度と戻らない。

アルビオンでは年に何万件もの風難事故が起きているが、離岸風による死者の数は、嵐による被害者数と空の幻獣による被害者数を足した数よりも大きいという。だから、アルビオンの空の中にある時は、決して忘れてはいけない。どれだけ穏やかな空の中にも、そこには魔物が住んでいるのだということを……

「迷信ですが、流された人は風の精霊たちによって、誰も知らない彼らの住処へと連れていかれ、一生をそこで過ごすそうです。ですが、空に精霊の住処があるなど馬鹿げています。風はあまねく偏在する。止まることなく、至る所へと動き回るのが風の本質ですから、人が暮らしていけるような彼らの住処などありません。ですから沖に流された舟はきつと、どこかで風石が尽きて、地上へと落ちていくのでしょうね」

カリーヌはそう話を締めくくった。

.....

「いや！ いやあああああ！ 助けて！ 誰か助けて!!」

「ルイズ様」

「いや！ いやよ！ こんなところで死ぬのはいや！ 誰か、誰か助けて！」

「ルイズ様！」

「ワルド！ ワルドはどこ?! ギーシユは？ それにキュルケだつて！

そうよタバサだわ！ 彼女の風竜に乗せてもらえば、無事に陸地まで送り届けて貰えるはずよ！

みんな、どこにいるの……?! 私はここよっ！」

ルイズは、声を枯らさんばかりに必死に叫んだ。しかし彼女の悲痛な声は、空の青さの中へと吸い込まれるように消えていくばかりだった。

「まさか、こんなことになるとは…… ザンネンです」

「いやあああ！ 助けてえええ！ エレオノール姉さま！ ちいねえさま！ お父さま！ お母さま!!」

返ってくる音もなく、誰にも言葉が届くことはない。空には誰もいないし、何も無い。ルイズはこの時、空に浮かぶ舟はのどかなものであるばかりでなく、外界から切り離されたとても孤独な存在であることに気付かされた。

「なんで、なんでよ……！ 私にはやらなきゃいけないことがあるのに……！」

ルイズは顔をくしゃくしゃにして、涙を流しながら俯いた。

「……運が良ければ、他の船に見つけてもらえるかもしれない」

魔王の言葉に、ルイズはグスツと鼻をすすってから返事した。

「でもこんな広い空の中、私たちの小さな舟なんて見つかりっこないわ」

「だから運が良ければなのです。それに、もしかしたらまた風の流れが変わって

岸に近づくかもっ。」

「運が良ければ？」

「ええ、運が良ければ」

「ああ、なんてことなの……！」

魔王の言葉を聞いて、ルイズの気分はさらに重く沈み込んだ。しかし嘆き叫ぶ元気すら無くなるようなどうしようもない現状は、彼女に

僅かばかりの冷静さを取り戻させました。

「……ごめんなさい。取り乱したわ。今は出来ることをやるしかないわよね」

「その通りです。まずは現状把握といきましょうか。ショージキ、あまり聞きたくはないのですが、この舟に積まれた風石はあとどれくらい持つでしょうか？」

「積み荷にもよるけど、この手の舟は半日ぐらいは浮いていられるものよ。けれどいくら軽くしても、まず一日とは持たないでしょうね」
その答えに、聞いた魔王も言ったルイズも表情を暗くした。

「となると、少しでもこの舟をもたせるには、荷を軽くするしかありませんな」

「そうね。重いものは、思い切って捨てないといけないわ」

「けれどこの舟に、積み荷というほどのものは載っておりませんぞ」

「いいえ、私たちの持ち物も馬鹿にはならないわ。金属で出来たものなんて、特に重たいでしょうもの」

ルイズの意図するところを察し、魔王は思わず空を仰ぎ見、そして項垂れた。

「私たちの命が掛かっているんだもの。覚悟を決めて頂戴」

「そんな…… いや、しかし…… ハア……」

魔王は意気消沈した様子で言った。

「まさか、これを手放さなければならぬ時が来るとは…… ですが、確かにルイズ様のおっしゃる通り、命には代えられません。大変、いやホントーに大変惜しいことではありますが、このダイジなダイジなデルフなんちゃらを手放すことと致しましょう！」

「いや、ツルハシもよ」

「ハッハッハ、ご冗談をー」

「いや、冗談でも何でもないんだけど」

「またまた御冗談をー」

しばらくは笑っていた魔王だったが、やがてルイズの本気を察すると、絶叫した。

「アバババババ！ ジョーダンじゃありません！ ツルハシが無かつ

たら、何も始まらないじゃないですか！ 世界征服の道のりは、まだ始まったばかりなのですぞ!？」

「要するに、ツルハシを持っていて始まるものなんて、ロクでもないことに決まってるってことよね。捨てましょう」

ルイズの判断に、魔王は強硬に抵抗した。

「キョヒです。断固、抗議いたします！ ゼツタイ反対、何が何でも阻止します！ 貴族政治の暴虐を許さない!! それを捨てるなんてとんでもない!！」

ルイズは、しばらく考え込んでから答えた。

「そう…… それもそうね。確かにツルハシは大事な道具だし、私だって捨てるのは惜しいわ」

「ええ、そうでしょう、そうでしょうとも！ ルイズ様にも分かって頂けましたか？」

「ええ、そうよ。よくよく冷静に考えてみれば、他に捨てるものがあったんだわ。私ったら、何で気が付かなかったのかしら？」

軽く首をかしげるルイズに合わせて、魔王も首を傾げた。

「ほう、そんなお荷物があるのですか？」

「ええ、そうなのよ。しかも、ツルハシよりずっと重いの」

「それはケッコウなことですな。ではすぐに捨てましょう！ 魔界でも善はいそげと…… いや、マチガイました。悪は急げと言いますしな。悪事は拙速を尊ぶのです。警察にも捕まり難くなりますし…… それで、どんな荷物なのですか？」

「その荷物はね、ツルハシと違って全然役に立たないのよ。絶えずかしましく物音を立てては持ち主を困らせ、煩わせ、そして挙句には持ち主に危機をもたらそうとするの」

「はて？ そんなウルサイ荷物、この剣以外にあつたでしょうか？」

「ええ、あるの。それも、私の目の前にね。その、大きな大きなお荷物が……!！」

語気を強めたルイズに詰め寄られ、魔王は言葉を詰まらせた。

「あんた、ツルハシの代わりに捨てられとく?」

「……謹んで、ごエンリョいたします」

魔王はガツクリと項垂れた。

魔王は力ない手つきで、ローブの下に仕舞い込んでいた重たいツルハシを取り出した。

彼はそれをすぐには捨てず、名残惜しむかのようにじっと見つめていた。その姿に魔王の葛藤を見たルイズは、釣られるように自らも悲しい気持ちさがこみ上げて来たが、それをぐっところえて彼に語り掛けた。

「……あなたの気持ちは分かるけど、これは必要なことなのよ。もし私にもワルドのような力があれば、杖一つでこの舟もどうにかなったんでしょけど…… 今やそのツルハシは、私にとっての杖と同じで役に立たないわ。むしろその重さで、私たちの首を絞めているの。仕方がないことだと、受け入れるしかないのよ。だって、命がかかっているんですもの」

そうやって声を掛けられても、魔王はじっとツルハシを見つめ続けていた。ルイズは、もう彼をそつとしておいてやることにした。魔王のあまりに痛々しい様子に、彼女にも迷いが生じたのだ。

確かに、重たいツルハシを捨てるのが遅ければ、それだけ舟が沈むのも早くなるだろう。だが、それが一体何だというのか？ 岸辺近くにいるならともかく、こんな沖合まで流されている。これでは誰かに救助されるのも絶望的だろう。最後の一時ぐらい、自分と共にあった道具を傍に置いていてもいいのではないか？ ルイズはそう思いを巡らしながら、自分の大事にしている杖を取り出して、まじまじとそれを見つめた。

お父様とお母様から頂いた、大切な杖。結局、こいつが私の期待に応えてくれることは無かったけれど、それでも私にとっては大事なものであったわ。最近はあまり構ってあげることが出来なかったわね。

ルイズは心の中でそう語りかけながら、ローブの端で杖を磨いてやった。杖の表面はつやつやと光り、美しい木目がルイズの心を慰めた。ルイズは思った。あいつにとってツルハシは、私にとってのこれ

のように大事なものだっただろうかと……

「コレです」

魔王が不意に口を開いた。その目は未だ、手にしたツルハシにしっかりと注がれていた。

「コレならいける、いやコレを使うしかないのです。ルイズ様！」

ルイズはボケつと魔王を見つめながら思った。ああ、こいつも恐怖のあまり、頭がおかしくなったのかしら。ツルハシをどう使おうが、舟はどうにもならないというのに……

「コレを使つて、舟を動かすのです！」

「いいこと、魔王」

ルイズは、諭すように語りかけた。

「いくらそのツルハシがすごいからって、空を掘つて何になるの？
いくらそれを振り回したって、舟は前へと進まないのよ！」

「そうじゃアリマセン！」

魔王は叫んで返した。

「いいですか？ ルイズ様のお力を使えば、例え腕力が無くたって、このツルハシをぶんぶん振り回せます！」

「だから何よ」

「だから、このツルハシにこの舟のオールを括り付けてですね……！」

ルイズは、思わず立ち上がった。舟がぐわんと揺れる。

「ロープがそこに置いてあるわ！」

「ええ、これを使いましょう！……やや、このオール、船べりに金具で括りつけられていて、ツルハシに結べません！」

「私がかすかすするわ。このオールの端をしっかりと持ち持ってなさい！」

ルイズは、オールの支点となる船べりの金具に近付くと身を屈め、そこに杖を向けた。

「ウル・カーノ」

オールを繋ぎ止めていた固定具が、小さな爆発と共に砕け散った。心配されたオールも、どうにか傷付けずに取り外すことが出来たようだ。ルイズは自分の魔法の才能の無さを、この時ばかりは始祖に感謝した。

「これでいいわよね？　後はロープを使って括り付けるだけよ！」
「お任せくださいー！」

魔王はツルハシとオールの柄とを重ね合わせると、ぐるぐるとロープを巻き付け始めた。ツルハシの柄の端から端までを2重3重にぐるぐるとロープで縛り付ける。やがてツルハシとオールは、しっかりと結び付いた一本の道具となった。

「貸しなさいー！」

はやる気持ちを抑えつつ、ルイズはオールを携えて船尾に向かった。そしてツルハシを振るうことを意識して、そのオールを動かし始めた。

「おお、おおう!!」

魔王が歓声を上げた。オールはバタバタバタバタと、普通に漕いでいたらあり得ないような速度で、風を掻き分け始めた。舟の急発進に、思わずルイズがよろめく。

「マチガイありません！　進んでいます！　これは進んでいますぞ！」

舟は、これまでが嘘であるかのようにぐんぐん速さを増していく。やがて舟は、ハルケギニア世界ではまだ当分発明されることがないであろう、モーターボートのごとき速さで突っ走り始めた。

「イヤツフウ~~~~!!」

異様にテンションが高くなって、変な叫び声を上げ始めた魔王を尻目に、ルイズは安堵のあまり胸を撫で下ろし、その場に座り込んでしまった。

「本当に……　良かった……！」

ルイズは再び涙を流していた。でもその顔は笑っていた。岸部がだんだんと近くに見えて来るのがわかる。ルイズは目を擦って涙を拭くと、魔王に声を掛けた。

「ねえあんた。今まで酷いこと言ったりして悪かったわ。あなたのおかげで私の命も助かったわ」

「いえいえ、使い魔としてトーゼンのことをしたまでです！」

魔王は誇らしげにそう言った。

「始め、あんたが召喚された時はとんだ外れを引いたものだと思って
いたけれど……

私が間違っていたわ。あんたは最高の使い魔「アツ！」
舟ががくと揺れた。

「え!?!」

猛スピードで進んでいた舟がみるみる失速していく。

「なに!?! 一体何が起きたのよ!?!」

ルイズが慌てて船尾を振り返った。

「オールがないわっ!」

ルイズが慌てて舟から身を乗り出して見ると、ツルハシの先の縄が
緩んですっぽ抜けたオールが、きれいな放物線を描きながら空の下へ
と落ちていくのが見えた。オールは、ものの数秒でルイズの視界から
消え去った。後には解けたロープと、空しくぶんぶんと震えるツルハ
シだけが残されていた。

「……」

「ダ、ダイジョーブ! オールならまだもう一本あります!」

魔王は冷や汗をかきながら、船体に残されたもう一本のオールを指
差した。

ルイズは、深い深いため息を付いた。

「……」

「それ、本当に大丈夫なんでしょうね!?!」

「ハイ、今回はホントーに強くギツチギチに縛っております。

これでもう、ゼツタイにすっぽ抜けることはあり得ませんな!」

「これでもし失敗したら、今度こそ私たちオシマイなのよ?」

「そこるところ、ちゃんと分かっているでしょうね」

「モチロンです! 私だって死にたくはありませんとも」

ルイズは魔王をじつと睨み付けた。魔王も視線を逸らさずに、その
赤い瞳でルイズを見返し続けた。

「……ならいいのよ。じゃあ、今度こそ上陸するわよ」

ルイズはそう言うと、ゆつくりとツルハシを振るい始め、だんだん
とその動きを速めていった。

やがてオールは、バラバラと風を切る音を立て始めた。それと一緒に舟も、前へ前へと加速していく。

「……」

ルイズは先ほどのこともあり、オールを注視し続けた。彼女の緊張は、岸边近くに舟が至るまで解けることはなかった。

……

つい先ほどまではあんなに遠くに見えた岸边も、あと十数メートルを残すのみというところになって、ようやくルイズは胸を撫で下ろした。

「魔王、あなたの欠点は詰めが甘いことね。私に相応しい立派な使い魔になるためにも、

そこるところよく理解しておきなさい！」

「いやマツタク、面目ありません。ですが、ルイズ様」

「何よ」

「確か使い魔って、主とお似合いのものが呼ばれるんでしたよね」

「そうだけど、それが何よ」

「いえいえ、お互い詰めの甘さには気を付けましょうということですよ。

最強のダンジョンが出来たと思って調子ブツこいてたら、

わずかなミスですべてが崩壊するなんてことは珍しくはありませんからな」

「ふん、誰にもものを言ってるつもり？ 私ほ栄えあるヴァリエール家が三女」バキィッ！

大きな物音に驚いた二人が後ろを振り向くと、そこには折れた木の棒を括りつけられたままに、

高速で震えるツルハシの姿があった。ルイズが慌てて身を乗り出してみると、これまたきれいな放物線を描きながら、持ち手の先を無くしたオールが落下していくところであった。オールは、下へ下へと吸い込まれていくかのように消えていった。

二二

ルイズも魔王も口をあんどりと開けて、もう何も見えなくなった眼下の空を凝視し続けた。

風がビュウと吹いた。船が上下に揺れる。その風の一吹きで、舟はまた岸へとゆっくり押し返され始めた。岸までは、とてもジャンプして届く距離ではない。これが水の上ならば、ほんの一泳ぎすれば届くというのに、たったの数マイルが今はとても遠い。

「終わった……完全に、終わったわ……」

ルイズはぐるぐると目眩がするような感覚と共に足の力が抜け、舟底に膝をついた。今の彼女は、心の隅から隅までが虚脱感で満たされ、もはや涙すら出ない。ルイズは疲れきって目を閉じた。頭の中に、どうでもいい記憶が次々と浮かんでくる。ああ、これが走馬灯かと、ルイズはボロボロになった心の内で呟いた。

僕の可愛いルイズ…… お願い、あなただけが頼りなの！ ホゲェー!!! …… やっぱりあんたつてゼロね。 青銅のギーシユ、いざ参る！ 知らない。 杖に己が誇りと名誉を誓うのじゃ……

ツルハシって、カツコイイ！ あんた、よくそんな趣味の悪い奴を呼んだものね。お嬢様も不憫だ。あの方だけ魔法がお出来にならない。

見て、あの方がヴァリエール家の三女ですって！ クックベリーパイをお持ちしました。 そもそも、ものが燃えるという現象は目に見えぬ程小さな熱素という粒が周りの物質から移動し、風こそが最強だ！ 貧弱、貧弱ウ！なコケでも積もれば山となるんです マモノが

住んでいる空のアルビオンの果てに船はウインボドナの港にウエールズ王子は手紙を持って、追い詰めた貴族派がトリステインを火の海に変え、破壊神によって世界は滅ぼされる運命の元に使い魔は高笑いしながら土に潜りヴェルダンディ！僕の可愛いヴェルダンディ！ドバドバミミズはいっぱい食べたかい？……って何でそのガジガジムシを食べてるんだ！気持ち悪いじゃないか！いくらでも土を掘れるなんてどうなってるんだい。僕じゃ十数マイルも掘れば上々さ。そんな魔法力は物の理に反した素晴らしいもので、まさに奇跡の御業と言えます。作用反作用の理からして、ああ今言ったのは要するにものを押すと、押した方は反対側に押し返されて動くわけです。ですからレビテーションで浮かび上がったもの同士が押し合えば互いに反対の方向へ動くのです。この原理を利用し、船から荷を一方方向に捨て

続けることで、何とか岸边に辿り着くことが出来たという話がこれが始祖の啓示ねこれだわこれこそが私が助かる唯一の道にしてマガマガしき悪を葬り去る一石二鳥の使命で行動あるのみ諦めずにやるのよルイズ手遅れになる前にやるのよ押せば必ず船は反対方向に向かつて動くものこの手を前に突き出して思いつきり突き飛ばせば舟も岸边に向かうに間違いのないわ今こそ泥臭いツルハシの呪縛から逃れてこの心の虚無に飲み込まれ……

「ルイズ様！」

「へ？」

ぼんやりとした頭で、ルイズは言葉を発した。頭が靄に包まれたように、どうにもならない。

「ほら、ここまで近いのであれば、このツルハシをブーンヒョイ！つと陸地にやってですね」

「私はレビテーションを使えないの。だってゼロだもの」

「何をネボケているのですか！ 魔法なんぞ使えなくてもブン投げればよいのです。」

このロープを縛り付けたツルハシを思いつきり投げて、岸边にザクツと突き立てる。

たったそれだけです。後は、ロープを少しづつ引つ張って、舟を岸边に寄せていく。

要するに、カギ縄の要領ですな」

ルイズの頭は働いていなかったが、魔王に急かされるままに彼女はツルハシを手に取り、**力**を込めてぶんと振るった。十分に勢いをついたツルハシは、くるくると回りながら宙を飛んだ。ロープがピンと伸びたところで、ツルハシは急速に地上へと落ちていく。そして岸边の方から聞きなれた、ガタリという地面を掘る音が響いた。

「さあ、後は引つ張るだけです！」

.....

……まだ足元がふわふわと浮かんでいるような気がする。ここが浮遊大陸の上だから？ いや、そんなことはないわね。大陸は大きいものだから、舟に揺られるように地面が揺れ動くことなどあり得ないも

の。そんなものは、舟で揺られ続けたことによる錯覚よ……

ルイズは、ついに願い叶ってアルビオンに降り立ったというのに、未だ自分の立っている場所がひっくり返るのではないかという浮遊感が抜けなかった。

「いやはや、今日の出来事はイイ教訓になりましたな」

ルイズは、自分がこんなにも疲れ果てているのにケロッとしている魔王を恨めし気に見つめた。

「どんなに苦しい状況、どんなに諦めたくなるような境遇に陥っても、決して忘れてはイケナイものがある。大事にしなくてはならないモノがある。そのことが身に染みてよく分かりました。ルイズ様も、分かりましたよね？」

魔王のきらきらとした瞳に本気でウザイと思いつながら、ルイズはぼそりと答えを返した。

「諦めない心」「ツルハシですっ！ 挫けない心？ 何度でも立ち上がる勇氣!？」

ハッ！ そんなものリセットボタンのない世界ではツーヨーしないのです！

やはり持つべきものはツルハシです。ツルハシこそが世界を救う、いやホロぼすのです！

無人島に一つ持っていくとしたら？ その答えはツルハシ！ キレイな飲み水を確保するのに

必要な道具は？ その答えもやっぱりツルハシ！ そもそも漂流とかしないために必要なのは？

やっぱりツルハシ！ ツルハシ!! ツルハシなのです!!!

生命、宇宙、そして万物についての究極の疑問の答えは？ ……

やっぱりツルハシ！

そう、それこそがこの世界の真実だったのです！」

悟りきったような柔和な笑みを浮かべる魔王へ、ルイズは言った。

「もう一つ、重要な真実があるわ」

「オオ、なんとルイズ様は、私よりももっと深い智慧を会得なさったというのですか？ やはり破壊神様は持っているモノがチガイしますな。

して、その真実とは？」

魔王は目を輝かせて、ルイズの答えを待った。

「それはね…… あんたを信用しちやいけないってことよ！ イル・ウインデ!!」

「フゲエエエッ！」

ルイズによる咄嗟の爆裂魔法は、大砲を放ったかのように魔王を大空へと弾き飛ばした。放物線を描いたボロキレのような魔王の影は、やがて木々の茂みの中に落ちて、パキパキと枝の折れる音を響かせた。再びの魔王の悲鳴と共に、野生動物のギャーギャーと鳴きわめく声がルイズの耳を楽しませた。

「なんでツルハシだけが召喚されなかったのかしら？」

ルイズは本気でそう思いながらも、腰にぶら下げていたコンパスを手に取り、方角を調べた。それから丁寧に折り畳んで仕舞っていた地図も取り出し、つぶさに眺め、おおよその現在地に目星を付けた。

「北があつちで、この形の岸辺がこの方向に伸びているから、多分こちらへんよね。今日中に着けそうかしら？」

森の方からは、今なお獣だか鳥だかのしきりに騒ぐ声が聞こえる。ルイズはふんふんと鼻歌を歌いながら歩き始めた。彼女はもうすっかりと普段の調子を取り戻し、しっかりとした足取りでアルビオンの大地を踏みしめていくのだった。

STAGE 33 この地下わが旅

ニューカッスルの野を、遠く大陸の外からやってきた冷たい風が吹き抜けていく。風は向かう先々で音を立てながら、生い茂る草を薙ぐように突き進む。やがて風は他の風とぶつかり合い、時に勢いを増して野を駆け抜け、時に行き場を失って舞い上がり、再び大空へと帰っていく。

風吹き荒ぶアルビオンの空は、その見た目までもが他所の空とは異なっている。ハルケギニア大陸の如何なる山よりも空高くに位置する浮遊大陸のアルビオンでは、薄い大気の中を進んだ太陽の光が空をどこよりも濃い青色に染め上げる。アルビオン・ブルーとも称されるその色は、空に吸い込まれそうな感覚を見る者に与え、アルビオンの自然が織りなす風景を際立たせる。

深く青い空と白亜の岩々が点在する草原、そしてそれらの間を行き交う絶え間無き風——これらがいつもの、変わる事なきニューカッスルの情景であった。

今まさに、この荒野を行く傭兵の一団があった。彼らが目指すは半島の先端に位置するニューカッスル城で、彼らはその城を前に布陣するアルビオン貴族派の軍勢に合流しようとしているのだった。

かつては広大な浮遊大陸全土に権勢を誇ったアルビオン王家も、貴族派と幾多の戦火を交えた末に、今や数少ない配下と共に一つの城に閉じこもるばかりとなっている。戦える船をことごとく奪われ、また陸路を5万の軍勢によつて塞がれた王党派は、ニューカッスル城の立地同様、まさに崖っぷちに立たされているのだった。貴族派があと一押しすれば、王党派は大陸から突き落とされ、この内乱に終止符が打たれる。そういう状況にあって、かの傭兵たちはまさにその最後の戦いに加わらんと、道を急いでいた。

「アルビオンでの稼ぎも、もうお終えか」

「まったく、もうちつと長続きするかと思つてたらこのザマだ」

だらだらと喋りながら道をゆく彼らを、目つきの鋭い初老の男が怒鳴りつけた。

「無駄口叩かず黙って急げ！」

「へいつ、首領！」

傭兵たちは一斉に返事した。

「いいかお前ら、今回の戦いはこれで最後でも、革命派の貴族連中とは長い付き合いでやってかなきゃならんのだ。それが金だけ貰って戦い間に合わねえなんてことになったらどうなると思う？ ええ？」

「大変なことになります！」

「分かってるなら、喋ってねえで急げ！」

「へいつ、首領！」

傭兵たちは大きく返事を返すも、その陰では方々に悪態をついていた。

「ケツ！ 誰のせいで遅れたと思ってるんだ」

「ホントだぜ。なにが、森の中にガキを攫えそうな村があるだ。何も見つからなかったじゃねえか」

貴族派の大軍勢にそのまま付き従ってニューカッスルに布陣しても、しばらくは睨み合いばかりで決戦が始まらないことに退屈していた首領は、『1か月後に総攻撃』の布告が出されるや否や、その僅かな期間を小遣い稼ぎに有効活用しようとしてニューカッスル周辺に繰り出しては略奪に精を出し、今、大慌てで陣地に戻ろうとしているのだ。

「高く売れそうな娘っ子がいるって話を聞いた時は、期待したんだがなあ……」

それにしても、首領シェフがガセネタつかむとは珍しい」

「あいつもいい加減、モウロクしてきたんじゃ「キヤーー！」」

悲鳴を聞きつけた傭兵たちは即座に立ち止まり、声の元へと振り向いた。彼らは、桃色の髪の乙女が慌てて逃げ去り、草むらの陰へと身を隠して消えるのをはつきりと見た。予想だにしないものを見た傭兵たちは、思わず顔を見合わせた。

「ガキだ」

「娘っ子じゃねえか」

「何でこんなところに？ 近くに村はねえぞ」

「どっかの隊が囲った中から、逃げ出したんじやねえか？」

「身なりもそこそこだったぜ。髪色も珍しいし、高く売れるんじやねえか？」

ガキを攫えば小遣いにはなりそうだが、今は先を急いでもいる。傭兵たちは指示を仰ぐべく、御者台にどっかりと腰かけた首領へと振り返った。首領は濁声で告げた。

「おめえら、何時も言ってるだろう。落ちてる金貨は、取られる前に拾えってな。すぐにかかれ！」

「へいつ、首領シユッフ！」

傭兵たちはわらわらと動き出した。

『これだから帰るのがギリギリになったんじやねえか』という思いを胸に仕舞いつつ……

「どこだピンク頭！ 逃げようたって無駄だぜ！」

「お前ら、相手は小さいガキだ。足元をよく探せ！」

彼らはすぐにでも少女を見つけ出せると思っていたが、意外にも少女はうまく隠れたようですぐには見つからない。痲癩を起こした首領の声が野に響く。

「何やってんだ！ 早く連れてこい！」

降り注ぐ日差しの下、傭兵たちは汗ばみながら腰を落とし、草むら一つ一つに首を突っ込んで少女の姿を探す。それでも、一向に見つからない。

「うおおおっ！」

突如、叫び声が上がった。皆がその声に振り返るも、そこには誰の姿も見当たらない。何事かと、仲間の一人が大声で呼びかけた。

「どうした!?!」

「助けてくれ！」

傭兵たちは、やけに小さな声で返事が返ってきたことを訝しみつつも、仲間の姿を探しに向かった。すると彼らは、草の深く生えた野にいきなり、ぽっかりと大きな穴が開いているのを見つけた。助けを求めめる男は、その穴の中へと足を滑らせ、すっぽり埋まっていたのだ。

「助けてくれ！ 足を挫いた！」

「仕事前だったのに、何やってんだ！」

男は難なく助け出されたが、傭兵たちは穴の様子を見て唸った。

「おい、この穴、奥まで続いているぞ」

「あのガキ、ここに逃げ込んだんじゃねえか？」

「ちげえねえ。あの目立つピンク頭だ。外にいるなら、もう見つかってなきやおかしいだろ」

傭兵たちは手間が増えていくことにウンザリしながらも、穴の中を探索し始めた。穴はかなり深く長く続いているようで、傭兵たちは光明で暗い道を照らし出しながら先へと進んでいった。

「さっさと出てきやがれ、このチビナス！」

「おいおい、そんな風に脅かしちゃあ、ガキも怖がつてすぐ出てこねえだろ」

「ああん？ どっちにしたってひっ捕らえるんじゃねえか」

「分かってねえなあ。ここは逆に安心させるようにな、こう言うんだよ。ホラ、出ておいで。出てきてくれたら、おじさんが優しく……」

グヘヘヘヘ」

「なに笑ってんだ」

「バカやってないでとつとと探せ」

仲間の一人が諫めるも、結局傭兵たちは好き勝手喋りながら歩いていった。

「うげっ！ 水たまりだ。ズボンが濡れちまった」

「いや待て、こいつは……」

仲間の一人が慌てて、松明を地面に近付けた。緑色の液体がぐずぐずとぬかるみを作っている。

「うえっ！ 何だこりゃ」

「踏みつぶされてるが、スライムじゃねえか？ 他にも色々というかもしれないねえ。気を付けろ」

「そりゃ別にいいが、本当にこの穴にあのガキはいるのか？」

「ガキでもスライム程度に遅れは取らねえだろ」

弱いとはいえモンスターが出ると分かり、傭兵たちはその声に面倒

臭い思いを滲ませ始めた。そんな中、一行は道の分岐に出くわしたもののだから余計に不満は大きくなった。

「また面倒くせえことになったな」

「よし、俺らはごつちに決めた。おめえらはそつちにいけ」

一行はその場で二手に分かれ、先へと進んでいった。洞窟の中は歩きづらくなつていき、自然と傭兵たちの口数も減つていった。そうしてしばらく進んだところで、先頭を歩いていた一人が俄かに立ち止まった。

「なんか聞こえねえか？ 羽音みたいだぜ」

彼らは腰に帯びた剣をそつと抜き、その場でじつと息を潜めた。羽音は段々と大きくなっていく。そしてついに、道の曲がり角から真つ赤で巨大なムシがブンと現れたところで、彼らは一斉にムシに飛びかかった。ムシはしばらくあごをガジガジと動かしながら暴れまわつたが、やがて身を何本もの小剣に引き裂かれ、砕け散つた。

魔物を手際よく倒したはいいものの、傭兵たちの顔は引きつっていた。

「おいおい、なんてでけえ虫だ！ なかなか見ねえぞ、こんなのは……！」

「それより不味いぞ。スライム程度ならまだしも、こんなのが出るような穴蔵じゃあ、あの娘つ子食われてるんじゃないやねえか？」

「見つけた時にや良くて傷物、悪けりや生ゴミだな。やってらんねえ。ええい、止めだ！ 帰ろうぜ」

先頭を歩いていた男は本当に引き返すのかと、後ろの仲間を振り返る。その時、暗い闇の中で何かきらりと光った。

「おい、今何か「クワアアアアア!!」」

仲間が話し終えるよりも前に叫び声が響きわたり、道の先からトカゲ型の亜人が飛び出してきた。亜人は、剣を前に向けた姿勢のまま、猛烈な勢いで男に駆け寄ってくる。

「クワアアアア!!」

「よつとー」

トカゲおとこに刺されるすんでのところ、狙われた傭兵は足を軽やかに動かし、突進を躲した。そしてトカゲおとこが立ち止まれずに彼の横を通り過ぎたところで、その背後から小剣を振るった。トカゲおとこの悲痛な鳴き声上がる。

「かかれ！」

傭兵たちに囲まれたトカゲおとこは多勢に無勢、あつと言う間に傭兵たちの剣で刺し貫かれ、血だらけになりながら地面に倒れ伏した。「クソっ！ いよいよダメだ。こんな魔物の出る場所に入り込んだガキが生きていけるわけねえ」

「こんな魔物どもの相手をしたんじゃしようがねえ。急いで引き返すぞ」

傭兵たちはやれやれとため息を付きながら回れ右して、来た道を引き返し始めた。そうして、松明に照らされたほの暗い道をしばらく歩いたところで、彼らははつと息を飲んだ。松明に照らされた道の先に、闇に溶け込むようにして何かが立っていた。

「野郎ども、構えろ！」

剣を抜いて身構える彼らの前に、それはぬつと姿を現した。松明に照らし出されてなお暗いグレーの体色に、まるで大熊のような巨軀を持つ魔物が、彼らに向けてのそのそと近づいて来ていた。

「まさかサイクロプスかあ?！」

松明を高く掲げ、魔物の姿をよく見ようとした男が、驚いて後ずさり、そのまま尻餅をついた。マモノの顔には、大きな目玉が一つだけついていた。そしてその目玉は、傭兵たちにジツトリとした視線を送り、彼らに薄ら寒くなるような思いを起こさせた。

「ひ、怯むんじゃねえ！ 例えあれが噂に聞く凶暴な人食い亜人だとしてもだ、あの巨体に道を塞がれたままじゃあ、逃げ帰る訳にもいかねえんだ。皆でかかって倒してやれ。行けえ！」

「うらああああ!!！」

傭兵たちは、湧き上がる本能的な恐怖を抑え込んで、その巨大なマモノに喰らい付いていった。ところが、魔物は大して堪えた様子も見せずに、不気味な瞳で彼らを見つめ返している。魔物はむんずと腕を

振り上げると、目の前に立っている傭兵にビタンと叩き付けた。

「ウゝア……」

攻撃を食らって叩き潰された男たちは、次々にその場に倒れていった。だが魔物は止まらず、もう立ち上がれそうにもない男たちに向かつて、2度、3度とその太い腕を振り下ろし続けていく。男たちはすぐに、ぴくりとも動かなくなった。

それを見た他の傭兵たちの間に、恐怖が伝染した。彼らは悟ってしまった。遅かれ早かれ自分もあなるのだと…… この悪魔を前にして、自分たちは捧げられた生贄に過ぎないのだと……

「うわああああああ!!!」

遠く発せられた悲鳴は、別の道へと進んでいった傭兵仲間の耳にも届いた。だが彼らに、それを気にする余裕は無かった。

「このクソトカゲめっ!」

「盾を下げるな!」

「戦列を乱すんじゃねえ!」

彼らも道を進んだところではったりとコケ・ムシ・トカゲの大集団と出くわしてしまい、思わぬ戦いを強いられていたのだ。絶えず剣を突き出してくるトカゲおとこたちだけでも危険極まりないというのに、少し気を抜けばすぐ頭の上を巨大なガジガジするムシが掠めていき、拳句足元にはスライムらしきマモノがまとわりついて、地味に体力を奪っていく。

もつとも傭兵たちもさるもので、彼らは互いに連携を取り合い、上手いこと種々の魔物たちを捌いてはいた。それでもこんな金にもならない戦いに命を張ることになって、彼らの士気はいやがおうにも下がらざるを得なかった。

「一体なんだってこんなところに魔窟があるんだ!」

「くそっ! この亜人ども、小生意気に盾まで持ってやがる!」

「このままやり合っても埒が明かねえ。少しずついいから後退するぞ!」

「このまま戦って命を落としてはたまらないと、彼らは戦いながらも

慎重に後ろへと退き始めた。そこへ突如として、洞窟の奥深くから耳をつんざく様な咆哮が響いた。

「ガアアアアア！ グウオオオオオ！」

傭兵たちに耳を塞いでいる余裕はなかった。なぜなら、咆哮と共に魔物たちの攻撃が勢いづいたからだ。何者かが雄叫びをあげて、難関を突破せよ、血路を開けとマモノたちに発破をかけているようであり、トカゲおとこの一撃はより重くなり、ムシやスライムもどきも活発に襲い掛かってくるようになった。

「後退停止！ ここで戦列が崩れたら不味い！」

「クソ！ 魔物どものボスでもいるのか!？」

傭兵たちは地下に反響する雄たけびとマモノの猛攻に必死で耐えながら、一匹ずつ相手を仕留めていった。長きに渡る咆哮は、ふつと糸が切れたように止んだ。それと同時に魔物たちの攻撃の手も緩くなったようだった。

「今だ！ 蹴散らしてやれ！」

それまで散々耐えてきた傭兵たちは、立場逆転とばかりにめいめいが雄たけびを上げ、マモノたちの首を、胴を、足を、滅多滅多に突き刺し、なぎ切り、倒しにかかった。その場にいるマモノたちはみると数を減らし、まばらになっていく。

「よし、このままいっちなまえ！」

「待て！ デカいのが、うあわあああああ!!」

道の奥の方から、突如として3メートル以上もの高さを誇る赤胴の人影が姿を現した。

「ありやなんだゴーレムか!？ クソツ、野良メイジが潜んでるってか!？」

彼らに驚いている暇はなかった。赤銅のゴーレム、ブロボは傭兵たちを見据えた途端に、猛烈な勢いで駆け出したからだ。ゴーレムの腕は、傭兵たちを血で染め上げんとばかりに、前へと伸ばされている。あの硬い腕に触れば最後、それだけで身体が弾け飛びかねない。

「無理だ！ あんなの耐えきれねえ!!」

ゴーレムの突進は、それまで傭兵たちが必死に固めてきた戦列をいともたやすく突き崩した。彼らはゴーレムに吹き飛ばされた仲間たちに構う暇もなく、戦列の空いた穴を埋めるように飛び込んだ。数々のマモノたちに攻め立てられていく。先ほどまで魔物を討伐していたはずの傭兵たちが、今となっては逆に、一人また一人と仲間を失っていく。ブロブの長い腕に薙ぎ払われ、足の速いトカゲおとこに追いかけて回され、足を止めて戦おうとすればムシにまとわりつかれ、もうどうする事も出来ない。

「この、くそがああああああ！」

残された者の大声がフロア内に響き渡り……

その後、二度と彼らが声を上げることは無かった。

……

「……遅えぞ！ あいつら何やってるんだ！」

すぐ戻ってくると思っていた子分たちが帰ってこない。業を煮やした傭兵団の首領は、自分の手元に僅かに残っていた手下達と共に、穴の内へと踏み込み込んでいった。

「オメエら、時間切れだ！ 何時までかけてやがる！」

大声で叫びにも、洞窟内からは声一つ返ってくることはなく、その後の深々とした静けさが際立つだけであった。シエフはツカツカと踏み込んでいき、前からブーンと飛んできた巨大なムシを切り捨てた後、もう一度声を張り上げた。

「聞こえねえのか、このボンクラども！ ……チツ、あいつらただけ奥に行ったんだ？」

「へえ、まったくで」

「これだから俺がいねえと、あいつらダメなんだ」

「まったくその通りでさあ」

首領は自信に満ちた足取りで真つすぐに道を進んでいった。

「あん？ 分かれ道か」

「二手に分かれたみたいですね。こっちの方が道も広いはず」

「ならそっちからだ。まったく手間かけさせやがって」

群れを成す緑色のスライムを踏みつぶしながら一行が進むと、しば

らくして足元からぽきりと音が響いた。足元を松明で照らした傭兵たちはぎよつとした。なぜなら、松明の光でうつすらと映し出された方々に、人骨が転がっていたからだ。

「何でえ、ここは！ 骨だらけじゃねえか」

「縁起でもねえ・・・さつさと進みましようぜ、首領」

「いや待て！ もつとよく照らしてみろ」

首領は近くに転がっていた骨のそばにしやがみ込み、つぶさに観察し始めた。

「特に金目のものは無さそうですね」

「そうじゃねえ」

首領は眉をひそませながら答えた。

「この骨はよう、新し過ぎる。まだ濡れてやがるぜ」

シェフはそう言つて、髑髏の内側を手でこすつて見せた。その指先には、赤い血のりがべつとりと付いていた。

「馬鹿な！ それじゃあこの骨は……！」

「黙つてろ！ さつさと引き上げるぞ」

首領は髑髏を置いて、その場から立ち上がった。その時、ぶんと風を切るような音が響いた。誰もが動く間もなく、気付いた時には首領の胸元に槍が生えていた。

「あ、ガあつ！」

「首領！」

「くそつ、何か隠れてやがった！」

手下たちが槍の飛んできた方に振り向くと、いつの間にもそこへ立っていたのか、槍を振りかぶる『女』の姿が見えた。その『女』は一糸もまとつておらず、ゲルマニア女のような褐色肌で胸もでかいという、妙に良い体付きをしていた。しかし傭兵たちが呑気に鼻の下を伸ばしていられるはずもなかった。なにせその『女』は体が地中から生えている魔物で、しかもその上半身だけで男どもの背丈以上はあるかという巨躯である。そんな体を大きく動かして、太く重い槍の投擲を繰り返してくるのだから、たまったものではない。

残された傭兵たちは、飛び来る槍の一撃一撃を必死に盾で凌ぎつ

つ、その女に近付いて行つた。

「このくそアマがああああ!!」

負けるものかと傭兵たちは盾を固く持ち、歯を食いしばって突進をかけた。すると槍女は鬼気迫る彼らの様子に恐れをなしてか、地面にすつぽりと潜り込み、その姿を隠してしまった。まるで水に潜るかのように姿を消したことに、傭兵たちは動揺を隠せず、狼狽えた。

「どれだけ力が強けりや、あんなふうに土に潜れるんだ?」

「これじゃ何時足元から襲ってくるか分からねえ」

「ええい、引つ込まれたんじやしようがねえ。こんな洞窟、さつさどずらかるぞ!」

彼らはいつ襲われるかと気が気でない中、地面を気にしつつ慎重に歩いた。まず3マイル歩く。何も無い。4マイル、何の動きもない。5マイル…… 幸い槍女は隠れることに徹しているようだった。

しかし、本当の脅威は彼らの背後から迫っていた。槍女の隠れた場所を少し離れてすぐ、彼らは穴の奥の方からキャツキャと騒ぐ甲高い声を聞いた。

まさか今更あのピンク髪のがキが現れたかと思つて彼らは振り返るも、そこで見たのは確かにピンク色ではあるが、ピンク色の服を着た浮遊する妖精たちの姿であった。彼女らは一斉に杖を振った。

マガマガしい光が放たれ、傭兵たちに迫り来る!

魔弾は雨あられと飛んできて、傭兵たちを薙ぎ倒していく。

成すすべなく倒れていく傭兵たちの悲鳴と、無邪気に笑う幼い子供のような声がダンジョン内にこだました……

ようへいたちを たおした!

「またまたお見事でした!」

パチパチと小刻みな拍手の音が魔王の青白い手から放たれた。

「いやはや魔法陣系のマモノの扱いも、ダイブ手慣れてきたカンジですな」

「そうかしら?」

「ええ、ルイズ様は着実に成長しておられますぞ。ブロボやアツシュレディといった心強い悪の仲間を得て、ダンジョンも安定してきたように感じます」

魔王の悪くない評に、しかしルイズはむっとした。

「何が悪の仲間よ。私は悪になつたつもりなんてないわ」

「そうなのですか？　しかし現にこうしてマモノひしめくダンジョンを掘り続けているではないですか」

ルイズは承服できないというように、大きくかぶりを振った。

「いいこと、魔王。私はただアルビオン王家に仇なす下劣な貴族派の手先を倒しただけよ。人の姿を見るなり攫おうとしてくる連中なんて、やっつけられて当然だわ」

「フム、まあそれはそうかも知れませんが」

「そうよ。だから、いわばこれは生か死かを賭しての栄光への戦いなの。邪悪なるもの、悪の化身を打ち倒さんと、立ちはだかる難敵に挑んだだけなのよ。敢然と立ち向かう勇氣ある戦いなんだから。私たちとハルケギニアの未来のために戦うという、ひるまぬ勇氣が成せるわざなのよ」

「ルイズ様の献身的なお働きというわけですね」

「そうよ！　だからね、例えば堀パワーを稼ぐためだけにあいつ等をここまで誘き寄せたのだとしても、それは正義の行いなよ！」

そう力強く語るルイズの顔には、自覚無くして黒い笑みが浮かんでいた。

魔王はフハハハと笑って、上機嫌に答えた。

「私もこの冒険の旅で勇者の挑戦を受けるのはヤブサカではありませんぞ。今回も堀パワー、しっかり獲得出来ましたかな？」

「バツチリよ。これまでに稼いだ分も合わせて、おもいつきり地下を掘り進めて行けるわ。善行を積んで堀パワーも貯まる。本当に一石二鳥ね」

「ルイズ様もやるようになってきたものですね」

魔王の言葉に、しかしルイズは渋面を作った。

「誰だっけこうもなるわよ！　アルビオンに上陸してから賊まがいの

傭兵に出くわすのがこれで何度目か分からないわ！　こうも襲われたんじゃ、私だって悪魔にもなるというものよ。もうあんな奴らをやつつけるのに、躊躇なんてしないんだから！」

熱を帯びたルイズの決意表明に、魔王はゴモットモですとあいずちを打った。

「いやまったくおつしやる通りですな。しかし、まあ、そのお陰でここまで素早く移動できたではないですか」

「まあ、それはそうなんだけどね」

魔王の言葉通り、ルイズたちは身一つでアルビオンに上陸したにも関わらず（いいえ、ツルハシもあります！）、馬にでも乗っているのかというほどの異例な速さでニューカスル城に到達しつつあった。なぜそんなことが可能になったのか？

答えはやつぱりツルハシだった。

ルイズがアルビオンに上陸して初めに遭遇した野盗を退けた時、魔王はこんなアドバイスをした。

『そうそうルイズ様、地下での移動はツルハシがおススメですぞ』

『は？　なんでですって？』

『だからいちいち歩くのではなくツルハシを使うのです。まずは目的の方向に沿って、地下をまっすぐに掘り進めるのです。そしてツルハシにぶら下がって、そのままビューンとツルハシを移動させます。いつものように△ボタンを押してから十字キーを押し続けばいいわけですな。そしてら速攻で端から端まで移動できますぞ』

かくして天啓を得たルイズは、少し歩くだけで野盗同然の傭兵とエンカウントする治安最悪状態のアルビオンで、彼らと遭遇する度にこれを撃滅、獲得した堀パワーで地下を掘り進めてはツルハシ高速移動することを繰り返し、圧倒的速さでニューカスル城を目指すことに成功していた。

初めの内は、ルイズにも傭兵と戦うことに抵抗感があり、なるべく戦わないようにしていた。倒した相手から奪った馬に乗れば、そのまま城の近くにまで行けるじゃないかと考えていた。

しかし、実際にそうしようとすると、すぐさま別の傭兵に出くわし

当然のごとくに襲われ乗馬どころではなくなることに業を煮やしたルイズは発想を転換、あえて地下から彼らのいる場所を見つけ出しては自分から接近し、地上に通じる穴を開けては彼らを誘き寄せるといふ手段を講じたことで、時間の無駄なくツルハシ高速移動を繰り返すサイクルを作り上げたのだった。

「とにかくあいづらがいけないんだから、これでいいのよ」

「いやまったくおっしやる通り、ルイズ様のご意向に反するニンゲンどもは悪いに決まっていますな。……フム　しかしそうになると、奴らを倒したワレワレは逆にイイコトをしているということに……？」

「だからそう言ってるんじゃない」

それを聞いて、魔王は困り果てたような顔をした。

「マズい、それはマズいですぞ、ルイズ様。　魔王軍ともあろうものがイイコトをしていたなんて世間に知られたら、悪の軍団として沽券こけんに
関わります」

「だ・か・ら、良いことをして何が悪いってのよー」

「良いことだから悪いのです！　……アレ？　良いことなのに悪いって、どういうことなのでしょう？」

「何であんたが迷ってるのよ」

あきれ顔のルイズを他所に、魔王は難しそうな顔をしながら考えた。

「ワレワレに逆らうニンゲンどもは悪い、倒されてトーゼンです。でもって、破壊神様とその忠実なるしもべの私もヤツパリ悪い。つまり悪いワレワレに逆らうニンゲンどもも悪い……？」

そこまで言ってから、魔王は気付きを得た。

「おお、分かりました。　つまり不正義の反対は、また別の不正義だったということですね。　我ながらスゴイことを悟ってしまいました……！　これならいくらでも安心してワルモノ同士の抗争ができるというものです」

「馬鹿言っていないで先を急ぐわよ」

「ああ、待ってください、ルイズ様」

ルイズは傭兵を振り返り討ちにすること幾たび、溜まりに溜まった堀パ

ワーを使って、ガツガツと地下を掘り進めた。

「どうです、ルイズ様？ 目算通り、城まで堀パワーはもちそうですかな？」

「大丈夫よ、そこに抜かりはないわ。途中で穴を掘れなくなつて地上の貴族派どもの陣地に顔を出すなんてマヌケな真似はしないわよ」

「それならば安心ですな」

そう言つて魔王が地下から地上を仰ぎ見た先には（これがワタクシ魔王と破壊神様だけに見える世界なのです！）、貴族派の大軍勢が無数にひしめいていた。

「フッフ、まったくいい気味ですな。いくらあやつらがゴマンという兵士で地上を固め、コケ一匹通さぬ陣地を築き上げていたのだとしても！ そのすぐ足元に広がる広大な大地の中は、ぜんぶルイズ様のテリトリーなのです。並み居る敵も何のその、カレーにスルー出来てしまふとは、破壊神さまさまですな」

ルイズは破壊神呼ばわりに嫌な顔をしながらも答えた。

「まあ、助かつてはいるわよ。地上から貴族派の目を盗んで城まで辿り着くのは難しかったでしょうね。それにしても、あんなに貴族派が大勢だなんて……」

ルイズはそう言うなり、俯いてしまった。地上を埋め尽くさんばかりに広がる圧倒的な軍勢…… それら全てが貴族派のものであることを思えば、対する王党派にいくら堅固な城が残されているといえども、それはあまりにも儚い備えであるように思われた。もはや王党派の辿るべき運命は決したようなものだということを、ルイズは悟らざるを得なかつた。

「アルビオン王家は、本当に風前の灯なのね」

ルイズは貴族派の軍勢を地下から見上げながら、そつと呟いた。やるせない気持ちになつてしばらく立ち竦んだ後、ルイズは再びツルハシを振るい始めた。そのツルハシ捌きは、心なしか先ほどより重くなっているようだった。

.....

「いよいよ間近に近付いてきましたな。あれがニューカツスルキャツ

スルですか。ウーム、歴史を感じさせる造りで大変スバラシイ。テンション上がってきました！」

「なに分かり難く言ってるのよ」

「でもルイズ様、ニューカッツルの城というのは、ニューはトモカクとして城と城がかぶってますぞ？　もうニューカッツルだけで十分なのではないでしょうか？」

「ニューカッツルは地名だからいいのよ。それにあの城も、もう新しい城ニューカッツルって感じじゃないわ」

それを聞いた魔王は納得したように大きく頷いた。

「ふむ、確かにそれもそうです。おや？　ということは、あの城を魔王城として

新築し直したらニュー・ニューカッツルキャッツルになるのでしょうか？」

「なんでアンタのものになること前提で言ってるのよ！」

遠目にも堅固で立派であったニューカッツルの城は、ルイズたちが近付くにつれ、その驚くべき偉容を明らかにしていった。迫りくる地上の敵を寄せ付けぬよう幾重にも配置された大砲と高くそびえる城壁もさることながら、真に驚くべきものはその地下にあった。ニューカッツル城はその地下に広い空間を設けており、なんとそこには港と船まであったのだ。

「えっ、なんであんなところに船着き場があるのよ」

「どうやら真下に向かって穴が伸びておるようすな」

「まさか、大陸の真下から行き来できるというの!?　すごいわ、こうやって王党派の人たちは隠れて動いているのね」

ルイズが感心すると同時に、魔王も唸り声を上げていた。

「ルイズ様」

「何よ」

「私、この城のこと、タイヘン気に入りました。この城を築いた者は口マンや地下のスバラしさをよくよく分かっていると見えます。船でおおぞらをとぶに飽き足らず、ヒミツの地下港まで設けるセンスはイカしてますな。私、改めて決心しました。ここを本拠たる魔王城と

して使い、ハルケギニア全土に魔の手を広げていくこととしましょう！ 幾多の勇者の挑戦を退け、そして伝説へ……！」

「あー、はいはい。良かったわね」

ルイズは魔王を適当にあしらいながら更に城へと近付いて行く。しばらく歩いて、魔王は再びルイズに話しかけた。

「あの一、ルイズ様」

「冗談ならもうお断りよ」

「イエ、それが、その…… もしかしたら私のカン違いかもしれませんが、ある意味ジョーダンみたいな話になってしまっているのですが……」

「何よ、そんな風に勿体ぶられたら気になるじゃない」

「あの港…… よくよく見て何か気付くことはありませんか？」

ルイズは首を傾げながらも、より細かな姿が見えてきた港をじっくり観察した。流石に地下の港ともなると、あまり多くの船を停めてはおけないようで、中型の船舶二隻のみが停泊所に繋がれていた。一隻はタールで黒く塗られた軍艦で、もう一隻は物資を運んできた商船のようであった。

ルイズは、んん？ と思つて、目をこすつて、もう一度船をよく見返してみた。見れば見るほどに、見覚えのある形をしている。

まさか…… いや、しかし同じ構造で造られた船なんて、いくらでもあるものだ。きつとラ・ロシエール発の船の中には、王党派と通じていたものもあったのだろう。

そう思つたルイズが一人納得しかけたところで、彼女はあるものを見つけ、声にならない悲鳴を上げた。その商船の船首には、航行中の安全を祈るために取り付けられるはずの彫像が無かった。いや、辛うじて彫像だった『何か』は残っていたが、それは粉々に砕け散った後であることを想起させるように、根元のみを残して無くなっていた。ルイズはもう一度船全体を見回して、その甲板から非常用のボートが失われているらしいことまで確認し、愕然とした。

「なによあれ！ 私たちの乗って来た船じゃない!!」

「やっぱりミマチガイではありませんでしたか」

「よくよく見たら、あの黒い船も私たちを襲つた空賊船じゃないの！」

「一体、どうなってるのよ!?!」

「ウーム…… ナニがナニヤラ、サッパリですな」

ルイズはしばらく取り乱した様子で地下の有様に目を泳がせていたが、やがて落ち着きを取り戻すと、猛然とツルハシを振るい城へと向かい始めた。

「ルイズ様!?! この状況、もうチョット慎重になった方がいいのでは!?!」

「それどころじゃないわ! ここにあの船があるってことは、きつとワルド様だつて!!」

それから彼女たちは、とにかく掘って掘って掘りまくって、城に近づいていった。

「!! いたわ!」

果たして、ワルドは地下にいた。鉄格子の張り巡らされた狭い地下の一室に、彼は随分とやつれた様子を醸し出しながら、その背を壁に預けて床に座っていた。ルイズはそれを見て、我慢出来ないとはかりにガンガン穴を掘り進めていき、ついにはその部屋へと道を繋いで乗り込んだ。

「ワルド!」

「うおうつ!!」

ワルドは独房の壁がいきなり崩れ去ったのを見て、大きく体をびくつかせた。目を真ん丸にして口を半開きにした彼は、やがてその穴から飛び出してきたものがルイズだと気付くと、再び驚きの声を上げるのだった。

「ルイズ! ルイズじゃあないか!」

「ワルド、無事だったのね! ねえワルド、船へ置き去りになんかしてごめんなさい。あの時は、なぜかああするのが一番良いと思ってしまったのよ」

「ああ、空賊に襲われた時の話かい? 気にしないでいいよ。僕はこの通り、まあ、ピンピンはしてないが、少なくとも五体満足で生きている。それよりも、よくぞ無事でいてくれたものだ。それにちやんとこの城に辿り着くなんて! 私はもう間に合わぬものかと、半ば諦め

かけていたのだよ」

嬉しそうに言うワルドへと、ルイズは困惑しながらも質問を投げ掛けた。

「ねえワルド、どうして空賊に囚われたはずのあなたがこの城にいるの？まさか、あなたがあいつらを全員やつつけたとか・・・？」

「いやいや、まさか！ さすがの僕も、あの状況で抗えはしないさ。あの船には、腕利きのメイジが揃いも揃っていたからね」

「じゃあ、一体何があったの？ 私、頭が混乱しそうよ」

ワルドは苦笑しながら言った。

「何のことはない。空賊たちなんていなかったんだ」

「え？ でも私たち、確かに襲われたじゃないの」

「うん。僕もすっかり騙されたが、違うんだ。あれは、空賊なんてものじゃなく、そのふりをして活動していたアルビオン王党派だったのだよ」

「なんですって！」

ルイズは、必死の思いで逃げ出した相手が、実は自分の追い求めるべき人たちであったという事実には、天を仰ぎたくなった。魔王は素知らぬ顔でわざとらしく口笛を吹き始めた。

「それじゃあ、まさか私たちの逃走は無駄だったってこと!？」

「うん、まあ、そういう側面もあるかもしれないが……一概にそうとも言い切れない」

ワルドはより一層苦々しい顔をした。

「すぐに王党派の根城に着いたのは良かったが、僕自身は王党派の諸君になかなか熱烈な歓迎を受けてね」

ルイズは、ワルドの体に生々しく残った殴る蹴るの痕を見て、顔を悲痛に歪ませた。

「私たちがいない間、何があったのよ？ トリステインからの使者を牢屋に放り込むなんて、王党派の方たちは一体どうしてしまったというの」

「いや、それは僕の失敗もあってね」

「あなたが失敗ですって？」

ワルドは罰の悪そうな顔をしながら、自らの置かれた状況を語った。

「実は僕は、彼らに貴族派の一味であると誤解されてしまったのだよ」「まあ、何てことなの！」

ルイズは驚きのあまり、口元に手を寄せた。

「ほら、あれだ。彼らは始め、空賊のふりをしていただけだろう？　そして彼らは船に乗り込んですぐ、積み荷である硫黄に目を付けた。そこで私は考えたのだよ。そのまま大人しくしていれば、良くて身包み剥がされて、誰かが身代金を払ってくれるまで解放を待つ他ないが……自分が貴族派のふりをすれば、どうにか切り抜けられるんじゃないかってね」

「恥知らずな貴族派のふりですって!?　なんでそんなことになるのよ！」

先ほどよりも一層驚いて目を真ん丸にしたルイズに、ワルドは恥ずかしそうにワケを語った。

「何も無策でそんなことを言ったわけではないさ。空賊というものは、船を襲ってさあお終いというものではない。彼らも、奪った品を自分たちで使うだけでなく、売り飛ばす相手がいてこそ成り立つ稼業なのだよ」

「空賊相手にものを買う人なんているのね」

ルイズは嘆かわしいとばかりに首を振った。

「全くだ。品位にもとる行為と言える。そしてその、まさにその盗品を買い取る相手が貴族派なのだよ。戦争には硫黄が山ほどいるから、誰も彼もそれを欲して止まない。だが今のこの情勢で王党派にものを売ることなんて出来ないから、必然的に空賊はその荷を貴族派に持つていくのだよ。まあ、王党派は追い詰められておらずとも、誇りが邪魔して空賊の荷を買いえんだろうがね」

「そういうことだったのね。じゃあワルド、あなたは空賊たちの

お得意様のふりをしようとしたわけね？」

「ああ、その通りだ。空賊も馬鹿じゃない。商売相手の貴族派に喧嘩を売れば、取引して貰えなくなるどころか、現役の軍艦で追い回され

ることを分かっている。だがら、僕の口車に乗った奴らは私を丁重に扱い、そして着港したら僕は悠々と彼らの元を離れ、王党派の元に向かうことが出来る。そう考えていたのだが…… 運命のいたずらか、彼らは王党派だったという訳さ」

「それは…… 運が無かったわね」

ルイズはそう言つて、ワルドの境遇に嘆息した。

「彼らが王党派だと分かった後で、事情があつたんだと明かすことは出来なかつたの？」

「言つたさ。言うだけ言つてはみたものの、案の定、信じて貰うことは出来なかつた。そもそも、滅亡寸前の王家に使者を送るといふ話自体が、そう易々と信じて貰えるものではない。妃殿下の手紙でも持つていれば話が違つたかもしれないが、あいにく僕はただの護衛に過ぎぬ。妃殿下から本物の信頼を受けた、大使である君のね。そういうわけで、結局僕はただの下劣な貴族派の手の者として、それはそれは手厚いもてなしを受けたという訳さ」

彼は、半ば投げやりな様子になつて話を終えると、自嘲とも憔悴ともつかぬため息を吐いた。

「だが、こうして後ろを向いてばかりもいられない。今や、僕の女神も来てくれたことだしな」

「な！ いきなり何を言うのよ、ワルド」

顔を赤くしたルイズに対し、ワルドは真剣な表情で語りかけた。

「いいかい、ルイズ。君の役割は重大だ。もはや僕一人の力では、王党派の皆に対して失つた信用を取り戻すことは出来ない。だが君は違う。君だけがアンリエツタ妃殿下から授かつた手紙を持ち、そして本物の大使として彼らの信用を勝ち取ることが出来る。そうすれば、全ての誤解が解け、僕もここから出ることが出来る」

ワルドは、ルイズが真剣な表情で彼の話に耳を傾けていることを見て取ると、彼女に指示を伝えようとした。

「これから君は、先ず城の外を見張っている衛士と接触を図つてだな

…… ム、誰か来たな」

「何をぐ（そぐ）そ喋っているー！」

ふいに、地下牢に面した通路から、大きな声が響き渡った。どうやら、見回りのため近付いて来た衛士が、遠耳にもルイズたちの話し声を察知したようである。だが幸いなことに、まだルイズたちがここに入り込んだことはばれていないらしい。

「マズいですよ、ルイズ様！　今ここでワレワレが見つかったら、私たちまで貴族派の手先と見なされてしまいます！」

「逃げるわよー！」

ルイズと魔王は、慌てて元来た穴に身をねじ込み、地下へと引き返した。魔王は一目散に引つ込んでいったが、ルイズだけは立ち去り際に一度だけワルドへ振り向いた。

「ワルド、必ずあなたを救い出すから待っていて！」

「いや、待つてくれルイズ！　僕も……！」

ワルドは、ルイズに何事かを頼もうとした。だが彼の呼び掛け空しく、先を急いで焦っていた彼女にその思いは届かなかった。ものの数秒もしない内に、一人の衛士が独房の前へと駆け付けてきた。彼は来て早速に、鋭い眼光でワルドを睨み付けた。

「何を一人で騒いでいる。大人しくしていろと言ったのをもう忘れたのか？」

この二枚舌野郎めっ！　貴様、このままここで意地を張って嘘を付き続けても、

良いことはないぞ。いい加減、素性を明かす気になったか？」

「違う！　何度も言っていることだが、僕はトリスティンからの使者で……」

「そのような与太話、信じるとても思っているのか！」

ワルドはうんざりした顔でぼやいた。

「本当なのだがなあ」

「これ以上、私に迷惑をかけさせるな！　次に騒いだら力づくでも黙って貰うぞ」

衛士はそう言い捨てた後にその場を切り上げようとして、ふと動きを止めた。何事かとワルドが疑問に思う間もなく、衛士は地獄の悪鬼の様な形相で、ふるふると震え始めた。

「杖を取り上げたからと思って油断しておれば……！」

キサマアーツ!! その穴、いつの間掘っていたっ!!」

牢の壁に穿てられた穴を指摘され、ワルドの顔色はサアーツと青く
なった。

「待てっ！ 誤解だっ！ 僕はやましいことなど何も……！」

「脱獄だっ！ 例の男が脱獄を企てたぞ！ みんな、早く来てくれ!!」

衛士は大声で応援を求めると、腰元に括り付けていたカギの束をガ
チャガチャとかき鳴らしながら、格子扉を開けにかかった。

「怪しい男だとは思っていたが、遂に馬脚を現したなっ！ このよう
な真似が出来るとは、やはり貴様、貴族派のスパイであったか！」

「違う！ 誤解だ！ 話を聞いて貰えば分かる！」

扉はあつと言う間に開け放たれ、ワルドはあれよあれよという間に、
床へと組み伏せられた。そこへ他の衛士たちも次々と駆けつけ、
彼を押さえ込んでいく。

「始め見た時から、こいつは怪しいと思っていたのだ。

何が衛士隊の隊長だ、この下賤の者めっ！」

「このグリフォンの刺繍が入ったマントを見てみる。こんなものまで
用意して、

他国の身分ある者を騙ろうとは貴族派の連中め、なんと卑劣なの
だ」

「いや待て、あるいはこいつがトリステインの貴族であるというのは
本当の話かもしれん。王党派が潰えると聞いて、今の内からレコン・
キスタに媚びを売りに来たのではないか？」

「なんと！ となるとこやつ、裏切り者か！」

アルビオン衛士らの穏やかならざる様子に、ワルドは戦々恐々とす
るしかない。彼らの中には誰もワルドを擁護する者はおらず、血気盛
んな若者どころか落ち着いた様子の老人までもが、彼を突き上げに掛
かる始末だった。

「これはねえ、やっぱり企んでますよ、この人は。顔見てご覧なさい。

目はつり上がってるしね、ヒゲがぼうっと浮いているでしょ。こ
れ、裏切り者の顔ですわ」

「うむ、パリー殿までそう仰るのなら間違いなからう。今度こそこやつを

本物の拷問にかけ、貴族派の秘密を洗いざらい吐かせてくれるわっ
!!」

ルイズはこの城に到着したが、本当に自分は助かるのであろうかと、ワルドは不安で一杯になった。

「ルイズッ、早く来てくれーっ!!」

「嫌いぞ！ その口、喋れなくしてやろうか？」

「そんなに騒ぎたいのか？ 喜べ！これから道具を使つて、嫌になるほど

叫ばせてやろうではないか！」

「ぬわー——ッ!!!」

地下深くにて発せられたワルドの悲鳴は、地上に向かい行くルイズたちに届くことなく、地中で掻き消えていくのだった。

STAGE 34 この紋章が目に入らぬか

落日の赤に染められたニューカッスルの城壁では、今日も王軍騎士がその上に立って見回り、貴族派の軍勢を監視していた。だが、そんな風に彼らが外へと目を光らせるのも、もう今日明日で最後となる。貴族派の軍勢は長きに渡る睨み合いを止め、ついに明日の正午から総攻撃に掛かることを王軍へ通告していた。この報せには同時に、命が惜しければ旗を翻す最後の機会である旨の文言も書き加えられてはいたが、王軍の皆はこれを一笑に付し、貴族派の奴らは未だに我らの反撃を恐れているらしいと嘲笑った。

戦場の慣例に則り攻撃の日時を知らせに来た貴族派ではあるが、王軍としては彼らが言葉通りに動くことを半ば信じられずにいた。なんせ貴族派はこれまでに、捕虜交換に見せかけた奇襲や会談の場での暗殺等、卑怯な手段を厭わなかった過去がある。その上、彼らへとその非を問えば、『それは騙されるほうが悪く、そのような者はアルビオンの統治者として不適格なのだ』とまで開き直るものだから、到底高潔な振舞いを期待出来る相手ではない。

故に、今日も騎士たちは相応の緊張感を以って敵陣を観察し、また草陰に隠れて密かに城へと近づく良からぬ者がいないか、目を凝らしていた。そうであるからして、城門の真ん前に突如として姿を現した少女とそれに付き従う珍妙な巫人の二人組は、たちどころに彼らの気付くところとなった。

「止まれ！」

「何奴だ！」

方々から怒号を浴び、また杖を向けられたルイズはそれだけで竦み上がり、もうこのまま失神したいとすら思ってしまった。

旗色が変わったのは、騎士たちの一団に見事な髭を蓄えた騎士が加わってからだだった。彼が片手を上げるとそれだけで血気に流行る者たちを黙らせた。どうやら、彼がここの見張りを取り仕切っているらしいと、ルイズは震えながらも当たりを付けた。かの騎士はルイズを訝しげにちらりと見た後、魔王に向けて声を張り上げた。

「既に、決戦の日時ならば伝え聞いておる。ならばもはや我らの間に言葉は要らず、後はただ杖を交えるばかりであろう。そのような時に、一体何をしに参ったというのだ」

ルイズは、自分たちが貴族派の伝令か何かと勘違いされたことに氣付いて顔を歪めた。また彼女にとっては、あろうことか主の自分を差し置いて使い魔が使者扱いされていることも癪に障る話であった。彼女は怒りでもって恐怖心を押し込め、何時もの彼女らしく堂々と口を開いた。

「失礼ね、こいつは私の使い魔よ！ それに私は、恥知らずの貴族派になんてなった覚えはないわ」

「それは失礼。しかしなおさら分かりませんな。そう言うあなたは一体何者なのですか？

「どうやって貴族派の軍勢を潜り抜けて来たかは知りませぬが、ここは子供の遊んで良い

場所ではありませぬぞ。今さら王党派に保護を求めにやって来たという訳でもありませんまい」

ルイズは、髭の騎士から胡乱な視線を向けられつつも、舐められるものかと胸を張り返した。

「子供扱いはお止しなさい！ 我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・

ヴァリエール！ この度、畏れ多くもトリステイン王国が誇る姫君、アンリエッタ殿下の

命を賜り、ウエールズ皇太子殿下に宛てた親書を届けに参ったわ。故に、あなたたち

には大使としての扱いを要求するわ！ さあ、早くこの門を開けて頂戴！」

強気なルイズの言葉を聞き終えたかの騎士たちは、眉をひそめた。

「このような滅亡寸前の我々に向け、大使とな？ よしんばそれが真であつても、その意図に皆目見当も付かぬ。不自然極まりない」

「用向きは既に伝えたはずよ。内容だつて、明かせないのは分かるでしょう？」

彼は困った顔をして、近くの仲間を呼び集めた。

「お前たち、あの娘の言葉をどう捉える？　この中に、ヴァリエール公に詳しい者はいないか？」

「確か公爵は金髪ではありませんでしたかな？　しかしあの娘は、派手なピンクブロンドですよ」

「いや待て。私は以前、ラグドリアン湖での遊園会の折に公爵にお会いしたが、そのご夫人はあのような髪色をしておったぞ。何とも気の強そうなお人であったから、公爵よりもよく覚えているぐらいだ」

「ふむ……してみると、あの娘の言葉は真であろうか？」

「いやしかし、髪の色ぐらいどうとでもなりましようぞ」

しばらく彼らは話し込んだ後、先の髭の騎士はフライの魔法で城壁の外に降りてくると、改めてルイズに話し掛けてきた。

「お主らが本当に大使であるというのなら、これは誠に失礼なことをした。しかし我々として、おいそれとその言葉を信じる訳にもいかぬ。何か大使としての証しとなるものを見せて頂こう」

「ここに妃殿下から預かった親書があるわ。ちゃんと封蝋に妃殿下の紋章も刻印されているから確かめてちょうだい」

「そのようなものいくらでも真似出来よう。当てにはならぬ」

ルイズは憤って言った。

「妃殿下が自らしたためた手紙よ？　これで駄目だというのなら、他に何かあるというの？」

騎士は首を振って答えた。

「確かに手紙の封に使われた魔法の痕跡から誰がしたためたものかを調べるすべはある。しかし我が国とトリステインとの間で交わされる文書は、もっぱらマリアンヌ太后殿下やマザリーニ枢機卿らの御名が使われているはず。その手紙の魔法の跡を探知したところで、それが妃殿下のものとは分からぬ」

「皇太子殿下ならばお分かりになると思うわ。お見せすることは出来ないかしら」

「すると、その手紙をお貸し頂くことになるが？」

「駄目よ！　これは妃殿下のお手紙なのよ。殿下に直接お渡しするま

で、誰の手にも預けられないわ」

「ならばここは通せぬ。他には何かないのか？」

どうしたものかとルイズが頭を悩ましたところで、魔王が彼女に小さく囁きかけた。

「ルイズ様、どうやらお困りのようですね。門番に道を塞がれてどうしても入ることができない。こういうときにどうすべきかというのは、実は相場が決まっております」

「どうすればいいのよ」

「指輪を使うのです」

「指輪を？」

「まあ別に指輪でなくてもいいのですが……」

魔王は彼の持つ叡知をルイズに伝授した。

「その間違いなく高く売れそうな指輪をですな、何気ない感じでその門番に握らせればアラ不思議、開けゴマとばかりに「あんたこそ牢に入るべきだったみたいね！」

ルイズは怒声と共に魔王を張り倒した。彼女の振るった手で、指輪がきらりと輝いた。

幸運なことに、髭の騎士はどうやらそれで彼女の手元に注目したらしかった。

「その指輪は？ 由緒深いものであれば、我々もそのような品々に関する記録を持っている。そなたがトリステイン王家に連なるヴァリエール家の者であることの証しとなろう」

ルイズはその指摘にはっとした。

「この指輪は私の道中の安全を祈って、姫殿下から私に預けられたものよ。きつとこれならば証しになると思うわ」

「良かろう。その宝玉の名を伺ってもよろしいか？」

「始祖の秘宝たる、水のルビーよ」

騎士は息を飲み、目を真ん丸にして驚いた。

「いや、そんなまさか……！ いやしかし、それが真であればまた面白い証しとなりましょうぞ。失礼とは存じますが、しばしその指輪、改めさせて頂いても？」

「皇太子殿下にお会いするためとあらば」

ルイズはそつと指から水のルビーを引き抜いた。髭の騎士はそれを直接手で触れぬよう、杖で浮かせて彼の持つシルクのハンカチへと包み込むと、大事そうに抱えた。そして城壁の上までフライを使って戻ると、周りの騎士たちに声を掛けた。

「私は急ぎこれを殿下の元まで検めに行く。お前たちはここで杖を下して待て！」

彼は風のメイジであつたらしく、杖を振るうと疾風のように城内へと駆け抜けていった。残された騎士たちは、まさか本当にトリストインからの使者であつたのかと興味深そうな視線をルイズたちに投げかけ、彼女にむず痒い思いをさせた。魔王は逆にふんぞり返って偉そうにしていた。

しばらくするとかの髭の騎士は、先と同じように急いで城門まで戻って来て、大声を張り上げた。

「開門用意！」

騎士たちの慌ただしい動きの後、ガラガラという重たい鎖の音を響かせながら、鉄の扉が上へと持ち上げられていった。

髭の騎士はルイズたちの元へ戻ってくると、うやうやしくお辞儀をした。

「大使殿、先ほどは大変失礼いたしました。どうぞお通り下され」

ルイズたちが髭の騎士に連れられて城壁の内側に入ると、そこには敬礼した姿勢で左右に立ち並ぶ騎士たちと、彼らの中央に堂々と歩む一人の青年の姿があつた。彼の手には水のルビーの指輪が載っており、また彼自身の指にも大きくて透き通るような、よく似た宝玉の指輪が嵌められていた。気のせいだろうか、ルイズには指輪を持つ彼の手元が虹のように輝いて見えた。

「よくぞ参られた、大使殿。私がアルビオン王国皇太子のウェールズ・テューダーだ」

ルイズは突然の皇太子御自らの出迎えに一瞬固まったが、すぐさまその場で膝を付いた。

一方、そのまま突っ立って不敵な笑みを浮かべ続けていた魔王は、

ルイズにローブの裾を引っ張られ、つんのめる様にして膝を付いた。「拜謁が叶い恐悦至極にございます、ウエールズ殿下。私はヴァリエール公爵が三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴアリエールと申す者です。そしてこちらはその使い魔にございます。この度はトリスティン王国のアンリエッタ王女の命を受け、ウエールズ殿下に宛てた手紙を送り届けるべく参りました」

「うむ、ご苦勞であったな。今の時期のアルビオンに来るのは大変であつたろう。また部下が失礼したようですまなかつた。だがこれも戦場ゆえのこと、ご容赦願いたい」

ルイズは恭しく返事を返した。

「どうぞ、お気になさらないで下さい。私たちも、それを承知でここを訪れたつもりです」

「大使殿の寛大な心に感謝する」

凜々しい金髪の彼は、そう言うとニコツと笑った。

「さあ、詳しいことは部屋の中で伺おうじゃあないか。あたりもだいぶ暗くなってきた。トリスティンから来た者には、ここアルビオンの夜風は身に凍みるだろう」

アルビオンの空を染め上げていた美しき茜色がくすんでいき、夜闇の中にすべて溶解消えるのは間もなくのことだった。

STAGE 35 戦術家になろう

アンリエッタからの便りをルイズから受け取った皇太子ウエルズは、中身に目を通すと一瞬険しい顔をした。しかし彼は、その様子を心配そうに見つめるルイズに気が付くと、すぐに笑顔を浮かべて件の手紙を返すことを彼女に約束した。

「事情は分かった。あの手紙は、私が何よりも大切にしてきたものはあるが、姫の望みは私の望みでもあるからな。もちろんお返ししよう。手紙を置いてある私の部屋までご足労願いたい」

「私共の要望をお聞き届け下さり、有難うございます。ですが殿下、実はもう一つ他にお願ひしなければならぬことがございます」

「何だね？」

「その、ここアルビオンに至る旅路を共にし、途中で離れ離れになってしまった私の護衛のことなのですが…… 色々な不運と誤解が重なり、今この城に囚われているようなのです」

「何だど？ 詳しく聞かせてくれたまえ」

ルイズの口から事情が伝えられると、皇子の一声によって、ワルドはすぐさま釈放された。そして彼は、ルイズたちと共にウエルズの居室へと向かうことに相成った。

.....

「いやはや子爵殿、君には随分と悪いことをしてしまったようだね！

だが、言い訳がましく聞こえてしまうかもしれないが、明日にも滅びようとしている我々に使者が送られてくるとも思えなくてね」

「殿下は悪くありません。私めが初めから素直に事情を話しておけば良かったまでのこと故、お気になさらないで下さい。むしろ私どもの方こそ、一行のまとまり無き振る舞いにて殿下に余計な手を煩わせてしまったことを申し訳なく思っております」

ワルドはそう言つてウエルズに頭を下げる傍ら、魔王の方をぎらりと睨み付けた。ルイズが船から立ち去ったことで、その身元を保証してくれる者がいなくなり投獄されたワルドは、どうやら彼女を唆した魔王に対し腹の虫が収まらないでいるらしかった。だがその視線

に気付かなかったウェールズは、ワルドの発言をもっぱら彼自身について述べたものと捉えたらしかった。

「うむ、貴族派の巢窟となったここアルビオンで、素直に王党派への使者と名乗れぬのも無理はない。だがしかし、子爵は本当に演技するのが上手いのだな。私もすっかり騙されてしまったよ。なにせあの船での子爵の口ぶりや態度と来たら、下賤な貴族派そのものであったからな。後で我々の正体を知った君の口から、トリステインの衛士隊長なのだと言う話を聞いた時も、君が祖国を売りに大陸を渡ったのだとしか思えなかったぞ。私には君が裏切者の目をしているように見えただよよ！」

「いやいや、私めの演技など、殿下の足元にも及びませぬ。殿下のあの船での立ち振る舞いは、とても王族とは思えぬ程に下品下劣で、粗野な空気に満ち満ちておりました。普通、貴い血の方が下々の者に扮しようとも、その気品の高さはなかなか隠しきれぬものではございます。しかし殿下の扮する空賊からは高貴さの欠片も漏れてこぬゆえ、中身まで見た目通りのものかと、私も騙されたのでございます。今でもあの空賊がアルビオンを統べる正統な権利を持つお方であるとは、到底信じらぬ思いでございます」

「君も言うではないか！ ハッハッハッハ！」

「そういう殿下こそ！ フッフッフッフ！」

二人とも、口で笑いながら目が笑ってはいない。ルイズは顔色を青くしながら、二人にどう声を掛けたものかと戸惑った。

「さて、冗談はこれぐらいにして君たちを我が居室に案内しようではないか」

「そうですね。これ以上やると、私の婚約者の心臓に悪そうだ」

「ほうー！ そこなラ・ヴァリエール嬢は、君のフィアンセであったか！」

「へ？ ええっ？？」

突然に険悪な雰囲気霧消して眼ををぱちくりさせるルイズに、ウェールズはにやりと笑い掛けた。

「どうだい？ アルビオン王家自らによるアルビツシユ・ジョークは

楽しんで頂けたかな？」

呆氣に取られて理解の追い付いていない様子のルイズに、ワールドも説明を加えた。

「ルイズ、コンコアルビオンでは際どいジョークで物事を笑い飛ばす風習があるのさ」

「なによワールド、脅かさなくたっていいじゃない！ 心臓が止まるかと思っただわー！」

「ハハ、すまない。でもいい経験になったろ？」

「もう……！」

顔を赤らめたルイズに、魔王もそつと小さな声で囁いた。

「世を見渡せば、この手の文化はままあるものです。こうやってジョークにのせて、普通なら言えないようなホンネをぶつけ合うのです」

「そうなの？ トリステインではここまでやるのは考えにくいことね。こうやって、本音を……え、本音？」

ルイズが絶句したところへ、ウェールズが丁度よく声を掛けた。

「さあ、ラ・ヴァリエール嬢。大した部屋ではないが、どうぞ中へ入ってくれたまえ」

「ルイズ、何も遠慮することはないぞ。なんせ、他ならぬ皇太子殿下のご厚意であるのだからな。さあ！」

ルイズの胃は、きりきりと痛み始めた。

……………

ウェールズの住まう部屋は、王族のものとは思えぬほどに狭く、簡素なものであった。置かれた机と椅子は、実用のためだけを考えて作られたような装り気のないものであり、ベッドに至っては粗末とさえ言えるほどの代物であった。唯一飾り気のあるものといえば壁に掛けられたタペストリーぐらいなものだが、そこに描かれているのは戦場の様相であり、そのことからこの城におけるウェールズ皇太子の質実な暮らしが伺えた。

「大使殿を歓迎出来るような部屋ではなくて済まないね。王都にはもつと立派な部屋があったのだが、生憎ここまで追いやられてからは

「ご覧の有様なのだよ」

「苦勞なさつておいでなのですね」

「うむ。戦争とは常に苦勞の絶えないものだ。まして劣勢の身であればなおさらだ。だが私は、存外この部屋が気に入っていてね」

ルイズはその言葉に、思わず目をぱちくりさせた。彼女が見る限り、この場所は学院に設けられた寮塔の一部屋にも劣るように思われたからだ。

「それはまた、一体どうしてですか？」

「団結だよ」

「団結、ですか？」

首を傾げそうになっているルイズへ、ウエールズはその言葉の意味するところを語った。

「今まで私は、軍務中はともかく城に帰れば王族としての特別な扱いを受けてきた。当然、そのこと自体は理解出来るし感謝もしている。しかしこうして、自分で言うのもなんだが質素に暮らしていると、私と志を同じくして苦勞しながらも忠誠を尽くしてくれる臣下たちと、より深く通じ合える気がするのだよ」

そう語る皇子は、僅かばかり愉快そうな笑みを浮かべていた。

「確かに、此度の内乱で王家から離れていった者は多い。だが、我々の元に残った者たちとの絆は、より一層深まった。それこそが、劣勢にも関わらず今日まで我々が戦い続けてこられた理由の一つなのだよ。明日はそれを示すに良い機会だ。決戦を前に運よく火の秘薬も手に入ったことであるし、反徒どもの目に本物の忠誠と信頼から生み出される力を見せ付けてやる事が出来るだろう」

「殿下……」

ルイズは彼の言葉を聞いていて悲しくなった。確かに君臣の間の揺るぎなき忠誠と信頼とが示されるのは素晴らしいことかもしれないが…… それと引き換えに、彼らはみな命を失うことになる。

自分とそう年頃も変わらぬこの若き王子は、これから勝ち目のない戦に挑もうとしているのに、どうしてこんなに明るく振舞えるのだろうか？ こんなにも情に厚く慈しみ深い殿下に、その先の未来がない

なんてことがあっていいのだろうか？ ルイズの心中には、そんな思いが渦巻くのだった。

「おっと、すまない。早く手紙を返さなくてはな」

ウエルズはそう言うと、机の引き出しから宝石を散りばめた小箱を取り出し、その錠を解いた。箱が開けられると、その内側からアンリエッタ姫の小さな肖像画と、件の手紙と思しき封筒が姿をのぞかせた。ウエルズは封筒にそっと口づけをしてから中身を取り出すと、その文面を目で焼き付けるように、じっくり読み返し始めた。手紙は、その折り目がよれよれとなり、不用意に扱えば簡単に破けそうに見えるほどくたびれていた。ルイズは、そんなボロボロの手紙を愛おしそうに扱うウエルズの姿を見て、堪らなくなった。ウエルズは手紙を読み終えると、丁寧にそれを封筒へと仕舞い込んで、ルイズに差し出した。

「待たせたね。この通り、姫から頂いた手紙をお返ししよう」

「かたじけなく存じます」

ルイズは首を垂れ、恭しく手紙を受け取った。彼女は手紙を手にしてもそれをすぐに仕舞い込むことはせず、しばらくの逡巡の後にウエルズに問いかけた。

「殿下、その…… 王軍に、勝ち目はないのですか？」

「万が一にも勝ち目はない」

ウエルズは、その瞳に微塵の揺らぎも感じさせない表情のまま、淡々と答えた。

「我々が三百の軍勢に対し、敵は五万。これだけの戦力差がある以上、勝敗を覆すことは叶わない。だがもちろん我々もただでやられるわけではない。我が物顔でこのアルビオンにのさばるレコン・キスタどもを畏怖せしめるべく、しっかりと奴らの数を減らしてから朽ち果てるつもりだとも」

ルイズはそれを聞いて、自問せざるを得なかった。このような目の前の悲劇を、自分は指を啜えて見ていることしか出来ないのだろうか？ 一人の誇り高き貴族として、何か皇子にして差し上げられることはないのだろうか？

この城に来るまで、手紙を返して貰うという使命に頭が一杯だった彼女は、いざその手紙を手にした今、大きな虚しさを感じていた。

私はなぜ、危険を冒してまでここに来たというのか？ 私に出来ることは、私が姫殿下に託されたこととは、ただただ手紙を返して貰うこと、本当にそれだけに過ぎないのだろうか？ 自分の全うすべき役割が、まだあるのではないか？

ルイズが頭の中でぐるぐると考えを巡らせる中、魔王が呑気な様子で口を挟んだ。

「フム、彼我の戦力差、300対50000ですか。これはもうアレですな。もはや取るべき戦法は、一つに定まったもドーズンですな」「おや使い魔君、君には用兵の心得があるのかね？」

ウエールズが意外そうに言う傍ら、ルイズは顔をしかめていた。「ちよつとアンタ、知った風なことを言つて殿下に失礼でしょう！いいから黙つてなさい！」

「いや、私は気にせんよ。例え使い魔であろうとも、我らの元に訪れた客人であることに変わりはない。遠慮などしないでくれたまえ」「で、殿下がそうおっしゃるのなら……」

本当にそれでいいのだろうか、ルイズは迷いながらも口を閉ざした。

「それで君、先ほど言い掛けていたことこの続きを聞かせてくれたまえ。敵は圧倒的多数だ。もはや勝ち目のない、絶望的な状況に我らは陥っている。君ならこれを、どうやって戦うのかね？」

「フハッ！ そんなに聞きたいですか？ フハハッ！」

ああ恥ずかしい、やつぱりこいつの口を縛り付けておくべきだったと、早くもルイズは後悔し始めた。

「そもそも前提がオカシイのです。あなたは負けを確実視しておるようですが、とんでもない！」

「なに？ それは一体どういうことだ」

皇子の問い掛けに、魔王はマガマガしくも不敵な笑みを返した。

「私にはあります。あのニンゲンどもの軍勢を前に、勝利の絵を描くチカラがあります！」

「そんなバカな！」

それまで成り行きを静かに見守っていたワルドが、たまらず声を上げた。

「君にはこのアルビオンの情勢が分かっていないのか？ 今この状態から王軍が貴族派を打ち破ることなど、伝説のガンダールヴであろうとも不可能な仕業だろうに！」

彼が声を荒らげる中、皇子ウエルズも予期せぬ魔王の言葉にただただ困惑している様子だった。

「我々が勝利だとは、ずいぶんと大きく出たものだな！ しかしそこの子爵殿も言っている通り、我々の立場は絶望的なものだ。それこそ伝説の始祖の御使いの力を借りても勝てるかどうか怪しいものだ。それでも君は勝算があるというのかね？」

訝しげな表情を浮かべる皇子に対し、魔王は自信に満ちた声で言った。

「私の読み通りに戦局が動いてくれれば、9割ほどで！」

ワルドもウエルズも、そんなまさかというように顔を見合わせた。

「使い魔君、どうやら君の考えは、私には到底思いも付かないものであるのようだ」

「無理ありません。これはとある国の軍師が地道な努力の末に考え出した、チートのような戦法なのです」

「む、狡賢いやり口だったりするのか？ して、その戦法とは？」

魔王は、ユカイで堪らないといった様子で、こう答えた。

「包 囲 殲 滅 陣 だ す ！」

皆が呆気にとられる中、魔王は得意げにその戦法の詳細を語り始めた。

「これは超重量の荷車に轆かれた者のタマシイが神様に導かれ、特典やら何やらを貰って流れ着くという異界の国ナロウの古文書に書き記されたサイキョーの戦法です。著者名は確かゴッツ・ゴーシユギとか言いましてかな？ ともかくやり方はこうです。先ずこちらの軍勢を3つに分けます。中央が防戦でもちこたえている隙に、こちらの

精鋭部隊の右翼と左翼が敵両翼を突破。そのまま敵中央の真横と背後につき、包囲網を完成させる…… 包囲殲滅陣。これが、私が描いた勝利の絵で「なに言ってるのよバカあ！バカあ！こんの大馬鹿あ！」ブヘエツ!!」

ルイズにしこたま殴られた魔王は、大きくよろめいてビダンと床に倒れた。ワルドはその様子を見て、呆れながらに言った。

「なるほど、おそらくその戦法では瞬きするほどの間に全滅するだろうな。包囲した側が」

「そもそも、たった300人で5万人を囲えるのか？」

魔王の珍戦術は、戦を知る二人からも全否定を以って迎えられた。

「あ、あんたって奴は……!」

「あれ、また私なにかやっちゃいました？」

今なお怒りでふるふると震えているルイズをよそに、魔王は叩かれた頬をさすりながらも満足げであった。

「いやあ、なんというんですかね。こういうセリフ、一度で良いから言ってみたかったですよね。やっぱり、ちよつと賢いフリってしてみたいじゃあないですか」

「何も殿下の前でしなくてもいいじゃない!」

ルイズは羞恥のあまり、顔を真っ赤にして泣きそうになっていた。

「殿下、本当に、本当に申し訳ございません!」

「いやいや、気にしてはおらんよ。しかし何だ。君はなかなか愉快な使い魔を持ったようだな」

「お恥ずかしい限りにございます」

「おやルイズ様、今のは私ホメられたんじゃあないですか？」

「黙れ」ドンツ!

殺気交じりに拳を叩き付けたルイズへと加勢するように、ワルドも魔王へと忠告を与えた。

「そうだと使い魔君。これ以上不真面目なことを言ったらルイズを困らせるようならば、分かっているのだろうな」

彼はそう言いつつ、魔王を剣呑な目で睨み付けた。しかし魔王は、そんな彼を嘲笑うかのように言い返した。

「ホホウ、そうですね。ではお望み通り、これからはジョーダン抜きにして言わせて貰いましょう。しかし、分かっているのですか？ この私にマジメなことを口走らせるということの意味を！」

「何が言いたい！」

「まあまあ、二人ともそう熱くならずとも良い。元々無茶を言った私が悪いのだ。どんなに頭を巡らそうとも結局は同じこと。どう這いずり回れば死に様がより良くなるかということは、いくら考えても詮無きことであるのだからな」

「殿下……」

悲劇的な己の未来を飄々と語る皇子に、ルイズもワールドも押し黙った。しかし魔王だけが、それらをまるで気にした様子もなくウエールズへと語り掛けた。

「それでもありませんぞ。歴史上、少ない兵力で大軍を打ち負かした例もあります。戦い方さえマチガえなければ、相手に大出血を強いることも出来るでしょう。よしんば勝てずとも、後は我々に任せれば良いのです！ 私とルイズ様とで、必ずやアルビオンを征服して見せましょう！」

「……らー。魔王……」

ルイズは慌てて魔王を黙らせようとしたが、言われた皇子は気分を害すどころか、むしろ愉快そうにくつくと笑いを堪えていた。

「ミス・ヴァリエール、私は一目見た時から気にはなっていたのだ。君の使い魔は一体、何の亜人なのか……？ だが、なんと魔王だったというのかね？」

「ええと、その……」

言い淀んだルイズに代わり、魔王本人が元気よく返事を返した。

「モチロン、その通りです！」

「ブフツッ！ いや、すまない。なるほど、反徒どもが我らを倒しても、後には魔王殿が立ち塞がるというわけか！ 何とも壮大で頼もしい限りではないか。これで我々も、明日は安心して死んでいけるといふものだ」

おどけた調子で言うウエールズに、魔王は至極真面目なつもりで返

答した。

「そう安心されるのもそれはそれで困りますね。ただでさえ、あなたたちの戦力は貧弱貧弱ウ！ とあざ笑われても仕方の無い数なのです。そう簡単に死なれては、世界征服の競合相手たるレコン・キスタの数を減らせないではないですか」

「おや、これは手厳しい！」

「当然です。ニンゲン同士、長々とつぶし合ってくれることこそが世界征服への近道ですからな」

ルイズは再び魔王の口から爆弾のような発言が飛び出したことにくらくらした。ワールドも今の発言を聞いて口をあんぐりとさせている。

「魔王、お願いだからちよつと黙っていて！ あんたの真面目は、他人にとつての不真面目なのよ！」

「何をおっしゃいますか、破壊神様。我々、世界征服のためにワザワザここまで来たのではないですか」

「手紙を返して貰うためよ！」

「ミス・ヴァリエール！ 君は破壊神だったのかね!? こ、これは、人は見かけによらないものだ！ ハハハハハ！」

「殿下！」

リングのように顔を赤くしたルイズを前にして、ウェールズは酷く笑い転げた。どうやら今のやり取りが、彼のツボに入ったらしかった。ウェールズはお腹を抱えながら息を整え、ようやくのことで魔王に話し掛けることが出来た。

「随分興味深い話を聞いたものだ！ すると私と君の望みは凶らずも一致しているというわけだな！ 私は出来る限り奮戦して、一人でも多くの反徒共を倒したい。君は君で大きな野望のために、あいつらの数を少しでも減らして欲しいと！」

「まあ、そうなりますな。ですから、お望みとあらば私はいくらでも協力致しますぞ。まあ、お望みでなくてもイロイロ喋っちゃいますが」

相変わらずな魔王の一言一言にお腹を抱えるウェールズを見たルイズは、もうどうにもでもなれと、魔王への注意を諦めた。

「それで皇子殿は、具体的にはどのように戦うつもりなのですか？先ほどは火の秘薬がどうか言っていましたか？」

「うむ、大砲を撃つのに火の秘薬は欠かせぬからな。城壁の上に設けられた砲台から、撃てるだけ撃ち込んでやるつもりだ。やはり我々が戦うとなると、相手に勝っているのはこの城と兵の練度ぐらいなものだからな。だから我々も、それを頼みに戦うつもりでいるのだよ」

「なるほど、確かにこの城に入る時に堅牢そうな城壁がソビえておりましたな」

「ああ、堅城として名高きよく出来た城だとも。そもそも立地からして良い。ここは岬の突端であるから、敵の軍勢はこの城に一方向からしか近付けぬ。だから我々は背後を気にすることなく、安心して目の前の敵に集中出来るのだ」

「それで迫り来る敵を撃ちまくるといいうワケですな？」

「ああ、そうだと。我ら王軍は一糸乱れぬ統率の元に大砲と魔法の射撃を繰り返す。反徒どもは弾と魔法の飛び交う嵐の中を進まねばならず、そして城の前に辿り着いてなお、そこには高くそびえる城壁が待ち構えることとなるのだ」

「ほう、それはナカナカの損害を敵に与えられそうですね」

「ああ、我らの数は少ないが、その10倍の働きはして見せよう」

それを聞いて、ワルドは驚きの声を上げた。

「10倍！ なかなか野心的な目標でありますな。殿下、それほどまでにこの城は堅く、また王軍の士気は高いという訳ですか？」

ウエールズは彼にやりと笑みを返した。

「それだけではない。何とも都合の良いことに、迫り来る敵の数だけ無駄に多いからな。大軍にとって、この岬は進むに狭かろう。故に敵方は、この城に近づけば密集していくこととなる。つまり我々にとっては、それがそのまま恰好的となるのだ。どこへ撃つても、必ずその先に敵がいて当たろうとは、着弾を観測する手間が省けようというものだ」

「……反徒どもも、なかなかの犠牲を強いられそうですね」

「ああ、そうでなければ困る。我らは文字通り命を尽くして戦う訳だ

からな。何より栄えあるアルビオン王家の滅亡を決す戦いだ。父祖代々の誇りに掛けて、相手に楽はさせられんよ」

皇子は明日の戦いを思っただけで気が高ぶったのか、言いながらにしてその眼光を強めていた。

「すばらしい！」

魔王はパチパチパチと、一人盛大な拍手を送った。

「相手を少数と侮り余裕ブツこいて近づいて来る敵勢は猛攻に晒され、その考えの甘さを噛みしめながら朽ち果てていくというワケですか？　なんともマガマガしい限りではないですか」

「ふむ、それは褒め言葉と受け取って良いのかな？」

「モチロンです。私どもにとっては、最大級の賛辞ですとも」

ウエールズはそれを聞いて興味深そうに唸った。

「そうなのか。マガマガしいことが称賛されるとは、亜人文化の理解は難しいな。いやしかし、考えてみると戦争とはすべからくマガマガしいものであるのかもしれないな」

「それは確かに、殿下の仰る通りかもしれませぬ」

ワルドもウエールズの言葉に同意を示した。

「さて、それで？」

魔王はなおも興味津々といった様子で、ウエールズに尋ねた。

「その後はどうなるのですか？　大砲を一方的に撃つてオシマイというワケでもないのでしょうか？」

「うむ…… まあ、確かに問題はその後だな。いくら我々が苛烈な砲撃を加えようと、それで撃ち尽くせぬ程に敵の数は多い。相手に多くの犠牲を強いるとはいえ、城壁もしばらくすれば破られよう。こればかりは多勢に無勢、どうしようもない」

「それで、どうなってしまうのですか？」

ルイズは声を震わせながら聞いた。

「いくら堅固な城とて、ひとたび敵の侵入を許せば後は脆いものだ。そうだったが最後、もはや多くの敵を討ち取ることは叶うまい。一人また一人と、倒されていくのみだ」

「ほう？　では城壁を破られた後は、ノープランということですか？」

無礼ともいえる言葉にルイズはハラハラしたが、ウェールズは難しい顔をしながらも律儀に魔王の質問へ答え続けた。

「敢えて言うなら、この城が廃墟と化すまで戦い抜くのみだ。城内は城壁と比べると心もとないが、それでも我々にとっては勝手知ったる我が城だ。攻め入る敵兵よりも地の利はある。それにレコン・キスタにとつても結果は知れたこの戦、あえてこの最後の局面で命がけの働きをしようと望む貴族らも少ないであろう。それゆえ最も危険な前線で攻城を果たすのはまずもって平民の傭兵に違いない。それに対し、我々は兵の数こそ少ないが、みな貴族だ。であるからして、せいぜい魔法を駆使して足掻くのみさ」

傍からそのやり取りを聞いていたルイズは、意外そうに声を上げた。

「殿下、明日の戦では相手の貴族たちは腰が引けて出てこないというのですか?」

「おそらくそういうことになる。無論、前線の近くに控えてはおろうが、わざわざ我らの魔法の狙いが定まるような距離までは近付くまい。最後の戦いで死ぬようでは、せつかくの戦勝もその恩恵が台無しだからな」

「しかし、それでは…… 相手が平民の兵だけでも、苦戦は免れ得ないのですか?」

ルイズの素朴な疑問に、ウェールズは首を振った。

「ミス・ヴァリエール、平民の力を侮ってはいけない。いくら一対一では我ら貴族が平民を圧倒しようとも、戦場では数こそが力なのだ。ましてや相手は戦に飢えた傭兵たちだ。我々が一つ魔法を唱える隙に、相手方は何十もの矢を浴びせかけて来よう。それが一瞬ではなく、前線に立つ限り絶え間なく続くのだ。加えて、平民の中にもいくらかメイジは混ざっていて、魔法を浴びせかけてくる。到底、耐えきれぬものではない」

それからウェールズは、少し言い淀んでから言葉を付け加えた。

「正直に言おう。『我らの軍勢はメイジだけで出来ている』そうと言うと聞こえは良いが、実際は平民の数が圧倒的に足りぬのだ。魔法詠唱

中の我らの身を守る平民がな。如何に強いメイジといえど、詠唱中は無防備になるものだ。伝説に拠れば、かの始祖とても詠唱の間には、その身を守る強き使い魔を必要としたと言う。ましてや我らは、いくら研鑽を積もうともその足元にも及ばぬ身だ。故に我らは戦となれば、平民の兵を、傭兵をかき集めねばならぬ。いくら我々が選りすぐりのメイジを抱えていようと、詠唱中の身を守ってくれる傭兵の部隊がいなくては戦いにならないのだよ。メイジだけでやりくりするにも限界はある」

そう言うと、ウエールズは軽いため息をついた。

「だがもはや趨勢が決した今、いくら金を積もうとも我らに付く傭兵はいないからな。メイジの一番の弱点たる詠唱中を突かれて、我らは息絶えていくことになるう」

「ふむ。カナしい末路ですな」

魔王がしれっとそんな言葉を返す一方で、ルイズは大きく嘆き憂いた。

「そんな！ 殿下は、悲壮なる決意を胸に決戦へ向かおうとしておられるというのに、誇り高きメイジらしく魔法に討たれて死ぬことすら叶わないのですか？」

そんな彼女の言葉に、ウエールズは首を振って答えた。

「戦争とはそういうものだ。決闘のように貴族同士で魔法の腕を競い合うようなものではないのだよ。我々が戦場でその身の上を誇るとすれば、それはただ命果てるその時まで、いかに苛烈に戦い抜いたかを以って示すしか無い。名も無き傭兵の矢に、弾に、刃に倒れ、地に沈むこと。これが滅亡する王侯貴族の必然なのだ」

ルイズは声を張り上げた。

「殿下！ 殿下はこれまで、もう十分にお戦いになられたのでしょう？ どうか、トリステインにお逃げ下さいませ！」

「ルイズ！」

それはまずかろうとワールドが制止しようとするも、ルイズは一步も退く様子を見せなかった。

「殿下、どうか私たちと共に……！」

ウエールズは重々しい口調で彼女に語り掛けた。

「何を言う、ミス・ヴァリエール。君は今、トリステインの大使である。そのような言葉を軽々しく口にして良いものではない」

それでもルイズは引き下がらなかつた。彼女の胸の内は、悲劇的な最期を迎えようとしているウエールズを救いたい、またこのままでは悲嘆に暮れるであろうアンリエッタの望みを叶えたいという、その思いで一杯であつた。

「畏れながら申し上げます。私は幼少のみぎりより、アンリエッタ姫殿下と親しくさせて頂いておりました。ゆえに姫殿下が何を望んでおられるか、私にはよく分かるつもりでございます。確かに今、殿下からこの手紙はお返し頂きました。しかしお渡しした手紙にしたためられていた姫殿下の願いとは、本当にそれだけなのでございますか？ 私には到底そうとは思えません！」

ウエールズは固い表情のまま答えた。

「何を言いたいかは知らぬが、姫殿下は己の立場を違えた言葉など書いてはおらぬ。亡命は姫の望むところでも、ましてや姫のためになることでもない」

「殿下……」

ウエールズの苦しい言葉の端からは、それが嘘であることがありありと表れていた。だが同時にそれは、王家の義務を果たさんとする彼の意思が、もはや揺るがぬ域にまで固まっているということをも示していた。

ルイズは、アンリエッタの望みを果たすためであれば命も惜しくない覚悟でここまで来た。そんな彼女は、自分が肝心なこと何一つ果たせない、殿下を救い出すことも、姫殿下の憂いを払うことも出来ないという思いに駆られ、悔しさと悲しみの涙を目に浮かべた。思い嘆くルイズに、ウエールズはふっと笑いかけた。

「君は本当に真つすぐに正直なようだね。アンリエッタが君を信頼したのも頷ける。だが注意しなさい。それでは大使は務まらぬ。もつとも、滅びゆく我らへの使者としては適任だったかもしれない。名誉以外に背負うものの無くなった政府は、誰よりも正直になれるだろう

「からな」

「どうか分かっておくれというように、ウエールズは涙を流すルイズに微笑みかけた。

「そんなしんみりとした空気とは裏腹に、相変わらず魔王はひょうひょうとしていた。

「さて皇子殿、改めて聞きますが、本当に相手するのは平民だけなのですね?」

「うむ、我々が余程しぶとく粘らぬ限り、少なくとも爵位を誇るまともなメイジは最前線まで来たがるまい。傭兵に身をやつしたメイジもいないではないが、王軍に比べれば練度もそこまで高くはない。有能なメイジならば、そうそう爵位を失ったりはしないものだからな」

「ナルホド。それで、その平民相手に数でもって押し負けてしまうと」「その通りだ」

「よく分かりました。するとゲンジツテキには、城壁を破られた後とはとにかく包囲殲滅の逆を行くことになりそうですね」

「ほう? 続けてみたまえ」

ウエールズに促されて、魔王は彼自身の見立てを語った。

「城壁が破られたら、きつとあなた方は敵から包囲されるのを避けながら戦うことになるのでしょうか? 自分たちが包囲殲滅されては事ですからな。敵に囲い込まれぬよう、障害物が多い場所や狭い場所へ移動し、少数対少数の戦いに持ち込み続ける。そうすればこちらは数の不利に悩まされることなく、またメイジとして平民を圧倒する戦いを続けられるのではないですか?」

「うむ、今度はマシな見解で安心したよ。確かにそうなってくれば理想ではある」

ウエールズは含むところがありそうな様子ながらも、魔王の意見に一応の賛意を示した。

「だが現実には、なかなかそうも言っていられないものでな。城壁の突破を許すということは、城内へと敵が一拳に押し寄せるということでもある。そうになると数に劣る我々には、もはや包囲されぬように立ち回る余裕自体がなくなっていくであろう。もし仮に、城壁に勝ると

も劣らぬ防御地点が城内にあるならば、突破されそうになった城壁から早めに撤退して城内戦に備える手もあるが…… まあ、ないものを考えてもしょうがないな」

魔王はそれを聞いて、目を怪しく輝かせた。

「諦めるのは、本当にまだ早いかもしれませんが」

「また何か思いついたのかね？」

「城の内が戦うのに適さないというのなら、新たに造って用意すれば良いのです。そう、地下を掘って！ 延々と続くジグザグな道を掘って、そこに皆が待ち構えて戦うのです」

ルイズははつと息を飲み、ワルドは真顔になった。魔王の意図するところの全容を未だつかみかねているウェールズは、難色の言葉を返す。

「うむ…… 言いたいことは分かる。地下陣地を構築し、そこに立てこもって、敵を引き込みながら戦えというのだろうか？ 確かに悪くはない発想だ。狭い場所で少数の手勢同士が面と向かい合ったならば、錬度の高いメイジが平民を相手に負ける道理はないからな。しかし、惜しいことにそれは出来ぬのだ」

「なぜです？」

「結局、人手が足りぬ。時間もだ。そのような場所を設けるには、トンネル掘削の経験があるトライアングル以上の土メイジを掻き集めて穴を掘らねばならぬ。素人が掘っても崩落して味方が死ぬだけだからな。しかし我々には人手ばかりか、残された時間すら少ない。戦闘に従事している土メイジたちの中から穴掘りの要員を引く抜くことすら惜しい状況なのだ。砲撃で傷ついた城壁を補修するにも、土メイジの手を割かねばならぬ。故に、その戦い方は諦めるしかない。決戦を前にして、土メイジを大きく疲弊させる方が手痛いのだよ」

「ホウ？ つまりあなたたちでは、地下に穴を張り巡らせるのは不可能だというのですね？」

「残念ながらその通りだ。我々は300しかおらぬ。しかし300もいるのだ。その我々全員が潜んで戦い続けられるほどの長大な穴を、そう簡単に用意することは出来ぬのだ。使い魔君、君のアイデアは決

して悪くは無かった。しかしもはや死に体の我々には、それをやるだけの力も、時間も、もう残されてはいないのだよ」

ルイズは既に、魔王が何を狙ってこんなことを話し続けたのか、はつきりと理解していた。理解した上で、ウエールズが口惜しように話すのを見て、彼女はもう居ても立ってもいられなくなった。ルイズは自らの内なる情動に突き動かされ、思いのままに口を開いていた。「殿下、お願いでございます！ 私めにも、殿下の戦いへ協力させて下さいませ！」

「何を言うのかね、ミス・ヴァリエール！ 君はトリステインの貴族だ。アルビオンに関わる謂れは無かるう！」

驚きながらも強い否定の言葉を吐いたウエールズへと、ルイズは必死に言い続けた。

「何をおっしゃいます！ 始祖に連なりし王家は、例え国が違えど我ら貴族の崇め奉るところにございましょう？ ましてや殿下は、アンリエッタ姫殿下にとっても大事なお方にございます。姫殿下の名代として訪れた私が、代わつて殿下のお力に成りたいと願うこと、それがどうしておかしなことがありますでしょうか！」

むむと、ウエールズは少しばかり口ごもった。アンリエツタがここにいたならば、確かにそのような望みをぶつけるであろうと、彼自身思ったのかもしれない。思ったのかもしれない。

「アンリエツタ姫殿下は、ただただ愛すべき人を失いたくないと願っておられるはずです。このまま殿下を失うことで、姫様がどれだけ嘆き悲しまれることか…… しかし、それでも殿下は、王家としての責務ゆえに亡命なさらぬのだと言います。ならば、せめて…… せめて殿下のために、私の力を使つては頂けないでしょうか？」

「しかし、君はトリステインの大使であろう！ 役目を違えてはならぬ」

「その通りだ、ルイズ。ここは少し落ち着くんのだ」

ワールドも横から口を挿み、ルイズを止めようとしたが、彼女は止まらなかった。それまで皇子の話聞きつつ彼やアンリエツタ姫のことを憂い、悲しみをこらえてきた彼女は、その思いの丈を切々と皇子

に訴えかけた。

「殿下、確かに私は大使の任を帯びてここに参りました。本来あり得ないことです。ヴァリエール家はトリステイン王家の傍流であるとはいえ、私自身は所詮、学生に過ぎぬ身の上なのですから…… それにも関わらず姫様が私に使いを託されたのは、姫様に代わってその真の思いを伝え届けるためだと思うのです。ですから本当は、どうあっても殿下を引き留めたく存じます。生きる望みの無い戦場へ向かわれるのではなく、我が国へと…… しかし、こうして殿下のお話しされる様を見て、その決意は固く揺るがないものだと分かってしまいました。もはや私にはどうすることも出来ません。それが悔しくてならないのです」

声を震わせながらのルイズの話に、ウエールズは黙って耳を傾け続けた。

「このまま、殿下のお命が失われると知りながら、何もすることが出来ずに国へ帰っては、あまりに忍びなく存じます。それに、もしここへ来たのが姫様であつたならば、何もせずに帰ろうことなどあり得ません。殿下が亡命を受け入れて下さらないというのなら、そしてこの地で命を散らすと言うのであれば……！ せめて、せめて私めにも殿下の最後の戦いのお手伝いをさせて下さいませ！ ここに来ることの叶わぬ姫様からの手向けと思ひ、私の力をどうかお使いくださいませ！」

ルイズの訴えを聞き終えたウエールズが、彼女に言葉を返した。

「ミス・ヴァリエール。君の誇り高き在り方に敬意を表す。窮した我々を助けようという優しき、アンリエッタのために尽くそうという友情と忠義。そして、自らの危険を顧みず、誇り高き貴族としての在り方を貫かんとする勇氣。そのどれもが、何物にも変え難き君の美德だ。そして、そんな君だからこそ…… この危険な戦いに巻き込むわけにはいかぬ」

ウエールズの真剣な表情に、ルイズは溢れ出しそうになる感情を堪えつつ、黙ってその続きを聞いた。

「我々がなにゆえに、滅びると知りつつ勝ち目のない戦いへと赴くの

か？ その理由の一つは、まさに君たちのような者をレコン・キスタの魔の手から少しでも遠ざけるためなのだ。我らはここで死すとも、レコン・キスタに痛手を負わせ、その歩みを押し留めることは出来る。奴らはその歯止めの効かぬ欲望ゆえに、やがてはトリステインへ襲いかかる日が来よう。だが、その時を一日でも遅らせられるというのなら、トリステインの人々が一日でも多く平穏な日々を過ごし、また来るべき日に備えるための時間を稼ぐことが出来るというのなら、我々は喜んでこの身を捧げる覚悟でいるのだ。ミス・ヴァリエール、君の申し出は感謝に堪えない。私と命運を共にする騎士たちも、君のような素晴らしい心を持つ者がトリステインの未来を担っていくと知れば大いに喜ぶだろう。だが、そんな君だからこそ、ここは我々に任せて貰いたいのだ。君には、我々の守るべき一人として、これ以上の危険に晒されることなく帰国への途に付いて欲しいのだよ」

ウエールズの思いを聞き届けたルイズは感激しつつも、ここが正念場とばかりに表情を引き締め、努めて落ち着いた口調で話し始めた。「殿下、ここに残るといふ貴方の真意をお話し下さり、ありがとうございます。殿下にそこまで思い計らって頂けるとは、我々は幸せ者でございます。ですが、今のお話を聞いて私はますます殿下の戦いに力を添えねばならぬと確信いたしました。これは、単なる私のわがままや気の迷いなどではございません。これは、始祖より特異な力を授かった私に与えられた使命と思うからこそ、こうして殿下にお願い申し上げますのでございます」

「ミス・ヴァリエール、君はいつたい……？」

ウエールズは困惑しながらも、ルイズの口ぶりから何事か自分には思いもよらぬ事情があることを察したらしかった。

「殿下。私も、ただのしがない一メイドとして殿下の元に立ったのは、なんのお役にも立てないことを重々承知しております。しかし何の因果か私には、今まさに殿下が必要とされているもの、それを用意するための力があるのでございます」

「それはもしや、君の使い魔君が語っていたことと関係があるのかな？」

「その通りにございます」

ルイズは力強く答えた。

「先程も言いました通り、私はただの学生です。それも、使い魔を召喚するのがやつとのメイジで、トライアングルやスクウェアのごとく敵を鮮やかに屠ることは叶いません。それでも私はここへの道すがら、物取りや傭兵に襲われつつもそれらを返り討ちにし、また5万もの数から成るといふ貴族派の軍勢の目を盗んで、この城まで辿り着くことが出来ました。それを成し得たのはひとえに、私の持つ特別な力ゆえのことなのでございます」

ウェールズはそれを聞いて、半ば納得したように言った。

「確かに、不思議には思っていたのだ。君たちが果たしてどうやってこの城までやって来たのか？ 我々に捕まった子爵と違って、君らは早々に船から逃げ出したからな。だがあのような小舟では、とてもではないがこの城に至る長い航路を耐えられまい。かと言って、地上にはレコン・キスタの大軍がひしめいている。貴族派と関わりなき者が陣中を素通り出来るはずもない。さりとて、反徒どもと通じあつていだからあの陣を通れたのだとも思えぬ。そなたの持つ水のルビーは、姫からのこの上ない信頼の証だからな。それを持つそなたを疑うことは出来ぬ」

「私たちが信用して頂き、感謝に堪えません」

ルイズは深々と頭を下げた。

「それでミス・ヴァリエール、君は一体どのようなにして奴らの目を欺いたというのかね？ 君の背格好では傭兵に紛れるのも難しかろう。かと言って空を飛ばば奴らの良い標的にしかならぬ。いやはや、私には全く想像が付かない！ どうすれば、あれだけ縦深があり隙間のない敵陣を越えられるというのだね？」

ルイズは、いよいよ自分の身に備わった『特異な力』のことを明かすべき時が来たのだと、身を震わせ、そんな彼女の大決心を台無しにするかのように魔王はヒョイと口を挟んだ。

「まあ、越えたというよりモグったんですけどね！」

ウェールズは目を真ん丸にして驚いた。聡明な皇子は、どうやらそ

の一言でルイズらが何をしたのか察したらしかった。

「まさか地下か！ 掘ったというのか、このニューカッスルの、硬い岩々ひしめく地下を！ 一日も経たぬ内に、あの敵陣すら越えて！」
「恐れながら申し上げます。舟での上陸に時間を取られさえしなければ、もっと早くに到着することも可能でした」

「信じられん！ そのようなこと、高位の土メイジでも難しい芸当ではないか！」

「私には土メイジの勝手はよく分かりません。ですが私のやったことは事実でございます。その証拠に、ここにいるワルドが閉じ込められた地下牢に穴が開いていて、その先が敵陣を越えた先へと繋がっているはずですよ」

それを聞いて、ウエールズはまたぎよつとしたようだった。

「なんと、あれは子爵ではなく君の仕業だったというのか？ あの穴で、君は前もって子爵に接触を図ったというのか！」

「お騒がせして申し訳ありません。ですが、確かにそれは私が掘ったものなのでございます。恐れながら、牢に入れるメイジに杖は持たせないものと存じます。ワルドにそのようなことが出来ようはずありません」

「確かにその通りだ。あの穴を見つけて以降、子爵殿が隠し杖でも持っていたのかと思いましたが、何も見つからなかったと聞いている。どうやら君の力とやら、信じざるを得ないようだ。しかし精神力はどうなのだ？ 流石にそれだけやっては、力が尽きよう？」

ルイズは自らに備わった力の特異な性質を思い、打ち震えながら答えた

「それも心配ございません。この城の地下に穴を張り巡らせるぐらいのことは、今からでもすぐやって御覧に入れます」

「ぐらいい？ ぐらいいだど！ 君はそこまで容易く地下を掘り進めていけるといふのか！」

「はい。ご命じとあらば、地下に広大な陣地を築いてみせましょう！」

ルイズの自信に満ちた言葉を聞いて、ウエールズは改めて衝撃を受けつつも事実を受け止めたようであった。

「なんとということだ…… そのようなことが可能だというのなら、明日の戦い方が変わるといふものだ。上手くやれば、丸一日、いやそれ以上も持ちこたえることが出来るやもしれぬ……！」

そう語るウェールズの目には期待が漲っていた。それを見たワルドが、慌てて口をはさんだ。

「いかん、そんなことはあつてはならん！　どうか、お待ち頂きたい！」

その場の視線が彼に集中した。

「殿下、期待させるような話をして、大変申し訳ない。しかしトリステインにはトリステインの事情というものがございます！」

ワルドは顔に焦燥を浮かべたまま、ルイズに語り掛けた。

「ルイズ、君の気持ちはよく分かる。僕だって、立場がなければ殿下を助けるのにやぶさかではない。だが思い出すんだ！　君の一番の役目は手紙を持ち帰ること、これに尽きる。君の身を少しでも危険に晒すようなことは「待つてくれ子爵」……殿下！」

悲痛とも言える表情を浮かべ始めたワルドへと、ウェールズは穏やかに語った。

「子爵、君の言うことはもつともだ。ミス・ヴァリエールを危険な目に合わせるわけにはいかぬ」

「そんな！」

今度はルイズが悲痛な表情を浮かべる番だった。しかしウェールズは、すぐさま手ぶりでその反応を制した。

「だがしかし、しかしだ。反徒共は、明日の正午からこの城に攻め入ると通告して来ている。眠りの時間こそ必要といえども、実に半日以上もの時が残されている。ルイズ殿に一働きして貰ってから安全にお帰り頂くことも、十分に可能であろう」

「しかし……！」

再びワルドが悲痛な声を上げる番となった。

「戦場では何事があるか、分からぬものですぞ！　この最後の決戦とて、例外ではありませんまい！」

だが、彼の言葉にウエールズが揺らぐ様子は無かった。

「もちろん、分かっている。なんせ敵は、恥知らずの貴族派だ。昼に攻めると言っておきながら、早めに攻め入って来るぐらいのことは覚悟せねばならぬ。だがそれを考慮してなお、非戦闘員を乗せた船を地下の隠し港から送り出すぐらいの余裕はある」

「それでは……！」

ルイズの顔色がぱっと明るくなった。

「頼む、ミス・ヴァリエール。トリステインからの勇気ある使者殿。我らの最後の戦いのため、そしてこの世界の未来のため、力を貸してはくれまいか」

「喜んでお引き受け致します！ 殿下のために、最善を尽くします！」

ルイズは目に涙を浮かべながら、熱く返事を返した。

「ありがとう、ミス・ヴァリエール。君の貢献に、我々は奮戦を以って応えるだろう。どうかよろしく頼む」

ウエールズはそう言うと、ルイズに向け手を差し出した。ルイズは跪いてそれに応え、彼の手を取り、そこに唇を落とした。ルイズの熱意が実を結んだ瞬間だった。

だがこのやりとりを快く思わない者もいる。それも、二人もいた。

「決戦前に船で脱出ウ……？ 途中で帰ったら、大陸支配がお預けではないですか！」

そんなことをうそぶく魔王にワルドは青筋を立てつつも、やはり小声で言葉を返した。

「冗談ではない！ まかり間違ってもルイズの身を危険に晒すことがあつてはならぬというのに……！ お前、よくも余計なことを吹き込んでくれたな」

彼ら二人は、皇子とルイズが振り返るや否や、すぐさま平静を装った。若干の不機嫌さが表情に残っているワルドと違い、魔王はニツカリと良い笑顔を浮かべていた。

「ああ、なんてスバラシイことでしょう！ 私もゼヒゼヒ協力いたしましょう！ 何せ、ルイズ様のお力は穴を掘るだけにとどまりませんからな！」

「なんと！ それもまた詳しく話を聞かねばならないな。だが先ずは、君にも感謝しなくてはいけない。使い魔君、君の提案のお陰もあって明日は良い戦いが出来そうだ。君にも何か報いるところが無くてはならないと思うのだが……」

皇子はそう言いながら手の甲を魔王にも差し伸べようとしたが、それを見た魔王はぴしやりと言つてのけた。

「ああ、そういうのはケツコウです。報酬を気に病むこともありませんぞ。どうせ最後はこの土地まるごとワレワレが頂きますからな」

「魔王!!」

ルイズはすぐさま魔王に突つかかったが、ウエールズはくつくと愉快そうに笑うだけであった。

「君ならば、そう言うんじやあないかとは思っていたよ！ まあ、感謝しているということだけは伝えたかったのだ。君の主人は本当に素晴らしい人物だ。どうか、今後とも彼女を守っていつてくれたまえ」
「モチロンです」

魔王は得意げに返事を返した。実際には主人を守るどころか、主人に守られねばならぬほどのヘナチョコである魔王のこの態度が、ルイズには本当に信じらなかつた。

魔王の返事を聞き届けたウエールズは、次にワールドに向かってこう言った。

「子爵殿、我々の事情に付き合わせるようですまないね。だが、必ずや彼女を安全に帰すことを約束しよう。決してそのような状況にはさせまいが、もし万が一のことがあれば、私の命にかえても彼女を守り通すことを、ここで始祖に誓おう」

「……殿下にそうまでしてお約束頂けるのならば安心してございます。それに、婚約者の熱い思いをこの期に及んで無下には出来ませんからな」

ワールドの言葉を聞き、ウエールズはほほ笑んだ。

「ありがとう、子爵殿」

「ですが殿下、一つだけ私からお願ひしたいがございます」
「何かね？」

「それは…… 後ほどお伝えしたいと思います」

ワルドはそう言いながら、ルイズをちらりと見た。ルイズは何事かと、きよとんした表情を浮かべている。ウエルズは何か事情があるのだろうかと察して、その場では願いの中身を追及しなかった。

「分かった。後で時間を作っておこうではないか」

ウエルズは改めて3人に向き直って告げた。

「さあ、これから忙しくなる。今すぐ具体的な話を進めたい、と言いたいところだが、時間も時間だ。諸君らにはまず初めに、戦における最も重要な準備に取り掛かって貰おうか」

「最も重要な、準備ですか？」

緊張が走った様子の子のルイズに、ウエルズはいたずらっぽく笑いかけた。

「ほらあれだ。飯を食わねば何とやら、と言うではないか。今宵は我ら王政府にとって、最後の夜となる。ゆえに、ささやかながらも宴の用意をしているのだ。諸君らも休むことなき移動とこの城に来てからのやり取りで疲れたであろう。先ずは我らの晚餐会にご出席頂き、英気を養って頂きたい。皆にも君らのことを紹介せねばならないからな」

「喜んで参加させて頂きます」

ルイズとワルドは、恭しく礼をした。魔王はというと、食事と聞いてすでにウキウキし始めているようだった。きっと彼なりの美食家魂が騒いでいるのだろうか。

「ではホールに向かおうか。我が父君と、それに付き従ってくれた真の忠誠を持つ仲間が待っている！」

自室を去るウエルズの足取りは、部屋に入った時よりもずっと元気になっているようだった。

STAGE 36 アルビオン・ナイト

アルビオン王国最後の晩餐は、明日にも滅びを迎えようとしている人たちのものとは思えぬほどに華やかなものであった。煌めく巨大なシャンデリアの下、会場には管弦による優雅な演奏が鳴り響き、ホールを行き交う貴族たちはキジやクジャクもかくやというような色鮮やかな服で着飾っている。テーブルの上には多彩な料理の数々に加え、年代物の酒が入った様々な形のボトルが並んでいた。

だがルイズが何より驚いたのは、出席する貴族たちは皆が皆、その顔に底抜けに明るい笑みを浮かべていることだった。本当に誰一人として暗い顔をしている者がいない。彼らが己の憂いを巧みに心の奥底へと仕舞い込んでいるのか、それとも心の底からこの晩餐を楽しみ明日に向けて勇んでいるのか、ルイズには判断のしようもなかった。

会場のあちこちからかしましく歓談の声が零れ聞こえていたが、その喧騒は現アルビオン王であるジェームズ王が立ち上がると同時に、すーっと引いていった。ジェームズ王はかなり年を召しており、足を悪くしているのか隣にはウェールズ皇子が立ち並んで、その体を支えていた。皆が屹立して言葉を待つ中、老王はしゃがれつつも重厚な声で語り出した。

「皆の者よ！ 勇猛果敢にして忠実なる、朕の自慢の僕たちよ！ 諸君らも承知の通り、明日には反乱軍レコン・キスタが、我らの最後の砦であるここへと総攻撃を仕掛ける。思えば、この内乱の火蓋が切られた、かの忌まわしきロイヤル・ソヴリンの反乱以来、我らは常に苦しい戦いを強いられてきた。そのような中、諸君らは今日までよく戦い、この無能な王へ付き従ってくれた。だがそれも今日までのこと。明日の戦い、これはもはや、戦いと呼ぶことすらおこがましい、一方的な虐殺となろう。朕は諸君らが、皆々傷付き倒れ行く様を見るに忍びない」

王はゴホッと、苦しそうな咳をしてから、言葉を続けた。

「よって諸君らには、これより暇を与える。長きに渡り、よくぞこの王

に尽くしてくれた。厚く礼を述べるぞ。明日の朝、我らに残された最後の戦艦イーグル号が、女子供を乗せてここを発つ手筈であつたらう。だがここに来てトリステインからの商船が、イーグル号の隣に船体を並べるところとなつた。皆の者はこの艦に乗り、この始祖に見放された大陸を離れるがよい。ウエールズよ、お前もだ。王子として生まれたお前に国を残してやれぬのはすまぬが、しかしもはやこうなつた以上、そなたが王の血を誇りながら生きていくことは出来ぬ。今後はただの１メイジとなり、復讐を忘れてただ生きることのみを考えよ」

事ここに至つて、ホールは重い沈黙に包まれた。見た目には煌びやかな景色が広がっているというのに、ルイズは息をするのも辛いような、胸の苦しさを感じ取つた。ウエールズ皇子は『父君はなぜこのようなことを言うのだ』とでも言いたげに、王の隣で険しい表情を作っている。先ほどまでは明るくしていた貴族たちも、この降つて沸いたような葬式然とした空気に、声を上げかねているようだった。

この静けさを打ち破つたのは、この最後の晚餐には場違いとも言える、一人の奇妙ななりをした亜人の感嘆であつた。

「これはイイコトを聞きました！ 王様を一人残して、城がすっかりガラ空きになるとは！ こんなにも簡単に自分の城を手に入れるチャンスが訪れるとは思いませんでしたぞ！」

ジエームズ王は立ち尽くしたまま、目玉が飛び出んばかりの表情を作つた。居並ぶ貴族の面々も、揃いも揃つて魔王たち、つまりルイズらに向け驚愕の視線を向けている。

「フム、いやそもそも、私が思うにこの城は老人一人で過ごすには広すぎるのではないでしょうか？ どうです？ ここは一つ、若いモノにミライを託して、ルイズ様にお城を相続なさつては？ 何なら、国まるごと渡して頂いても構いません！」

ルイズは思わず、ふつと意識が遠退いて後ろに倒れこみそうになつた。あわやというところで傍らにいたワルドがその肩を抱き、彼女を受け止めた。

「いかぬ、これはいかぬぞー！」

ウエールズ皇子が、ジエームズ王のすぐ隣で声を張り上げた。

「そこなヴァリエール嬢の頭に冠が載るのを思うと微笑ましいが、しかし王の嫡男ともあろうものが逃げ出している間に王位を奪われたとあつては、これ末代までの恥なるぞ！　ボケた自分の父親が誰ぞに唆されぬよう、私は最後まで面倒を見ておかねばなるまい！」

芝居がかつた様におどけた調子で言う彼の言葉を皮切りに、この場集った貴族たちもやんやと声を上げ始めた。

「まったくその通りですな！　我ら何のために、今日この日まで戦ってきたというのか！」

「少なくとも、この城を簡単に明け渡すためではございませんぞ！」

彼らは口々に不満を叫びつつも、その口元は愉快そうに緩んでいた。

「陛下、女子供と一緒に逃げよとは申されますが、しかし我らを女子供扱いとはいけませんな！」

「我ら、これでも反徒どもの難敵足らんと必死に努力してきたつもり！　このまま逃げ出しては、アルビオン王国の抵抗とはただひたすらに竜頭蛇尾であつたと誇られましようぞ！」

そうだそうだと、貴族たちの間に賛同の声が沸き上がる。彼らはより熱を持って、口々に叫んだ。

「いきなりとち狂つたことを言い出すのはお止めください！　この世界に狂王は一人で十分ですぞ！」

「陛下もお人が悪い！　我らを捨て置き、栄えある王国最後のひと時を独り占めなさろうとは！　王だけでなく、その臣下たる我らもいてこそその王国でありましように！」

「いかにもその通り！　誰も侍らぬ王など、ただのヨボヨボな老人でしかありませんぬ！　陛下は明日は戦いにならぬ等とうそぶかれるが、そう言つて陛下一人残られたのではただのお笑い草ですぞ！　誰も王を王とは気付いてくれますまい！」

国王ジエームズは今や、目を細めて彼らを眺めながら、黙つてその訴えに耳を傾けていた。貴族らの言葉は止まるところを知らず、ホルのあちらこちらから、まるでお互いの勇を競うかのように声が発せ

られ続けた。

「陛下、そのようなことを申されるとは嘆かわしいですぞ！」

「まったく陛下にも困ったものだ。この期に及んで我らの求める言葉が分からぬとは！」

「王は人の心が分からない！」

王のすぐ傍に控えている恰幅のいい貴族も大声を張り上げた。

「私からも申し上げます。この長い歴史を持つ私たちの王国が遂に途絶えるのなら、それは我ら一人一人が自らの流す血で喉を詰まらせながら、地に倒れ伏すまで戦つてからのこと！ 我々は、決して、決して、決して屈しませぬ！ 我々はどんな犠牲を払おうとも、最後まで王家の誇りを守る！ 既にそう決心しております！」

老年の貴族も、その見た目からは信じられないほどの大声で吠える。

「我らが待ち望んでいる言葉は、全軍前へ！ 前へ！ 前へ！ それ以外の命令は受け付けませぬ！」

今にも燃え上がらんばかりの熱気を放つ彼らを前に、ついにはジェームズ王が再び口を開いた。

「この大バカ者どもめ！」

皆を一喝した彼の目には、光るものが浮かんでいた。ジェームズ王は目頭を拭いながら言った。

「まったく、なんということよ！ ここまでのバカにはつける薬も無く、そして死んでも治らぬというもの！ このような者たちを野に放つたとあつては、始祖に連なる兄弟の国々に迷惑極まりないというもの！」

すぐさま、王の近くにいた騎士が合いの手を入れた。

「おお！ 忠を尽くした我らに対し、何という言い草か！」

「これは意地でも先の言葉には従えぬな！」

ジェームズ王はいたずらっぽく彼らに笑みを返すと、杖を高く掲げ、老体には似合わぬ大声で皆に告げた。

「ならばよかろう！ しかれば、この王に最後まで尽くすがよい！」

さあ諸君、今日は良き日ぞ。今宵の空に輝ける一つに重なりし月は、

始祖からの祝福の調べというもの！ さあ今からよく飲み、よく食べ、よく踊り、そしてよく語らおうではないか！」

爆発するかのように立ち上った歓声は、城の隅々にまで響き渡り、夜闇を伝って貴族派の陣営にまでかすかに響くほどであった。

「皆々方、私からも今一つ！ 諸君らが酔いすぎる前に紹介しておかねばならぬ御人がいる。明日にも関わりのあることゆえ、心して聞いて貰いたい！」

ウエールズが大声を張り上げる。ルイズは改めて居住まいを正した。

アルビオンの運命を動かす歯車が、今まさに回り始めようとしていた。

STAGE 37 星を見るパイ

「おお、これは……！ 痺れる程のエールの苦みと強烈な肉の塩気との魔リアージュがたまりません！」

舌をうならせる魔王の声がルイズの耳に届いた。どうやら彼はこの晩餐をすっかり満喫しているようだ。

饗宴の開始と共にウエルズ皇太子直々の紹介を受けたルイズの元へは、王党派貴族の面々が次々と挨拶へ訪れに来ていた。もつとも、気のいい彼らは例え皇子からの紹介が無かったとしても、王国最後の珍客である彼女の元へと陽気な言葉を投げ掛けに来たであろう。「そんなに若いのに大したものだ。貴方のような人がいることを思えば、トリステインは安泰ですな」

「ここに来るだけでも大変であったろうに、その上、我らの戦いに協力して頂けるとは！ まったく感謝に耐えませぬぞ」

次々に口にされる称賛と感謝の言葉に、ルイズは努めて明るい顔をしながら返事を返した。

「協力は当然ですわ。レコンキスタはアルビオンのみならず、世界の国々にとっても脅威ですもの。それよりも私の方こそ感謝を申し上げたいです。私たちが今日まで平穏な暮らしを保って来られたのは、あなた方が必死に戦って下さっていたお陰ですもの」

「おお、なんと慎み深く礼儀正しいことか！ これぞ貴族の鏡というもの」

「流石は名高きヴァリエール家のご令嬢だ。将来はさぞ立派になられるでしょうぞ！」

貴族たちはルイズの言葉一つ一つに沸き、絶えず彼女を褒め称えるのだった。

「さあさ！ 折角の宴を喋り通すだけで過ぎされたのでは勿体無いというもの。是非我が国の伝統的珍味の数々をご賞味あれ！」

「こちらのブラック・プディングはいかがか？ 豚の血を固めたものにて、食べれば獣にでもなった気分になれますぞ！」

「おお、いかぬ！ そのような貧相な一物をお出ししたのでは我が国

の恥と申すもの。詰め物ならば、こちらのハギスを食してごらん下さい！ 得も言われぬ臓腑の味がしましょうぞ！」

ルイズは彼らが勧めて来た皿を見て…… 顔に作った笑みを固まらせた。彼女は、『あの噂』は本当であったかと恐れ戦きながらも、それを態度には出さまいと必死に取り繕うおうとした。

彼女が伝え聞いていた噂とは、曰く『アルビオンのメシはまずい』とのこと。ルイズは目の前の皿を一目見ただけで、その真実の一端に触れたような思いがした。

先ずはブラックプディング…… 獣の血を固めて出来た腸詰めであるそれは、毒々しいまでに黒く、たっぷりの油を敷いて焼かれたであろうその表面はテカテカと黒光りしていた。ナイフで切られたその断面には、黒い身に混じって何やら白く細長い塊がうじゃうじゃと詰まっついていて、ルイズをげんなりさせた。

そして更に酷いのがハギスだ！ 今は亡きトリステインの国王に『あんなまずいものを食う連中は信用ならん』とまで言わさしめ、外交問題にまで発展しかけたその凶悪なる一品を、ルイズはまざまざと目の当たりにしていた。

色の悪い臓物を羊の胃袋の中へとはち切れんばかりに詰め込んだそれは、そのデンとした威容と強烈な臭気でルイズの食欲を減衰せしめた。洗練された宮廷料理が発達したトリステインから来たルイズにとつて、この料理に対し色々と思うところはあったが、彼女が何よりも酷いと思ったのがその見た目だ！

ただでさえ臓腑の標本のような色合いの気味が悪い皮袋にナイフが入れられると、中からモロモロと粒状になった褐色の塊が零れ出し、皿の上にドサツとこぼれ広がった。ルイズは見ているだけで吐きそうになった。

ルイズは思った。

トリステイン貴族として、こんな得体のしれない代物を口にする訳にはいかない。

というか、こんなの食べたら私死んじやう。

見ているだけで怖気が走るのに、口に近づけ匂いを嗅ぎ、舌で味

わって飲み込んでしまったら、間違いなく私死んじやう。

食べてから吐き戻したとしても、アルビオン王族・貴族への非礼で私死んじやう。

だから我慢して飲み込んだまま耐えようとしても、やっぱり体が悲鳴を上げて私死んじやう。

大事な任務の途中なのに、人生でやり残した事だっつていっぱい残っているというのに、私死んじやう。

アルビオン料理がまずすぎて、私死んじやう。

ルイズは、王党派貴族たちの勧める品をかわそうと必死に言い訳を考え始めた。

「さあさー！ 熱い内にお召し上がりなされ！ この舌が麻痺するような強い酒を煽つてからかつ食らうと最高ですぞ」

「その、ごめんなさい。実は私、ちよつと血の気が多い味が苦手です……」

「やや！ それはいけませんな。すぐに別の料理をお持ちしましょうぞ」

「しかしはて、これらの肉料理が駄目となるとどうしたものか？」

快くルイズを持って成そうとしている彼らを前に、何も食べないというのも失礼にあたる。

そこでルイズは、無難にこんな提案をした。

「魚料理はないかしら？」

「ここアルビオンは空の上ゆえ、海の魚はありませぬが宜しいですかな？」

「構いませんわ。わざわざ、ありがとうございます」

「さて、確か魚を使った珍味はあちらの方で見かけたか……」

ルイズに話し掛けていた貴族が遠くのテーブルに目をやったところで、そちらの方から大きな声が上がった。

「ルイズ様！ とつてもスバラしい魚料理を見つけました！ 今すぐお持ちしましょう！」

奇妙にしゃがれつつも明るい調子の声は、ホールによく響いた。どうやら魔王は、際どい放言を繰り返しているにも関わらず、亜人なら

ではの異様な風貌とにじみ出るふぎけた雰囲気は貴族たちに大うけして、好意的な態度をもつて迎えられているようであった。きつと道化師やその類だとも思われているのだろう。ブラック・ジョークを好むアルビオンの国民性も影響しているのかもしれない。

「これはこれは、大使殿の使い魔に先を越されたようですな。しかし素晴らしい！」

主の求めているものを率先して持つてくるとは、使い魔の躰がなつておるようすな」

「とんでもありません！ あいつなんか、いつもふぎけたことばっかり言うし、ヒヨロツとして何だか頼りないし、それにきつきだつてあんな失礼な真似をして……！ 今も変なことを言つてないか心配で心配で……」

使い魔への嘆きを聞いたその貴族は、柔らかな笑みを浮かべた。

「使い魔と過ごしていると色々なことがあるものだ。日常の中で相手へと不満を抱くこともあるだろう。しかし使い魔とは言わば家族のようなもの。貴殿が悩み苦しむ時には、きつと貴殿を大いに元氣付け、助けになってくれることであろう。大事にしなさい」

「……はい。心に留めます」

思うところあつたルイズは、年嵩の貴族の暖かみある言葉にしみじみと頷きを返した。ルイズがそうしている間に、人込みをかき分けて進んできた魔王が、ようやく彼女の前までたどり着いた。

「ご覧下さい！ 単なる魚料理というだけでなく、ルイズ様のお好きなパイ料理ですぞ！」

「あら、気が利くじゃない……!?!」

ルイズは魔王の手にした皿を見て、目を真ん丸に見開いた。

パイのあちこちから、魚の頭がによきによきと、新芽のごとく生えている。

口を半開きにし目が真っ白になった魚たちと、目と目が合う。

ルイズは思った。

ホワイ？ なぜ魚のパイを食べるのに、中身の魚たちと顔を突き合わせる羽目になるのかしら？

ルイズは目をごしごしと擦った。

これはいくら何でも、何かの見間違いではなからうか？

きつと、疲れているんだわ、私。

ルイズは自分にそう言い聞かせながら、もう一度ゆつくりと目を開いた。

当然、何も変わってはいない。パイの中央には何匹もの魚が頭を上にして垂直に突き刺ささり、魔術学院の尖塔のようにそびえ立っている。それはあたかも、パイという灼熱の地獄に閉じ込められた魚たちが、最後の抵抗とばかりに脱出を試みたかのような姿であった。

絶句しているルイズに、親切な貴族が説明を加えた。

「それなるはスター^星を^を見^見る^るスター^星・パイ^{パイ}ですな。その名の通り、魚たちが天を仰いでおるでしょう？」

「なんともマガマガしい見た目の料理ですな。私、これをタイヘン気に入りました！」

ルイズは嬉しそうに語る魔王を見て、すぐさまこのパイを彼に押し付けることに決めた。

「そんなに気に入ったなら、一人で全部食べてもいいのよ？ 私は他のを探すから……」

そう言っつてひっそりとその場を抜け出そうとしたルイズを、魔王はすぐに引き留めた。

「お待ちくださいルイズ様。そう言えばもう一品、魚料理をお持ちしたのでした」

「いやいや私、よく考えてみると熱い料理より冷たい料理が食べたかったみたいなの」

「問題ありません！ そう仰られるかと思って、もう一品はひんやりとしてそうなのを持つてきました！」

そう言うとき魔王は、ルイズの傍らにあるテーブルへ、ドンと皿を置いた。

「ジェリド・イールですー！」

その料理の名を聞いて、初めは期待感を抱いたルイズだったが、よくよく目の前の皿を見るにつけ、彼女の瞳はまるで死んだ魚のごとく

濁っていった。

ジェリード・イールとは、要はウナギのゼリー寄せのことである。トリステインにも同名のおしゃれな料理はあるのだが、しかしそこはやはりアルビオン料理のこと、ルイズが知るものとはまるで別物であった。

トリステインのジェリード・イールは、適度にスライスされたウナギにスパイスを効かせ、色鮮やかな野菜等と共にゼリー固めたもので、ソースを掛けて食べるのが一般的である。しかし今、彼女が目の当たりにしたアルビオンのそれは、おしゃれさとはかけ離れたウナギとゼラチンのみから成る無骨な一品であった。濁り気味のぶよぶよのゼリーの中に、ぶつ切りにされたウナギがぞんざいに浮かんでいる。

ルイズの目にはその様がるで、一匹のウナギがゼリーの中で窒息しそうになりながらのたうち回った挙句、体がバラバラになってしまったかのように見えた。

「さあさー！ 一口お召しなされ！」

「塩とビネガーを少しかけてから食すのがおいしいですよ」

周りの貴族たちからの、期待のこもった視線がルイズへと注がれる。もはや逃げられそうにないと観念したルイズは、ゼリーの中にスプーンを沈め、ウナギごと掬い取ってから口の中へと運んだ。

「……………」

「どうです？ ウナギの油がビネガーでさっぱりしておいしいでしょう。さあ、今度はコシヨウも試してみなされ！」

「……………」

ルイズは、促されるままにコシヨウを振ると、機械的に一口分をスプーンで掬い取り、そのまま口元へ持って行った。

「お味はいかがか？」

「……………」

「ハッハッハ！ どうやら大使殿は、うまくて声も出ないご様子！」

おおと、貴族の面々から歓声が上がった。その間中、ルイズの顔にはずっと表情というものが浮かんでいなかった。

「さて、お次はどのような料理をお勧めしたのか」

「ちよ、ちよっとお待ち下さるかしら？」

親切にも更なる料理を持ってこようとしたアルビオン貴族に、ルイズは間髪入れず断りを入れた。

「私、折角アルビオンに來たのだから、紅茶を頂いておきたいわ。料理をお勧め下さるなら、それに合うものを頂けないかしら？」

それを聞いた貴族は、納得だというような表情をして頷いた。

「なるほど、我がアルビオンは空船貿易により栄えた紅茶文化で有名ですからな。淹れたての紅茶と一緒に甘いものをお持ちしましょう」「どうもごく親切にありがとうございます」

世話を焼きたがりな貴族は、颯爽と皿を取りに向かった。

アルビオンという国はメシマズで有名ではある。だがその一方で、紅茶とそれに合うお菓子のクオリティーは高いことでも知られていた。

『料理が食べられないのなら、お菓子を食べればいいじゃない』

これが、ルイズの下した決断だった。その決断の正しさは、間もなく彼女の目の前に示されることとなった。

白磁のカップの中に広がる、美しく澄んだ鮮紅の色合い。湯気と共に立ち上る芳醇な香りが鼻をくすぐるだけで、ルイズの心はこの上ない安らぎを覚えた。早速に一口頂く…… 砂糖もミルクも入れていないというのに、まるでカラメルのようなコクのある味わいが舌の上に広がる。ルイズの顔には、自然と笑みが浮かんでいた。

「お気に召されたようですな」

「ええ、本当に素晴らしいわ。こんなにもおいしいだなんて、まるで夢のようだわ」

「そうやって褒めて頂けるとは、アルビオン人として誇らしい限りですな」

かの貴族は言葉通り本当に誇らしげであった。その様子からは、彼がアルビオンの紅茶文化を心底愛していることが伺えた。

「ちなみに、大使殿のお国ではストレートで楽しまれる場面が多いでしょうが、対してミルクを入れるのがアルビオン流の楽しみ方です

ぞ。是非こちらでも試してみてください」

「ええ、是非そうさせて頂くわ。どうも御親切にありがとうございます」

「お役に立てたのなら何よりです。心行くまでお楽しみください」

かの貴族はそう言つて、他の貴族やご婦人方との会話へ華を咲かせにいった。

ルイズは再び紅茶を口に含んだ。

今度は温かみのある色合いのミルクティーを一口…… やはり、素晴らしい。

ルイズは感動のあまり、ため息を零した。

このまま紅茶だけでもぐいぐい飲んでしまえそうであるが、しかしここはお菓子も頂いておこう。そう思ったルイズは、小皿の上に置かれたケーキに目を移した。

レーズンがたくさん詰まっているそのケーキは、その上からたつぷりと温かいカスタードが掛けられており、ルイズの食欲をくすぐった。形は長く太く、生地がしっかり詰まっているタイプのケーキであるようだ。

もしかするとこれを運んできた貴族は、ルイズの食があまり進んでいないことを気にして、食べ応えある腹持ちの良いお菓子を持ってきてくれたのかもしれない。

ルイズはケーキにフォークをあてがうと、一口で食べられるように小さく切り取ってから口に運んだ。

「あ、これおいしいわ」

ルイズは、このケーキのシンプルで素朴な味わいを殊の外気に入った。紅茶を啜つてからもう一口、もう一口と食べていく。

ルイズはしみじみと幸せに浸りながら、アルビオンの伝統菓子まスポテッド・だディックらをおいしそうに頬張るのだった。